九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—45—

上　巻

志波桑ノ本遺跡

朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

― 45 ―

上　巻

志波桑ノ本遺跡

朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査

a　志波桑ノ本遺跡全景

b　志波桑ノ本１・２号建物跡と１号墳

a　通路状遺構出土白磁・青磁碗

b　通路状遺構出土青磁碗

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和61年度に実施した九州横断自動車道建設に伴う、朝倉郡杷木町所在志波桑ノ本遺跡、志波岡本遺跡と、江栗遺跡についての埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和63年度に完了し、平成２年３月10日には朝倉日田間が開通し、現在では全線開通していますが、出土文化財資料の整理は継続実施して、報告書も順次刊行する予定です。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを望みます。

平成９年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光　安　常　喜

例　言

1．本書は、昭和61年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した、九州横断自動車道建設によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告の45冊目にあたる。

2．紙数の関係で上下２巻に分冊し、上巻に志波桑ノ本遺跡、下巻に志波岡本遺跡・江栗遺跡の調査成果を収録する。

3．出土遺物は、県文化課甘木事務所・太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・豊福弥生・塩足里美らの協力を得た。

4．掲載写真のうち、遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸二の協力を得た。また空中写真撮影では、空中写真稲富とフォト大塚にそれぞれ撮影を委託した。なお、航空写真は国土地理院提供の写真を使用した。

5．挿図のうち、遺構図は各調査担当者と武田光正・日高正幸・高田一弘が実測し、遺物図は中間研志・小池史哲と、岡由美子・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美・大野愛里・辻啓子が実測した。また図面の浄書には、豊福弥生・塩足里美・秋吉邦子・江口佳子の助力を得た。

6．挿図で使用する方位は新平面直角座標系IIの座標北を使用した。

7．本書の執筆は、III－２と－３のうちの埴輪について岸本圭、Ｖを中間研志が分担し、他は小池史哲が執筆した。編集は上巻を小池、下巻を小池と中間が担当した。

本 文 目 次

上 巻

I 調査の経過 …… 1

II 位置と環境 …… 8

III 志波桑ノ本遺跡の調査 …… 11

1 はじめに …… 11

2 遺構と遺物 …… 13

1．住居跡 …… 14

2．掘立柱建物跡 …… 37

3．井戸状遺構 …… 39

4．竪穴・土坑 …… 40

5．古 墳 …… 50

6．土壙墓 …… 85

7．通路状遺構 …… 111

8．溝状遺構 …… 144

9．落ち込み …… 160

10．その他の遺構と遺物 …… 176

3 おわりに …… 197

（下　巻）

Ⅳ　志波岡本遺跡の調査 …… 1
1　はじめに …… 1
2　遺構と遺物 …… 3
1．掘立柱建物跡 …… 3
2．土　壙 …… 7
3．土　坑 …… 7
4．溝状遺構 …… 8
5．遺物包含層 …… 10
3　おわりに …… 25

Ⅴ　江栗遺跡の調査 …… 27
1　はじめに …… 27
2　江栗Ⅰ区の調査 …… 27
1)　工房跡 …… 27
2)　土　壙 …… 39
3)　溝状遺構 …… 44
4)　下段建物面 …… 48
5)　下段段落部 …… 50
6)　包含層出土遺物 …… 56
3　江栗Ⅱ区の調査 …… 62
1)　礎石建物跡 …… 65
2)　掘立柱建物跡 …… 71
3)　Ⅱ区火葬墓 …… 71
4)　Ⅱ区土壙 …… 76
5)　Ⅱ区包含層出土遺物 …… 78
4　おわりに …… 79
1)　C^{14}年代測定について …… 79
2)　江栗遺跡の変遷 …… 80

図 版 目 次

巻頭図版１ａ　志波桑ノ本遺跡全景
ｂ　志波桑ノ本遺跡１・２号建物跡と１号墳
２ａ　通路状遺構出土白磁・青磁碗
ｂ　通路状遺構出土青磁碗

本文対照頁

図版１　志波桑ノ本遺跡周辺航空写真（国土地理院提供　KU-85-1X C18-15）……1
２-１　志波桑ノ本・岡本遺跡遠景（麻底良山側から）……1
-２　志波桑ノ本遺跡全景空中写真……11
３-１　１号住居跡（北西から）……14
-２　２号住居跡（南から）……15
-３　２号住居跡遺物出土状況……15
４-１　３号住居跡（南から）……19
-２　３号住居跡遺物出土状況……19
-３　４号住居跡遺物出土状況１……25
５-１　４号住居跡遺物出土状況２……25
-２　完掘後の４号住居跡（北東から）……25
６-１　５号住居跡（北東から）……30
-２　６号住居跡（北東から）……33
-３　６号住居跡（北西上空から）……33
７　住居跡出土土器１……14
８　住居跡出土土器２……15
９　住居跡出土土器３……19
10　住居跡出土土器４……19
11　住居跡出土土器５……25
12　住居跡出土土器６……25
13　住居跡出土土器７……25
14　住居跡出土土器８……30
15-1　住居跡出土土器９……33

図版15-2　住居跡出土石器・土製品・鉄製品……19
-3　1・2号建物跡と1号墳……37
16-1　1号建物跡（北東上空から）……37
-2　2号建物跡（北東上空から）……37
-3　3号建物跡（北上空から）……39
17-1　1号井戸状遺構……39
-2　1号土坑……44
-3　2号土坑……44
18　建物跡・竪穴・土坑出土土器……41
19-1　桑ノ本1～6号墳（南上空から）……50
-2　1号墳（西上空から）……50
20-1　1号墳石室（南から）……50
-2　1号墳石室（西から）……50
-3　周溝内遺物出土状況……51
-4　周溝・石室内遺物出土状況……51
21-1　2号墳（北上空から）……54
-2　2号墳周溝遺物出土状況……54
-3　3号墳（北上空から）……56
-4　3号墳周溝遺物出土状況……56
-5　南から望む3号墳……56
-6　4号墳（東上空から）……59
22-1　5号墳（北上空から）……61
-2　5号墳石室（北から）……61
-3　5号墳石室（西から）……61
-4　5号墳周溝遺物出土状況……61
23-1　6～8号墳（南上空から）……67
-2　6号墳（北上空から）……67
-3　6号墳石室（南西から）……67
24-1　6号墳石室と左前面区画……67
-2　7号墳（北上空から）……74
-3　7号墳石室（南西から）……74
25-1　8号墳（北上空から）……76
-2　8号墳石室（西から）……76

図版25-3　9号墳？（東上空から）……78
26　古墳出土土器1……52
27　古墳出土土器2……55
28　古墳出土土器3……61
29　古墳出土土器4……69
30　古墳出土土器5……69
31-1　古墳出土石製品・鉄製品・土製品・玉類……52
-2　出土埴輪……79
32-1　土壙墓群と1号落ち込み遺構（北上空から）……85
-2　1号土壙墓（東から）……85
-3　2号土壙墓（東から）……85
33-1　3号土壙墓（南から）……88
-2　3号土壙墓敷石状況……88
-3　敷石除去後の3号土壙墓（東から）……88
34-1　4号土壙墓（南から）……88
-2　5号土壙墓（東から）……88
-3　5号土壙墓（北から）……88
35-1　6・7号土壙墓遺物出土状況……90
-2　6・7号土壙墓（南から）……90
-3　8号土壙墓炭化物出土状況……93
-4　8号土壙墓（南から）……93
36-1　9号土壙墓（東から）……95
-2　10・16号土壙墓（北から）……96
-3　11号土壙墓（西から）……96
37-1　12・18号土壙墓（北から）……97
-2　13・14号土壙墓（北西から）……100
-3　15号土壙墓（西から）……101
38-1　17号土壙墓（南から）……103
-2　19号土壙墓（北西から）……104
-3　22号土壙墓（西から）……106
-4　23号土壙墓（北西から）……109
39-1　24号土壙墓（北から）……109
-2　25号土壙墓（北から）……109

図版39-3　26号土壙墓（北から）……109
-4　27号土壙墓（東から）……110
40　土壙墓出土土器１……91
41　土壙墓出土土器２……99
42-1　土壙墓出土土器３・土製品・石製品・金属製品……96
-2　上空からみた１号通路状遺構……111
43-1　１号通路状遺構（北から）……111
-2　完掘後の１号通路状遺構……111
44-1　３号通路状遺構（西から）……142
-2　３号通路状遺構（北から）……142
-3　３号通路状遺構のある南部調査区（西から）……142
45　通路状遺構出土土器１……111
46　通路状遺構出土土器２……111
47　通路状遺構出土土器３……116
48　通路状遺構出土土器４……121
49　通路状遺構出土土器５……122
50　通路状遺構出土土器６……126
51　通路状遺構出土土器７……126
52　通路状遺構出土土器８……126
53　通路状遺構出土土器９……129
54　通路状遺構出土土器10・土製品……136
55　通路状遺構出土石製品……137
56　溝出土土器１……145
57　溝出土土器２・石製品・土製品・金属製品……149
58-1　１号落ち込み遺構（東から）……160
-2　１号落ち込み遺構近景（東から）……160
59　落ち込み遺構出土土器１……160
60　落ち込み遺構出土土器２……166
61　落ち込み遺構出土土製品・石製品……169
62-1　落ち込み遺構出土石製品・土製品・金属製品……169
-2　上空からみた２～４号落ち込み遺構……173
-3　１号埋甕遺構……176
-4　埋甕使用土器……177

図版63　ピット出土土器 ……177
64　包含層等出土土器１ ……179
65　包含層等出土土器２ ……180
66　包含層等出土土器３ ……180
67　包含層等出土石器・土製品・金属製品 ……187
68　包含層等出土縄文土器・石器 ……192

挿　図　目　次

第１図　九州横断自動車道路線図（1/780000）……２
第２図　志波地区の横断道関係遺跡の位置（1/10000）……５
第３図　志波地区周辺の遺跡分布図（1/50000）……９
第４図　志波桑ノ本遺跡地形図（1/2000）……12
第５図　志波桑ノ本遺跡区割図（1/1200）……13
第６図　１号住居跡実測図（1/60）……14
第７図　１号住居跡出土土器実測図（1/3）……14
第８図　２号住居跡実測図（1/60）……16
第９図　２号住居跡出土土器実測図１（1/3）……17
第10図　２号住居跡出土土器実測図２（1/3）……18
第11図　３号住居跡実測図（1/60）……20
第12図　３号住居跡出土土器実測図１（1/3）……21
第13図　３号住居跡出土土器実測図２（1/3）……22
第14図　４号住居跡実測図（1/60）……24
第15図　４号住居跡出土土器実測図１（1/3）……26
第16図　４号住居跡出土土器実測図２（1/3）……27
第17図　４号住居跡出土土器実測図３（1/3）……29
第18図　住居跡出土土製品・金属製品実測図（1/2）……30
第19図　５・６号住居跡実測図（1/60）……31
第20図　５号住居跡出土土器実測図（1/3）……32
第21図　６号住居跡出土土器実測図１（1/4）……34
第22図　６号住居跡出土土器実測図２（1/4）……35
第23図　住居跡出土石器実測図（1/3）……36

第24図　1・2号建物跡実測図（1/80）……折込み
第25図　3号建物跡実測図（1/80）……38
第26図　3号建物跡出土土器実測図（1/3）……39
第27図　1・2号井戸状遺構実測図（1/40）……40
第28図　井戸2出土土器実測図（1/3）……40
第29図　1・2号竪穴実測図（1/60）……41
第30図　1～4号竪穴出土土器実測図（1/3）……42
第31図　3号竪穴実測図（1/60）……43
第32図　4号竪穴実測図（1/100）……43
第33図　1～5号土坑実測図（1/40）……45
第34図　3～5・7号土坑出土土器実測図（1/3）……46
第35図　6～10号土坑実測図（1/40）……48
第36図　1号墳実測図（1/150）……50
第37図　1号墳石室実測図（1/60）……51
第38図　1号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）……51
第39図　1号墳出土土器実測図1（1/3）……53
第40図　1号墳出土土器実測図2（1/6）……54
第41図　1～9号墳出土金属製品実測図（1/2）……54
第42図　2号墳実測図（1/150）……55
第43図　2号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）……55
第44図　2号墳出土土器実測図（1/3）……55
第45図　3号墳実測図（1/150）……56
第46図　3号墳周溝断面土層実測図（1/60）……57
第47図　3号墳出土土器実測図（1/3）……57
第48図　3・5号墳出土土製品実測図（1/2）……58
第49図　4号墳実測図（1/150）……58
第50図　4号墳出土土器実測図（1/3）……59
第51図　5号墳実測図（1/150）……60
第52図　5号墳周溝断面土層実測図（1/60）……61
第53図　5号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）……61
第54図　5号墳石室実測図（1/60）……62
第55図　5号墳出土土器実測図1（1/3）……63
第56図　5号墳出土土器実測図2（1/3）……64

第57図　出土土器実測図３（1/3）……65
第58図　５号墳出土玉類・石製品実測図（1/1・1/2）……66
第59図　６号墳実測図（1/150）……66
第60図　６号墳石室実測図（1/60）……68
第61図　６号墳石室と列石（1/60）……69
第62図　６号墳出土土器実測図１……70
第63図　６号墳出土土器実測図２（1/6）……71
第64図　６号墳出土土器実測図３（1/3）……73
第65図　７号墳実測図（1/150）……75
第66図　７号墳周溝断面土層実測図（1/60）……75
第67図　７号墳石室実測図（1/60）……75
第68図　７号墳出土土器実測図（1/3）……76
第69図　８号墳実測図（1/150）……76
第70図　８号墳石室実測図（1/60）……77
第71図　８号墳出土土器実測図（1/3）……77
第72図　９号墳実測図（1/60）……78
第73図　９号墳出土土器実測図（1/3）……79
第74図　出土埴輪実測図１（1/3）……80
第75図　出土埴輪実測図２（1/3）……81
第76図　出土埴輪実測図３（1/3）……83
第77図　出土埴輪実測図４（1/3）……84
第78図　１～16・18～21・27・28号土壙墓配置図（1/200）……86
第79図　１～４号土壙墓実測図（1/30）……87
第80図　５・６号土壙墓実測図（1/30）……89
第81図　６号墓出土土器実測図（1/3）……90
第82図　７・８号土壙墓実測図（1/30）……91
第83図　７号墓出土土器実測図１（1/3）……92
第84図　７号墓出土土器実測図２（1/3）……93
第85図　７号墓出土土器実測図３（1/3）……93
第86図　９・10号土壙墓実測図（1/30）……94
第87図　９号墓出土土器実測図（1/3）……95
第88図　10号墓出土土器実測図（1/3）……96
第89図　墓壙出土土製品実測図（1/2）……96

第90図　11・14号土壙墓実測図（1/30）……97
第91図　12・13・18号土壙墓実測図（1/30）……98
第92図　12号墓出土土器実測図（1/3）……99
第93図　12号墓出土石製品実測図（1/4）……99
第94図　13号墓出土土器実測図（1/3）……100
第95図　15・16号土壙墓実測図（1/30）……102
第96図　15～17号墓出土土器実測図（1/3）……103
第97図　17・19号土壙墓実測図（1/30）……104
第98図　墓壙出土金属製品実測図（1/2）……105
第99図　19号墓出土土器実測図（1/3）……105
第100図　20・21・27・28号土壙墓実測図（1/30）……107
第101図　22～26号土壙墓実測図（1/30）……108
第102図　22号墓出土土器実測図（1/3）……109
第103図　26号墓出土土器実測図（1/3）……110
第104図　27号墓出土土器実測図（1/3）……110
第105図　通路遺構1実測図（1/60）……112
第106図　通路遺構1出土土器実測図1（1/3）……113
第107図　通路遺構1出土土器実測図2（1/3）……114
第108図　通路遺構1出土土器実測図3（1/3）……115
第109図　通路遺構1出土土器実測図4（1/3）……117
第110図　通路遺構1出土土器実測図5（1/3）……118
第111図　通路遺構1出土土器実測図6（1/3）……119
第112図　通路遺構1出土土器実測図7（1/3）……120
第113図　通路遺構1出土土器実測図8（1/3）……123
第114図　通路遺構1出土土器実測図9（1/3）……124
第115図　通路遺構1出土土器実測図10（1/4）……125
第116図　通路遺構1出土土器実測図11（1/3）……127
第117図　通路遺構1出土土器実測図12（1/3）……128
第118図　通路遺構1出土土器実測図13（1/3）……130
第119図　通路遺構1出土土器実測図14（1/3）……131
第120図　通路遺構1出土土器実測図15（1/3）……132
第121図　通路遺構1出土土器実測図16（3/10）……133
第122図　通路遺構1出土土器実測図17（3/10）……134

第123図　通路遺構１出土土器実測図18（1/3）……135
第124図　通路遺構１上層出土土器実測図（1/3）……136
第125図　通路遺構出土土製品実測図（1/2）……136
第126図　通路遺構１出土石製品実測図１（1/4）……137
第127図　通路遺構１出土石製品実測図２（1/3）……138
第128図　通路遺構２出土土器実測図（1/3）……140
第129図　通路遺構２出土石製品実測図（1/4）……142
第130図　通路遺構３実測図（1/60）……143
第131図　通路遺構３出土土器実測図（1/3）……144
第132図　溝出土土器実測図１（1/3）……146
第133図　７～９号溝断面土層実測図（1/60）……147
第134図　溝７a出土石製品実測図（1/4）……149
第135図　溝出土土器実測図２（1/3）……150
第136図　溝出土土器実測図３（1/3）……152
第137図　溝出土土製品・金属製品実測図（1/2）……154
第138図　溝出土土器実測図４（1/3）……156
第139図　溝出土土器実測図５（1/3）……159
第140図　１号落ち込み実測図（1/75）……161
第141図　１号落ち込み出土土器実測図１（1/3）……162
第142図　１号落ち込み出土土器実測図２（1/3）……163
第143図　１号落ち込み出土土器実測図３（1/3）……164
第144図　１号落ち込み出土土器実測図４（1/3）……167
第145図　１号落ち込み出土土器実測図５（3/10）……168
第146図　１号落ち込み出土瓦拓影（1/3）……169
第147図　１号落ち込み出土石製品実測図１（1/3）……170
第148図　１号落ち込み出土石製品実測図２（1/4）……171
第149図　１号落ち込み出土土製品実測図（1/2）……172
第150図　２号落ち込み出土土器実測図（1/3）……174
第151図　２号落ち込み出土土製品・金属製品実測図（1/2）……174
第152図　３号落ち込み出土土器実測図（1/3）……175
第153図　４号落ち込み出土土器実測図（1/3）……176
第154図　埋甕実測図（1/30）……176
第155図　埋甕使用土器実測図（1/3）……176

第156図　ピット出土土器実測図（1/3）……178
第157図　包含層等出土土器実測図１（1/3）……180
第158図　包含層等出土土器実測図２（1/3）……181
第159図　包含層等出土土器実測図３（1/3）……183
第160図　包含層等出土土器実測図４（1/3）……185
第161図　包含層等出土土器実測図５（1/3）……186
第162図　包含層等出土瓦拓影（1/3）……186
第163図　包含層出土石器実測図（1/3）……187
第164図　包含層等出土土製品１（1/2）……189
第165図　包含層等出土土製品２（1/1）……190
第166図　包含層等出土金属製品１（1/2）……191
第167図　包含層等出土金属製品２（1/1）……192
第168図　縄文土器実測図（1/3）……193
第169図　縄文時代石器実測図１（1/1）……195
第170図　縄文時代石器実測図２（1/1）……196
第171図　縄文時代石器実測図３（1/3）……197

付図１　40～42地点の位置と周辺地形図（1/3000）
付図２　志波桑ノ本遺跡遺構配置図（1/300）

表　目　次

表１　１号通路状遺構出土土師器杯観察表……126
表２　１号通路状遺構出土土師器小皿観察表……129
表３　１号落込出土管状土錘計測表……173
表４　包含層出土土師器杯・小皿観察表……182
表５　包含層出土石器一覧表……188
表６　包含層等出土管状土錘計測表……190

Ⅰ　調査の経過

昭和61年度の調査経過

昭和61年度には、山田土取場から持ち出された土砂で、朝倉インターチェンジ以西の本線部分の盛土工事が進行するようになった。一方杷木工事区部分では、高山トンネル工事への取り付きが急がれることもあって、杷木町志波地区での文化財調査が急を要することとなり、４班体制で調査に当たった。39Ａ地点（杷木宮原遺跡）、39Ｂ地点（中町裏遺跡）と、今回報告する40地点（志波桑ノ本遺跡）、41地点（志波岡本遺跡）、42地点（江栗遺跡）が対象地点であり、用地買収が完全でなかった40地点を除いた４遺跡を年度当初から各班が担当することとなった。志波岡本遺跡は小池と木村が、江栗遺跡は中間と伊崎が調査を担当した。なお、杷木宮原遺跡と中町裏遺跡については、ともに1991年に報告済みである。

41地点の志波岡本遺跡では、丘陵尾根線部分で遺構密度がやや低く、大型建物跡の位置する部分から緩傾斜面に遺構・遺物がやや密になるようであったが、平坦に近い部分は用地が未解決であった。６月にはむしろ志波桑ノ本遺跡部分の用地が早く片づく状況となり、丘陵先端部に近い立地であることから遺構密度が高いことも予想されたため、小池と木村は７月から桑ノ本遺跡の調査に移行した。

42地点の江栗遺跡は、斜面を削り出して整地した部分に室町期の仏堂らしい建物跡があり、一方では鍛冶工房らしい遺構などが発見された。柱穴状ピットも多数あって、かなりの時期幅をもって使用されてきた様子が窺えた。

40地点の志波桑ノ本遺跡では、ミカン・葡萄・柿栽培などでの攪乱溝や攪乱坑が各所にみられたが、縄文時代～中世の各種遺構が重複していた。

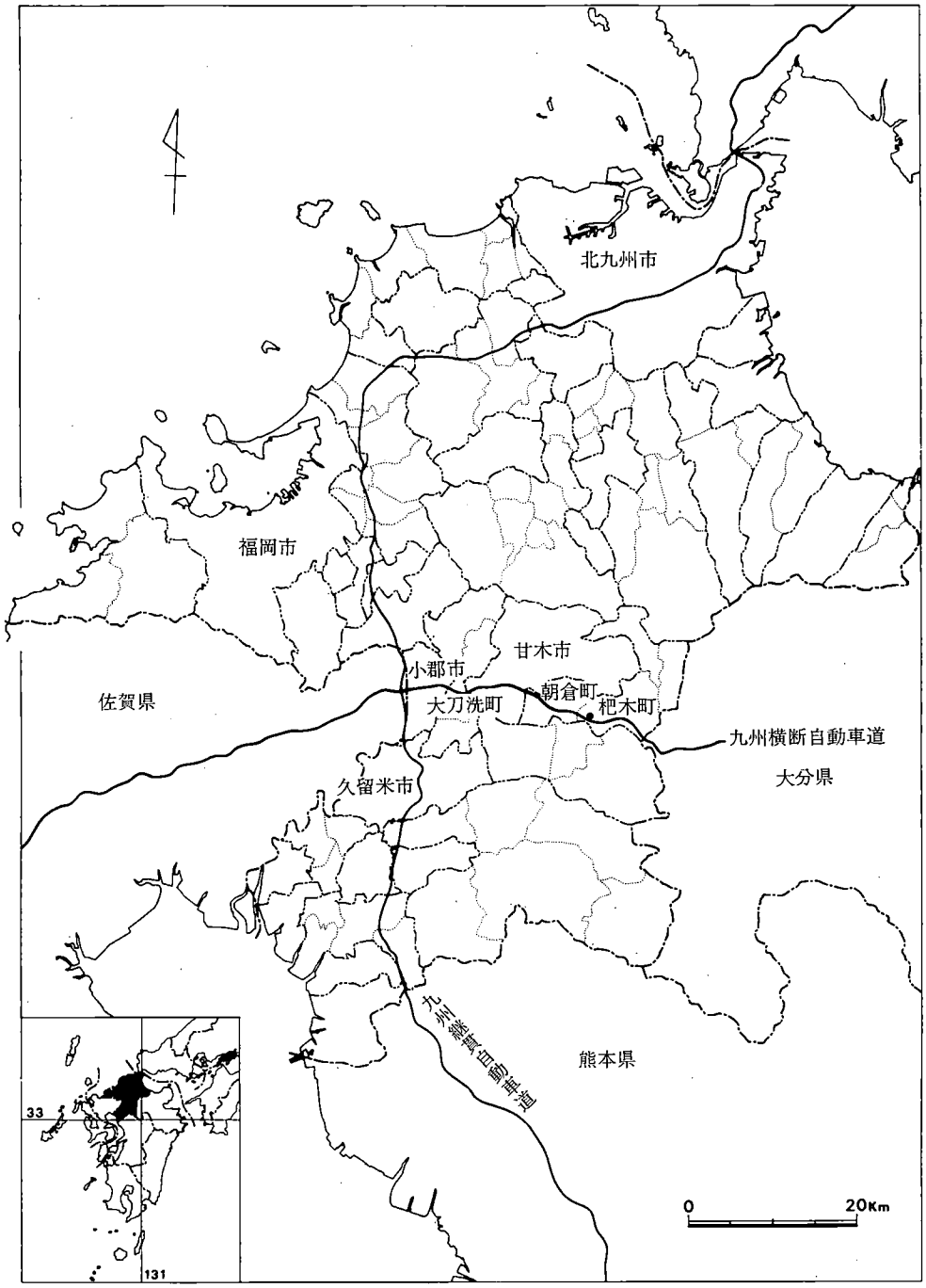
ところで、昭和61年度は 4年後（平成２年度）に福岡市を中心に開催される福岡国体に照準をあわせて、九州横断自動車道のみならず県内で道路整備が急ピッチで進行し、一般国道10号椎田バイパス（椎田道路）工事の方も道路公団椎田工事事務所が設置されて、文化財調査も調査体制を組む必要があり、10月中旬に調査員の体制に不備が生じたため、急遽10月下旬から担当者の小池が椎田バイパスへ移動し、小池に代わり杷木地区の試掘調査を終了した井上が40地点と41地点の調査担当を引き継ぐことになった。

40地点の調査は昭和61年６月23日～12月２日の期間で調査した。

41地点の調査は昭和61年４月22日～６月20日と、62年３月９日～３月19日の期間で調査した。

42地点の調査は昭和61年５月22日～８月18日の期間で調査した。

昭和61年度は、杷木町内の路線内・インター部分の発掘調査に始終した感じが強い。



第１図　九州横断自動車道路線図（1/780000）

調査関係者

昭和61年度における、志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡・江栗遺跡の発掘調査関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	今村　浩三（前任）	杉田　美昭（後任）
次　長	吉岡　康行	
総務部長	安元　富次	
管理課長	森　宏之	
管理課長代理	佐伯　豊	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	乗松　紀三	
副所長	中村　義治	
副所長（技術）	西田　功	
庶務課長	徳永　昇	
用地課長	岩下　剛（前任）	松下　伸男（後任）
工務課長	後藤　二郎彦	
小郡工事区工事長	友田　義則	
朝倉工事区工事長	小手川　良和	
杷木工事区工事長	山中　茂	

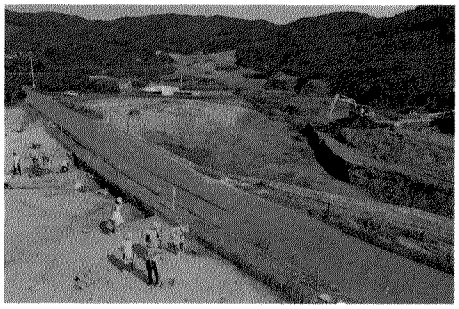
福岡県教育委員会

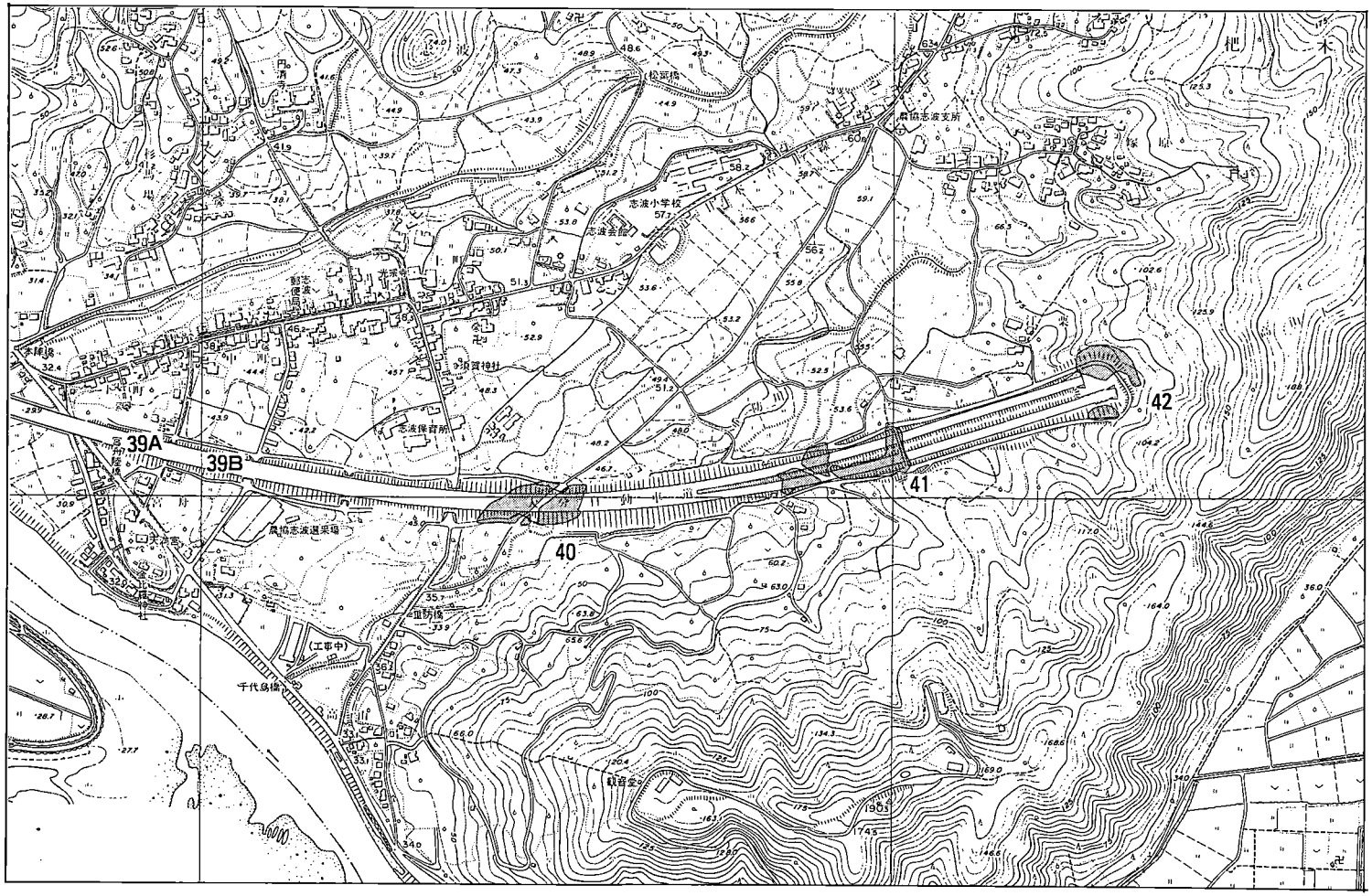
総　括	教育長	友野　隆
	教育次長	竹井　宏
	管理部長	大鶴　秀雄
	管理部参事	大平　岩男
	文化課長	窪田　康徳
	文化課長補佐	平　聖峰（兼庶務係長）
	文化課長技術補佐	宮小路　賀宏
	文化課参事補佐	栗原　和彦
	文化課参事補佐	柳田　康雄（兼調査班総括）
庶　務	文化課庶務係長	平　聖峰（兼任）
	同　事務主査	長谷川　伸弘
	同　主任主事	川村　喜一郎

調　査　文化課技術主査　　井上　　裕弘（志波桑ノ本遺跡・岡本遺跡調査担当）
同　技術主査　　高橋　　章
同　主任技師　　佐々木　隆彦
同　主任技師　　中間　　研志（江栗遺跡調査担当）
同　主任技師　　小池　　史哲（志波桑ノ本遺跡・岡本遺跡調査担当）
同　主任技師　　伊崎　　俊秋（江栗遺跡調査担当）
同　技　　師　　小田　　和利
同　文化財専門員　木村　幾多郎（志波桑ノ本遺跡・岡本遺跡調査担当）
同　臨時職員　　日高　　正幸（現小石原村教育委員会）
調査補助員　　高田　　一弘
調査補助員　　武田　　光正（現遠賀町教育委員会）
調査補助員　　佐土原　逸男
調査補助員　　向田　　雅彦（現鳥栖市教育委員会）
調査補助員　　田中　　康信（現瀬高町教育委員会）

志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡・江栗遺跡遺跡の発掘作業には、作業員として地元杷木町及び朝倉町・甘木市在住の方々が参加された。（順不同）

友納　浩	田中　静夫	日野智恵子	石橋　丸子	梶原トミエ	梶原マツエ
足立イツエ	山本チサヨ	鳥居アイ子	因間美枝子	山本フミ子	梶原ハヤ子
青柳　美雪	日野マツ子	武藤ヒデ子	谷口　晶子	田中さつき	野田　ミエ
仲山　宗利	井上　武雄	小川　人巳	牟田　冴子	渡辺　輝子	原野　昌伸
高瀬　岩男	島田　正浩	羽野　繁伸	武田　龍一	小林　光二	吉武　憲章
矢野　正子	中村　京子	坂本ヨリ子	藤本　和子	塚本　潔子	時川千代子
河津　時枝	岩下　幸子	吉田　春子	石井　末子	伊藤千代香	佐藤芙美子
小関　初代	田中伊津子	井手　弘子	伊藤ミネヨ	秋吉　初代	矢野シズ子


調査風景１


39A
39B
40
41
42
志波小学校
志波会館
志波保育所
農協志波支所
農協志波選果場
千代島橋
(工事中)
駅前橋
駅前通
駅前
駅前
駅前

遺物整理および報告書作成

志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡・江栗遺跡出土の遺物は、発掘調査終了後に文化課甘木事務所で、水洗洗浄などの整理作業を経て、収蔵庫に保管された。

昭和61年度以降は、九州横断自動車道開通に向けて文化財の事前発掘作業は、休むことなく続けられ、遺物整理・報告書作成作業は先送りの状態であった。一方では、昭和62年 2月に朝倉インターチェンジまで開通したが、平成2年度に開催される福岡国体までに道路整備を進めたいという意向もあり、県内各地で道路関係事業が進行した時期でもある。道路公団関係でも、椎田道路建設に関わる発掘調査がこの間に集中的に実施され、報告書作成業務量は雪だるま式に増加するばかりであった。

ともあれ、志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡・江栗遺跡に関わる報告書作成業務は、諸般の事情で平成8年度（一部7年度末）に実施されることとなった。この遺跡から出土した遺物についての、復原整理作業は九州歴史資料館・文化課甘木事務所・文化課太宰府事務所において行い、報告書刊行のはこびとなった。

平成8年度の本報告書作成にかかわる関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡管理局

局長	藤波	督	
総務部長	佐野	博志	
管理課長	三根	敬正	
管理課調査役	東	清彦	
管理課長代理	前田	正信	
担当	中田	理恵（前任）	渡　広之（後任）

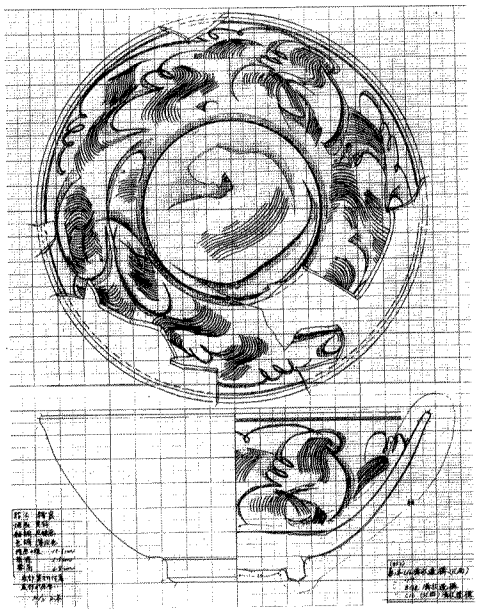
福岡県教育委員会

総括	教育長	光安	常喜	
	教育次長	松枝	功	
	指導第二部長	竹若	幸二	
	文化課長	松尾	正俊（前任）	石松　好雄（後任）
	参事兼文化財保護室長	柳田	康雄	
	課長技術補佐	井上	裕弘	
	課長補佐	元永	浩士	
	調査班総括	橋口	達也	
庶務	管理係長	黒田	一治	
	管理係主任主事	鶴我	哲夫	

整　理	文化課参事補佐	中間	研志（江栗遺跡執筆担当）				
	文化課参事補佐	小池	史哲（志波桑ノ本・岡本遺跡執筆担当）				
	文化課調査班技師	岸本	圭				
	文化課整理指導員	岩瀬	正信	豊福	弥生	平田	春美
	同	北岡	伸一				

整理作業は、岩瀬整理指導員の下に小島佐枝子・石井紀美子・古賀陽子・竹田まち子・砥上トシ子・武藤睦子・坂口好子・白水マサエ・若松和子・辻光子が行った。遺物の写真撮影・焼き付け作業は九州歴史資料館参事補佐石丸洋の指導の下に北岡伸一・中島朱美が行い、金属器の保存処理は九州歴史資料館学芸第二課長横田義章が担当した。また、遺物の実測・製図・図面整理作業には豊福・平田整理指導員の下に塩足里美・棚町陽子・岡由美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美・古田千穂・秋吉邦子・江上佳子・渡辺輝子・関久江・土山真由美・山田智子・辻清子・佐藤緑・甲斐孝司・松永通明・河合修の各氏の手を煩わせた。

これら、関係者の皆様に感謝の意をあらわしたい。



遺物実測図原図

II　遺跡の位置と環境

志波桑ノ本(Shiwa-Kuwanomoto)遺跡、志波岡本(Shiwa-Okamoto)遺跡、江栗(Eguri)遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字志波字桑ノ本、字岡本・字江栗に所在し、九州横断道路線内用地を発掘調査した。

これらの遺跡は、朝倉山塊を構成する米山(標高 590.9m)から筑後川側に面する高山(標高 190.3m)に伸びる標高 200m程度の尾根線状山地の北側麓に位置する。江栗遺跡は、この山麓の湧水点近くにあって、狭い谷に面するものの幾分か緩傾斜になる部分に占地し、志波岡本遺跡は山麓から丘陵状に伸びた部分とその裾の斜面に占地していて、筑後川支流の小河川である重防川に面している。一方、米山一高山の尾根線状山地と、北側に聳える麻底良山(標高 294.5m)塊などとの間に挟まれた部分は、筑後川に流下する古生代の扇状地らしい台地が伸びて、小さな谷で刻まれた丘陵状地形をなす。志波桑ノ本遺跡はその丘陵状台地上に立地し、調査地点は丘陵状台地の上部と重防川に面した南側斜面である。

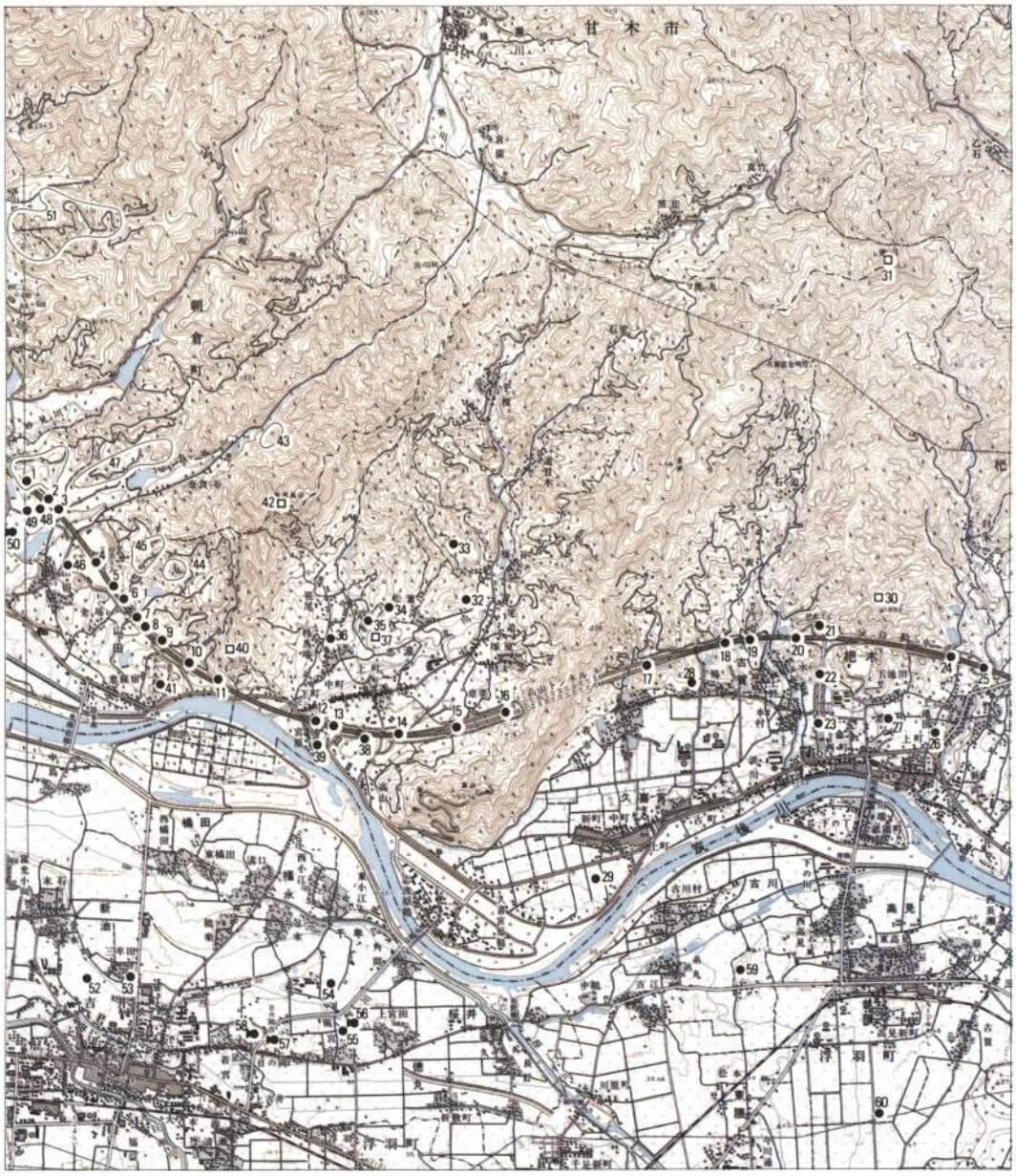
地質的にみると、遺跡の立地する段丘の表土及び表土下は黒ボク層で、火山灰起源の堆積土である。下層は八女粘土層が堆積し、さらに下は礫層である。八女粘土層は、灰白色粘土層部分と、その上に乗る鳥栖ローム層と呼ばれる黄橙色粘質土層がみられる。

志波地区は、かつては製紙産業が盛んであったとされるが、現在の土地利用では、柿・葡萄などの果樹栽培と水田利用の米麦栽培が主で、特に富有柿系の美味しい柿は志波柿として広く知られていて、柿栽培が盛んである。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては、朝倉町菱野所在原の東遺跡でナイフ形石器などの包含層が調査されている。朝倉町山の神遺跡・上の宿遺跡でもナイフ形石器が出土していて、約21000年前のＡＴ火山灰の降下の痕跡もみられる。また金場遺跡からは旧石器時代末期の細石器を含む文化層が確認されている。

縄文時代の資料は、横断道関係の発掘調査によって急増している。早期の石組炉跡・集石遺構が、原の東遺跡・金場遺跡・上の宿遺跡などで発見され、押型文土器の出土は朝倉町から杷木町にかけての路線内遺跡の過半数でみとめられる状況であり、筑後川対岸の水縄山麓部の遺跡からも出土している。前期の遺構・遺物は朝倉町狐塚南遺跡・治部ノ上遺跡・金場遺跡・上の宿遺跡・稗畑遺跡・外之隈遺跡・杷木町天園遺跡などから、中期の遺物は朝倉町上の宿遺跡・稗畑遺跡などでみられる。後期は朝倉町長島遺跡・上の宿遺跡・稗畑遺跡・杷木町中町裏



第３図　志波地区周辺の遺跡分布図（1/50000）

１妙見古墳群　２鎌塚遺跡　３山の神遺跡　４山田遺跡群　５長田遺跡　６金場遺跡　７上の宿遺跡　８恵蘇山遺跡　９稗畑遺跡　10大迫遺跡　11外之隈遺跡　12杷木宮原遺跡　13中町裏遺跡　14志波桑ノ本遺跡　15志波岡本遺跡　16江栗遺跡　17大谷遺跡　18笹隈遺跡　19夕月・天園遺跡　20クリナラ遺跡　21西ノ迫遺跡　22前田遺跡　23鞍掛遺跡　24上池田遺跡　25畑田遺跡　26立聞遺跡　27長光寺遺跡　28揚天満宮古墳　29新田遺跡　30三ヶ月城跡　31米の山城跡　32赤坂古墳　33岩河内古墳　34茶臼山古墳　35鉞所遺跡　36杉馬場古墳　37前隈古城跡　38千代島遺跡　39志波宝満宮古墳　40本陣山古城跡　41木の丸殿古墳群　42麻底良城跡　43奈良ヶ谷古墳群　44山田柳古墳群　45山田古墳群　46山田うら山遺跡　47山の神古墳群　48鎌塚古墳　49鎌塚西遺跡　50剣塚古墳　51山後山古墳群　52仁衛門畑遺跡　53三牟田遺跡　54千年遺跡　55塚堂遺跡　56塚堂古墳　57日ノ岡古墳　58月岡古墳　59田島北遺跡　60沖出遺跡

遺跡・上池田遺跡や、水縄山麓部の遺跡や吉井町月岡古墳周辺から出土し、浮羽町柳瀬遺跡で中頃から後半にかけての住居跡群が調査された。晩期の遺物も路線内の多くと、水縄山麓部の遺跡や吉井町塚堂遺跡などの筑後川自然堤防上の遺跡から出土している。竪穴住居跡・貯蔵穴・土壙などの遺構も多数調査され、当時の生活環境の復原に貴重な資料が多数得られた。ま

た時期を特定し難いものの落とし穴状遺構の例も増加している。

弥生時代では、初期の遺跡として、支石墓4基や竪穴住居跡群などが検出された杷木町畑田遺跡がある。前期から後期の住居跡・貯蔵穴群は、中道遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・原の東遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡・吉井町大碇遺跡・鷹取五反田遺跡などで調査されているが、近年マスコミを賑わせた甘木市平塚川添遺跡は筑後川支流小石原川の氾濫原の微高地に立地する。墓地では中期初頭～前半の木棺墓・甕棺墓が、大庭久保遺跡・上の原遺跡・原の東遺跡・上の宿遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡などで調査され、後期末前後の墓地の調査も、長島遺跡・外之隈遺跡をはじめ多数実施され、狐塚古墳の北西側でも最近倉庫建設に伴って土壙墓などが発掘調査された。

座禅寺遺跡などでは方形周溝墓も調査されるなど、甘木市から朝倉町にかけて続く中位段丘先端部には同様な古墳時代前期の墓地が占地する。中期の大型古墳や前方後円墳は筑後川対岸の微高地などに、月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳などが築かれている。後期古墳は高位段丘縁などで古墳群を形成している。

奈良・平安時代の集落は筑後川右岸の中位段丘上の平坦面を中心に発見されている。中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡などがあげられる。大迫遺跡・杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡では同一規模で主軸方位が共通する大型の掘立柱建物跡群がみられ、朝倉橘廣庭宮に関わる可能性も考えられる。杷木神籠石の存在など大宰府防衛関連施設もある。この頃の墓地としては、大環端遺跡・大迫遺跡などがある。

中世に関わる遺構は、才田遺跡・長島遺跡・志波桑ノ本遺跡などがある。才田遺跡の土壙からは舶載陶磁器が出土している。

III　志波桑ノ本遺跡の調査

III　志波桑ノ本遺跡の調査

1　はじめに

志波桑ノ本遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字志波字桑ノ本にあり、582～584、597～604番地に亙る横断道路建設用地内を発掘調査した。遺跡名は大字と小字名を続けて用い、志波桑ノ本遺跡と呼称することにした。

STA.242.0～STA.243.5の間が調査区域であり、用地内を斜めに横切る道路は生活道路であるために保全して調査区域から除外した。また、斜面下部の用地外に水田があり、水田への土砂流入を防ぐために調査区域は用地範囲から控えをとり、用地幅一杯には発掘調査し得なかった。実質調査面積は7700㎡である（第４図）。

調査は昭和61年６月23日～12月２日の期間に実施した。

発掘調査の経過

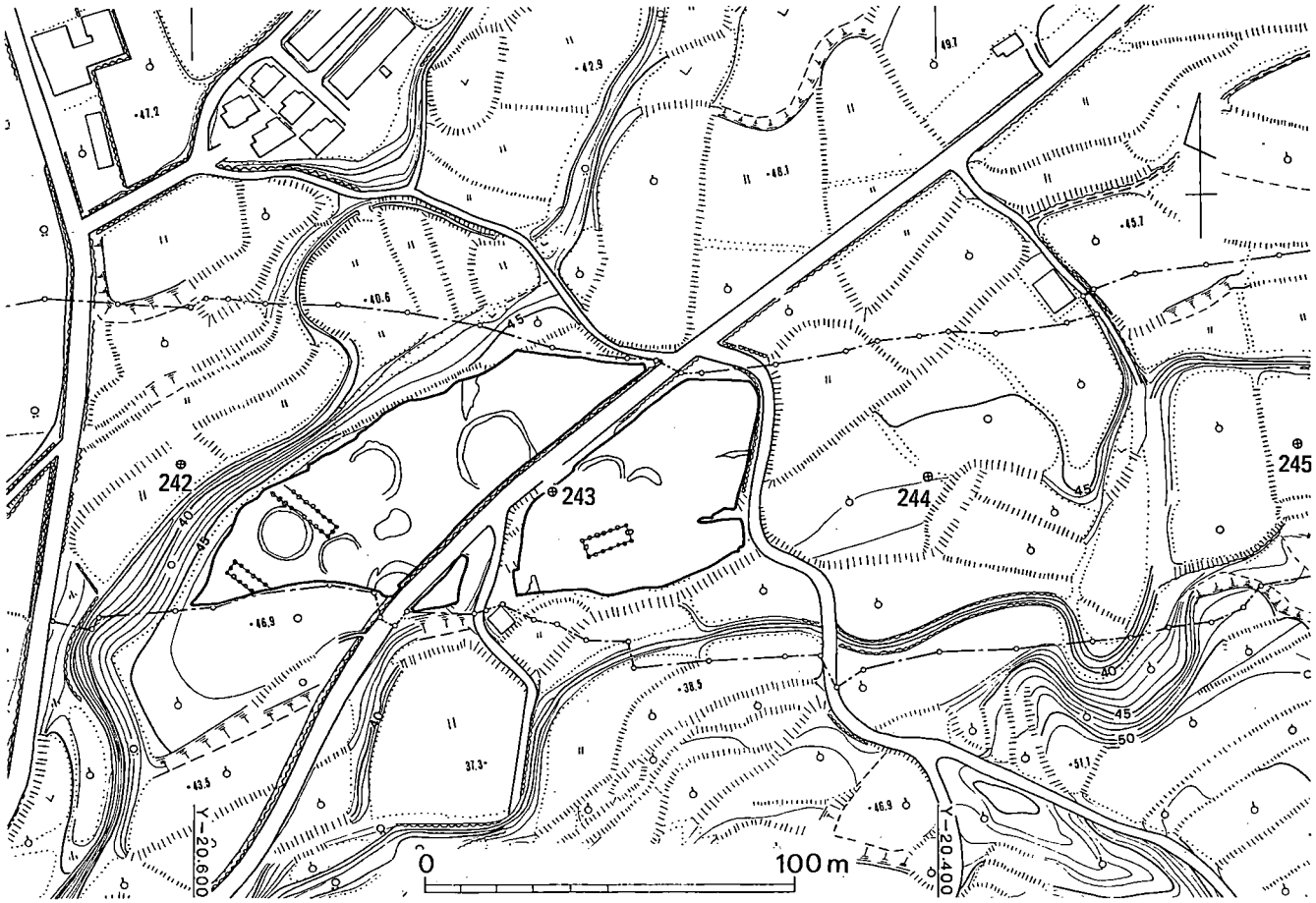
調査に入る前に重機を用いて表土の除去を６月10日から開始し、６月19日にはユニットハウスやテントを移動させるなど調査前の準備は完了していたので、23日から遺構検出作業を実施した。しかし、25日には台風５号が接近、７月９日から15日にかけて集中豪雨に見舞われるなど、序盤は調査よりも土砂崩壊・流出などの防災対策に追われる毎日であった。

梅雨明け後は順調に作業できたが、排土の置場所の関係で、先ず丘陵南側斜面の下部に相当する南端部の調査を先行させて、中央部の排土を終了した南端部に積み上げることにして、南端部を８月２日に終了させて、８月は北西部調査区を主に調査した。北西部では、上部を削平され、柿栽培に関係する攪乱坑が多数みられたものの、大形の建物跡、古墳周溝が発見され、さらに中世の火葬墓らしい土壙墓が集中して発見された。９月は土壙墓の調査に時間を要した。調査区北部では住居跡と通路状遺構などが発見され、１号通路状遺構では多量の土器類が含まれていた。10月には町道より南側の調査区に移り、６～９号墳とその周辺の遺構群を調査し、11月５日に気球を用いた全景写真を撮影した。撮影後は６～９号墳石室の実測作業と、縄文時代遺物の出土がみられた北西部調査区で包含層の調査を実施した。

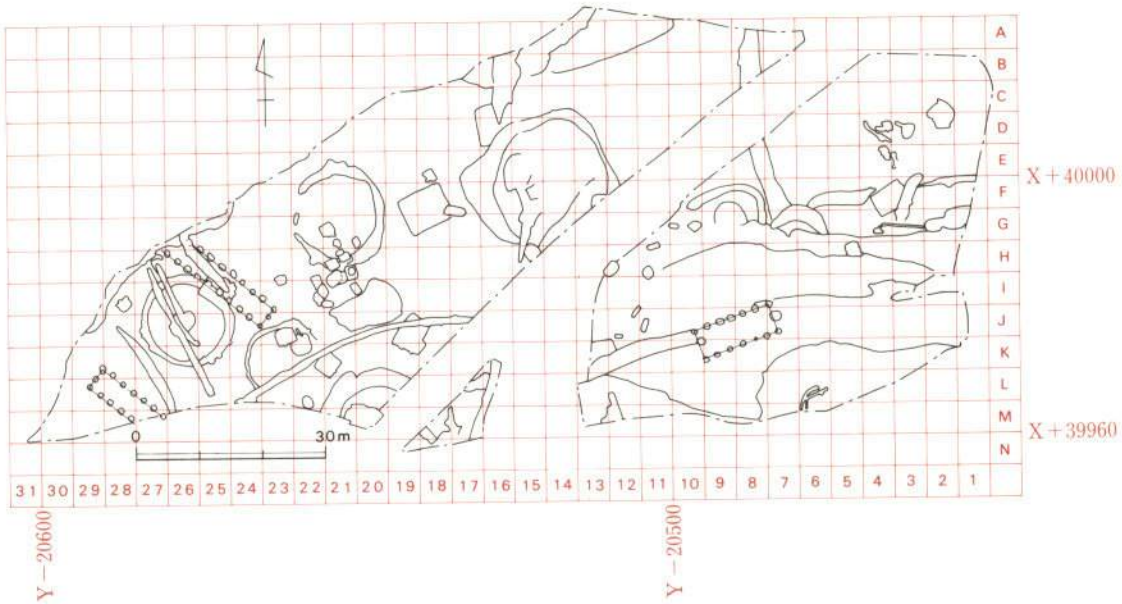
志波桑ノ本遺跡の位置表示

志波桑ノ本遺跡の位置は、新平面直角座標系IIのX＝40000、Y＝－20450地点から西方向に広がり、X＝40000、Y＝－20600地点付近の間に位置する。路線幅内の約150m区間でもある。

また、経緯度では、東経130°46′54″、北緯33°21′38″付近に相当する。



第4図　志波桑ノ本遺跡地形図（1/2000）



第５図　志波桑ノ本遺跡区割図（1/1200）

地区割の設定（第５図）

志波桑ノ本遺跡では、遺構の密集度が高くて遺構相互の重複が予想された。このため、表土剝ぎ実施後に、公共座標に合わせた実測基準点の設置と地区割をすることにした。

地区割は、遺跡南部のＸ＝40000、Ｙ＝－20450を起点として、５ｍ刻みに、西へ１・２・３～31と数で、南へＡ・Ｂ・Ｃ～Ｉとアルファベットで区分して、Ａ１区・Ｂ２区のように呼ことにした。たとえば１号墳主体部のある区画はＸ＝40000、Ｙ＝－20575の北西側の５ｍ四方でＪ26区に相当する。

2　遺構と遺物

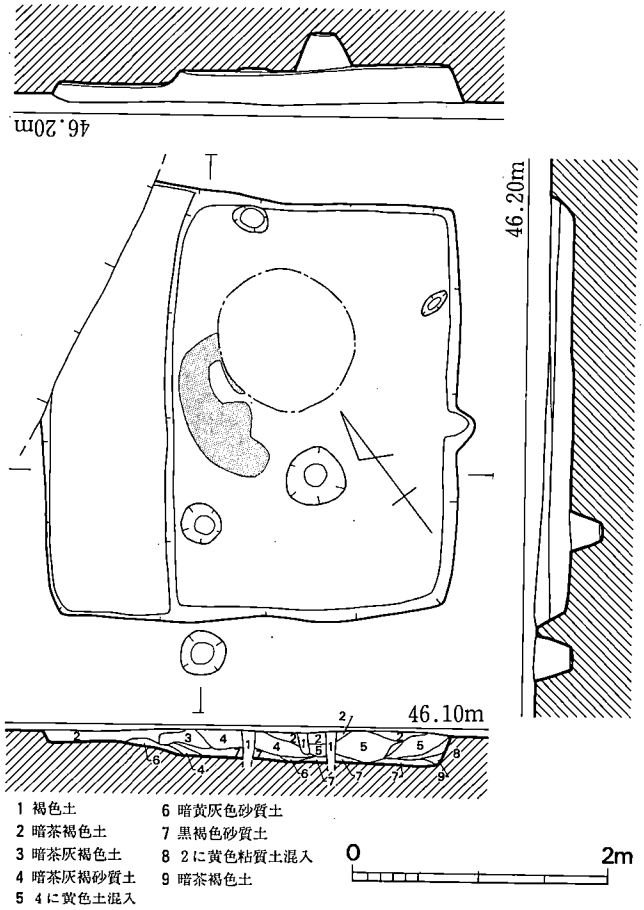
志波桑ノ本遺跡で発見された遺構は次のとおりである。（付図２）

竪穴住居跡	６基（弥生・古墳時代）	通路状遺構	３条（中世）
掘立柱建物跡	３棟（古代？）	溝状遺構	21条（中世）
井戸状遺構	２基（中世）	落ち込み遺構（池状を含む）	４基（中世）
竪　穴	４基（中世）	埋　甕	１基（中世）
土　坑	10基（古墳～中世）	柱穴状ピット	多数
古　墳	９基（古墳時代）	遺物包含層（縄文～中世）	
土壙墓（火葬坑含む）	28基（古代・中世）		

1．住居跡

1号住居跡(図版3-1、第6図)

調査区西南部のK21区付近に発見された竪穴住居跡で、2号墳と5号墳の間に位置するが、溝10によって北側が削られている。主軸をN37°40′E方向に向ける方形プランで、南北3.4m、東西3.3m規模を有する。周壁は、残存度のよい南側で約 0.3mの高さに残り、北西側の壁に沿って幅 1.0m前後で約10cm高いベット状遺構が施設されている。中央部を大きな攪乱坑で失うが、床面はやや堅緻で、中央部に木炭小片を含む焼土部分が広がる。床面を切り込む柱穴状ピットが幾つか見られるものの、主柱穴とみられる配置でなく、散在している。

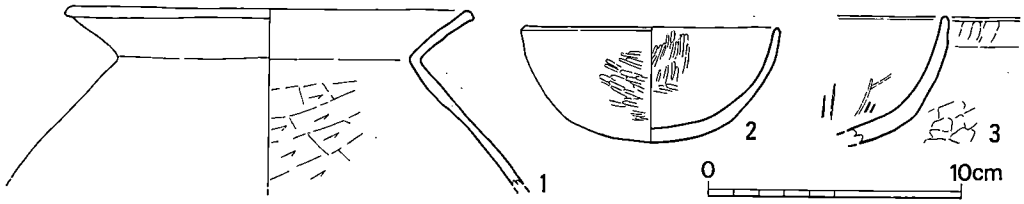


第6図　1号住居跡実測図 (1/60)

出土土器（図版7、第7図）

土師器甕（1）　復原口径16.4cmの大きさの、器壁の薄めな甕で胴下半を失う。口縁部は直線的に開き、胴部内面のヘラ削りは頸部下まで及んでいる。

土師器椀（2・3）　2は復原口径10.4cm、器高4.6cmの大きさの、口縁部が内彎気味に立ち上がる椀で、薄めの器壁は内外面ともにヘラミガキ調整されている。3はやや器壁が厚めの椀



第7図　1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

で、底部側の外面はヘラ削り、内面は板ナデ調整されて、口縁部は指頭圧痕の残るナデ調整で、内彎気味に立ち上がる。

甕の特徴から、布留式期の時期が考えられる。

2号住居跡（図版3-2、第8図）

調査区中央部に発見された竪穴住居跡で、3号墳と4号墳の間に位置する。長方形プランで、主軸方向をN62°30′E方向に向け、東西7.2m、南北6.0m規模を有する。西側は葡萄畑の肥料溝によって攪乱され周壁を失い、東隅部には17号墓が重複している。

周壁は残りのよい東側壁で約35cmの高さを測り、周壁に沿って小溝のみられる部分もある。また南側壁の中央部に接して床面を掘り込む土坑もある。住居跡内の北側には北側壁に沿って1.2～1.7m幅で5cm前後高いベット状遺構も施設されている。床面を掘り込む柱穴状ピットは上部から掘り込まれた例もあり散在するが、中央部で相対する位置にある4穴が主柱穴であろう。そして主柱穴に囲まれた内側に焼土・灰を含む炉穴がみられる。

出土土器（図版7･8、第9・10図）

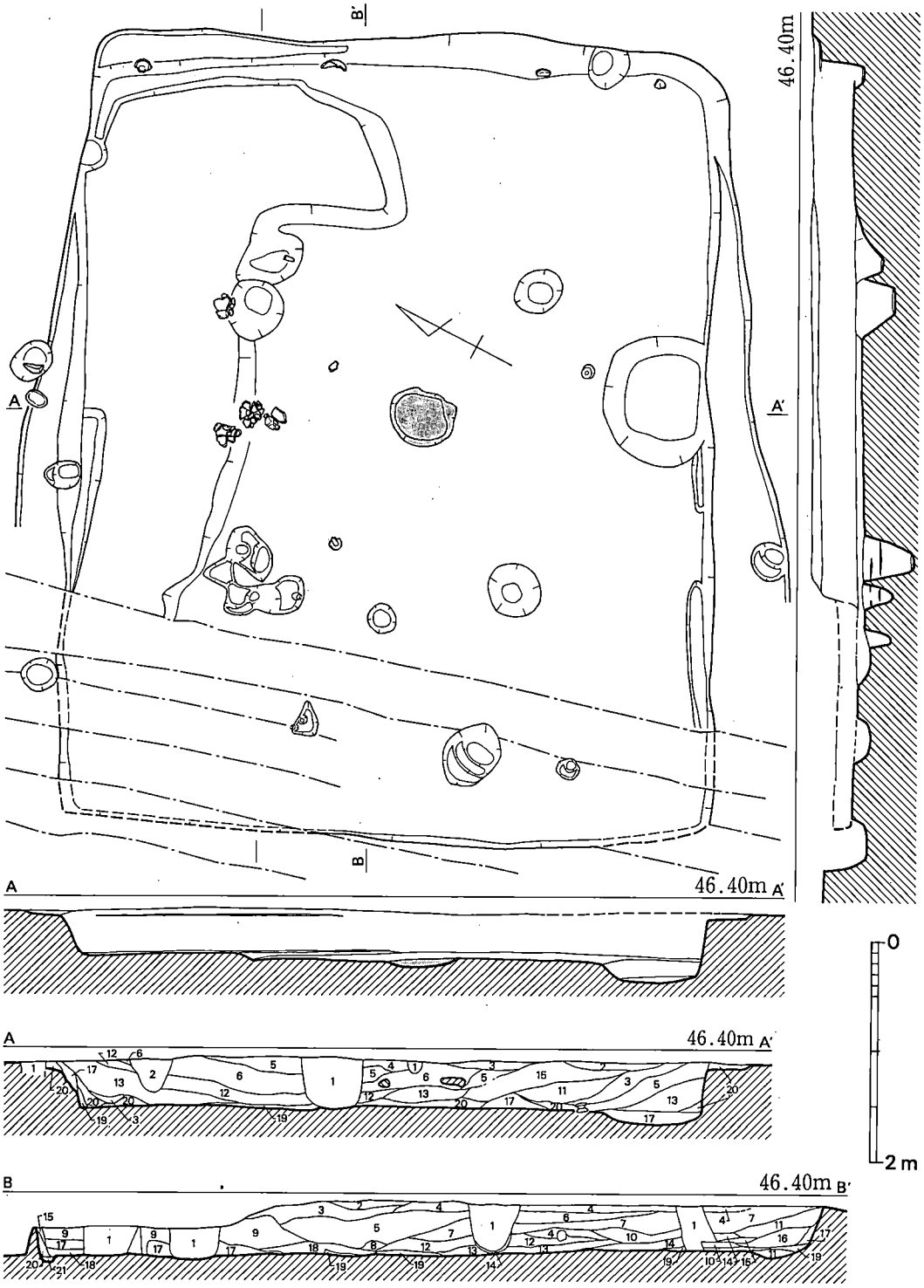
器　台（4）　頸部破片で、全体の形は分からないが、複合口縁の形状をなし、口縁部外面には暗文状のヘラミガキ痕がみられる。

土師器壺（5～11・16）　5・8は複合口縁を有する破片である。5は復原口径17.2cmの大きさ。口縁の屈曲に丸みがあり、外面をハケ目、内面をナデ調整している。8は復原口径14.8cmの大きさで、屈曲に明瞭な段を有する複合口縁だが、頸部から開く部分を欠いている。内外面共にハケ目調整され、一部ナデ調整が加わる。

6は内外面をハケ目調整する直口縁の破片である。7は直線的に口縁部が開いて端部は内彎気味になる。9～11は直線的に口縁部が開き、胴部の器壁がやや薄いもので、9・10の外面はハケ目とヘラミガキで調整されていて、丸く膨らむ9の胴部内面のヘラ削りは頸部下まで及んでいる。9は復原口径17.0cm、器高29.8cm、胴最大径29.0cmの大きさで、底部はやや厚めで、底面は小さくレンズ状に膨らむ。11は胴部内面のヘラ削りが頸部直下まで及んでいて、器壁も薄いが、ハケ目調整される外面の肩部に板状原体による斜方向刺突の連続文様がみられる。

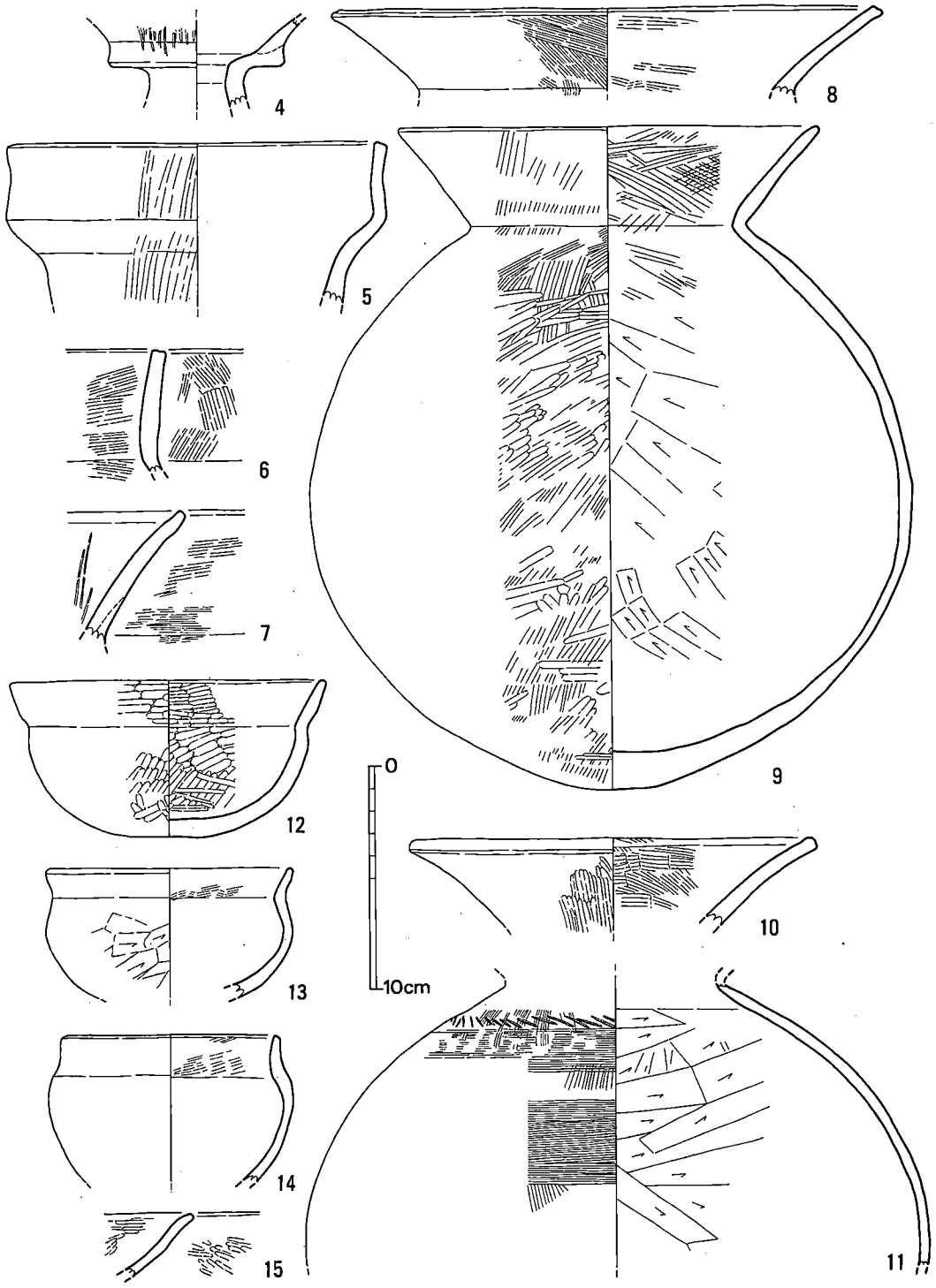
16は口縁部と底部を欠くが、なで肩で復原最大径23.0cmの胴部へ膨らむ器形を呈する。器壁は薄めで、内面はヘラ削り、外面はハケ目調整されるが一部に叩き目が残る。

土師器鉢（12～14・17）　12は復原口径14.2cm、器高7.0cmの大きさの、胴部最大径の位置から頸部がさほど括れずに口縁部が直線的に開く器形の鉢である。器面は内外ともにヘラミガキ調整されている。17も同様の器形で、口径11.6cm、残存器高5.3cmの大きさ。内面は板状工具によるナデ、外面はナデ調整されている。13は口径と胴最大径の大きさが同規模の鉢で、復原口径11.2cmの大きさ。14は口縁部が直立気味に立ち上がる鉢で、復原口径10.0cmの大きさ。13・

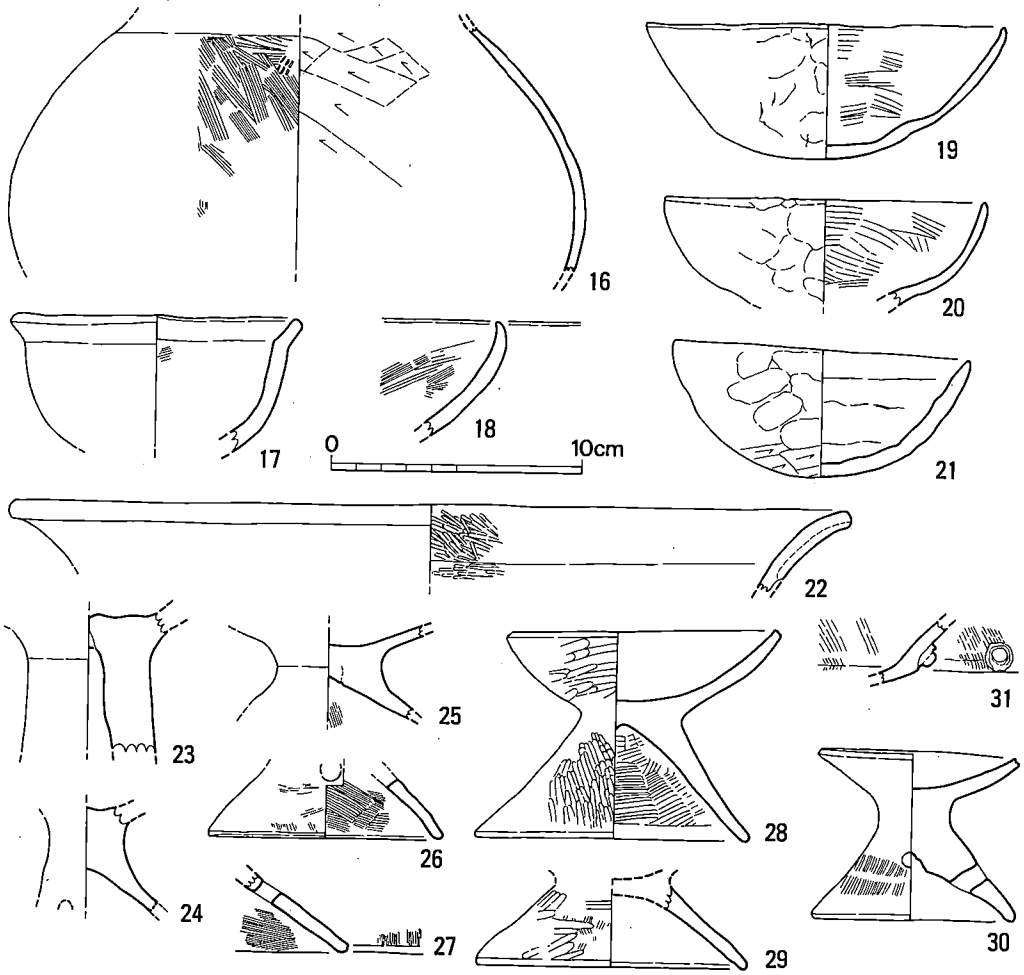


1 褐色土（撹乱）　5 暗褐色土　9 茶褐色土　13 暗黄褐色土　17 暗黄色土（炭化物混）　21 暗褐色粘質土
2 暗褐色土　6 黒褐色土　10 暗褐色土　14 茶褐色土　18 黄褐色土
3 黒色土　7 褐色土　11 暗褐色粘質土　15 黒褐色土　19 黄色土
4 褐色土　8 黒色土　12 褐色土　16 暗褐色土　20 暗黄色粘質土

第8図　2号住居跡実測図（1/60）



第９図　２号住居跡出土土器実測図１（1/3）



第10図　2号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

14ともに、胴部外面はヘラ削りの後にナデられ、内面の頸部付近にハケ目がみられるが、胴部はナデ調整らしい。

土師器高杯？（15・22～24・27・31）　15は高杯か否か分からないが、内外面ともにヘラミガキ調整される口縁部破片で、内彎気味に開いて端部が僅かに外反する。22も口縁端部片で外反するが、杯部全体の形は分からない。内面はヘラミガキ、外面はヨコナデ調整される。23・24は柱状部破片で、23は柱状部が長めだが、24は短めで裾部へ開き、円孔が 3ヶ所に穿たれる。27は裾部破片で円孔がみられ、内外面ともハケ目調整される。31は杯部が屈曲して外反する口縁部下端に円形の貼付があり、竹管文が刺突される。杯部内外面ともにハケ目調整される。

土師器椀（18～21）　口縁部が内彎して立ち上がり、口径と器高の比が3：1に近い19・20のような例と、2：1に近い21のような例がある。18～20は外面が指頭圧痕の残るナデ、内面

がハケ目で調整される。19は口径14.3cm、器高 5.3cm。20は口径12.9cmの大きさ。21は口径11.9cm、器高5.1cmの大きさで、外面が指頭圧痕の残るナデと底部付近はヘラ削り、内面がナデで調整される。

土師器器台（25・26・28～30）　25・26・29は柱状部・脚裾部破片で、高杯との区別は明確でないが、復原裾径が比較的小さな例を器台に含めた。裾部内面はハケ目調整されるが、29では内面の器面が剥離していて明らかでないが、29は受け部の可能性もある。28は受け部が内彎して開き、裾部は円錘状に開く。口径・裾径ともに11.0cm、器高8.3cmのうち3.5cm程を受け部が占める。裾部内面がハケ目調整され、他は全体にヘラミガキ調整されている。30は受け部が内彎して開くがやや浅めで、中実の柱状部を介して脚裾部が開き、４ヶ所に円孔が穿たれる。脚部外面にハケ目が残るもののナデで調整され、受け部内面はヘラミガキで調整される。

これらの土器類では、弥生後期に含まれる例もあるが、壺などに庄内式の特徴がみられ、16の壺に布留式古段階の可能性があるものの、器台などの器種も庄内式段階で問題はなく、古墳時代初期の住居跡であろう。

石　器（図版15-2、第23図）

砥　石（１）　凝灰質砂岩製の肌理の細かな砥石の破片。扁平な板状の両面は中凹みにすれていて、端面には刃の傷らしい痕がみられる。

土製品（図版15-2、第18図）

管状土錘（１）　堆積土上部から出土した。精良な胎土を用いて、棒状の芯に絞るように巻き付けて作られている。僅かに端部を欠き、残存長 4.4cm、外径 1.6cm、重量 2.9ｇを測る。

鉄製品（図版15-2、第18図）

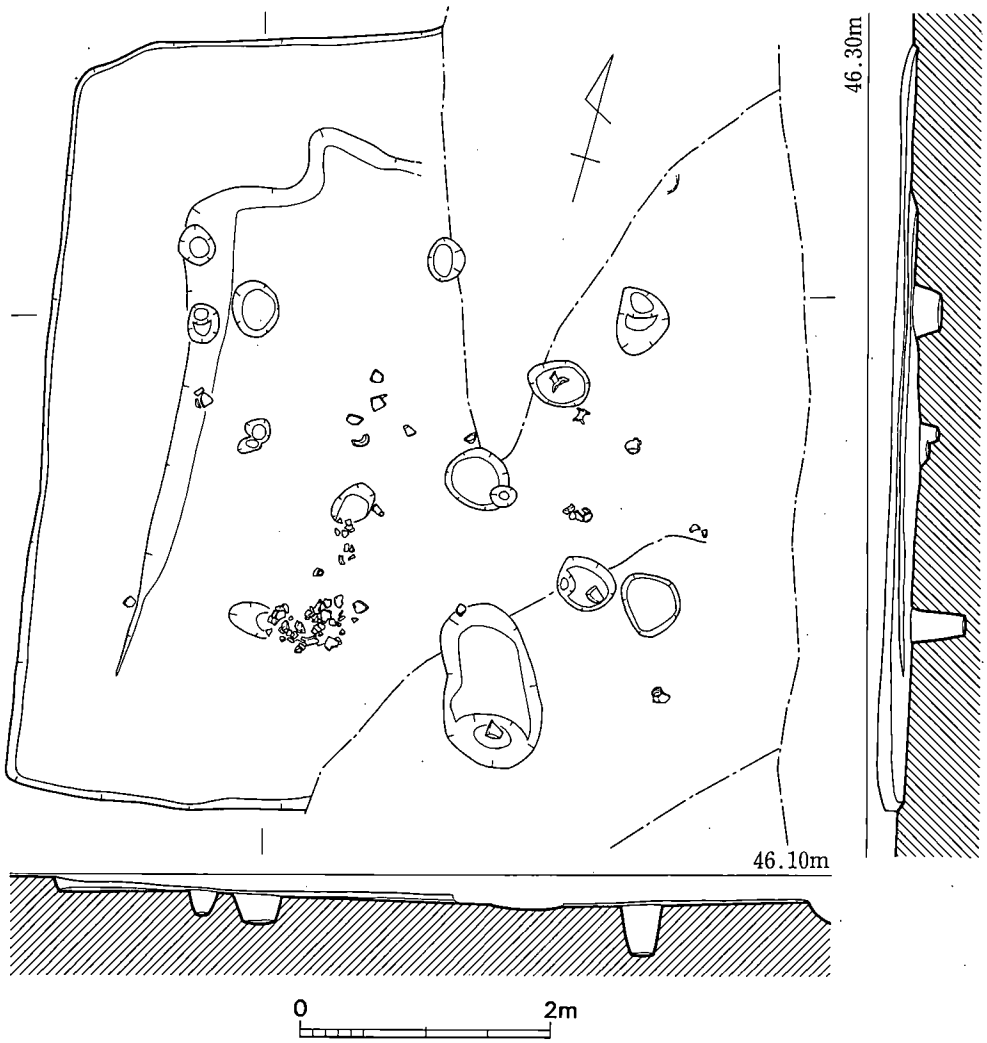
用途不明鉄製品（３）　南西寄りの堆積土下部から出土した。一方の端部を欠くが、長さ3.6cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmの、一端が丸みをもって尖る扁平な板状を呈している。

３号住居跡（図版4-1･2　、第11図）

調査区北部のＤ16区付近に発見された竪穴住居跡で、南側を４号墳周溝、北側を１号通路状遺構、さらに東側を最近の肥料溝の攪乱によって失う。主軸方向はＮ73°40′Ｅで、南北6.05m、東西6.00m以上の規模を有する。削平を受け、周壁は高さ10cm前後残る程度だが、北側・西側壁に沿ったベット状遺構がみられる。ベット状遺構は1.00～1.20m幅で、床面より 5cm程度高い。やや堅緻な床面に掘り込まれた柱穴状ピットは多数みられるが、周壁から 2m程離れて、四隅に近い位置にあるピットが主柱穴であろう。なお、中央部にまで通路状遺構が切り込んでいるためか、焼土を伴う炉跡は発見できなかった。

出土土器（図版7～10、第12･13図）

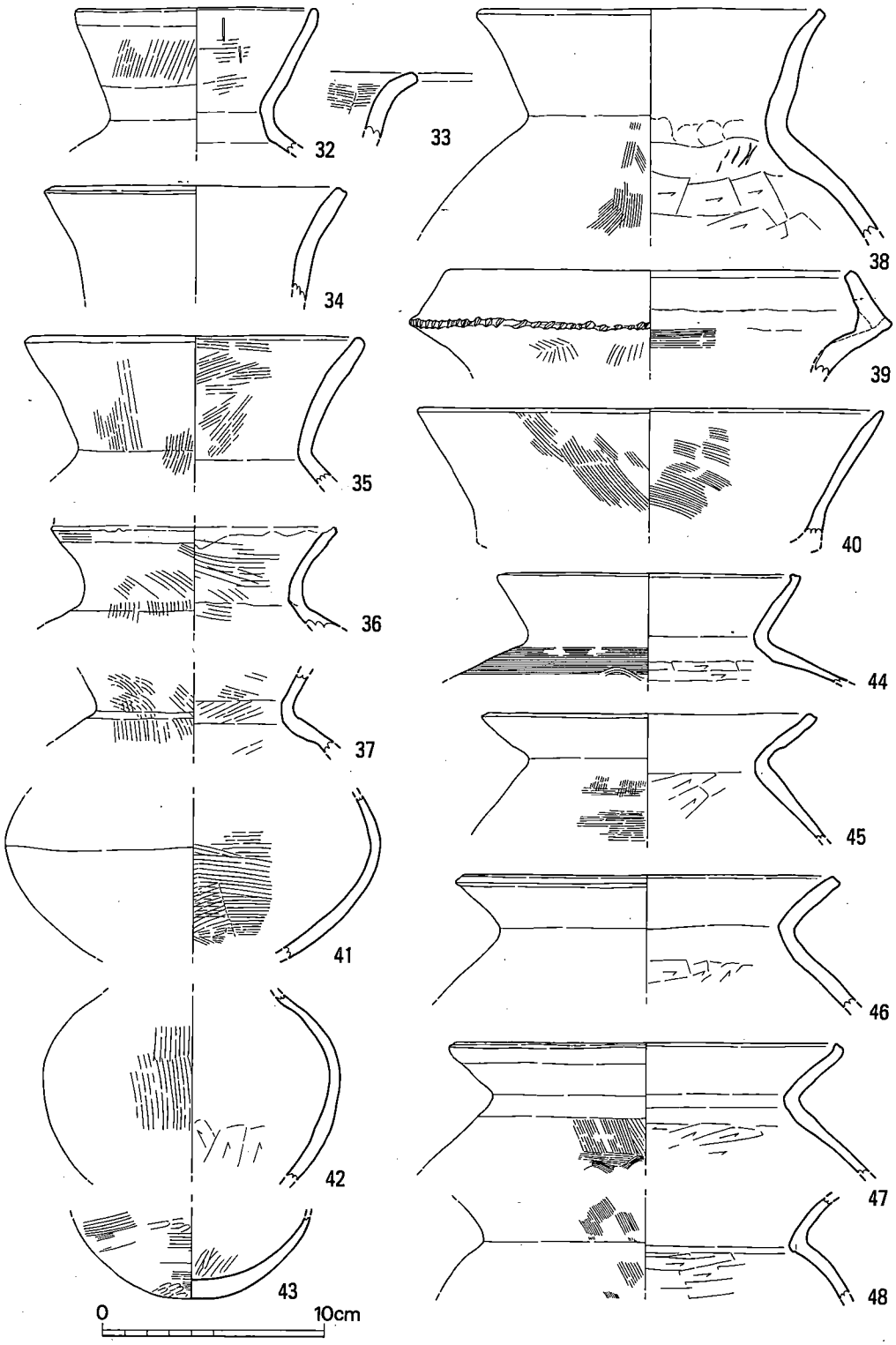
土師器壺(32～43)　32は復原口径11.0cmの大きさの内彎気味に開く口縁部破片である。内外



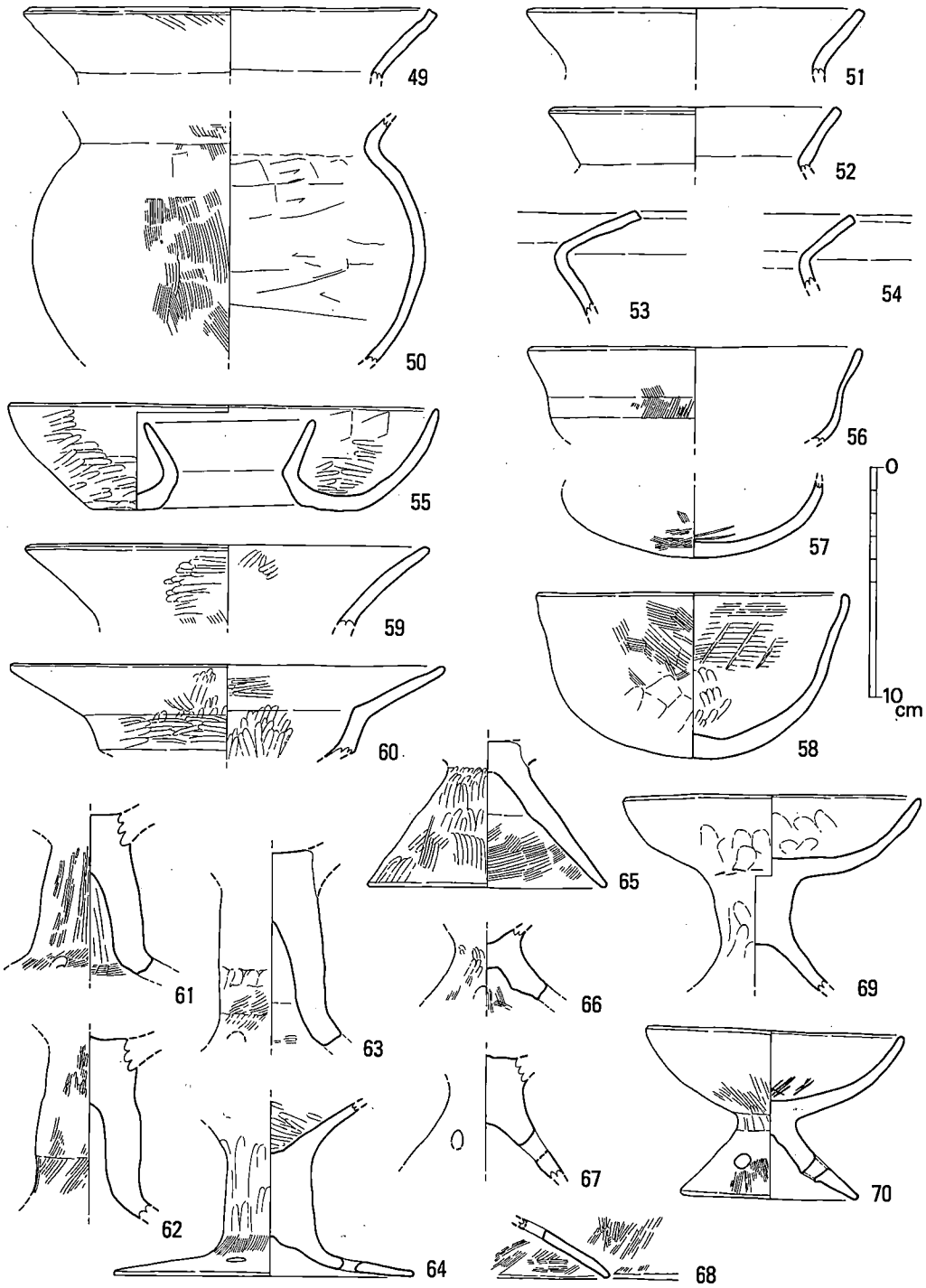
第11図　3号住居跡実測図（1/60）

面ともにハケ目調整のあとナデ調整が加わるが、胴部内面はヘラ削り調整らしい。33は小破片のため器形は不明瞭だが、口縁端部は外反し、外面はヨコナデ調整される。34は口縁部が緩やかに外反して開く。口唇部に凹み気味の面をもち、内外面ともヨコナデ調整される。35～37はいずれも頸部から口縁部が直線的に開き、口縁端部で僅かに変化する。35は復原口径15.4cm、36は復原口径13.0cmの大きさで、内彎気味の口縁端部をもち、内外面ともにハケ目調整される。37は口縁部を欠くが、36と似た頸部を有する。38は復原口径15.8cmの大きさで、複合口縁状に中途で微妙に膨らみ、口縁端部は上方につまみ上げたような形状をなす。肩部は丸みをもち、外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整されて、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整される。

39は復原口径18.6cmの大きさの、口縁部が内傾する複合口縁で、屈折部外面には刻み目を施



第12図　3号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第13図　3号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

して凸帯に似た効果を得ている。40は復原口径21.0cmの大きさの、高杯の口縁部に似て、屈折して直線的ながら外に開く複合口縁の破片である。内外面ともにハケ目調整される。

41は復原胴最大径17.0cmの大きさの扁球形に復原できる胴部破片で、外面は下半部にヘラ削りの痕がみられるものの全体にナデ調整され、内面はハケ目が残る。42は球形に近い形に復原できる胴部破片で、外面は縦方向のハケ目、内面は下半部にヘラ削りの痕が残るがナデ調整される。43は丸底の底部破片で、内外面ともにヘラミガキされるが、外面の一部にはハケ目がみられる。

土師器甕（44～54）　44は復原口径13.6cmの大きさの直線的に開く口縁部で、口唇部は上方につまみ上げたような形状をなす。肩部外面はヨコ方向にハケ目調整されて波状文が巡る。内面は頸部の下までヘラ削りされる。45は復原口径15.2cmの大きさで、口縁部が直線的に開き端部で内彎気味になる。肩部外面はハケ目調整、内面は頸部直下までヘラ削りされる。46は復原口径17.4cmの大きさで、口縁部は直線的に開き口唇部が上方につまんだような形状をなす。胴部内面のヘラ削りは頸部のやや下まで及んでいる。47は直線的に開いた口縁部が端部でやや内彎して、口唇部は上方につまんだような形状をなす。肩部外面はハケ目調整されて、波状文が巡る。48・50は口縁部を欠くが、内面を頸部直下までヘラ削りされる肩部に丸みをもち、口縁部へは外反気味に開く。50の胴部は最大径17.0cm程度の扁球形に復原できる。49・51～54は口縁部が直線的に開く口縁部破片で、49や53では口唇部が上方につままれたような形状をなし、51は端部が内彎気味である。

土師器器台（55）　外部口径19.2cm、器高 4.6cmの大きさの椀形の体部ながら、底部はドーナツ状になり、体部内側に直径 4.6cmの孔があいて、内側の口縁は口径 7.4cmを測るが、直線的に開く。よくみかける器台とは異なり、神仙炉のような器形の器台である。内外面ともにヘラミガキ調整されるが、外底面はヘラ削りに近く、内側口縁部はヨコナデで調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。

土師器鉢（56～58）　56は頸部で僅かに括れる器形の鉢。復原口径14.4cmの大きさで、器高は5.0cm強であろう。外面にハケ目が残るが、内外面ともに板状工具でナデられる。57も同様な調整手法のみられる扁球形の胴下半部で、内底面に暗文様のヘラ痕がみられる。胴最大径11.4cmの大きさ。58は体部の深い鉢で、口径13.8cm、器高7.2cmの大きさ。底部は厚めで、頸部が僅かに括れて口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部内外面ともにハケ目調整されるが、胴下半部の外面はヘラ削り、内面はヘラミガキで調整される。

土師器高杯（59～64・67～70）　59は口縁部が外反する杯部破片で、復原口径17.8cmの大きさ。60は杯部が複合口縁状に屈折して口縁部が直線的に開き、復原口径19.2cmの大きさ。いずれも胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を僅かに含み、内外面ともにヘラミガキ調整される。

61～64・67は柱状部破片で、外面をヘラミガキ調整するが、裾部側にハケ目を残す例が

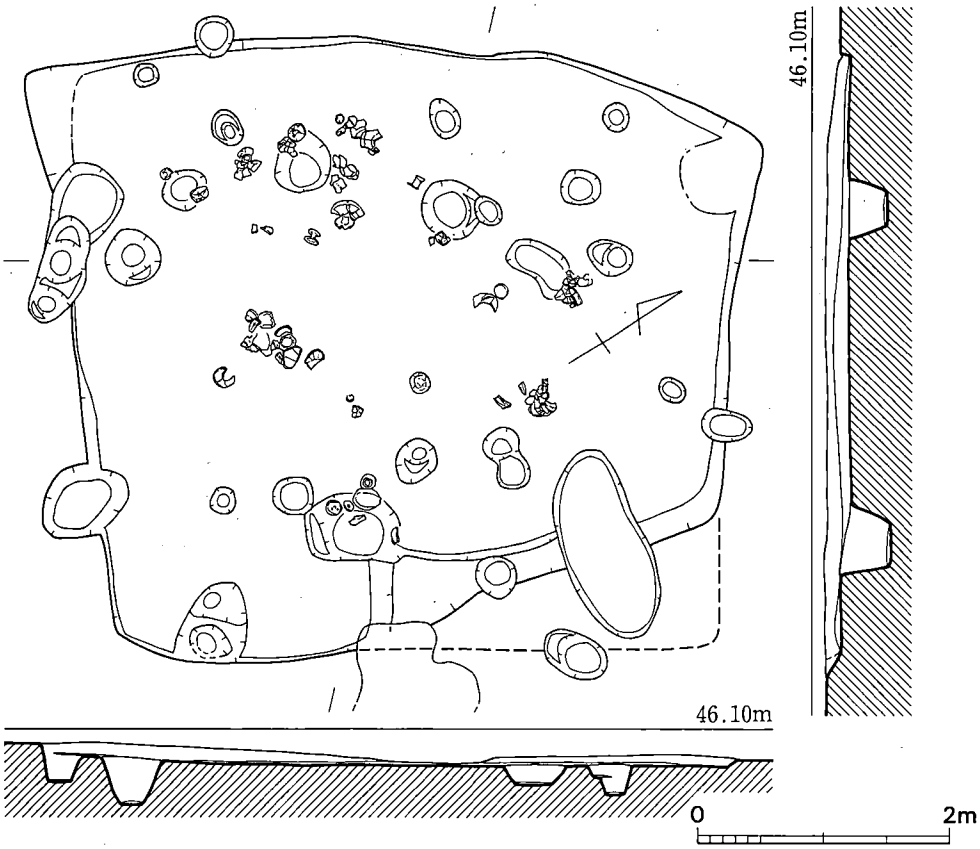
多い。杯部や裾部を欠き全体の器形は詳らかでないが、中実の64では杯部底からやや傾斜をもって開くようで、裾部は大きく開いて、円孔が 3ヶ所に穿たれる。68は内外面ともにハケ目調整され、円孔が穿たれる裾部破片で、後述する器台との区別は明瞭でない。

69・70は椀に似た杯部を有する高杯で、口縁部が内彎する。柱状部は69が中実で、70は杯部下から脚裾部へ開く器形で、円孔が 3 ヶ所に穿たれる。69は口径13.2cm、器高10.0cm程度の大きさで、内外面ともに指頭圧痕が残る。70は口径11.5cm、器高7.3cm、裾部径7.8cmの大きさで、外面にハケ目がみられ、杯部内面はヘラミガキで調整される。

土師器器台（65・66） 脚部のみで受け部を欠くため、杯部が椀状の高杯70と明確な区別は出来ないが、脚部が直線的に開いて内面がハケ目で調整される。外面はヘラミガキされていて、66では脚部に円孔が 4 ヶ所穿たれている。

これらの土器類では、甕は布留式土器の特徴を有していて、他の土器に特に異なる形式の土器がみられないことから、古墳時代前期の住居跡としてよいだろう。

鉄製品（図版15-2、第18図）



第14図 4 号住居跡実測図（1/60）

鉄　鏃（4）　先端が鑿刃になる細根鏃と思われる先端部破片。残存長3.5cm、刃幅1.2cmで、基部側では幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。

4号住居跡（図版4-3･5、第14図）

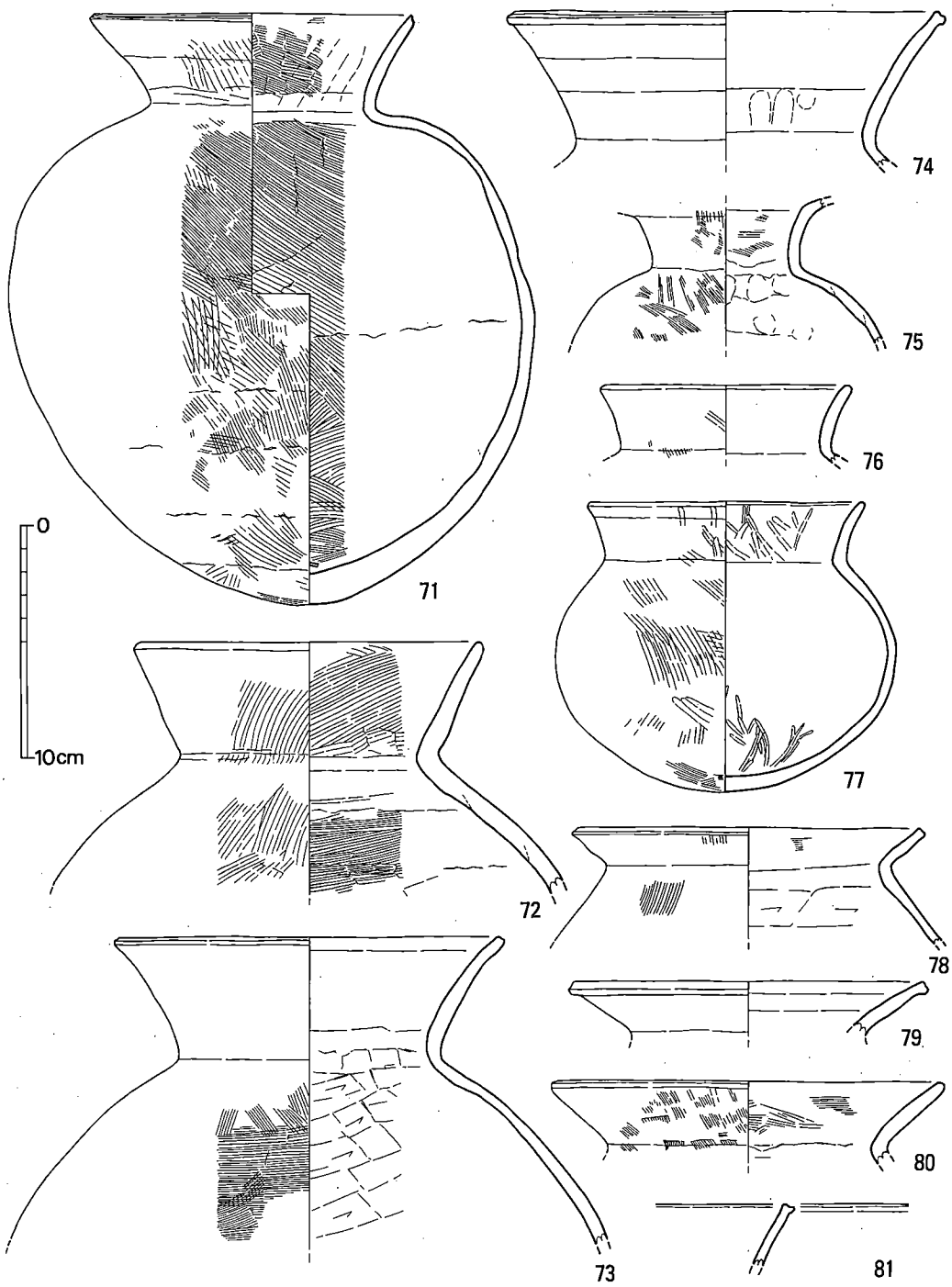
2号住居跡の南側、5号墳周溝の北側に位置するが、東西方向に流れる溝10によって上部を貫かれている。主軸がN32°50′Eの南北方向に長い長方形プランで、長辺5.0～5.6m、短辺4.7～4.9mの広さを有し、東側では幅0.8～1.0m、長さ 2.5m余の広さにベット状の高まりがみられる。周壁は南側で10cm以上の高さに残るが、他の部分では残存状態は悪い。床面はやや堅緻で、焼土塊・焼土粒や木炭片が散乱しているものの、明確に炉跡と言えるような部分は発見できなかった。

出土土器（図版11～13、第15～17図）

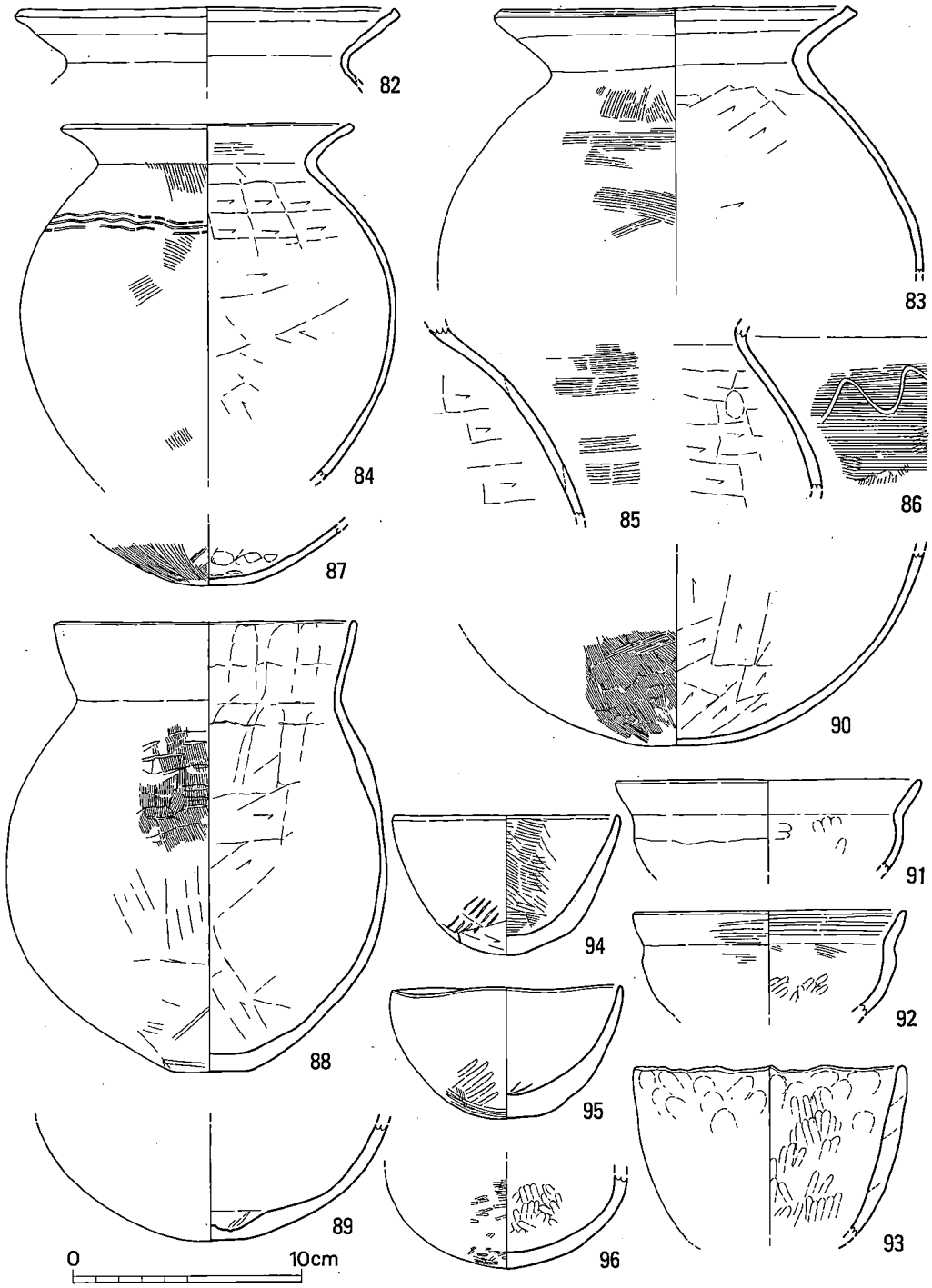
土師器壺（71～77）　71は口径14.0cm、器高25.5cm、胴最大径22.6cmの大きさの壺で、倒卵形の体部に緩やかに外反する口縁部が付く。胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、器面は内外ともにハケ目調整され、黄褐色に焼成されている。72は同様な器面調整を施した壺で、器形も似るが、口縁部の立ち上がりはやや直線的で、復原口径15.2cmの大きさ。73・74は72に比して器壁の薄い壺で、体部内面はヘラ削りされる。71は直線的に開いた口縁部が端部で内彎気味になり、復原口径17.0cmの大きさ。72は口縁端部が上方につまんだ様に突出し、復原口径19.0cmの大きさ。73の肩部外面の調整にヨコ方向のハケ目がみられる。75は口縁部を欠くものの頸部から大きく外へ開くようで、複合口縁になる可能性がある。丸みをもった肩部は内面がナデ調整される。76・77は広口壺とも言える器形であろう。77では口径12.0cm、器高12.5cm、胴最大径14.8cmの大きさで、内外面ともに部分的にヘラミガキの痕がみられるが、ハケ目あるいは板状工具によるナデ調整の部分が多い。

土師器甕（78～90）　78～84は口縁部が短く直線的に開き、口唇端部が上につままれたような形状をなす。比較的残存状況の良好な83・84では体部に丸みをもつが幾分なで肩で、外面をハケ目、内面を頸部下までヘラ削りで調整する。肩部外面には横方向のハケ目あるいは波状文がみられる。他の例も、口縁部内外面ともにヨコナデ調整されるが、80の例はハケ目がかなり残り器壁も厚く、体部の調整も他の例と異なる。85・86も84・85の例にみられる特徴を有する肩部破片で、87・88の底部破片は丸底で、87の内底部にはヘラ状工具の端による痕が残る。

89は口径13.1cm、器高19.6cm、胴最大径16.7cmの大きさの甕で、直径3.6cm程の小さな平底を有し、あまり肩の張らない体部から口縁部が内彎気味に立ち上がる。肩部外面に叩き目とハケ目が残り、胴下半はナデ消されている。内面は肩部より下側はヘラ削り、頸部付近はナデ調整される。90は丸底の底部破片で、外面をナデ調整、内面はヘラ削りの後にナデられている。甕か否かの区別はし難い。



第15図　4号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第16図　4号住居跡出土土器実測図2 (1/3)

土師器鉢（91～93・99）　91・92は頸部が括れて口縁部が外に開く鉢で、内外面ともにヘラミガキされるが、ハケ目が残る部分やヘラ削りに近い部分もみられる。91は復原口径13.4cm、92は復原口径12.0cmの大きさである。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。93は体部の深い椀形の鉢で、内面はヘラミガキされるが、外面は手捏のようなナデで調整されて、端部の調整が雑で口縁は波打っている。

99は復原口径19.4cm、器高8.0cm程の大きさの、口縁部が内彎して立ち上がる椀形を呈する鉢である。外面をハケ目、内面をヘラミガキで調整している。

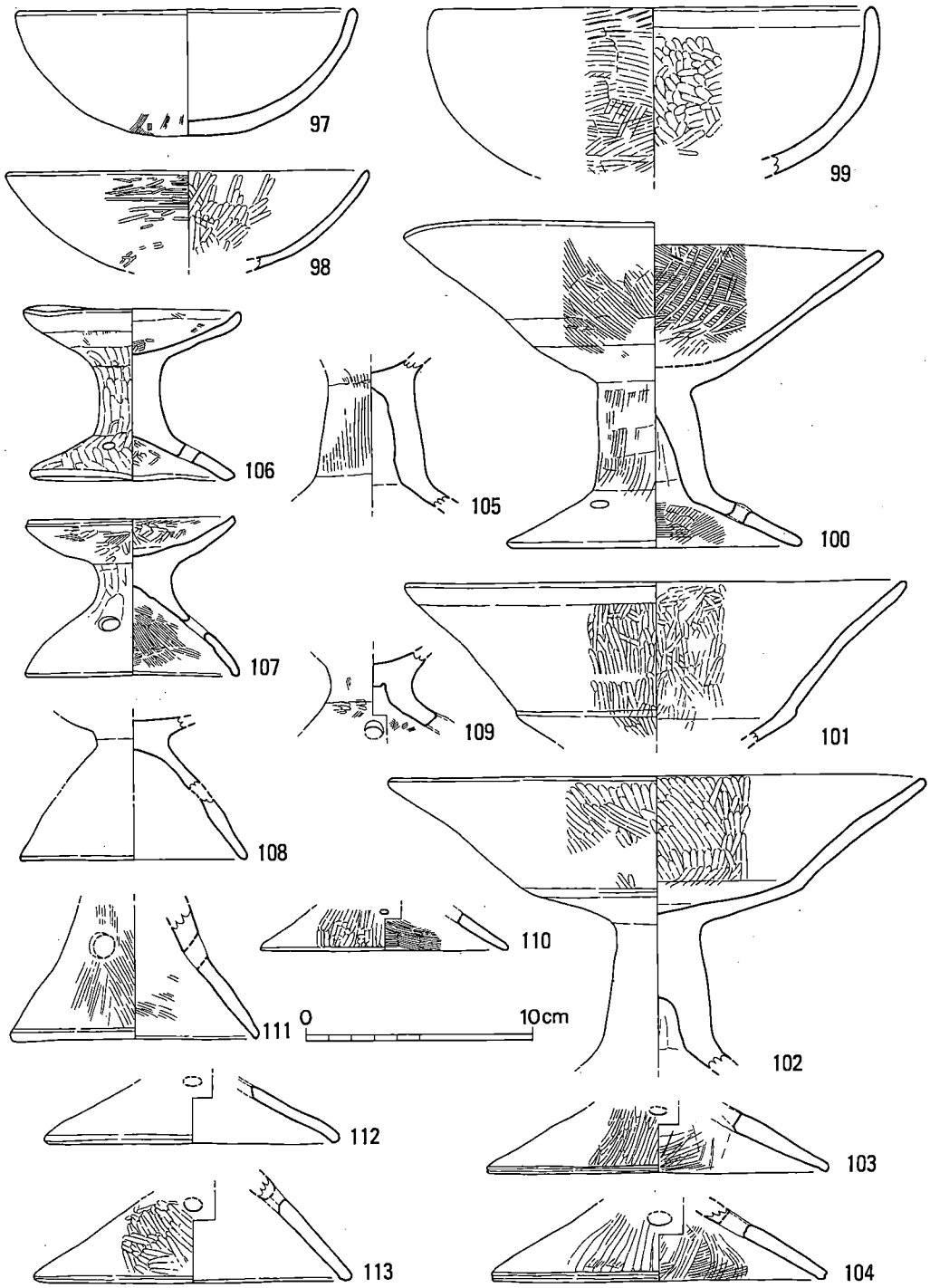
土師器椀（94～98）　94・95は口径と器高の比が２：１に近い椀で口径10.0cm前後、器高 6.0cm前後の大きさ。丸底の底部からそのまま口縁部が内彎しながら立ち上がる。外面はナデ調整されるが、底部付近に叩き目とヘラ削り痕が残る。内面は94がハケ目調整、95は板状工具のナデとヨコナデで調整される。

96は、口縁部側を欠くが、94などに比して底部から胴部の器形に丸みが強く、小形丸底壺などの器形になる可能性もある。内外面ともにヘラミガキで調整されている。

97・98は口径と器高の比が 3： 1に近い椀で口径15.0cm前後、器高 5.0cm前後の大きさ。丸底の底部からそのまま口縁部が内彎しながら立ち上がる。98は内外面ともにヘラミガキで調整されるが、97では外面にハケ目、内面に板状工具の痕が残る。

土師器高杯（100～105）　100は杯底部が小さいものの杯口縁部が長く直線的に開き、中空の柱状部を介して脚裾部が屈折して開く器形の高杯である。口径21.1cmで、器高13.6cmのうち杯部高は、 6.5cm程を占める。脚部は径 5.0cm程の柱状部から裾径12.8cmに開き、円孔が 3ヶ所に穿たれる。内外面ともにハケ目調整されるが、杯部内面は暗文風に放射状のヘラミガキが加わる。101・102は杯底部から杯口縁部が緩やかに外反して長めに開き、102では半ば中実の柱状部を介して脚裾部が屈折して開く。101は復原口径22.0cmの大きさ。102は口径23.6cm、杯部高6.5cmの大きさで、器高は14.0cm余りであろう。101・102ともに杯部の内外面はヘラミガキ調整される。103・104は裾径15.0cm前後の、外面をヘラミガキ、内面をハケ目調整する脚裾部破片で、円孔もみられる。105は外面にハケ目の残る中空の柱状部破片である。高杯の胎土は細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色、茶褐色などの色調に焼成されている。

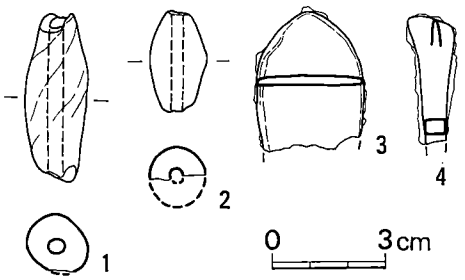
土師器器台（106～108）　106は中実の柱状部を有して、受け部・脚裾部ともに低めで直線的に開いて端部が内彎する器形をなす。脚裾部には円孔が３ヶ所に穿たれ、全体にヘラミガキで器面調整され、受け部外面には一部ヨコ方向の板ナデ痕が残る。口径9.6cm、器高7.6cm、裾径9.0cmの大きさ。107は中実の柱状部が短く、受け部は低めに内彎気味に開くが、脚裾部は高めで緩やかに内彎して開く。脚裾部には円孔が３ヶ所に穿たれ、内面はハケ目調整、外面はヘラ削りされるが、受け部はハケ目が僅かに残るヘラミガキで器面調整される。口径9.1cm、器高6.9cm、裾径9.5cmの大きさ。108は上下が巧く接合せず、器面も風化磨滅するが、107と同様の器



第17図　4号住居跡出土土器実測図3 (1/3)

形であろう。復原裾径10.0cmの大きさ。

脚裾部（109～113）　いずれも破片資料で、全体の形は分からないが、高杯若しくは器台の脚裾部であろう。109は柱状部が短く、受け部下から脚部へ外反する感もあり、円孔は4ヶ所に穿たれる。110は109の裾部にみても良いような破片だが、内面をハケ目、外面をヘラミガキで調整している。111は高めの脚裾部で、円孔が3ヶ所に空き、内外面ともにハケ目調整される。一方112・113は復原裾径が13.0cm、14.0cmの大きさで、高杯の裾部の可能性が高い。外面はヘラミガキされ、内面はナデ調整されるが、113は4ヶ所に円孔が空く。



第18図　住居跡出土土製品・金属製品実測図（1/2）

これらの土器類のなかでは、甕や器台などに庄内式の特徴をみるが、器壁の薄い甕は布留式の古段階にみられるもので、庄内式期から布留式古段階の時期であろう。

土製品（図版15-2、第18図）

管状土錘（2）棗玉に似た膨らみをもつ管状土錘の半截片で、残存長2.6cm、外径1.5cm、孔径0.3cm、重量1.4gを測る。

5号住居跡（図版6-1、第19図）

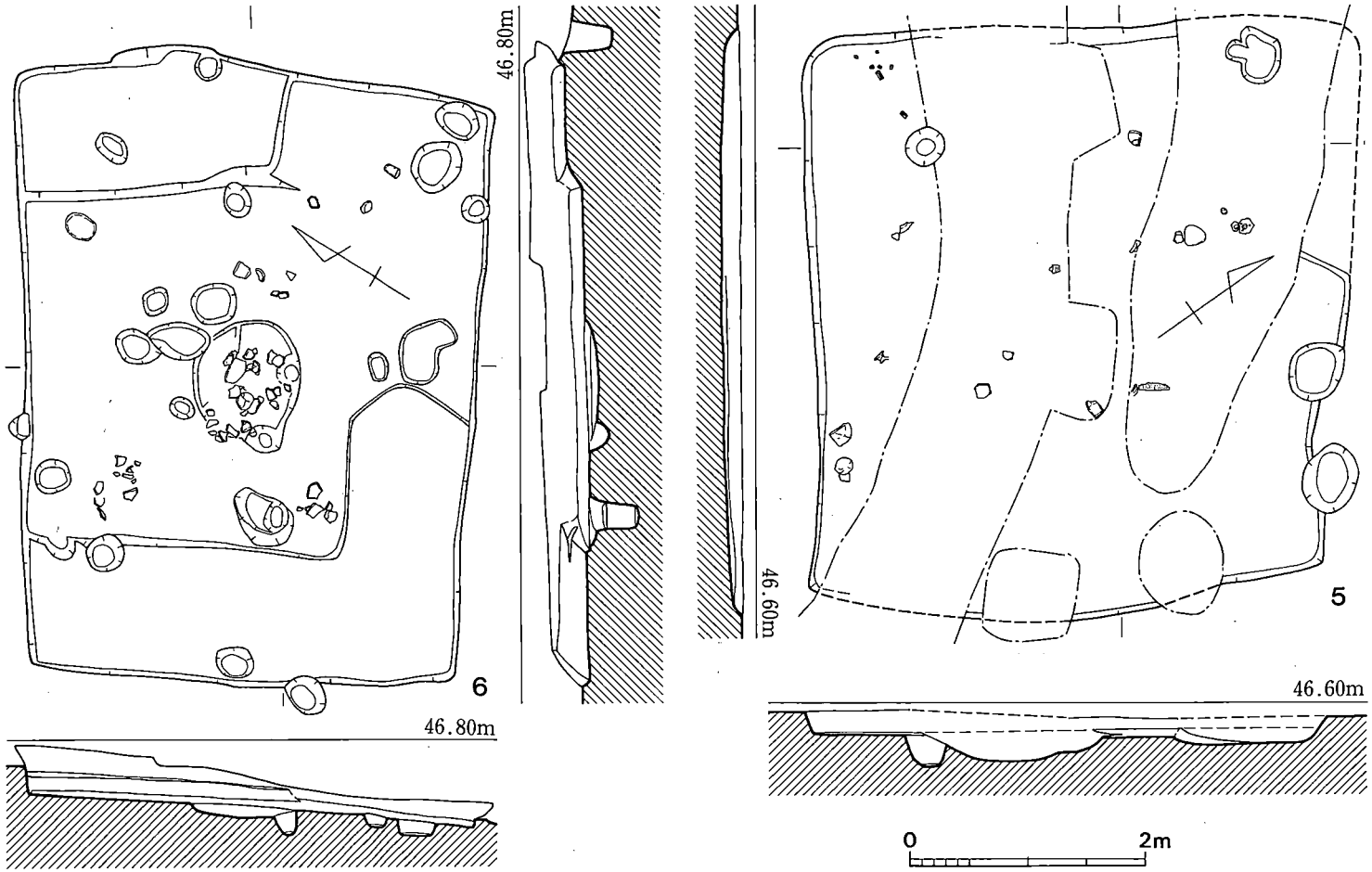
1号墳周溝、3号建物の柱穴などと重複し、これらによって削られた部分が多く、遺存状況の悪い住居跡である。主軸をN54°W方向に向ける長方形プランで、北東一南西4.50m、北西一南東5.10mの規模を有し、西側で約20cmの周壁高を残す。北側では攪乱溝のために詳らかでないが、周壁の途切れる部分があり、ベット状遺構であった可能性もある。主柱穴と目されるピットや炉跡なども、攪乱が激しいためか明確ではない。

出土土器（図版14、第20図）

土師器甕（114～119）　いずれも口縁部が短く直線的に開く甕で、114・116・117はヨコナデ調整される口縁部が口唇部で上端が上方につままれたように突出する。肩部外面はハケ目調整、内面は頸部までヘラ削りされる。115・118は口縁端部が丸みをもち、118では内外面ともにハケ目調整される。これらも肩部内面のヘラ削りは頸部まで及ぶ。

119は肩部から口縁部を欠くが、復原胴最大径17.0cmの大きさの、やや器壁の厚い甕。底部は尖り気味ながらも極小さな平底を残し、内外面ともにナデ調整される。

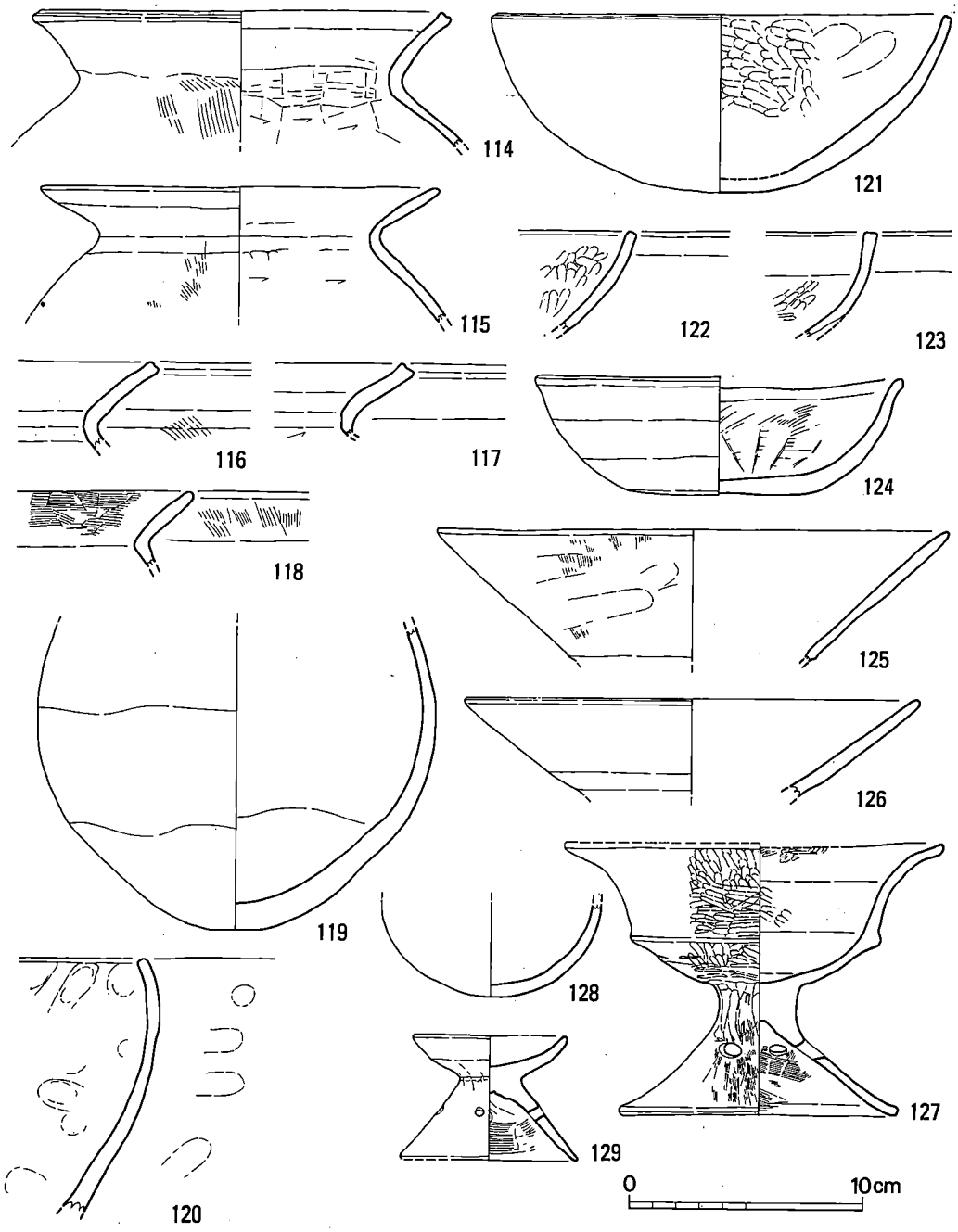
土師器鉢（120・121・124）　120は小破片のため傾きに若干不安があるが、口縁部が内彎して立ち上がる深めの鉢であろう。内外面ともに指頭圧痕の残るナデで調整されている。121は口径19.7cm、器高7.6cmの大きさの丸底の底部から内彎して開く椀形の鉢で、器面の大半が風化磨



第19図　5・6号住居跡実測図（1/60）

減するものの内面にヘラミガキの痕跡が残る。

124は平底の底部から内彎して開き、口縁端部が外反する鉢で、口径15.8cm、器高 5.0cm、底



第20図　5号住居跡出土土器実測図（1/3）

径7.8cmの大きさ。内面はハケ目の原体で板ナデ調整され、外面はナデ調整される。

土師器椀（122・123）　内面をヘラミガキ調整する口縁部破片で、外面はナデ調整される。口径は復原できず、121鉢との区別は明確でないが、椀形を呈するであろう。口縁端部では123がやや肥厚気味で上面が平らに整えられている。

土師器高杯（125～127）　125・126は口縁部が直線的に開く杯部破片で、杯底部は分からない。器面は風化磨滅するが、内面はヘラミガキ、外面はナデ調整のようで、125の外面にはハケ目が残る。復原口径22.0cmと、19.4cmの大きさ。127は内彎して開く杯底部から口縁部が緩やかに外反して口縁端部は内彎気味に上方に跳ねる。杯部内面は椀形に近いが、外面では口縁部下の屈折部を断面台形に肥厚させて段をなす。柱状部は短めで、脚裾部は緩やかに外反して開き、4ヶ所に円孔が穿孔されている。脚裾部は内外面ともにハケ目調整、杯部は内外面ともにヘラミガキで調整され、杯底面から柱状部はヘラ削りに近い雑な調整である。口径16.2cm、裾径12.0cm、器高11.6cmのうち杯部は6.0cmの高さを占める。

土師器小形丸底壺（128）　丸底の底部破片で胴部から上を欠くが、内外面ともにナデ調整され、復原胴最大径9.4cmの大きさ。

土師器器台（129）　口径6.7cm、器高5.3cm、裾径7.6cmの大きさ。受け部は低めに内彎気味に開き、脚裾部は円錘状に開く。脚裾部には円孔が4ヶ所に穿たれ、内面はハケ目調整される。他の部分は器面が風化磨滅するが、ヘラミガキ調整であろう。

これらの土器類は、甕や高杯・器台などの特徴から、庄内式期に相当する。

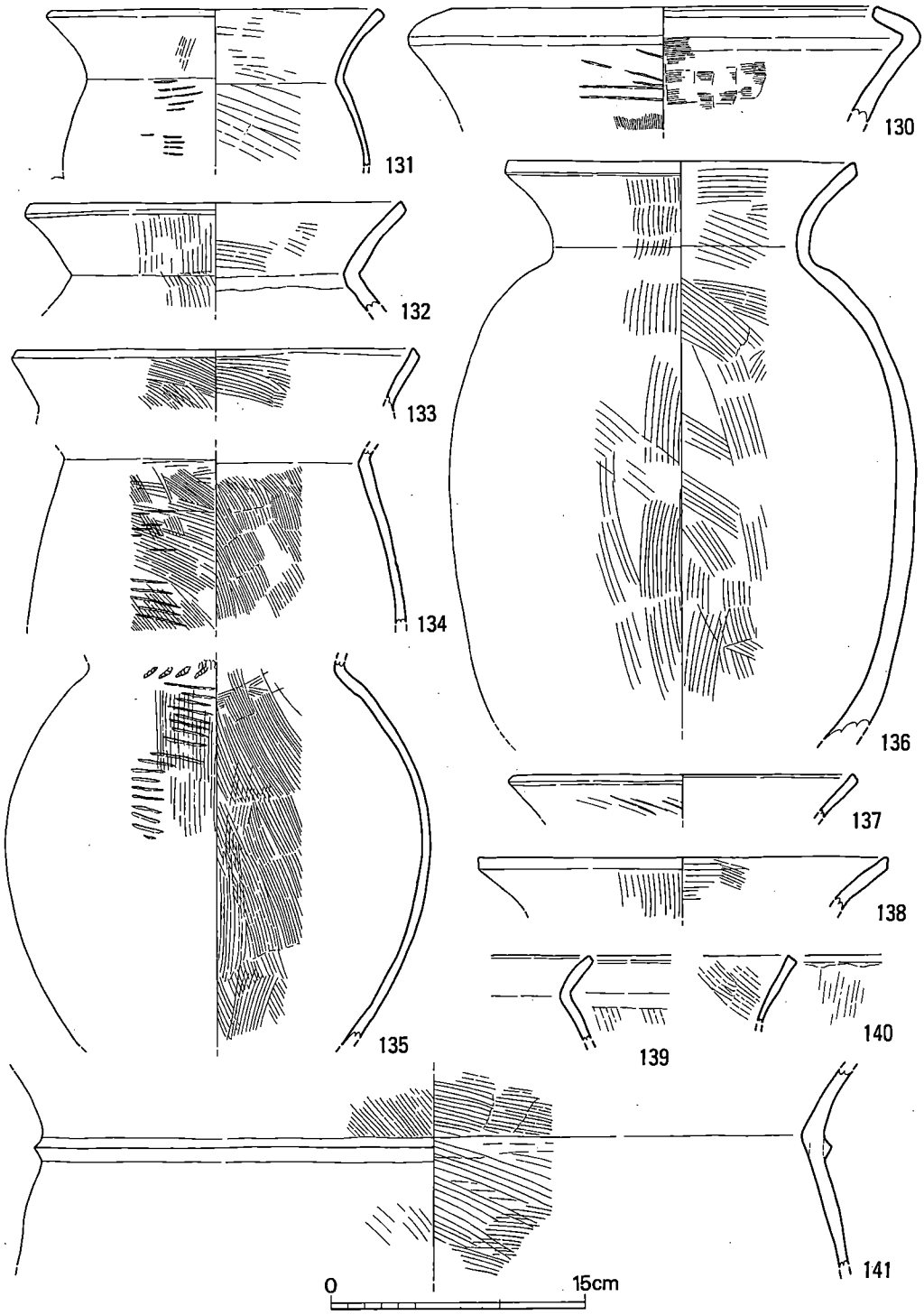
6号住居跡（図版6-2・3、第19図）

調査区東部にある竪穴住居跡で、7号墳と8号墳の間に位置する。主軸をN58°E方向に向ける長方形プランで、東西5.30m，南北4.00m規模を有するが、東側では溝14によって削られている。最も残りのよい北側壁では35cm程の高さを残しているが、南側は削られて周壁は僅かな高さを残すのみである。東西両側短辺の周壁に沿って、幅1.10～1.20mで10cm前後の高さに残るベット状遺構がみられ、やや堅緻な床面中央に炭・焼土を含む炉跡がみられる。長軸線上に近く、ベット状遺構に接して炉跡を挟むピット2穴が主柱穴であろう。

出土土器（図版14・15、第21・22図）

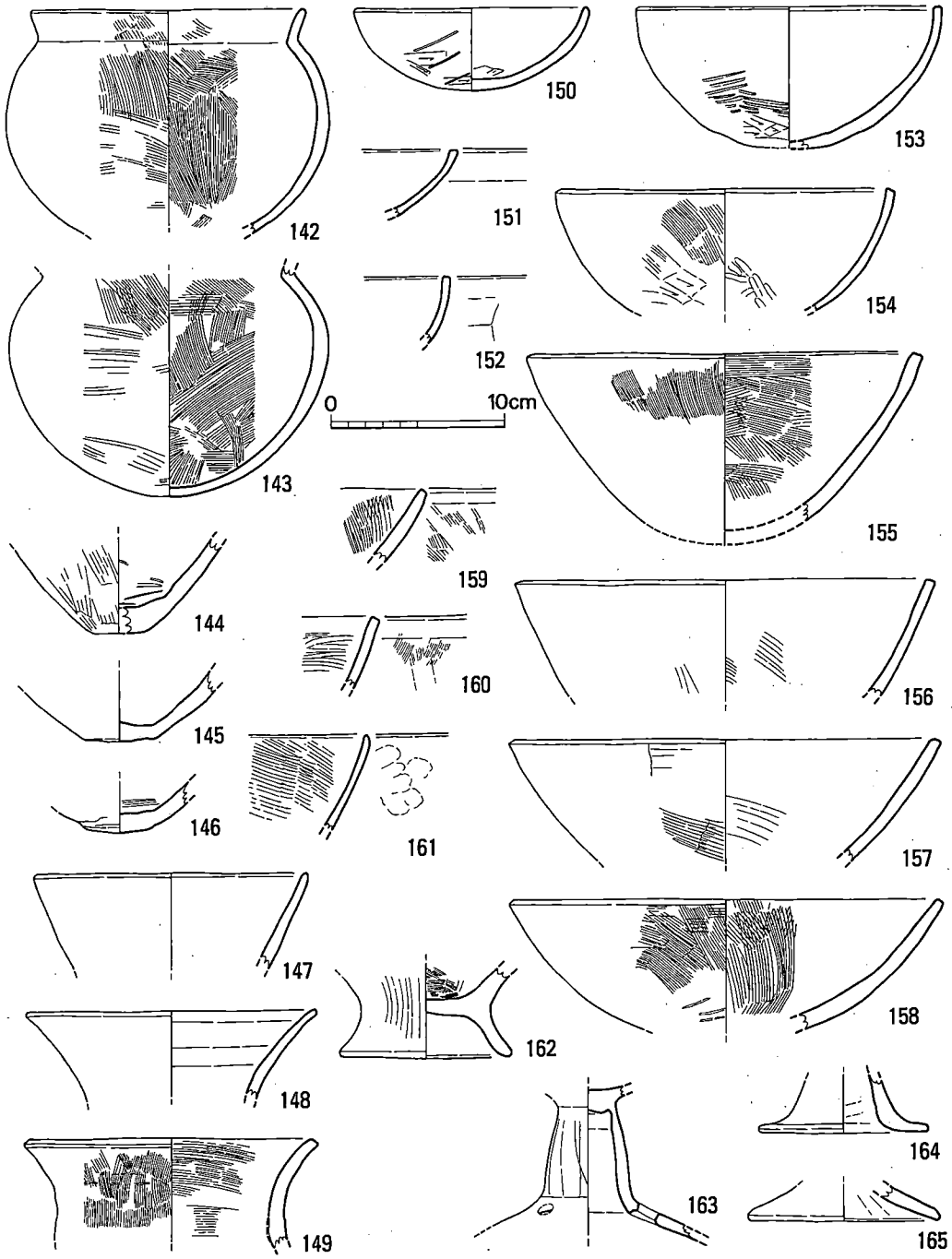
壺（130）　口縁部が袋状をなすもので、頸部側の外面に叩き目痕、内面にハケ目調整痕がみられる。

甕（131～141）　長胴の体部を有し、外反する口縁部が直線的に開く器形の甕で、内外面ともにハケ目調整される例が多い。131・134・135などでは胴部上半部に叩き目痕が残され、135の頸部には斜方向の刻み目が付されている。141はやや大形の甕で、頸部に断面三角形の凸帯が巡る。



第21図　6号住居跡出土土器実測図1 (1/4)

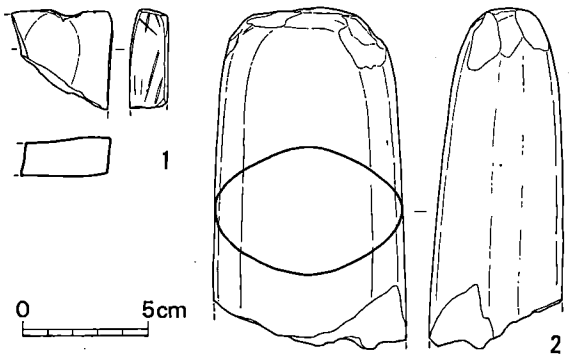
鉢（142・143・150～161）142・143は扁球形の胴部を有し、短い口縁部が外反して立ち上がる。胴部内外面ともにハケ目調整されるが、胴下半部外面はナデ調整が加わっている。いずれ



第22図　6号住居跡出土土器実測図2（1/4）

も胴最大径18.5cmの大きさで、142の復原口径は16.0cmである。

150・151・157・158は口径と器高の比が3：1程度の椀形の鉢で、150では復原口径13.6cm、器高4.7cm。板状原体によるナデで器面調整され、外底部はヘラ削りに近い調整痕がみられる。157・158は復原口径25.0cmの大きさで、内外面ともにハケ目調整されて、器壁はやや厚い。



第23図　住居跡出土石器実測図（1/3）

152～155は口径と器高の比が2：1程度の椀形の鉢である。152～155は体部に丸みをもつが、155の体部は円錐形に近い器形を呈し、器壁もやや厚め。153は復原口径17.6cm、器高8.1cmの大きさで、体部外面に叩き目痕とヘラ削り痕がみられ、口縁部側は内外面ともにナデ調整されている。154は復原口径19.6cmの大きさで、外面にハケ目とハケ目原体によるヘラ削り状の調整痕、内面の下半部にヘラミガキの痕跡がみられる。155は復原口径22.8cm、器高11.0cm前後の大きさで、内外面ともにハケ目調整痕がみられる。

底　部（144～146・162）　144～146は、いずれも小さめの底面を有する甕の底部片である。板状工具によるナデ調整あるいはハケ目調整されるが、145・146の外底面はややレンズ状に膨らむ。162は台付甕の底部破片である。脚台部外面は粗いハケ目、内面はナデ調整され、体部内面は細かめのハケ目で調整されている。

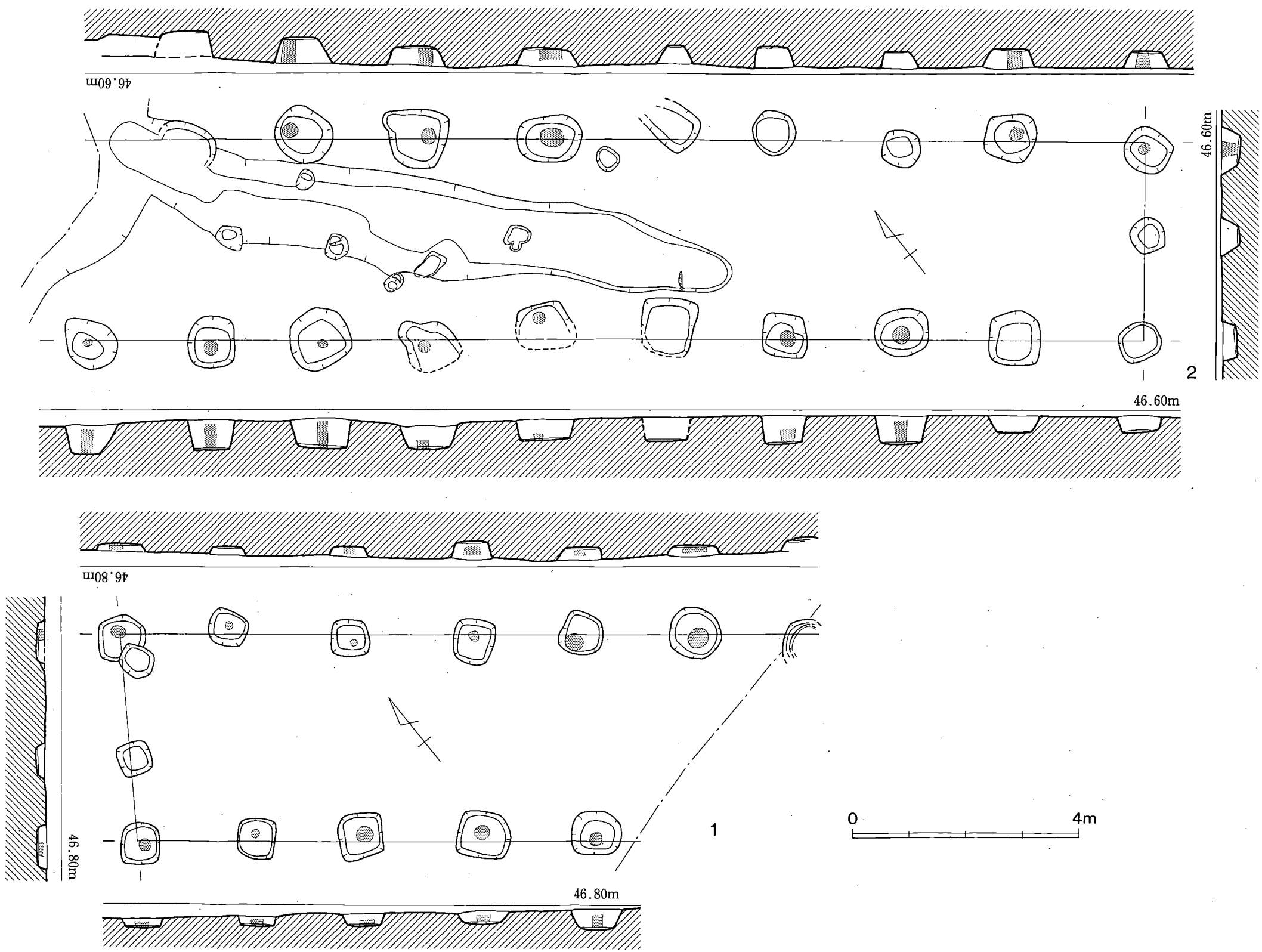
器　台（149）　復原口径17.0cmの大きさの、緩やかに口縁部が外反するもので、外面は叩き目痕の残る縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目で調整されている。

高　杯（163～165）　いずれも脚台部破片で、163の柱状部は板状工具のナデ痕を残していて、開いた裾部に円孔が穿たれている。

これらの土器類は弥生後期後半の特徴を有している。

石　器（図版15-2、第23図）

磨製石斧（2）　緑簾片岩製の刃部を欠失する破片で、蛇紋岩のような平滑さはないが研磨されている。幅、厚みが、頭部と胴部でさほど違わない扁円柱状の体部を有する。残存長13.4cm、幅7.6cm、厚さ5.1cmの大きさ、重量856.2gを測る。



第24図　1・2号建物跡実測図（1/80）

2．掘立柱建物跡

調査区域内には、多くの柱穴状ピットが発見された。直径20cm程度から直径100cmに近い例もあるが、大半は直径30cm前後のものである。葡萄・蜜柑・柿などの栽培に係わる攪乱穴も無数にあって、それぞれの柱穴状ピットがどのような関係なのかは現地で確認し難かった。このため図上で建物を想定できる例も無いとは言えないが、敢えて試みてはいない。ここでは、現地で確実に確認できた1号～3号建物の3棟のみを取り扱うことにする。

1号建物跡（図版15-3･16-1、第24図）

調査区西端部の標高46.7m位で発見された。南東側が調査区域外のため詳らかでないが、2×6間（若しくは6間以上）の建物である。主軸方向はN51°Wを向き、柱穴掘方内の柱痕の位置から桁行6間で12.2m、梁行2間で3.80m（部分的には3.60mに近い）を測る。柱穴は検出面での上縁が一辺60cm～80cm規模の隅丸方形で、深さは10cm～35cm前後しか残らない。柱痕は直径20cm～30cmを測る。柱穴の床面は平坦で、敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

出土遺物

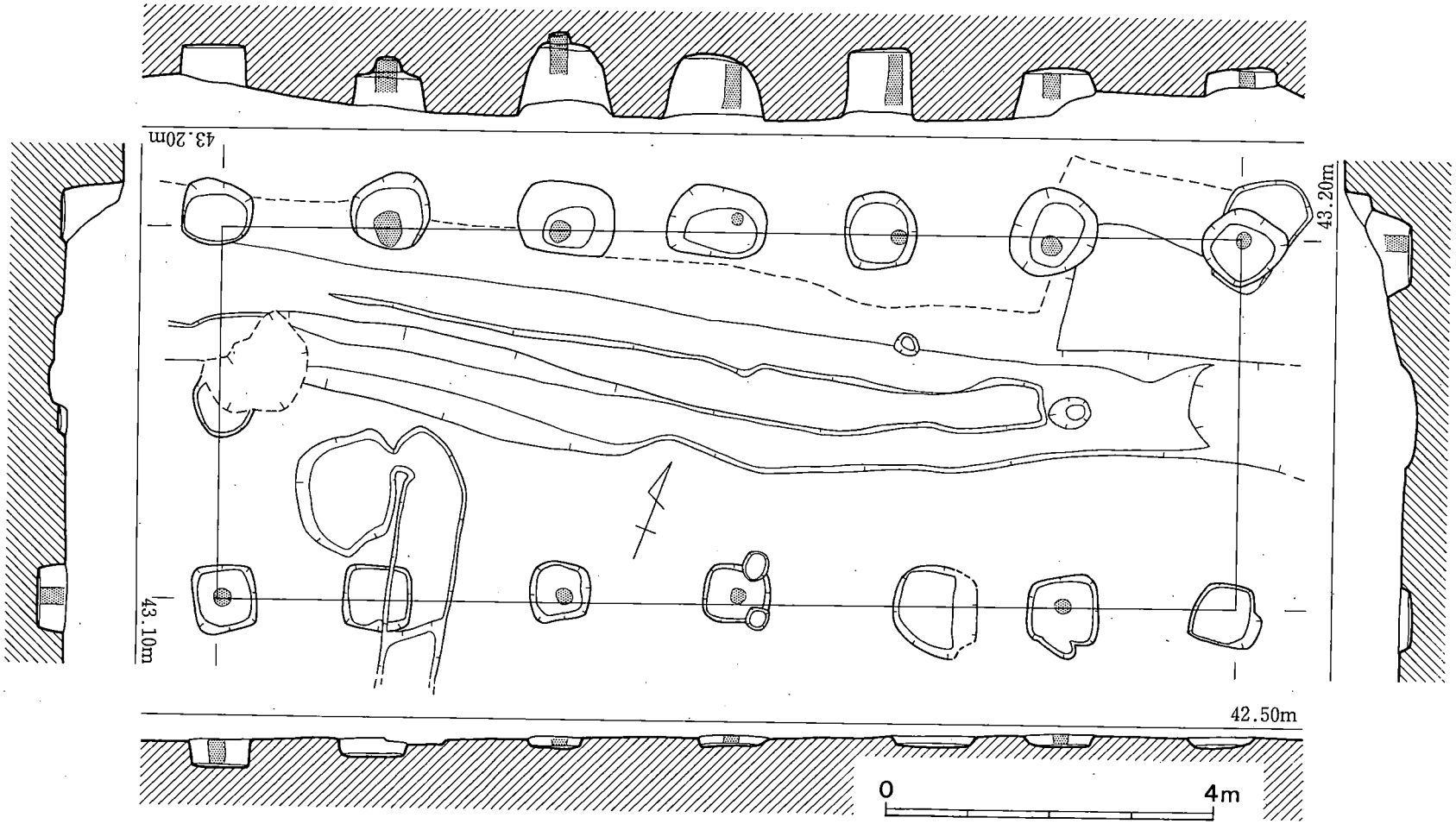
柱穴掘方内部からは、土師器細片、縄文土器片などが出土したものの、建物跡の時期を判断できるような遺物の出土はみられなかった。

2号建物跡（図版15-3･16-2、第24図）

調査区西端部の標高46.6m位で発見された。1号建物跡の東南側に約20mの距離を挟んで平行した位置にある。北西側は崖で削られ、崖に向かう溝9とも一部重複して削られている。1号墳周溝、5号住居跡とも重複するが、これらよりは後出する。2×9間（若しくは9間以上）の建物である。主軸方向はN51°Wを向き、柱穴掘方内の柱痕の位置から桁行9間で18.6m、梁行2間で3.60mを測る。柱穴は検出面での上縁が一辺60cm～100cm規模の隅丸方形あるいは不整方形で、深さは20cm～50cm前後に残る。柱痕は直径20cm～30cmを測る。柱穴の床面は平坦で、敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

出土遺物

柱穴掘方内部からは、土師器細片、縄文土器片などが出土したものの、建物跡の時期を判断できるような遺物の出土はみられなかった。



第25図　3号建物跡実測図（1/80）

3号建物跡（図版16-3、第25図）

調査区南部の標高43.0m位で発見された。畑の段落ちと排水溝などで上部を削られている。溝1・溝5にも一部削られる。2×6間の建物で、主軸方向はN69°30′Eを向く。柱穴掘方内の柱痕の位置から桁行6間で12.4m・12.6m、梁行2間で4.60mを測る。柱穴は検出面での上縁が一辺70cm～120cm規模の隅丸方形あるいは不整方形で、深さは10cm～80cm程に残る。柱痕は直径20cm～30cmを測る。柱穴の床面は平坦で、敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

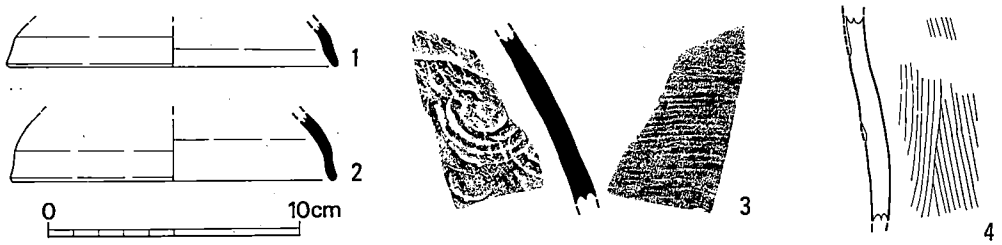
出土遺物（図版18、第26図）

須恵器杯蓋（1・2）　特徴が似るため同一個体の可能性もあるが接合せず、僅かに器壁の厚みが異なる。復原口径13.0cm前後で、口縁端部は僅かに外反する。北東隅から2つ目の柱穴から出土した。

須恵器甕（3）　外面にカキ目、内面に同心円当て具痕のみられる破片。砂粒を若干含む胎土で、暗灰色・暗紫灰色に堅く焼成される。1・2と同じ柱穴から出土した。

土師器甕（4）　外面をハケ目、内面をナデ調整される胴部破片で、胎土に砂粒・雲母が含まれ、茶褐色に焼成されている。北東隅から5つ目の柱穴から出土した。

須恵器杯蓋や甕は6世紀後半ないし末頃のものであろう。



第26図　3号建物跡出土土器実測図（1/3）

3．井戸状遺構

1号井戸状遺構（図版17-1、第27図）

調査区南端部のM7区に発見された遺構である。検出面では、南北がやや長い長径1.4m、短径1.2mの不整楕円形プランを呈する。深さ0.9mを測るが、検出面から少し下がった部分からは1.0×1.0m規模の隅丸方形に近い形で壁は直立気味である。坑内の堆積土は殆どが暗茶褐色土だが、床面付近は黄茶褐色と青灰色系の色調を帯びた粘質土がみられた。

出土土器

土師器杯の小破片など出土したが、図示しえない。

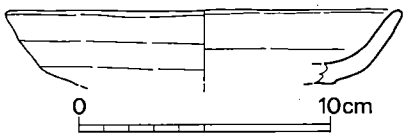
2号井戸状遺構（第27図）

9号墳の東側、H11区に発見された遺構である。長径1.9m、短径1.6mの不整楕円形プランを呈す。深さ0.3mを測り、床面は幾分擂鉢状に凹むが、中央部には円礫3個が敷かれている。坑内の堆積土は上部が黒褐色土だが、下部には淡い色調の粘質土がみられた。

出土土器（第28図）

土師器杯　復原口径15.8cm、器高3.0cm前後の大きさの、杯口縁部破片である。器壁はやや厚めで、内彎気味に立ち上がる。胎土に雲母と砂粒を若干含み、灰黄色に焼成される。12世紀後半頃の杯であろう。

この他に、外底部に板圧痕のみられる土師器杯片、白磁碗か皿か分からないが白磁の外反する口縁部破片などが出土した。小破片のため図示しえない。

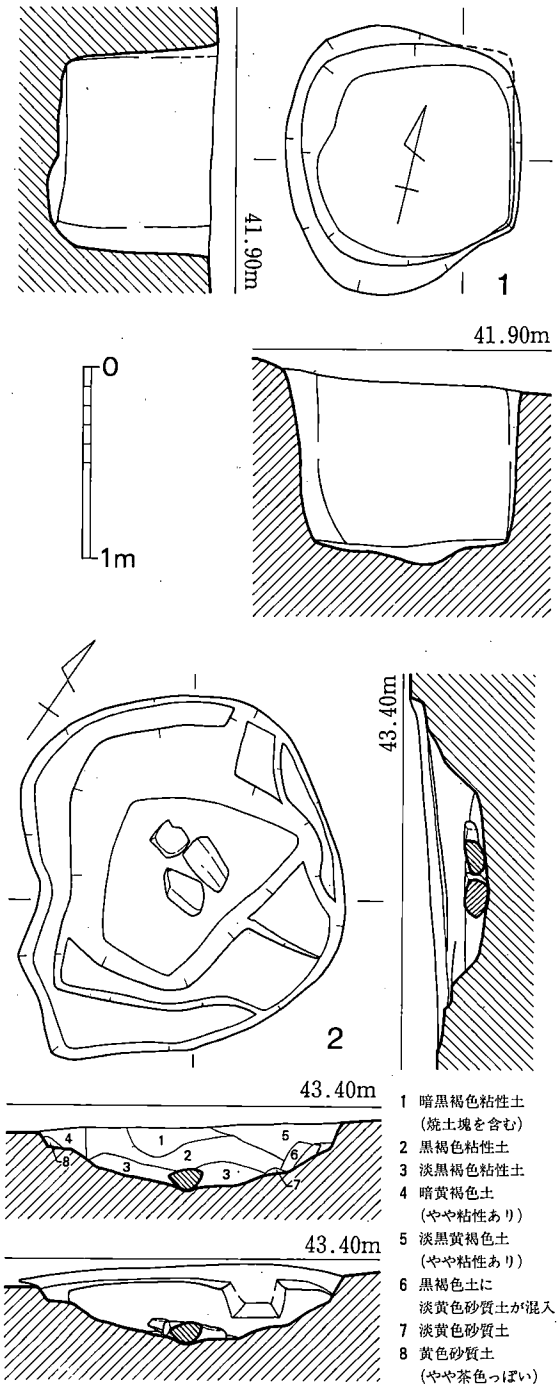


第28図　井戸2出土土器実測図（1/3）

4．竪穴・土坑

1号竪穴（第29図）

調査区西部のJ23区に発見された遺構で、2号墳周溝、2号竪穴と一部重複するが、これらよりも後出する。東西の長さ3.1m、南北の長さ2.6mの不整方形プランの竪穴で、削平されて深



第27図　1・2号井戸状遺構実測図（1/40）

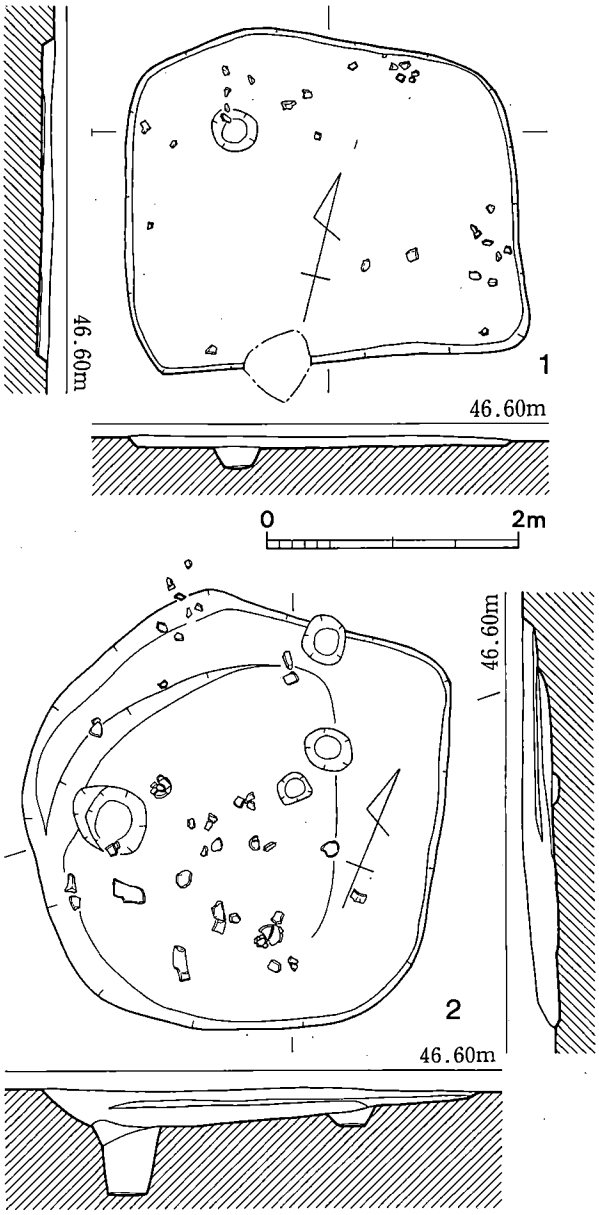
さ10cm程度しか残らない。床面は平坦でやや堅緻だが、床面を掘り込む柱穴状ピットは1穴検出されただけである。

出土土器（第30図）

土師器小皿（1～5）　いずれも外底面に糸切り痕を有する小皿片で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。復原口径は8.4cm～10.7cm、器高0.7～1.1cmの大きさ。

土師器椀（6）　内彎する口縁部破片で、砂粒を殆ど含まない精良な胎土を淡黄茶色に焼成している。

このほかに、外底面に簾状の圧痕を有する底部破片など土師器杯と思われる小破片、白磁碗の胴部破片などが出土したが、図示しえる資料はない。



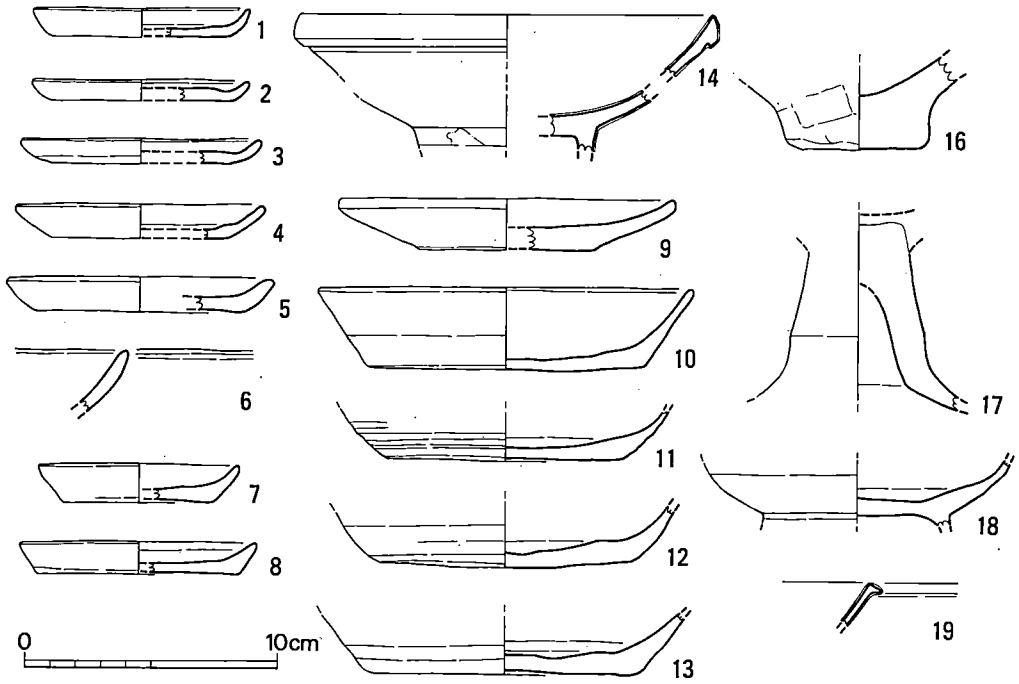
第29図　1・2号竪穴実測図（1/60）

2号竪穴（第29図）

調査区西部のJ22区に発見された遺構で、2号墳周溝、1号竪穴と一部重複するが、北西側にある1号竪穴より先行する。直径3.2～3.5mの不整円形プランの竪穴で、削平されて深さ25cm程度しか残らない。床面は南西側に下がり気味だが平坦でやや堅緻。床面を掘り込む柱穴状ピットは2穴検出されただけで、穴の規模は異なる。

出土土器（図版18、第30図）

土師器小皿（7・8）　ともに外底面に糸切り痕を有する小皿片で、復原口径8.0cm、器高1.5cmの大きさと、復原口径9.4cm、器高1.3cmの大きさ。



第30図　1～4号竪穴出土土器実測図（1/3）

土師器皿（9）　復原口径13.5cm、器高2.0cm、底径7.2cmの大きさで、口縁部は直線的に開き端部が僅かに内彎気味である。

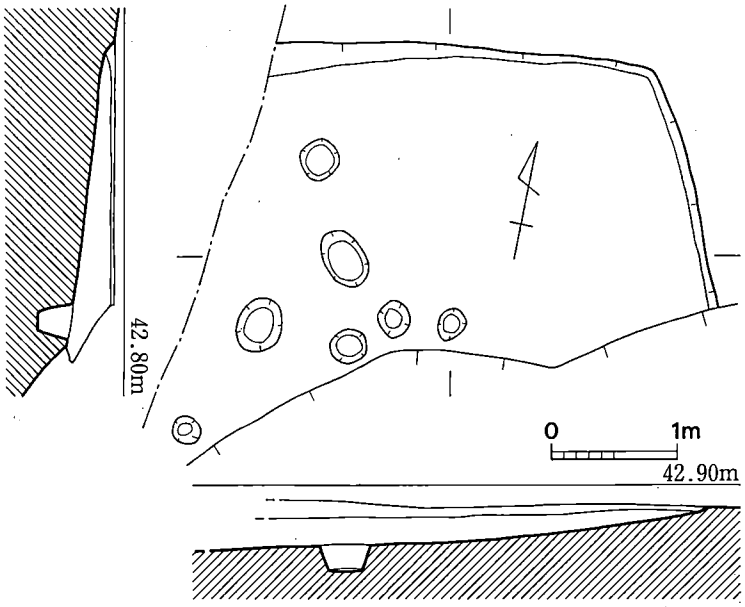
土師器杯（10～13）　いずれも外底面に糸切り痕を有する杯で、12には板目圧痕も付く。10では口径14.8cm、器高3.2cm、底径11.1cmの大きさ。11～13は口縁部を欠き底径9.5cm～10.4cmの大きさ。

白磁碗（14・15）　14は復原口径17.0cmの大きさの、端部が玉縁状に肥厚する碗の口縁部破片。15は高台を有する底部破片で、高台外面まで釉が垂れる。

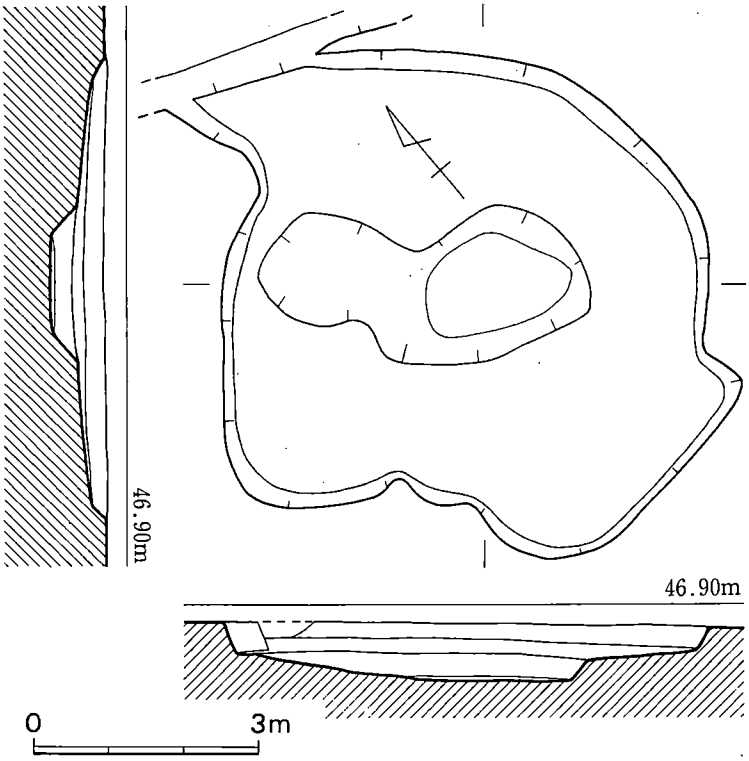
これらの土器類では7の小皿が径からみて時期の下がる要素だが、他の例はいずれも12世紀中頃～後半に相当する。

3号竪穴（図版　、第31図）

24号墓の西側に発見された。西端部は調査区域外に続き、南側は開墾による段落ちの崖で削られている。北辺の長さ3m、東辺の長さ2m程を確認したが、周壁は低い。遺構の広がりは東西5m以上、南北3.5m以上だが、床面の高さは南西隅部と東端で50cm程の高低差がある。中央部から南西隅にかけて凹む形状で、柱穴状ピットが7ヶ所に発見された。柱穴状ピットは直径20～40cm、深さ20～40cmの大きさで、建物跡を想定できるような配置ではない。



第31図　3号竪穴実測図（1/60）



第32図　4号竪穴実測図（1/100）

出土土器（第30図）

甕（16）　畿内第Ⅴ様式的な小さな平底の底部破片で、外面は板ナデ調整される。

高　杯（17）　中空の柱状部内面に稜をなして脚裾部が屈曲して開く破片である。

土師器椀（18）　体部上半と高台を欠くが、内彎する体部にハ字形に開く高台が付く。

甕と高杯では弥生時代末～古墳時代初期の特徴をみるが、土師器椀は古代～中世に属するもので、土師器椀の時期の遺構であろう。

4号竪穴（第32図）

調査区東部で削平の著しい部分に発見された遺構で、東西4.2m、南北4.4mの広さの不整円形プランを呈する。周壁は10cm前後に残るが、全体に浅く凹んで中央部が更に一段深く凹む。竪穴内には茶褐色土が堆積し、遺物の出土は顕著でない。

出土土器（第30図）

白磁碗（19）　端部が短く外反して上面を平らにする、碗の口縁部破片である。

このほかに、円筒埴輪片がいくつか出土している。埴輪片は竪穴の周囲からも多数出土していて、古墳に据えられていたのが削平を受けて散乱したものとみられる。従って、この竪穴は白磁碗の示す12世紀以降に使用された遺構であろう。なお埴輪については、後項「5　古墳」で触れる

1号土坑（図版17-2、第33図）

調査区南部のＬ７区に発見された。検出面での直径1.1m規模の円形土坑で、深さ0.4m程に残るが、床面の直径は0.5m前後である。

出土土器

外面をハケ目調整、内面をヘラ削りする、やや器壁の厚い土師器甕の胴部破片が出土したが、図示しえない。

2号土坑（図版17-3、第33図）

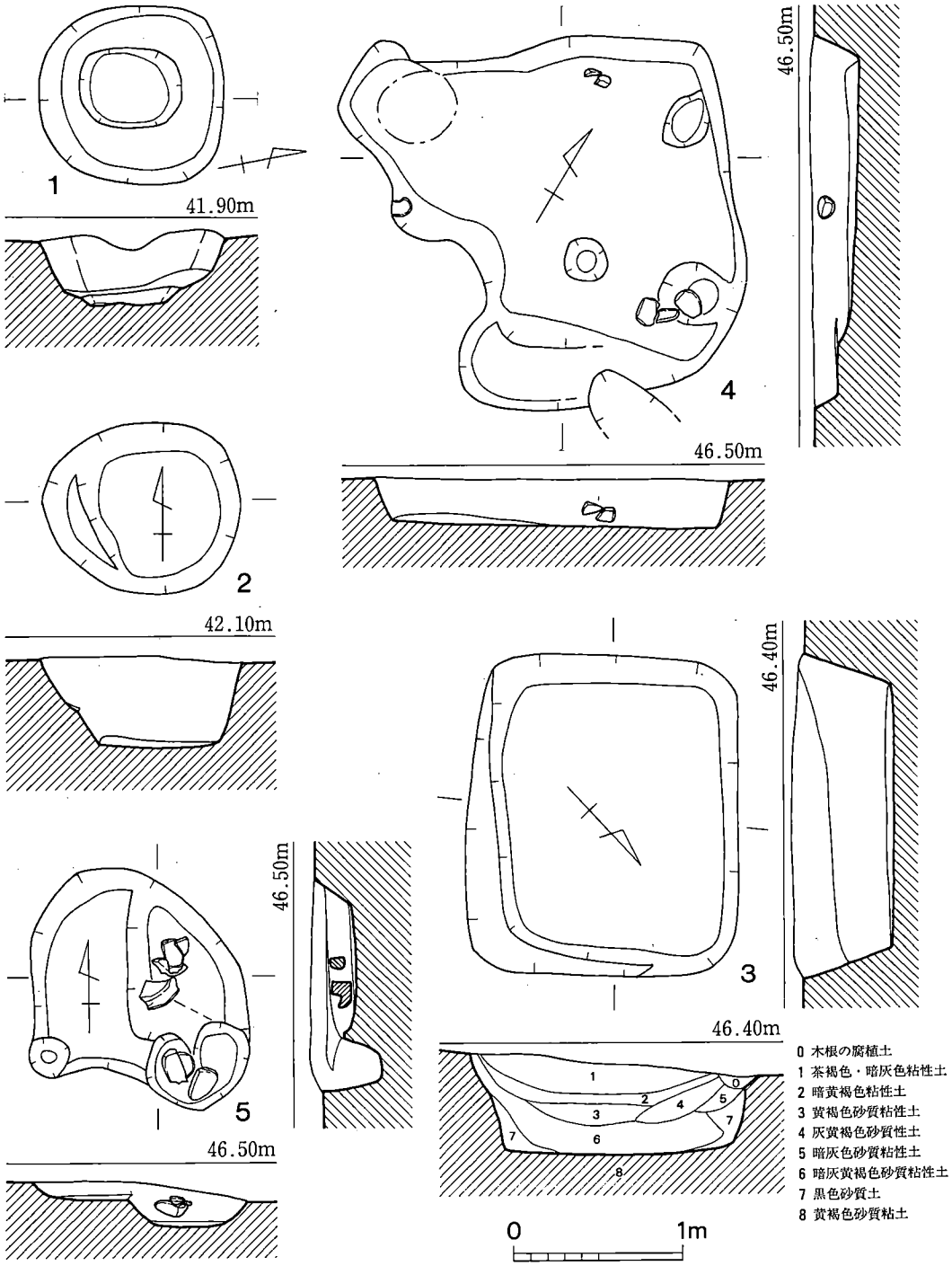
調査区南部のＬ12区に発見された。３号通路状遺構の北側に位置し、検出面での直径1.1m前後の円形土坑で、深さ50cm程に残るが、床面の直径は0.7m前後である。

出土土器

外面をハケ目調整、内面をヘラ削りする、土師器甕の胴部破片が出土したが、図示しえない。

3号土坑（第33図）

調査区西端部のＩ28区に発見された。１号墳周溝の北西側に位置し、検出面で長辺1.9m、短



第33図　1～5号土坑実測図（1/40）

辺1.6m規模の隅丸長方形を呈する土坑で、深さ60cm程に残る。平坦な床面は1.6×1.3mの広さを測る。

出土土器（図版　、第34図）

青磁碗（1）　内彎気味に立ち上がる口縁部破片で、内面に1条の沈線が巡る。うすい灰色の胎土で緑灰色の釉がかかる。同安窯系の青磁碗であろう。

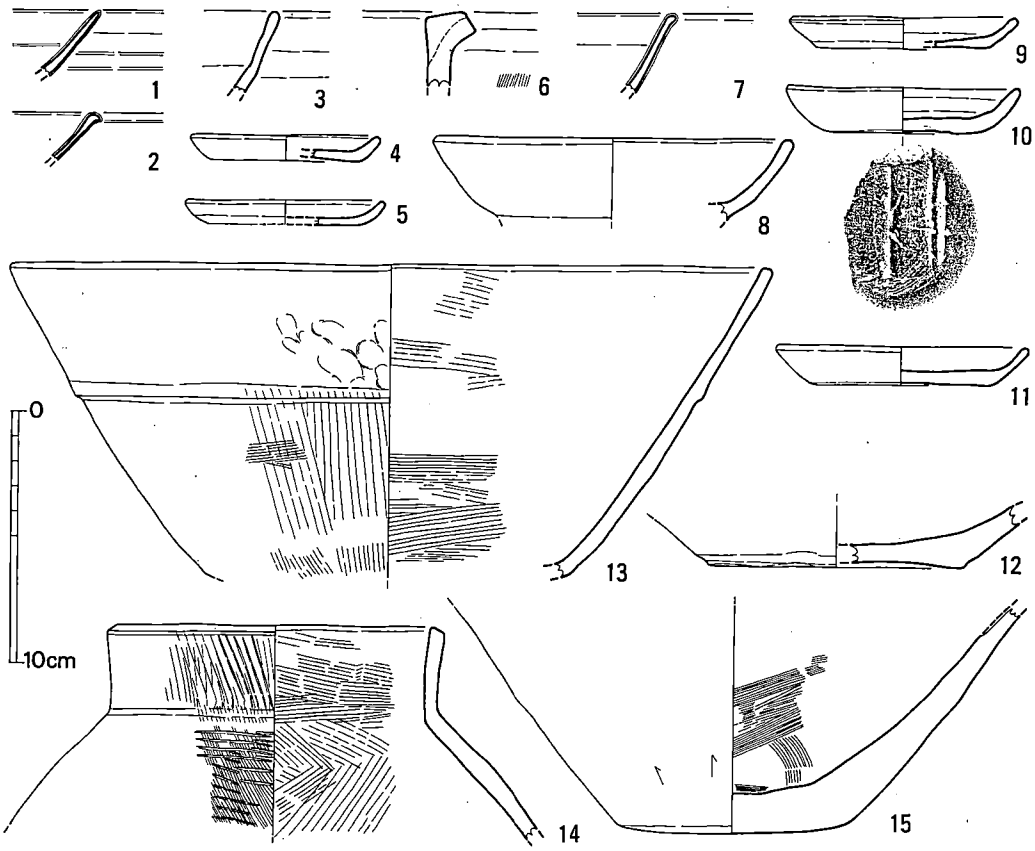
白磁碗（2）　口縁端部が短く外反する口縁部破片で、淡黄白色の胎土に白色の釉がかかる。白磁碗Ｖ類であろう。

土師器杯（3）　底部を欠くが、内外面ともにヨコナデ調整される杯の口縁部破片である。

土師器小皿（4・5）　器面は風化磨滅するが、復原口径7.6cmと8.0cm、器高1.0cmの大きさの小皿で、細砂粒を殆ど含まない精良な胎土で、黄橙色に焼成されている。

土師器鍋（6）　口縁部が肥厚して短く外反する口縁部破片で、口縁端部上面は平らに整えられる。外面の体部側にハケ目がみられる。

このほかに瓦器椀の胴部破片も出土したが、図示しえない。土師器小皿の法量からは14世紀



第34図　3～5・7号土坑出土土器実測図（1/3）

以降らしく、青磁碗の特徴もやや時期的に下降する可能性があり、14世紀代に考えておきたい。

4号土坑（第33図）

調査区北西部のG21区に発見された。3号墳周溝範囲内にあり、土壙群の北側に位置する。検出面で一辺2.1m前後の不整方形を呈する土坑で、深さ25cm程に残る。柱穴状ピットや攪乱穴で乱れるが、やや東側が低めながら平坦な床面は1.5×1.4m程の広さを測る。坑内の堆積土は炭や灰を含まない暗灰茶褐色土だが、一部に緑泥片岩の塊石などがみられ、土壙墓群に近い位置にあることから、土壙墓の可能性もあろう。

出土土器（図版18、第34図）

白磁碗（7）　端部が短く外反し、内面に沈線が1条巡る口縁部破片で、白磁碗V類であろう。

土師器杯（8）　底部を欠くが、復原口径14.4cm、器高3.5cm前後の大きさの杯で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。

土師器小皿（9～11）　口径9.0～10.0cm、器高1.2～1.8cmの大きさの小皿で、外底面に糸切り痕があり、10には板目圧痕も付く。

陶器鉢（12）　底部破片で、復原底径10.2cmの大きさ。外底面がやや凹むが、体部へは直線的に開き、内底面は緩やかに彎曲する。胎土に砂粒を含み、褐色に焼成される。

ほかにも、白磁皿片が出土したが、小破片のため図示しえない。土師器杯と小皿の法量などは、大宰府編年での12世紀後半頃に相当するが、陶器鉢は若干時期が下降するかも知れない。

5号土坑（第33図）

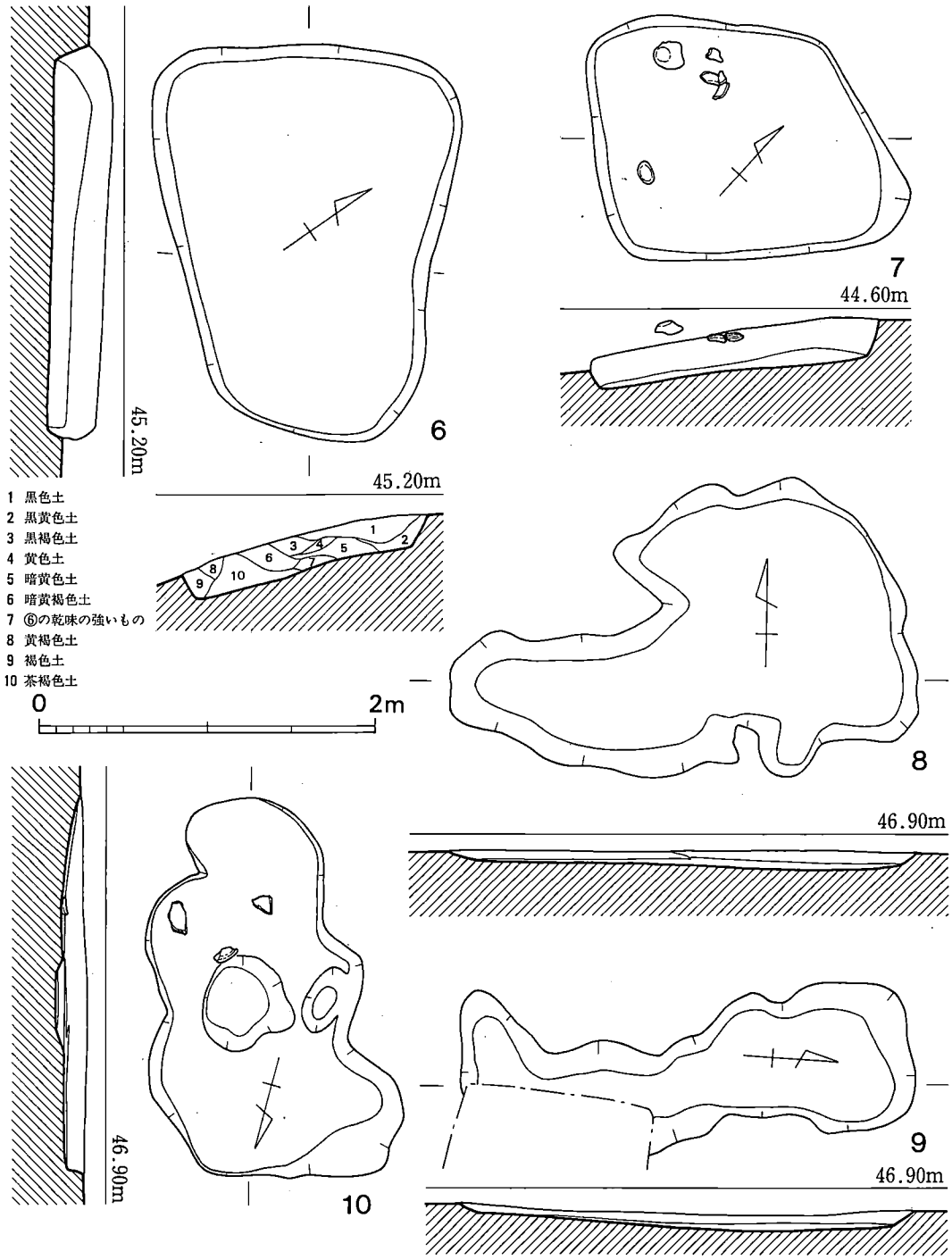
調査区北西部のG21区に発見された。4号土坑の南側に近接し、土壙群の北側に位置する。検出面で長径1.6m、短径1.1m前後の楕円形を呈する土坑だが、西側半分は深さ10cm前後、東側半分は深さ20cm強に残る。南端は塊石を含む柱穴状ピットになっている。坑内の堆積土は炭や灰を含まない暗灰茶褐色土だが、一部に石臼片がみられ、土壙墓群に近い位置にあることから、土壙墓の可能性もあろう。

出土土器（図版18、第34図）

土師質鉢（13）底部を欠き、復原口径30.4cm、器高13.0cm程の大きさ。体部は直線的に開き、口縁部下に凸帯状の段をもつ。内外面ともにハケ目調整されるが、口縁部外面は指頭圧痕の残るヨコナデで調整される。細砂粒・角閃石・雲母を胎土に含み、黄褐色ないし茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

6号土坑（第35図）

調査区中央部のG9区に発見された。6号墳主体部の上部に位置する。検出面で長さ2.3m、



第35図　6～10号土坑実測図（1/40）

幅1.8m前後の不整長方形を呈する土坑だが、深さ20cm前後に残る。

出土土器

縄文晩期の浅鉢片、糸切り底の土師器杯、内面をヘラ削りされる器壁の厚い土師器甕片などが出土した。土師器はいずれも小破片のため図示しえない。

7号土坑（第35図）

調査区中央部のG10区に発見された。6号墳主体部の西側に位置する。検出面で長さ1.8m、幅1.4m前後の不整長方形を呈する土坑だが、深さ25cm前後に残る。

出土土器（図版　、第34図）

壺（14）　復原口径13.5cmの大きさの、直口縁の壺で、体部へは丸く膨らむ。肩部外面に叩き目が残るが、内外面ともにハケ目調整される。

底部（15）　外底面がレンズ状に膨らみ、体部へ直線的に開く底部破片で、壺であろうか。外面はヘラ削りの後にナデられ、内面はハケ目調整される。

このほか、甕の胴部破片も出土したが図示しえない。これらの土器は弥生後期後半頃に含まれる資料である。

8号土坑（第35図）

調査区東部のD3区とD4区の境に発見された。検出面で長さ2.8m、幅1.6m前後の瓢形に近い不整形な土坑で、上部を削平されて深さ10cm弱にしか残らない。

出土土器

土師質鍋片、内面ヘラ削りで、外面ナデ調整の甕胴部破片などが出土したが、小破片のため図示しえない。

9号土坑（第35図）

調査区東部のE3区とE4区の境に発見された。8号土坑の南側に溝18を挟んで位置する。検出面で長さ2.2m、幅1.2m前後の不整楕円形を呈する土坑で、上部を削平されて深さ10cm前後しか残らない。

出土土器

土師器片、埴輪片が出土した。

10号土坑（第35図）

調査区東部のE3区にあり、9号土坑の東側に位置する。一部掘れない部分もあったが、検出面で長さ2.7m、幅0.7m前後の細長く不整形な土坑で、上部を削平されて深さは10cmも残ら

ない。

出土土器

埴輪片が出土した。

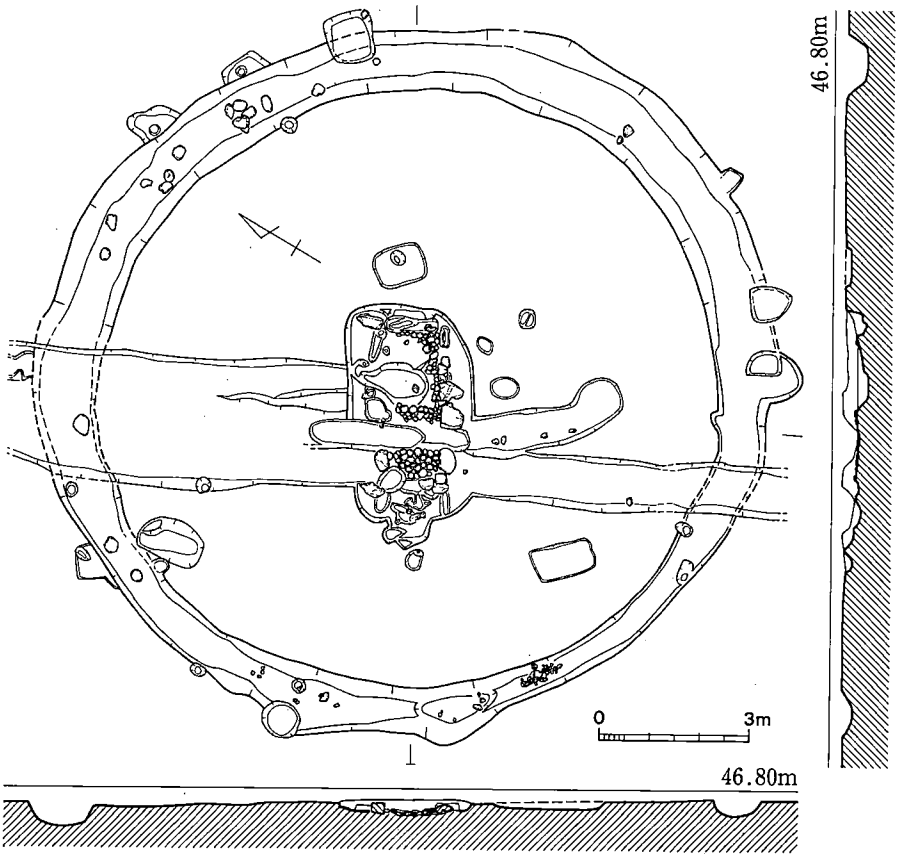
5．古　墳

1号墳

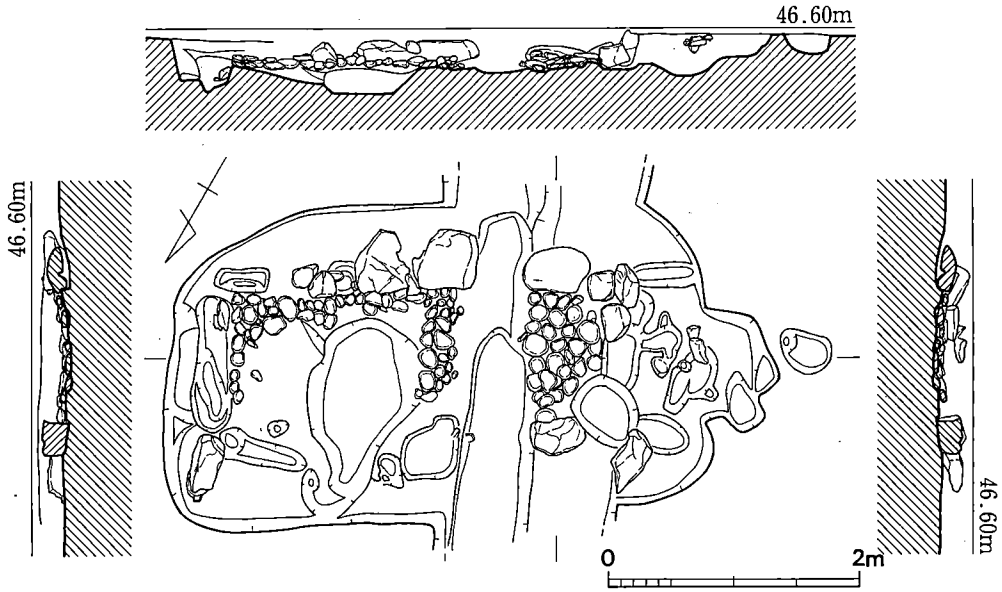
調査区西端部で発見された。標高46.6m位にあり、5号住居跡と2号建物跡と周溝の一部が重複する。

墳丘・周溝（図版19-2、第36図）

上部を削平されているため墳丘は既に残っていないが、周溝は完全に一周する状態に残されている。周溝外側の直径は約15mを測り、南西側では幅が狭く上面での幅は0.8m～1.4m、深さ



第36図　1号墳実測図（1/150）



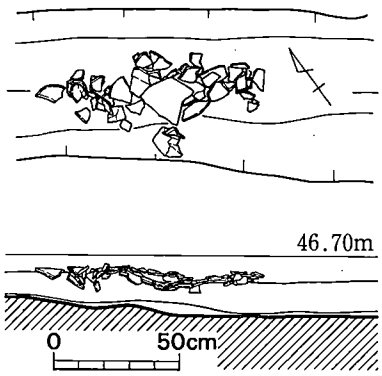
第37図　1号墳石室実測図（1/60）

は25～40cm程に残る。U字形断面の溝内には、暗灰茶褐色土・暗茶褐色土・黒色土などが堆積している。周溝内側の直径は13m前後を測る。

主体部（図版20-1･2、第37図）

7号～8号溝で削られるが周溝に囲まれた内側の中央に、長さ4.9m、幅2.5mの隅丸長方形に近い平面形の掘方があり、掘方内に築かれた竪穴系横口式石室が主体部である。

石室は大部分の石材が抜き去られていて、奥壁の抜き痕と玄門の石の位置、幾らか石材の残る右側壁と、敷石や左側壁基底部の抜き痕などから、玄室内の規模は長さ3.0m、幅1.0～1.1mと判断出来る。主軸方向はN59°40′Eを向き南西側に開口する。側壁は基底部から平積みされていて、高さ20cm程度しか残らない。奥壁は1枚のやや扁平な石が立てて据えられていたらしく、抜き痕の長さ110cm、幅25cm、深さ25cmを測る。玄門は左右とも1枚の石が立てて据えられていたようで、空間の幅は0.8m弱であろう。羨道部は短く、羨道床面は前面側に傾斜して立ち上がる。壁体に使用される石材は一部安山岩質の川原石もあるが、緑泥片岩が殆どである。これに対し床面の敷石には安山岩質の川原石が多用されている。



第38図　1号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）

遺物出土状況（図版20-3･4、第38図）

主体部の石室内では、敷石が辛うじて攪乱から免れた

右側壁に近接した部分で、先端を羨道側に向けた鉄鏃１点が出土した。また羨道部からは須恵器杯蓋片・土師器甕片が床面から幾分浮いた状態で出土した。周溝内では、南西部の溝底から少し浮いた状態で須恵器甕片がまとまって出土し、土師器椀も俯せた状態で出土した。

出土土器（図版26、第39・40図）

須恵器杯蓋（１）　口径14.0cm、器高4.6cmの大きさの杯蓋で、外天井が回転ヘラ削りされる天井部から、凸帯状の段を介して口縁部が直立気味に伸びて、口縁端部は短く外反気味になる。胎土に砂粒を殆ど含まず、黄味を帯びた灰色に焼成されている。

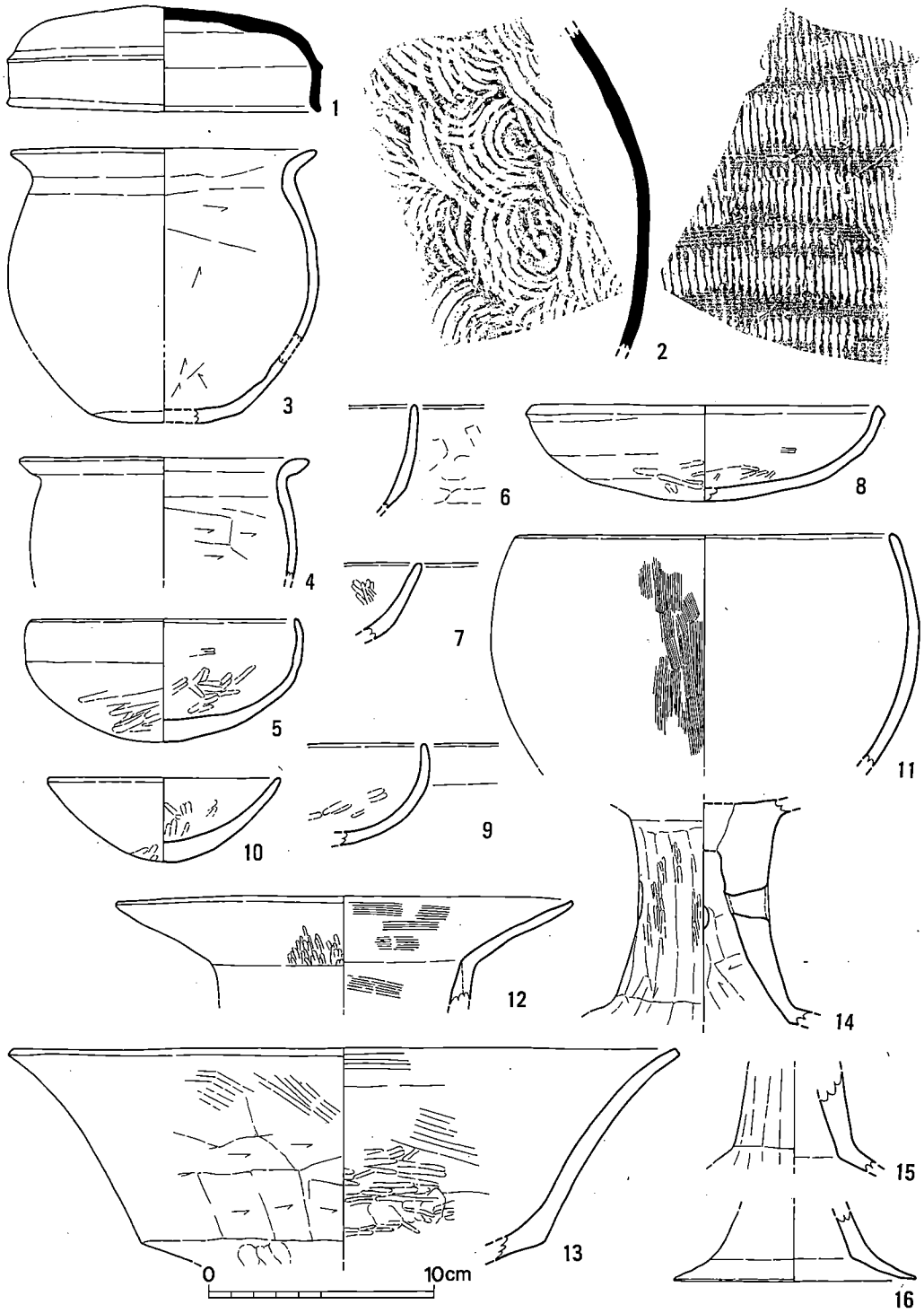
須恵器甕（２・17）　同一個体らしいがうまく接合しない。17は復原口径19.8cm、器高49.7cm、胴最大径46.4cmの大きさ。倒卵形の体部をもち、頸部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反して開き端部はＬ字状に折れ曲がって垂れる。体部外面は前面に平行叩きが施されて、胴部中程ではカキ目調整が帯状に施されている。内面は肩部と底部付近は同心円当て具痕が、胴部には平行叩き痕がみられ、全体に軽くナデ消した痕跡がみられる。胎土に若干砂粒を含むが、灰色に堅く焼成されている。

土師器甕（３・４）　いずれも口径と胴最大径が同規模の小形甕で、口縁部は短めに外反する。体部外面はナデ調整、内面は頸部下までヘラ削りされている。３は口径13.7cm、復原器高12cm強、胴最大径13.8cmの大きさ。口縁部は殆ど肥厚しない。４は口径12.9cm、胴最大径11.9cmの大きさ。口縁部はやや肥厚する。

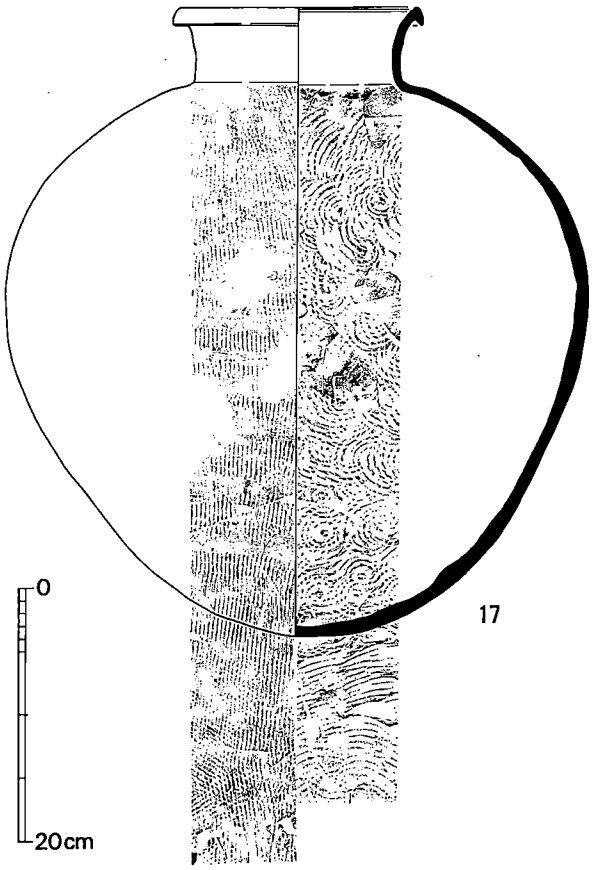
土師器椀（５～10）　5・6・9は口縁部が内彎して立ち上がる椀。５では口径12.0cm、器高5.4cm、胴最大径12.4cmの大きさ。内外面ともにヘラミガキ調整されている。９は５とほぼ同様の特徴を有すが、６は外底部がヘラ削りで調整されている。７・８は内彎気味に立ち上がる口縁部が端部で外反気味になるもの。８では復原口径16.0cm、器高4.2cmの大きさ。内外面ともヘラミガキ調整され、口縁部はヨコナデ調整される。10は底部から口縁部に向かって直線的に開く、円錐形に近い器形の椀。口径10.4cm、器高3.7cmの大きさ。内外面ともにヘラミガキの痕跡がみられる。いずれも細砂粒・赤褐色粒などを僅かに含むが精良な胎土で、橙褐色などに焼成されている。

土師器鉢（11）　復原口径17.0cm、胴最大径19.0cm、残存器高10.2cmの大きさで、胴部は丸みをもち、口縁部は内彎する。外面は縦方向にハケ目調整、内面はナデ調整されている。

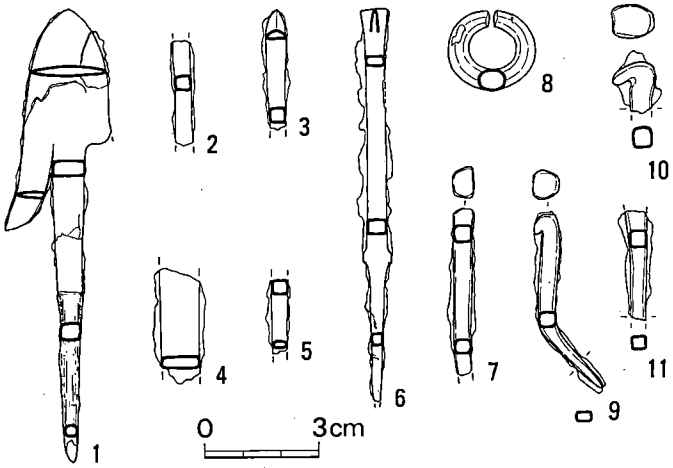
土師器高杯（12～16）　12は杯部が複合口縁状に段をもつタイプの高杯で、復原口径20.4cmの大きさ。外面にヘラミガキ痕、内面にハケ目調整痕がみられる。13は杯底部から屈折した口縁部が長く外反して開くもので、復原口径は約30cm。口縁部外面は下半部がヘラ削り、上半部はハケ目の後ナデ調整され、内面はハケ目とヘラミガキで調整される。14～16は柱状部および脚裾部の破片で、柱状部外面はヘラミガキされ、14では内面がヘラ削り調整され、柱状部中程に穿孔が４穴みられる。



第39図　1号墳出土土器実測図1 (1/3)



第40図　1号墳出土土器実測図2（1/6）



第41図　1～9号墳出土金属製品実測図（1/2）

鉄製品（図版31-1、第41図）

鉄　鏃（1・2）　1は両丸造り広根式の逆棘を有する鉄鏃。全長12.0cm、身部の幅2.3cm、厚み0.3cm。先端から逆棘端までの長さ5.8cm、被箆部は長さ3.8cmある。基部の木質が残る部分の長さ4.5cm、幅・厚み0.5cmを測る。逆棘が両側にあるタイプの鏃だが、片方はみられない。折損した可能性もあるが、折損？面は明瞭ではない。また棘があった場合、左右対称でなくやや偏った形状になる。

2は両端を欠く破片だが、0.4cm角の棒状を呈していて、長さ2.8cm分が残る。鏃の茎部であろう。

2号墳

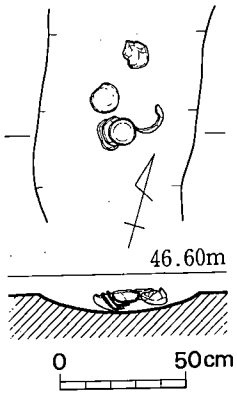
調査区西南部で発見された。標高46.5m位にあり、1号墳の東南側に近接する。1号住居跡と1・2号竪穴、10号溝などと周溝の一部が重複して、これらから切り込まれている。周溝に囲まれた範囲内では削平が激しく主体部は発見出来なかった。

周　溝（図版21-1、第42図）

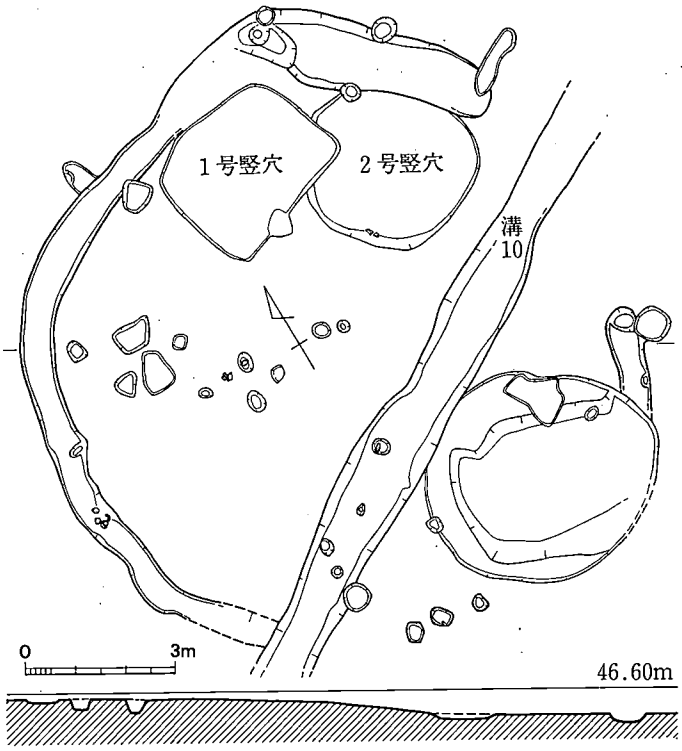
上部を削平されているため墳丘は既に残らず、周溝が残るのみだが、周溝も後世の遺構や削平で南側半分

を失う。

周溝外側の直径は12.4mを測り、北東側は幅広で深さも幾分残りが良いものの南西側では幅が狭い。周溝の上面幅は0.4m～1.4m、深



第43図
2号墳周溝遺物出土状況
実測図（1/30）



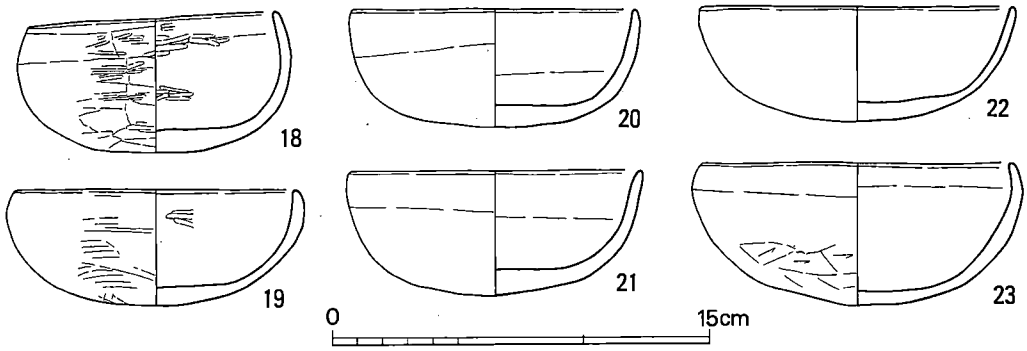
第42図　2号墳実測図（1/150）

さは5～30cm程に残り、U字形断面の溝内には、暗茶褐色土・黒色土などが堆積していて、周溝内側の直径は10.7m～11.0mを測る。

遺物出土状況（図版21-2、第43図）

西側の周溝底にほぼ接した状態で土師器椀がまとまって6点出土した。

出土土器（図版26･27、第44図）



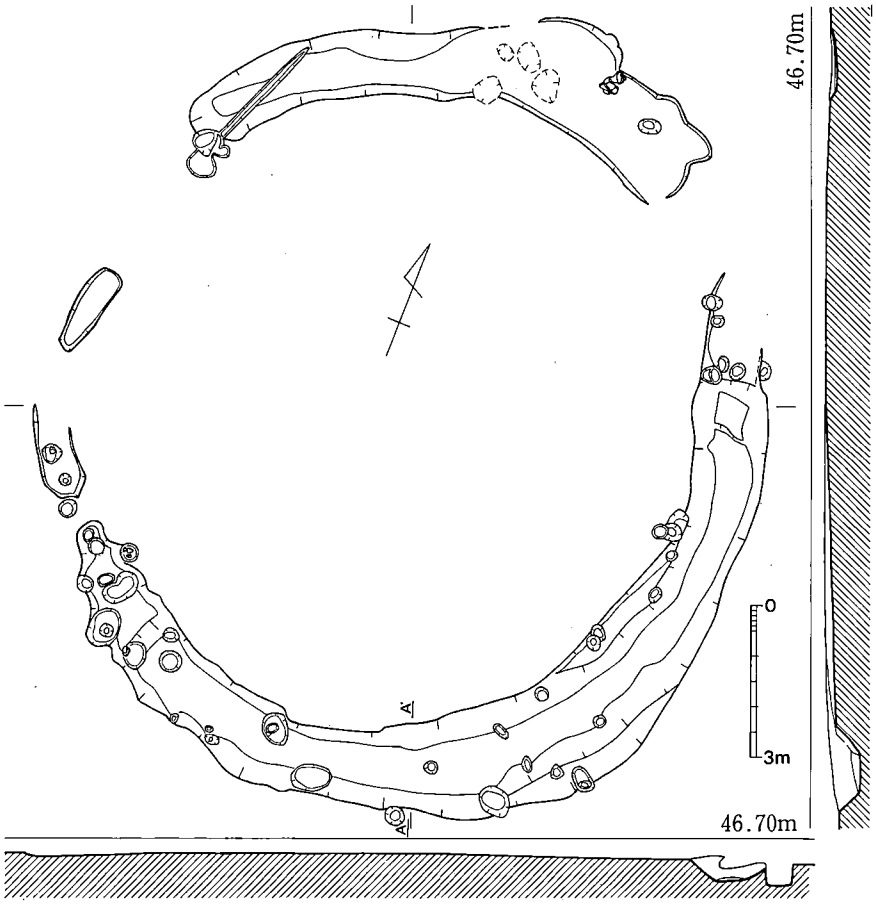
第44図　2号墳出土土器実測図（1/3）

土師器椀（18～23）いずれも細砂粒・赤褐色粒などを僅かに含むが精良な胎土で、橙褐色などの色調に焼成されている。18・19・23は口縁部が内彎して立ち上がる椀。胴最大径と器高は11.0cm：5.3cm、12.0cm：4.5cm、13.0cm：5.6cmを測る。前二者では内外面をヘラミガキ調整しているが、後者は外底面をヘラ削りする他はヨコナデ調整する。

20～22は体部が内彎気味だが、口縁部が直線的に立ち上がる椀。口径と器高は11.6cm：4.7cm、11.8cm：4.9cm、12.6cm：4.6cmを測る。器面は磨滅して詳らかでないが、ヘラミガキないしヘラ削りらしい痕跡が一部にみられる。

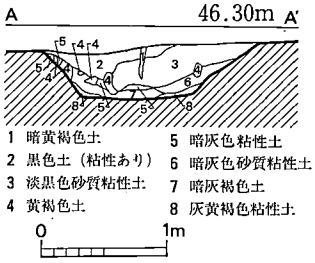
土師器椀の特徴は、古墳時代前期の4世紀代に属するもので、他の出土遺物が無いため明確とは言えないが、4世紀の古墳の可能性が高い。

3号墳



第45図　3号墳実測図（1/150）

調査区西部で発見された。標高46.4m位にあり、2号墳の北東方に位置する。10～12・16・18号土壙と周溝が重複して、これらから切り込まれているほか、葡萄畑の肥料溝などの攪乱も受けている。周溝に囲まれた部分では削平が激しく主体部は発見出来なかった。



第46図　3号墳周溝断面土層実測図（1/60）

墳丘・周溝（図版21-3、第45図）

上部を削平されているため墳丘は既に残らず、周溝が残るのみだが、周溝も北東部や西部で削平が激しいのか消失する部分がある。周溝外側の直径は15.4mを測り、西側では幅が狭く浅いが、東側で幅が広く深さも幾分残りが良い状態である。周溝の上面での幅は0.5m～2.3m、深さは50～60cm程に残る。U字形断面の溝内には、暗灰茶褐色土・暗茶褐色土・黒色土などが堆積していて、周溝内側の直径は13.0m～13.2mを測る。

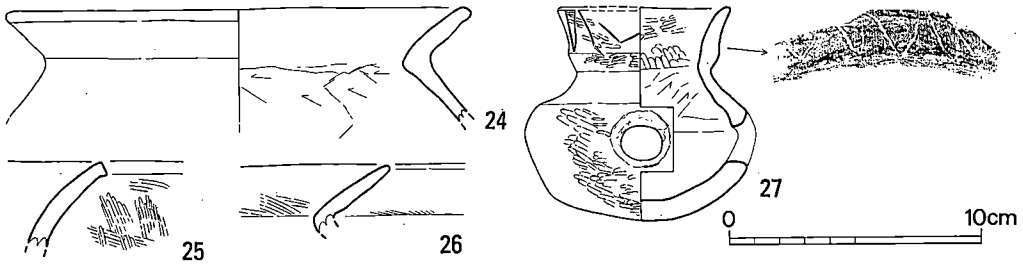
遺物出土状況（図版21-4）

北東側の周溝底から僅かに浮いた状態で土師器瓶が出土し、土師器甕破片は周溝の南半部と東側から出土している。

出土土器（図版27、第47図）

土師器甕（24～26）　いずれも口縁部破片である。24は復原口径18.6cmの大きさ。直線的に開く口縁端部は丸みをもち、肩部外面はヨコナデ調整、内面は頸部までヘラ削りされている。25・26は胴部側の様子が分からないが、口唇部に面をもつ25は口縁部外面にハケ目とヘラミガキ状の痕、口唇部が丸い26は口縁部内外面にハケ目の痕がみられる。

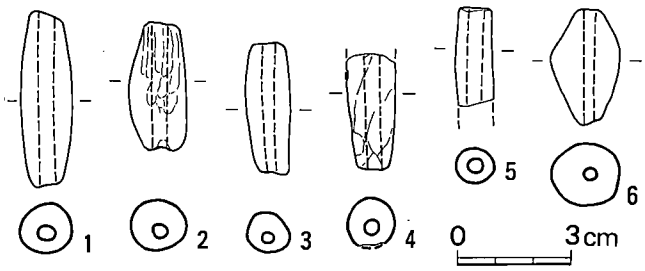
土師器（27）　口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形に残る。口径7.2cm、胴最大径9.2cm、器高8.5cmの大きさ。体部は扁球形で、括れた頸部から複合口縁状に立ち上がる口縁部は緩やかに外反する。体部の最大径の部分に、外側が僅かに上に傾く円孔が穿孔される。外面は全体にヘラミガキで調整されて、口縁部にヘラ先による山形文様が描かれる。内面は口縁部がヘラミガキされるが、肩部にヘラ削り状の痕跡があり、底部側はナデ調整されている。細砂粒・雲母粒を



第47図　3号墳出土土器実測図（1/3）

胎土に含み、黄茶褐色に焼成されている。

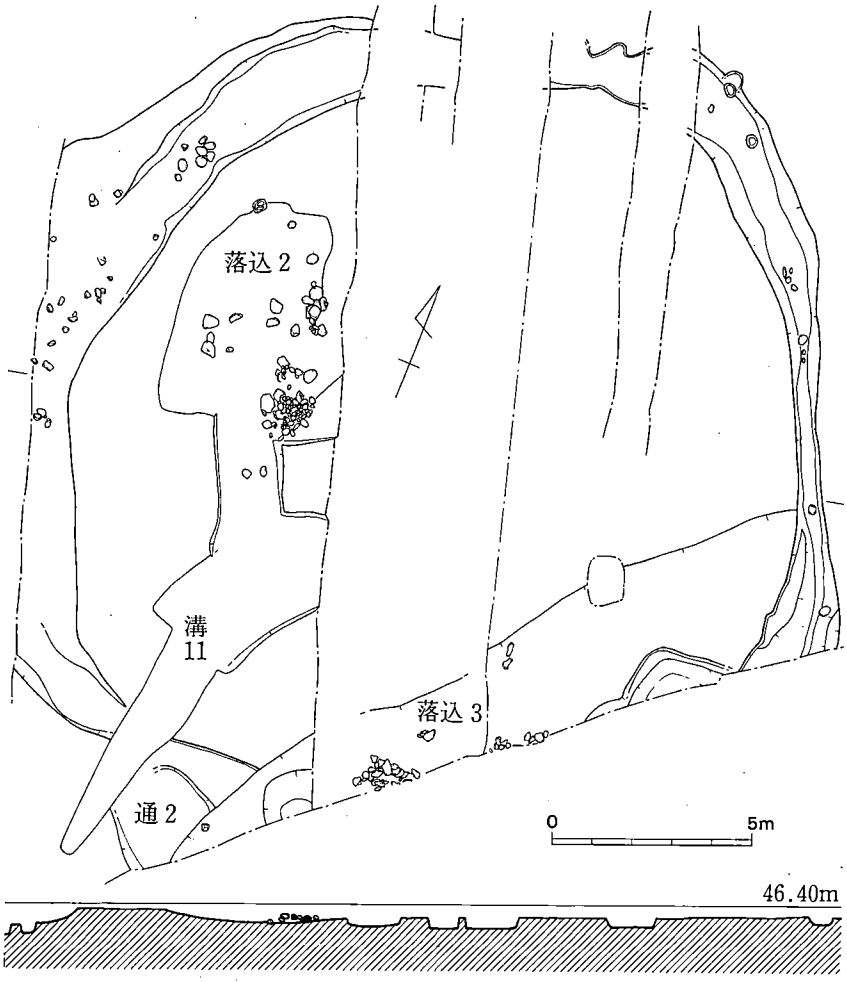
土師器甕や甑の特徴は、古墳時代前期の庄内式の新段階あるいは布留式古段階に含まれるもので、4世紀の古墳である可能性が高い。



第48図　3・5号墳出土土製品実測図（1/2）

土製品（図版31-2、第48図）

管状土錘（1～4）　いずれも土壙墓群に近い南東部の周溝内から出土した。棒状の芯に精



第49図　4号墳実測図（1/150）

良な胎土を巻き付けて中膨らみの筒形に整形したものでナデ調整されるが、58にヘラ削りの痕跡がみられる。1は長さ4.7cm、外径1.4cm、孔径0.4cm、重量7.2gを測る。2は長さ3.4cm、外径1.5cm、孔径0.4cm、重量6.1gを測る。3は長さ3.5cm、外径1.2cm、孔径0.3cm、重量3.7gを測る。4は残存長3.1cm、外径1.3cm、孔径0.4cm、重量4.7gを測る。

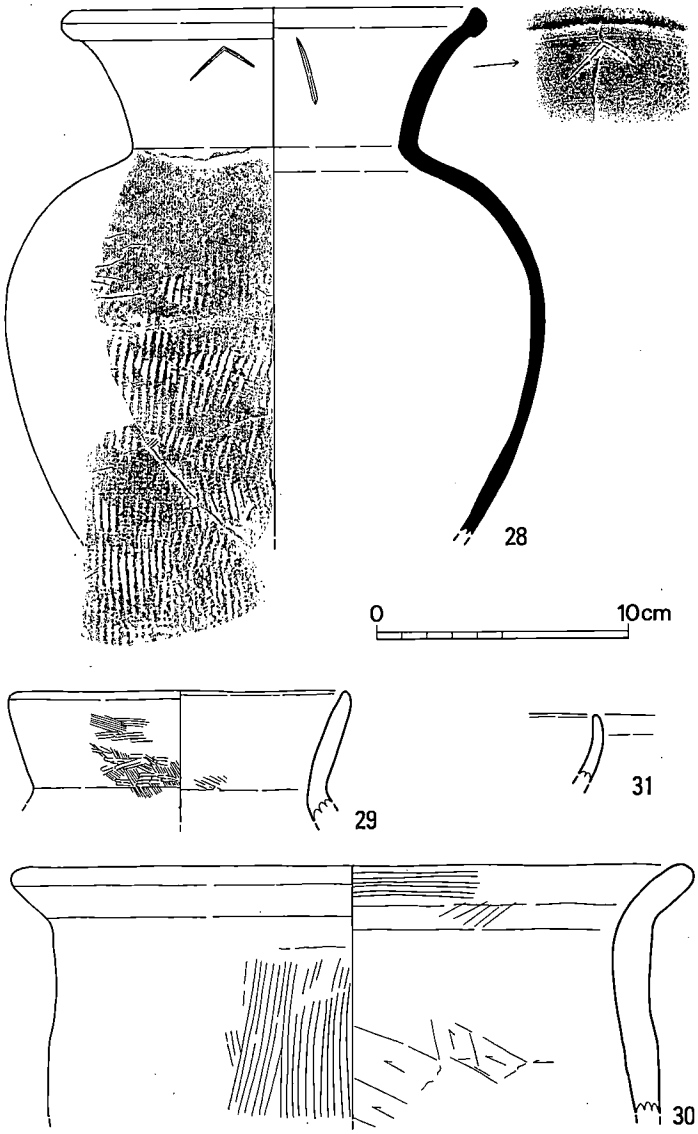
4号墳

調査区中央部の北側で発見された。標高46.4m位にあり、3号墳の東方に位置する。3号住居跡、11号溝、2号通路状遺構、2・3号落込みなどと周溝が重複して、3号住居跡よりは後出するが、他の遺構から切り込まれているほか、葡萄畑の肥料溝などの攪乱も受けている。周溝に囲まれた部分では削平や攪乱が激しく主体部は発見出来なかった。

周　溝（図版21-6、第49図）

上部を削平されているため墳丘は既に残らず、周溝が残るのみだが、周溝の南側は調査区域内を横切る道路のための非調査区に続き、分からない。

周溝外側の直径は17.0m前後を測り、東側では幅が狭く浅いが、西側で幅が広く深さも幾分残りが良い状態である。周溝の上面での幅は0.4m～2.3m、深さは10



第50図　4号墳出土土器実測図（1/3）

～40cm程に残る。U字形断面の溝内には、暗灰茶褐色土・暗茶褐色土・黒色土などが堆積していて、周溝内側の直径は15.0mを測る。南西部の周溝内から若干土器片が出土した。

出土土器（図版27、第50図）

須恵器甕（28）　復原口径17.0cm、胴最大径21.6cm、残存器高20.7cmの大きさの甕で、倒卵形の体部に緩やかに外反する口縁部が付く。口縁端部は玉縁状に肥厚して内面側にやや凹む。胴部外面に平行叩き目、内面に当て具痕をナデ消した痕跡がみられる。また回転ナデ調整される口縁部外面に逆V字形、内面に単直線のヘラ記号が刻まれている。なお肩部外面と内面の下部に自然釉が被る。

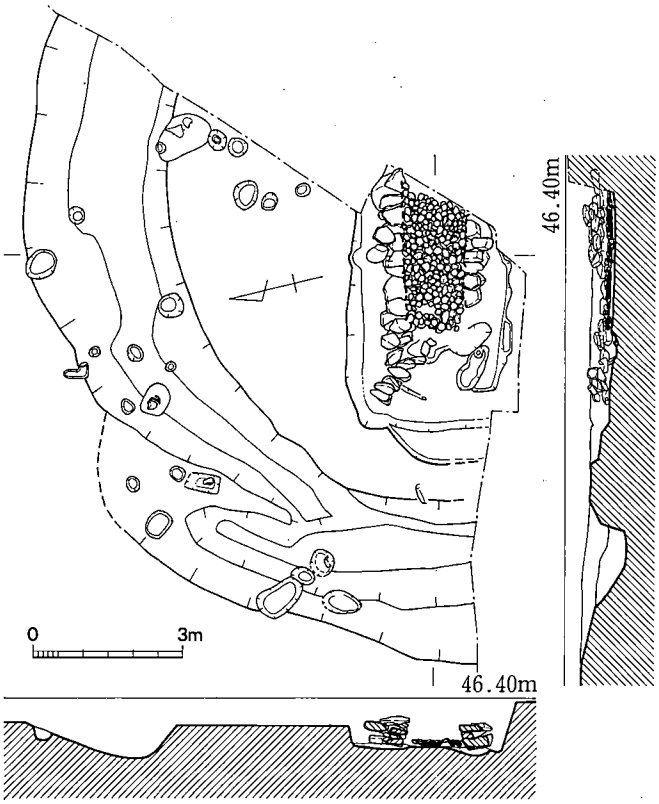
土師器甕（29・30）　29は口縁部が僅かに外反する小形甕で、復原口径13.7cmの大きさ。口縁部の内外面ともにハケ目調整され、外面にヘラミガキ状の痕跡がみられる。30は口縁部が短めに外反し、胴部があまり膨らまない甕で、復原口径27.2cmの大きさ。胴部外面と口縁部内面が粗いハケ目で調整され、胴部内面はヘラ削りされている。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母粒を含み橙褐色に焼成されている。

土師器椀（31）　口縁部が内彎して立ち上がる椀の破片で、ヘラミガキ調整される。精良な胎土を用いて黄褐色に焼成されているが、漆状の黒色塗膜がみられる。

これらの土器類は5世紀代に属するものであり、重複する3号住居跡が4世紀代属することからしても、この古墳の時期を5世紀代にみてよいだろう。

鉄製品（図版31-1、第41図）

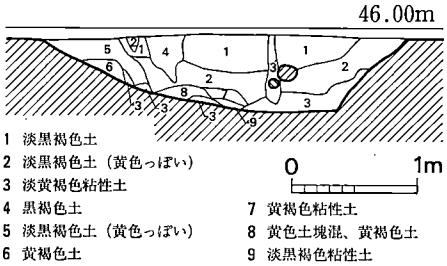
鉄　鉈（3）　西側の周溝内から出土した。基部側を失うが、軸部は0.4cm角の棒状で、先端部は薄く浅いU字形の断面形をなして尖る。残存長3.2cmを測る。



第51図　5号墳実測図（1/150）

5号墳

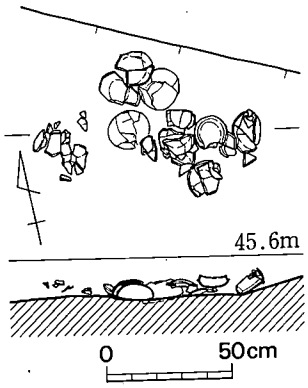
調査区西寄りで発見された。標高46.2m位にあり、2号墳の南東側に位置する。南側半分は調査区域外、東側は道路保全の非調査部分に含まれて発掘していない。



第52図　5号墳周溝断面土層実測図（1/60）

墳丘・周溝（図版22-1、第51・52図）

上部を削平されているため墳丘は既に残らず、周溝が残るのみ。周溝外側の径は16m前後になろう。周溝内には淡黒褐色土などが堆積していて、塊石も幾らか含まれる。周溝北部などの上縁の幅は1.4～2.9m、深さは70cm程度に残る。この部分で復原すると周溝内側での推定直径は12m前後になろう。北側の周溝底で須恵器杯蓋・身、土師器椀などがまとまって出土した。土師器椀は俯せになったものが多く、入れ子になった例もある。（図版22-4、第53図）。



第53図　5号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）

主体部（図版22-2・3、第54図）

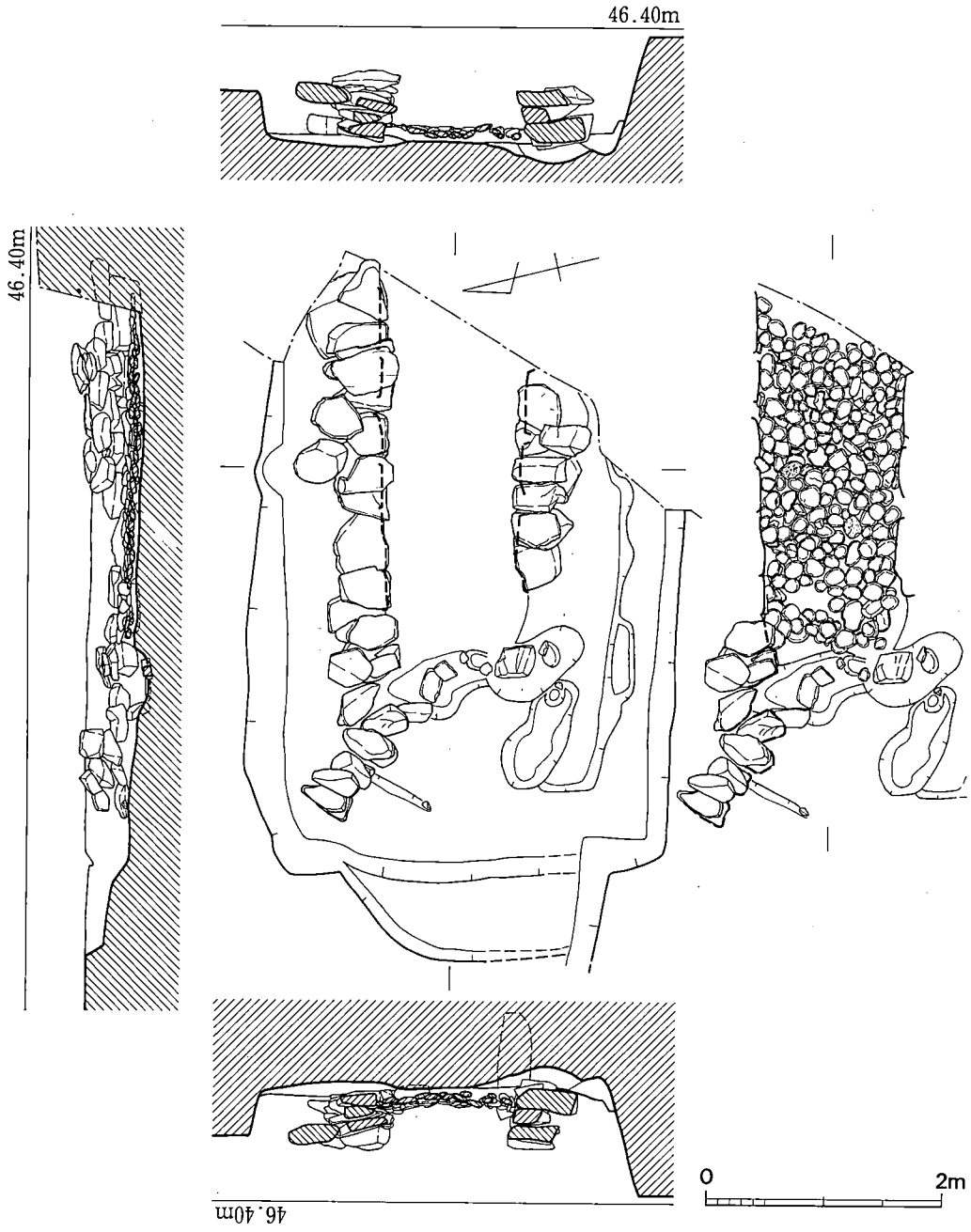
東側が非調査区部分になるため、長さは詳らかでないが6.0m以上、幅3.2m、深さ約50cmの掘方内に構築された竪穴系横口式石室が主体部である。壁体の上部は既に取り去られていが、掘方内部にかなりの転落石がみられた。転落石を除去したところ、石室の奥壁部分は分からないが、主に緑泥片岩の扁平石を平積みした側壁と、安山岩質の川原石を敷き詰めた床面が確認できた。主軸方向はN76°30′Wを向き西北西に開口する。敷石の範囲は、奥壁側に少し隙間をみるが、長さ3.0m、幅1.1～1.2mを測り、奥壁側が僅かに幅広である。左右の側壁は、基底部から平積みされるが、持ち送り状に内傾していて、3～4段が残る。玄門の石は左側を失うが、右側では長さ60cm、幅25cm、厚さ20cm程の棒状の石を立てて据えていて、その位置からみて、玄門幅は0.8m前後であろう。羨道部は左側のみ長さ1.0m強に石積み列が残る。右側は残らないが、ハ字方に開くようで、前面では幅が1.8m程度になろう。床面は前面側に緩やかに傾斜して昇る。

出土土器（図版27・28、第55～57図）

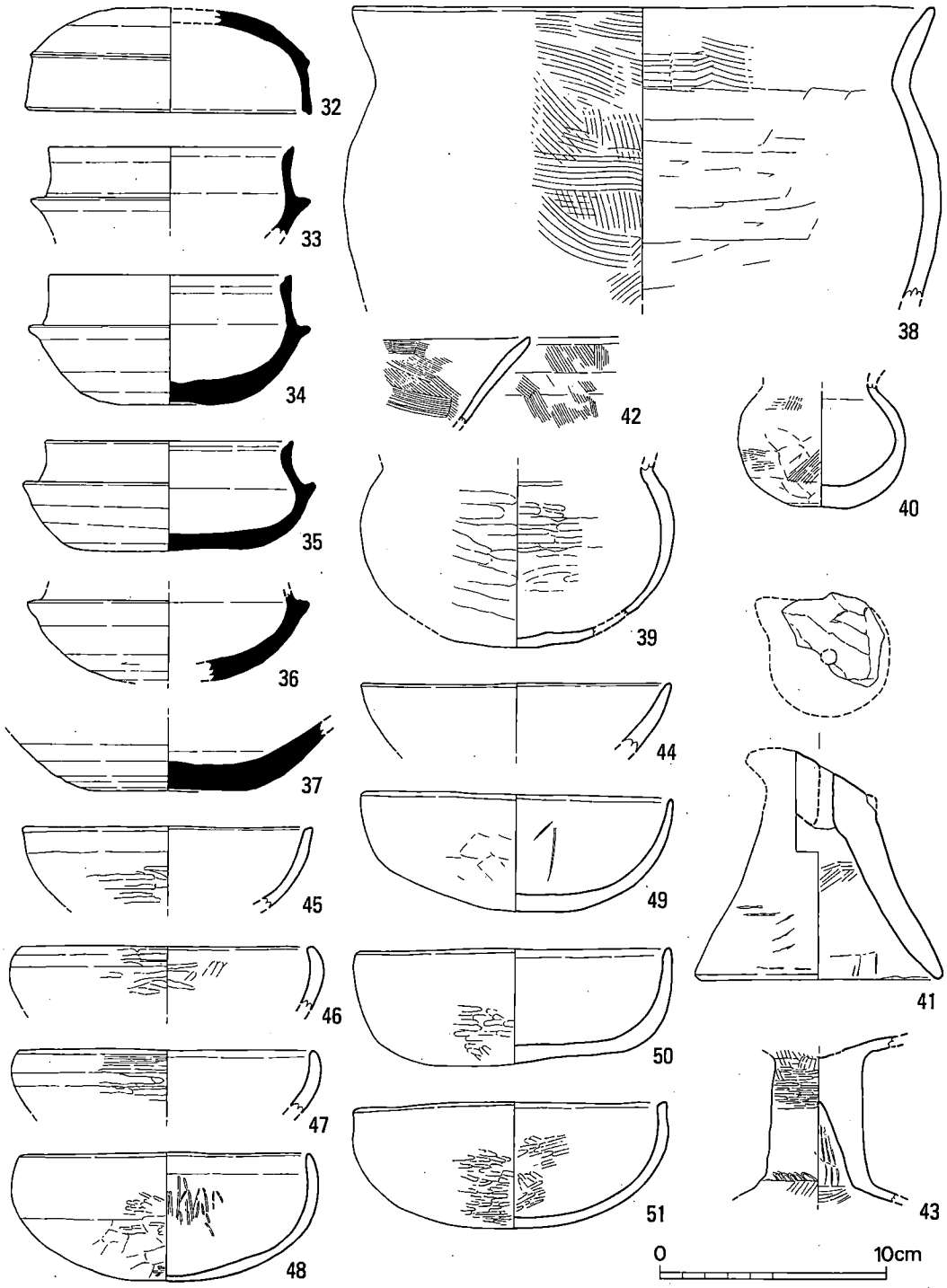
須恵器杯蓋（32）　復原口径12.6cm、器高4.6cmの大きさの杯蓋で、外天井が回転ヘラ削りされる天井部から、凸帯状の段を介して口縁部が直立気味に伸びて、口縁端部は内側に僅かな段をもつ。

須恵器杯身（33～37）　いずれも蓋受けのかえりをもつ杯身で、口縁部の立ち上がりが垂直に近いタイプである。胎土に砂粒をあまり含まず灰色に堅く焼成される。33・34は体部の深い

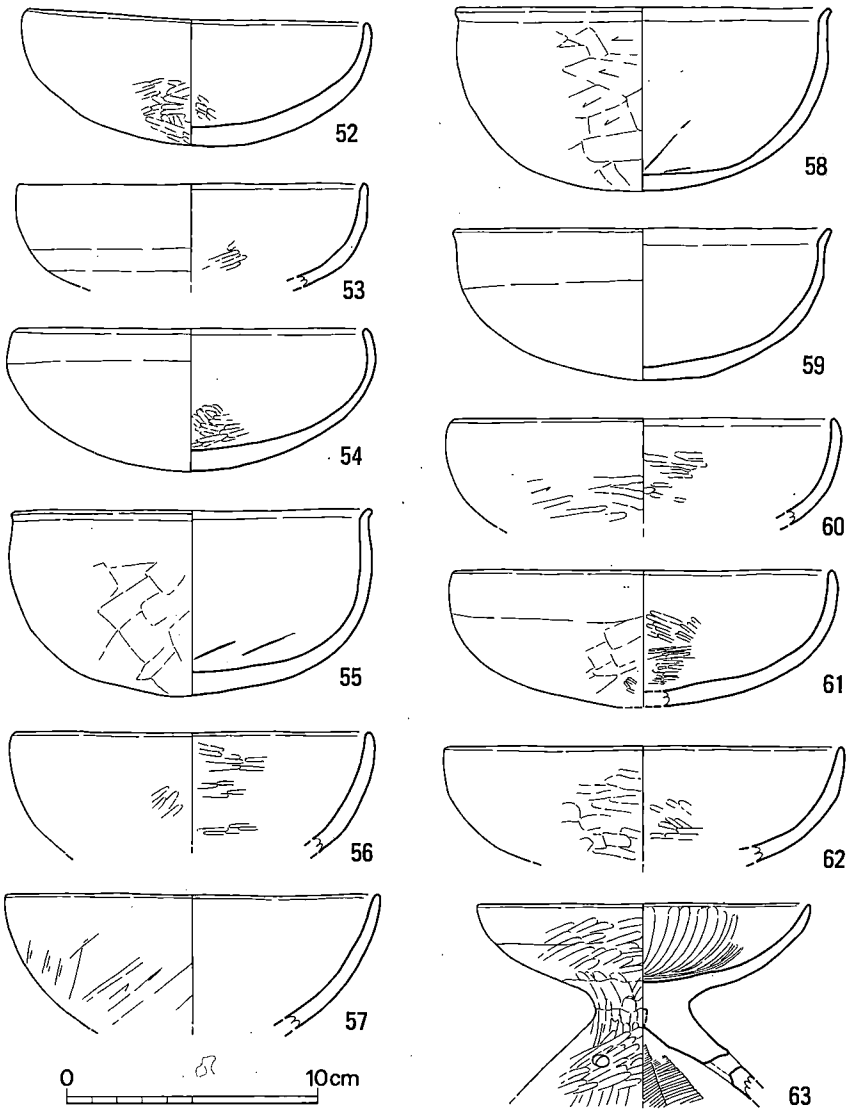
もので、34では口径10.9cm、器高5.7cm、受け部外径12.6cmの大きさ。35は体部が少し浅く、口



第54図　5号墳石室実測図（1/60）



第55図　5号墳出土土器実測図1 (1/3)

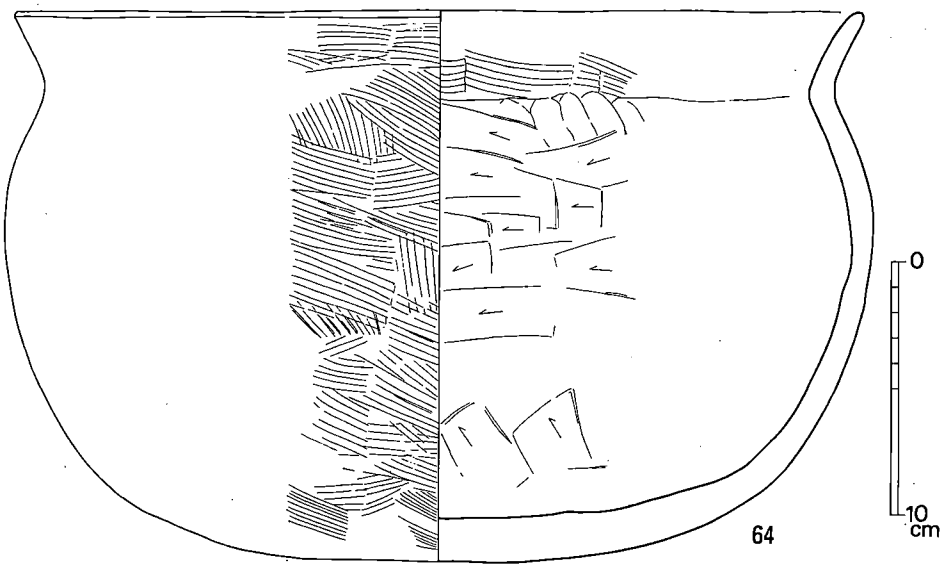


第56図　5号墳出土土器実測図2 (1/3)

縁の立ち上がりは幾分内傾する。口径11.0cm、器高4.9cm、受け部外径13.1cmの大きさ。

土師器甕 (38)　北側の周溝底から出土した復原口径26.0cm、残存器高12.9cmの破片で、口縁部は肥厚せずに緩やかに外反する。外面と口縁部内面はハケ目調整、胴部内面は頸部までヘラ削りされる。砂粒・雲母を胎土に含み、灰黄褐色に焼成されている。

土師器壺 (39)　石室内部の床面より少し浮いて出土した。口縁部を失うが、内外面をヘラミガキ調整する広口壺の体部で、復原胴最大径14.0cm、体部高8.3cmの大きさ。胎土に細砂粒・



第57図　5号墳出土土器実測図3（1/3）

赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されるが、漆の可能性がある黒色塗料が付着している。

土師器小形丸底壺（40）　口縁部を失うが、胴最大径7.4cm、体部高5.4cmの大きさで、体部外面をヘラ削りとハケ目で調整して、ナデ調整が加わっている。

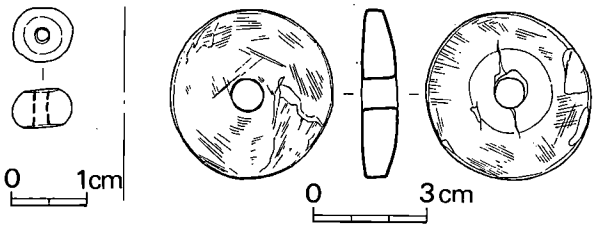
土師器支脚（41）　沓形の支脚だが、突起部分を失う。残存器高11.2cm、裾部径10.0cmの大きさ。外面は叩き目とナデ調整、内面にはナデ調整されるが、絞り痕とハケ目痕が残る。北側の周溝内から出土した。

土師器高杯（42・43・63）　42は杯部破片であろう。内外面共にハケ目調整されている。43はヘラミガキ調整される柱状部破片で、杯部・裾部にはハケ目がみられる。63は浅い椀に似た杯部をのせる高杯で、裾部を失うが、残存器高7.8cm、復原口径13.3cm、杯部高3.8cmの大きさ。円錐形に開く脚裾部には円孔が3ヶ所に穿孔されている。杯部内外面と脚裾部外面はヘラミガキ調整、裾部内面はハケ目調整される。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。前面側の周溝から出土した。

土師器椀（44～62）　いずれも細砂粒・赤褐色粒などを胎土に含むが精良な胎土で、橙褐色・黄橙褐色などの色調に焼成され、47・51・54・56・61などには漆かと思われる黒色の塗膜らしい痕跡がみられる。45～49は口径13.0～14.0cm、器高5.0～6.0cmの大きさ、50～54は口径14.0～15.0cm、器高5.0～6.0cmの大きさ、55～62は口径15.0～16.0cmの大きさで、55・58は器高が7.0cmを越す。44は口縁部がやや直線的に開く鉢に近い器形の椀である。しかし46～49・52～54・60～62などのように口縁部が内彎する例が多い。器面は内外面ともヘラミガキ調整されるが、内面に工具端の痕を残す例もあり、体部の深い例などで外面の下半部をヘラ削りする例

がある。51・55・58・59は口縁端部が短く外半反するもので、55・58は口径と器高の比が2：1程度、51・59は浅めで3：1に近くなる。

土師器鉢（64）北側の周溝底から出土した。復原口径34.0cm、器高21.6cmの大きさで、平底に近く扁球形をなす体部に外反する口縁部が続く。外面と口縁部内面はハケ目調整、胴部内面は頸部までヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み、灰黄褐色に焼成されている。



第58図　5号墳出土玉類・石製品実測図（1/1・1/2）

なお小破片で図示しないが、主体部攪乱坑から須恵器甕らしい口縁部破片も出土している。

これらの土器類はいずれも5世紀に含まれるもので、1号墳同様に主体部が竪穴系横口式石室であり、5世紀にみて問題はないだろう。

玉　類（図版31-2、第58図）

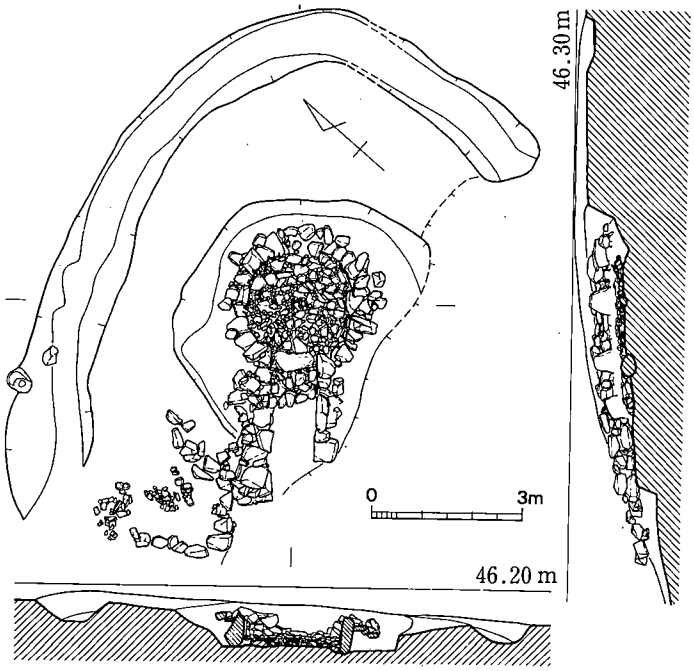
ガラス小玉（1）石室内堆積土から出土した。コバルトブルーの色調を呈する、外径7.0～8.0mm、厚さ5.0mm、孔径2.0mmの大きさのガラス小玉である。

石製品（図版31-2、第58図）

紡錘車（2）　墓道部分の攪乱土から出土した。蛇紋岩に近い滑石製の紡錘車で、外径4.4cm、厚さ1.0cm、孔径0.8cmの大きさ。全面に研磨調整が及び、片面は平らで、一方の面は低い截頭円錐形をなす。

土製品（図版31-2、第48図）

管状土錘（5・6）　前者は北側周溝から出土した。一方の端部を欠くが、筒形の管状土錘で、残存長2.6cm、外径1.0cm、孔径0.4cm、重量2.4gを測る。後者は石室内堆積土から出土した、



第59図　6号墳実測図（1/150）

棗玉形の管状土錘で、長さ3.1cm、外径1.8cm、孔径0.3cm、重量6.5gを測る。

鉄製品（図版31-1、第41図）

不明鉄製品（4）　北側周溝から出土した。両端側を欠くため全体の形状は不明。残存長3.0cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmの扁平な板状をなしている。

6号墳

調査区東寄りで発見された。標高46.0m位にあり、4号墳の東南東側に位置する。南側半分は開墾による斜面で崩れている。南西方向に開口する横穴式石室が主体部である。

墳丘・周溝（図版23-2、第59図）

上部を削平されているため墳丘盛土は既に残らないが、北側の周溝が馬蹄形に残る。前面側の傾斜部分には旧地表上に盛土整形を施している。周溝は、上縁で1.0～1.4m、深さ0.1～0.5mの規模で、丘陵の南側斜面を馬蹄形に削り込んでいる。周溝外側で直径10～12m規模の楕円形に近い平面形をなす。周溝内側と列石からみた墳丘規模は直径8.0m強の大きさになる。

墳丘前面の列石は、主体部左側前面の標高45.4mの高さにあって、部分的には2段残るもののの1段で塊石が並ぶ程度にしか残らない。列石の基底部は旧表土と盛土部分の境目にあたり、削り出しなどを行わずに直接並べた状態である。

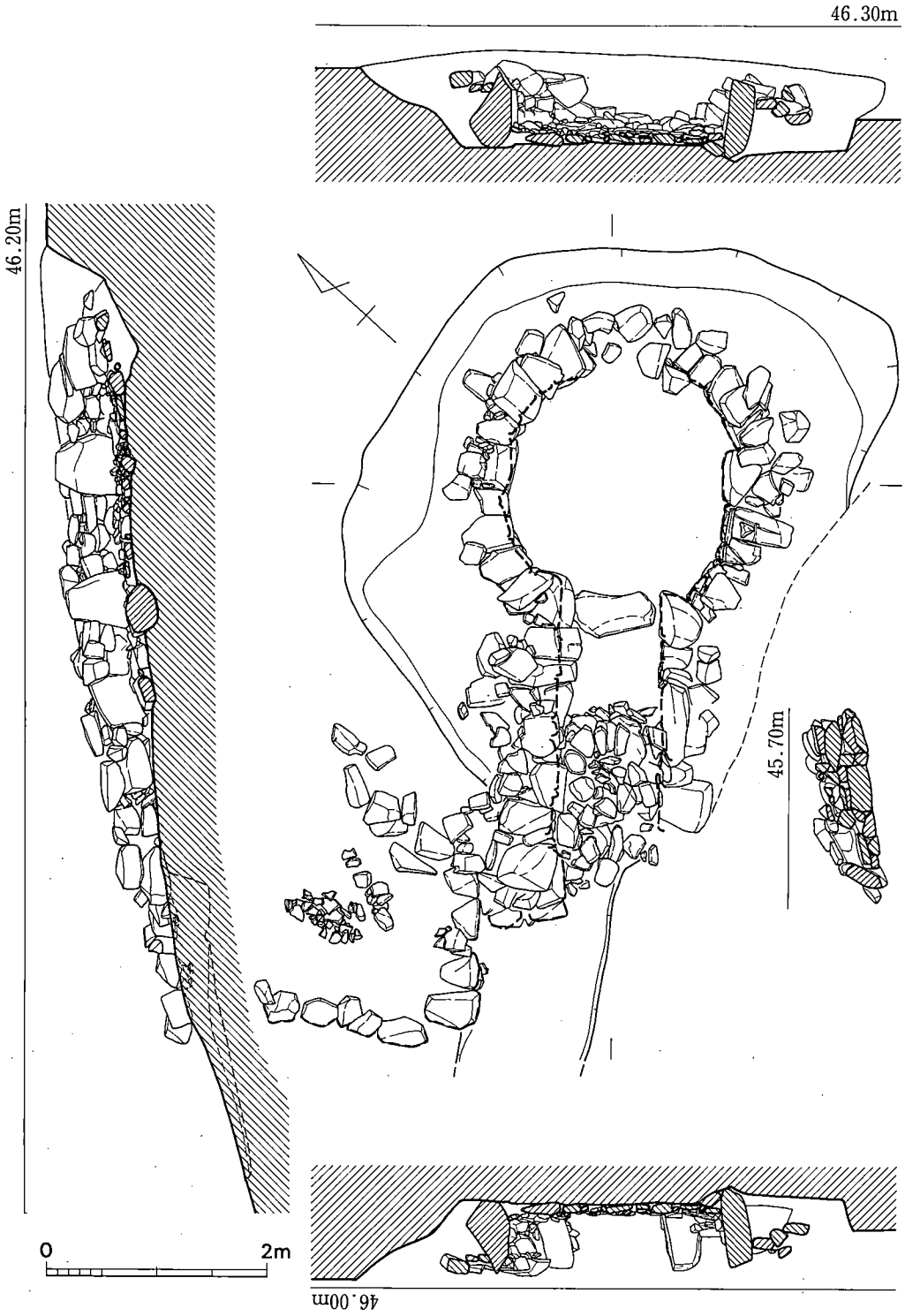
列石の約1.5m前側にあたる、標高45.0mの高さで、羨道よりも0.8m幅が広くなった部分に長さ1.0mの塊石積みの列石が前面側に伸びる。そしてそこからL字に折れて約2.0mの長さに塊石が並ぶ区画がみられる。前面の方形区画とでも呼称することにするが、祭壇様の機能をもたせていたと思われ、区画内に土器片がまとまって出土した（図版24-1、第61図）。

主体部（図版23-3・24-1、第60図）

この古墳の主体部は、主軸方向をN48°Eにとり南西方向に開口する、単室の横穴式石室である。主体部の掘り方は奥壁側で標高46.0mを上端として掘り込まれ、長さ5.0m、幅5.0m程の不整方形プランを呈す。奥壁と玄室左側壁部分では深さ0.8mだが、前面側に浅くなり、墓道部は盛土整形されている。

石室は天井石と壁体の上部が崩壊し、奥壁石も抜き去られているが、石室全長は6.0mと判断できる。玄室は隅丸方形の平面形を呈し、左側で1.80m、右側で1.95mの長さ、中央部での幅1.95mを測る。奥壁中央の鏡石を失うが、玄室左右の側壁の中央に鏡石状の長さ70cm、幅50cm、厚さ30cm程の大きさの石材を据えていて、それぞれ袖石と奥壁鏡石との間を緑泥片岩のやや扁平な塊石で基底部から平積みしている。平積み部分は60～70cmの高さに4・5段残るが整然とした積み方ではない。

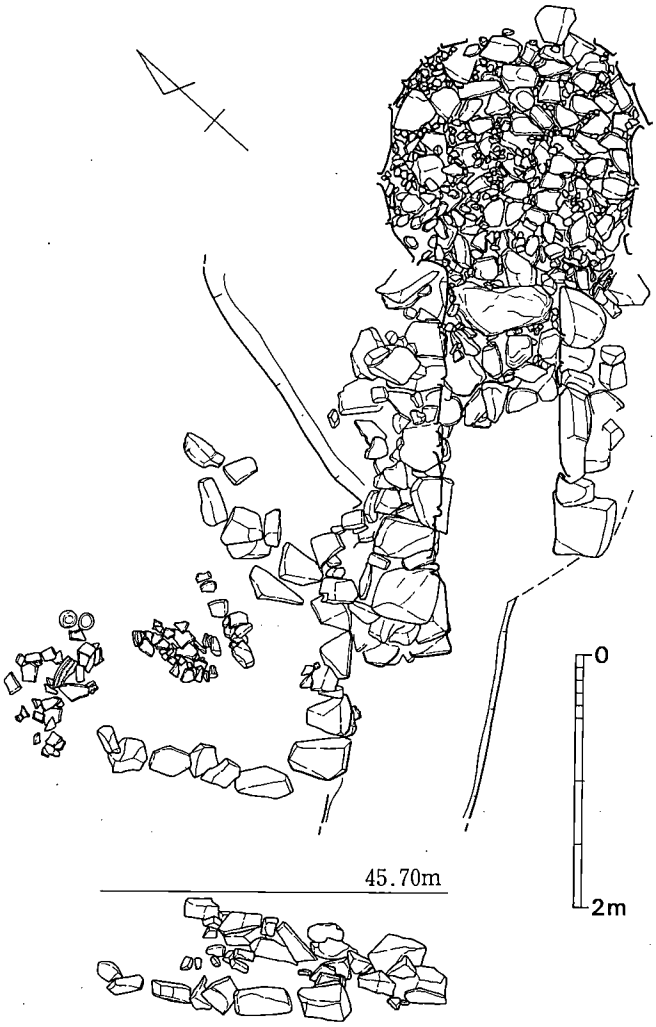
玄門部分の袖石も、長さ70cm、幅50cm、厚さ30cm程の大きさの石材を据えている。袖石間は0.90mを測り、床面に長さ85cm、幅40cm、厚さ30cm程の扁平石を渡して仕切石としている。



第60図　6号墳石室実測図（1/60）

羨道部は、右側壁は前面側を失うため不明瞭だが、左側壁で長さ3.10mを測り、0.90～0.95mの幅を有する。袖石の0.50m程手前の左右ともに、袖石より僅かに小さいあるいは薄めの石材を立てて据えて、左側では羨門部分に大きめの石材を横に据えている。さらにこれらの大振りの石材の隙間に、やや扁平な塊石を基底部から平積みして壁体を築いている。羨道中途の左右に立てて据えられた石の間の床面には、仕切石のように渡して置かれた石があった可能性が高い。後述する閉塞石との区別が出来ずに、不用意に外してしまった。おそらく複数の石でこの役割を果たしていたものと思われる。

閉塞は、玄室から1.0～2.5mの部分に塊石を積み上げていて、高さ0.5m程度に残るが、規則的な積み方ではない。



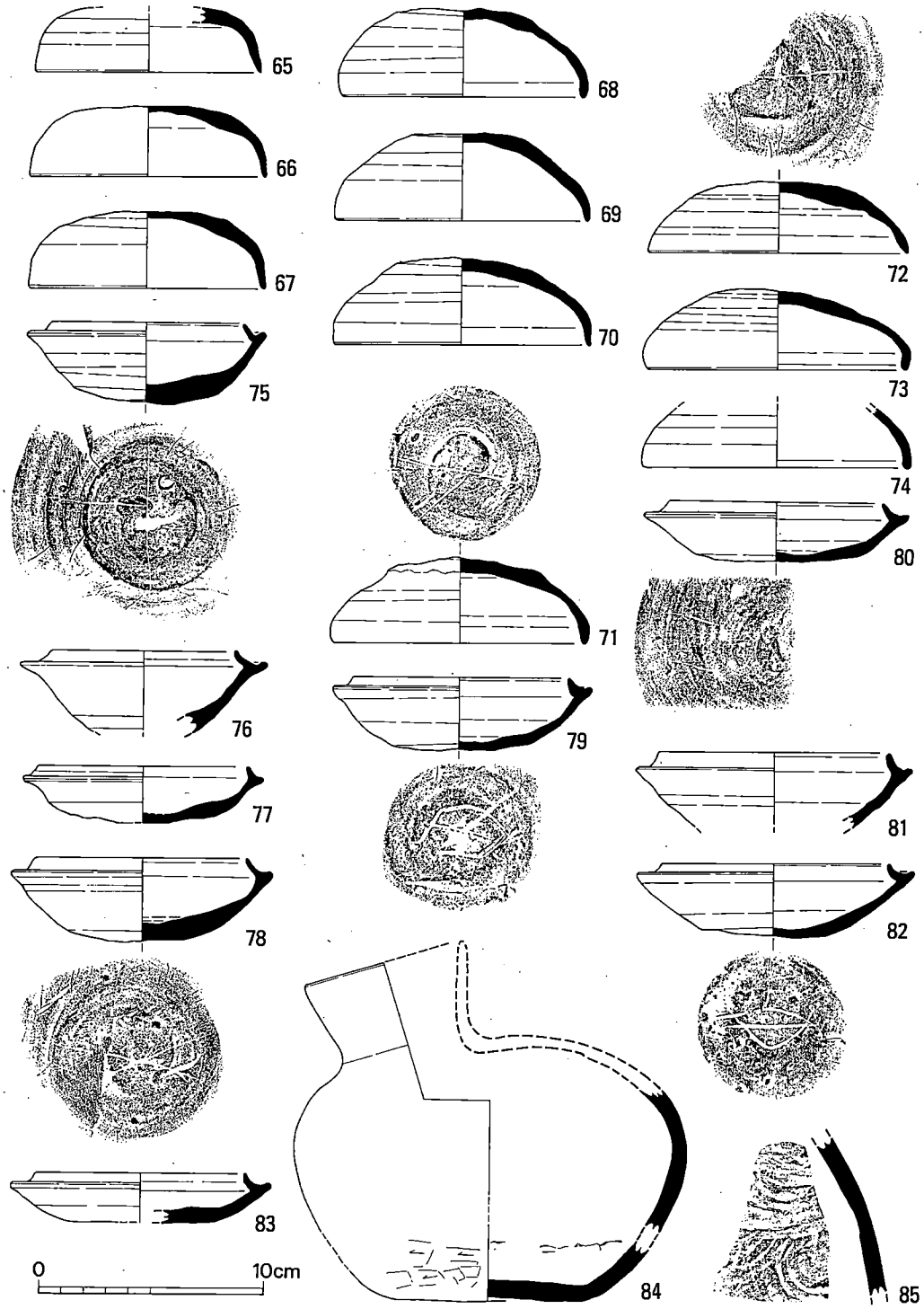
第61図　6号墳石室と列石（1/60）

遺物出土状況（図版24-1、第61図）

石室左前面の方形区画部分で、須恵器杯蓋・身、須恵器甕などがまとまって出土した。また墓道部分から須恵器平瓶が出土した。

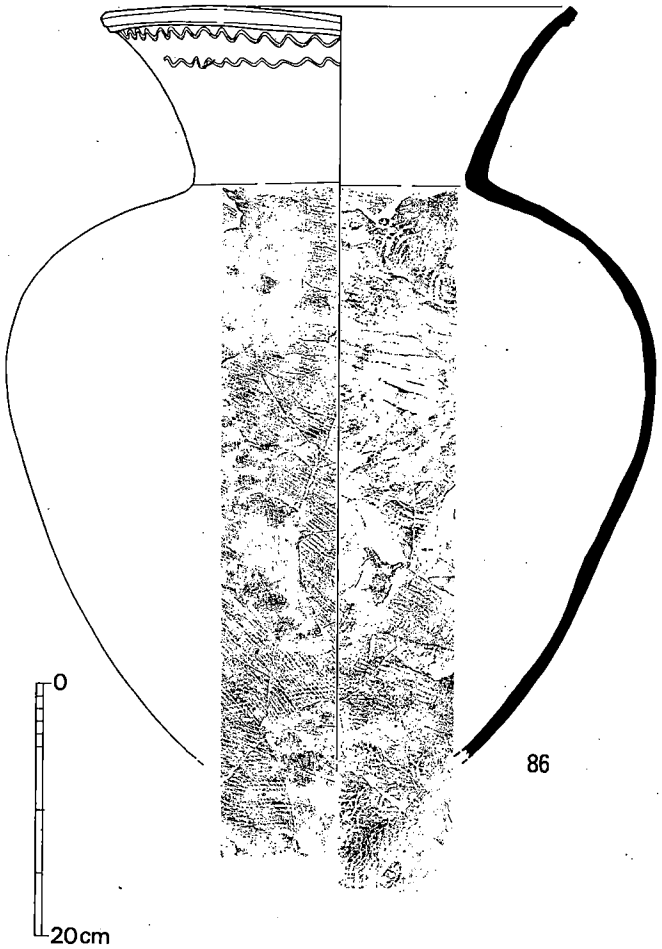
出土土器（図版29・30、第62～64図）

須恵器杯蓋（65～74）　いずれも口縁部にかえりを有さないタイプの杯蓋で、口縁端部は内彎あるいは内彎気味にのびる。外天井部はヘラ切り離しの後に軽くナデ調整され、ヘラ記号をもつ例もある。65～67は墓道から出土し、68～74は左前面の区画内から出土した。65は復原口径10.0cm、器高2.8cm、66は口径10.3cm、器高3.1cm、67は口径10.5cm、器高3.4cmの大きさで、



第62図　6号墳出土土器実測図1 (1/3)

天井部がやや平らで、口縁部は直線的ながら僅かに外反気味にまとまる。68は復原口径11.2cm、器高3.8cm、69・70は復原口径11.4cm、器高3.8cm、71は口径11.6cm、器高3.8cmの大きさで、天井部がやや小さめながら器高が高く、口縁端部は内彎するが、70はそのなかで直線的ながら外反気味にまとまる例である。68・70・71の外天井にはT字あるいはT字に似たヘラ記号が、69はT字に単直線を更に交差させたようなヘラ記号が付されている。72は復原口径11.6cm、器高3.1cmの大きさで、口縁部はやや直線的に開く。73は口径11.9cm、器高3.5cmの大きさで、天井部はやや丸みを帯びて口縁部は内彎する。72・73ともに外天井にT字あるいはT字に似たヘラ記号が付されている。これらの杯蓋は、いずれも胎土に砂粒を若干含み、暗灰色あるいは暗紫灰色などの色調に焼成されている。



第63図　6号墳出土土器実測図2（1/6）

須恵器杯身（75～83）　いずれも蓋受けのかえりを有する杯身で、口縁部の立ち上がりは短く内傾する。外底部はヘラ切り離しの後に軽くナデ調整されて、ヘラ記号を描く例もある。77は墓道から、83は左前面の斜面から、他は左前面の区画内から出土した。75は口径8.5cm、受け部外径10.6cm、器高3.6cmの大きさで、外底面にT字状のヘラ記号が付されている。76は復原口径8.2cm、受け部外径11.0cm、残存器高3.6cmの大きさで、底部を欠く。77は復原口径9.4cm、受け部外径10.7cm、器高2.5cm、78は口径9.6cm、受け部外径11.6cm、器高3.8cm、79は口径9.7cm、

受け部外径11.6cm、器高3.2cm、80は口径9.4cm、受け部外径11.7cm、器高2.6cm、81は復原口径10.4cm、受け部外径11.2cm、82は口径10.1cm、受け部外径12.3cm、器高3.3cm、83は復原口径9.4cm、受け部外径11.6cm、器高2.3cmの大きさ。78は偏った×字に単直線が更に交差したヘラ記号、79・82は単直線を向かい合う双弧線で交差させるヘラ記号、80は平行単直線のヘラ記号が外底面に描かれる。これらの杯身は、いずれも胎土に砂粒を若干含み、灰色・暗灰色・暗紫灰色などの色調に堅く焼成されている。

須恵器平瓶（84）　墓道の上部堆積土から出土した。口縁部と体部の約半分を欠くが、復原口径7.5cm、復原器高16.0cm、胴最大径17.5cmの大きさで、器面の大半を回転ナデ調整するが、底部付近はヘラ削りで調整していて、外底面には指頭圧痕がみられる。胎土に砂粒を含み、暗灰色・暗茶灰褐色に焼成されている。

須恵器甕（85・86）　左前面の区画内から出土していて、同一個体の可能性もある。86では底部を欠くが、復原口径38.1cm、胴最大径51.7cm、残存器高59.5cmの大きさに復原出来る。肩の張った倒卵形の体部にバケツ形に開く口縁部が付いた器形で、緩やかに外反した口縁の端部は外面に肥厚させて、小さな断面三角形の凸帯をつくる。体部には平行叩き目と同心円当て具痕がみられ、口頸部は回転ナデ調整され、口縁下の外面に2条の波状文が描かれる。胎土に砂粒を含み、茶灰色ないし暗灰色に堅く焼成されている。85は86より幾分か色調が明るい。

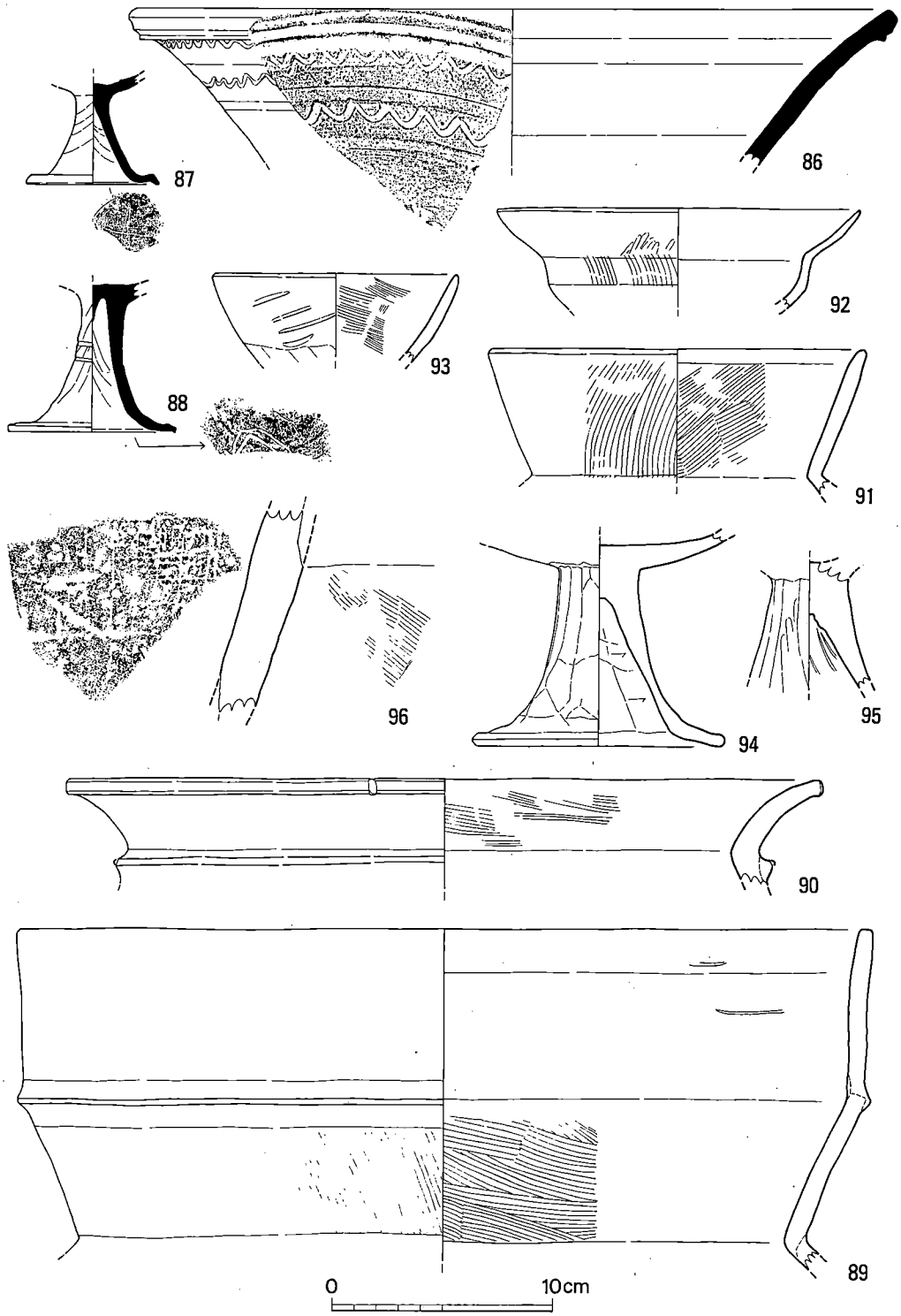
須恵器高杯（87・88）　ともに左前面の区画内から出土したが、杯部を失う。口径の小さな杯蓋・杯身がこれらの脚部に乗る可能性もあるものの接合しない。脚裾部は開いて、端部で鳥嘴状に折れる。柱状部には絞り痕が残り透かし窓は付かないで、88では沈線が2条巡る。87は残存器高4.8cm、裾部径6.0cmの大きさで、脚部内面に井字状のヘラ記号が付される。88は残存器高6.6cm、裾部径7.6cmの大きさで、脚部内面に双弧線のヘラ記号が付される。

土師器甕（89）　石室南西外の斜面から出土した。複合口縁で、頸部から外反した疑口縁の上に長めに直立する口縁部が乗り、接合部分は凸帯状の段をなす。復原口径38.8cmの大きさで、肩部へは膨らむ。頸部内外面にハケ目調整痕がみられる。

土師器壺（90・91）　90は北側周溝内から、91は石室南西外の斜面から出土した。90は外反する口縁部破片で、復原口径34.4cmの大きさ。頸部に断面三角形の凸帯が巡り、口唇部に間隔の疎らな刻み目らしい痕跡がみられる。91は内彎気味に開く口縁部破片で、口径17.2cmの大きさ。内外面ともハケ目調整される。

土師器鉢（92）　左前面の区画内から出土した。体部は浅い椀状で底部を失う。高杯の杯部にも似た器形で、口縁部は内彎気味に開く。復原口径16.6cmの大きさで、体部外面にハケ目痕がみられる。胎土に細砂・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

土師器椀（93）　石室前庭部から出土した。復原口径11.2cm、残存器高3.9cmの大きさで、口径と器高が2：1程度の椀である。外面にヘラ削り痕が残り、内面はハケ目調整される。



第64図　6号墳出土土器実測図3 (1/3)

土師器高杯（94・95）　94は墓道から、95は左前面の区画内から出土した。杯部を失うが、中空の柱状部が緩やかに開き、脚裾部は屈曲して更に外へ開く。柱状部はヘラ削り、裾部はヨコナデ調整される。94では残存器高9.5cm、裾径11.5cmの大きさ。

埴　輪（96）　左側外護列石部分から出土した。小破片だが、箍状の凸帯が剝落する外面にはハケ目がみられ、内面は格子状の線が刻まれている。

これらの土器類では須恵器杯蓋・杯身や平瓶などの特徴から６世紀後半代の時期が与えられる。埴輪は混入したものであろう。

金属製品（図版31-1、第41図）

鉄　鏃（５・６）石室部分の攪乱土から出土した。６は基部端を僅かに欠くが、残存長10.4cm、身部と関部突起部の幅0.8cm、身部の厚さ0.3cm、基部の幅・厚さ0.4cmの大きさの、端刃造長頸で細根の鏃である。５は長さ2.0cmの小破片のため詳らかでない。

不明鉄製品（７）左前面区画内から出土した。先端側を欠くが、残存長4.3cm、0.5cm角の棒状で、端部は叩いたようにやや広がる。

耳　環（８）石室内から出土した。断面楕円形を呈す0.5×0.7cmの太さ、0.2cm弱の隙間を残して外径2.1～2.3cmの大きさの環にした、銅地金銅張りの耳環である。

７号墳

調査区東寄りで発見された。標高46.0m位にあり、６号墳の東南東側に隣接して位置する。南側半分は開墾による斜面で崩れている。南西方向に開口する横穴式石室が主体部である。

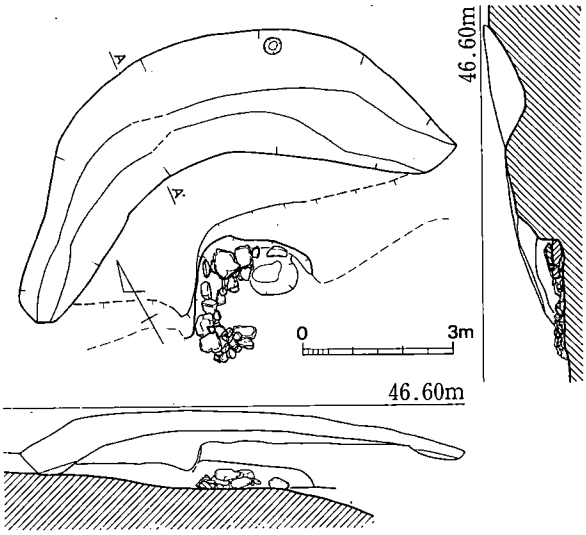
墳丘・周溝（図版24-2、第65・66図）

上部を削平されているため墳丘盛土は既に残らないが、北側の周溝が馬蹄形に残る。南側の傾斜部分には旧地表上に盛土整地している。周溝は、上縁で1.0～2.4m、深さ0.1～0.5mの規模で、丘陵の南側斜面を馬蹄形に削り込んでいる。周溝外側で直径10～11m規模の楕円形に近い平面形をなす。周溝内側からみた墳丘規模は直径8.0m程の大きさになる。

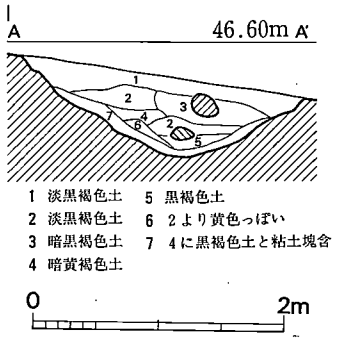
主体部（図版24-3、第67図）

この古墳の主体部は、主軸方向をN29°Eにとり西南西方向に開口する、単室の横穴式石室と推定される。主体部の掘り方は奥壁側で標高45.9mを上端として掘り込まれ、長さ・幅ともに2.5m以上らしい不整方形プランを呈す。奥壁と玄室左側壁部分では深さ0.8mだが、前面側に浅くなり、玄室の1／3程度のみが残る。

石室は、奥壁石などが抜き去られ、玄室の左奥壁部分を除いて壁体の大半が取り壊されている。玄室は隅丸方形の平面形を呈すものと思われる。玄室中央部での長さ・幅は約2.00mを測る大きさ。奥壁中央の鏡石・袖石などに使用される石材が抜き取られている。玄室左側壁のみが残るものの、基底部から緑泥片岩の扁平な塊石が、1～3段平積みされて最大で0.4mの高さに残



第65図　7号墳実測図（1/150）

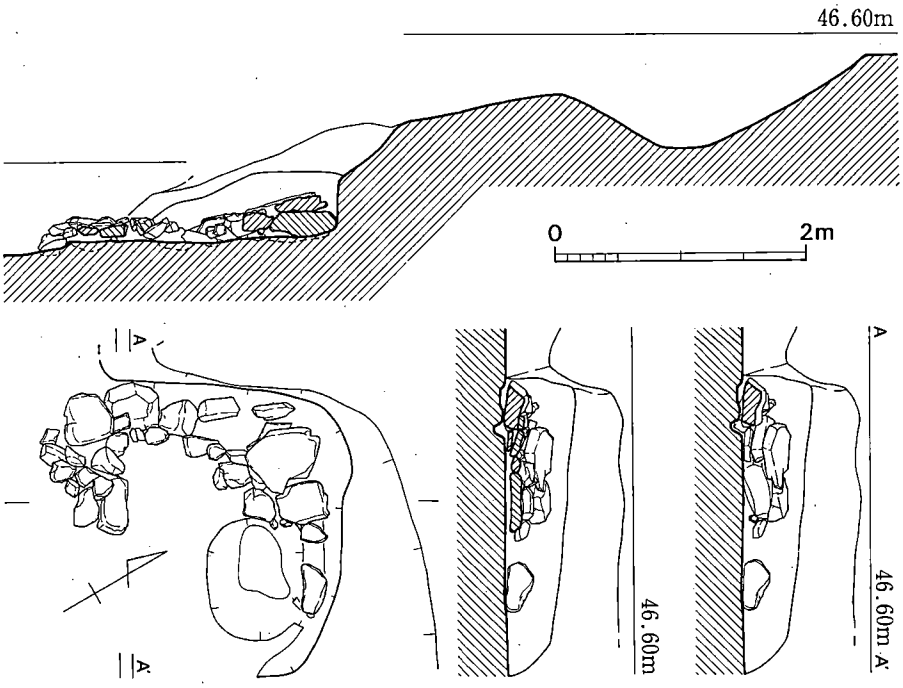


第66図　7号墳周溝断面土層実測図（1/60）

されるのみである。床面は小振りの円礫で敷石されるが、これも壁際に僅かに残る程度である。

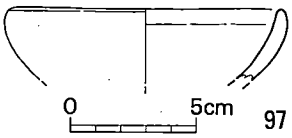
出土土器（図版　、第68図）

土師器椀（97）周溝から出土した。復原口径11.3cmの大きさの、内彎して立ち上がる口縁部破片である。細砂粒・赤褐色粒を若干含むが精良な胎土で、橙褐色に焼成されている。



第67図　7号墳石室実測図（1/60）

この土器片のみで時期を決定し難いが、石室の形態からみて6世紀後半以降であり、7世紀に含まれる可能性もあろう。



第68図　7号墳出土土器実測図（1/3）

8号墳

調査区東端で発見された。標高46.3m位にあり、7号墳の東方に位置する。東側は調査区域外で未調査、南側半分は開墾によって削平される。西に開口する横穴式石室が主体部である。

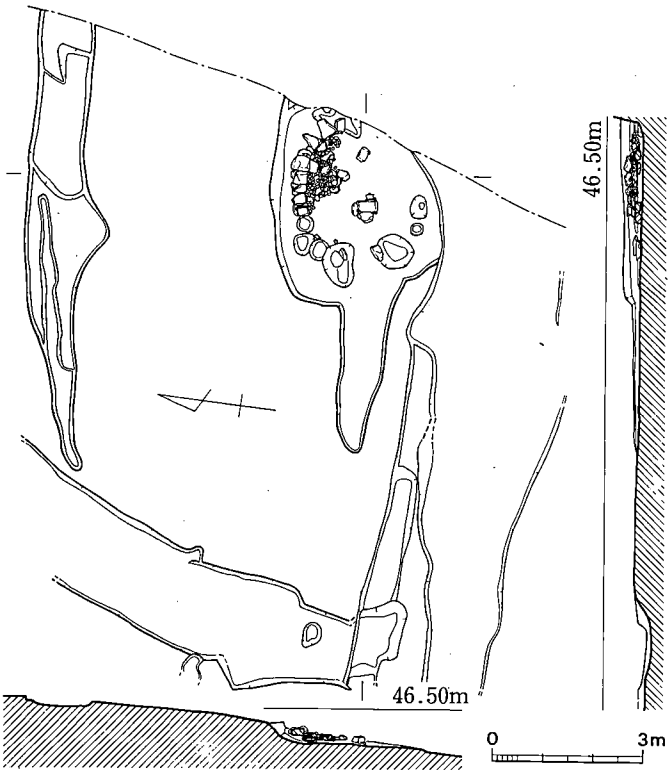
墳丘・周溝（図版25-1、第69図）

上部を削平されているため墳丘盛土は既に残らず、周溝も明瞭ではないが、北側に弧を描いて残る溝が周溝であろう。南側は段落ちのため残らない。周溝は、上縁で0.2～1.0m、深さ0.1m前後の規模で、丘陵の南側斜面を馬蹄形に削り込んでいるが、周溝外側で直径13～14m規模の楕円形に近い平面形をなす。周溝内側からみた墳丘規模は直径11.0m程の大きさになる。

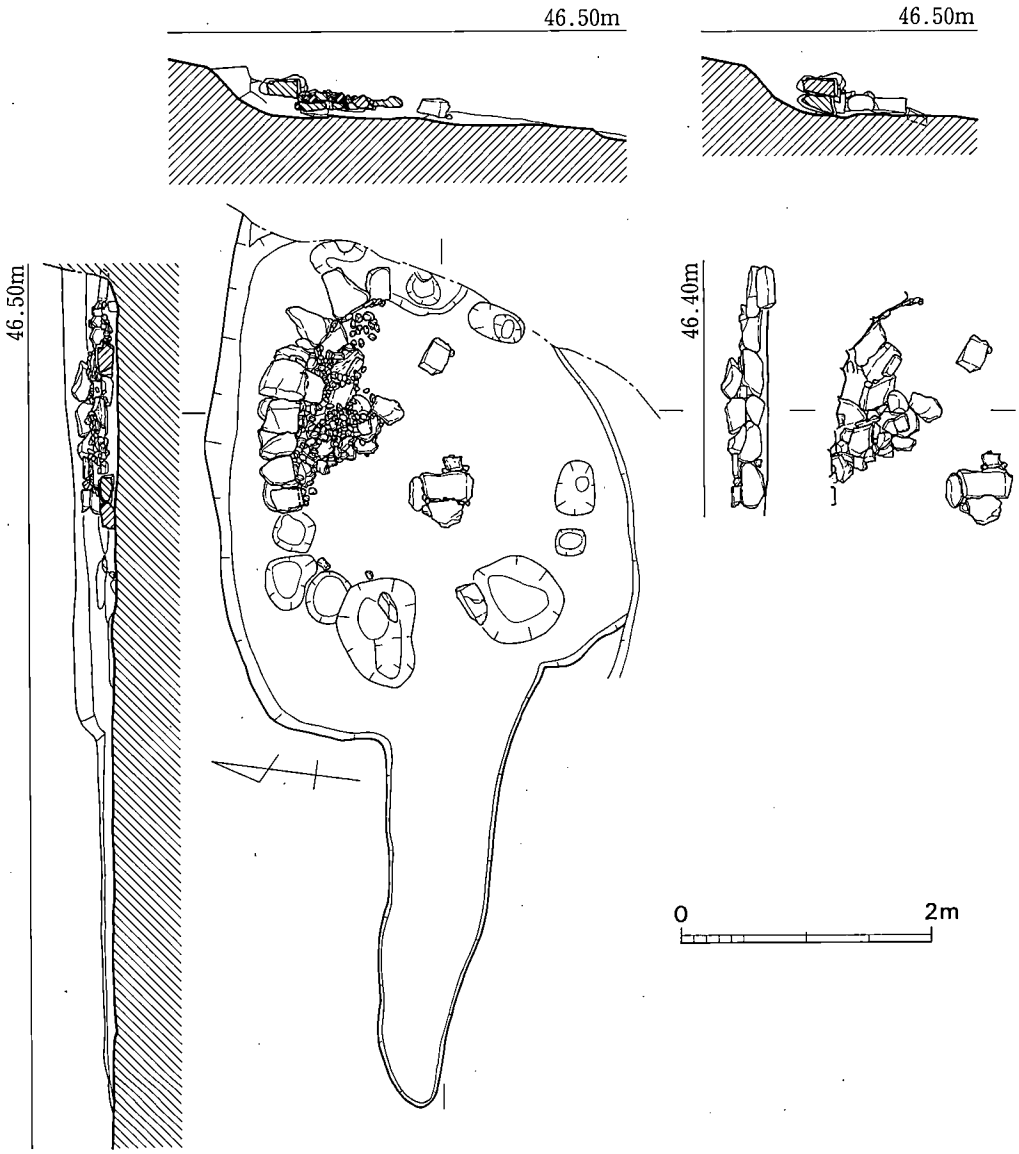
主体部（図版25-2、第70図）

この古墳の主体部は、主軸方向をN82°Eにとり西に開口する、単室の横穴式石室と推定される。主体部の掘り方は左奥壁側で標高46.2mを上端として掘り込まれ、長さ4.0m以上、幅3.3m程度の不整方形プランを呈す。左側壁部分では深さ0.4mだが、右側壁方に浅くなり、玄室の半分程度のみが残る。

石室は、奥壁石などが抜き去られ、玄室の左奥壁部分を除いて壁体の大半が取り壊されている。玄室は隅丸方形あるいは円形の平面形を呈すものと思われる。玄室中央部での長さ・幅は約2.20mを測る大きさ。奥壁中央の鏡石・袖石などに使用される石材は抜き取られている。玄室左側壁は、基底部から緑泥片岩の扁



第69図　8号墳実測図（1/150）

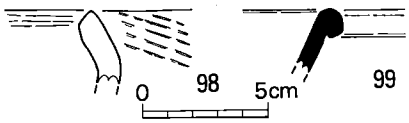


第70図　8号墳石室実測図（1/60）

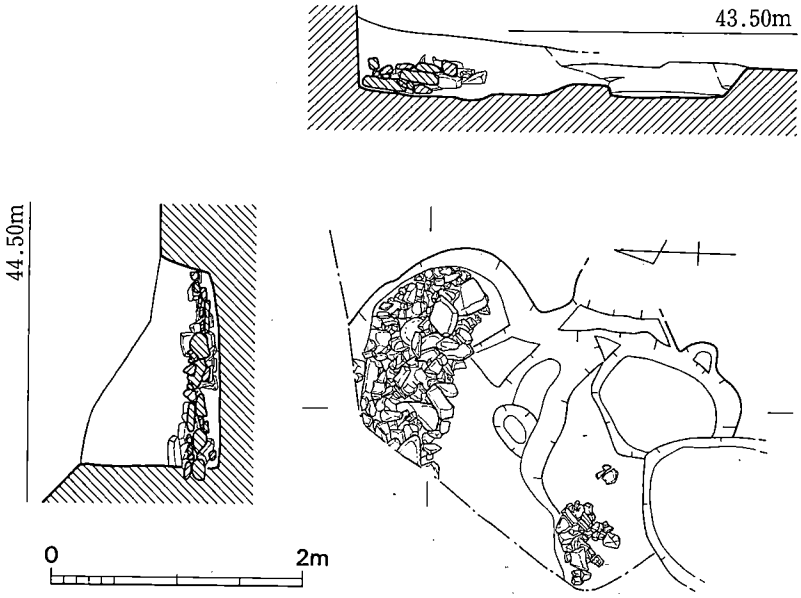
平な塊石が2段平積みされて最大で0.3mの高さに残されるのみである。床面には小振りの扁平石で敷石され、玉砂利状の敷石がこれを被っているが、敷石も左奥の床面に残るのみである。

出土土器（第71図）

土師器鉢（98）　石室部分の堆積土から出土した。内彎して立ち上がる口縁部破片で、外面には叩き目状の痕が残り、内面はヨコナデ調整される。胎土に



第71図　8号墳出土土器実測図（1/3）



第72図　9号墳実測図（1/60）

砂粒を含み、黄茶褐色に焼成されている。

陶器碗（99）　玉縁を有する口縁部小破片で、石室部分の堆積土から出土した。口縁部内外面ともに回転ナデ調整され、細砂粒も殆ど含まない精良な胎土で、茶色に堅く焼成されている。

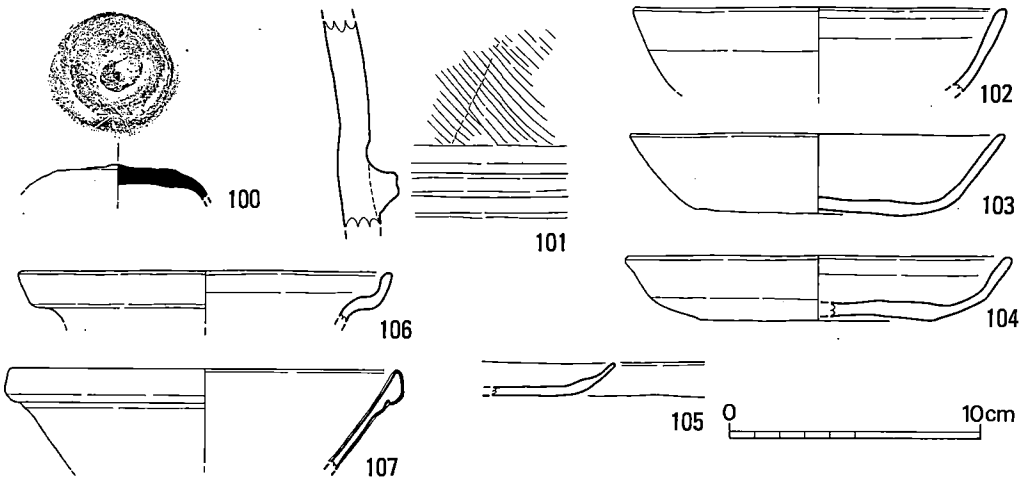
これらの土器類では陶器碗は13世紀以降と思われるが、土師器鉢では時期を明確にしえない。石室の形態では6世紀後半ないし7世紀初頭頃の可能性があり、6号墳の時期とさほど時期的に開かないであろう。

9号墳

調査区中央部東寄で発見された。標高43.5m位にあり、6号墳の南西方に位置する。北西側は調査区域外で未調査、南側半分は開墾によって削平される。破壊された横穴式石室の可能性が高いが、調査時に陥没部分の堆積土を除去したあと中断し、そのまま地下式横穴として判断されたために、詳細は不明である。地下式横穴として作図された図を示すが、石室の側壁部分が崩落した状況に似ている。墳丘や周溝は、上部を削平されているため墳丘盛土は既に残らず、周溝も調査区域外に残っていたかも知れないが分からない。

主体部（図版25-3、第72図）

この古墳？の主体部は、主軸方向をほぼ東西に向けて西に開口する、横穴式石室であろう。側壁を構成する石材は緑泥片岩の扁平石で、3段程度残っていたようにみえる。石室内の敷石は



第73図　9号墳出土土器実測図（1/3）

小振りの塊石が用いられている。

出土土器（図版30、第73図）

須恵器杯蓋（100）　天井部の破片で、外天井はヘラ切り離しのままで、口縁部との境目部分にヘラ記号が付される。

円筒埴輪（101）　外面に斜方向のハケ目調整痕がみられ、断面M字状の凸帯が巡らされる。内面はナデ調整されている。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土師器杯（102～104）　器面が磨滅するものの、糸切り底の底部から内彎気味ながらも直線的に口縁部が開く杯で、口径15.0cm～15.6cm、器高2.5～3.4cmの大きさ。

土師器小皿（105）　糸切り底を有する器高1.3cmの小皿破片である。

（106）復原口径15.0cmの大きさの口縁部破片で、外反して開いた口縁部が端部で内彎して立ち上がる。

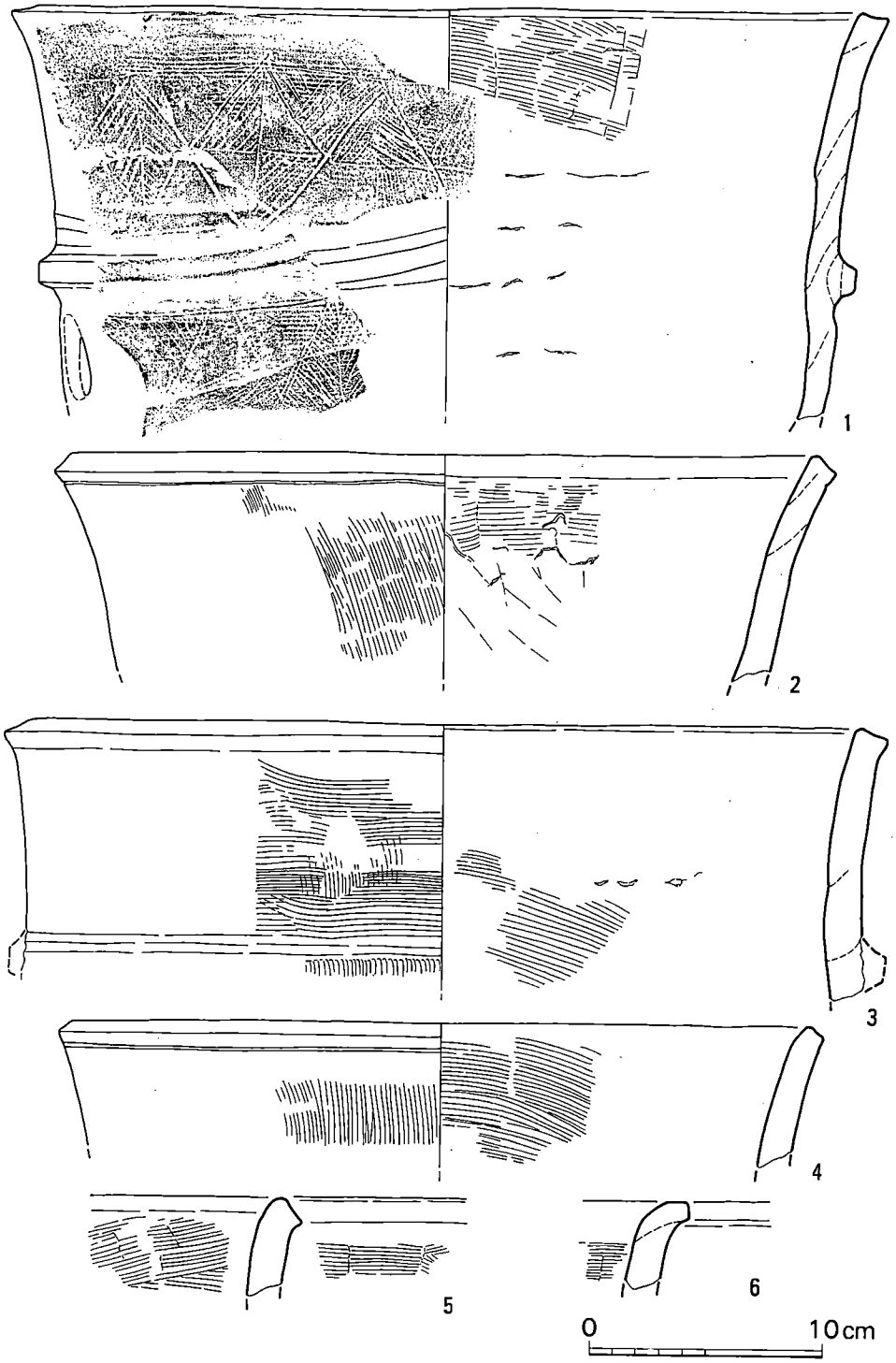
白磁碗（107）　玉縁の口縁部を有する碗で、復原口径16.0cmの大きさ。

これらの土器類では、土師器杯・小皿や白磁碗は12世紀後半頃の時期が与えられるが、須恵器杯蓋は6世紀末～7世紀初頃の特徴を有していて、この古墳が須恵器杯蓋の時期に構築され、中世に攪乱を受けたものであろう。

鉄製品（図版　、第41図）

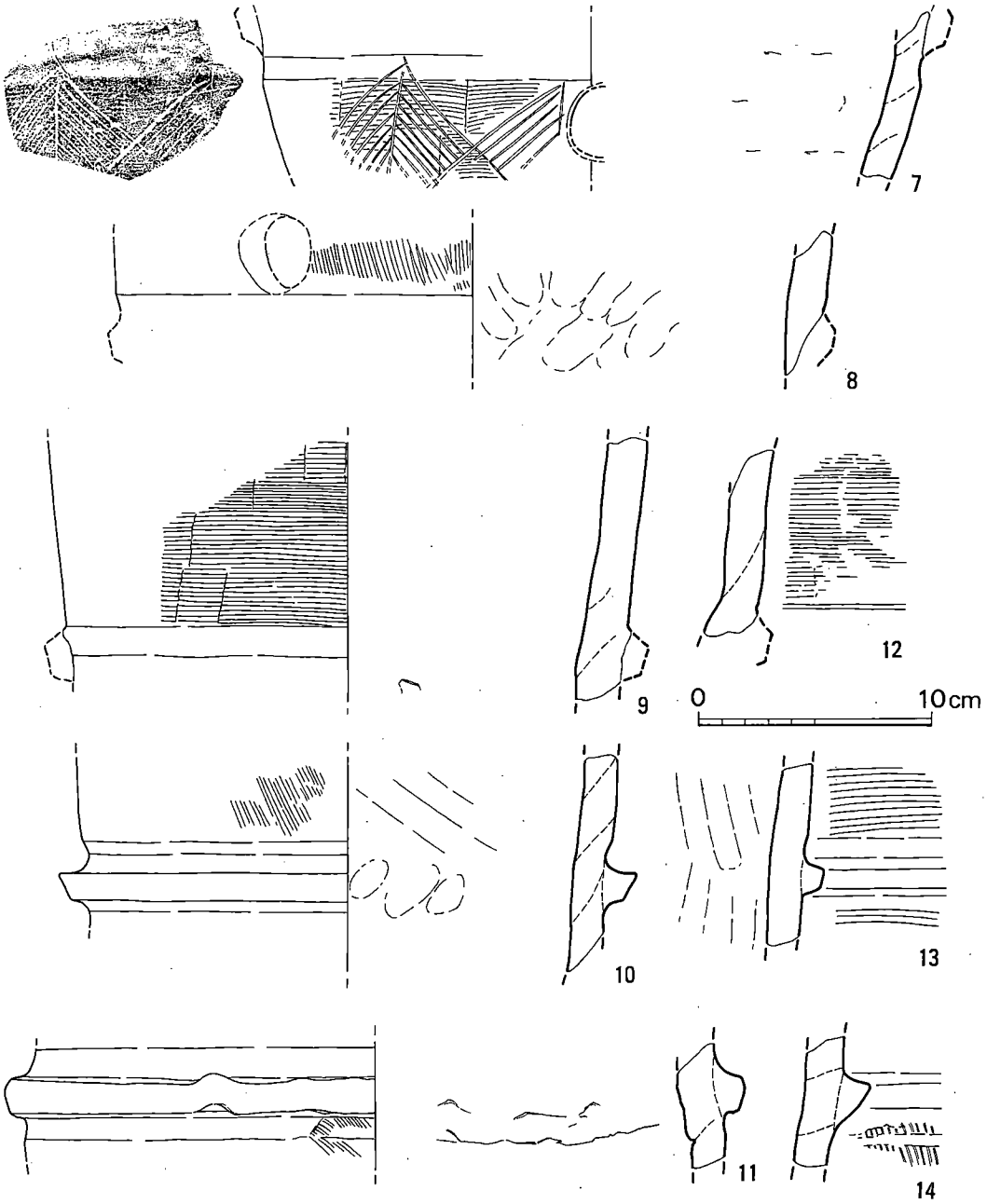
鉄　釘（9～11）　角釘で、9は中途で折れ曲がるが、長さ5.2cm、0.5cm角の大きさ。頭部は叩かれて広がる。10・11は破片で、10の頭部は9に比してやや大きい。

埴　輪（図版31-2、第74～77図）



第74図　出土埴輪実測図１（1/3）

埴輪の出土量は50点程度である。円筒埴輪が大部分を占め、朝顔形埴輪と識別できるのは一点のみである。形象埴輪には衣蓋形と不明品（基部）が認められた。



第75図　出土埴輪実測図２（1/3）

古墳に直接伴っては出土しておらず、どの古墳に樹立されていたものかは不明。また地形からみて埴輪窯が存在した可能性は低いと見てよい。出土地点は１・30が９号土坑、２・16・18・26・29がＦ２・Ｆ３区、27がＧ５区、９がＨ５区北側、31がＨ５区上層、15・17がＨ６区上層、３・８・12が１号落ち込み、７がＫ４区茶褐色土、11がM12区、28が６号住居上層で、その他はCD－２区に位置する４号竪穴及びその周辺である。

１～29は円筒埴輪。各部位は復元径にはばらつきがあるが、いずれの資料も1/6周程度の残存度のものが多く、径復元には疑問を残していると言わざるを得ない。完形品が得られていないために器高や段数は不明。器壁の厚さは1.2～1.5cmで比較的厚手である。

色調に関しては大きく３種に分類が可能であり、それに胎土及び焼成の特徴が対応する。すなわち①外面灰白色、断面灰黒色で、胎土には約１mm大の石英・長石粒を含む。焼成は概ね良好であるが、堅く焼き締まるといったものではない（１～２、５、７～12、30）。②茶褐色を呈し、微細な砂粒を多く含む。焼成良好で堅く焼き締まる（15～16）。③明るい黄褐色を呈し、微細な砂粒を含む。焼成は甘いものが多く、摩滅が著しい（３～４、６、17～28）。なお衣蓋形埴輪（31）もこれに含まれる。同じく明るい黄褐色を呈するが、先とは対照的に焼成が極めて良く断面が明灰色を呈する半須恵質のものがある（13～14、29）。32の不明形象埴輪もこれに近い。いずれの資料にも黒斑は認められず、窖窯による焼成である。

突帯の形状は断面台形を呈し、側面幅約1.0cm、基底面の幅2.0～2.5cmで高さ1.0～1.2cmである。調整はヨコナデであるが、丁寧なものが多い一方で形状が一定しないやや粗雑なものが含まれている。下辺に対するヨコナデは弱く、器壁との間に接合痕を残すものが多い。

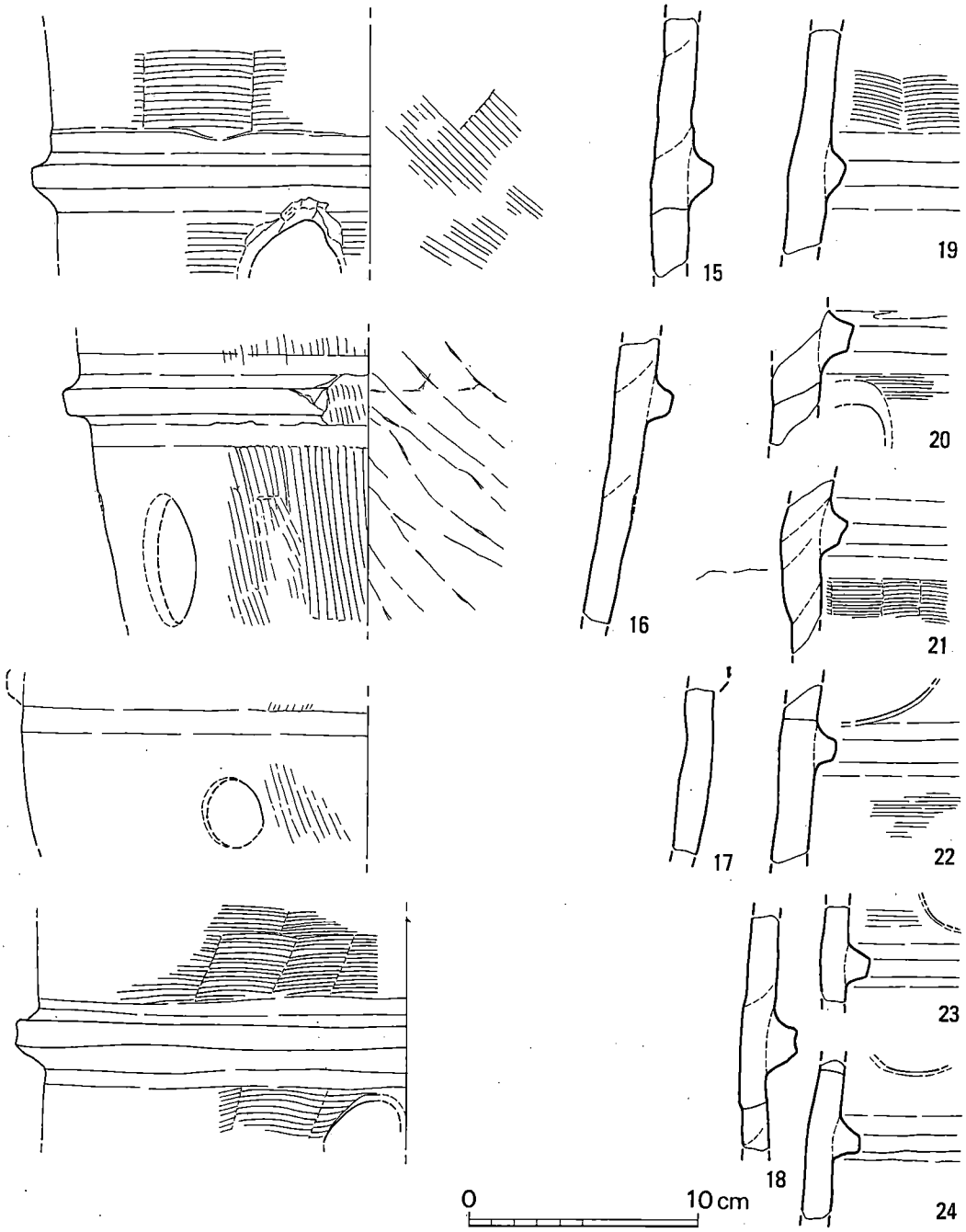
透孔は円形であるが、残存度の関係から一段あたりの数、及び上下段の透孔との位置関係は不明である。鋭い工具で刳り貫かれているが、15ではその後の調整が行われず、はみ出した粘土がそのまま残されている。

外面調整はタテハケもしくはナナメハケによる一次調整のみのものと、一次調整後に二次調整としてＢ種ヨコハケを加えるものがある。Ｂ種ヨコハケはストロークが約５cmであり、静止痕はハケ方向に対して垂直に残す。ハケ原体の幅は約３cmであり、突帯間を数段に分けて調整する。基底部はナナメハケの一次調整のみであり、二次調整は認められない。

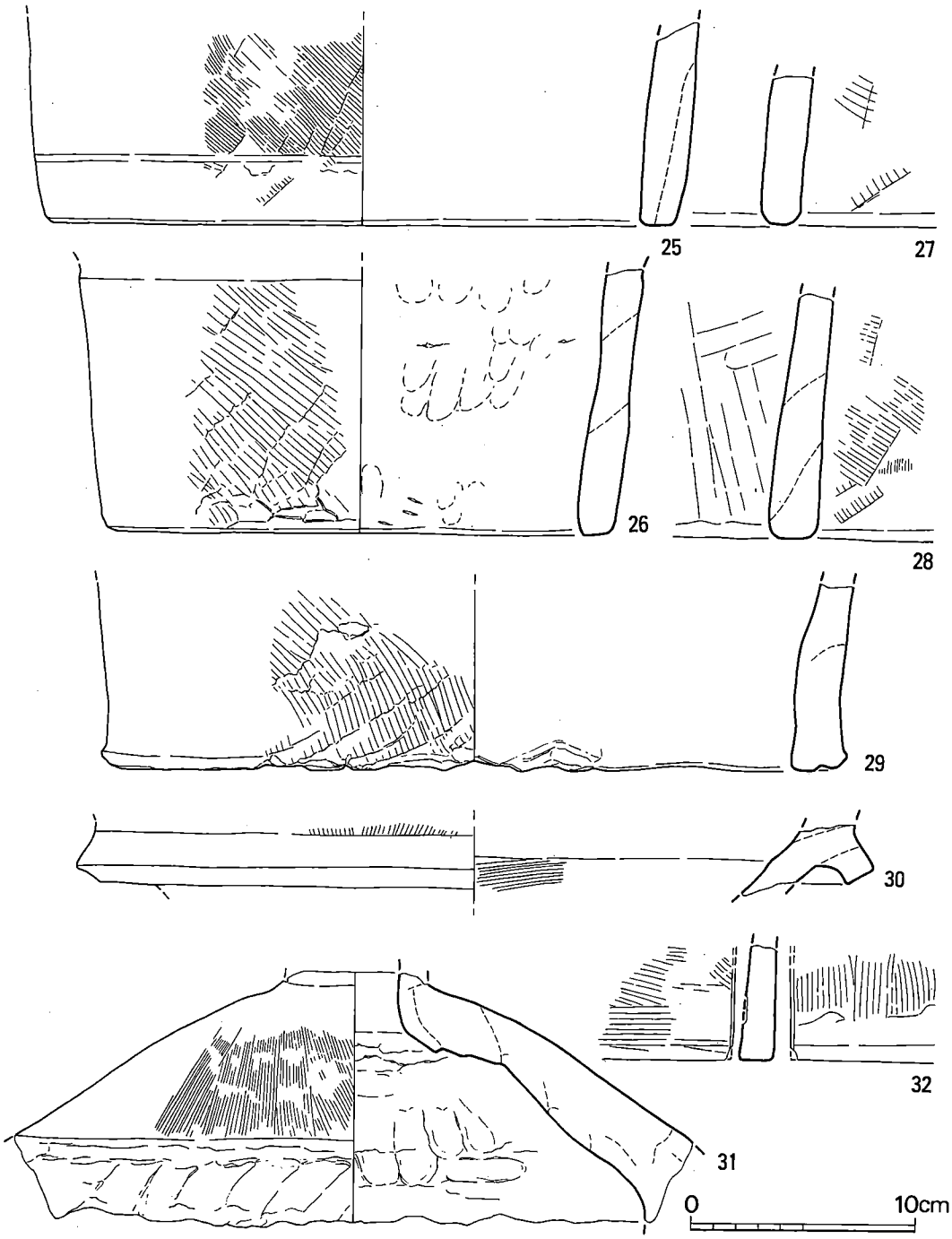
内面調整はナデによるものが多いが、口縁部付近では例外なくヨコハケが施されている。

１～６は最上段部。口径は32～36cmをはかる。最上段の突帯から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部はヨコナデによりやや外方へ広がり、上面には若干の凹みをもつ。ただし６は口縁端部を外方へ短く屈曲させる特徴をもつ。１はストロークの長いＢ種ヨコハケによる調整後に線刻文様を施す。連続する菱形の内部を斜線により埋める文様であるが、斜線の入れ方に法則性は認めがたい。７の胴部片と同一個体の可能性があるが接合しない。

７～24は胴部。ほぼ直立する形態をとっており、円筒埴輪全体は最上段まであまり広がらな



第76図　出土埴輪実測図３（1/3）



第77図　出土埴輪実測図４（1/3）

いものと想定できる。

25～29は底部。底径は25～30cmを測る。26では最下段突帯のヨコナデ部分まで残存しているが、ここから基底部の高さは約13cmと考えられる。25は底面から3cmの外面に浅い沈線がはしる。29の底面には径約3mmの棒圧痕を多く残す。他資料では磨滅しているが、同様の圧痕が残されていた可能性が大きい。

30は朝顔形埴輪の口縁部中段の擬口縁部。精美で突出度の高い突帯がつく。上下にどのような角度で器壁が続くかは復元しがたいが、しっかりとした屈曲部をもつものと考えられる。

31は衣蓋形埴輪で傘部の約1/4周が残存する。上部は径6cmの軸受部が続くと想定されるが根元から欠損する。また傘裾部・台部も欠損する。現存で最大径30cmを測り、本来は傘裾で径40cm程度と復元できる。台部は径約20cmであろう。外面はハケメを残し、線刻などによる文様の表現はない。内面及び台部に続く接合面は強くナデられている。

32は小片のために径復元は行なっていないが、円筒状の底部で切り込みを有する。なんらかの形象埴輪の基部あるいは台部であろうか。外面はタテハケによる調整であり、底部には細い棒圧痕を残し、細砂粒が砂目状に付着する。　　（岸本　圭）

6．土　壙　墓

墓とみられる土壙は総数28基発見された。そのうちの大半が、調査区北西部の丘陵中央部高所にある、2号墳と3号墳の間を中心とした部分に位置しているが、調査区南部になる6号墳前面斜面の緩傾斜部分にも数基が集中している。

1号土壙墓（図版32-2、第79図）

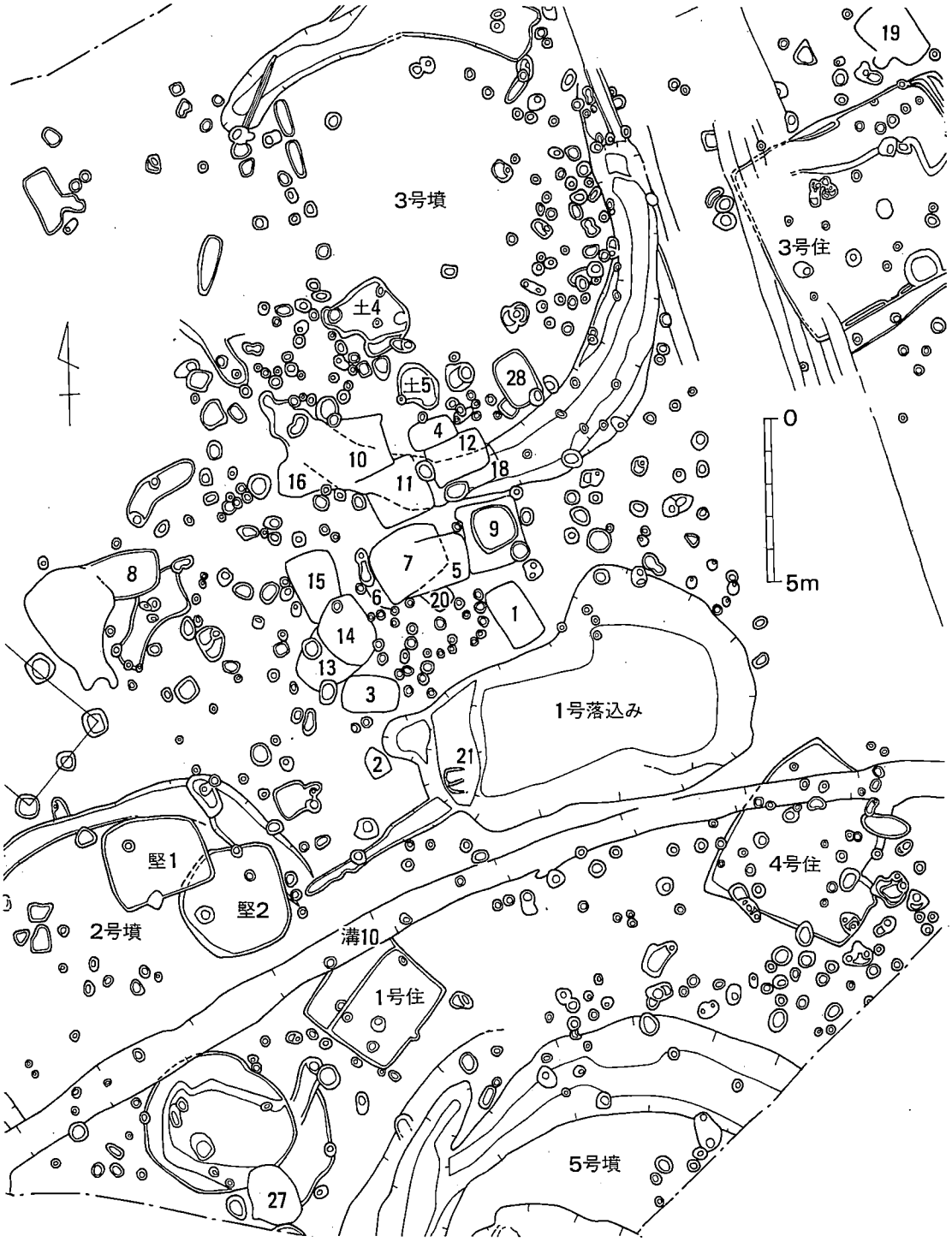
I20・I21区に跨って発見された隅丸長方形の平面形を呈する土壙で、長さ1.95m、幅1.15mの大きさ。主軸方向はN34°10′Wを向く。上部は削平を受けているが、15cm前後の深さに残り、四隅と長軸線両端部に緑泥片岩の塊石がみられる。壙内の堆積土では中央部に焼土・木炭を含んだ灰が集中して検出された。塊石の配置から、棺を浮かせて支える台の役割を果たしていたものと推定される。

出土土器

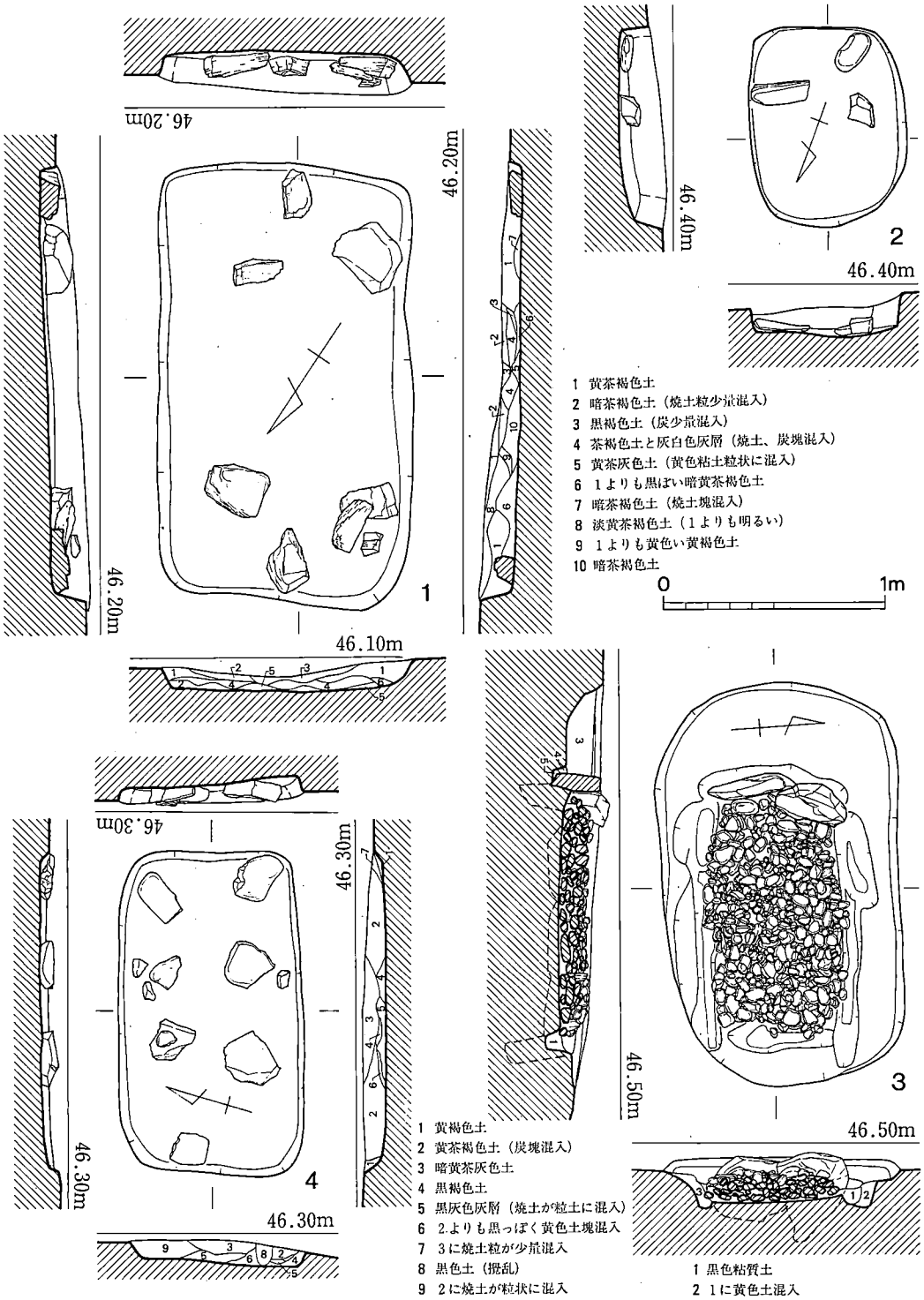
土師器小皿片が出土しているが、小破片のため図示しない。

2号土壙墓（図版32-3、第79図）

J21区の北西部で発見された、隅丸長方形の平面形を呈する土壙で、長さ0.90m、幅0.70mの大きさ。主軸方向はN20°30′Wを向く。上部は削平を受けているが、20cm前後の深さに残り、南



第78図　1～16・18～21・27・28号土壙墓配置図（1/200）



第79図　1～4号土壙墓実測図（1/30）

側半分に緑泥片岩の塊石がみられる。壙内には焼土・木炭や灰が検出された。この塊石も、棺を浮かせて支える役割を果たしていたものと推定される。

出土土器

小破片で図示しないが、瓦器椀片、土師質茶釜の羽片などが出土した。

茶釜の羽片の存在からみて14世紀後半以降と推定される。

3号土壙墓（図版33、第79図）

Ⅰ21区の南西部で、2号土壙の約1m北側に位置する、隅丸長方形の平面形を呈する土壙で、長さ0.90m、幅0.55mの大きさ。主軸方向はN86°30′Wを向く。上部は削平を受けているが、10cm前後の深さに残り、壙内には緑泥片岩板状石を並べて据えた石棺墓のような施設がある。この石棺墓状の施設は、既に両側壁石と東側小口石を抜き去られていて、西側に板状石2枚の立つ小口石が残り、内部に拳大の円礫が充塡されたように詰まっている。なお、両側壁部分には2～3枚の板状石、東側小口に2枚の板状石の据えられていた抜き痕がみられて、これらから内法の長さ55cm、幅30cmの広さがあり、床面から小口石の上端までの高さが10cm程だが、円礫の充塡された部分が、その大部分を占めている。

出土土器

糸切り底の土師器杯片・土師器小皿片が出土している。

土師器杯・小皿が糸切り底であることから12世紀後半以降であろう。

4号土壙墓（図版34-1、第79図）

H21区の北端で発見された、隅丸長方形の平面形を呈する土壙で、長さ1.45m、幅0.85mの大きさ。主軸方向はN73°30′Wを向く。上部は削平を受け、10cm前後の深さに残る。壙内の西側端には1ヶ所のみ緑泥片岩の塊石があり、東側では3対6ヶ所の対称的な位置に、緑泥片岩の塊石が配され、火熱を受けた痕跡がある。壙内の堆積土に焼土・木炭や灰が混ざり、中央部にやや集中している。塊石は、棺を浮かせて支える役割を果たしていたものと推定される。

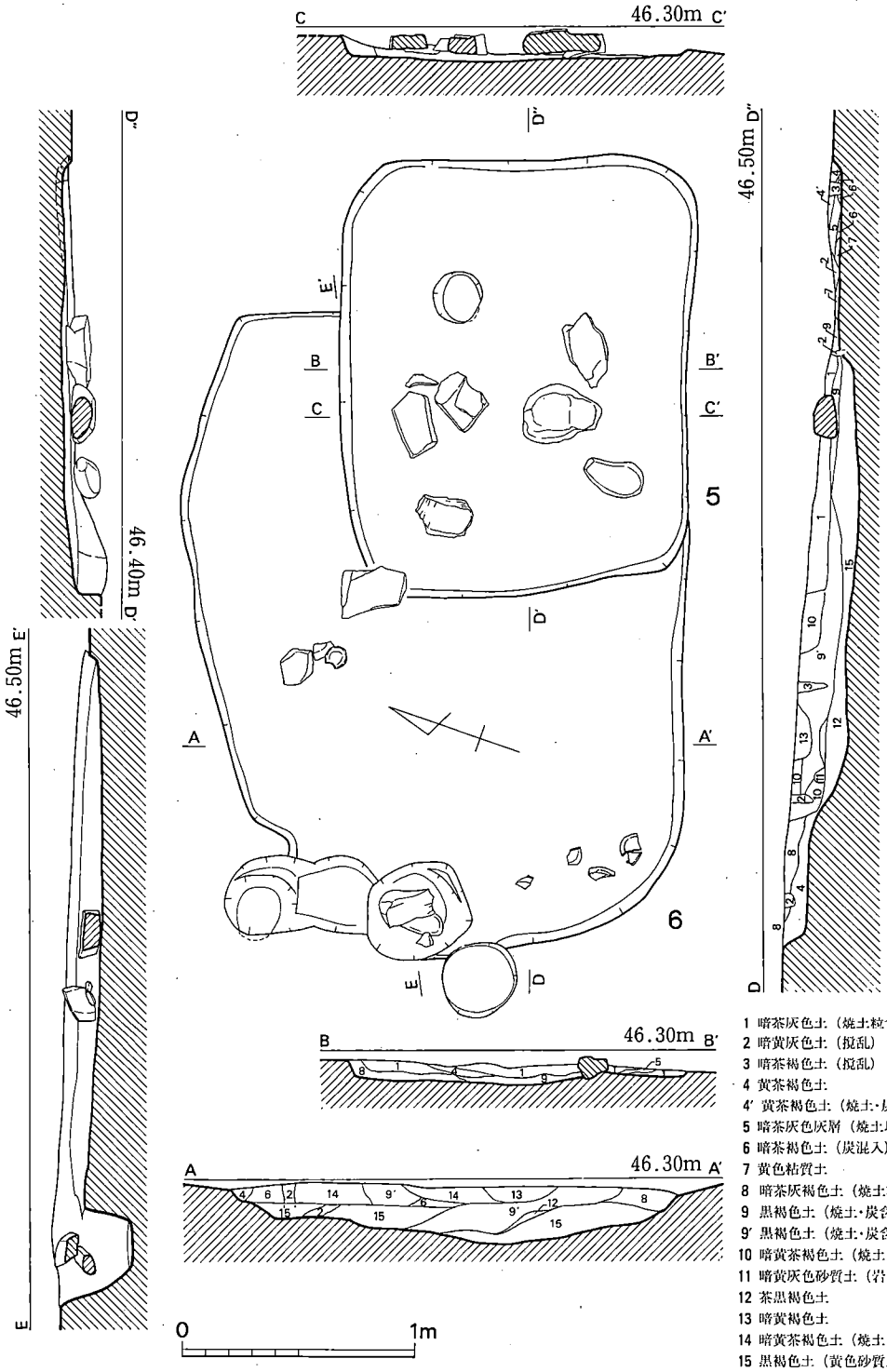
出土土器

糸切り底の土師器小皿片が数片出土したほか、ピット内から龍泉窯青磁破片が出土した。

糸切り底小皿片、龍泉窯系青磁の存在から13世紀以降であろう。

5号土壙墓（図版34-2・3、第80図）

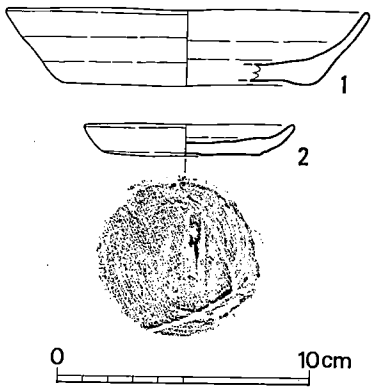
Ⅰ21区の北端で発見された、隅丸長方形の平面形を呈する土壙で、6・7号土壙と重複してこれらよりも後出する。長さ1.85m、幅1.50mの大きさ。主軸方向はN69°30′Eを向く。上部は削平を受け、10cm前後の深さに残る。壙内の西側寄り6ヶ所に緑泥片岩の塊石がみられ、火熱



1 暗茶灰色土（焼土粒含）
2 暗黄灰色土（撹乱）
3 暗茶褐色土（撹乱）
4 黄茶褐色土
4′ 黄茶褐色土（焼土・炭含）
5 暗茶灰色灰層（焼土塊・炭含）
6 暗茶褐色土（炭混入）
7 黄色粘質土
8 暗茶灰褐色土（焼土粒含）
9 黒褐色土（焼土・炭含）
9′ 黒褐色土（焼土・炭含）
10 暗黄茶褐色土（焼土・炭含）
11 暗黄灰色砂質土（岩風化したもの）
12 茶黒褐色土
13 暗黄褐色土
14 暗黄茶褐色土（焼土・炭含）
15 黒褐色土（黄色砂質土塊含）

第80図　5・6号土壙墓実測図（1/30）

を受けた痕跡がある。壙内の堆積土に焼土・木炭や灰が混ざり、塊石は棺を浮かせて支える役割を果たしていたものと推定される。土器などの遺物はみられなかった。



第81図　6号墓出土土器実測図（1/3）

6号土壙墓（図版35-1、第80図）

Ⅰ21区の北端で発見された、隅丸長方形の平面形を呈すると思われる土壙だが、7号土壙と重複して大半を失う。南北方向には1.70mを図るが、東西方向には0.55m程しか残らない。深さは約10cm残る。壙内の西壁際に柱穴状ピットがあり、緑泥片岩の塊石が含まれるが、土壙より後出する。壙内の堆積土に焼土・木炭や灰が混ざり、土師器杯片などが散在する。

出土土器（図版40、第81図）

土師器杯（1）　復原口径14.5cm、器高3.0cm、底径10.0cmの大きさの杯で、外底面には糸切り痕がみられる。胎土に赤褐色粒を含むが精良で、灰黄褐色に焼成されている。

土師器小皿（2）　口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.0cmの大きさの小皿で、外底面には糸切り痕がみられる。雲母を含むものの精良な胎土で、茶褐色に焼成されている。

この他に陶器壺小破片も出土した。

土師器杯・小皿の法量を大宰府での編年に対照して、13世紀頃であろう。

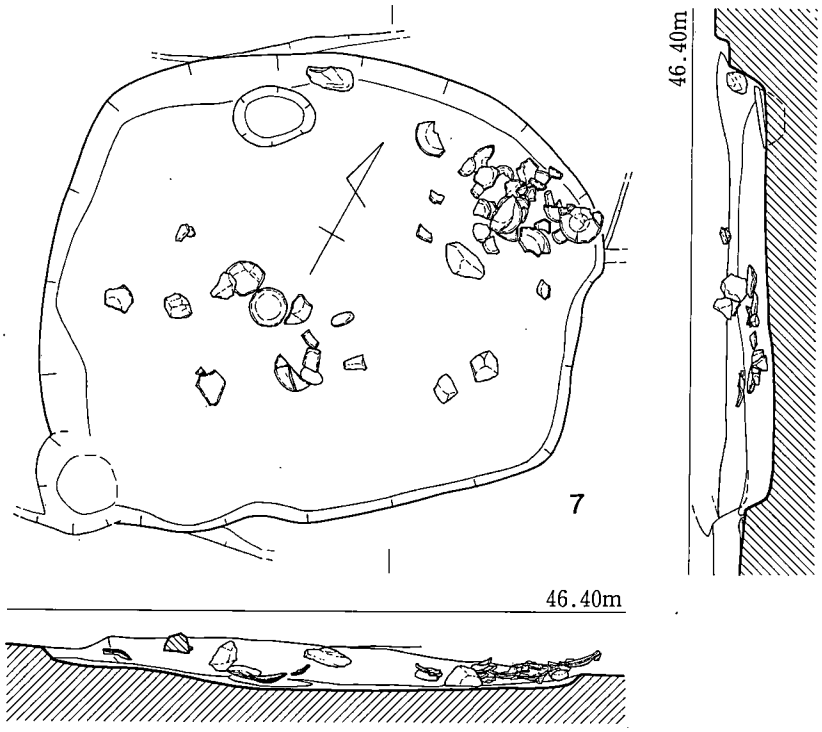
7号土壙墓（図版35-2、第82図）

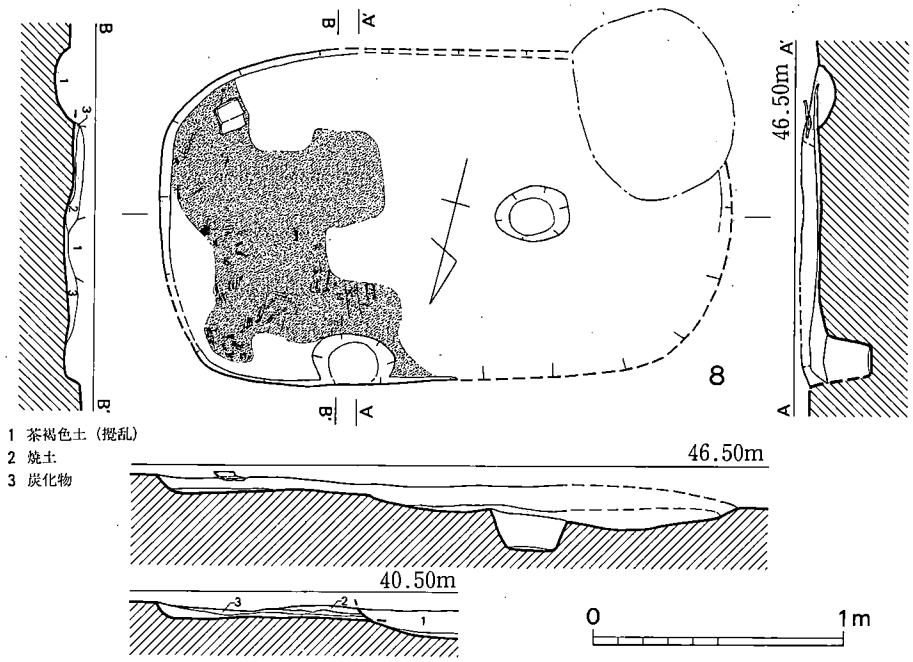
Ⅰ21区の北端で発見された、隅丸長方形ないし楕円形の平面形を呈する土壙で、6号土壙よりは後出するが5号土壙より先行する。長さ2.30m、幅2.00mの大きさ。主軸方向はN61°Wを向く。上部は削平を受け、20cm前後の深さに残る。壙内の北側寄りに緑泥片岩の塊石がみられ、火熱を受けた痕跡がある。壙内の堆積土に焼土・木炭や灰が混ざり、北東隅部に白磁碗、土師器杯・小皿類がまとまって出土し、中央部でも土師器杯などが出土した。

出土土器（図版40、第83～85図）

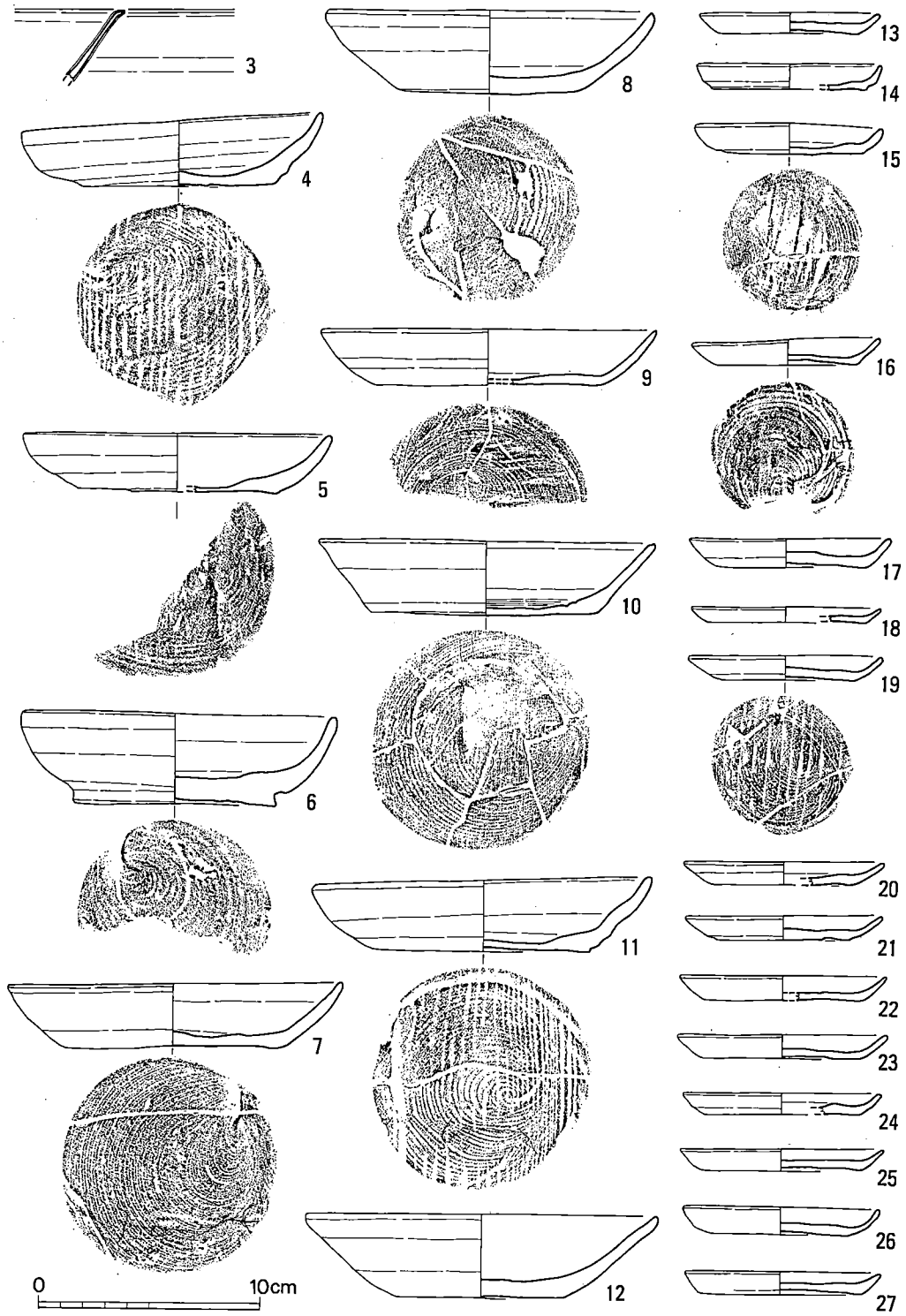
白磁碗（3・33）　ともに口縁端部が短く外反する碗で、33では口径16.8cm、器高5.8cmの大きさ。高台はやや高く、内面に沈線が巡る。精良な胎土で、緑白色の釉がかかるものの、外面の底部は露胎で、内底面見込みの釉は掻き取られている。

土師器杯（4～12・28・29）　4は口径13.7cm、器高2.9cm、底径8.8cmの大きさ。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。胎土に赤褐色粒・雲母を含むが、淡茶褐色に焼成されている。5は口径14.0cm、器高2.6cm、底径9.0cmの大きさ。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみら

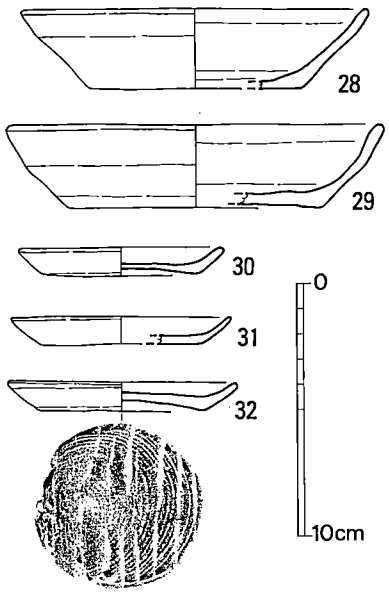




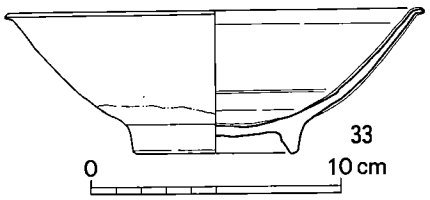
第82図　7・8号土壙墓実測図（1/30）



第83図　7号墓出土土器実測図1 (1/3)



第84図　7号墓出土土器実測図2（1/3）



第85図　7号墓出土土器実測図3（1/3）

れる。胎土に赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。6は復原口径14.3cm、器高3.8cm、底径9.0cmの大きさ。外底面には糸切り痕がみられる。胎土に赤褐色粒・雲母を含むが、灰黄褐色に焼成されている。7は口径15.2cm、器高3.4cm、底径10.1cmの大きさ。外底面には糸切り痕がみられる。胎土に赤褐色粒・雲母を含むものの精良で、暗黄茶褐色に焼成されている。8は口径15.0cm、器高3.7cm、底径10.2cmの大きさ。外底面には糸切り痕がみられる。9は復原口径15.2cm、器高2.5cm、底径10.2cmの大きさ。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。10は口径15.2cm、器高3.4cm、底径10.3cmの大きさ。外底面には糸切り痕がみられる。11は口径15.4cm、器高3.2cm、底径9.8cmの大きさ。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。12は復原口径16.0cm、器高3.9cm、底径7.5cmの大きさで、口径に対して底径が小さく、口縁の開きが大きい。外底面は磨滅して調整は不明。胎土に赤褐色粒を多く含むが、黄橙色に焼成されている。28は復原口径14.0cm、器高3.2cm、底径8.4cm、29は復原口径15.2cm、器高3.2cm、底径10.3cmの大きさ。口縁部は内彎気味に立ち上がり、外底面には糸切り痕がみられる。

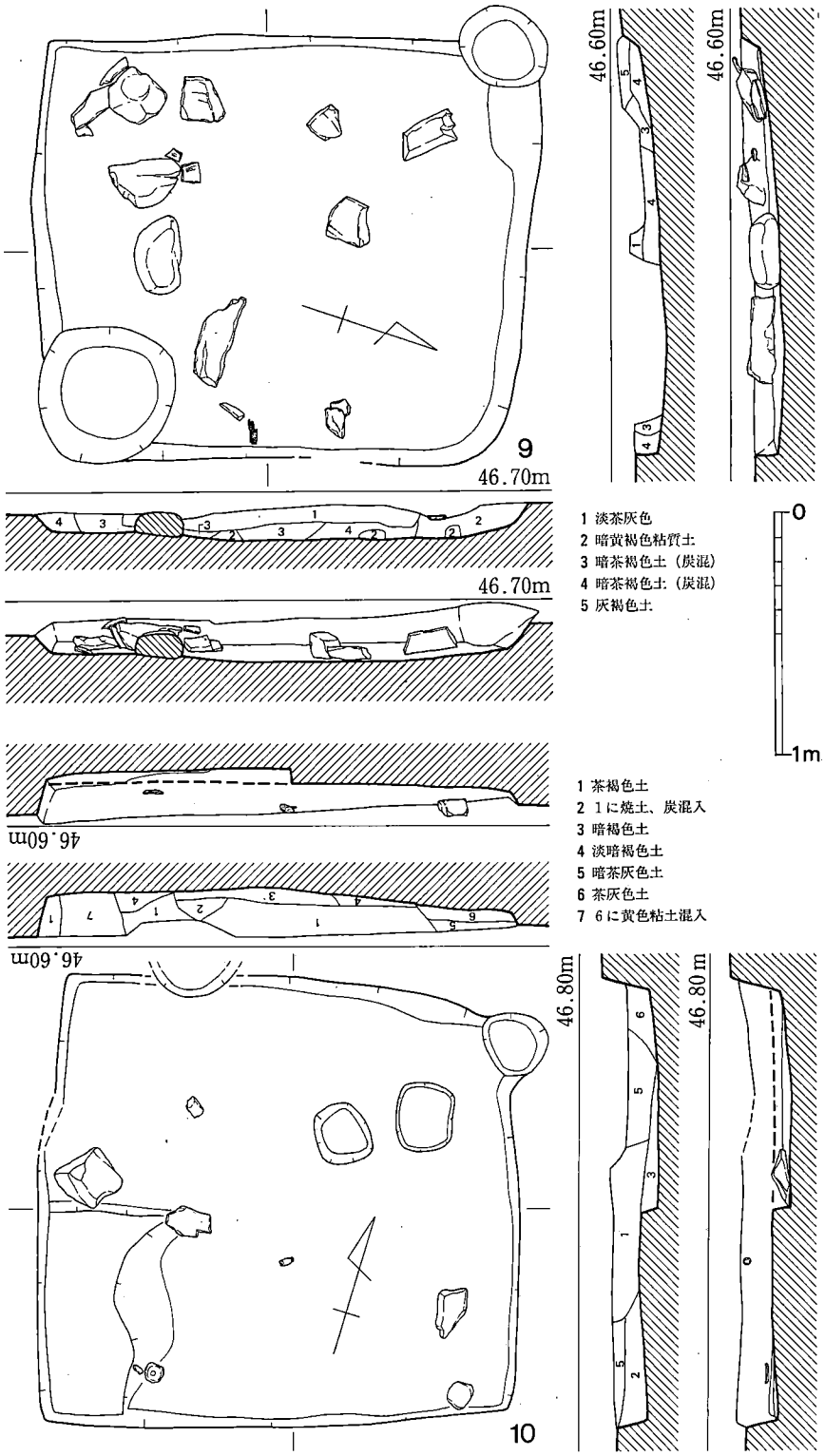
土師器小皿（13～27・30～32）　口径8.2cm～9.5cm、器高0.7～1.4cm、底径6.0～7.2cmの大きさで、口径9.0cm、器高1.1cm前後の例が多い。外底面には糸切り痕がみられ、15・16・19・23・32には板目圧痕もみられる。いずれも赤褐色粒・雲母などを含むことはあっても概ね精良な胎土で、淡茶褐色・橙褐色・灰黄褐色などの色調に焼成されている。

土師器杯・小皿の法量から、13世紀代に含まれるものとみられる。

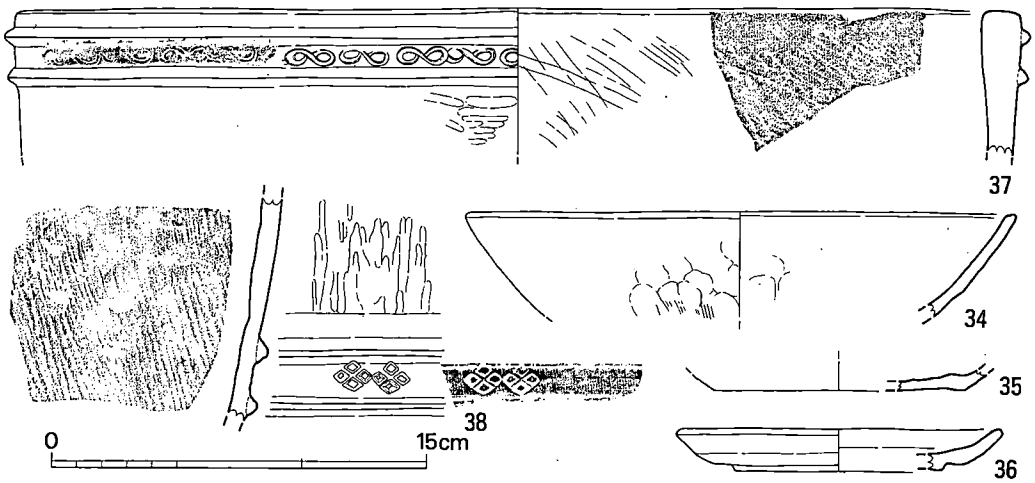
8号土壙墓（図版35-3・4、第82図）

Ⅰ23区の北端で発見された、隅丸長方形ないし楕円形の平面形を呈する土壙で、攪乱坑によって大半を失う。攪乱坑内に残る痕跡などから、長さ2.30m、幅1.30m、深さ10cm前後の規模と判断できる。主軸方向はN75°40′Eを向く。壙内の東側半分に焼土や炭化物が広がり、竹や藁らしい部分もみられる。土壙内の柱穴状ピットは、土壙よりも後世の掘り込みである。

出土土器



第86図 9・10号土壙墓実測図（1／30）



第87図　9号墓出土土器実測図（1/3）

土師質火鉢片などの小破片が出土したが、図示しえない。

火鉢片の存在から14世紀後半以降であろう。

9号土壙墓（図版36-1、第86図）

H21区の東南隅に発見されたが、1号土壙の北側に位置し、西側に接する5号土壙より先行する。隅丸方形の平面形を呈する土壙で、長さ2.10m、幅1.75mの大きさ。主軸方向はN19°Wを向く。上部を削平されて、15cm前後の深さしか残らない。北西隅と南東隅には後世の柱穴状ピットが掘り込まれている。壙内の北東寄りにはみられないが、壙内の西辺と南辺に近接して緑泥片岩の塊石が並ぶ。塊石には火熱を受けた痕跡もある。壙内の堆積土に焼土・木炭や灰が混ざる。

出土土器（図版40、第87図）

瓦器椀（34）　復原口径23.0cm、残存器高4.1cmの大きさの椀で、口縁部は内彎して立ち上がり、口唇部内面側に僅かな段をもつ。外面の下半部に指頭圧痕が残るナデ・ヨコナデで調整される。赤褐色粒などを若干含むが精良な胎土で、土師質のような暗黄橙色の色調に焼成されている。

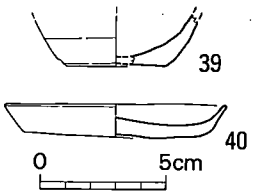
土師器杯（35・36）　35は口縁部を欠くが、復原底径10.0cmの大きさの、外底面に糸切り痕のみられる破片である。36は復原口径13.0cm、器高1.5cm、復原底径8.4cmの大きさの杯である。

瓦質火鉢（37・38）37は復原口径40.0cmの大きさで、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部外面に箍状の細い凸帯が2条巡り、凸帯間に逆S字状の鎖文様が連続押捺されている。外面は横方向へラミガキ、内面は粗いハケ目状の調整痕がみられる。38は底部に近い部分の破片であ

ろう。バケツ状に僅かに開くが、外面を縦方向へラミガキ、内面をハケ目調整していて、外面の下部に巡る２条の箍状凸帯間に四菱形文様が2つ単位で押捺されている。

このほかに、龍泉窯青磁らしい破片・土師質火鉢片・土師器小皿片なども出土したが、小破片のため図示しえない。

土師器杯の法量や、瓦質火鉢の存在から14世紀後半以降のものであろう。



第88図　10号墓出土土器実測図（1/3）

10号土壙墓（図版36-2、第86図）

H21区の北西隅に発見され、４号土壙の西側に位置する。南東側で11号土壙、西側で16号土壙と一部重複して、これらより後出する。また11号土壙とともに３号墳の周溝と重複するため、調査時に床面を掘り過ぎて、周溝底まで掘りさげた状態で写真図版が写っている。不整方形の平面形を呈する土壙で、長さ2.05m、幅1.90mの大きさ。主軸方向はN19°Wを向く。上部を削平されて、15cm前後の深さしか残らない。北東隅には後世の柱穴状ピットが掘り込まれている。壙内の南東寄りと、西部に緑泥片岩の塊石がみられ、塊石には火熱を受けた痕跡もある。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざる。

出土土器（図版40、第88図）

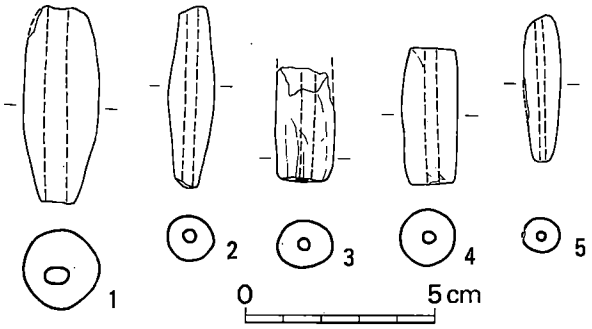
土師器小皿（39・40）　39は口縁部を欠くが、復原底径4.0cm、残存器高2.0cmの大きさの小皿で、外底面には糸切り痕がみられる。40は復原口径8.8cm、器高1.3cm、底径7.2cmの大きさで、外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。いずれも胎土に赤褐色粒・雲母を含み、灰黄褐色に焼成されている。

このほかに、須恵器小片、白磁片・同安窯青磁らしい破片も出土したが、図示しえない。

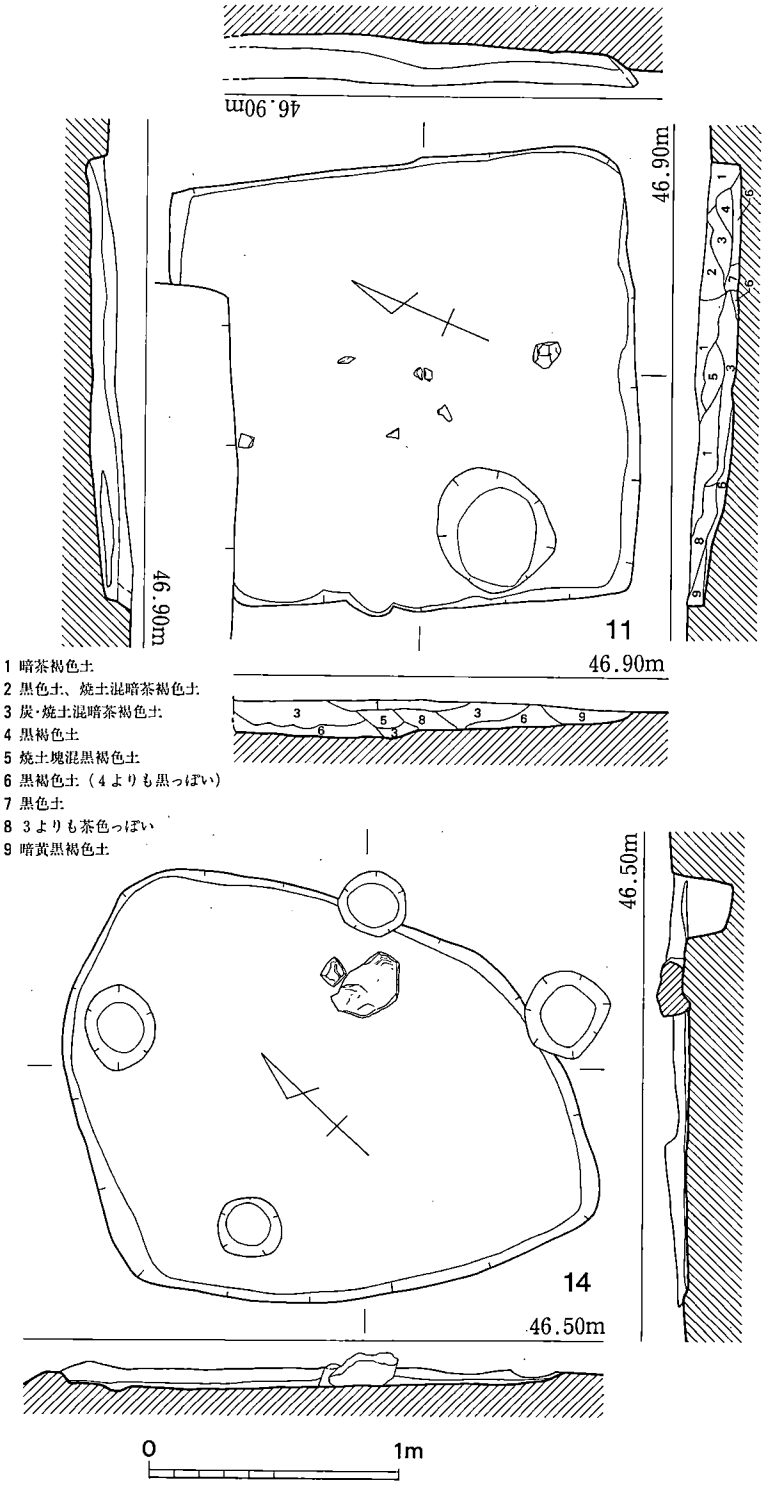
土師器小皿の法量からみて14世紀後半以降であろう。

土製品（図版42-1、第89図）

管状土錘（１～３）　いずれも殆ど砂粒を含まない精良な胎土を用い、棒状の芯に絞るように巻き付けてナデ調整する。１は中程が膨らむ形で、長さ5.1cm、外径2.1cmの大きさのもので、重量18.3gを測る。２は中程が膨らむ形で、長さ4.8cm、外径1.2cmの大きさのもので、重量5.7gを測る。３は円筒形で、一端を欠いて残



第89図　墓壙出土土製品実測図（1/2）



第90図　11・14号土壙墓実測図（1/30）

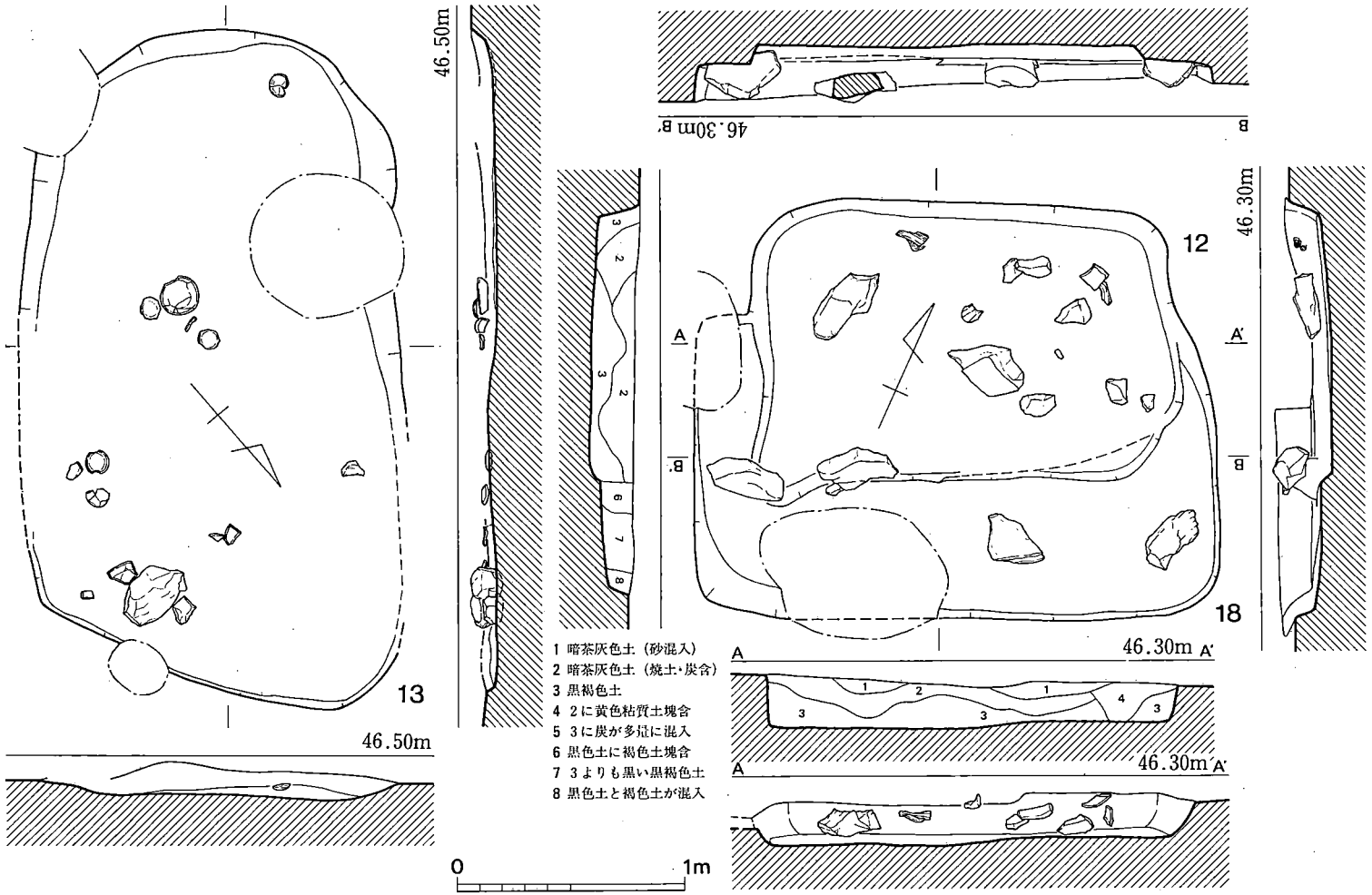
存長3.0cm、外径1.5cmの大きさのもので、重量5.3gを測る。

金属製品（図版42-1、第98図）

古　銭（1）　外径2.1cm、孔の一辺0.7cm、厚さ0.1cmの大きさで、銹化が進むこともあるが、表裏ともに銭銘は読めない。いわゆる渡来銭よりも小振りで、肉薄、郭抜けもみられることから、鋳写しの鐚銭であろう。

11号土壙墓（図版36-3、第90図）

H21区に発見され、6号土壙の北側に位置する。北西側で10号土壙と一部重複するが、10号よりも先行する。また10号土壙とともに3号墳の周溝と重複する。隅丸方形の平面形を呈する土壙で、長さ1.85m、幅1.80mの大きさ。主軸方向はN23°Wを向く。上部を削平されて、10cm前後の深さしか残らない。南隅部には後世の柱穴状ピ

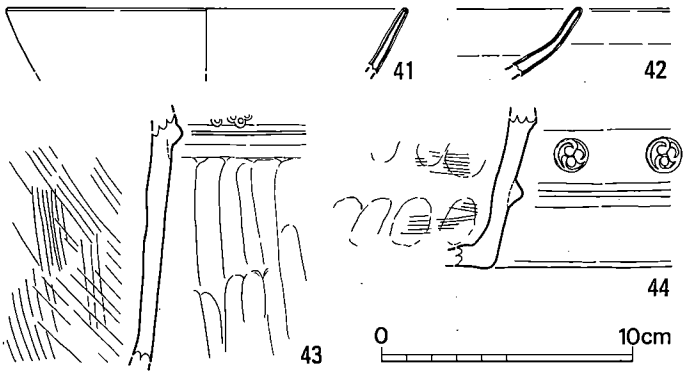


第91図　12・13・18号土壙墓実測図（1/30）

ットが掘り込まれている。
壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざる。

出土土器

外底面に糸切り痕のある土師器杯破片・土師器小皿片や、瓦器椀の破片、口縁部に平行する2条の箍状凸帯間に逆S字紋が連続押捺される瓦質火鉢片などが出土している。



第92図　12号墓出土土器実測図（1/3）

瓦質火鉢の存在から、14世紀後半以降であろう。

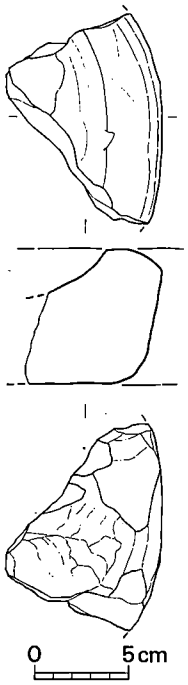
12号土壙墓（図版37-1、第91図）

H21区に発見され、4号と9号土壙の間、11号土壙の東側に位置する。北西側で4号土壙と一部重複するが、4号よりも先行する。隅丸方形の平面形の土壙で、長さ1.85m、幅1.25mの大きさ。主軸方向はN66°Eを向く。上部を削平されているが、20cm前後の深さが残る。また3号墳の周溝とも重複していて、調査時に床面を一部掘り過ぎて周溝埋没土に至っている部分がある。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざるものの、南側に重複する18号土壙の堆積土との差はあまり顕著ではない。壙内床面より僅かに浮いた状態に、焼けて赤変した緑泥片岩や花崗岩・安山岩の塊石がみられ、南側壁際の上部にも塊石がみられる。

出土土器（図版41、第92図）

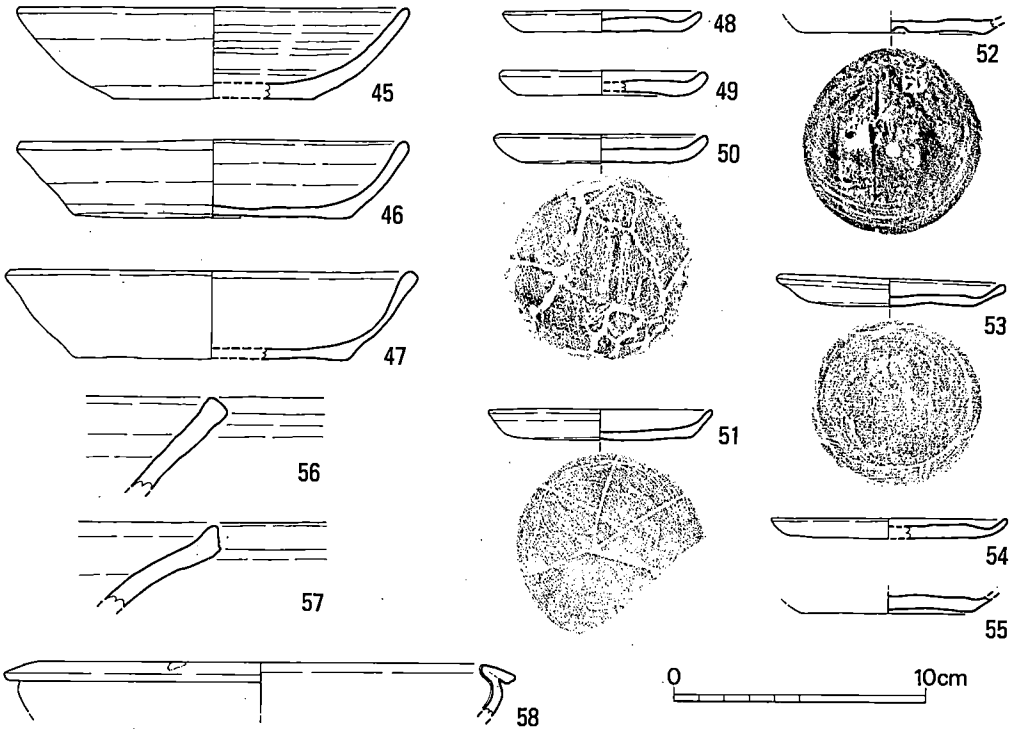
白磁碗（41）　復原口径16.2cmの大きさの、口縁部にかけて内彎気味に開く碗の口縁部破片で、精良な胎土を用いて、白灰色に焼成される。釉は淡緑灰色を呈し、やや厚くかかる。

陶器碗（42）　小破片で口径を復原しえないが、内彎気味に立ち上がる口縁部破片で、端部は外反気味である。幾分か砂っぽい胎土を淡灰色に焼成していて、釉は暗灰色を呈する。



第93図
12号墓出土石製品実測図（1/4）

土師質火鉢（43・44）　43は外面を縦方向のヘラミガキ、内面を粗いハケ目調整する火鉢の胴部破片で、箍状凸帯間に梅花紋らしい文様が押捺される。44は底部破片で、内面はハケ目とナデで調整されるが指頭圧痕が残る。外面に巡る2条の箍状凸帯間に三つ巴文様が押捺される。



第94図　13号墓出土土器実測図（1/3）

いずれも胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母などを含み、淡茶灰色に焼成されている。

このほかに、須恵器破片、白磁片、外面に縦の太い凹線が並ぶ同安窯青磁碗の破片などが出土したが、いずれも小破片のため図示しない。

土製品（図版42-1、第89図）

管状土錘（4）　殆ど砂粒を含まない精良な胎土を用い、棒状の芯に絞るように巻き付けてナデ調整されたもので、円筒形の管状土錘。長さ3.6cm、外径1.5cm、重量8.8gを測る。

石製品（図版42-1、第92図）

石臼片　花崗岩製の、下臼の受け皿縁部破片。高さ7.2cm、縁上端の厚み3.0cm、底側の厚み4.0cm程で、縁の復原外径は30cm前後であろう。

土師質火鉢の存在から、14世紀後半以降であろう。

13号土壙墓（図版37-2、第91図）

Ⅰ22区南東隅に発見され、3号土壙の北西側に位置する。北東側で14号土壙と重複するが、14号よりも先行する。不整楕円形の平面形を呈する土壙で、長さ3.00m、幅1.25mの大きさ。主軸方向はN40°Eを向く。上部を削平されて、5cm前後の深さしか残らない。壙内の堆積土には

焼土・木炭や灰が混ざる。なお図で東側床面にある塊石は14号土壙に伴う可能性もある。

出土土器（図版41、第94図）

土師器杯（45～48）　いずれも外底面に糸切り痕がみられる杯である。この他に外底面に板目圧痕のみられる破片も出土した。45は復原口径15.6cm、器高3.6cm、底径8.0cmの大きさ。46は口径15.6cm、器高3.0cm、底径11.0cm、47は復原口径16.3cm、器高3.5cm、底径11.0cmの大きさ。赤褐色粒などを含むが精良な胎土で、茶褐色・淡茶褐色などに焼成されている。48の口縁部外面には墨書の落書きらしい痕跡がみられる。

土師器小皿（49～55）　いずれも外底面に糸切り痕がみられ、板目圧痕のみられる例もある。口径8.0cm、器高0.9cm、底径6.3cmの大きさから、口径9.0cm、器高1.2cm、底径7.2cm程度の大きさの幅がある。細砂粒・赤褐色粒などを含むが精良な胎土で、灰茶褐色・淡茶褐色などの色調に焼成されている。

土師質こね鉢（56）　直線的に開く口縁部破片で、端部は拡張気味に整えられる。胎土に砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。

須恵質こね鉢（57）　口縁部破片だが、端部付近で内彎気味に開き、口唇部は拡張気味につまみ上げられる。胎土に細砂粒を含み、硬めに焼成されて、淡灰色を呈する。

陶器鉢（58）　内傾する口縁部をハ字状に折り返して外側の端部が垂れ気味となり、体部の肩が張る器形の鉢で、口縁部のみの破片である。緑がかった茶褐色の釉がかかり、口縁上に目土跡がある。

このほかに、口縁が強く外反する龍泉窯系の青磁杯の口縁部破片なども出土したが、図示していない。

土師器杯・小皿の法量から12世紀後半～13世紀の幅をもつが、口縁が強く外反する龍泉窯系の青磁杯の存在から13世紀代に相当するであろう。東播磨系らしい須恵質こね鉢は14世紀に近いことを示すものであろう。

14号土壙墓（図版37-2、第90図）

Ⅰ21区とⅠ22区の境に発見され、３号土壙の北側に位置する。南西側で13号土壙と重複するが、13号よりも後出する。平面が不整円形を呈する土壙で、長さ2.20m、幅1.65mの大きさ。主軸方向はN33°Wを向く。上部を削平されて、5cm前後の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、東側床面に接して火熱を受けた緑泥片岩の塊石が1点みられる。

出土土器

土師器杯の小破片が出土したが、図示しえない。

15号土壙墓

（図版37-3、第95図）

Ⅰ22区北東隅に発見され、14号土壙の北側に重複するが、14号土壙よりも先行する。平面が隅丸長方形を呈する土壙で、長さ2.00m、幅1.40mの大きさ。主軸方向はN19°30′Wを向く。上部を削平されて、10cm前後の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、東西両端の床面に暗茶褐色土の詰まった溝状の抜き痕がみられる。また中央部を横断する黒色土の詰まった亀裂状の落ち込みもみられた。

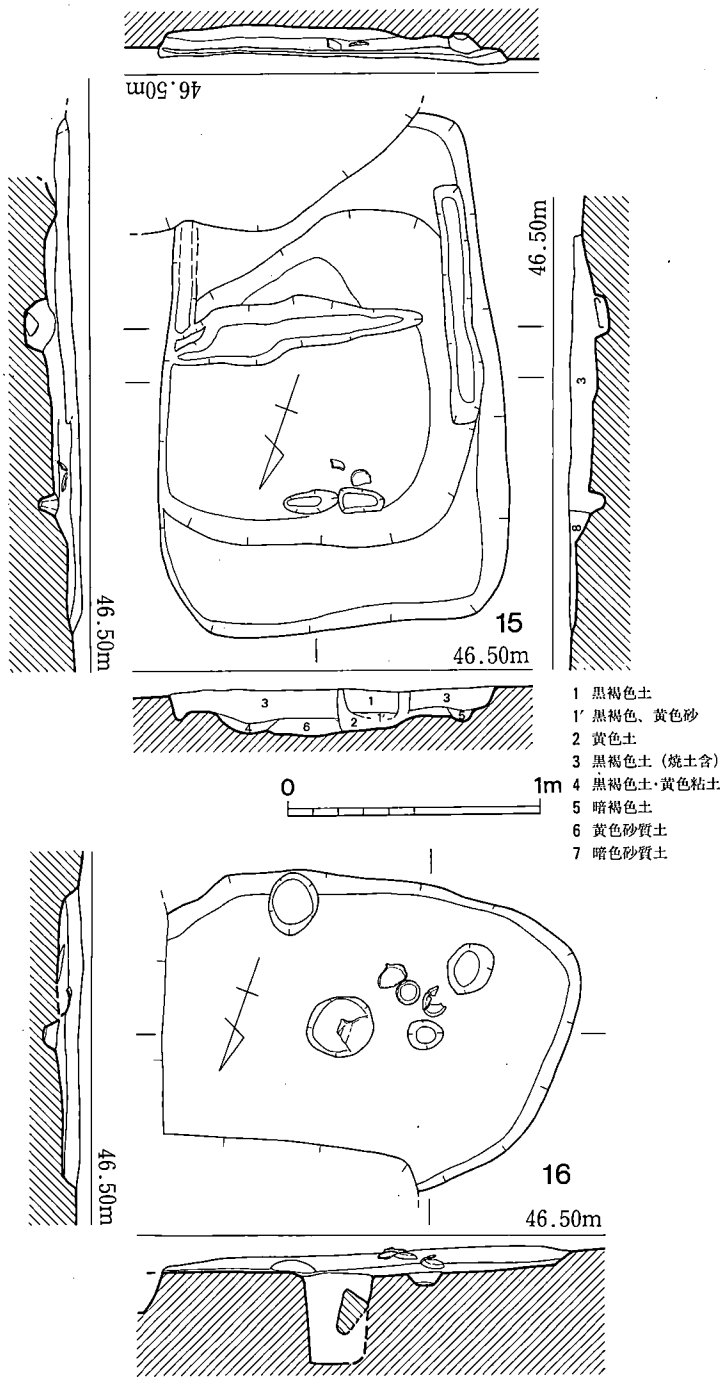
出土土器（図版41、第96図）

青磁碗（59）　口縁部内面に2条の沈線が横走する破片で、外面は無文らしい。龍泉窯系の青磁碗であろう。

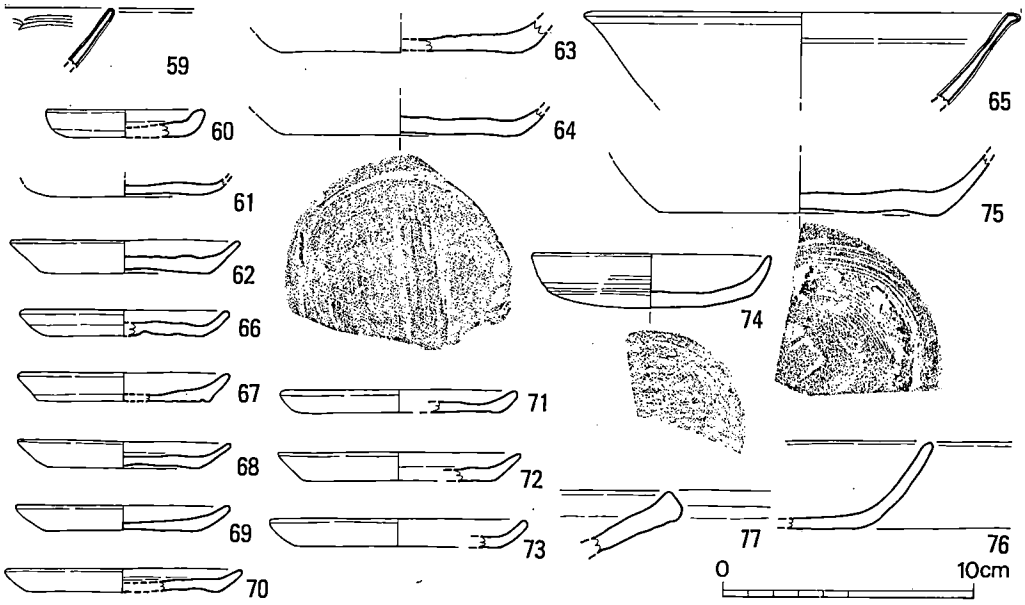
土師器小皿（60～62）　いずれも外底面に糸切り痕を有する小皿である。60は復原口径6.6cm程、器高1.1cmの大きさで、口縁部は厚めで短い。61・62は同規模の小皿で、62は口径9.2cm、器高1.3cmの大きさ。

このほかに、土師器杯の破片や瓦器椀の破片も出土したが、図示しえない。

土師器小皿の法量から、14世紀代であろう。



第95図　15・16号土壙墓実測図（1/30）



第96図　15～17号墓出土土器実測図（1/3）

16号土壙墓（図版36-2、第95図）

H22区東隅に発見され、15号土壙の北側に位置する。10号土壙と３号墳周溝と重複するが、10号土壙よりも先行する。平面が楕円形を呈するとみられる土壙で、長さ1.65m以上、幅1.20m以上の大きさ。主軸方向はN70°40′Eを向く。上部を削平されて、５cm前後の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、西寄りに土師器杯が出土した。柱穴状ピットは後世のものであろう。

出土土器（図版41、第95図）

土師器杯（63・64）　糸切り痕を外底面に残す杯片で、口縁部を欠くが底径10cm程の大きさである。64では外底面に板目圧痕がみられる。

このほかに、小破片だが土師質擂鉢の口縁部破片などが出土した。

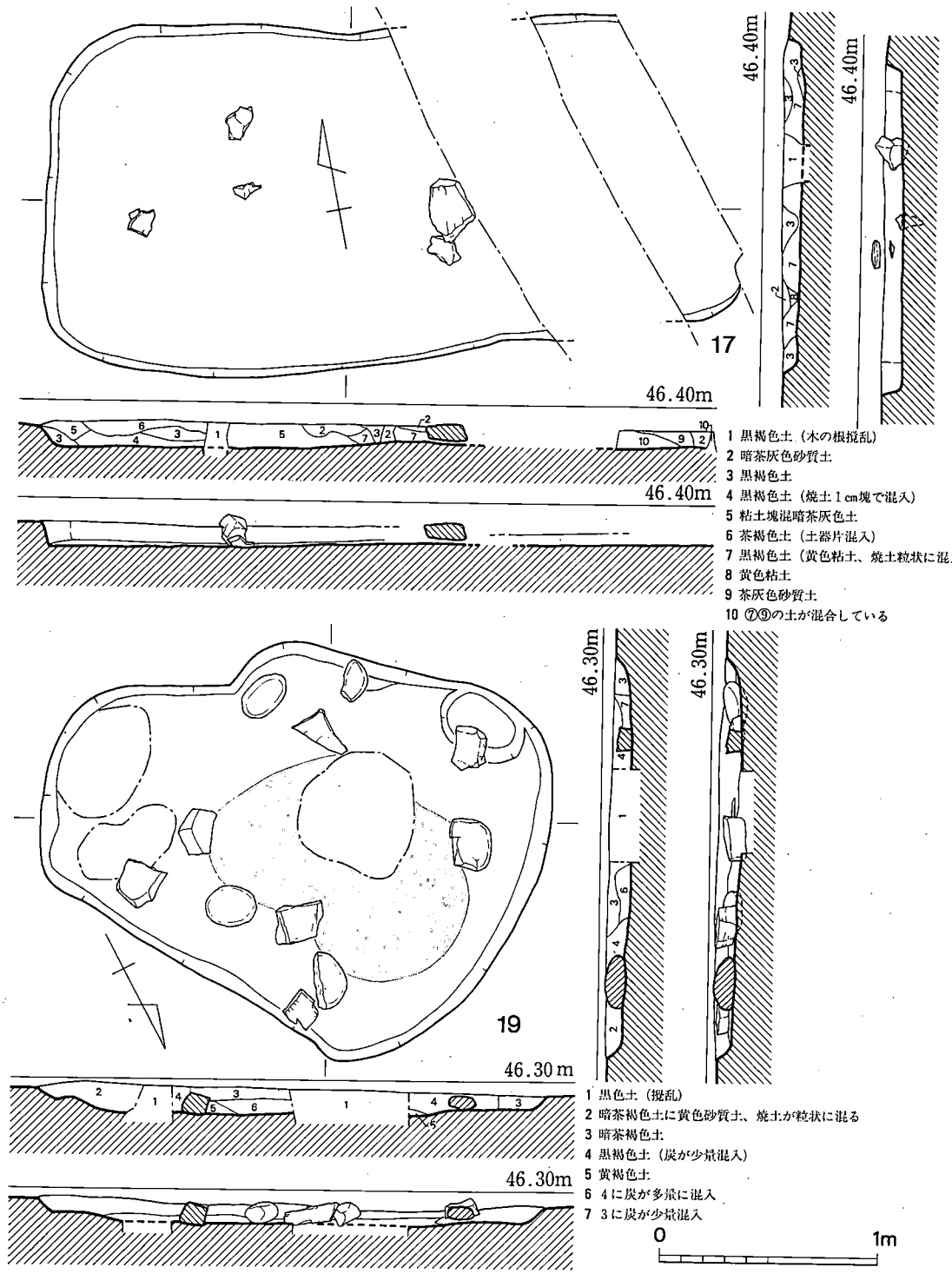
土製品（図版42-1、第89図）

管状土錘（５）　殆ど砂粒を含まない精良な胎土を用い、棒状の芯に絞るように巻き付けてナデ調整されたもので、中膨らみの管状土錘。長さ3.8cm、外径1.0cm、重量8.7gを測る。

土師質擂鉢片の存在から、14世紀代とみられる。

17号土壙墓（図版38-1、第97図）

G17区とH17区の境に発見され、２号住居跡の東隅と重複するが、住居跡よりも後出する。東側は葡萄畑の施肥による攪乱溝で失う。平面が隅丸長方形を呈する土壙で、長さ3.20m以上、

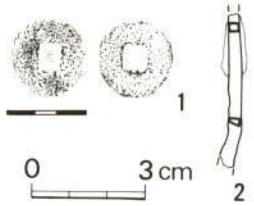


第97図　17・19号土壙墓実測図（1/30）

幅1.60mの大きさ。主軸方向はN79°Wを向く。上部を削平されて、10cm前後の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、中央部に焼けた緑泥片岩の塊石がみられる。

出土土器（図版41、第96図）

白磁碗（65）　復原口径17.4cmの大きさの、口縁端部が短く外反する碗の口縁部破片で、口縁部内面に沈線が1条巡る。



第98図　墓壙出土金属製品実測図（1/2）

土師器小皿（66～73）　いずれも外底面に糸切り痕を残す小皿で、66・67・70などに板目圧痕がみられる。小破片から復原したため復原口径に不安が残るが、復原口径8.4cm～10.4cm、器高1.0～1.1cmの大きさで、完形の68や69では口径8.6cm、器高1.1cmの大きさを測る。

土師器杯（74・75）　74は底径を知りうる大きさの破片で、復原底径11.0cm程の大きさ。口縁部を欠き、外底面には糸切り痕と板目圧痕が残る。75は口径を復原しえないが、器高3.5cm程の大きさで、口縁部はやや内彎気味に立ち上がり、外底面には糸切り痕がみられる。

瓦器小皿（76）　復原口径9.6cm、器高2.1cmの大きさの小皿で、底部から口縁部には内彎して立ち上がる。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。内面と外面の一部はヘラミガキ調整される。

土師質こね鉢（77）　体部は直線的に開くが、口縁部は内面側に凹みをもち、口縁端部は肥厚気味で、口唇部が上方につまみ上げられたような形状を呈する。

このほかに、瓦器椀、同安窯青磁碗の小破片が出土したが、図示しえない。

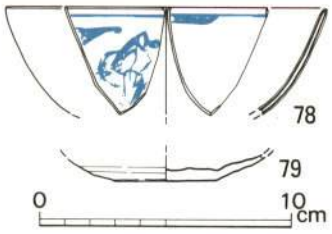
鉄製品（図版42-1、第98図）

用途不明鉄製品（6）　両端部を欠損する棒状で方形断面の製品だが、一方の端部側では断面三角形に近い、残存長4.1cm、太さ0.3cmの大きさ。

土師器小皿の法量から、13世紀後半～14世紀頃に相当するが、土師質こね鉢の存在からみて14世紀頃の可能性が高い。

18号土壙墓（図版37-1、第91図）

H21区に発見され、12号土壙の南側に重複する。11号土壙の東側に位置して、西端部は11号土壙との間に後世の柱穴状ピットが掘り込まれている。さらに3号墳の周溝とも重複する。隅丸方形の平面形を呈する土壙で、長さ2.30m、幅1.30mの大きさ。主軸方向はN66°Eを向く。上部を削平されているが、20cm弱の深さが残る。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、北側に重複する12号土壙の堆積土との差はあまり顕著ではない。



第99図　19号墓出土土器実測図（1/3）

なお、壙内南側の床面に接して、焼けた緑泥片岩塊石が並ぶものの、南西側の壁と重複して後世の攪乱穴が切り込んでいて、塊石を失った可能性もある。

出土土器

須恵器甕片や土師器小皿片と土師器手捏ねの杯片などが出土したが、小破片のため図示しえない。

19号土壙墓（図版38-2、第97図）

Ｅ18区南端に発見され、２号住居跡の北側に位置する。平面形が羽子板に近い楕円形を呈する土壙で、長さ2.30m、幅1.70mの大きさ。主軸方向はN62°Wを向く。上部を削平されて、10cm弱の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、壙内中央部の床面に長径1.20m、短径0.80mの範囲に焼土・灰などの集中する部分がみられた。また床面に接して、11個の緑泥片岩・安山岩質および砂岩質の塊石が焼土・灰の集中する範囲を囲むように並ぶが、いずれも焼けて赤変あるいは煤けて黒くなった部分がみられる。写真図版にみられる、床面を掘り込むやや深い穴は後世の攪乱穴である。

出土土器（図版42-1、第99図）

染付碗（78）　攪乱穴から出土した。口縁部が内彎気味に立ち上がる丸型の染付碗で、復原口径12.8cmの大きさ。コバルトブルー色で、口唇部直下の内外面に双直線、外面に草花かと思われる文様が描かれている。精良で白い磁質の胎土が使用されている。

土師器杯（79）　口縁部を欠くが、底径4.1cmの大きさで、口縁部側へは内彎気味に立ち上がる模様である。胎土に赤褐色粒・雲母を含むが精良な胎土で、橙褐色に焼成されている。

このほかに、図示し得ないが、玉縁状に肥厚する口縁と、短く外反する口縁の白磁碗や、同安窯系らしい青磁皿片が出土した。

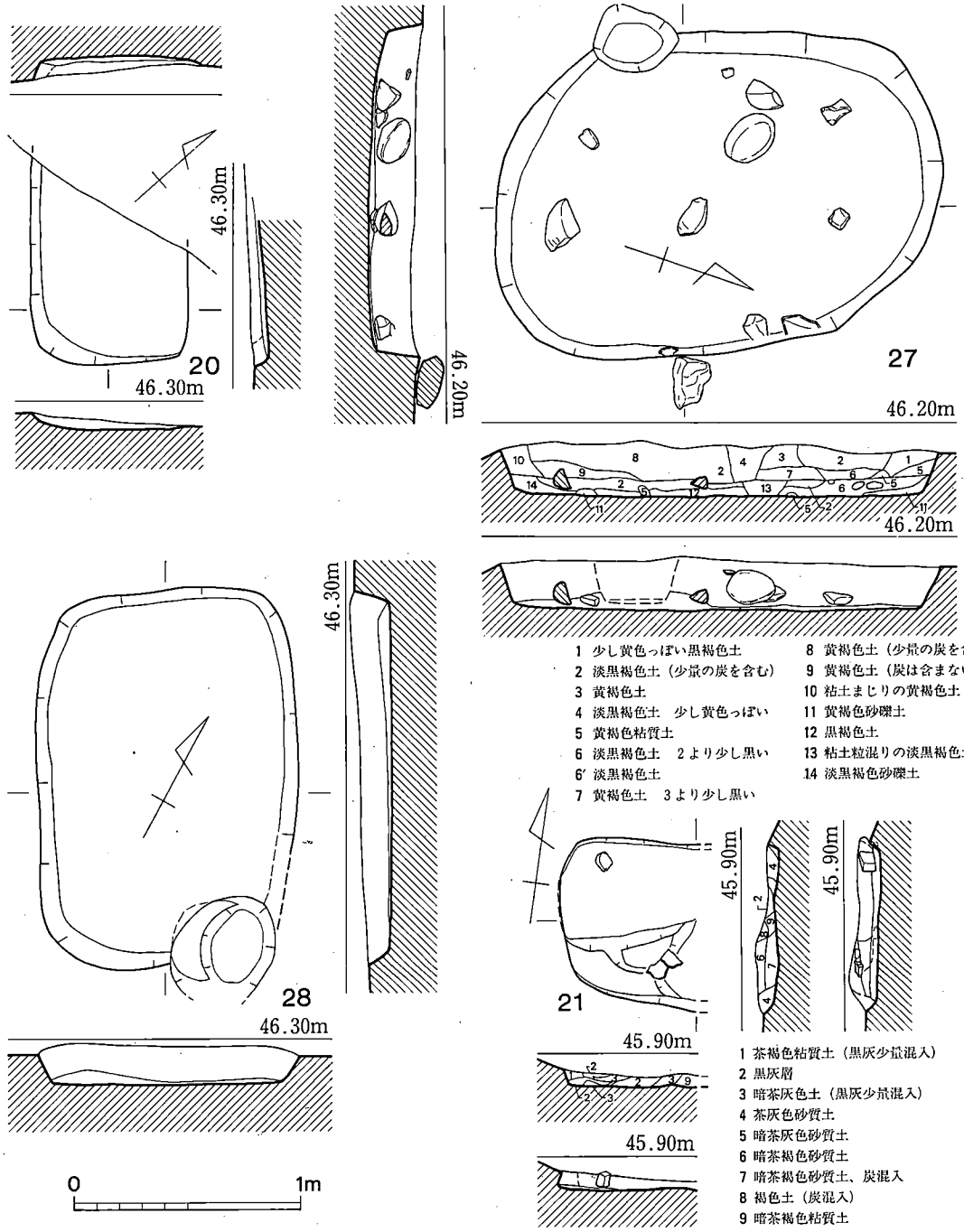
染付碗は、17世紀になると伊万里などで国産品が量産されるようになる。見込みや高台などの特徴は分からないが、18世紀以降であろう。

20号土壙墓（第100図）

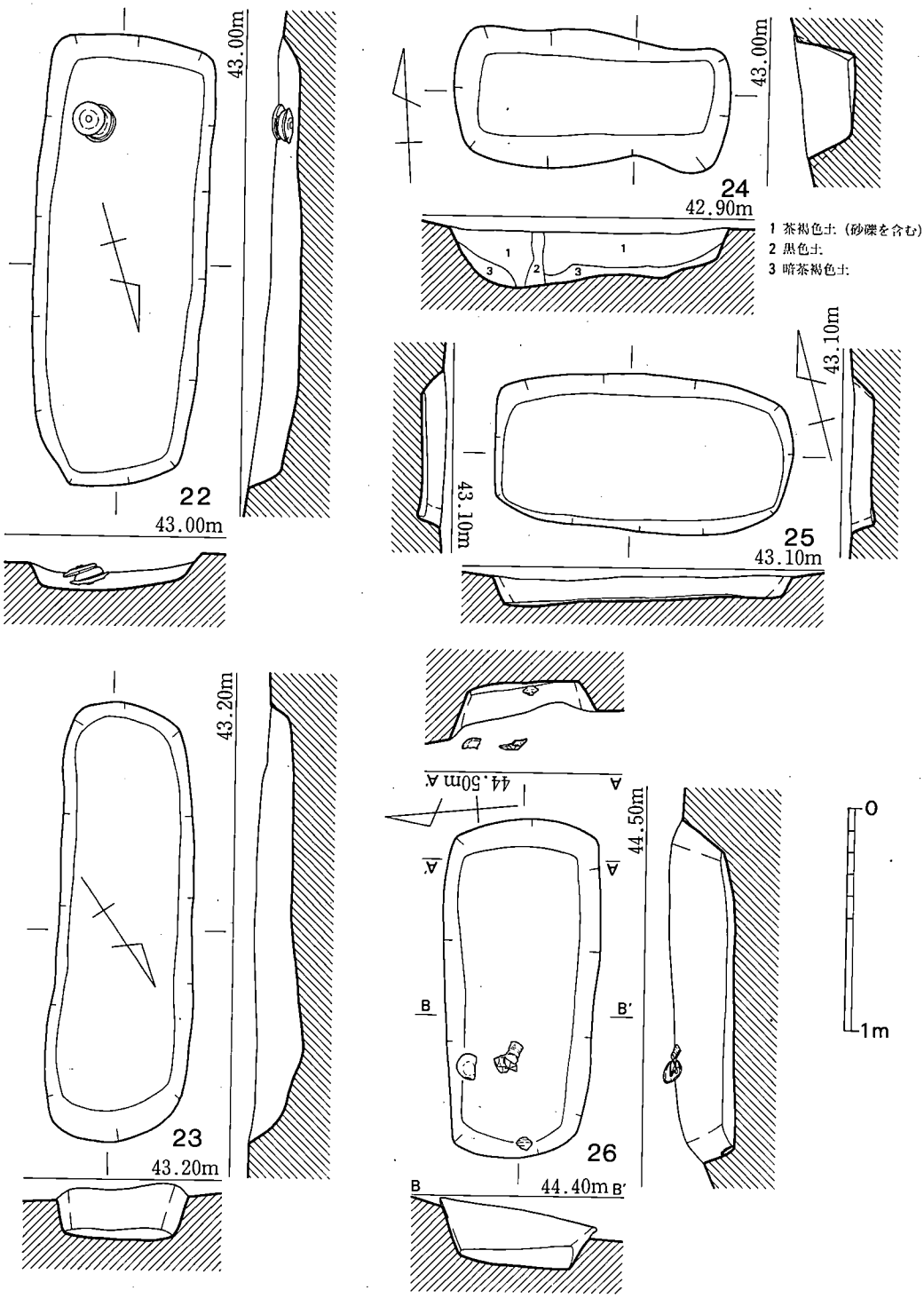
Ｉ21区に発見され、５号土壙の南側に位置して、大半を５号土壙に切られる。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ0.70m以上、幅0.70mの大きさ。主軸方向はN41°Wを向く。上部を削平されて、５cm程の深さしか残らない。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざる。

21号土壙墓（第100図）

Ｊ21区に発見され、２号土壙の東側に位置し、落ち込み遺構とも重複していて東半分は不明確である。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ0.60m以上、幅0.70mの大きさ。主軸方向は

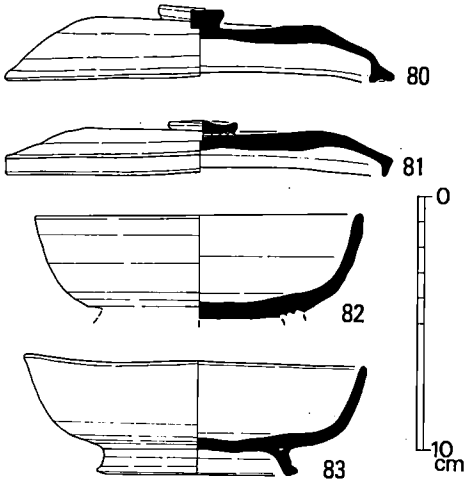


第100図　20・21・27・28号土壙墓実測図（1/30）



第101図　22～26号土壙墓実測図（1/30）

N82°Eを向く。上部を削平されて、5㎝程の深さしか残らない。壙内の堆積土には炭や灰が混ざる。



第102図　22号墓出土土器実測図（1/3）

22号土壙墓（図版38-3、第101図）

J11区に発見され、後述する23号～25号土壙と近接した位置にある。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ2.00m、幅0.80m弱の大きさ。主軸方向はN17°Eを向く。上部を削平されて15㎝程の深さしか残らない。壙内には灰茶褐色土が堆積し、顔料等はみられなかった。南端部に須恵器杯蓋と杯身が重なって出土した。床面は北側がやや深めになり、僅かに西側が高めである。

出土土器（図版42-1、第102図）

須恵器杯蓋（80・81）　80は身受けのかえりを有する杯蓋で、平坦な天井部に低く平らなつまみが付く。口径14.0㎝、受け部外径15.6㎝、器高2.5㎝の大きさ。81は鳥嘴状のかえりを有する杯蓋で、回転ヘラ削りされる外天井に扁平な疑宝珠状のつまみが付く。口径15.4㎝、器高2.2㎝の大きさ。いずれも胎土に若干砂粒を含み、灰色に固く焼成されている。

須恵器杯身（82・83）　82は高台が剝落している。口径13.2㎝、残存器高4.0㎝の大きさで、やや内彎気味に口縁部が立ち上がる。底部はヘラ削りされて、高台を貼り着ける部分にカキ目が施されている。83は82に比して口縁部が幾分か直線的に立ち上がり、高台は裾に開いて跳ね気味である。胎土に若干砂粒を含み、灰色に焼成されている。口径13.8㎝、器高4.5㎝、高台径8.0㎝を測る。

須恵器杯蓋・杯身の特徴は、7世紀末～8世紀初頭頃に相当する。

23号土壙墓（図版38-4、第101図）

J11区に発見され、22号土壙の北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ2.00m弱、幅0.60mの大きさ。主軸方向はN34°40′Eを向く。上部を削平されるが、20㎝程の深さに残る。壙内には灰茶褐色土が堆積し、顔料等はみられなかった。床面は北側がやや深めである。

24号土壙墓（図版39-1、第101図）

J12区に発見され、22号土壙の西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ1.25m、幅0.60mの大きさ。主軸方向はN86°Wを向く。上部を削平されるが、25㎝程の深さに残る。壙内には茶褐色土および暗茶褐色土が堆積し、顔料等はみられなかった。床面は西側がや

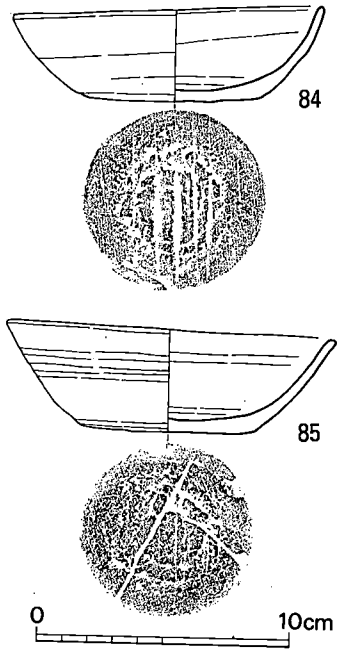
や深めである。

25号土壙墓（図版39-2、第101図）

Ｊ９区とＪ10区の境に発見され、22号土壙の東側に幾分距離を挟んで位置する。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ1.35m、幅0.70mの大きさ。主軸方向はＮ75°Ｗを向く。上部を削平されて10cm程の深さしか残らない。壙内には暗茶褐色土が堆積し、顔料等はみられなかった。床面は西側がやや深めである。

26号土壙墓（図版39-3、第101図）

Ｇ10区西端に発見され、６号墳と９号墳の間に位置する。平面形は隅丸長方形を呈していて、長さ1.50m、幅0.70mの大きさ。主軸方向はＮ84°30′Ｗを向く。上部を削平されるが30cm程の深さに残る。壙内には暗茶褐色土が堆積し、顔料等はみられなかった。西側の堆積土上部に土師器杯、西壁の下部に接して土師器小皿片が出土した。床面は西側がやや深めである。



第103図　26号墓出土土器実測図（1/3）

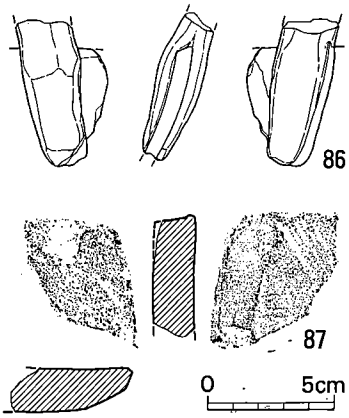
出土土器（図版42-1、第103図）

土師器杯（84・85）　ともに外底面に糸切り痕と板目圧痕がみられる。84は口径12.4cm、器高3.5cm、底径7.1cmの大きさ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。85は口径13.1cm、器高4.0cm、底径7.0cmの大きさ。口縁部の立ち上がりは84に比して直線的である。84・85ともに胎土に赤褐色粒を含み、灰黄褐色ないし灰茶褐色の色調に焼成されている。

土師器杯の法量からみて14世紀前半頃であろう。

27号土壙墓（図版39-4、第100図）

Ｌ22区に発見され、５号墳周溝の西側に位置する。平面形が楕円形を呈する土壙で、長さ2.00m、幅1.40mの大きさ。主軸方向はＮ19°Ｗを向く。上部を削平されるが、20cm程の深さに残る。壙内の堆積土には焼土・木炭や灰が混ざり、床面に接して数個の緑泥片岩・安山岩質および砂岩質の塊石が並び、いずれも焼けて赤変あるいは煤けて黒くなった部分がみられる。



第104図　27号墓出土土器実測図（1/3）

出土土器（図版42-1、第104図）

土師器鍋（86）　体部を失うが、内彎気味に立ち上がる口縁部に把手の付くもので、板状に分かれた把手部分が口縁部を挟み、貼付られた部分が残る。把手は口縁上に輪をなすものであろう。胎土に細砂粒を僅かに含み、茶褐色に焼成されている。

平　瓦（87）　凹面は風化して調整痕は分からない。凸面は平行叩きの痕跡を残すがヘラ切りされている。また端部もヘラ切りで処理されている。胎土に砂礫・石英・雲母を含み、灰黄褐色を呈する。

土師器鍋の特徴からみて、14世紀後半ないし15世紀前半であろう。

28号土壙墓（第100図）

G20区南西隅に発見され、３号墳周溝の内側、４号土壙墓の東側に位置する。平面形が隅丸長方形を呈する土壙で、長さ1.65m、幅1.15mの大きさ。主軸方向はN29°Wを向く。上部を削平されるが、15cm強の深さに残る。壙内の堆積土には木炭や灰が混ざる。

7．通路状遺構

１号通路状遺構（図版42-2･43、第105図）

調査区北側のＢＣ16・17区にあり、重複する３号住居跡よりも後出する。平面形は北側へ扇状に広がり、長さ11.2m、北側で上面幅4.2m、深さ1.4mを測る。Ｎ５°Ｅ前後で南北方向にのびて、丘陵尾根線側は狭く浅いが、北側斜面へ向かって深くなる。床面は階段状を呈し、幅0.6～1.1m、一段の長さ0.4～1.0mの広さである。

通路状遺構内に堆積した、暗茶褐色土・黄茶褐色土・茶灰色土などの土砂には、土師器や白磁・青磁などの陶磁器、炭粒などが含まれていて、安山岩・砂岩などの円礫などもみられた。

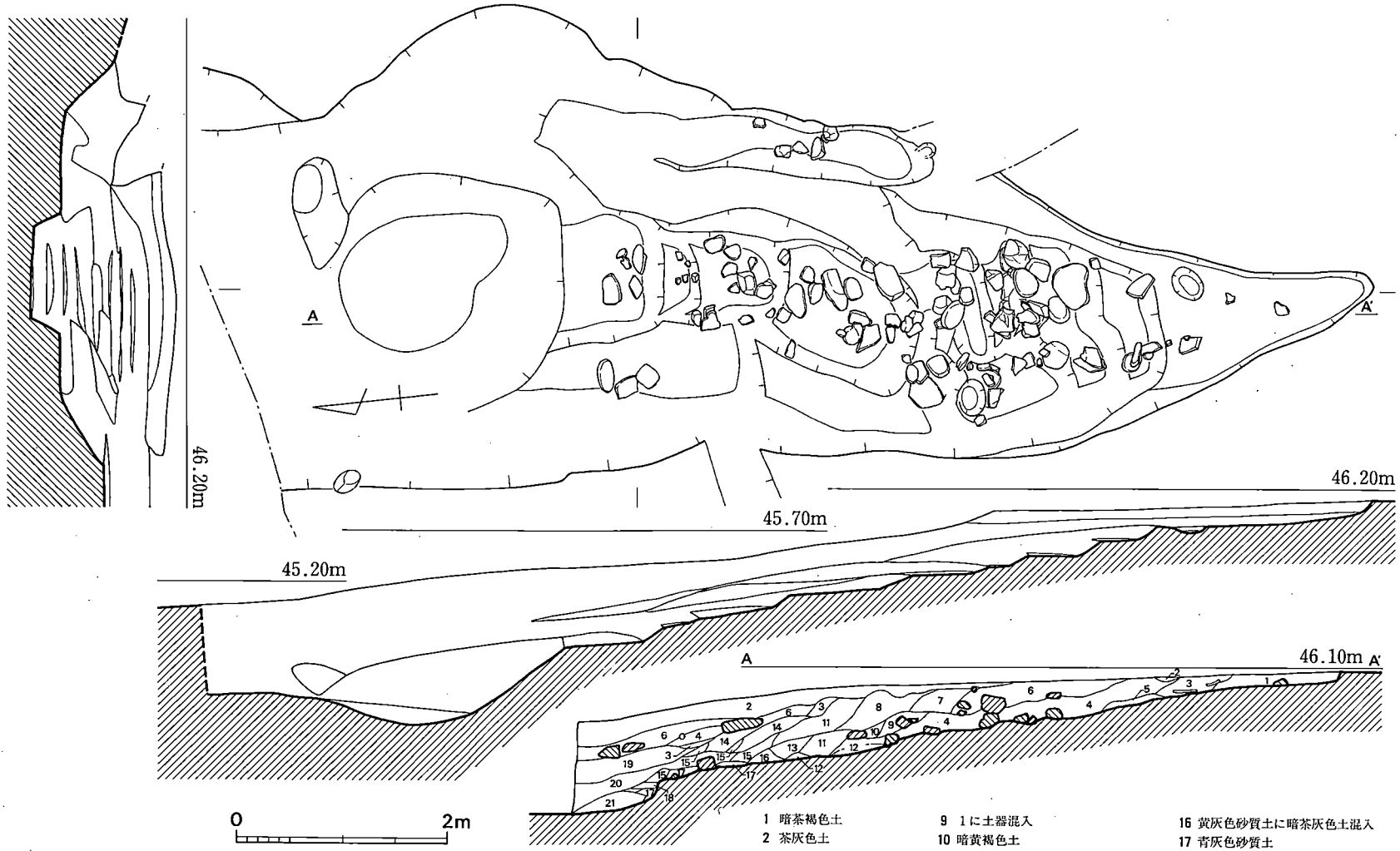
出土土器（図版45～53、第106～124図）

白磁碗（1～53）　１・２は口縁端部が小さな玉縁になる碗で、１は口径15.8cm、器高5.4cmの大きさ。高台は内面を斜めに削るタイプで、外底部は露胎だが他の部分は白黄茶色の釉がかかる。大宰府分類でII－１類に分類される例である。

３～７は口縁端部が玉縁になる碗で、口径の復原できる６・７では復原口径17.6cmと15.8cmの大きさ。８・９は胎土と釉調が玉縁口縁の碗と似た底部破片で、高台は幅広で削り出しが低く、見込みに沈線が巡る。３～９はIV－１類に分類される。

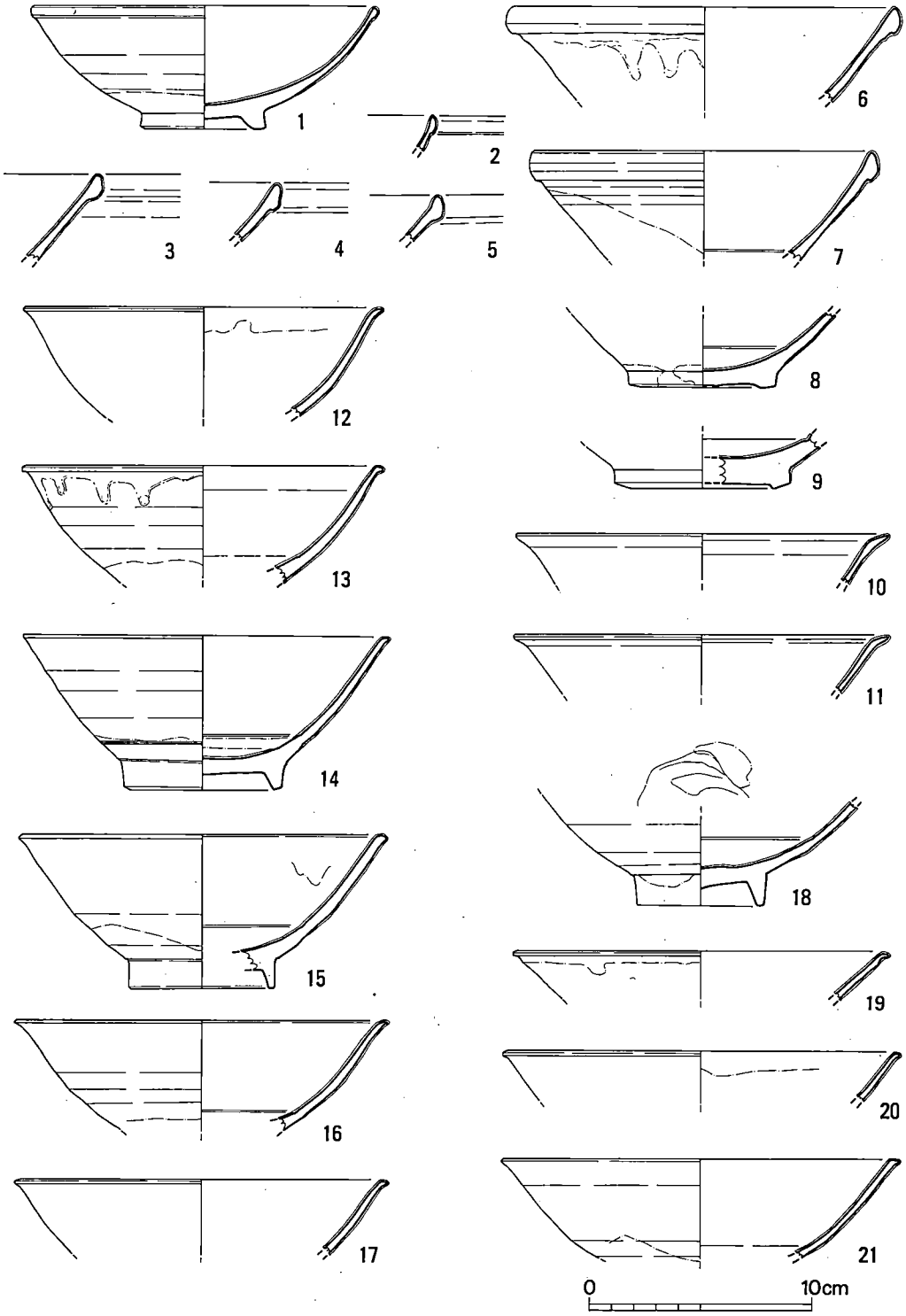
10・11は口縁部が外反する碗で、復原口径16.7cmと16.8cmの大きさ。淡灰色の精良な胎土に淡緑灰色の釉が掛かる。Ｖ－２類に分類される。

12～33は口縁部が短く外反する碗。内面の見込み部分に沈線が巡る。復原口径16.2～18.0cm、器高6.5～6.9cmの大きさで、口径17.0cm前後の例が多い。乳白色系の色調を呈する精良な胎土

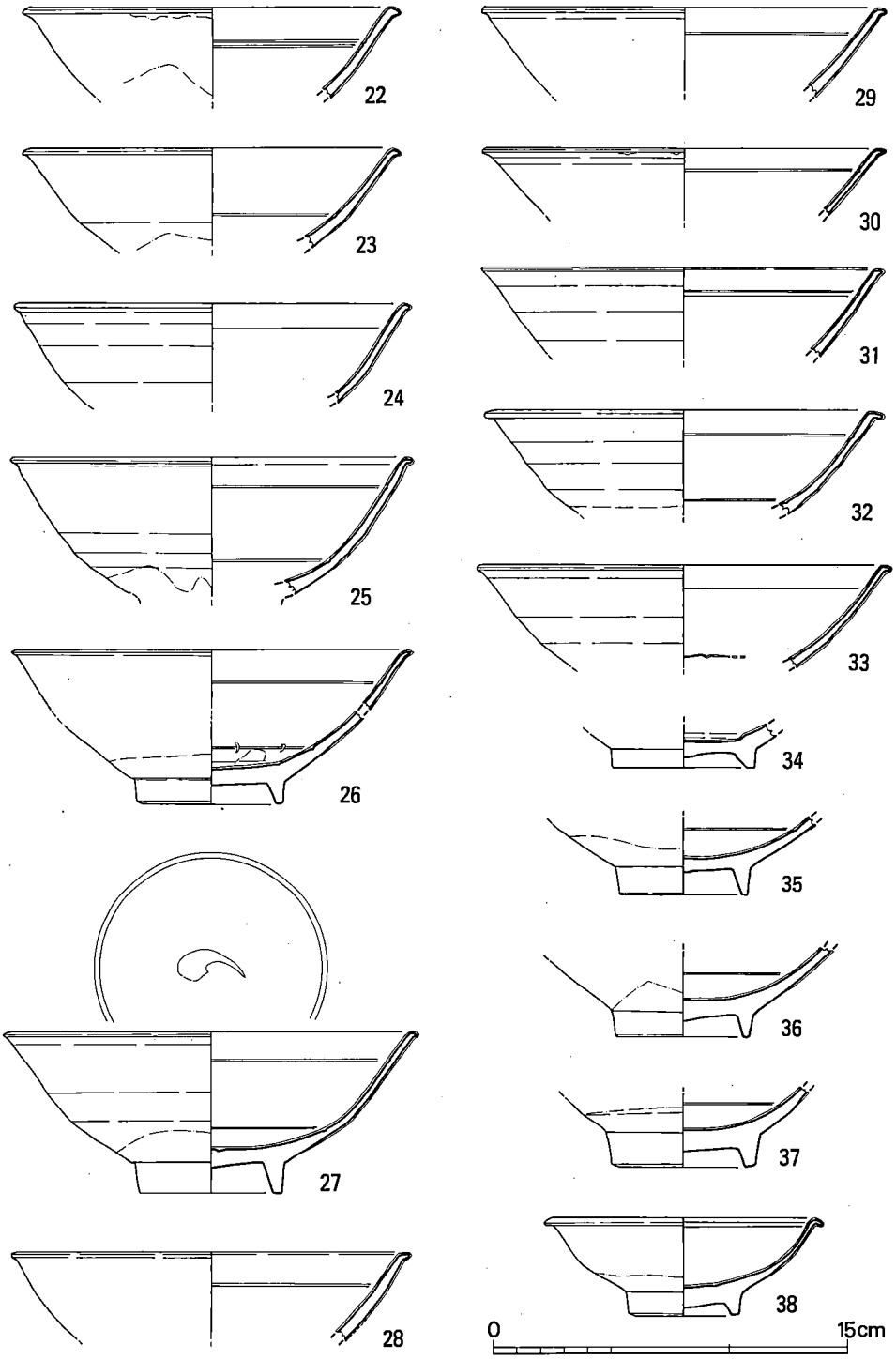


1 暗茶褐色土
2 茶灰色土
3 1に土器、炭混入
4 3より暗い
5 4に黄色粘質土混
6 黄茶褐色土
7 黒褐色土に青灰色土混入
8 7より灰が多い
9 1に土器混入
10 暗黄褐色土
11 7に黒灰混入
11′ 11に大きい土器片含む
12 暗灰色砂質土
13 11に同じで灰がブロック化している
14 8と同じ
15 暗茶灰色土と青灰色砂質土混入
16 黄灰色砂質土に暗茶灰色土混入
17 青灰色砂質土
18 青灰色粘質土
19 黒灰層に土器、炭混入
20 暗赤灰色砂質土
21 17に20が混入

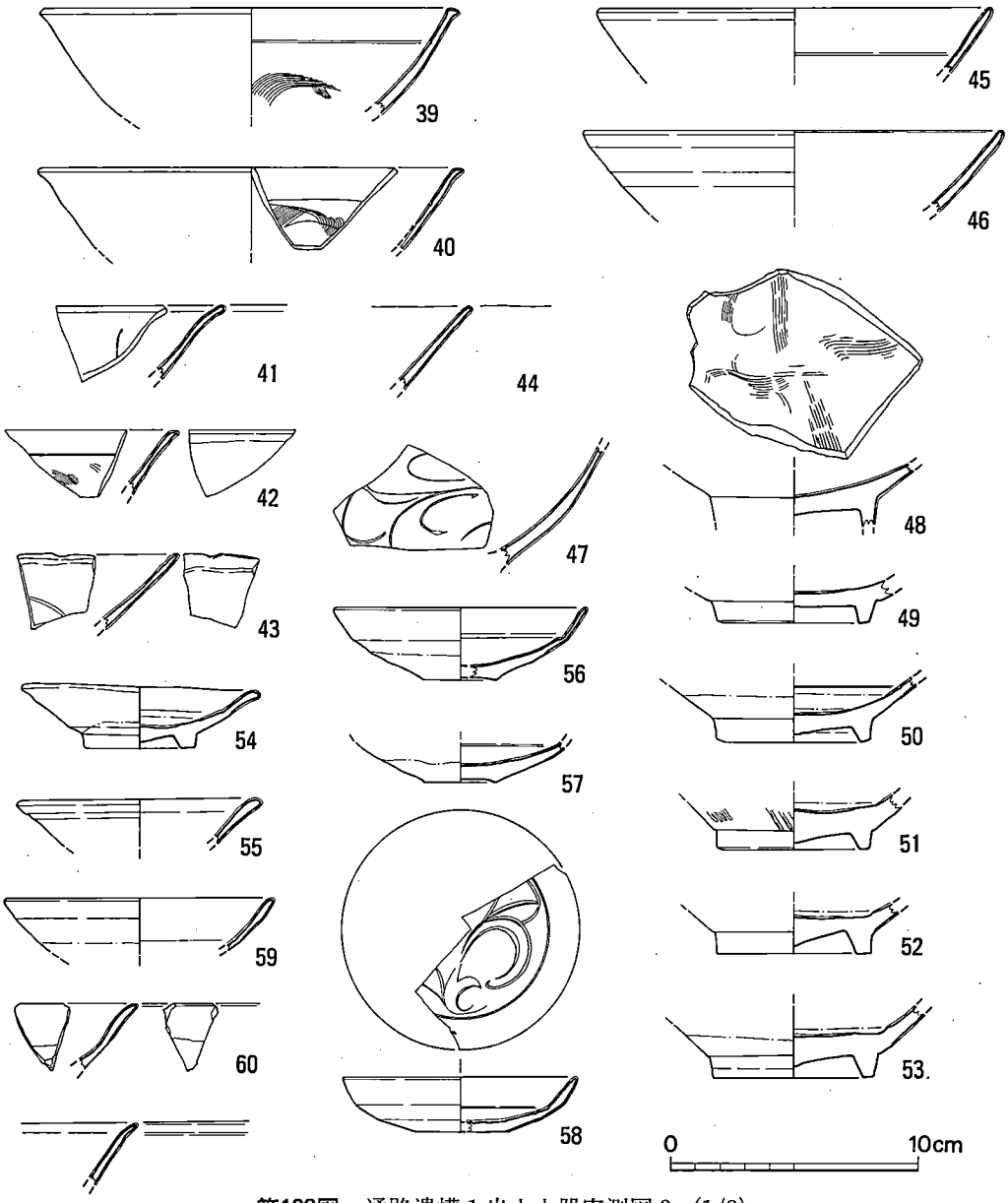
第105図　通路遺構１実測図（1/60）



第106図　通路遺構１出土土器実測図１（1/3）



第107図　通路遺構１出土土器実測図２（1/3）



第108図　通路遺構１出土土器実測図３（1/3）

で、内面と外面の上半部に淡灰白色や淡緑灰色の釉が薄く掛かり、口縁部下に釉垂れのみられる例もある。なお14は見込み部分の釉を環状に掻き取り、18と28は見込みの中央部に半月状の中途半端な掻き取りがみられ、27にも見込の一部に露胎部分がみられる。またこれらのうち23～33は口縁部下にも沈線が巡る例である。12・13・26はＶ－４類、14はⅧ類に分類され、15

～25・27～33はVI類～VIII類に含まれるであろう。

34は高台の内面側を斜めに、外面側を直に削り出すタイプの底部破片である。内底見込み部分に段がある。II－2類に分類される。

35～38は細めで高い高台をもつ底部破片である。V－4類に分類される。

38は口径11.9cm、器高4.1cmの大きさの、口縁端部が短く垂れるように外反する小形の碗。胎土は灰白色で、外面の下半を除いて乳白色味を帯びた緑白色の釉が掛かる。V類に近い。

39～42・47・48は口縁部が短く外反する碗で、内面を巡る沈線以外の文様が描かれる例である。39・40・42は沈線の下に弧状の櫛描き文様があり、48は見込み部分に四方にのびる櫛描き文様がみられる。VI－1・b類に分類される。41・43・47は沈線で草らしい弧線の文様を描く例で、口縁部破片の41・43では口唇部に切り込みがあり、輪花口縁であろう。VII類に分類される。

44～46は口縁部が直線的に開く碗の口縁部破片で、45・46には口縁下の内面に沈線が横走し、口径16.0cmと17.0cmに復原できる。これに対して44はやや外反気味に開き、沈線はみられない。あるいは皿の口縁部かも知れない。

49～53は高めの高台を有する底部破片で、14・15・28などの底部に類例があることから、口縁部が短く外反する碗の底部であろうが、14同様、見込み部分を環状に釉を掻き取っていて、VIII類に分類される。なお51では胴部外面側に縦方向の櫛目がみられる。

白磁皿（54～61）　54は口径9.7cm、器高2.4cmの大きさ。口縁部は外反して端部が僅かに肥厚し、内面に低い段状の沈線が巡る。やや高い高台が付く。内面と外面の上半部に釉がかけられるが、見込み部分の釉は掻き取っている。皿III類に分類される。

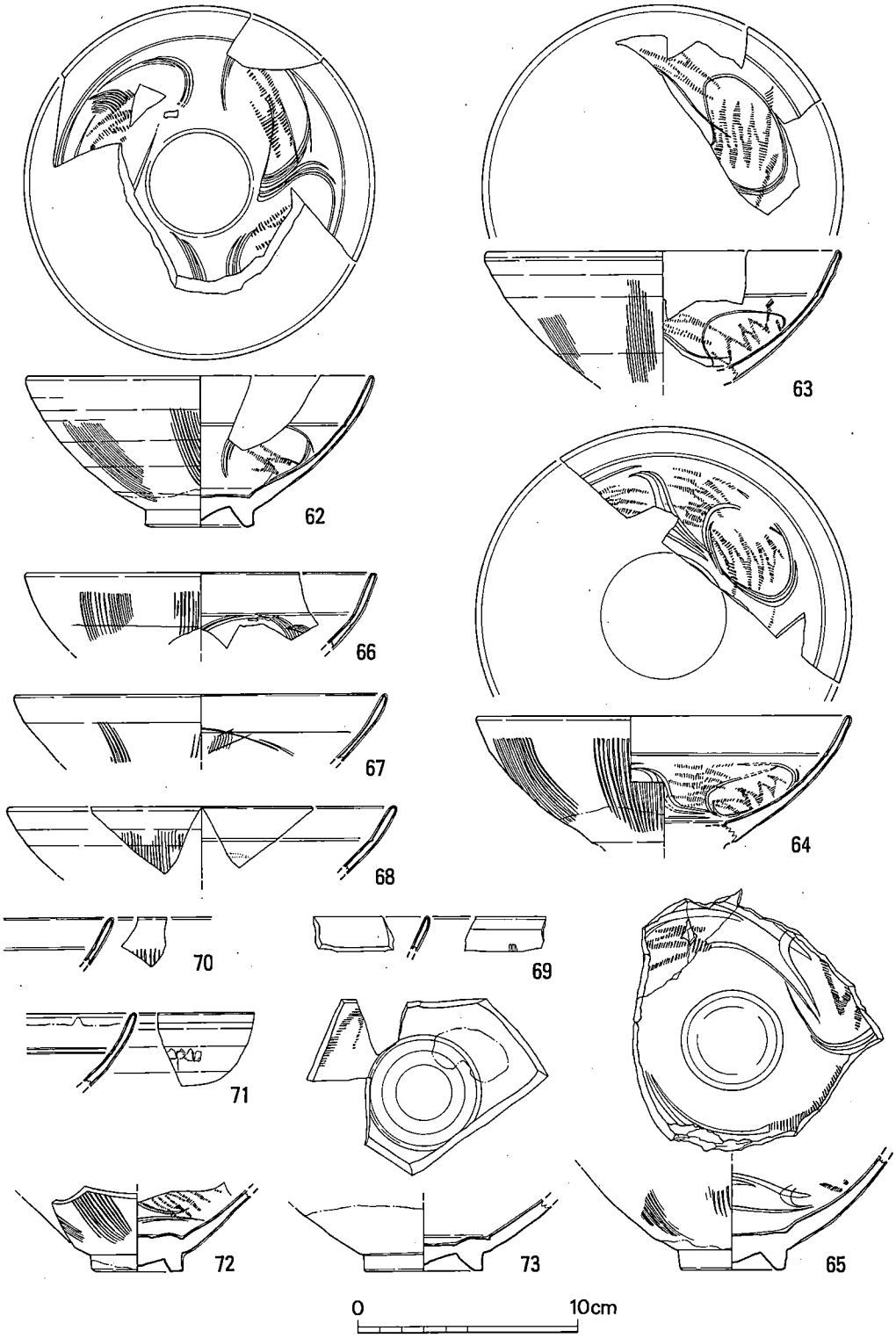
55は54に比して口縁部の厚い破片で、復原口径10.0cmの大きさ。皿IV類に分類される。

56～58は底部を上げ底状に削りだして、体部は内彎して開くが口縁部との境の内面に段状の沈線が巡る。外面の下半部は釉がかからない。56では復原口径10.2cm、器高2.9cmの大きさ。58は口径11.0cmに復原される。これらは皿VI－1類に分類される。

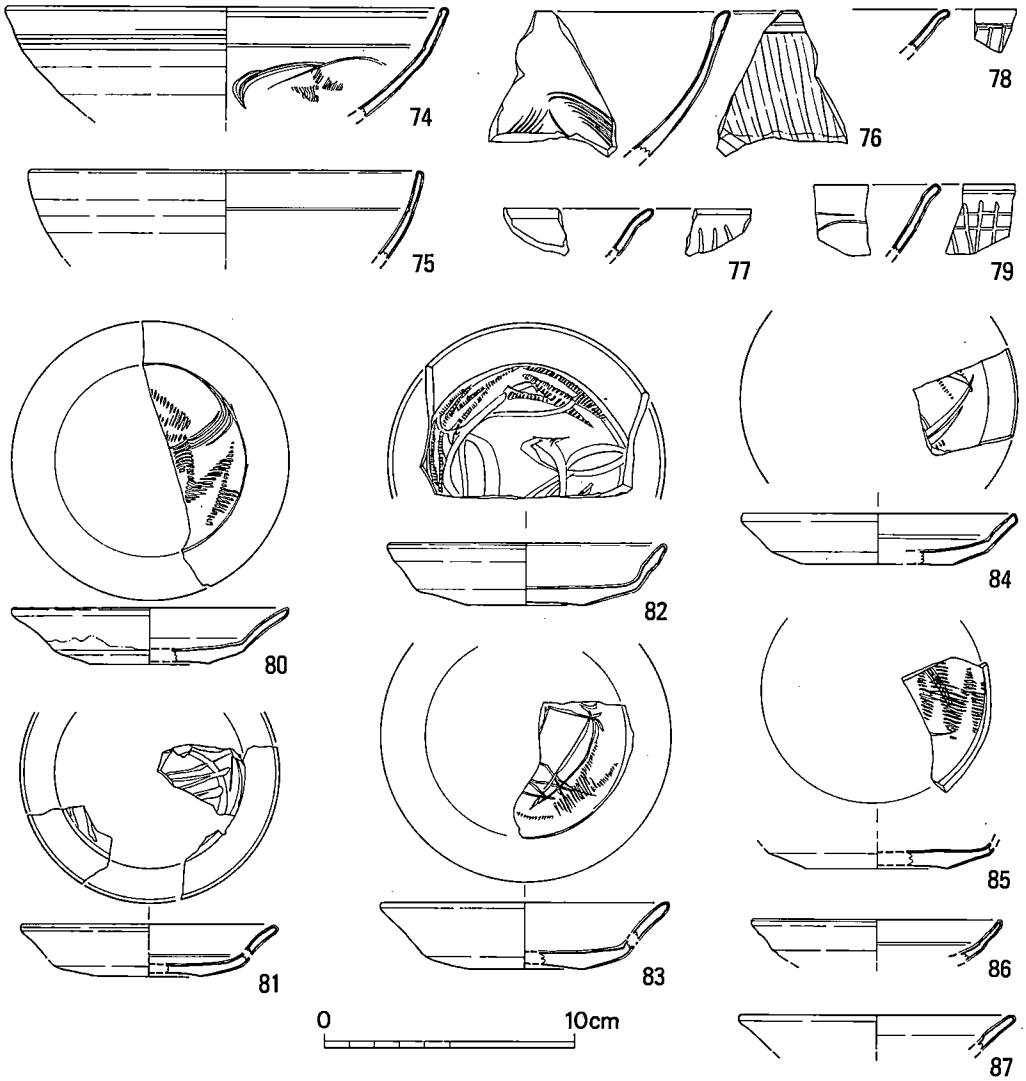
59は復原口径9.5cm、器高2.2cmの大きさ。体部は内彎して、内面に段状の沈線が巡る。内底見込みには草花文様が描かれる。釉は全体にかかり、外底面の釉は掻き取っている。皿VIII－1類に分類される。

60・61は外反する口縁部破片で、60は肥厚し、61は肥厚しない。61は皿V類であろうか。

同安窯系青磁碗（62～79）　62～75は、口縁部へ内彎して開く碗で、内面の口縁下に沈線が巡り、体部と内底見込みの境に段を有する。高台は外面が直立し、内面は斜めに削り出される。このうち62～70・72は内面に草花らしい文様がヘラ状施文具、ジグザグ文様が櫛状施文具で描かれ、外面は放射状に櫛目文様が描かれる。精良な胎土が用いられ、灰黄緑ないしオリーブ色に近い色調の釉が外面の下半部以外に薄くかかる。62では復原口径15.9cm、器高6.8cm高台径4.9cmの大きさで、外面の櫛目文様は6ヶ所に配置されるようである。64は復原口径17.0cmの大き



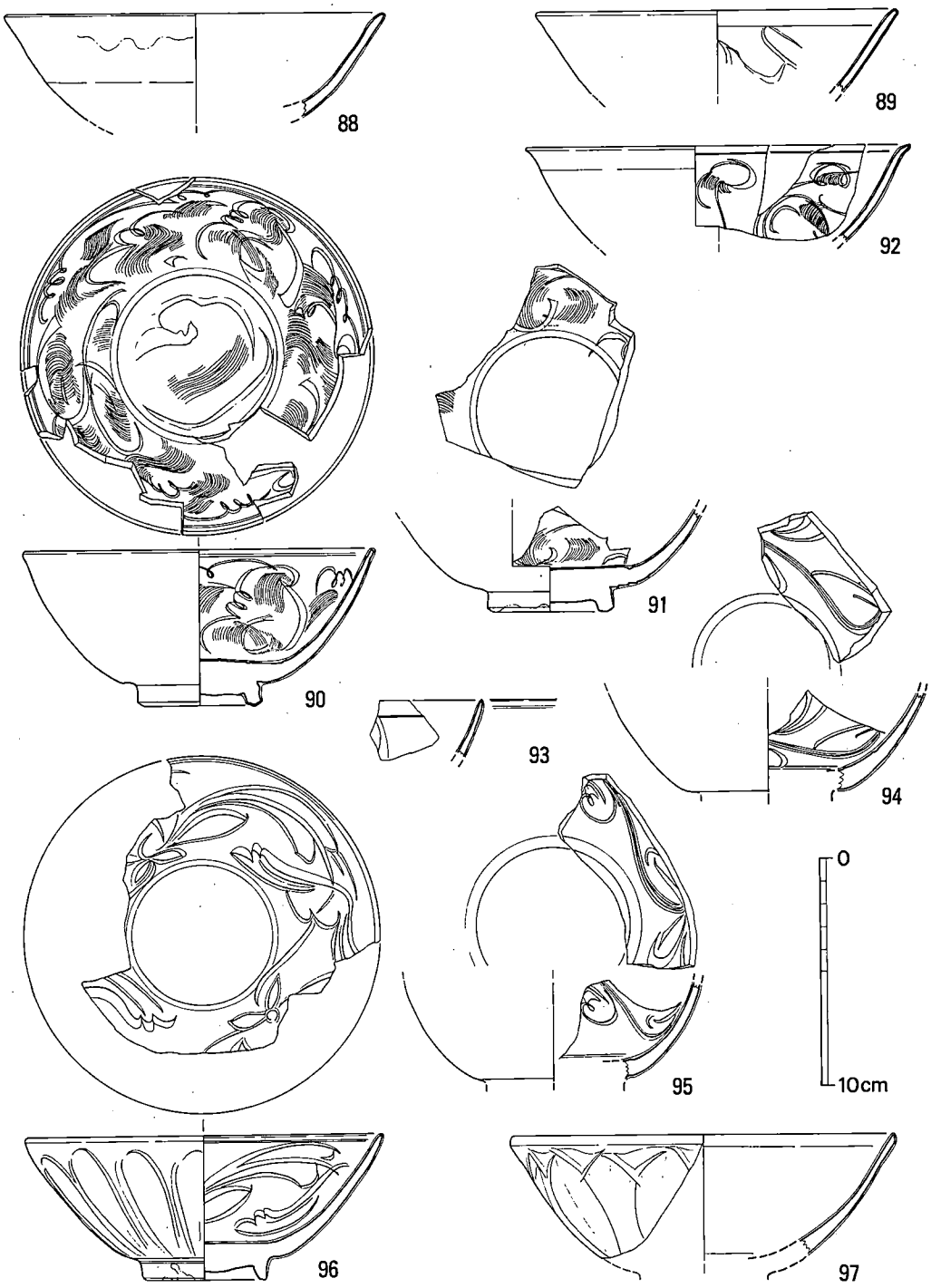
第109図　通路遺構１出土土器実測図４（1/3）



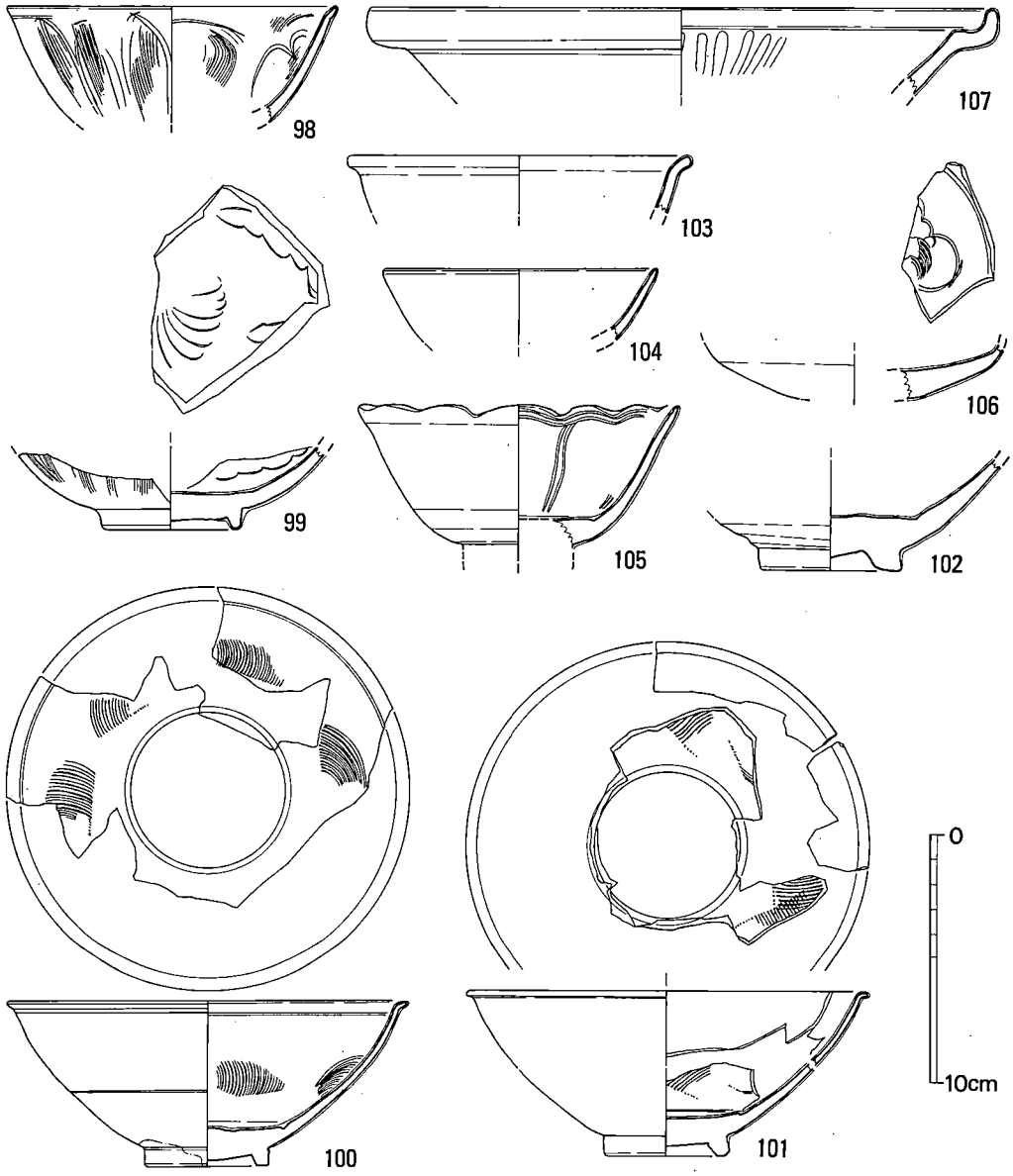
第110図　通路遺構１出土土器実測図５（1/3）

さで、器高は6.5cm強であろう。72の高台は外径4.2cmと小さめで、釉が高台までかかる。これらの碗はⅠ－１・b類に分類される。一方、71・73～75は外面が無文になる例で、Ⅰ－１・a類に分類される。71は小破片だが、内面に沈線が2条巡る。73は高台外径5.4cmの大きさで、内面の見込みと体部の境目に部分的な露胎部分がみられる。75は口径の復原に若干不安が残るが、74は口径17.8cmの大きさに復原され、口縁端部内面にも沈線が巡り、ヘラによる草花と櫛状施文具によるジグザグ文様が描かれる。

76は小さめの破片で全体の特徴は分からないが、内彎して開いた体部を有し、口縁部は内面



第111図　通路遺構１出土土器実測図６（1/3）



第112図　通路遺構１出土土器実測図７（1/3）

側にやや肥厚する。外面は口縁に沿って細い沈線が巡り、体部外面はヘラ先による片彫りのような沈線を放射状に施している。内面には沈線が巡らず、櫛状施文具で草花らしい文様が描かれる。

77～79はいずれも小破片だが、口縁部が外反し、体部外面に片彫りのような沈線が放射状にみられる。内面の文様は分からないが、Ⅲ類に分類される。

同安窯系青磁皿（80～87）　体部は平らに開くが、中途で屈曲して口縁部が緩やかに外反す

る器形の皿で、口縁端部が僅かに肥厚する例もある。また内底見込みには段がみられる。外底面は小さく、僅かに凹む。内面にはヘラ状施文具で草花らしい文様、櫛状施文具でジグザグ文様が描かれ、外面は無文。精良な胎土が用いられ、灰黄緑ないしオリーブ色に近い色調の釉が掛かり、外面の下半部が露胎の80は皿Ⅰ－1・b類に分類される。復原口径11.0cm、器高2.2cmの大きさ。これに対し81～85ではほぼ全面に釉が掛かり、外底面の釉が掻き取られる例で、Ⅰ－2類に分類される。81は復原口径10.3cm、器高2.1cm、82は復原口径11.2cm、器高2.4cm、83は口縁部と底部側が巧く接合しないが、復原口径11.4cm、器高2.7cm程の大きさ。84～87は口径10.0～11.0cmに復原される。

龍泉窯系青磁碗（88～103）　88・89・102・103は内外面ともに無文のもの。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直線的か僅かに外反気味にのびる。高台部分以外の全体に釉が厚めにかかり、釉垂れもみられる。88は復原口径16.8cm、89は復原口径16.0cm、102は高台外径5.7cmの大きさ。碗Ⅰ－1類に分類される。103は復原口径14.0cmの大きさで、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は厚めの器壁のまま外反する。

90・91は高台内面の削り出しが浅くて底部が厚く、体部は内彎して立ち上がる。内面にはヘラ状施文具を用いた片彫り風の沈線と櫛状施文具を用いた平行弧線で草花文様を描いているが、外面は無文である。90は口径15.7cm、器高6.8cm、高台外径5.5cm。91は高台外5.6cmの大きさ。青味のある灰緑色の釉が全体にかかり、高台内面と畳付けは露胎だが一部畳付けまで釉垂れする。碗Ⅰ－3類に分類される。

92は底部を欠く小破片だが、内彎して立ち上がる器形で、口縁端部が短く外反する。内面は片彫り風の沈線と櫛目で草花が描かれ、外面は無文である。復原口径17.0cmの大きさ。灰黄緑色の釉がかかる。碗Ⅰ－7類に分類される例であろうか。

93～95は厚めの底部から内彎して体部が立ち上がる器形で、93では口縁端部が反らない。内面には片彫り風のヘラによる沈線で草花文様が描かれ、外面は無文である。碗Ⅰ－2類に分類される。

100・101は口縁部が端部で短く外反する。内面には櫛状施文具で短く弧を描く文様が描かれ、体部外面は無文。黄色の強い灰黄緑色の釉が体部内外面にかかり、高台部分は露胎。復原口径16.0～16.2cm、器高6.6cm、高台外径5.0cmの大きさ。底部の厚みと高台部分まで釉が掛かる特徴は、龍泉窯系青磁碗の底部に普遍的にみられることから龍泉窯系青磁碗Ⅰ－7類に一応含めた。しかし、櫛状施文具による文様と胎土や釉調は同安窯系青磁碗の特徴であり、短く外反する口縁端部の特徴と口縁部内面に巡る沈線は白磁碗にみられる特徴で、龍泉窯系と同安窯系と白磁碗の特徴を兼ね備えている例である。

96～99は体部外面に蓮弁文のあるもの。96は鎬のない蓮弁文様が外面に描かれ、内面は片彫りで草花が描かれる。復原口径15.8cm、器高6.3cm、高台径5.5cmの大きさ。灰緑色の釉が全体

にかかり、高台内面と畳付けは露胎だが一部畳付けまで釉垂れする。Ⅰ—5・a類に分類される。97は鎬蓮弁が片彫りで表されるもので、内面は無文。復原口径17.0cmの大きさ。碗Ⅰ－5・b類に分類される。98・99は内彎して立ち上がる体部外面に鎬蓮弁と縦方向の櫛目が描かれる碗で、内面には草花の文様が描かれる。98では復原口径13.4cmの大きさで、口縁端部は外反する。99では復原高台径5.6cmの大きさで、高台内面は露胎だが、それ以外には灰黄緑色の釉が厚くかかる。碗Ⅰ－6類に分類され、98はⅠ－6・b類に細分される例であろう。

龍泉窯系青磁小碗（104・105）　104は復原口径11.0cmの大きさの小碗で、内彎して立ち上がる体部から口縁部が直線的にのびる。内外面ともに無文で、緑灰色の釉がかかる。小碗Ⅰ－4類に分類される。

105は復原口径13.0cm、器高6.5cm程の大きさの小碗で、内彎して立ち上がる体部から、輪花の口縁部が緩やかに外反する。外面は無文。内面にはヘラ状施文具で2条単位の文様を描くが、口縁に沿った線と垂下する線で区画するような文様である。小碗Ⅰ－2類に分類される。

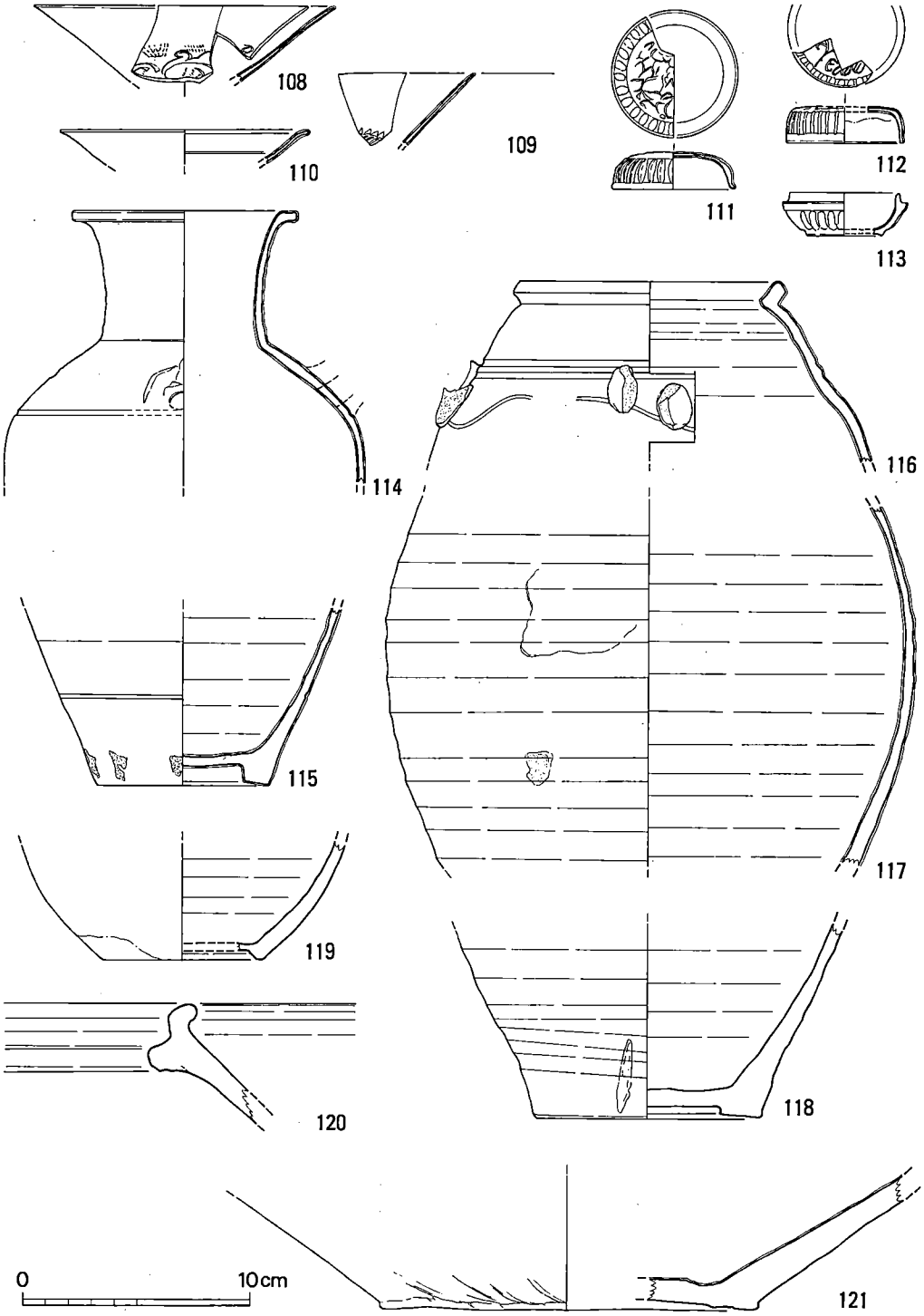
龍泉窯系青磁皿（106）　緩やかに開く体部はやや器壁が厚く、屈曲して立ち上がる口縁部は欠失する。外面は無文で、内底見込みにはヘラ状施文具による片彫り風の文様と櫛状施文具による弧線が描かれている。釉は内外面ともに厚めにかかる。皿Ⅰ－2類であろうか。

龍泉窯系青磁杯（107）　復原口径25.2cmの大きさの杯で、体部が内彎して立ち上がり、屈折して口縁部が外方に開くが、口縁部も内彎して端部が上を向く。体部内面には放射状の凹みがみられ、内外面とも灰緑色の釉が厚めにかかる。杯Ⅲ－3類に分類される。

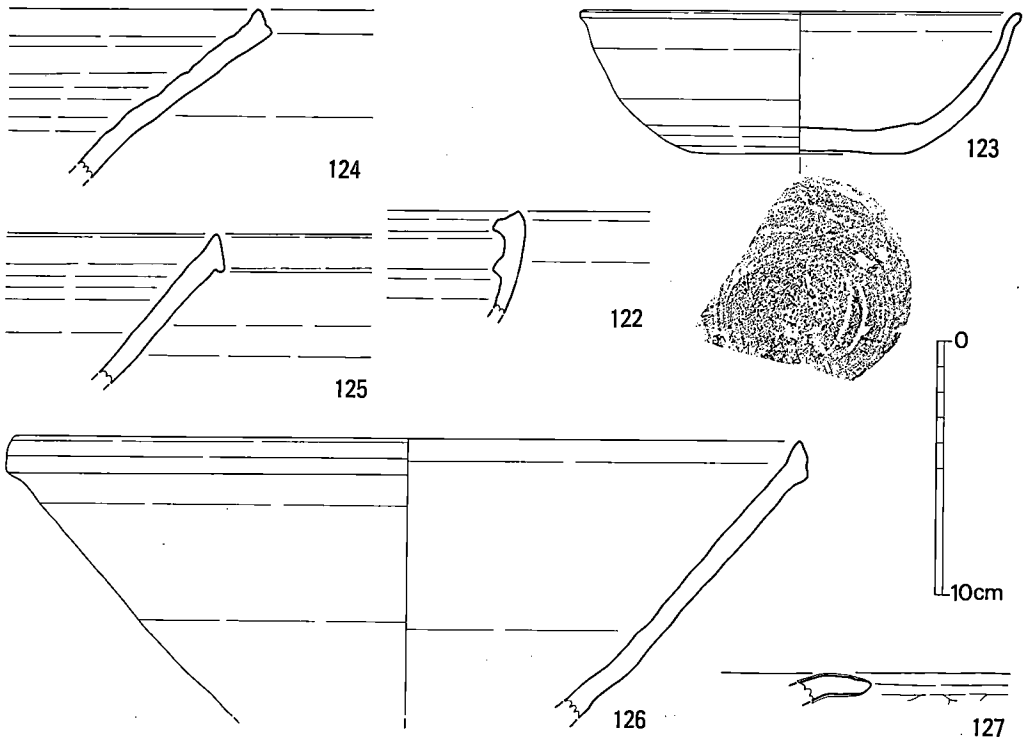
青白磁皿（108～110）　108・109は、薄い器壁の体部が直線的に開き、口縁部は僅かに外反気味。108では復原口径13.4cm、残存器高3.3cmの大きさを有し、内面にヘラ状施文具と櫛状施文具による草花らしい文様が描かれる。白色の精良な胎土を用いて透明感の強い釉がかかる。110は体部が内彎気味ながら直線的に開き、口縁部が短く外反する器形で、復原口径11.0cmの大きさ。内面に沈線が1条巡る。108・109と胎土・釉は同様である。

青白磁合子（111～113）　111・112は復原口径5.5cm・5.2cm、器高1.6cmの大きさの蓋の破片で、別個体である。111では外天井の文様の意匠は不明瞭だが、丸みをもつ体部外面に刻み目が巡り、口縁端部は小さく玉縁状に膨らむ。112は外天井に沈線で草花らしい文様が描かれ、肩の張る体部外面に刻み目が巡り、口縁端部は僅かに外反する。113は復原口径4.8cm、受け部外径5.4cm、器高1.9cmの大きさの合子身で、体部は内彎して外面に刻み目が巡る。受け部は肥厚するが、口縁部は短く直に立ち、底部は低い高台状を呈する。蓋・身共に薄く釉がかかるが、蓋は体部内面、身は口縁部と高台部分が露胎。

陶器水注（114・115）　巧く接合しないが、大きさと胎土・釉調からみて、同一個体の可能性の高い体部上半と底部である。口縁部側は復原口径10.0cm、頸部径7.0cm、胴最大径14.0cmの大きさ。頸部から口縁部へは僅かに開き、口縁端部は外反して上面を平らに整えている。肩部



第113図　通路遺構１出土土器実測図８（1/3）



第114図　通路遺構１出土土器実測図９（1/3）

には沈線が1条巡り、沈線と頸部との間に注ぎ口が付いていたとみられる剥落痕と穿孔の一部がみられる。淡灰褐色の胎土で、全体に灰黄緑色の釉がかかる。底部側は底径7.6cmの輪高台で、胴部へは直線的に立ち上がるが、回転ヘラ削り調整されて、全体に灰黄緑色の釉がかかり、底部外面に目土が付く。水注II類に分類される。

陶器四耳？壺（116～118）　これも巧く接合しないが、同一個体の可能性が高い。口縁部は胴部から内傾し、口縁端部は短く外反して肥厚する。頸部と胴部の境目は不明瞭だが、浅い沈線が２条巡る。さらに浅い沈線の下に細い沈線が波状に巡る。両方の沈線の間に斜め右下がりながらも横向きの耳が付くらしい。復原口径12.0cmの大きさ。胴部は最大径23.2cmの大きさで、回転ヘラ削りされ、部分的に凹みがある。口縁と同じ黄色味の強めな黄緑色の釉がかかる。底部は底径10.0cmの大きさの輪高台で、直線的に立ち上がる。回転ヘラ削りされ、釉は発色が悪く、外底部に凹みがみられる。四耳壺・双耳壺VI類に分類される。

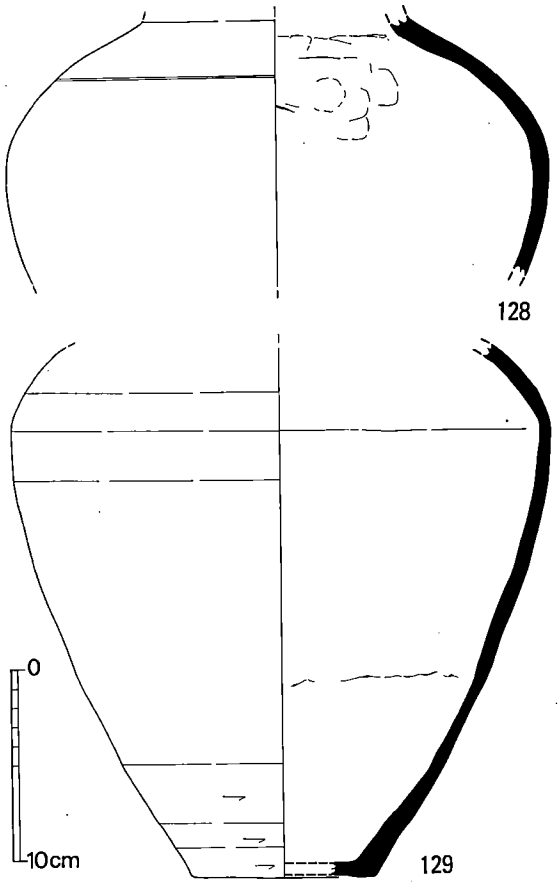
陶器壺？底部（119）　丸みのある輪高台の底部破片で、復原底径7.0cmの大きさ。胴部側へは内彎して立ち上がる。淡茶褐色の胎土で、茶褐色に近い釉が薄めに掛かり、底部外面は部分的に露胎。

陶器甕（120・121・127）　120は口縁部破片で、内傾する部分と上方にのびて反る部分に分

かれてそれぞれ端部は丸く肥厚する。肩部へは大きく膨らむようで、器面はナデ調整されるが、叩き目の痕跡が残る。砂粒を含む茶色の胎土で、釉は暗茶褐色と黄緑っぽい色調の縞模様に釉が掛かる。121は復原底径16.4cmの大きさの底部破片で、胴部側へは直線的に開く。灰色の胎土で、内外面ともに板ナデ調整されて、内面には暗灰緑色の釉がかかる。127は外反する小さな口縁部破片のため全体の形は不明だが、鉄錆釉がかかる。

陶器鉢（122・123）　122は体部は内彎して立ち上がるようで、口縁部は端部で内側に突出するように肥厚して、口縁下の内面に突起が１条加わって２条の突起のように見える。胎土に砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。鉢Ｉ－２類に分類される。

123は復原口径17.6cm、器高5.6cm、底径8.4cmの大きさの杯に似た器形の鉢。平底から体部へ内彎して開き、口縁部は僅かに外反する。胎土に砂粒を含み、体部内外面は回転ナデ調整されるが、体部下半は回転ヘラ削りされて、底面はヘラ切り離しの後ナデられる。口唇部内面にだけ自然釉が掛かることから、重ね焼きされたものと思われる。内底面は磨耗してるので、擂鉢として使用されたらしい。



第115図　通路遺構１出土土器実測図10（1/4）

須恵質摺鉢（124～126）　体部が直線的に開き、口縁部が拡張気味に肥厚するもので、124は端部で上方につままれたように突出し、125・126では下方にも突出する。胎土に砂粒を含み、回転ナデ調整されている。126は復原口径32.0cm、残存器高11.0cmの大きさ。

須恵質壺（128・129）　128は口縁部と胴下半部を欠くが、復原頸部径15.0cm、胴最大径28.4cmの大きさの丸く膨らむ壺で、肩部に極浅い沈線が1条巡る。砂粒を若干含む胎土で、内外面ともにヨコナデとナデで調整されるが、頸部下の内面には凹凸が残る。129は口頸部を欠くが、残存器高28.0cm、胴最大径28.8cmの大きさの壺で、平底の底部から体部が直線的に立ち上がり、肩部は丸みをもつが、胴最大径の位置はやや高い位置にある。胎土に砂粒を含み、外面下部は回転ヘラ削りされるが、内外面ともに回転ナデとナデで調整される。

表1　1号通路状遺構出土土師器杯観察表

(単位cm)

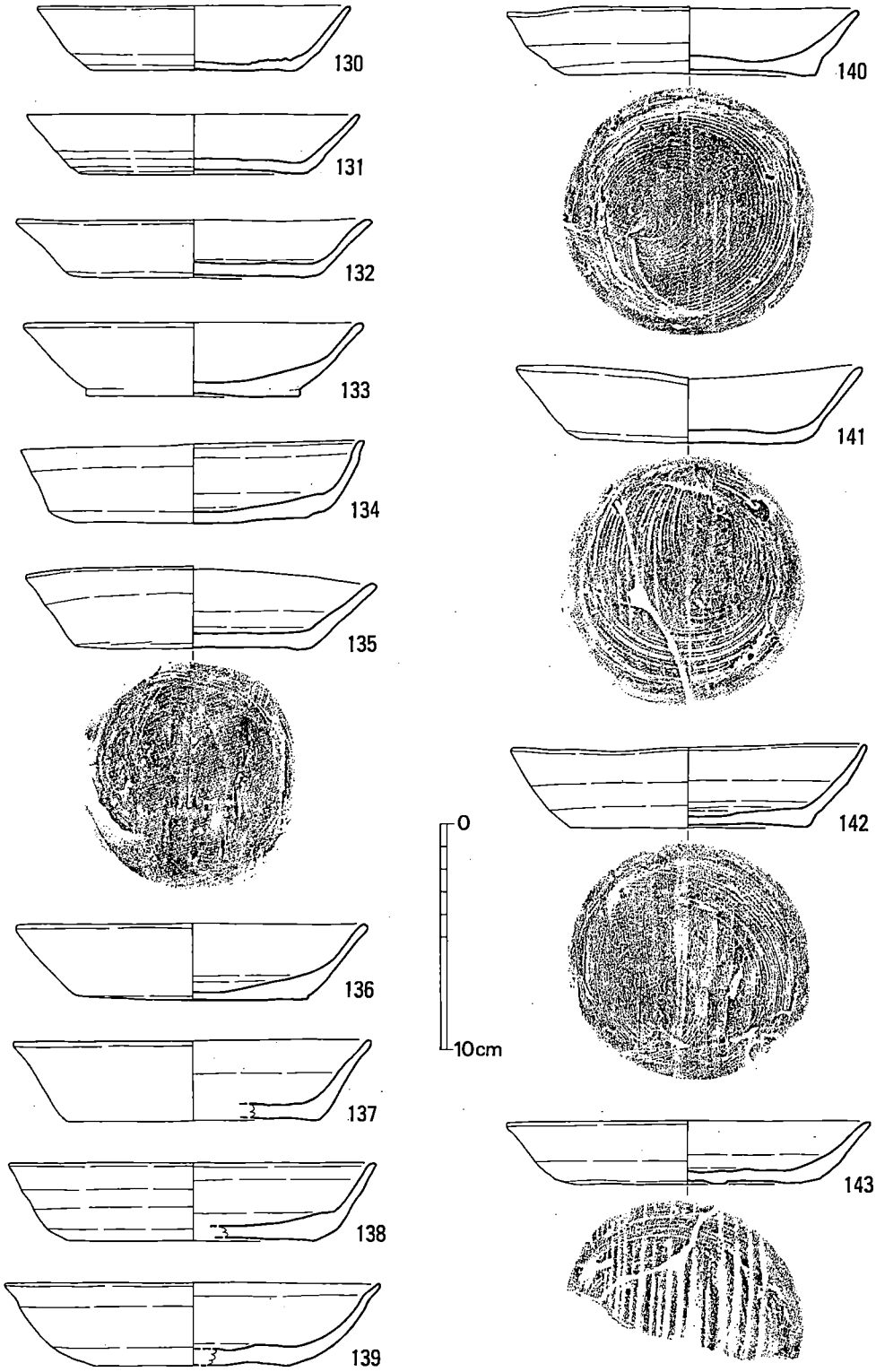
No.	遺物No.	口　径	器　高	底　径	内底ナデ	板目圧痕
130	776	14.0	2.9	9.0	○	○
131	723	14.8	2.6	10.3	○	○
132	793	15.9	2.6	11.1	○	
133	724	15.2	3.2	9.5	○	○
134	839	15.2	3.4	10.4	○	○
135	814	15.7	3.4	10.4	○	○
136	726	15.8	3.3	10.2	○	?
137	939	16.0	3.5	11.3	○	
138	904	16.4	3.4	11.0	○	
139	915	16.8	3.6	9.5	○	?
140	728	15.6	3.0	11.2	○	○
141	730	15.4	3.4	10.7	○	○
142	837	15.9	3.6	10.7	○	○
143	840	16.2	2.8	11.4	○	○
144	1015	14.3				
145	785	14.5	2.5	10.8	?	?
146	779	15.0	2.9	10.6	○	
147	789	15.8	3.0	10.5	○	○
148	791	15.6	2.9	12.1	○	○
149	719	15.6	2.7	10.1	○	○
150	721	16.3	2.6	12.0	?	?
151	937	16.4	2.6	8.0	○	
152	720	16.8	2.5	12.0	○	○
153	727	16.5	3.0	11.0	○	○
154	936	16.5	3.1	13.7	○	
155	729	17.0	3.6	10.8	○	○
156	722	17.6	2.9	11.6	○	
157	749	15.0	3.1	10.6	○	○
158	750	15.8	3.7	11.0	○	○
159	763	16.3	2.9	11.0	○	○
160	762	16.5	4.0	10.5	○	○
161	775	15.4	3.3	7.9	○	
162	938	15.4	3.6	6.0	○	
163	838	15.4	3.2	8.2	○	編物？
164	774	15.4	3.6	7.6		
165	786	15.5	3.1	7.9	○	○？
166	792	15.6	3.1	7.6	○	
167	788	15.6	4.0	8.0		
168	752	15.6	3.6	8.1		
169	748	16.0	3.5	8.0		
170	753	16.2	3.9	9.5		
171	781	16.6	3.6	9.0	○	○
172	751	16.6	3.4	8.8	○	?

土師器杯（130～172）　いずれも外底面に糸切り痕がみられるもので、板目圧痕の付く例もみられる。計測値などは表に示す。130～143は口縁部の立ち上がりが内彎あるいは直線的に開くが、口縁端部で僅かに外反する。口径14.0cm、器高2.9cm、底径9.0cm程から口径16.8cm、器高3.6cm、底径8.6cm程の幅をもち、器高がやや高い。144～160は口縁部の立ち上がりが内彎して開き、口縁端部も内彎気味の例。口径14.3cm、器高2.3cm程の大きさから口径17.6cm、器高3.4cm、底径11.6cm程の大きさの幅をもつが、160のように口径16.8cm、器高4.1cm、底径10.4cmの大きさで、椀に近いような例もある。

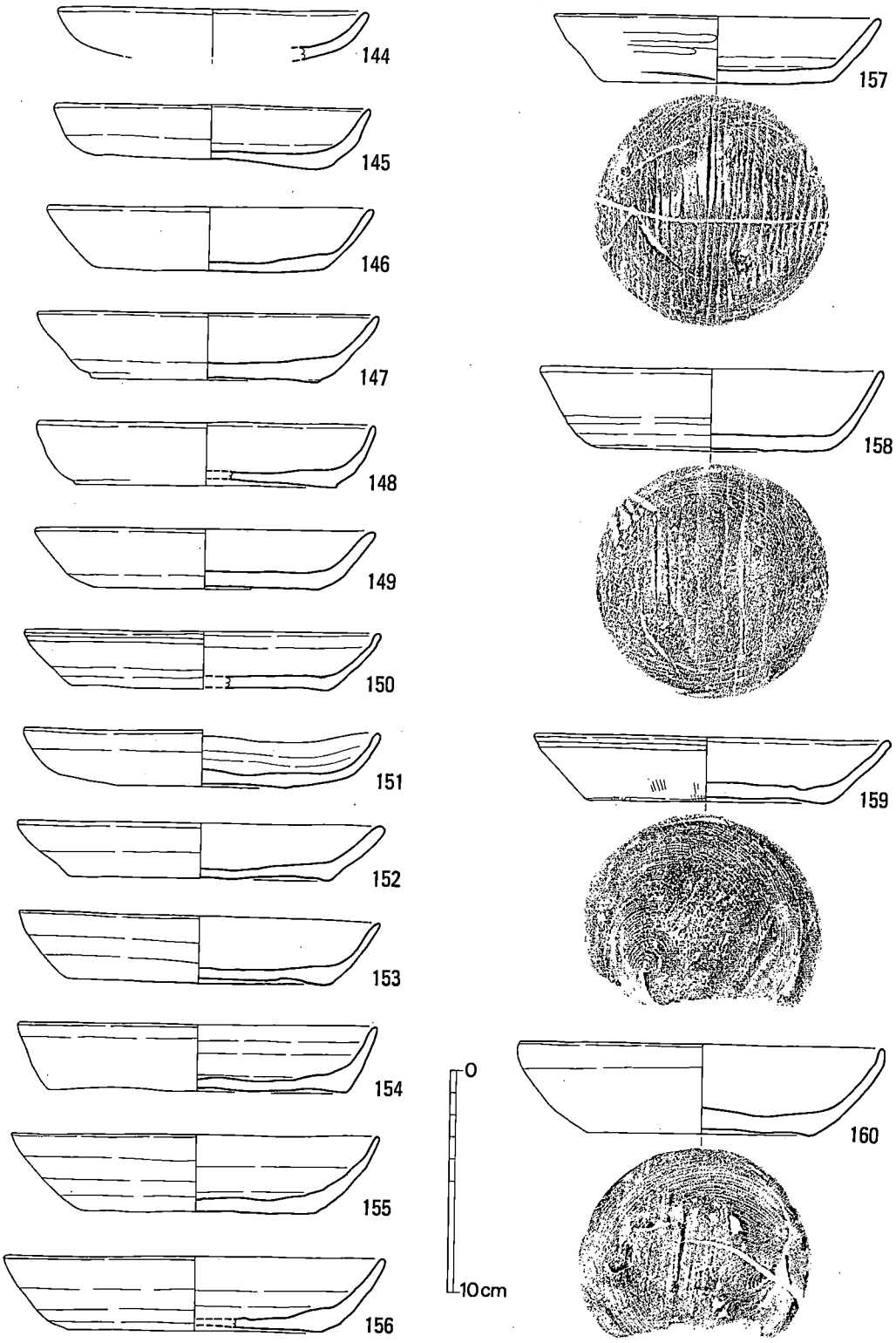
161～172は口縁部の立ち上がりが内彎気味で長く、口径と底径の比が2：1に近い。底面は平底ながらも幾分丸みをもつ例もある。外底面に糸切り痕を残すが、板目の付く例は少なく、163などのように簾状あるいは筵のような圧痕の付く例がある。

杯は、いずれも細砂粒・赤褐色粒・雲母を含むものの精良な胎土で、淡茶褐色、橙褐色などの色調に焼成されている。

土師器小皿（173～245）　いずれも外底面に糸切り痕がみられるもので、板目圧痕の付く例が多くみられる。口径8.0cm～10.5cm、器高0.7～1.5cmの大きさで、一覧表に示すように、口径9.0cm、器高1.2cm前後の大きさの例が多い。いずれも胎土は細砂粒・赤褐色粒・雲母を若干含むが精良で、淡茶褐色などに焼成されている。



第116図　通路遺構１出土土器実測図11（1/3）



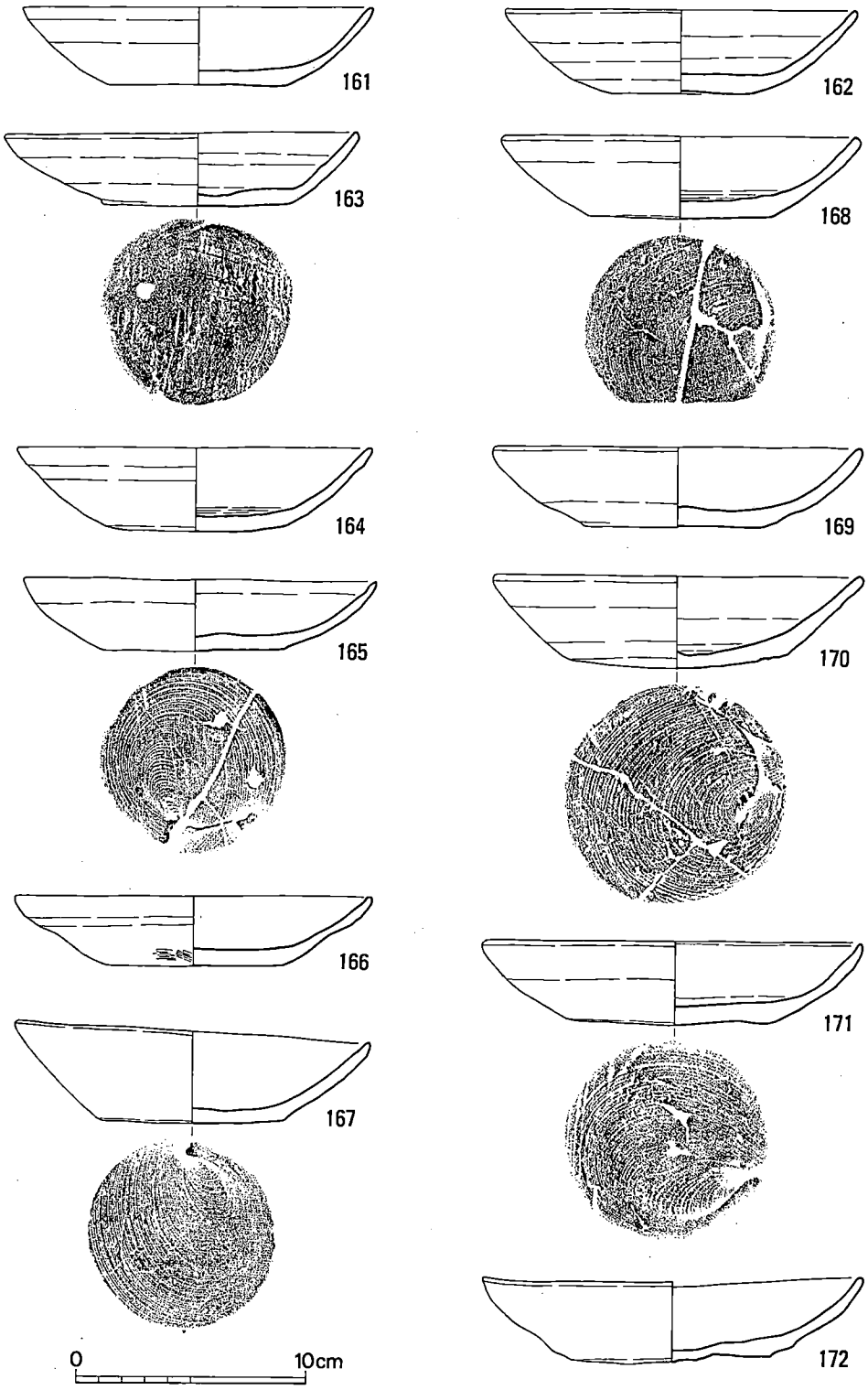
第117図　通路遺構１出土土器実測図12（1/3）

表 2　1号通路状遺構出土土師器小皿観察表

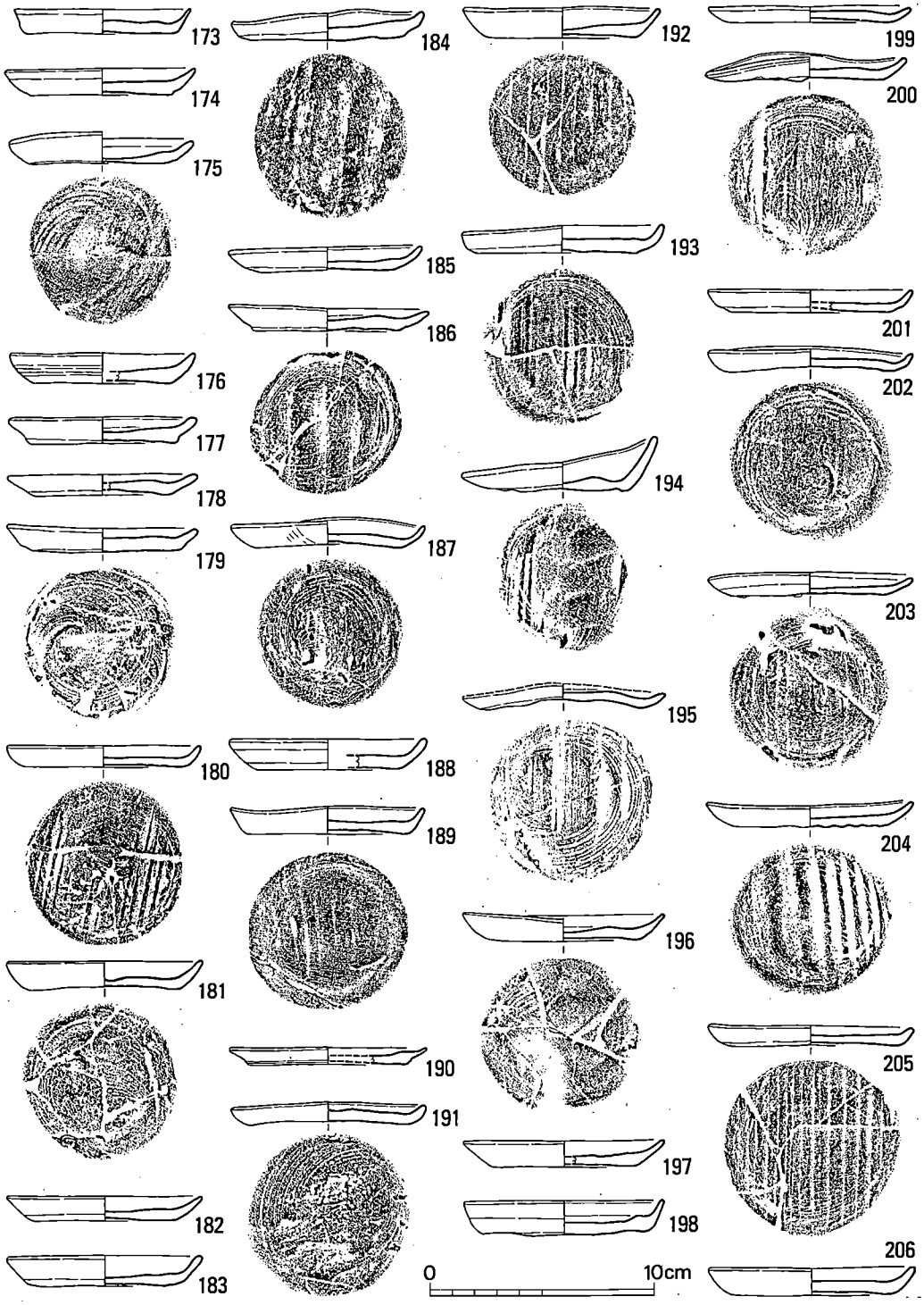
(単位cm)

No.	遺物No.	口　径	器　高	底　径	内底ナデ	板目圧痕
173	740	7.9	1.1	6.8	○	○
174	929	8.0	1.2	6.5	○	○
175	778	8.3	1.1	6.7	○	○
176	913	8.3	1.3	6.5	○	
177	906	8.4	1.2	6.4	○	
178	930	8.5	0.9	6.0	○	
179	735	8.6	1.1	6.7	○	○
180	715	8.6	0.9	7.0	○	○
181	714	8.7	1.3	6.8	○	○
182	713	8.7	1.1	6.2	○	○
183	932	8.7	1.3	6.0	○	○
184	815	8.7	1.3	7.0	○	○
185	933	8.7	1.1	5.9	○	○
186	801	8.7	1.0	6.2	○	○
187	766	8.7	1.3	6.6	○	○
188	931	8.8	1.3	6.6	○	○
189	771	8.7	1.2	7.3	○	○
190	85	8.7	0.8	7.2	○	○
191	768	8.8	0.9	7.3	○	○
192	799	8.8	1.3	6.6	○	○
193	797	8.8	1.2	7.1	○	○
194	769	8.9	1.3	6.7	○	○
195	802	9.0	1.1	0.7	○	○
196	781	9.0	1.1	6.8	○	○
197	782	9.0	1.2	6.4	○	
198	723	9.0	1.5	7.1	○	○
199	908	9.0	0.7	7.0	○	○
200	772	9.1	1.1	6.8	○	○
201	742	9.2	1.0	7.3	○	○
202	805	9.2	1.1	7.5	○	○
203	770	9.2	1.1	6.7	○	○
204	808	9.2	1.1	6.7	○	○
205	737	9.2	0.9	7.5	○	○
206	919	9.2	1.2	7.0	○	○
207	816	9.3	1.2	6.7	○	○
208	817	9.3	1.2	7.0	○	○
209	798	9.3	1.1	7.4	○	○
210	800	9.3	1.4	7.3	○	○
211	777	9.3	1.2	7.5	○	○
212	905	9.3	1.4	6.8	○	○
213	813	9.4	1.4	6.0	○	○
214	809	9.4	1.5	6.8	○	○
215	733	9.4	1.2	6.7	○	○
216	765	9.5	1.2	6.3	○	○
217	712	9.6	1.4	8.4	○	○
218	910	9.6	1.2	7.0	○	○
219	934	9.8	1.4	7.3	○	○
220	811	10.0	1.4	7.5	○	○
221	907	8.4	1.2	6.0	○	○
222	945	8.5	1.0	6.0	○	○
223	739	8.5	1.0	7.0	○	○
224	796	8.6	1.2	6.2	○	○
225	812	8.8	1.5	6.7	○	○
226	717	9.0	1.1	7.0	○	○
227	1009	9.0	1.3	6.6	○	○
228	780	9.0	0.9	8.2		
229	716	9.0	1.1	7.0	○	○
230	909	9.0	1.2	6.4	○	○
231	810	9.2	1.3	7.1	○	
232	—	9.0	1.0	6.8	○	○
233	810	9.2	1.3	7.2	○	○
234	947	9.2	1.2	7.4		
235	803	9.4	1.3	8.0		
236	1012	9.4	0.9	7.0	○	○
237	934	9.4	1.3	6.4	○	○
238	738	9.5	0.9	7.0		
239	767	9.5	1.2	7.4	?	?
240	1010	9.6	1.2	7.6		
241	741	9.6	1.3	7.1		
242	914	9.6	1.0	7.2		
243	743	9.6	0.8	7.0		
244	1013	9.8	0.8	7.0	?	?
245	736	10.3	1.3	7.2		

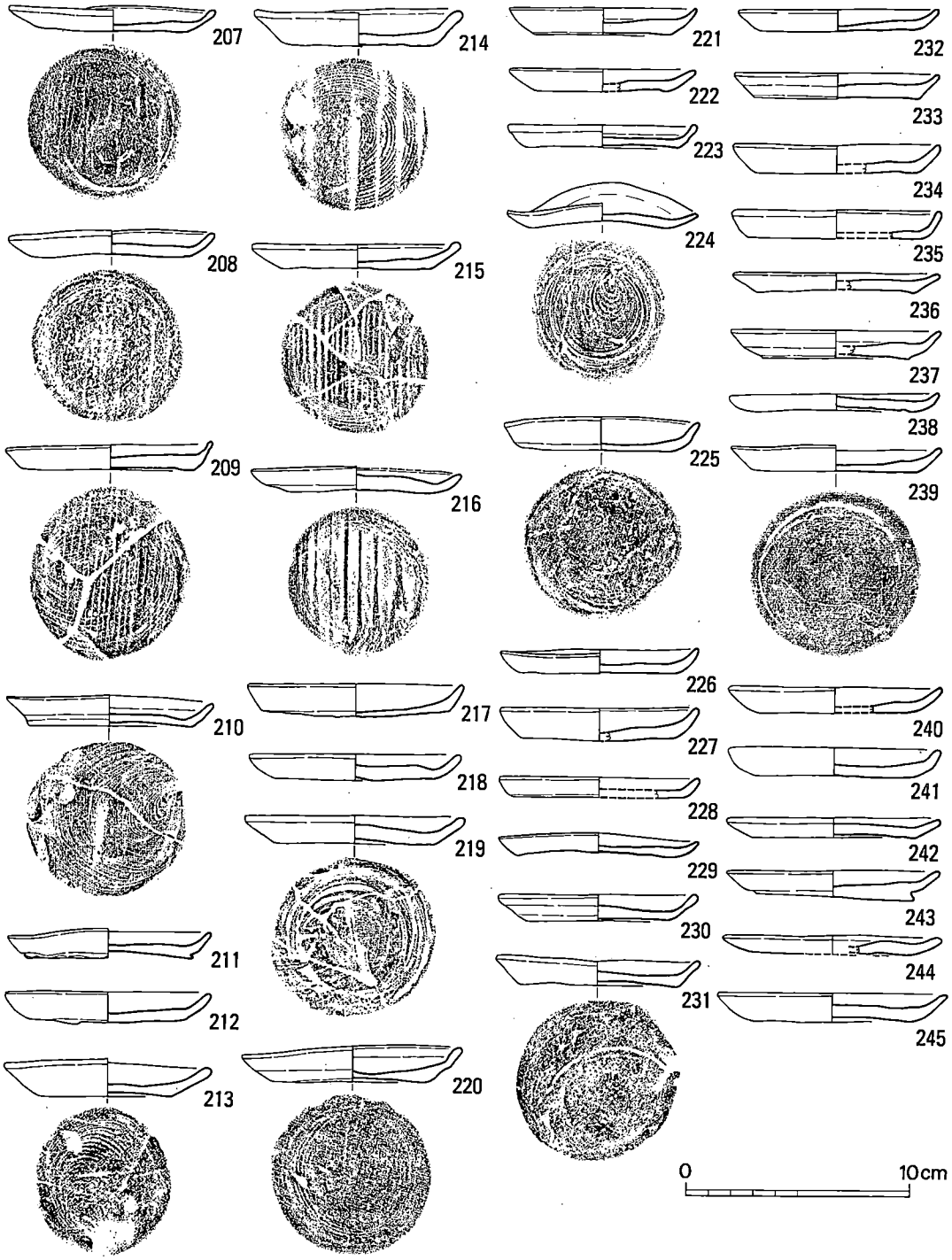
土師器鍋（246～255）　246～254は口縁部が外反して口縁端部は上面が平らに整えられる。なかには上面に刻み目を付す例もある。完形に復原できる例はないが、底部は平らに近い丸底らしく、体部はそのまま内彎して立ち上がり口縁部付近で直線的に開いている。いずれも外面全体に煤が付着する。246は復原口径38.0cmの大きさで、口縁部は短く外反して厚めである。体部外面はハケ目、内面はハケ目のあとナデられる。復原口径42.0cmの247、復原口径45.0cm程の大きさの248は口縁部まで内彎気味で端部内面が薄く突出し、外面は短く外反して厚い。内外面ともに板ナデ調整された後にナデ調整されるようで、板状工具端の痕と指頭圧痕が残る。



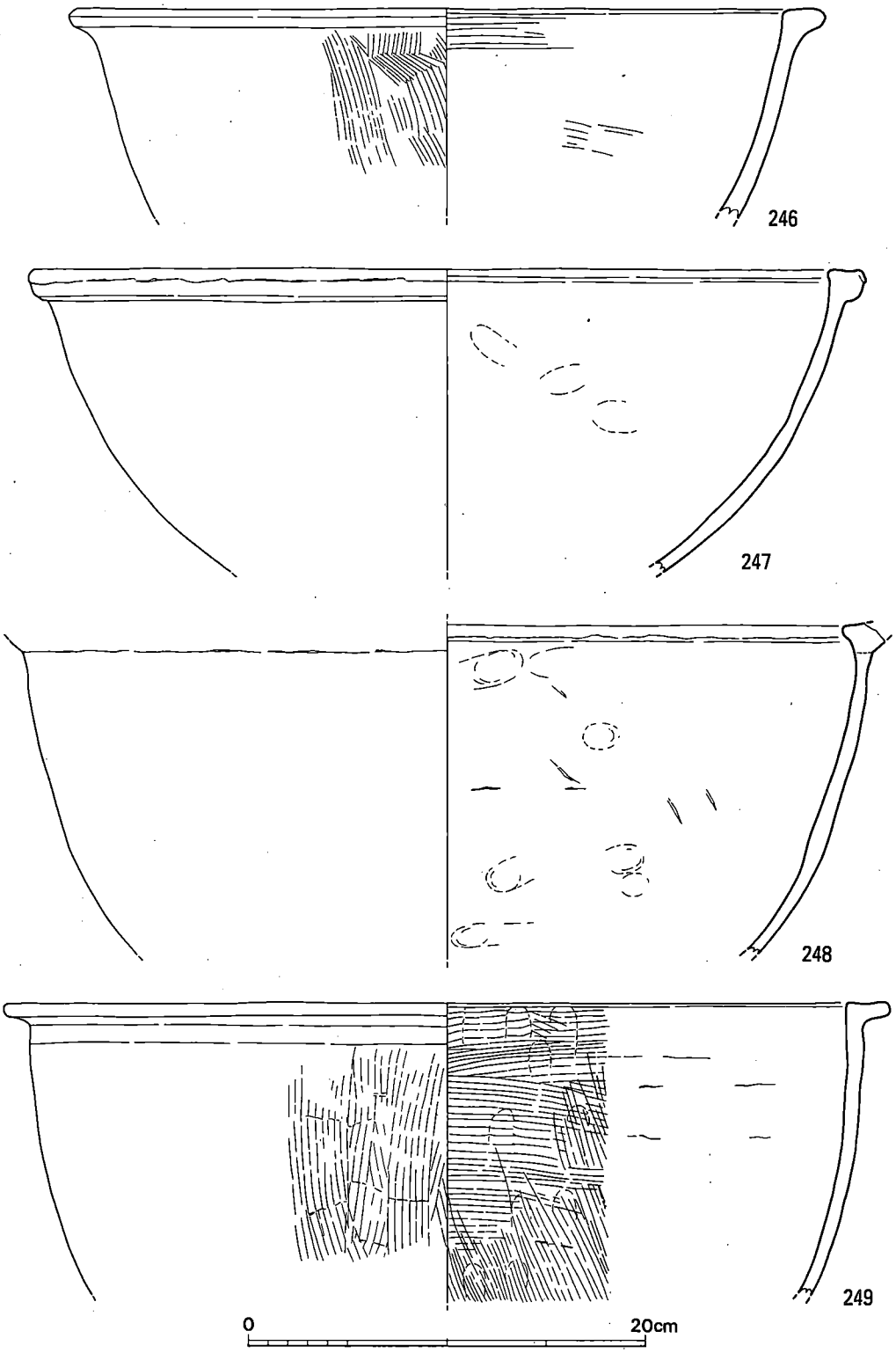
第118図　通路遺構１出土土器実測図13（1/3）



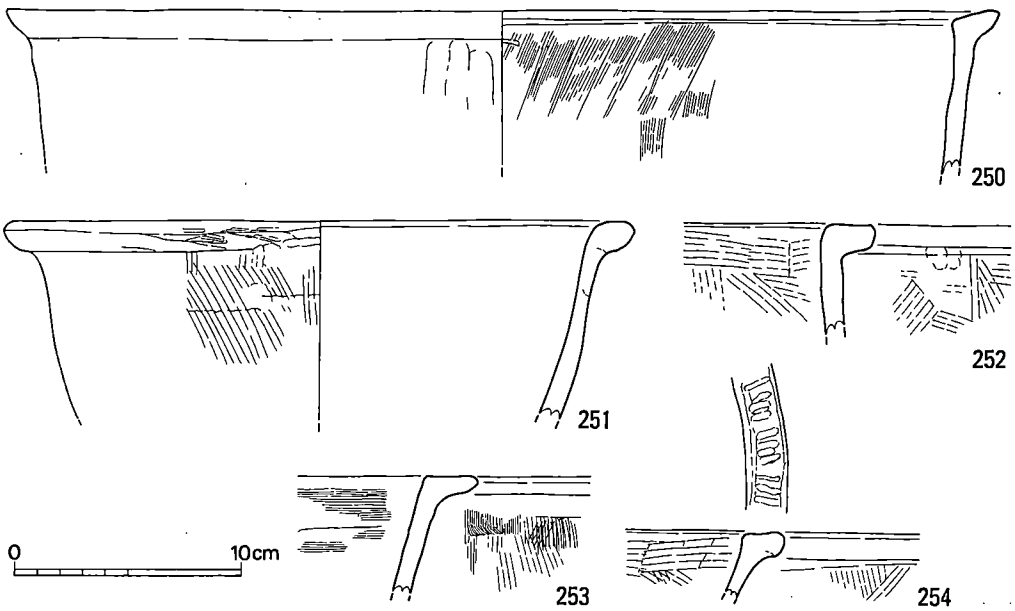
第119図　通路遺構１出土土器実測図14（1/3）



第120図　通路遺構１出土土器実測図15（1/3）



第121図　通路遺構１出土土器実測図16（3/10）

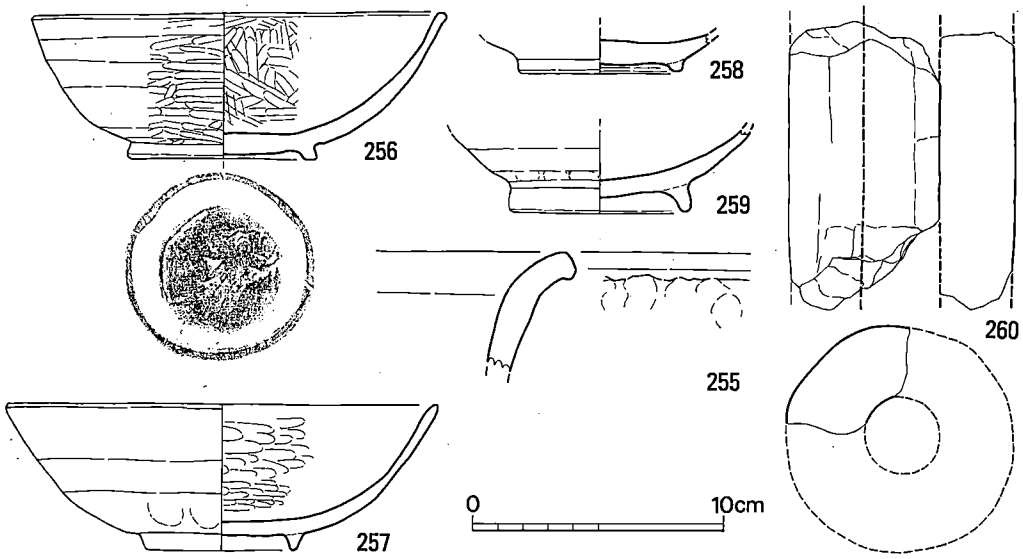


第122図　通路遺構１出土土器実測図17（3/10）

249は口径25.0cm、残存器高15.0cmの大きさで、口縁端部はＬ字状に外反し、体部内外面ともにハケ目調整される。250は復原口径43.8cmの大きさで、口縁端部は引き出したように外反する。体部外面はナデ調整、内面はハケ目調整される。251は破片がやや小さいため口径復原に不安が残るものの28.0cm程の大きさで、口縁端部は鈍く屈折して外反し、面の処理が雑である。体部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。252～254は体部内外面ともハケ目調整され、口縁端部は外反して上面を平らに整えられるが、254では口縁部上面に刻み目が付される。これらの鍋類の胎土は細砂粒・雲母を多く含み、淡茶褐色ないし茶褐色に焼成されている。

255は、緩やかに外反する口縁部の破片で、外面には煤が付着する。内外面ともにヨコナデとナデで調整されるが、口縁端部下の外面には指頭圧痕がみられる。胎土に細砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成される。

瓦器椀　（256～259）256は復原口径16.6cm、器高5.8cm、高台径7.6cmの大きさ。内彎した体部には外方に開く低い高台が付き、口縁部は外反気味に開く。内外面ともにヘラミガキ調整される。257は復原口径17.2cm、器高5.8cm、高台径6.6cmの大きさ。体部は内彎して開き、器壁の厚みは一定しない。底部には紐状の丸みをもった高台が貼付られ、口縁部は肥厚気味に僅かに外反する。内面はヘラミガキ調整され、外面はヨコナデとナデで調整される。258は高台径6.6cmの大きさの底部破片で、257と特徴が似ている。259は、やや外開きの高台の付く底部破片で、体部は内彎して立ち上がり、内外面ともにヨコナデとナデで調整される。いずれも精良な胎土で淡灰色ないし灰褐色に焼成されるが、重ね焼きの痕跡もみられる。



第123図　通路遺構１出土土器実測図18（1/3）

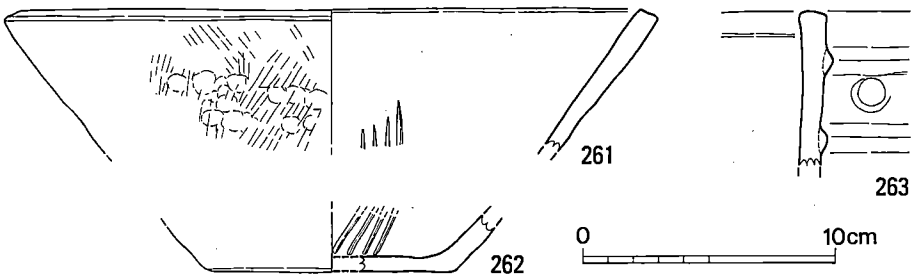
鞴羽口？（260）　直径9.0cm、孔径4.0cm程の大きさの円筒の破片で、外面は縦方向にヘラ削りされて、内面は未調整。鞴羽口の一部であろう。

これらの土器類では、糸切り底を有する土師器杯・小皿の法量から大宰府編年でのSK1204期に該当し、12世紀中頃の年代が与えられる。古いタイプの白磁碗や皿もみられ、同安窯系青磁碗・皿が多く含まれていて、古いタイプの龍泉窯系青磁碗・皿が含まれていることからも12世紀的な印象を受ける。また、白磁碗と同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗の特徴を兼ね備えた碗の存在は注目される。陶器での特徴をみても、12世紀中頃を中心とした時期の遺物が主体を占める。しかし、12世紀後半以降13世紀に増加する鎬蓮弁を有す龍泉窯系青磁碗や景徳鎮窯らしい青白磁皿などが一部とはいえ存在することは、この遺構が13世紀前後であることを示すものであろう。

上層出土土器（図版53、第124図）

土師質擂鉢（261・262）　口縁部破片と底部破片だが、別個体であろう。261は復原口径26.0cmの大きさで、体部は直線的に開き、肥厚気味の口縁部は端面が整えられる。外面はハケ目調整とナデで調整され、指頭圧痕が残る。内面はヨコナデ調整されて、下半部に櫛目が刻まれる。262は復原底径10.0cmの大きさの平底から直線的に体部が開くようである。器面が風化磨滅して調整手法は不明だが、体部内面に櫛目が刻まれている。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含むが、261では細砂粒・雲母を含むものの精良で瓦質に近い。

土師質火鉢（263）　直に立ち上がる口縁部破片で、外面に巡らされる2条の箍状凸帯間に円形らしい文様が押捺される。細砂粒・赤褐色粒などを胎土に含み橙褐色に焼成されるが、二次



第124図　通路遺構１上層出土土器実測図（1/3）

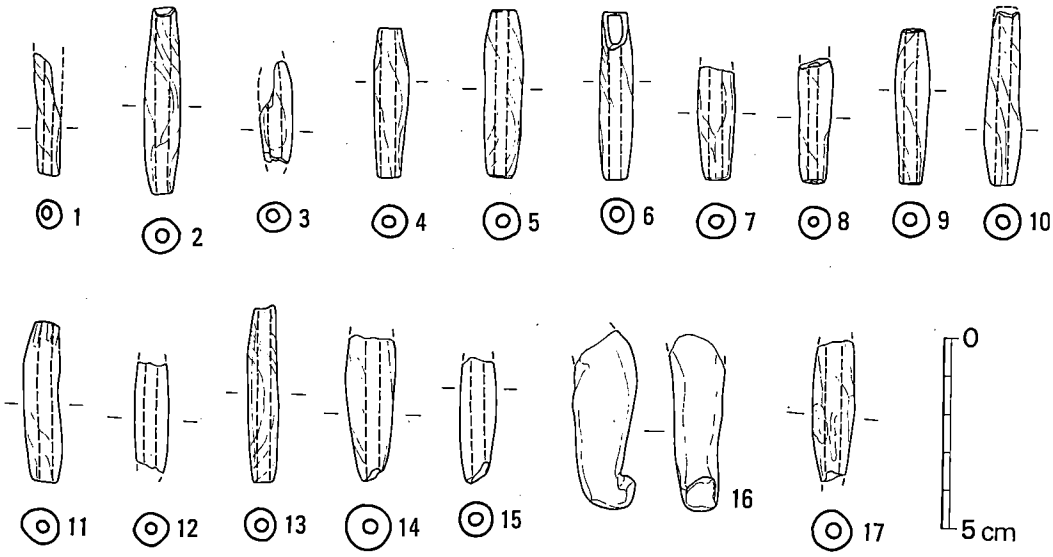
的な火熱で赤変する。

上層出土土器では、火鉢の特徴からみて14世紀以降の年代が与えられる。通路状遺構がほぼ埋没した段階をこの時期に想定することが出来よう。

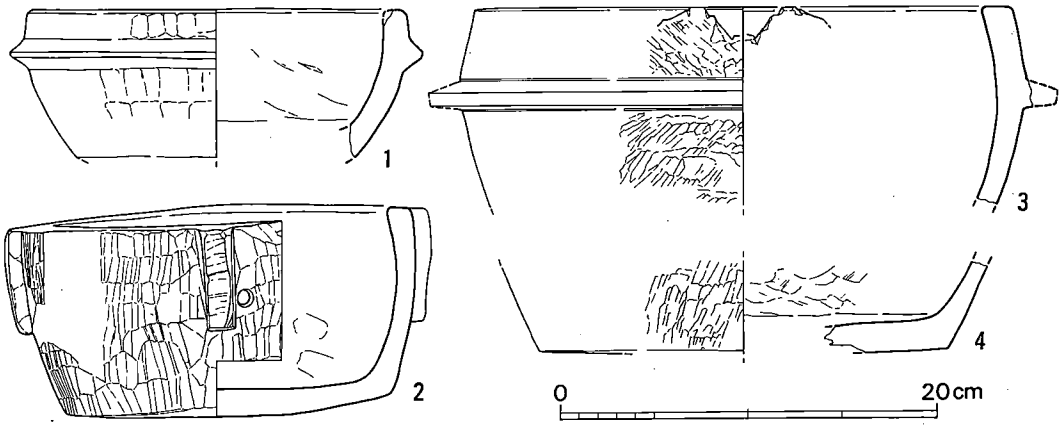
土製品（図版54、第125図）

管状土錘（１～15）　いずれも棒状の芯に生地を巻き付けて、エンタシスのような中膨らみの円筒形に整形して、芯を抜いて焼成したと思われる管状土錘である。外径0.8～1.3cm程、長さ4.0～5.0cm程の大きさで、孔径は0.3～0.4cm、重量は2.5～5.5gの幅がある。細砂粒・雲母・赤褐色粒を若干含むが精良な胎土で、淡茶褐色などの色調に焼成されている。

用途不明土製品（16）　一方の端が欠損面で全体の形は分からない。端部が鈎状に曲がっていて、腕を意匠したもの、容器の装飾などの可能性もあろう。赤褐色粒を含むものの精良な胎土を用いて、淡褐色に焼成される。現存長4.7cm、幅1.1～1.6cm、厚さ1.0～1.4cm、重量9.9gを測る。



第125図　通路遺構出土土製品実測図（1/2）



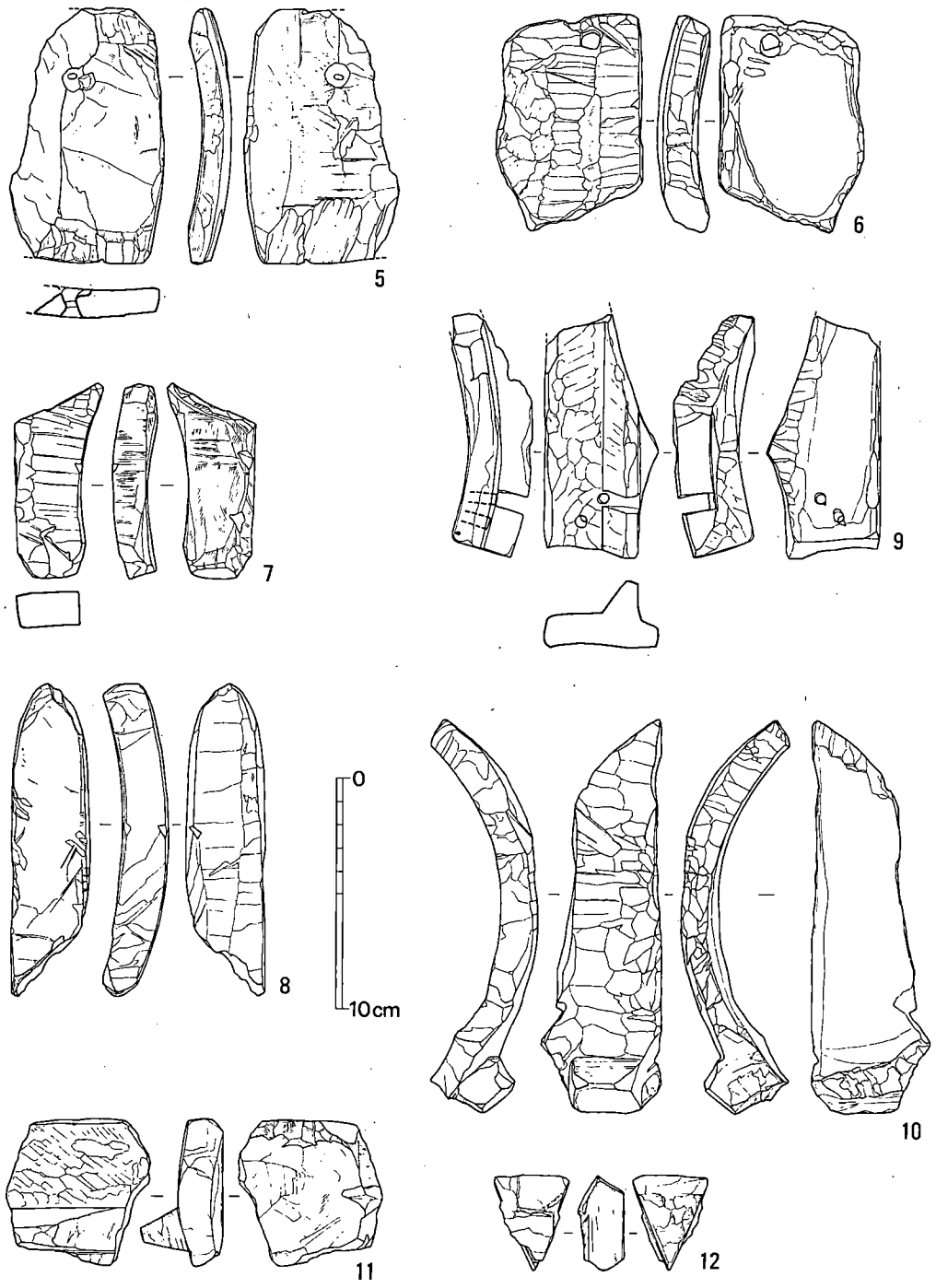
第126図　通路遺構１出土石製品実測図１（1/4）

石製品（図版55、第126・127図）

石　鍋（１～４）　１は復原口径20.4cm、残存器高7.8cm、底径14.8cmの大きさの滑石製石鍋で、器高は9.0cm弱であろう。器壁の厚みは1.3cm前後で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直に立って、端部上面は平坦。口縁下には断面三角形に近い台形の鍔状凸帯が巡る。外面には削り痕が明瞭に残るが、内面は磨耗して光沢をもつ。２は口径21.2cm、器高10.5cm、底径17.3cmの大きさの滑石製石鍋である。幾分丸みをもった平底の底部から、体部が内彎気味に立ち上がる器形で、口縁部上面は平坦に整えられる。厚さ1.0cm、長さ5.5cm、幅1.5cm程の耳が口縁から垂下する。器壁は1.0～1.5cmの厚さを有し、体部より底部が厚めである。外面は削り痕が明瞭に残り、内面も削り調整されるが磨滅して光沢を有する。耳は双耳か四耳か明らかでないが、耳の脇で胴最大径の位置あたりに円孔が穿孔されている。外面には煤が付着する。

３は復原口径28.8cm、残存器高10.4cmの大きさの滑石製石鍋片である。体部から口縁部にかけて内彎していて、胴最大径30.3cmの位置に鍔状の凸帯が巡る。器壁は1.3～1.6cmの厚さを有し、口縁部上面は平坦に整えられる。体部外面には削り痕が残り、内面は磨滅して滑らかになっている。外面の鍔状凸帯下面から底部側に煤が付着する。なお、口縁端部に再利用を意図したと思われる切り込みが２ヶ所みられる。４は復原底径21.8cmの大きさの底部破片である。底部は平らで、体部へは内彎気味に立ち上がる。体部外面には削り痕が明瞭に残り、内面は削り痕が残るものの磨滅が進んでかなり滑らかになっている。外面に煤が、内底面にお焦げが付着している。

石鍋転用石製品（５～12）　石鍋の破片を再利用したもので、用途は明確でない。５・６は掌に収まる大きさの扁平な板状を呈し、短辺の中程に近い位置に円孔が穿たれている。石鍋の口縁部をそのまま長辺に利用して、外面側は鍔状凸帯の部分を削り取り、短辺の内面側を斜めに削って湾曲するものの出来るだけ平らに調整している。５は一方の長辺に欠損があるが、長



第127図　通路遺構１出土石製品実測図２（1/3）

さ10.9cm、現存幅6.7cm、厚さ1.2cm、重量150.6gを測る。円孔は両側から穿孔される。6は長さ9.3cm、幅6.3cm、厚さ1.7cm、重量162.8gを測る。直径0.8cmの円孔が外面側から穿孔されていて、周縁は研磨される。孔に紐を通して垂下させるものと推察され、滑石の保温性を考慮すれば、懐炉として用いられた可能性が高い。

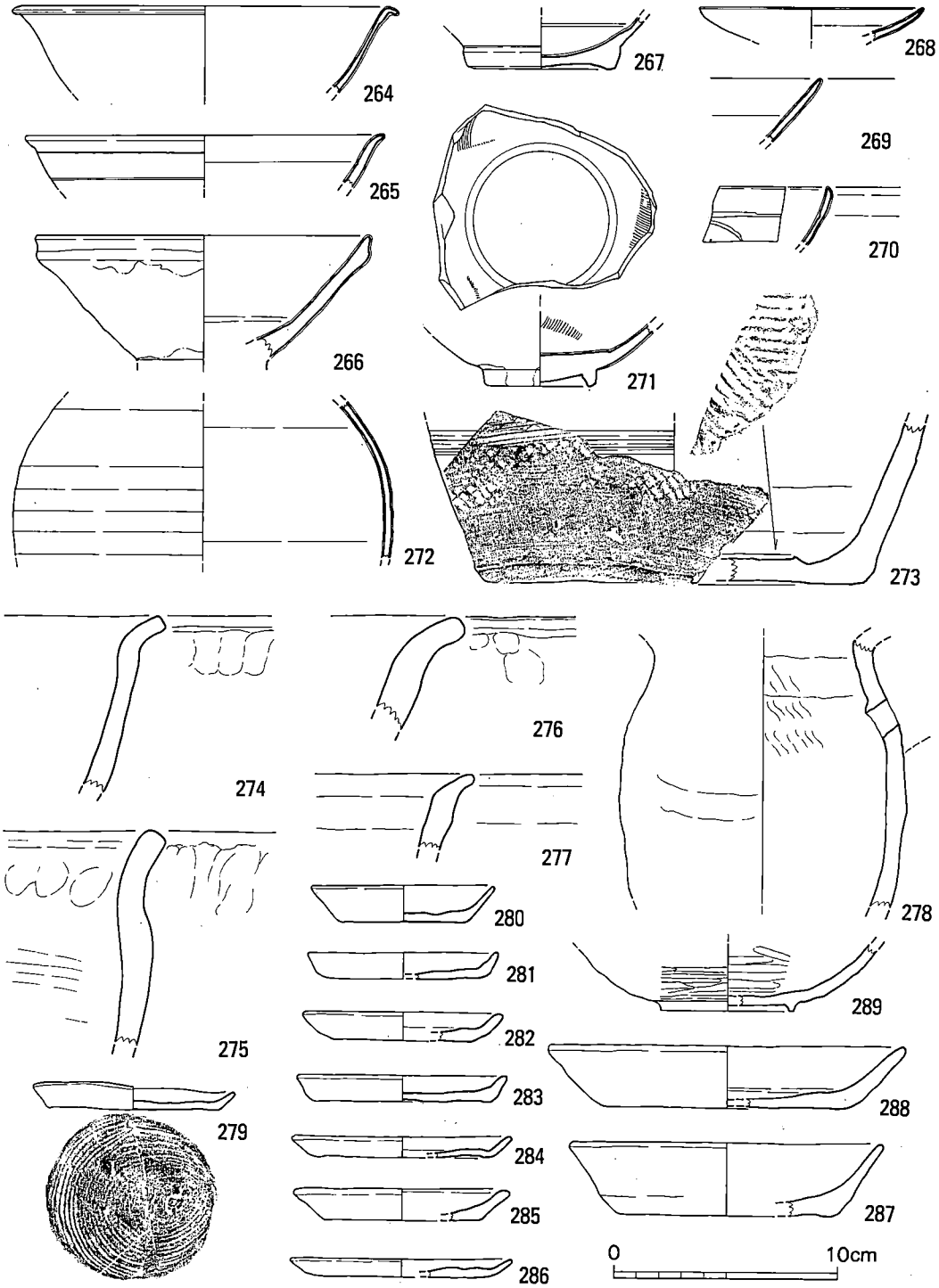
7～10は石鍋の口縁部を一方の側縁に用いて、一方の端は掌に握り易く、他方の端を尖らせたもので、工具の一種あろうか。7は尖頭側端部が折損・再利用を繰り返して長さが短くなったものと思われるが、掌に握ると尖った部分は僅かな長さである。長さ8.4cm、幅3.2cm、厚さ1.4cmの大きさの、剣把のような形状を呈する。先端部は4.0cm程の長さの面が斜めに削られて、45°程の角度をもつ。8は磨耗する先端部が鈍くなっている。長さ17.5cm、幅3.4cm、厚さ1.9cmの大きさで、反対側の端部は約45°の傾斜角、約4.0cmの面をもつが、使用による磨滅痕は僅かである。9は先端部を折損し、残存長10.5cm、幅4.8cm、厚さ2.8cmで、鍔状凸帯を残したまま、削り調整で先端側を尖らせている。基部側端は切り取ったような面を有し、凸帯の一部を0.8cm幅に切り込み、直径0.4cmと0.5cmの円孔が穿孔されている。10は完形に残り、長さ17.0cm、先端側の幅3.5cm、幅1.3cm、基部側の幅5.1cm、厚さ3.1cmの大きさ。先端部は約45°の傾斜角度で、長さ5.0cmの面を有し、先端は磨耗する。基部端には石鍋の耳状突起が残り、削り調整で面が整えられている。掌で握る部分は磨耗して滑らかな面をもつ。重量は249.0gを測る。
11は石鍋の口縁部破片の周縁を削り調整するもので、鍔状凸帯にも削りが及んでいる。長さ・幅ともに6.2cm、厚さ3.3cmの大きさ。12は長さ4.1cm、幅3.3cm、厚さ1.9cmの大きさの三角形を呈すが、両側縁は擦り切り手法で切断されている。いずれも用途は不明。

2号通路状遺構（図版214、第49図）

調査区中央部のH15区にあり、平面形は南東側へ扇形に広がるようだが、主体部分は道路確保の非調査区域に潜るため知り得ない。斜面上側の平坦面では4号墳周溝と重複し、周溝より後出するが、11号溝とも重複していて、北東側端を切り込まれている。N40°W前後の北西一南東方向に向き、長さ2.5m、南側で上面幅2.2m、深さ0.5mを測るが、東側のGH14区落ち込みによって削られている。堆積土はやや黒っぽい暗茶褐色土・黄茶褐色土で、土師器片・白磁・青磁片などが含まれる。床面は緩やかに傾斜し、砂と粘土質土が薄く互層に堆積しているが、階段施設は確認していない。

出土土器（図版53･54、第128図）

白磁碗（264～267・269）　264・265は口縁部が短く外反する碗で、265では口縁部下の内面に沈線が1条巡る。復原口径17.2cm、16.0cmの大きさ。266は復原口径15.0cm、残存器高5.4cmの大きさ。口縁部は玉縁状に外側へ肥厚して、内底見込み部分に沈線状の凹みがある。器壁が厚めで、釉もやや厚く掛かり、玉縁下などに釉垂れがみられる。267は復原底径6.7cmの大きさの



第128図　通路遺構２出土土器実測図（1/3）

高台の低い破片で、内底見込みに沈線が巡る。内面には釉が掛かるが外面は露胎のままである。269は釉が灰色を呈し、直線的に開いて内面に沈線が巡る口縁部破片

白磁皿（268）　復原口径10.0cmの大きさの内彎して開く皿で、内底に沈線が巡る。外底部分は露胎。

青磁碗（269～271）　269は内彎気味に開く口縁部破片で、内面に巡る沈線の下に弧状の沈線がみられる。灰黄緑色の釉が掛かる同安窯系青磁碗である。271は内面に3単位の櫛描き文様のみられる龍泉窯系青磁碗で、黄色の強い黄緑色の釉が掛かり、露胎の高台部分は径5.0cmを測る。

陶器壺（272）　丸みをもって膨らむ肩部破片で、復原胴最大径16.8cmの大きさ。胴部外面は幾分指頭圧痕の凹凸が残るヨコナデで調整されて、破片の上端に耳の剝落した痕跡があるものの二耳か、四耳かは分からない。胎土は精良で灰色を呈し、黄緑味の強い茶褐色の釉が薄めに掛かる。

須恵質擂鉢（273）　復原底径17.8cmの大きさの底部破片で、胴部側の外面は回転板ナデされるが格子叩き目痕が残り、内面はヨコナデ調整される。外底面はナデ調整され、内底面には櫛目が刻まれる。胎土に細砂粒を含み、灰色に焼成される。

土師質鍋（274～277）　いずれも胴部があまり膨らまずに口縁部が外反する鉢で、ヨコナデないしナデ調整される頸部から口縁部には指頭圧痕がみられる。胴部内面はヘラ削りされる。胎土には細砂粒・雲母が含まれ、黄茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

土師質壺（278）　肩部に穿孔のある胴部破片で、口縁部と底部を欠くために全体の器形は分からない。復原胴最大径12.9cm、頸部径9.8cmの大きさ。内外面ともにナデ調整され、肩部内面には絞り痕が残る。直径1.2cm程の円孔が内下がりに穿孔されて、穿孔の周囲に注口の剝落した痕跡がみられる。胎土に細砂粒を含み、淡茶褐色に焼成され、外面には煤が付着する。

土師器小皿（279～286）　糸切り底を有する小皿で、板目圧痕の付く例もある。口径8.2cm、器高1.6cmの280が小さな例で、他は復原口径8.6～10.0cm、器高0.9～1.4cmの大きさを有し、完形資料では口径9.0～9.4cm、器高1.1～1.2cmを測る。

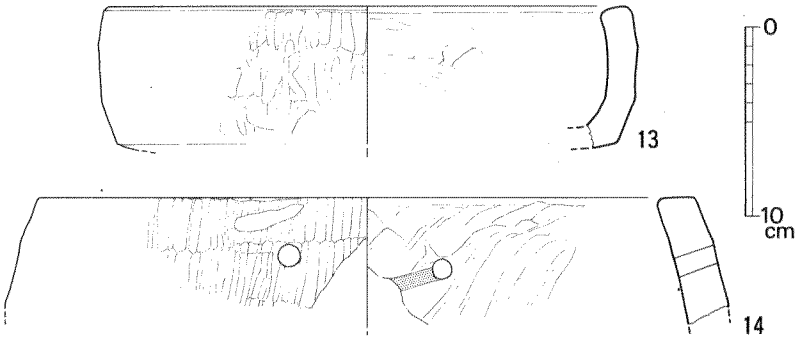
土師器杯（287・288）　糸切り底の杯で、287には板目圧痕がみられる。復原口径16.0cm、器高2.8cmの大きさ。288は復原口径14.0cm、器高3.2cmの大きさである。

瓦器椀（289）　口縁部を欠くが、復原高台径6.0cmの低い高台の付く底部から内彎して開く体部を有し、内外面ともにヘラミガキ調整される。

これらの土器類は、糸切り底の土師器杯・小皿の法量や、白磁碗・青磁碗・瓦器椀の特徴からみて、12世紀中頃～後半の時期であが、陶器や土師質鍋などの存在からみて14世紀以降までの時期幅を考慮する必要があろう。

土製品（図版54、第125図）

管状土錘（17）　両端部を欠損するが、現存長3.7cm、外径1.0cm、孔径0.4cm、重量4.1gの大



第129図　通路遺構２出土石製品実測図（1/4）

きさ。細砂粒・雲母・赤褐色粒を胎土に含む。棒状の芯に巻き付けて整形し、ヘラ削りの後にナデ調整されている。

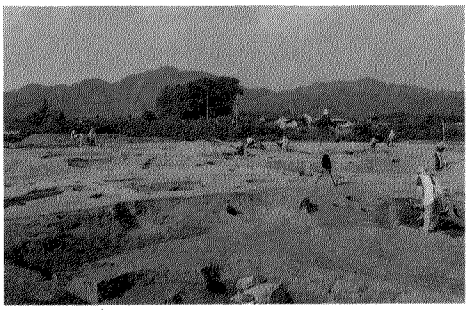
石製品（図版55、第129図）

石　鍋（13・14）　13は体部が内彎する滑石製の石鍋で、口縁部から底部まであまり深くない破片である。復原口径28.0cm、残存器高7.5cmの大きさで、幾分丸みをもつ平底を復原した場合8.0cm程の器高であろう。器壁は1.5cm前後の厚さ、胴最大径は28.8cmで、内彎した口縁部の上面は平らに整えられ、耳状突起は分からない。内外面に削り痕がみられ、内面はやや磨耗する。外面には煤が付着する。14は内傾する口縁部破片で、復原口径35.2cm、残存器高6.7cm。器壁は2.3cmとやや厚めで、内外面ともに削り痕が残る。口縁部上面は平らに整えられ、口縁下に直径1.0cmの円孔が穿孔される。円孔と円孔に続く体部内面に幅0.8cm、長さ2.6cmの帯状に鉄錆で染まった部分がみられる。

3号通路状遺構（図版44、第130図）

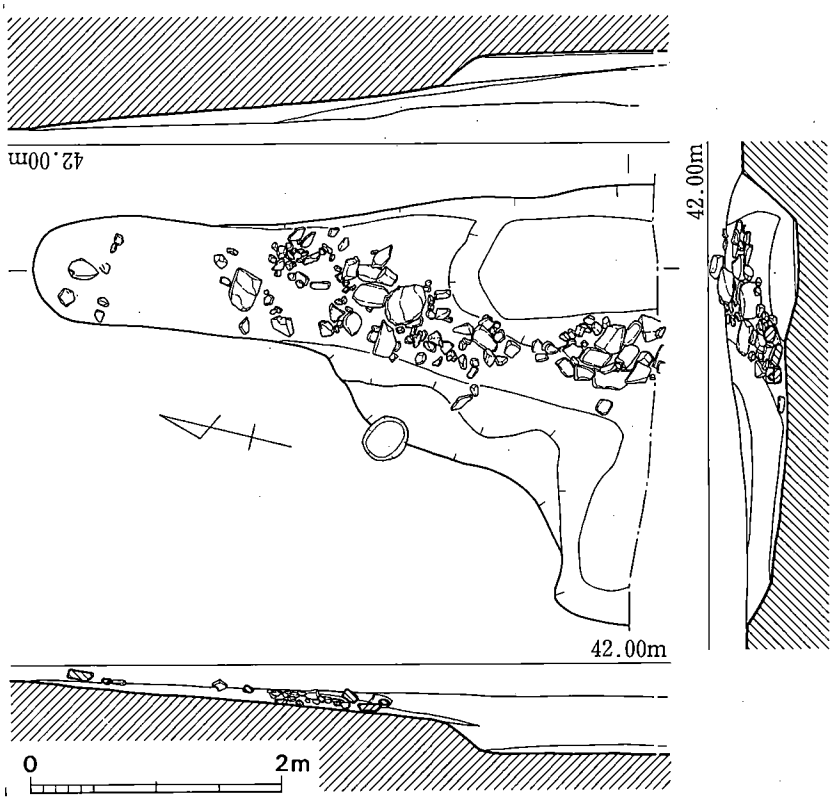
調査区南端のLM12区にあり、平面形は南側へ扇状に広がる。長さ4.6m、南側で上面幅3.4m、深さ0.5mを測る。N12°W前後で南北方向にのびて、斜面の上側で幅が狭く、斜面下側に向かって幅が広がり、深くなる。床面は階段状を呈し、階段一段は幅0.7m、長さ1.5m前後の広さをもち、階段の高低差は0.3m程である。

通路状遺構内に堆積した、暗茶褐色土・茶灰色土などの土砂には安山岩・砂岩などの円礫も含まれ、土師器や白磁・青磁などの陶磁器、炭粒などが含まれる。


調査風景２

出土土器（図版54、第131図）

青磁碗（290～292）　290は復原口径19.0cmの大きさの内外面とも無文で口縁内面に沈線が１条



第130図　通路遺構３実測図（1/60）

巡る青磁碗で、龍泉窯系碗Ⅰ―1類に分類される。291・292は内面に草花文様が描かれる龍泉窯系碗Ⅰ－２類の口縁部破片である。この他にも胴部破片が出土していて、体部外面に片彫り風の沈線を有する同安窯系青磁碗Ⅲ類の破片もみられる。

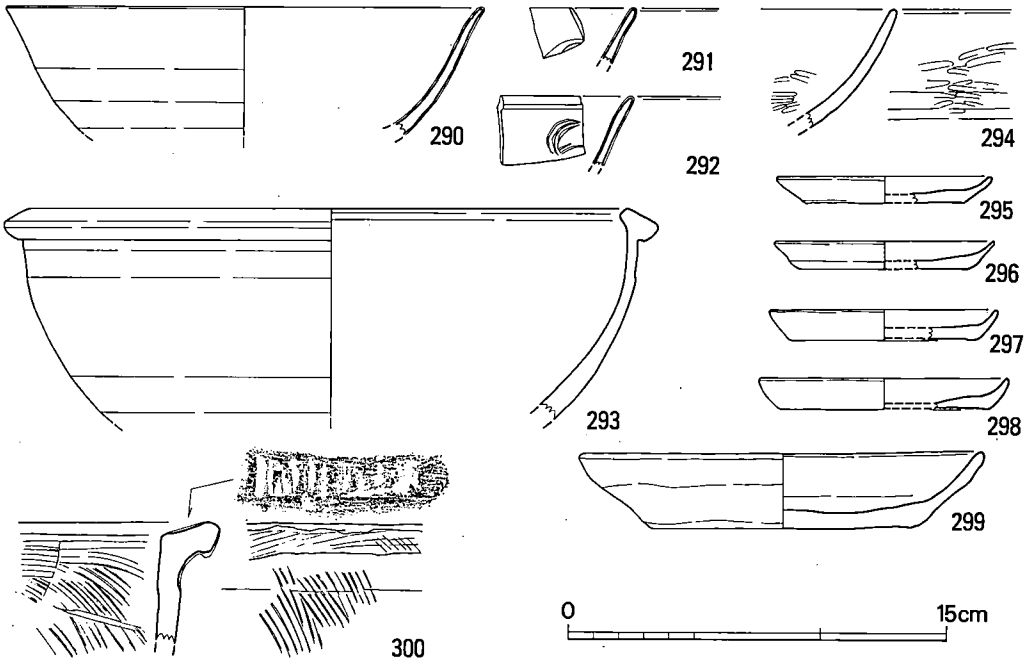
陶器鉢（293）　復原口径26.0cm、残存器高8.3cmの大きさの鉢で、内彎する体部が口縁部で直立気味になるが、口縁端部は内側にのびて、折り返すように外下方に肥厚する。紫灰色の精良な胎土で、内外面ともに暗茶褐色ないし暗褐色を呈していて、口縁部上面に目土跡がみられる。

瓦器椀（294）　底部側を欠くが、口縁部まで内彎する器形の椀。内外面ともにヘラミガキされ、外面の下半部にヘラ削り痕がみられる。

土師器小皿（295～298）　いずれも破片資料である。復原口径8.6cm～10.0cm、器高1.0～1.2cmの大きさで、外底面には糸切り痕がみられ、295に板目圧痕がある。

土師器杯（299）　口径16.1cm、器高3.0cm、底径10.7cmの大きさ。外底面には糸切り痕と板目圧痕がみられる。

土師器鍋（300）　体部内外面ともにハケ目調整される口縁部破片で、L字状に屈折した口縁



第131図　通路遺構３出土土器実測図　(1/3)

部上面に刻み目が並ぶ。胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成されて、外面には煤が付着する。

これらの土器の他にも図示しないが、無釉の陶器片、外底部が露胎の白磁皿片などが出土している。これらの土器からは、12世紀中頃～後半の時期が与えられる。

8．溝状遺構

1号溝

調査区南部のＫ９区～Ｍ９区にある溝で、３号建物跡の南側に位置して、建物跡を構成する柱穴と重複する。N11°Wの方向をとり、長さ10.5mを確認した。北端部で建物跡の柱穴を削るが、その北側で畑の段落ちの溝で削られ、南端は浅くなって消失する。幅0.7～0.8m、断面は浅いU字形を呈して、最も深い部分で0.2mの深さをもつ。暗灰茶褐色の砂質土が堆積する。

出土土器（第132図）

土師器高杯（１）　杯口縁部と裾部端を失う。中実の柱状部は短く、脚裾部が大きく開き、円孔が３ヶ所に穿孔される。脚部外面はヘラミガキ調整、他の部分はナデ調整される。胎土に

細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、黄橙色に焼成される。
高杯は古墳時代初期に含まれる。このほかに、図示しえない小破片だが、条痕を有する縄文土器片、土師器杯片、瓦質土器片、備前焼らしい擂鉢片、染付土器片が出土している。従って中世以降の溝であろう。

2号溝

1号溝の約12m東側に位置する溝で、約4.5mの長さを確認した。南側は調査区域外に続き、北側は東側に曲がって、その先は削平されて不明。幅0.5m、深さ0.1m弱の断面U字形溝で、灰茶褐色の砂質土が堆積する。隣接する3号溝と堆積土に差はみられない。

出土土器

小破片のため図示しないが、須恵器甕片、土師器杯片、土師質鍋片、瓦器椀片などが出土している。

3号溝

2号溝のすぐ東側に隣接する溝で、約4.5mの長さを確認した。南側は浅くなって、傾斜の中に消え、3号溝同様に東側に曲がり、先は削平されて不明。幅0.2m、深さ0.1m弱の断面U字形の溝で、2号溝同様の灰茶褐色砂質土が堆積する。土師器細片が出土した。

4号溝

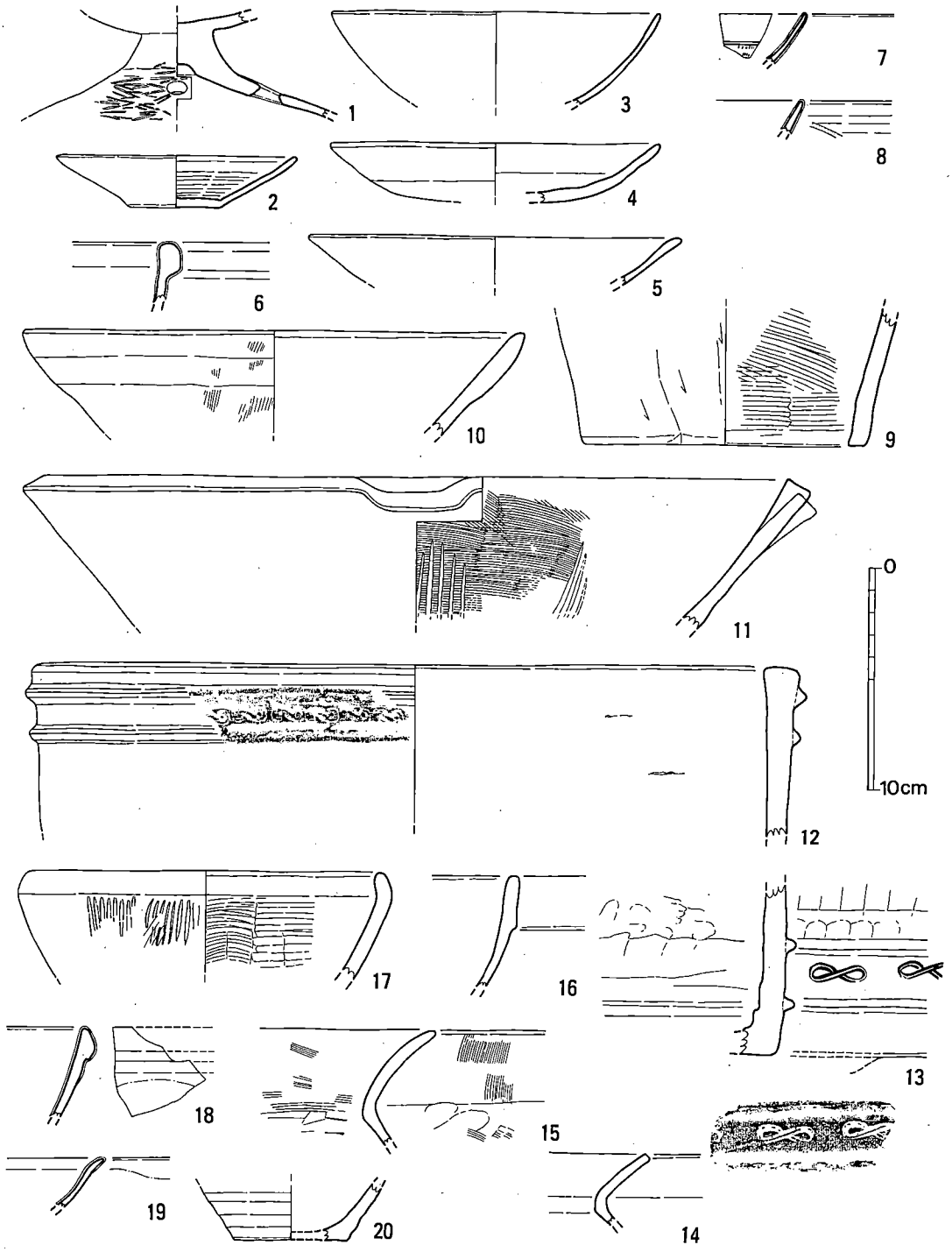
1号溝の約6m東側にあり、3号建物跡の南側に位置して、建物跡を構成する柱穴と重複する。N22°Wの方向をとり、長さ4.0mを確認した。北側で建物跡の柱穴を削るが、その北側で畑の段落ちの溝で削られ、南端は浅くなって消失する。幅0.2m、深さ0.1m強の断面U字形を呈する。灰茶褐色の砂質土が堆積し、東西方向を向く5号溝と交差して後出する。

出土土器（第132図）

瓦器椀（3）　復原口径15.0cm、残存器高4.1cmの大きさの、体部から口縁部まで緩やかに内彎して立ち上がる椀。器面は風化して調整手法は分からないがヘラミガキであろう。精良な胎土で、灰色と灰黄褐色に焼成される。

土師器杯（4・5）　ともに緩やかに内彎して口縁部が開く杯で、4では底部との境目は不明瞭。外底部は風化しているが、口縁部はヨコナデ、内底部はナデ調整される。復原口径15.0cm、器高2.6cmの大きさ。5は復原口径17.0cmの大きさで、口縁端部はやや肥厚する。

瓦器椀などの存在から、12世紀中頃の可能性が高いが、このほかにも土師器甕小片、糸切り底の土師器小皿片が出土している。



第132図　溝出土土器実測図１（1/3）

5号溝

1号溝の約5m北東側にあり、3号建物跡を構成する柱穴と近接するが重複せず、4号溝と交差して、4号溝より先行する。ほぼ東西方向を向き、長さ7.0mを確認した。幅0.2～0.5m、深さ0.1m弱の断面U字形を呈する。西端は浅くなって消失し、東側は床が凸凹をもち、柱穴様ピットが連続したような状況で終わる。暗灰茶褐色の砂質土が堆積し、糸切り底の土師器小皿小片が出土したが、図示しえない。

6号溝

調査区西端部に発見された溝で、1号建物跡と1号墳周溝の間に位置する。北北西一南南東方向に向き、長さ16.5mを確認したが、幅0.7～1.5m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する。北端は浅くなって消失し、南側は調査区域外に潜る。暗茶褐色の粘質土が堆積する。

出土土器（第132図）

白磁碗（6）　玉縁の口縁部破片である。

このほかに、鉄釉のかかる備前焼きらしい擂鉢片が出土したが、図示しえない。中世以降の溝であろう。

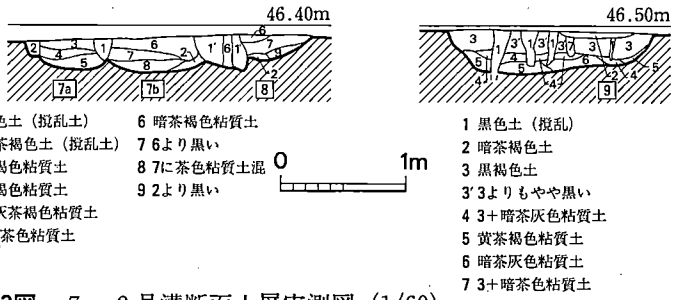
7号溝

調査区西端部に発見された溝で、6号溝同様に北北西一南南東方向を向き、1号墳を寸断するように切り込む。N27°W前後の方向で、長さ23.0mを確認したが、北端は崖の斜面に消えて、南側は寸断される。幅1.0m前後、深さ0.2m程の断面U字形を呈す。1号墳主体部の付近から北側で、東側に隣接する溝と重複するものの、前後関係はさほど明確ではない。このため色調の淡い堆積土が堆積する東側溝を7b号溝と区別し、更に7号溝の北部の下層を7a溝とした。暗茶褐色の粘質土と黒褐色粘質土が堆積し、1号墳石室に使用されていたと推定される河原石円礫が混じる。

7号溝出土土器（図版56、第132図）

青磁碗（7・8）　7は同安窯系青磁碗Ⅰ－1類の口縁部破片、8は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類の口縁部破片である。

土師器甑（9）　底径13.0cmの大きさで、体部がバケツの如く直線的に立ち上がるが、体部上半を欠く。底部端は幾分内彎気味に終わり、端面は平らに整えら



第133図　7～9号溝断面土層実測図（1/60）

れる。外面はヘラ削りされ、内面はハケ目調整される。

土師器鉢（10）　復原口径22.9cmの大きさの、体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部が僅かに肥厚する鉢で、器面は風化するが外面にハケ目が一部残る。

土師質擂鉢（11）　復原口径35.8cmの大きさの、体部から口縁部にかけて内彎気味ながらも直線的に開く器形で、片口が付く。口縁端部は肥厚気味で、上面は平らに整えられる。体部外面はナデ調整、内面はハケ目調整され、櫛歯状の目が刻まれる。

土師質火鉢（12・13）　12は復原口径35.0cmの大きさの、口縁部が直線的に立ち上がる口縁部破片。口縁端部はやや肥厚して上面は平ら。器面は磨滅するが、ヨコナデ調整であろう。口縁部下に巡る2条の箍状凸帯間に逆S字状の文様が連続押捺される。体部も円筒状らしい。13は底部破片で、平らな底面の端に足の一部が残る。体部へは直線的に立ち上がり、底部に平行して巡る2条の箍状凸帯間に8字状の文様が連続押捺される。外面はヘラ削りと指頭圧痕の残るナデ、内面は指頭圧痕の残るナデとヨコナデで調整される。

このほかに、瓦器椀片、鉄釉のかかった器壁の薄い陶器小片が出土している。

7a号溝出土土器（図版56、第132図）

土師器甕（14・15）　14は口縁部が直線的に開き、端部内面がつまみ上げたように突出する甕の口縁部破片で、体部内面のヘラ削りは頸部下まで及ぶ。15は口縁部が緩やかに外反する甕の口縁部破片で、口縁部内外面と体部外面にはハケ目がみられ、体部内面は頸部までヘラ削りされる。ともに古墳時代初頭の甕であろう。

土師器鉢（16・17）　16は内彎する口縁部破片で、体部は型押しで整形されて丸みをもち、口縁部下の外面に薄く肥厚した段が生じている。内外面ともにヨコナデ調整される。こね鉢であろうか。17は内彎する口縁部破片で、復原口径16.2cmの大きさ。内面はハケ目調整されて、外面は叩き目の残るナデ調整だが一部にハケ目がみえる。摺鉢であろう。

白磁碗（18）　口縁端部が玉縁になる、白磁碗Ⅳ類の口縁部破片である。

白磁皿（19）　比較的薄めの口縁部が緩やかに外反し、外面の露胎部分の多い皿で、白磁皿Ⅴ類に分類される。

土師器杯（20）　外底面に糸切り痕のある底部から直線的で長めに口縁部が開く器形の杯で、杯b類に分類されるが、復原底径5.2cmの大きさ。13世紀後半頃であろうか。

このほかに、須恵器片、瓦器椀らしい破片、土師質擂鉢片が出土しているが、図示しえない。

7a号溝出土石製品（図版57、第134図）

石　臼　凝灰岩製の下臼で、受け皿部分の破片である。高さ6.2cmのうち底の厚みが4.5cmを占める。外面は粗い削り痕の残る調整で、45°に近い傾斜に開き、縁は1.7cm幅前後の平坦面に整えられ、平滑に研磨される。内面も平らに研磨されるが、縁側に内彎する部分には削り痕が残る。外径の復原値は24.0cm前後であろう。

7b号溝出土土器（図版56、第135図）

青磁碗（21）　復原口径16.0cmの大きさの、内外面ともに無文の碗で釉が厚くかかる。龍泉窯系青磁碗Ⅰ—1類に分類される。

白磁碗（22）　口縁端部が短く外反し、内面に沈線が1条巡る碗で、白磁碗Ⅷ類に分類される。

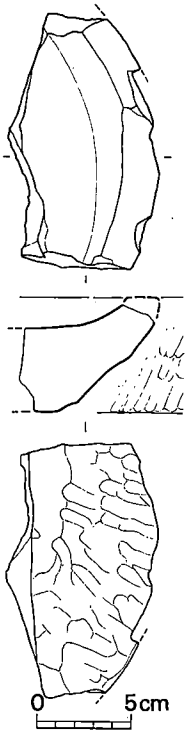
瓦器椀（23）　復原口径17.4cmの大きさで、体部が内彎して口縁部が外反気味の椀。器面は風化磨滅するが、体部外面の下半部にヘラ削りらしい痕跡がある。

土師器鉢（24）　内外面ともにハケ目調整される口縁部破片で、やや器壁が厚く、内彎する。

土師質火鉢（25）　復原径31.5cmの大きさの胴部破片で、2条単位の沈線間に円文が連続押捺される。2条単位の沈線は箍状凸帯が剝落した可能性もあるが、痕跡は不明。

土師器高杯（26）　高杯もしくは器台の脚裾部破片で、喇叭状に開くが裾部は欠損して不明。内外面ともにナデ調整され、円孔が8ヶ所程度穿孔されるようである。

土師質火鉢の特徴は14～15世紀頃の可能性が高い。



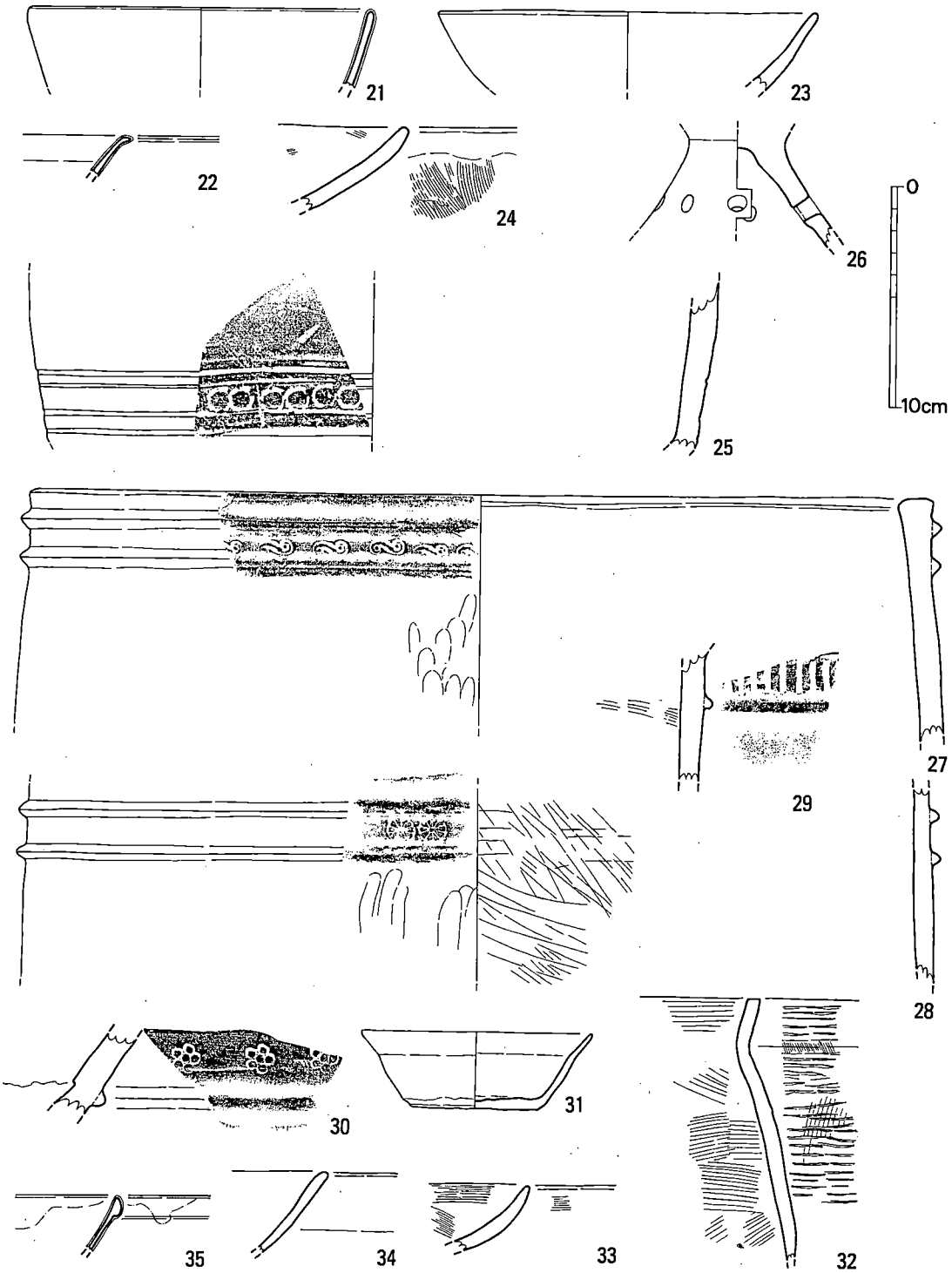
第134図
溝7a出土石製品
実測図（1/4）

7b号溝出土土製品（図版57、第137図）

管状土錘（1～3）棒状の芯に生地を巻き付けて、ナデ調整を加えて中膨らみの管状に整形した土錘で、1・2では外径1.1～1.2cm、孔径0.2cmと細く、1は欠損するが、2は長さ4.7cm、重量5.3gを測る。3は長さ3.4cm、外径1.7cm、孔径0.3cm、重量7.7gを測るが、棗玉のように膨らむ形状の土錘である。いずれも、胎土に赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

8号溝

調査区西端部に発見された溝で、7a号溝・7b号溝の東側に隣接して、同様に北北西一南南東方向を向く。1号墳を寸断するように切り込むが、7b溝よりも先行する。N27°W前後の方向で、長さ12.0mを確認したが、北端は崖の斜面に消えて、南側は1号墳主体部上の柿の根の攪乱で寸断される。幅1.0m前後、深さ0.2m程の断面U字形を呈するが、暗茶褐色粘質土の下に焼土を含む茶褐色粘質土が堆積する。



第135図　溝出土土器実測図２（1/3）

出土土器（図版56、第135図）

瓦質火鉢（27～30）　27・28は体部が僅かに膨らんだ樽のような形状で、27の口縁部は内彎気味ながらも直線的で、端部上面は平らに整えられる。復原口径41.2cmの大きさ。口縁部外面に巡る2条の箍状凸帯間に逆S字文様が連続押捺される。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整される。28は27と同程度の大きさの胴部破片で、外面に巡る2条の箍状凸帯間に菊花文様が連続押捺される。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ目調整される。二次的な火熱を受けて赤変する。29は箍状凸帯間に縦方向の短直線で刻み目が付される胴部破片で、内面はハケ目調整される。30は上下が逆かも知れないが、体部は傾斜する。外面に箍状凸帯と梅花文様が連続押捺される。内面はナデ調整されるが、胎土の継ぎ目痕が残る。

土師器杯（31）　復原口径10.6cm、器高3.5cm、底径5.7cmの大きさ。糸切り底の底部から直線的に体部が開き、口縁部は緩やかに外反する。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含むが精良な胎土で、茶褐色に焼成されている。

これらの土器類は、13世紀以降の所産で、14世紀まで下降する可能性もあろう。

9号溝

調査区西部に発見された溝で、8号溝の北東側に位置して、1号墳周溝の北東側に近接する。北西一南東方向を向き、5号住居跡と2号建物跡を構成する一部の柱穴を削る。N40°W前後の方向で、長さ12.0mを確認したが、北端は崖の斜面に消えて、南側は浅くなって消滅する。幅1.6m前後、深さ0.35m程の断面U字形を呈するが、上部に黒褐色土、下部に暗茶灰色の粘質土が堆積する。

出土土器（図版56、第135図）

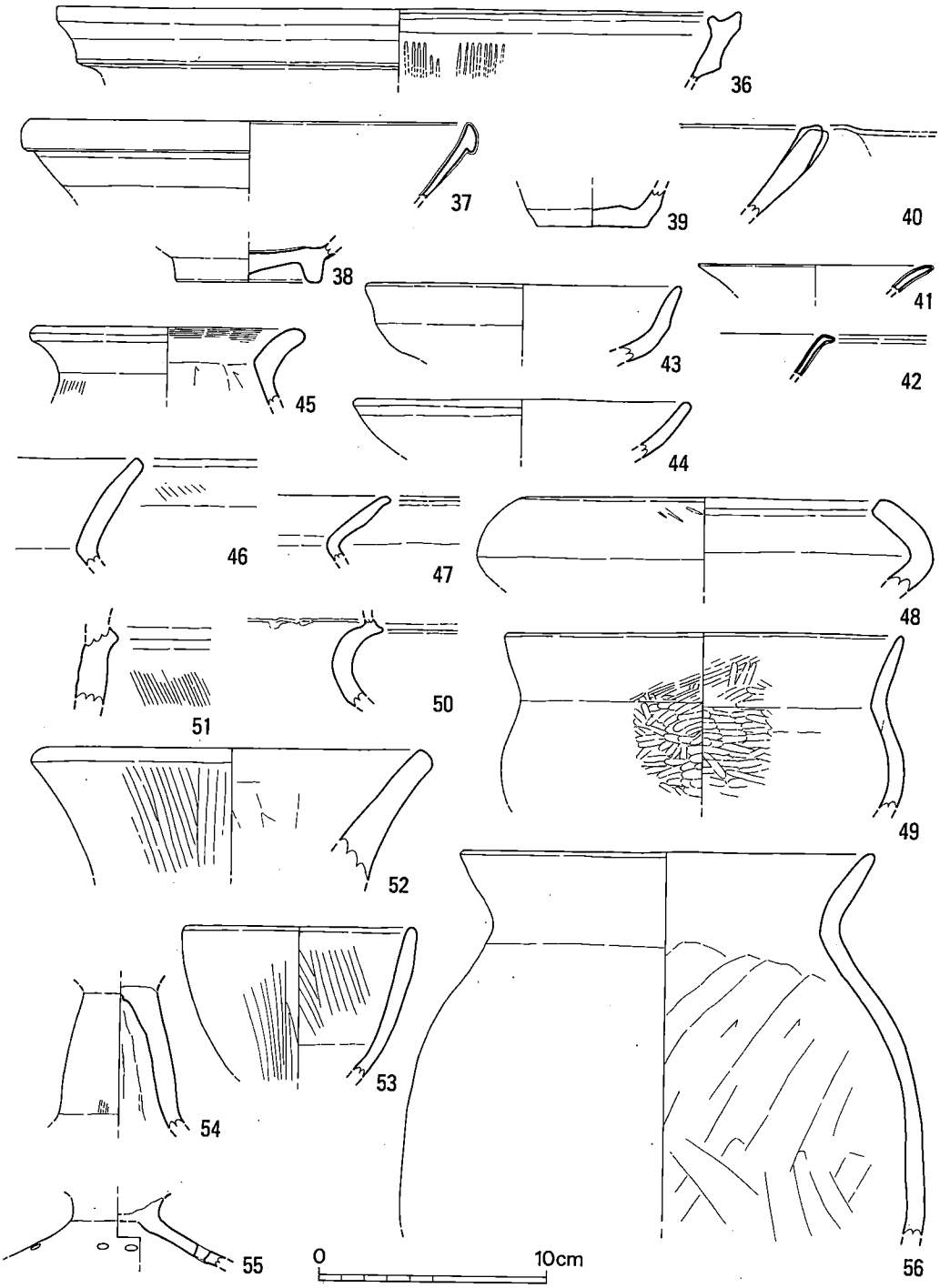
土師器甕（32）　口縁部が僅かに外反する口縁部破片で、内外面ともにハケ目調整されるが、外面に叩き目が残る。

土師器椀（33）　内彎する口縁部破片で、内外面ともにハケ目の後にナデ調整が加わる。

このほかに、縄文土器片、白磁碗片も出土していて、32・33の土師器例は先行する5号住居跡に伴うもので、溝の時期は中世以降であろう。

10号溝

調査区西部に発見された溝で、西南西一東北東方向を向く。字図での区画に沿った溝である。2号墳の南半部を切り込み、4号住居跡の北半部も切る。西側でN60°E前後、東側でほぼ東西に方向をとり、長さ41.0mを確認したが、両端とも調査区域外に潜る。幅0.8～1.5m、深さ0.1m程の断面U字形を呈するが、上部に暗茶褐色土、下部に暗茶灰色の粘質土が堆積している。西側より東側の床面が僅かに低い。



第136図　溝出土土器実測図３（1/3）

出土土器（図版56、第135・136図）

瓦器椀（34）　体部が内彎し、口縁部が僅かに外反気味になる口縁部破片である。ヘラミガキ調整されるが、器面は風化する。

白磁碗（35）　口縁端部が玉縁になる、白磁碗Ⅳ類の口縁部破片である。

陶器摺鉢（36）　復原口径30.0cmの大きさの口縁部破片で、肥厚した口縁部は内側の端と外側の下端を凸帯状にさせる。内面には櫛歯状の目が刻まれる。灰茶褐色の胎土で、器面は暗紫褐色に発色している。

これらの土器類は12世紀後半～13世紀頃に含まれる資料である。このほかに、糸切り底の土師器杯片、土師器質摺鉢片、鉄釉のかかる壺らしい破片なども出土したが、小破片で図示しえない。

11号溝

調査区中央部に発見された溝で、4号墳の周溝と2号通路状遺構を切り込む。N8°E前後の南北方向を向くが、北側は2号落ち込みと葡萄栽培の肥料溝の攪乱にぶつかり不明。2号落ち込みとの前後関係は不明瞭だが、溝の方が新しいとみている。南側は浅くなって消える。長さ13.0mを確認したが、北側は幅が広がり、二股に分かれる。幅0.3～2.5m、深さ0.05～0.10mの断面U字形を呈するが、暗茶灰色の粘質土が堆積する。

出土土器（第136図）

白磁碗（37・38）　37は口縁端部が玉縁になる、白磁碗Ⅳ類の口縁部破片で、復原口径20.0cmの大きさ。38は内底見込みの釉を環状に掻き取る、白磁碗Ⅷ類の底部破片である。

このほかに、須恵器片、糸切り底の土師器小皿・杯片、土師質鉢の片口部分、同安窯系・龍泉窯系青磁碗片なども出土したが、いずれも小破片である。

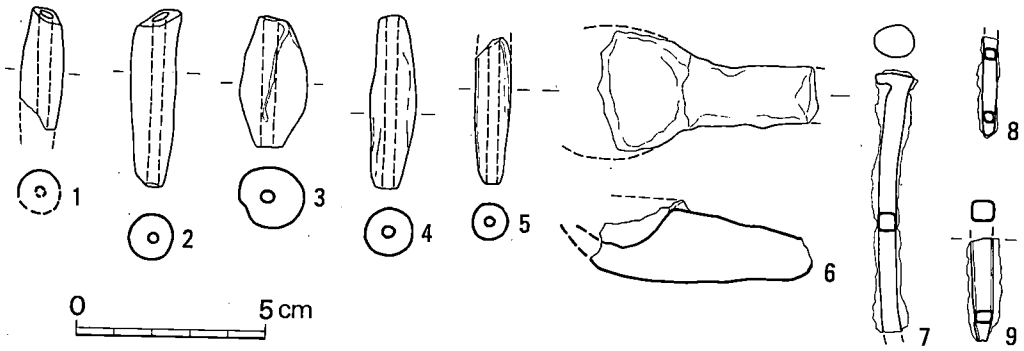
12号溝

調査区西部に発見された溝で、10号溝の約2m北側に位置し、10号溝にほぼ平行する南西一北東方向を向く。西端部で2号墳の周溝を切り込み、東側では1号落ち込みと重複するが前後関係は不明。長さ6.0mを確認したが、N58°E前後の方向に向き、幅0.3～0.8m、深さ0.1m程の断面U字形を呈するが、暗茶灰色の粘質土が堆積する。

出土土器（第136図）

土師器小皿（39）　復原底径4.9cmの大きさの、外底面に糸切り痕のある、小皿もしくは杯の底部破片である。体部へは直線的に開くが、口縁部は不明。

土師質鉢（40）　直線的に開く口縁部破片で、肥厚して上面は平らに整えられるが、片口が付く。器面は風化磨滅して調整は不明。



第137図　溝出土土製品・金属製品実測図（1/2）

このほかに、鉄釉のかかる陶器片も出土したが、図示しえない。

出土土製品（図版57、第137図）

管状土錘（4）　長さ4.6cm、外径1.3cm、孔径0.3cm、重量4.7gを測る。雲母を含むが精良な胎土の生地を棒状の芯に巻き付けて、エンタシスのように膨らむ管状に整形したもので、ナデ調整されるが、絞り痕が縞状にみえる。

出土鉄製品（図版57、第137図）

鉄　釘（6）　残存長6.9cm、太さ0.5cmの角釘で先端を欠く。頭部は1.0cm弱程の広さをもつ。

13号溝

調査区東部に発見された溝で、6号住居跡と7号墳の間に位置するが、7号墳周溝の上部に続く。長さ13.0mを確認したが、ほぼ東西に向き、幅0.5～2.2m、深さ0.1～0.3mの断面U字形を呈するが、茶褐色の粘質土が堆積する。

出土土器（第136図）

白磁皿（41）　口縁部が緩やかに外反し、僅かに口縁部が肥厚する皿で、復原口径10.3cmの大きさ。白磁皿IV類に分類される。

白磁碗（42）　口縁端部が短く外反する、白磁碗IV類の口縁部破片である。

土師器杯（43・44）　43は復原口径13.9cm、残存器高3.3cmの大きさの杯で、やや器壁が厚く、口縁部は外反する。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、淡黄茶褐色に焼成される。44は復原口径14.3cmの大きさの、内彎して立ち上がる口縁部破片で、やや器壁が厚い。

土師器甕（45）　復原口径12.0cmの小形甕の口縁部破片で、外反する口縁部は肥厚し、内面にハケ目がみられる。体部はやや膨らむようで、外面がハケ目、内面はヘラ削りされる。胴部径が口径をあまり上回らない器形であろう。

これらの土器では、土師器小形甕や杯は古墳時代末期頃の所産で、白磁皿・碗は12世紀中頃以降が考えられる。このほかに、須恵器片、糸切り底の土師器杯片、瓦器椀片などが出土したが、

図示しえない。

出土鉄製品（図版57、第137図）

鉄釘？（8）　長さ2.7cm、太さ0.3cm角の棒状を呈する破片で、先端は鈍い。

14号溝

調査区東部に発見された溝で、13号溝の東側に位置する。6号住居跡の東部と重複して、住居跡より後出する。長さ10.0m弱を確認したが、北北東一南南西に向き、幅1.2～1.8m、深さ0.1～0.2mの断面U字形を呈するが、暗茶褐色の粘質土が堆積する。

出土土器（第136図）

甕（46・47・51）　46はく字形に外反する口縁部破片で、外面に一部ハケ目が残る。47は器壁が薄く、直線的に外反する口縁部破片で、内外面ともにヨコナデ調整される。51は断面三角形の凸帯が貼付された胴部破片で、外面はハケ目、内面はナデ調整される。

壺（48・50）　48は復原口径16.0cmの大きさの、袋状に内彎する口縁部破片で内外面ともヨコナデ調整される。50は複合口縁の頸部破片らしく、屈折部は外側に鋭く突出する。

鉢（49）　復原口径17.4cm、残存器高7.6cmの大きさの鉢。扁球形の体部に、く字形に外反する口頸部が付く。内外面ともにヘラミガキ調整される。

器　台（52）　復原口径17.6cmの大きさの受け部破片で、緩やかに外反して開く。外面は縦方向のハケ目、内面は板ナデ調整される。

椀（53）　復原口径10.2cm、残存器高6.5cmの大きさの深めの椀で、体部は内彎して立ち上がる。内外面ともにハケ目調整されて、内面の下部はナデ調整される。

高　杯（54・55）　54は中空の柱状部で、内面に絞り痕、外面にハケ目がみられる。55は器台の可能性もある脚裾部破片で、大きく開く裾部に双円孔が4ヶ所8穴穿孔されるようである。

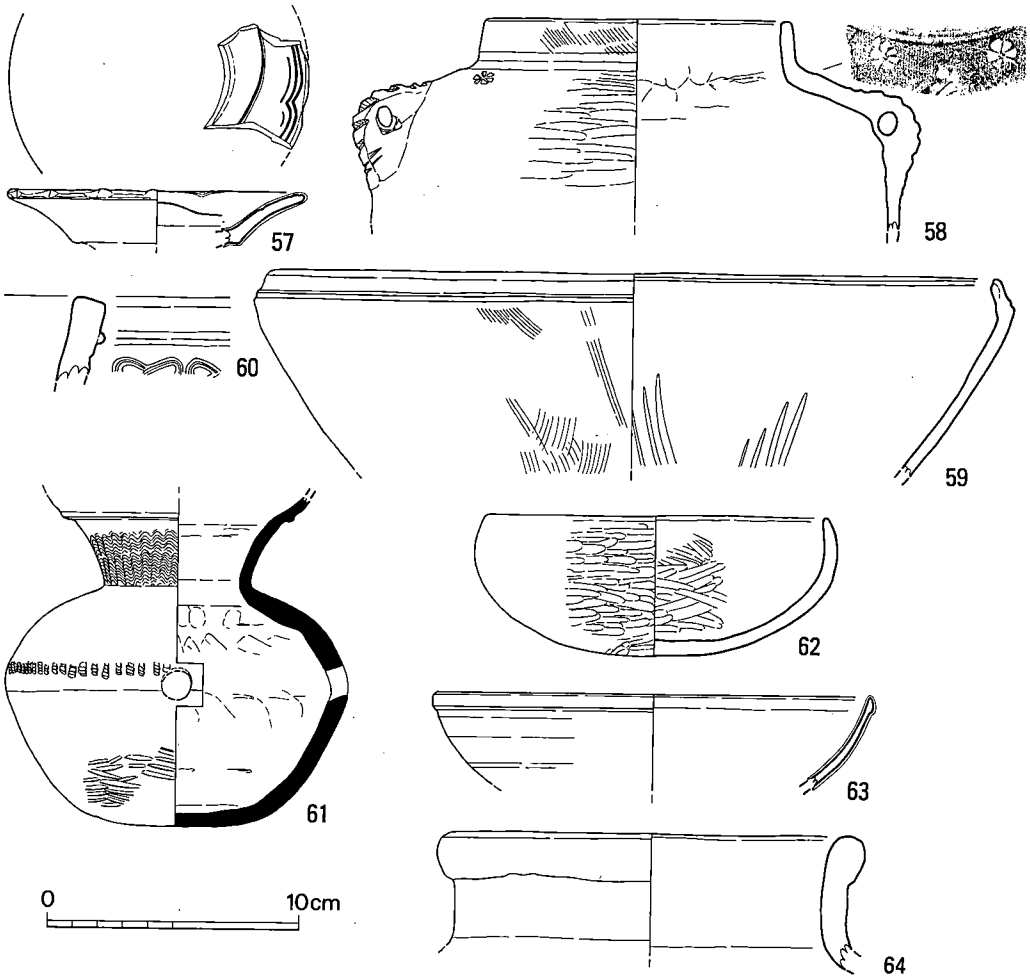
土製品（図版57、第137図）

土製杓子（6）　現存長5.8cm、幅3.2cm、厚さ2.2cmの大きさの、小形な土製杓子で、先端部を欠く。軸部と容器部の境めが厚く、容器部分は窪ませながら引き伸ばしたような形状をなす。器面はナデ調整される。胎土に細砂粒を含み、黄茶褐色に焼成されている。

土器類は、弥生後期後半の資料が含まれるものの、47・50・55など古墳時代初期の資料もある。また図示しえない資料で、布留式甕らしい器壁の薄い破片もある。

15号溝

調査区東部に発見された溝で、6号墳、7号墳の南側崖の下側に位置する。長さ10.0m弱を確認したが、東西方向に向き、幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mの断面U字形を呈し、淡茶褐色の粘質土が堆積する。両端ともに浅くなって消滅するが、東端部でp416の南端を削る。溝内からは、



第138図　溝出土土器実測図４（1/3）

須恵器片、土師器甕片、糸切り底の小皿片、同安窯系青磁片が出土したが、いずれも小破片で図示しえない。

16号溝

調査区東部に発見された溝で、14号溝の南側に位置する。７号墳の南側を削る崖の裾に続き、８号墳石室の南側に浅く伸びる溝で、暗茶褐色土と淡茶褐色土が堆積する。長さ19.0mを確認したが、ほぼ東西方向に向き、東側は幅が広くなって、端は調査区域外に潜る。幅1.0～3.0m、深さ0.1～0.3mの断面U字形を呈するが、西側へ深くなって西端は小さな土坑状を呈する。暗茶褐色の粘質土が堆積する。溝内からは、須恵器片、糸切り底の土師器小皿片などが出土したものの、いずれも小破片で図示しえない。

17号溝

調査区東部に発見された溝で、6号墳周溝の東側に位置し、南端は7号墳周溝の上部に被る。北側は非調査区を越して北側の調査区にも検出されて、北側の調査区域外に潜る。東側に低い段落ちの崖があり、崖下から0.8～1.2mを距て崖と平行する。長さは30.3m、幅0.7～1.0m、深さ0.2mを測る。U字形断面の溝で、淡茶褐色土と茶褐色土が堆積する。周縁が磨滅して丸くなった土師器小片や、染め付け陶磁器片などが出土したが、図示しない。時期的にはかなり下降する溝であろう。

18号溝

調査区東部に発見された溝で、8号土坑と9号土坑の間に位置する。長さ5.7mを確認したが、北北西一南南東に向き、幅0.4～0.8m、深さ0.1mの断面U字形を呈するが、暗茶褐色の粘質土が堆積する。

出土土器（第136図）

土師器甕（56）復原口径18.2cm、残存器高14.4cm、胴最大径23.0cmの大きさの甕で、口縁部は肥厚せずに緩く外反する。体部外面はナデ調整、内面は頸部付近までヘラ削りされるが、器壁はやや厚めである。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成される。

土師器甕は8世紀頃であろうか。このほかに、土師質鍋片も出土したが、小破片のため図示していない。

19号溝

調査区南部の、非調査区に挟まれた小さな発掘区のMN18区に発見された溝で、ほぼ南北を向く、長さ3.8m、幅0.4～1.1m、深さ0.1～0.2mの、断面U字形を呈する溝で、暗茶褐色土・茶褐色土が堆積する。非調査区を挟んで位置する5号墳周溝との関係は明らかにしえなかった。

出土土器（図版56･57、第138図）

青磁皿（57）　復原口径12.0cmの大きさの、青磁の輪花皿で高台が付くと思われるが底部を欠く。内面にヘラ先による文様がある。灰色のやや粗い胎土で、薄い化粧土を介して暗めの灰黄緑色の釉がかかる。明の青磁であろう。

瓦質茶釜（58）　復原口径12.2cm、胴最大径21.0cmの大きさの茶釜で、やや肩の張る体部に内傾気味に直立する口縁部が付く。外面は体部がヘラミガキ調整、口縁部はハケ目の残るヨコナデで調整され、内面はヨコナデ調整されるが、頸部の下に指頭圧痕が残る。肩部に貼り付けられる釣手には外縁に刻み目がみられ、頸部との間に6弁花らしい文様が押捺される。

瓦質摺鉢（59）　口径復原に若干不安はあるが、復原口径30.3cmの大きさの、体部が深めで内彎気味の鉢。口縁部は内傾するが、外面が僅かに凹み屈曲部には僅かな段がある。内面は板

ナデの後にヨコナデ調整されて、櫛目が刻まれる。外面はハケ目調整の後にナデ調整されるが、指頭圧痕らしい凹凸があり、痘痕状に弾けた部分もみられる。

瓦質火鉢（60）　直線的に立ち上がる口縁部破片で、外面に箍状の凸帯と８字形文様の押捺がみられる。精良な胎土が用いられ、淡茶褐色を呈するので、瓦質よりむしろ土師質の火鉢とすべきであろう。

これらの土器類は、15世紀ないし16世紀頃の所産であろう。瓦質の摺鉢は更に年代が下降する可能性もある。なお、この溝の南側を削る段落ち部分からは、図示しないが、見込みが蛇の目状に釉剝ぎになった、淡灰色の釉がかかる猪口らしい底部破片が出土している。18世紀頃であろうか。

出土土製品（図版57、第137図）

管状土錘（５）　一方の端を欠くが、残存長3.9cm、外径1.0cm、孔径0.3cm、重量3.2gを測る中膨らみの筒状を呈し、ナデ調整される。

出土鉄製品（図版57、第137図）

鉄釘？（９）　残存長2.7cm、太さ0.6cm角の棒状で、先端部は尖るが、基部側を欠損する。

20号溝

19号溝の北東側に位置するM16・17区で発見された東西方向の溝で、2.0～2.3m幅で、東西に長さ3.7m分が調査区内に発見されたが、両端は調査区外に潜る。深さ0.1～0.3mで床面には凹凸がある。溝内には上部に暗褐色土、下部に茶褐色土が堆積する。

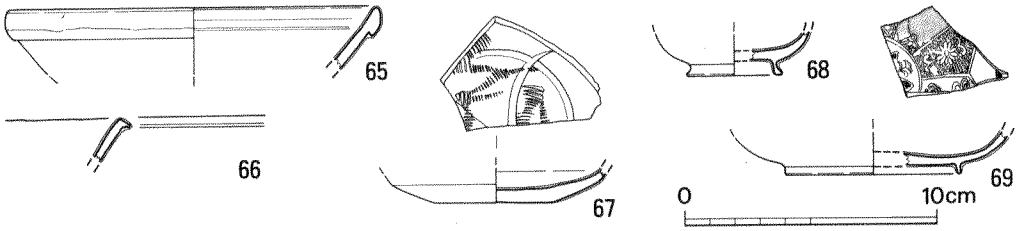
出土土器（図版57、第138図）

須恵器甕（61）　口縁部を欠くが、残存器高13.0cmのうち体部高は9.5cmを占める。胴最大径13.6cmの体部は、平底に近い丸底から直線的に胴が膨らんで、肩部は丸みをもつ。頸部は喇叭状に開き、口縁部には外反から内彎に移行して開く模様である。体部下半は叩き目を残す板ナデ調整、外面の体部上半から口縁部にかけてと内面全体が回転ナデ調整されるが、底部内外面はナデ調整される。また内面の肩部を中心に指頭圧痕が残る。胴最大径の位置に板小口端の押捺による刻み目が巡り、直径1.2cmの円孔が外上がりに穿孔される。頸部には板小口端による波状文が描かれる。

土師器椀（62）　復原口径13.6cm、器高5.5cm、胴最大径14.4cmの大きさの、口縁部が内彎する椀。内外面とも全面にヘラミガキ調整される。細砂粒を僅かに含むが精良な胎土で、橙褐色に焼成される。

白磁碗（63）　体部が内彎して立ち上がり口縁端部が小さな玉縁になる碗。復原口径17.5cm、残存器高3.7cmの大きさ。白磁碗II類に分類される。

陶器壺（64）　復原口径17.0cmの、口頸部が直に立ち上がり、口縁端部が丸く肥厚する口縁



第139図　溝出土土器実測図５（1/3）

部破片である。砂粒を含む灰色の胎土で、暗茶褐色に焼成される。備前の壺であろう。

須恵器甕や土師器椀は5世紀代で、５号墳の周溝出土土器と大差はないが、白磁碗は12世紀後半頃、陶器壺は13紀後半から14世紀頃の所産であろう。

21号溝

調査区北部のＢ～Ｄ15区にある溝で、北側では１号通路状遺構の上部を切り込む。葡萄栽培の肥料溝の北部で幅が広くなった部分を溝と判断していたが、結果的には肥料溝の一部で、攪乱溝であった。

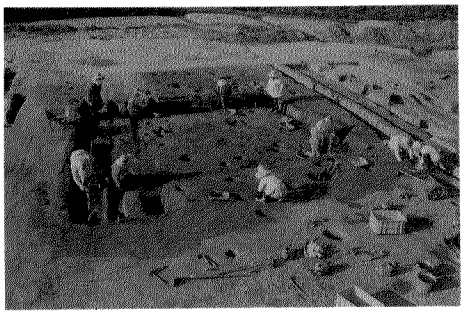
出土土器（図版57、第139図）

白磁碗（65・66）　65は復原口径15.0cmの大きさの、口縁端部が玉縁状に肥厚する碗の口縁部破片である。66は口縁端部が短く外反する碗の口縁部破片である。

青磁皿（67）　同安窯系青磁皿の底部破片で、内底面に櫛描きのジグザグ文様がみられる。外底面は釉が掻き取られていて、同安窯系青磁皿Ｉ―2類に分類される例である。

磁器（68）　復原高台径3.9cmの大きさの破片で、黒い粒が混じるものの精良な白色の胎土で透明な釉がかかるが、外面の釉は厚く灰緑色を呈す。釉は高台内面にもかかるが、畳付は掻き取られて露胎になる。皿か碗かは分からないが、外青磁の類で18世紀以降の作であろう。

磁器皿（69）　見込みに赤色の印版による草花文様のみられる皿で、緑色を部分的に配している。縁部側には黒っぽい色がみられる。透明感のある白色の胎土で、畳付は露胎だが、うすい空色の釉がかかる。明治期以降の作であろう。



調査風景３

9．落ち込み遺構

1号落ち込み遺構（図版58～60、第140図）

調査区中央部の西寄りで、3号墳と5号墳の間に位置して、土壙群の南東側に隣接する。IJ19～21区にあって、10号溝が南側端に沿う。東西11.5m、南北7.1mの広さで、西側は5.0m幅程とやや狭い。中央部で深さ53cmを測る。南側の縁部に沿って塊石が雑に積み上げられた状態で発見されたが、塊石の集中する部分は落ち込み内側の深い部分に面してほぼ真っ直ぐに並ぶ。面は揃わないが、これに接した西側縁の斜面にも塊石が集中し、北東側でも縁の斜面に接して塊石がみられ、さらに南側縁の集石に繋がる東側辺の集石がみられる。すなわち落ち込みの中央部を四角く囲む、護岸状に集石している状態である。集石に囲まれた部分では粘質土が堆積していたが、木炭・灰・焼土などは殆ど検出されなかった。また、集石の塊石には火熱を受けた痕跡は顕著でない。

出土土器（図版59、第141～145図）

白磁碗（1～4）　1・2は口縁端部が短く外反する碗の口縁部破片である。3は高台の削り出しが僅かな底部、4は内底見込みの釉が環状に掻き取られる底部破片である。図示しないが、口縁端部が玉縁になる口縁部破片も出土している。また、白磁皿の口縁部・底部破片なども出土した。白磁皿III～VI類に分類されるタイプのものである。

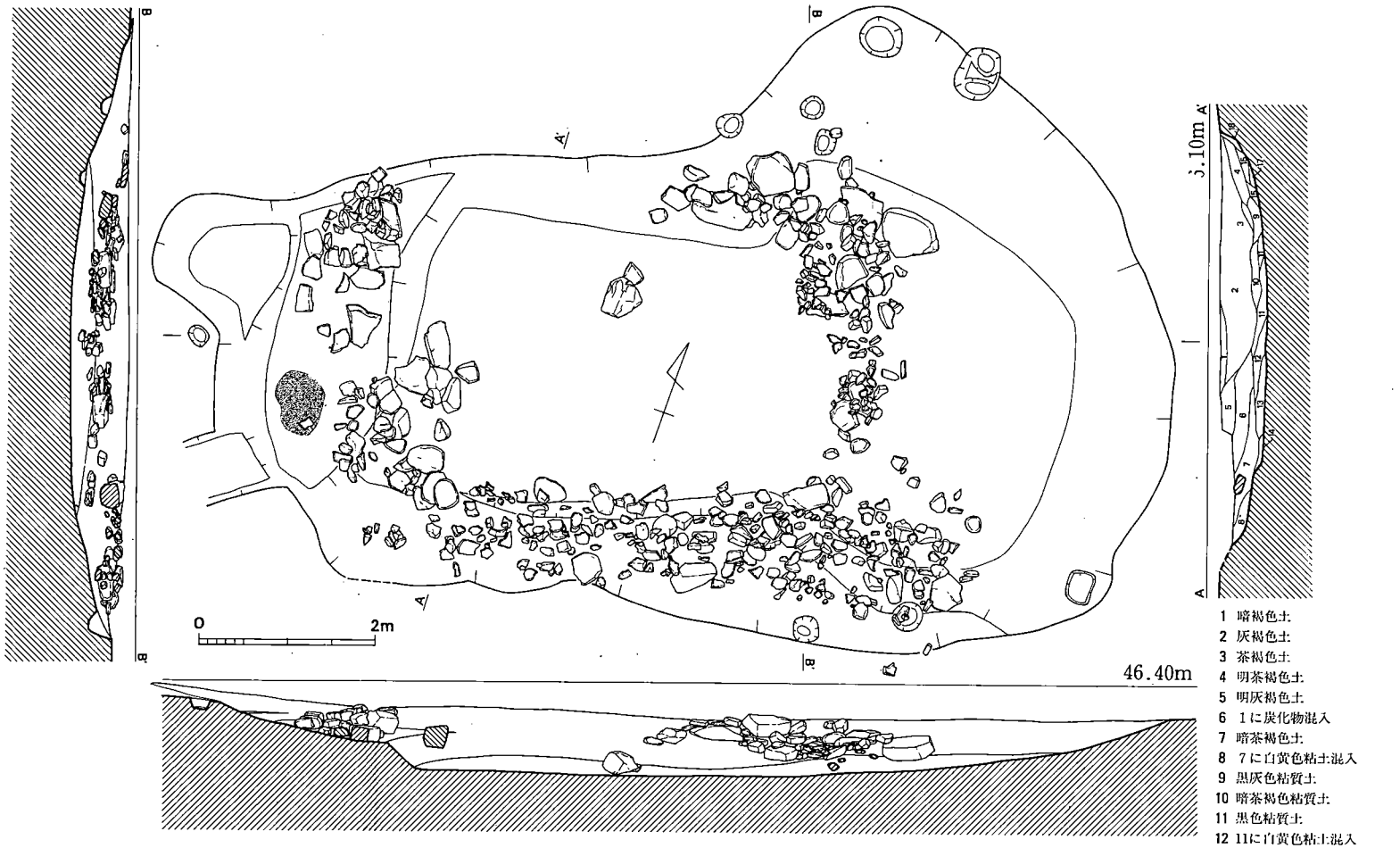
青磁碗（5・6）　5は同安窯系青磁碗の口縁部破片で、内面に沈線が巡り、外面に櫛目がみられる。6は龍泉窯系青磁碗I－2類らしいの口縁部破片である。このほか図示しないが、内面に草花文様と櫛状工具によるジグザグ文様の描かれる同安窯系青磁碗、外面に片彫りの鎬蓮弁文様のある龍泉窯系青磁碗I－5類の破片なども出土している。

青磁皿（7）　復原口径12.5cmの大きさの、体部内面に段をもち、口縁部が外反する龍泉窯系青磁皿である。このほかに図示しないが、内面に櫛状工具によるジグザグ文様の描かれる同安窯系青磁皿で、全面施釉後に外底面の釉を掻き取る皿I－2類の破片なども出土している。

青白磁（図版59）　口縁部で外反する碗の破片と、小形壺の肩部らしい外面に文様が刻まれる破片が出土している。ともに精良な胎土で、器壁が薄く、透明感のある釉がかかる。

陶器碗（8）　直線的に開く口縁部破片で、細砂粒を含む黄茶褐色胎土を使用し、淡黄褐色の釉がかかる。このほか写真図版に示すように、黄茶褐色胎土を使用して、黒褐色の釉のかかる天目茶碗の口縁部破片も出土している。釉は光沢があり、口唇部は曜変気味で、体部には禾目が現れている。

李朝施釉陶器碗（9）　底部を欠き、復原口径12.4cm、残存器高3.0cmの大きさで、緩やかに内彎する体部をもち、ヨコナデ調整される口縁端部は僅かに外反するが、底部側はヘラ削りされている。灰色の精良な胎土を用いて、緑灰色の釉がかかり、内底面に目土の痕跡がみられる。

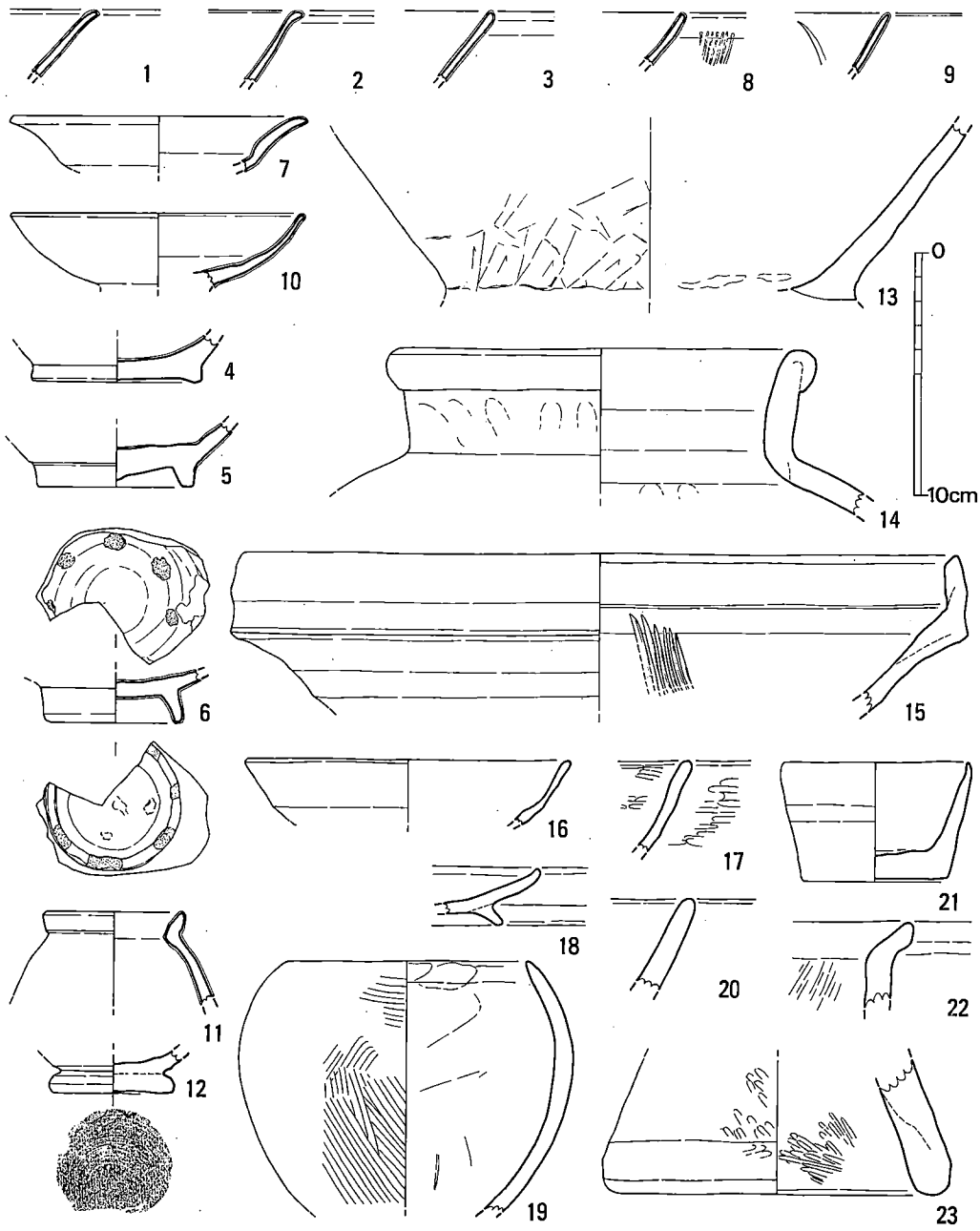


1 暗褐色土
2 灰褐色土
3 茶褐色土
4 明茶褐色土
5 明灰褐色土
6 1に炭化物混入
7 暗茶褐色土
8 7に白黄色粘土混入
9 黒灰色粘質土
10 暗茶褐色粘質土
11 黒色粘質土
12 11に白黄色粘土混入
13 黒灰色土
14 13に白黄色粘土混の粘質土
15 黒灰色砂質土
16 暗褐色砂質土
17 暗灰褐色砂質土
18 灰褐色砂質土

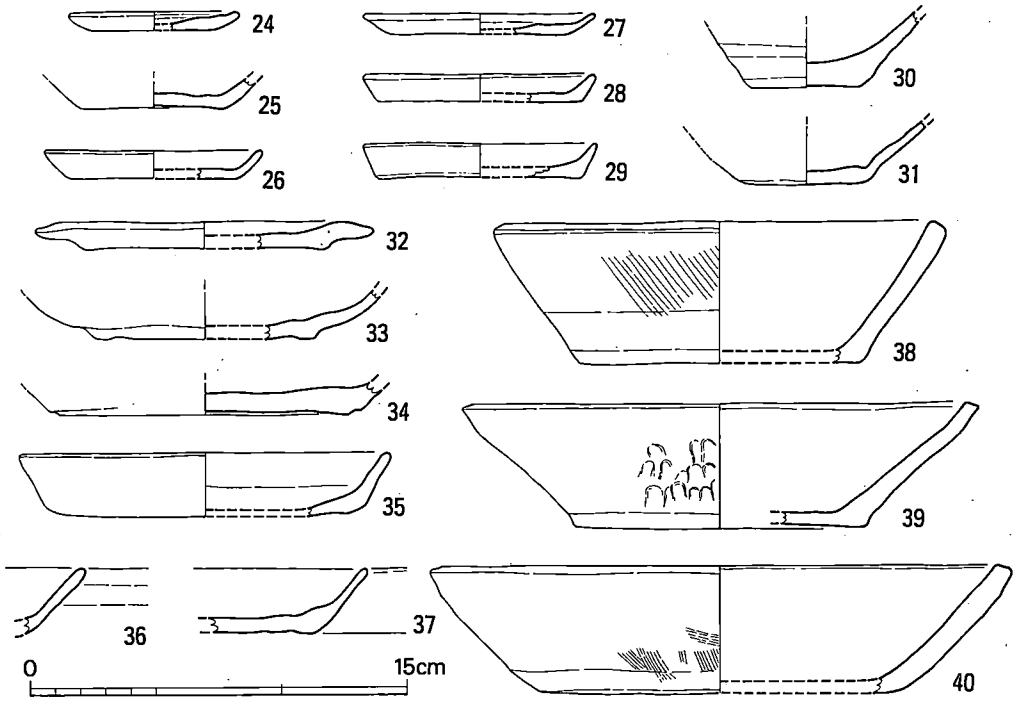
第140図　1号落ち込み実測図（1/75）

このほかにも写真図版に示すが、高台を浅めに削り出した目土の痕跡のある底部破片や、淡い緑灰色の胴部破片などが出土している。

李朝白磁碗（10）　高台外径 5.8cmの、やや高い高台を有する底部破片である。内底見込み



第141図　１号落ち込み出土土器実測図１（1/3）



第142図　1号落ち込み出土土器実測図2（1/3）

は指頭の渦が凹凸で残り、畳付の外側が削られる。白色の精良な胎土でうすい空色っぽい釉が内外面ともにかかり、見込みと畳付に目土の痕跡がある。

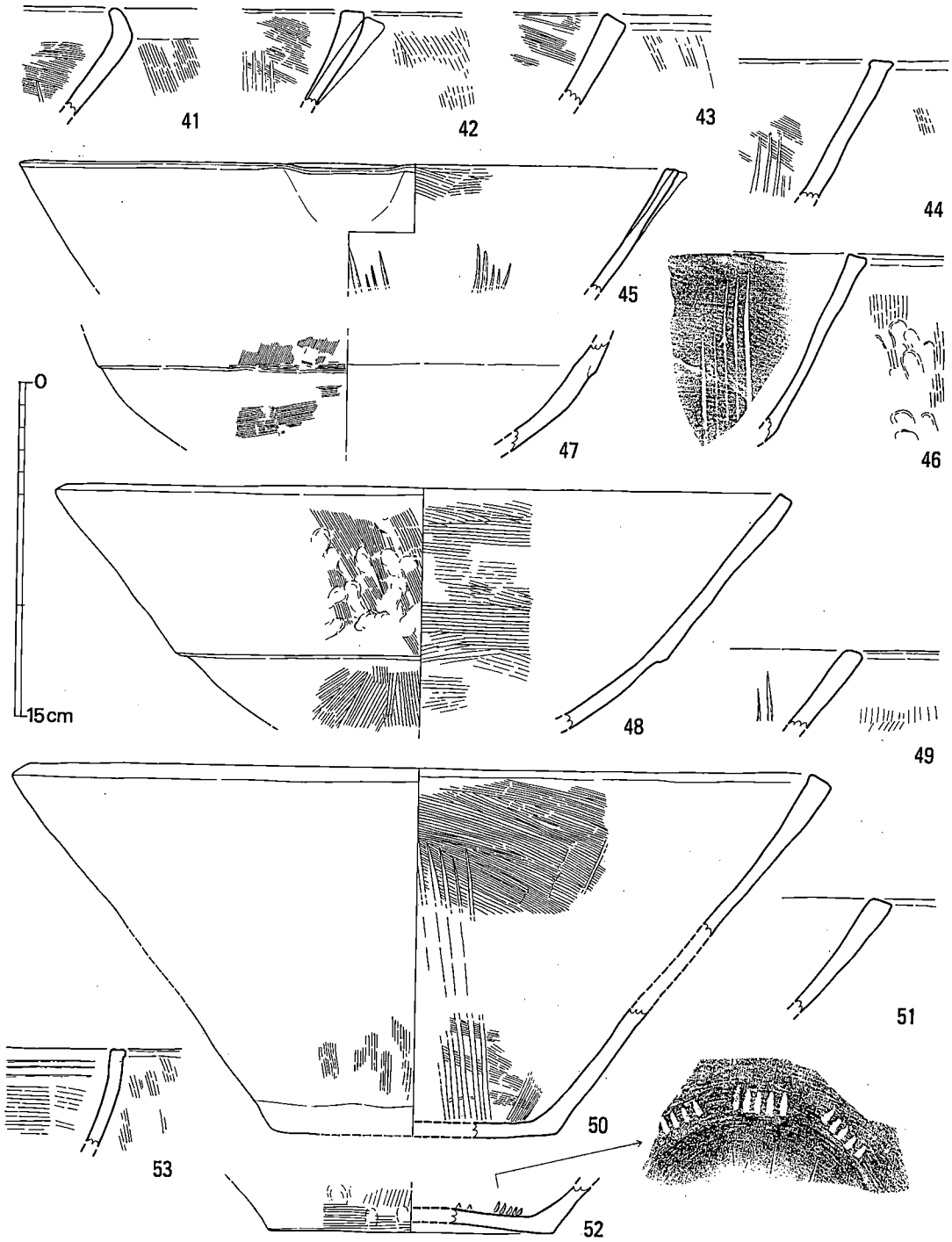
陶器壺（11・13）　11は、復原口径6.0cmの大きさの口縁から肩部の破片で、括れた頸部から肥厚気味の口縁部が短く外反する。灰褐色の胎土で内外面ともに灰茶褐色の釉がかかる。このほかの図示しないが、釉の剝げた胴部片や、輪高台の底部破片も出土している。13は、口縁部が直に立ち上がり、口縁端部は玉縁状に折り返されて肥厚する。復原口径18.0cmの大きさで、体部へは膨らむ。砂粒を含む胎土で、暗茶褐色に焼成されている。肩部内面は回転ヘラ削りされ、肩部外面には灰の自然釉がみられるが、備前焼の壺である。

陶器甕（12）　内面に緑色の灰釉のかかる底部破片で、底面が剝落している。須恵質の胎土が用いられ、外面は凹凸の残る板ナデ調整、内面は板ナデおよびナデ調整される。

陶器摺鉢（14）　復原口径30.0cm前後の大きさの、備前焼きの摺鉢である。直線的に開く体部から屈折して立ち上がる口縁部は幅広で、外面側が僅かに凹む。体部内面には7条単位の櫛目が刻まれる。砂粒を胎土に含み、暗茶褐色に焼成されている。

瓦器碗（15）　内外面を横方向にヘラミガキ調整する口縁部破片で、立ち上がりは内彎するが、口縁端部で僅かに外反する。

土師器杯（16・17・31～37）　16は底部を欠くが、復原口径13.6cm、器高3.0cm強の大きさの



第143図　1号落ち込み出土土器実測図3 (1/3)

杯であろう。17は口径8.0cm、器高5.0cm、底径6.1cmの大きさの蕎麦猪口に似た器形の杯で、外底面に糸切り痕と板目圧痕がみられる。

31・32は小さな底部から体部が直線的に開いて器高が高い杯で、杯bに分類される。ともに糸切り痕が外底面にあり、口縁部を欠くが、底径4.4～4.8cm、残存器高3.0cm・2.5cmの大きさ。31は底部がやや厚い。

33～37は糸切り痕を外底面に有して、体部が内彎気味に立ち上がる杯の破片。34・35・37には板目圧痕もみられる。35では復原口径14.8cm、器高2.5cmの大きさ。

土師器小皿（18・24～29）　18は高台の付く、小皿cに分類されるタイプで、高台はやや低い。24は復原口径6.8cm、器高0.8cmの特小皿で、器面は風化磨滅する。25～27は糸切り痕が外底面にみられる小皿で、口縁部へは緩やかに湾曲して開く。復原口径8.8～ 9.2cm、器高 0.9～1.2cmの大きさで、27の外底面には板目圧痕が付く。28・29は復原口径9.2cm、器高 1.1～1.3cmの大きさの小皿で、底部端をつまみ上げたように口縁部が立ち上がる。外底面には糸切り痕がみられる。

土師器皿（30）　復原口径13.6cm、器高1.1cmの大きさの、口縁部が大きく外反する器形の皿である。外底面に糸切り痕があり、体部は立ち上がるものの直ぐに口縁部が外反して、内面は極めて浅い。

土師器大杯（23・38～40）　23は直線的に開く口縁部破片である。38・40は平らな底部から口縁部へ直線的に開いて立ち上がる器形で、器壁はやや厚く、外面はハケ目調整される。38は復原口径18.0cm、器高5.5cm、底径11.2cm。40は復原口径23.2cm、器高5.0cm、底径14.4cmの大きさ。39は平らな底部から体部が直線的に開いて口縁端部で僅かに内彎する。復原口径20.5cm、器高4.9cm、底径11.8cmの大きさ。外面は指頭圧痕の凹凸が残るナデで調整されている。

土師器椀（19・20）　19は糸切り底の高台の付く底部破片で、体部は不明。高台外径 5.0cmの大きさ。20は体部が深く、球形を切断したような器形になると思われる椀で、口縁部までそのまま内彎する。復原口径10.4cm、胴最大径14.0cm、器高13.0cm程の大きさ。外面は粗いハケ目、内面は板ナデ調整される。古墳時代の椀であろう。

脚　台（21）　復原裾径14.4cmの大きさで、器壁が厚く、踏ん張るように開く。内外面ともに雑にヘラミガキ調整される。

土師質鍋（22・51～53）　22は外反する口縁部破片で、体部はもう少し開く器形かも知れない。体部内面はハケ目調整、外面はヨコナデ調整されて、外面に煤が付着する。51は口縁端部を小さく肥厚させて上面を平らに整えるもので、体部内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。52は内彎する体部をもち、口縁部下端に凸帯状の段を付ける。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。53は底部を欠くが、復原口径33.4cm、残存器高

10.7cmの大きさ。体部は内彎するが、口縁部は直線的に開き、端部は僅かに肥厚する。口唇部は内面側をつまんだように尖り気味。口縁部下端に凸帯状の段を有する。内外面ともにハケ目調整されるが口縁部外面には指頭の凹みが残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

瓦質摺鉢（41）　体部は直線的に開き、口縁部は外面に稜を作って内彎する。口縁部はヨコナデ調整され、体部は内外面ともにハケ目調整されて、内面に櫛目が刻まれる。このほかに、図示しないが、屈曲する口縁部外面に浅い沈線を有する例があり、幾分か器壁が薄い。

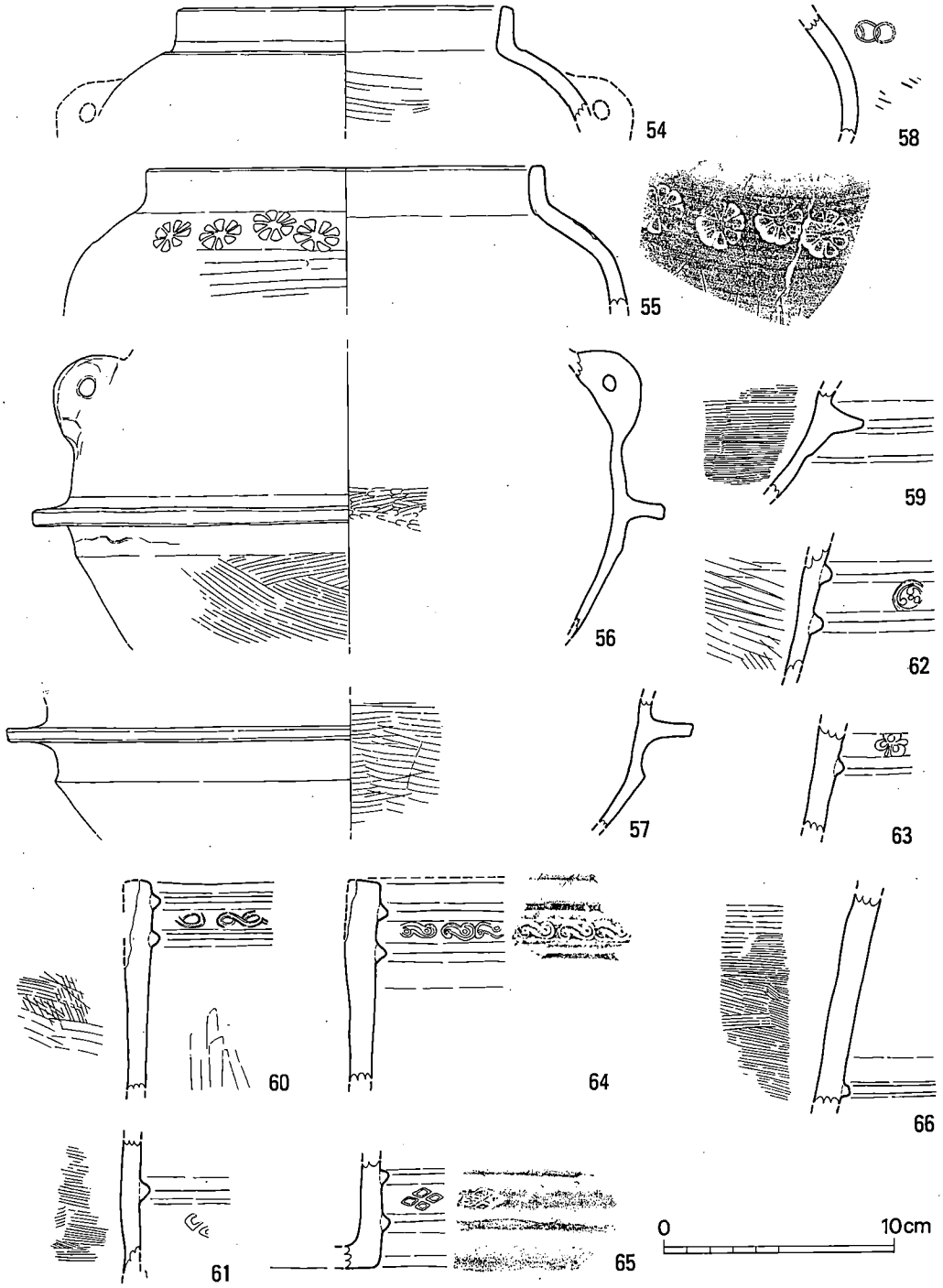
須恵質摺鉢（42）　復原口径30.0cm程の大きさで、体部は口縁部まで直線的に開く器形であろう。口縁部に片口が付き、口唇部は上面を平らに整えて、外縁が突出気味である。内面ではハケ目に近い部分もあるが、内外面ともに板ナデ調整され、内面に５条単位の櫛目が刻まれる。胎土に細砂粒を若干含み、灰色にやや堅く焼成される。

土師質摺鉢（43～50）　43～48は体部から口縁部まで直線的に開く摺鉢の口縁部破片である。口縁端部は肥厚気味で、端面が平らに整えられて、内面側に突出気味になる。内外面ともにハケ目調整されるが、外面は指頭の凹みを残す例が多く、内面には５条単位の櫛目が刻まれる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を若干含み、淡茶褐色ないし黄橙色に焼成される。49は口縁部と底部破片が接合しないものの同一個体と思われる例である。復原口径37.0cm、底径12.8cmで、器高は16.0cm前後であろう。底部は平らで、体部へ直線的に開くが、内外面ともにハケ目調整されて５条単位の櫛目が刻まれる。口縁部の特徴は43～48の例と同様で、底部は50の底部と同様の特徴を有する。なお、50では、使用による磨耗で、底部内面の櫛目が殆ど消えている。

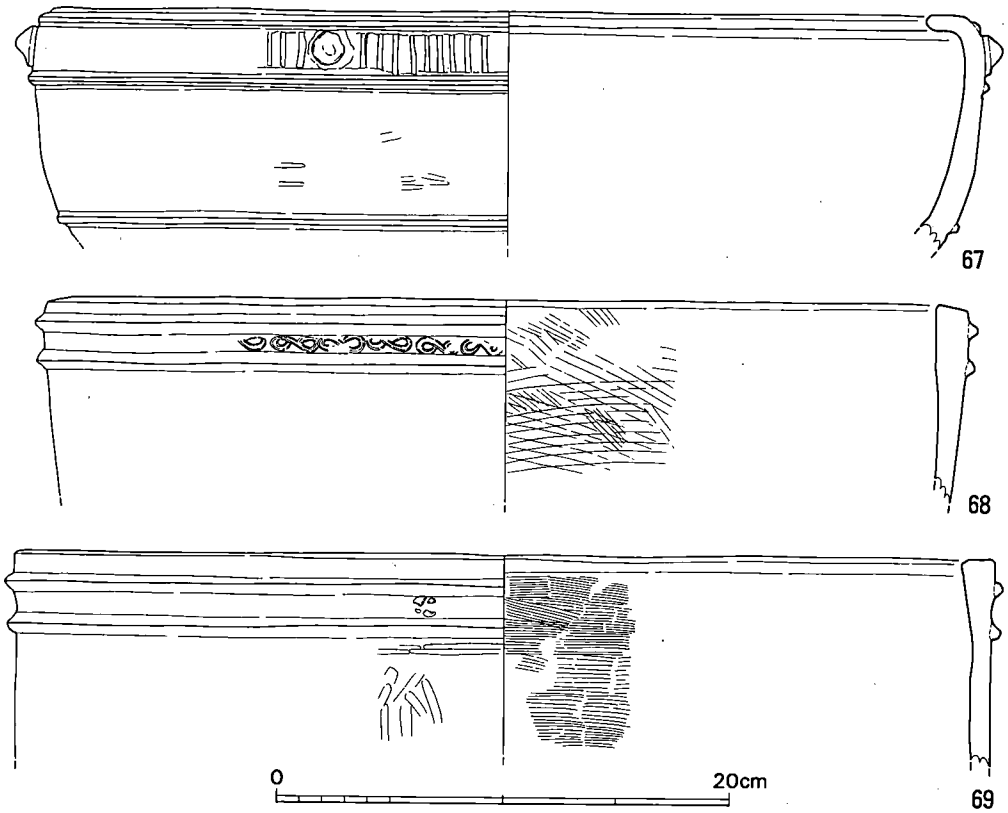
瓦質湯釜（54～57）　54・55は直口縁で、復原口径は14.7cmと17.4cmの大きさ。体部は扁球形に膨れるようだが、肩部までしか残らない。釣手が剝落している54の体部は、内外面ともにハケ目の後にナデ調整される。55は外面が板ナデ調整、内面は指頭の凹凸が残るナデで調整され、肩部外面に８弁の花文様が連続押捺される。56は肩部に円文を少しづつ重ねた押捺で鎖状の文様を得ている。57は鍔状の羽が付く胴部破片で、羽の下側で外面に稜をなして、底部へ窄まる。内面はハケ目調整、体部下半の外面は板ナデ調整され、羽の下面を中心に煤が付着する。いずれも精良な胎土で、灰色ないし暗灰茶褐色に焼成されている。

土師質湯釜（58・59）　58は鍔状の羽が付く肩から胴部の破片で、復原外径27.6cmの大きさ。やや肩の張る体部で、肩部には釣手が付き、羽の下側に凸帯状の段がある。外面はハケ目の後にナデ調整されるが、胴下半はハケ目のままで、内面は指頭の凹凸の残るナデながら胴最大径の部分にヘラミガキ痕がみられる。59は羽の付く胴部破片で、羽の下に凸帯状の段がある。内面はハケ目調整され、外面はナデ調整されるが胴下半にハケ目が残る。58・59ともに胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を若干含み、淡茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

土師質火鉢（60～62・67・69）　60は直線的にのびる体部で口縁部は肥厚気味だが、端部内



第144図　1号落ち込み出土土器実測図4 (1/3)

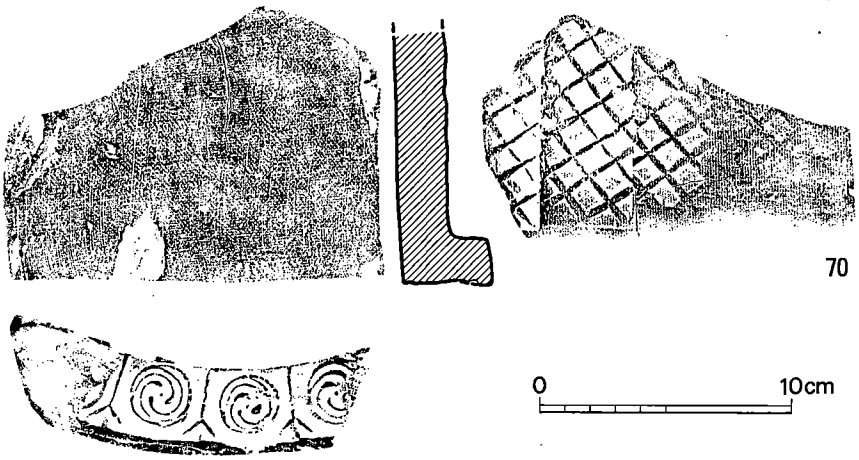


第145図　1号落ち込み出土土器実測図5 (3/10)

面は剝落する。口縁部に沿った2条の箍状凸帯間に逆S字文様が連続押捺される。61は底部に近い部分の外面に箍状凸帯と四菱文様がみられ、62は2条の箍状凸帯間に三つ巴文様が押捺される。いずれも、外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整される。69は口縁端部が肥厚気味で、上面を整えて、内面側にやや突出する。復原口径43.2cmの大きさ。箍状凸帯間にヘラ先で軽く突いた文様がある。

67は復原外径42.0cmの大きさの火鉢で、体部は内彎気味に開き、口縁部は内側に屈曲し、上面を平らに整えている。口縁部外面に凸帯が2条削り出され、凸帯間は短沈線を連続させた刻み目と釦状の突起が付けられる。胴下部に削り出される箍状凸帯の下は欠損して不明。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整される。雲母・赤褐色粒を含むが精良な胎土で、暗茶褐色に焼成されている。

瓦質火鉢（63～66・68）　63は箍状凸帯と酢漿草らしい3弁の花文様の押捺がみられる。64は60に似ていて、直線的にのびる体部で、口縁部は肥厚気味で端部内面が剝落する。口縁部に沿った2条の箍状凸帯間に逆S字文様が連続押捺されるが、60の文様よりも巻き込みが顕著な



第146図　1号落ち込み出土瓦拓影（1/3）

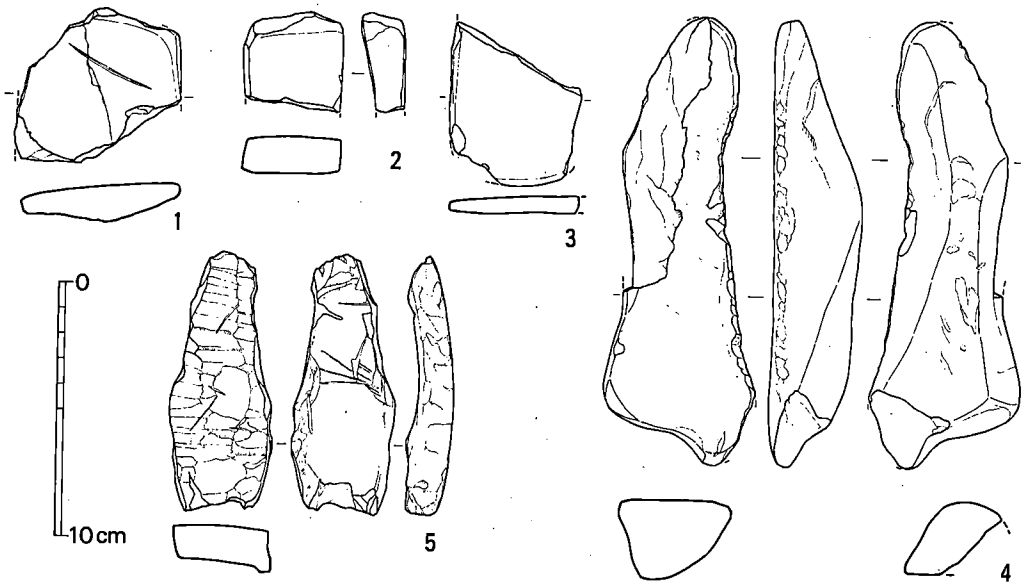
逆S字文様である。65は底部破片で、箍状凸帯間に四つ菱文様が押捺される。63～65はいずれも、外面がヘラミガキ、内面はナデ調整される。66は底部から直線的に開く胴下半部の破片で、外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整される。68は60に似た特徴と文様がみられ、復原口径41.0cmの大きさだが、口縁部の器壁がやや厚い。

軒平瓦（70）　上（凹）面に布圧痕、下（凸）面に斜行格子目叩き痕のみられる平瓦で、顎瓦当には尾の長い巴文が並び、巴文の間に逆Y字状の界線がみられる。巴文は左巻き三つ巴で、中心に点を伴う。折り曲げで作られる顎は狭く、瓦当に一部布目圧痕が迫り出す。太宰府の安楽寺（太宰府天満宮）境内や観世音寺裏などで出土例をみる。また巴文が右巻きの例が武蔵寺でも出土している。

これらの土器類では、白磁・青磁類の出土や青白磁の存在からみて、13世紀後半頃に主体をみるが、湯釜や鍋類は14世紀以降とみられ、砂目土を用いる李朝施釉陶器・李朝白磁の存在などから15～16世紀にもまとまりがある。なお、軒平瓦は鎌倉期の特徴を備えていて、文様などに退化要素らしい特徴もみられるもので13～14世紀の作であろう。

石製品（図版61・61、第147・148図）

砥　石（1～4）　1は凝灰質砂岩製の肌理の細かな砥石で、現存長6.2cm、幅6.6cm、厚さ1.5cmの大きさ。上面は中膨らみで、側面や裏面も破損面を再使用されている。手に持って使用される砥石であろう。一部に刃物傷が残る。2は現存長3.8cm、幅3.9cm、厚さ1.4cmの大きさの、砂岩製砥石で、肌理はやや細かい。平坦な面と側面が砥面にされている。3は緑泥片岩製の砥石で、肌理は細かい。長さ6.5cm、幅5.3cm、厚さ0.7cmの大きさの扁平な板状で、両面が砥面に使用される。石斧片の再利用であろう。4は緑泥片岩の掌で握り易い大きさの棒状の砥石である。一部欠損するが、長さ17.7cm、幅6.0cm、厚さ3.6cmの大きさで、断面は三角形に近い。



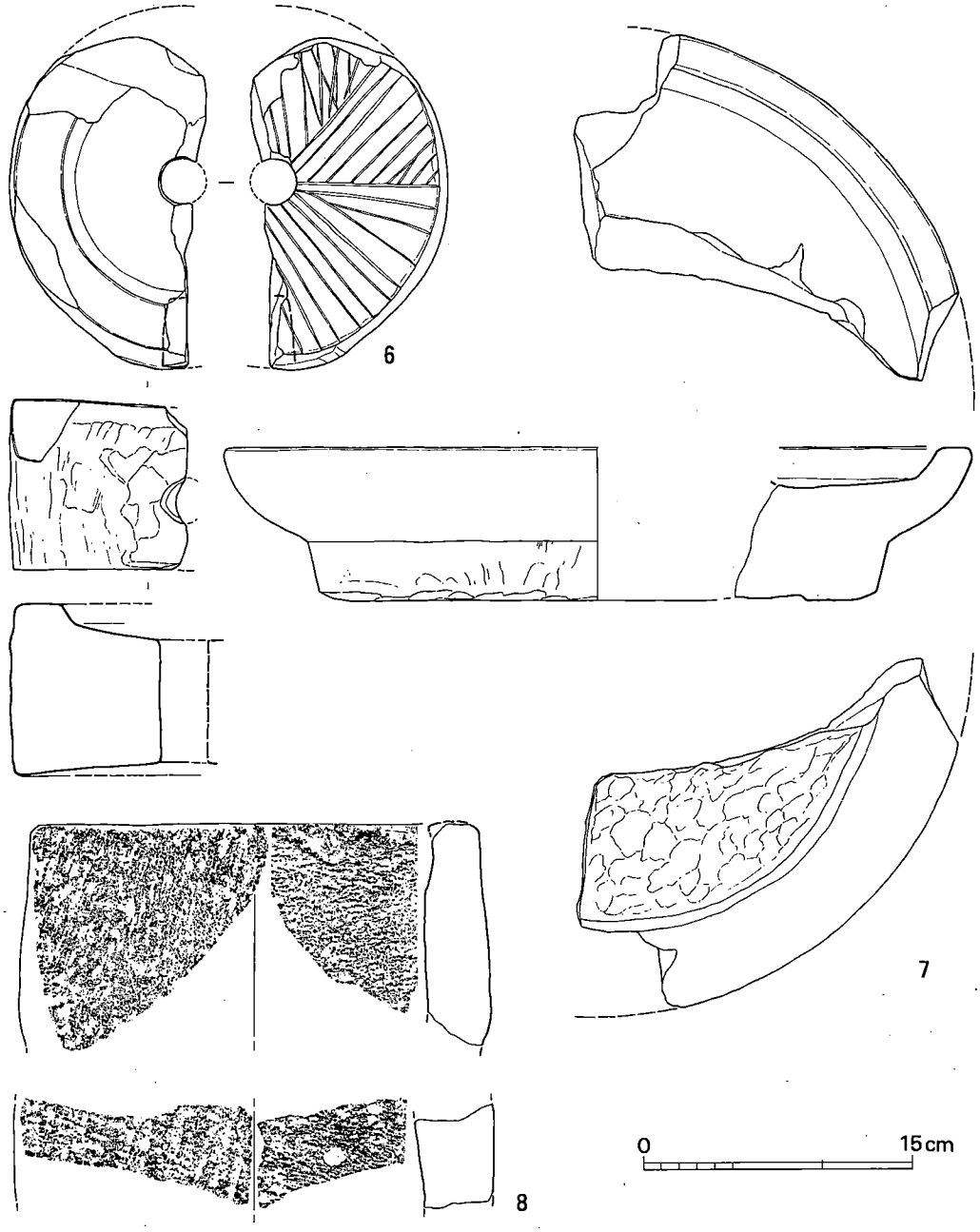
第147図　1号落ち込み出土石製品実測図1 (1/3)

平坦面は砥面に使用され、側縁は敲打に使用されている。

石鍋転用石製品（5）　滑石製石鍋の口縁部破片を再利用して、削り調整を施したもので、長さ10.3cm、幅4.1cm、厚さ1.8cmの大きさ。一部は掌で握り易く削って研磨を加え、他方の端を尖らせているが、先端は使用されて磨耗する。

石　臼（6・7）　凝灰質安山岩製の石臼の上臼（6）と、下臼の受け皿（7）で、本来セットであった可能性もある。上臼は半分を失うが、直径19.6cm程、高さ9.5cmの大きさ。上面は幅3.5cm、高さ1.0cmの縁があり、内側は中央部で深さ2.0cm程の緩やかな傾斜に凹み、直径2.5cmの軸穴が穿たれる。下面は分割法で溝が刻まれている。上面は研磨されるが、側面は削り痕と剝落痕が多く、方形の突起部分に奥行き3.7cm、直径2.0～2.5cmの穴が設けられている。下臼は臼部分を失い、台座部分と受け皿部分が一部残る。高さ8.4cmのうち台座部分は3.3cmの高さを占める。受け皿の縁は幅2.0cm程で、内彎して立ち上がり、皿の内側は深さ2.0cm程である。周縁から復原すると外径は42.0cm前後、台部の径32.0cm前後で、受け皿内部に下臼部分の立ち上がりが残らないことから下臼の外径は21.0cm以下と推定される。受け皿部分は研磨され、台部は削り痕が残り、底面は凹凸が激しい。なおこのほかにも、受け皿部分の破片が出土しているが、巧く接合しない。

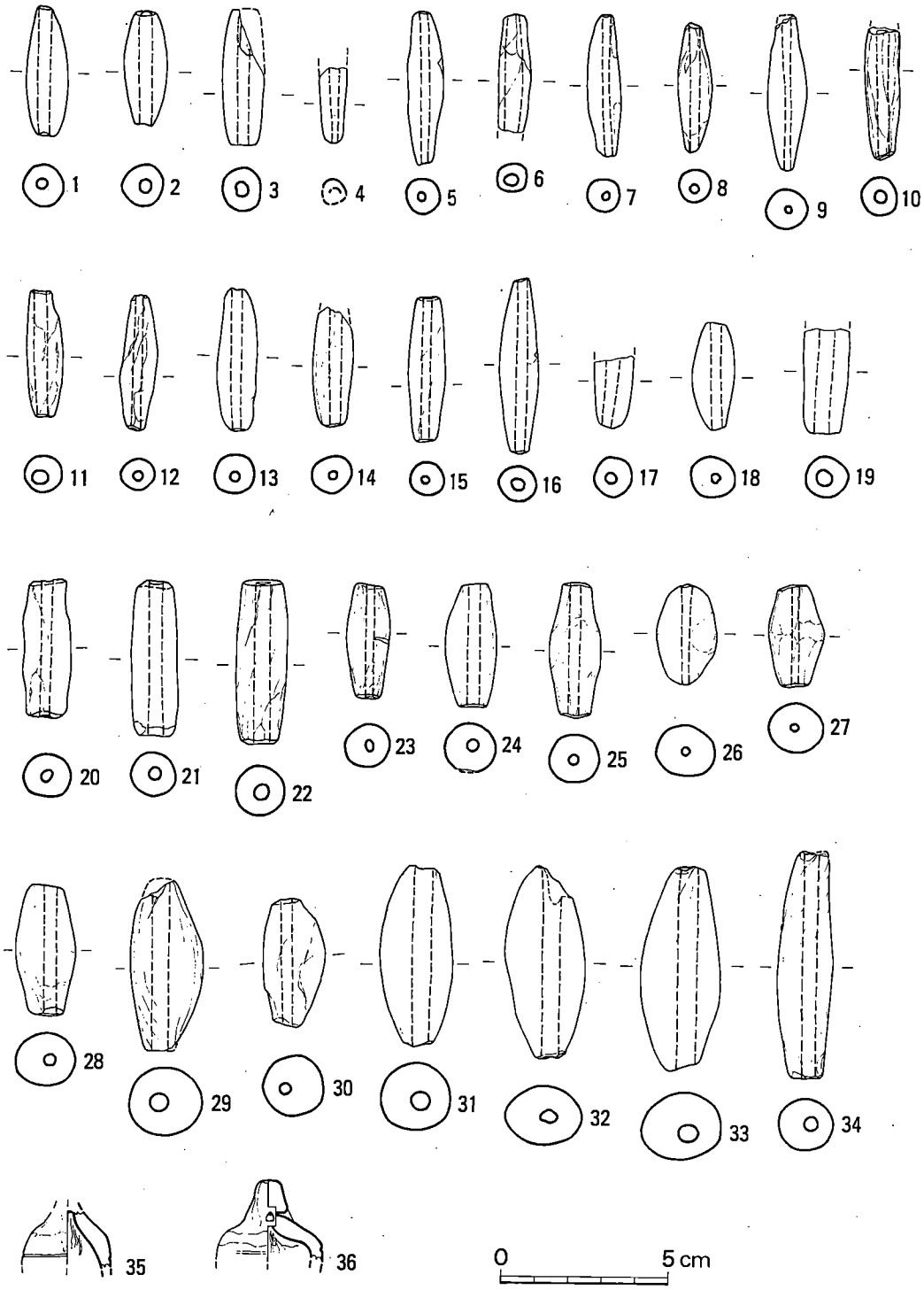
石製容器（8）　安山岩質凝灰岩製の筒形容器の口縁部と胴部破片で、接合しないが同一個体である。厚さ2.5cmの口縁部は復原口径25.2cmで、厚さ4.0cm程に膨らむ胴部破片の復原外径は27.0cmの大きさ。中膨らみか、下膨らみの筒形の器形になるものと思われる。口縁部側の破片は高さ12.5cm、胴部破片の高さは5.8cmを測る。外面は削り痕が顕著に残り、内面は研磨され



第148図　1号落ち込み出土石製品実測図2（1/4）

て滑らかである。

土製品（図版61、第149図）



第149図　1号落ち込み出土土製品実測図（1/2）

表3　1号落込出土管状土錘計測表

(単位cm・g)

No.	遺No.	残存状況	長さ	外径	孔径	重量
1	21	完形	3.9	1.3	0.3	5.3
2	22	完形	3.5	1.3	0.4	4.6
3	23	一部欠損	4.0	1.3	0.4	5.3
4	24	半欠	2.3	0.8	0.3	0.8
5	25	完形	4.5	1.1	0.2	4.6
6	26	完形	3.5	0.9	0.4	2.8
7	33	完形	4.3	1.0	0.2	3.2
8	39	完形	3.8	1.0	0.3	2.7
9	35	一部欠損	4.6	1.2	0.2	4.9
10	40	一部欠損	4.0	1.1	0.4	4.0
11	41	完形	3.7	1.1	0.4	3.8
12	42	完形	4.0	1.0	0.3	3.1
13	45	完形	4.2	1.1	0.3	5.1
14	49	一部欠損	3.5	1.1	0.3	3.8
15	48	完形	4.3	1.0	0.2	4.3
16	27	完形	5.2	1.2	0.3	4.8
17	47	半欠	2.1	1.1	0.3	2.1
18	32	完形	3.2	1.3	0.3	4.2
19	46	半欠	3.0	1.2	0.5	5.2
20	44	完形	4.1	1.4	0.3	7.6
21	34	完形	4.7	1.3	0.4	9.0
22		完形	4.9	1.5	0.4	10.5
23		完形	3.5	1.3	0.2	5.4
24	28	完形	3.6	1.5	0.3	6.7
25	29	完形	4.0	1.5	0.3	7.5
26	31	完形	3.0	1.8	0.2	6.6
27		完形	3.0	1.5	0.2	6.4
28	38	完形	4.0	1.7	0.3	8.7
29	30	一部欠損	5.2	2.2	0.5	18.0
30	43	完形	3.9	1.8	0.3	11.7
31	37	完形	5.5	2.1	0.5	19.9
32	36	一部欠損	5.9	2.3	0.6	20.3
33	50	完形	6.2	2.4	0.6	24.6
34		完形	6.9	1.7	0.4	14.9

管状土錘（1～34）　計測値を表3に示すが、棒状の芯に巻き付けて整形された、中膨らみの管状土錘である。緩やかな流線形に膨らむ形で、外径が1.0cm前後の比較的細身の例、2.0cm前後の比較的太い例があり、長さが短く棗玉のような形状の例などがあり、両端がさほど窄まらない筒状の例もある。精良な胎土を使用し、絞るように巻き付けた痕跡が縞状に残る。

土　鈴（35・36）　ともに上半部の破片で、体部に切り込みを有し、最大径の部分に沈線が巡る。内面には絞り痕がみられる。細砂粒を若干含むものの精良な胎土を使用し、茶褐色に焼成される。35はやや小振りで復原外径が2.7cmで、釣手部分も欠く。36は復原外径3.2cmの大きさで、突起状の釣手に両側から穿孔された紐孔がある。

2号落ち込み遺構（図版62-2、第49図）

4号墳の周溝に囲まれた範囲内のＥＦ15区に位置する落ち込み。南側で11号溝と重複し、東側は葡萄畑の肥料溝で失う。南北5.5m、東西4.3mの不整楕円形の平面形で、摺鉢状に窪み、中央部で深さ75cmを測る。南東部は11号溝と重なるが、境目は不明瞭で、川原石が集中している。おそらく4号墳主体部に使用されていた石材であろうが、破壊されて転用されたのか、一括投棄されたものであろう。

出土土器（図版60、第150図）

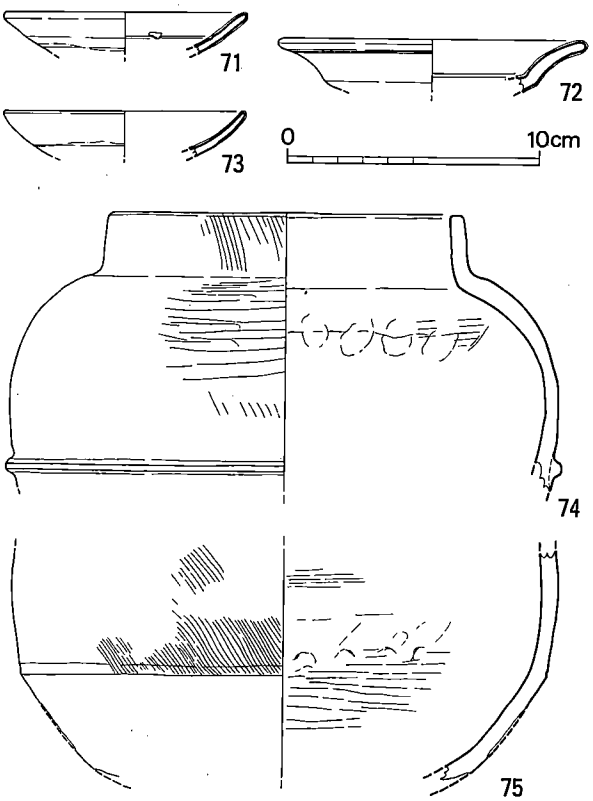
白磁皿（71）　復原口径9.8cmの大きさの口縁端部がやや外反して、内面に沈線が巡る皿で、釉は下半部にかからない。白磁皿Ⅲ類に分類される。

青磁皿（72）　復原口径12.4cmの大きさの、体部から段をなして立ち上がり、口縁部が外反する皿で、灰緑色の釉が厚めにかかる。龍泉窯系皿Ⅰ－2類に分類される。

施釉陶器皿（73）　復原口径9.8cmの内彎して開く皿で、淡黄褐色の胎土に緑色がかった淡灰黄色の釉薬がかかるが、外面の下半部は露胎。

土師質湯釜（74）　復原口径14.2cm、胴最大径21.8cmの大きさ。直口縁で肩部は張り気味に丸く膨らみ、箍状の凸帯が胴最大径のすぐ下側に巡る。外面は口縁部などにハケ目が少し残るが板ナデないしヘラミガキで調整され、内面はハケ目が若干と指頭の凹凸が残るナデで調整される。雲母・赤褐色粒を若干含む精良な胎土で淡茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

土師質鍋？（75）　体部上半と底部を欠くため全体の器形は分からないが、復原胴最大径21.8cmの大きさの破片。最大径の下側に凸帯状の段があり、外面の上側はハケ目調整、下側はヘラ削りとナデで調整されるようだが、下側の器面は剝落が進む。内面は板ナデ調整され、板小口痕や、ナデ着けのムラがみられる。74と同様な胎土、焼成で、外面に煤が付着する。湯釜の体部下半にも似るが、鍋かも知れない。

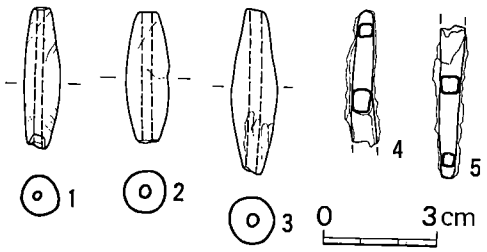


第150図　2号落ち込み出土土器実測図（1/3）

このほか、端部が玉縁になる白磁碗口縁部破片、端部が短く外反する白磁碗口縁部破片、削り出しの少ない高台の白磁碗底部破片、龍泉窯系青磁碗片、同安窯系青磁碗片、糸切り底の土師器杯・小皿片、土師質鍋片などが出土した。いずれも小破片のため図示しない。これらの土器類では、施釉陶器皿や土師質湯釜などの特徴からみて、15世紀ないし16世紀であろう。

土製品（図版62-1、第151図）

管状土錘（1～3）　棒状の芯に巻き付けて、中膨らみの管状に整形された土錘で、巻付けた痕跡が生地の縞模様で残る。ナデ調整で仕上げられ、3では端部付近にヘラ削り痕がみられる。長さ3.7cm、3.5cm、4.3cm、外径1.0cm、1.1cm、1.2cm、孔径0.2cm、0.3cm、0.3cmの大きさで、



第151図　2号落ち込み出土土製品・金属製品実測図　(1/2)

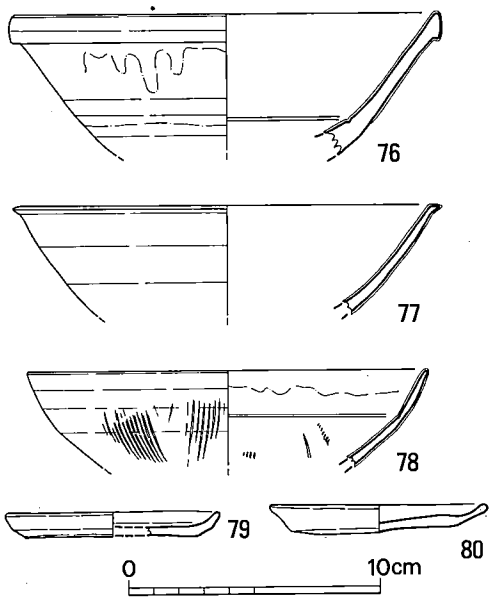
重量は3.1g、3.7g、5.3gを測る。

鉄製品（図版62-1、第151図）

用途不明鉄製品（4・5）　ともに0.5～0.6cm角棒状の破片で3.5cmと4.0cmの残存長を有す。端部はやや細くなるが、尖り方は鈍い。

3号落ち込み遺構（図版62-2、第49図）

調査区中央部のG14区にあり、4号墳周溝と2号通路状遺構を削り込む。葡萄畑の肥料溝で攪乱され、南東側が道路保全の非調査部分に続くため全体の様子は不明。地形が斜面に移行する部分にあり、明確な境界はみられなかったが、南西部の長さ約5.5m、幅2.5mの部分が北東部よりも色調の暗い暗茶褐色土が堆積していて、深さも30cm程と他の部分より深い。東側には川原石の集中する部分がみられた。



第152図　3号落ち込み出土土器実測図（1/3）

出土土器（図版60、第152図）

白磁碗（76・77）　76は口縁端部が玉縁状に肥厚する碗で、内底見込みに沈線状の段がある。釉は厚めにかかり、口縁部下に釉垂れがみられる。復原口径17.2cmの大きさ。77は口縁端部が短く外反し上面が平らな碗で、復原口径17.0cmの大きさ。

青磁碗（78）　口縁部が内彎して立ち上がり、内面に沈線が巡る同安窯系青磁碗で、内面にジグザグ文様、外面に櫛目がみられる。復原口径16.0cmの大きさ。

土師器小皿（79・80）　外底面に糸切り痕と板目圧痕を有する小皿。復原口径8.6cmと8.8cm、器高1.0cmと、1.1cmの大きさ。

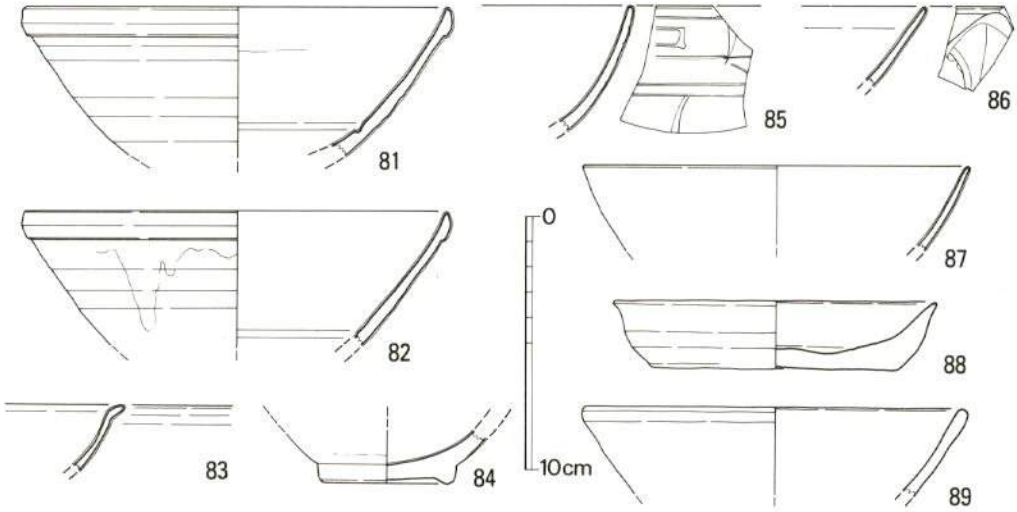
これらの土器類は、13世紀後半頃に相当する。

4号落ち込み（図版62-2）

1号通路状遺構の北東側にあり、一部通路状遺構の上部を切り込む遺構で、東西24.0m、南北3.2mの範囲が確認されたが、北側は調査区域外に続く。黒色土と暗茶褐色土が堆積する。

出土土器（図版60、第153図）

白磁碗（81～84）　81・82は口縁端部が玉縁状に肥厚し、内底見込みに段状の沈線が巡る碗。ともに復原口径17.2cm程の大きさだが、82の口縁端部肥厚は小さめで、体部の立ち上がりが直線的である。淡灰黄色の釉が内外面にかかり、口縁部下に釉垂れがみられる。83は口縁端部が



第153図　4号落ち込み出土土器実測図（1/3）

短く外反し上面を平らにする碗。84は外径5.6cmの大きさの高台をもつ底部破片で、畳付け外面が削られる。

青磁碗（85～87）　85は内彎して立ち上がる口縁部破片で、外面に雷文帯連弁文がみられる龍泉窯系青磁碗。86は外面に鎬連弁文のみられる龍泉窯系青磁碗。87は復原口径15.6cmの大きさの、内外面ともに無文の龍泉窯系青磁碗。

土師器杯（88）　復原口径13.0cm、器高2.6cm、底径9.8cmの大きさの杯。腰部の器壁が厚く、口縁端部に向かって急激に厚みを減じる。器面が風化磨滅して調整手法は不明。

土師器椀（89）　口縁部へ内彎気味に開く椀で、復原口径15.4cmの大きさである。

これらの土器類では、玉縁状口縁の白磁碗などに12世紀代の要素をみるが、鎬連弁や雷文帯連弁文の龍泉窯系青磁碗の存在から15世紀代が考えられる。重複する1号通路状遺構の時期幅を考慮に入れても、4号落ち込み遺構の時期は15世紀代以降が妥当であろう。

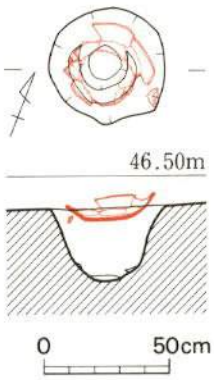
10. その他の遺構と遺物

埋　甕（図版62-3、第154図）

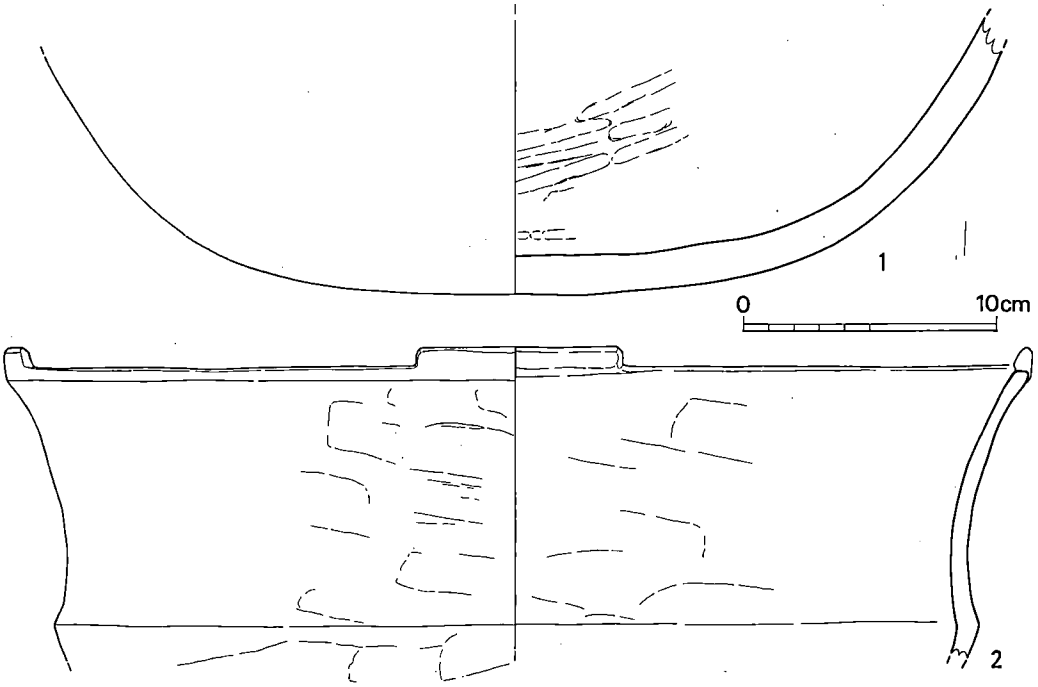
調査区北西端の崖に近接して発見された。掘方は直径45cmの円形プランで、土器が底を下に据えられていて、胴部上半は削平されて欠損する。

埋甕使用土器（図版62-4、第155図）

土師器鉢（1）　底部のみの破片で、全体の器形は分からないが、



第154図
1号埋甕実測図
(1/30)



第155図　埋甕使用土器実測図（1/3）

こね鉢の底部であろうか。破損面で径39.8cmの大きさで、底部は平底に近い丸底。外面は板ナデされたのか擦過痕が残る。内面は指頭による凹凸の残るナデで調整される。胎土に砂粒を含み、茶褐色ないし案茶褐色を呈するが、外面に煤が付着する。

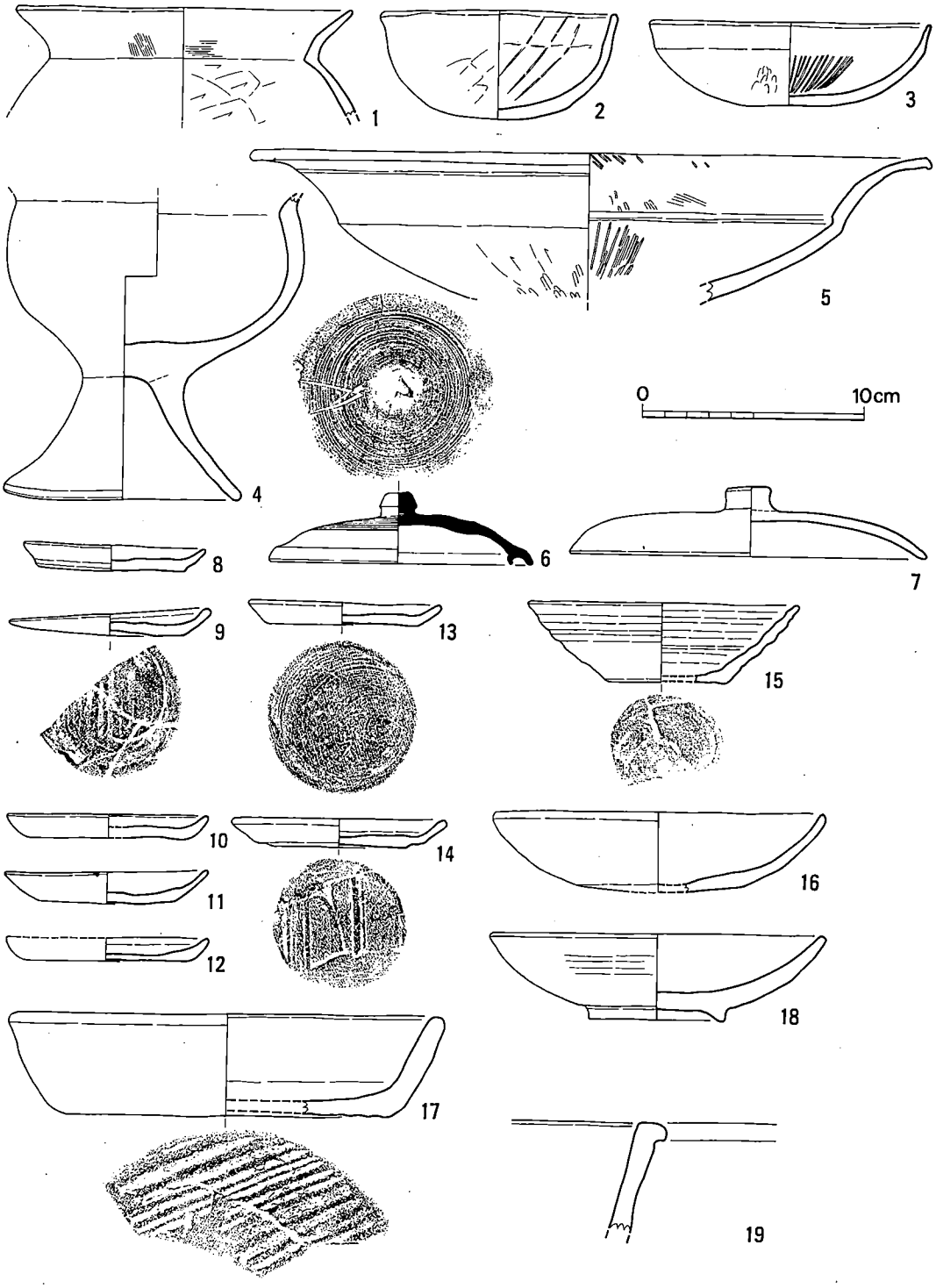
ピット出土土器（図版63、第156図）

柱穴様ピットから出土した土器類のうち、主なものを紹介する。

土師器甕（1）　p188から出土した、復原口径15.4cmの大きさの器壁の薄い甕で、口縁部はやや直線的に外反する。口縁部内外面にハケ目が残り、体部内面は頸部までヘラ削りされる。

土師器椀（2・3）　2はp188から出土した、復原口径10.8cm、器高4.9cmの大きさのやや深い器形の椀。外面はヘラ削りの後にナデられ、内面は板ナデ調整されるが、口縁部は内外面ともナデ調整され、僅かに外反する。3はp176 から出土した、椀よりむしろ杯であろう。復原口径12.8cm、器高3.8cmの大きさ。ヘラミガキ調整される体部は内彎して開き、口縁部はヨコナデ調整されて外反気味に立ち上がる。内面には放射状の暗文になる。

土師器台付鉢（4）　p450から出土した。口縁端部を欠き、残存器高23.6cm、胴最大径13.5cm、裾径10.8cmの大きさで、推定器高14.5cm程度のうち、脚台部が5.5cmの高さを占める。体部は扁球形ながらも頸部はさほど括れずに、口縁部が外反する。脚裾部は截頭円錐形ながらも緩



第156図　ピット出土土器実測図（1/3）

やかに外反する。器面はやや磨滅が進むが、ヘラ削りの後にヨコナデおよびナデ調整されるようで、体部内面はヘラミガキ調整らしい。

土師器高杯（5）　p449から出土した。杯部破片だが、浅く内彎した杯底部から屈曲して口縁部が外反し、復原口径31.0cmの大きさ。内面はヘラミガキ調整され、杯底部外面はヘラ削りに似る。口縁部外面はヨコナデ調整される。

須恵器杯蓋（6）　p416から出土した。身受けのかえりを有する杯蓋で、緩やかに湾曲する蓋の外天井に小さな疑宝珠状のつまみが付く。外径12.0cm、器高2.3cmの大きさで、かえりの径は10.1cmを測る。外天井はカキ目調整されてV字状のヘラ記号がふされる。細砂粒も少な目な胎土で、硬めに焼成されて灰色を呈する。

土師器杯蓋（7）　p201から出土した。復原口径16.2cm、器高 3.2cmの大きさ。身受けのかえりを有さずに、低く内彎する天井部に釦状のつまみが付く。ヨコナデとナデで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成される。

土師器小皿（8～14）　8～10はp335、11はp401、12はp172、13・14はp379から出土した。いずれも外底面に糸切り痕を有し、板目圧痕もみられる。口径8.3～9.8cm、器高1.0～ 1.4cmの大きさで口径9cm弱の例が多い。

土師器杯（15～17）　15はp202 から出土した。復原口径12.3cm、器高3.6cm、底径5.3cmの大きさ。小さめの底部から体部が直線的に長めに開き杯bに分類される例である。16はp335　から出土した。復原口径15.0cm、器高3.7cm、底径7.6cmの大きさ。体部から口縁部へ内彎して開く。17はp308 から出土した。復原口径20.0cm、器高4.5cm、底径14.5cmの大きさの大杯。器壁が厚く、外面に板目圧痕の付く底部から口縁部へは直線的に開く。

瓦器椀（18）　p291 から出土した。復原口径15.2cm、器高3.9cm、高台径6.2cmの大きさ。体部が浅めで、器壁が厚めの椀である。

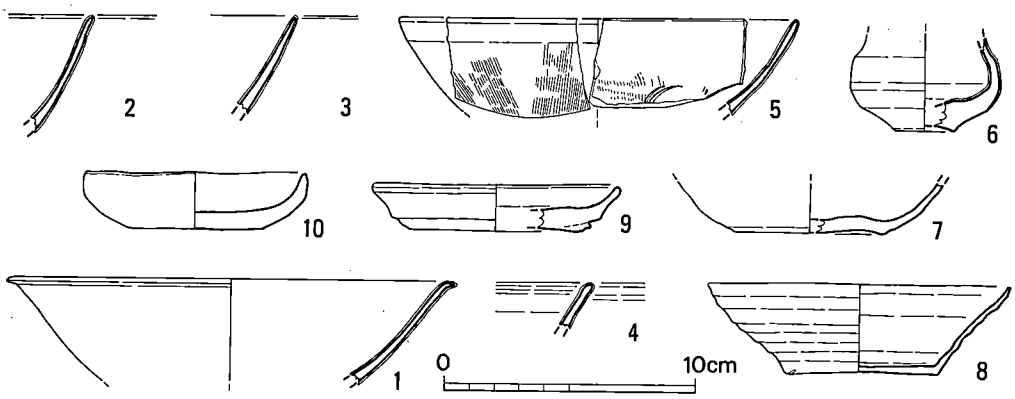
土師器鉢（19）　L字状に外へ折れて上面を平らに整える、口縁部破片である。体部側で幾分か器壁が厚くなるようだが、全体の器形は不明。内外面ともに丁寧なヨコナデで調整される。

ピット出土土製品（図版67、第164図、表6）

管状土錘（29・33・34・38）　いずれも棒状の芯に粘土生地を巻き付けて、エンタシス状の管に整形したものである。

2号住居跡上層出土の中世土器類（図版64、第157図）

白磁碗（1～4）　1は復原口径18.0cmの大きさの、口縁端部が短く外反して上面を平らにする碗である。2は口縁部がやや外反する口縁部破片、3は口縁端部が丸くおさまる碗の口縁部破片で、口縁部内面に沈線が 1条巡る。黒色粒を含む白色の胎土で釉は他の白磁碗に比して厚めにかかる。



第157図　包含層等出土土器実測図１（1/3）

青磁碗（５）　同安窯系青磁碗の口縁部破片で、復原口径16.0cmの大きさ。内面に櫛状施文具によるジグザグ文様、外面に櫛目文様がみられる。

陶器壺（６）　口縁部を欠くため全体の器形ははっきりしないが、水滴であろうか。胴最大径6.0cmの大きさ。暗茶褐色を呈する鉄釉？が内外面にかけられるが、外面の下部は露胎。

土師器杯（７・８）ともに糸切り痕を外底面に有す。７は口縁部を欠くが、体部が内彎して立ち上がる。８は口径12.0cm、器高3.5cm、底径6.0cmの大きさの、口縁部が直線的に開いて長い杯b類である。13世紀中頃以降とされる。

土師器小皿（９・10）　９は復原口径10.0cm、器高1.8cmの大きさの、外底面に糸切り痕を有す小皿。10は復原口径9.0cm、器高2.2cmの大きさの口縁部が内彎して立ち上がる小皿で、外底面の糸切り痕はよく分からない。

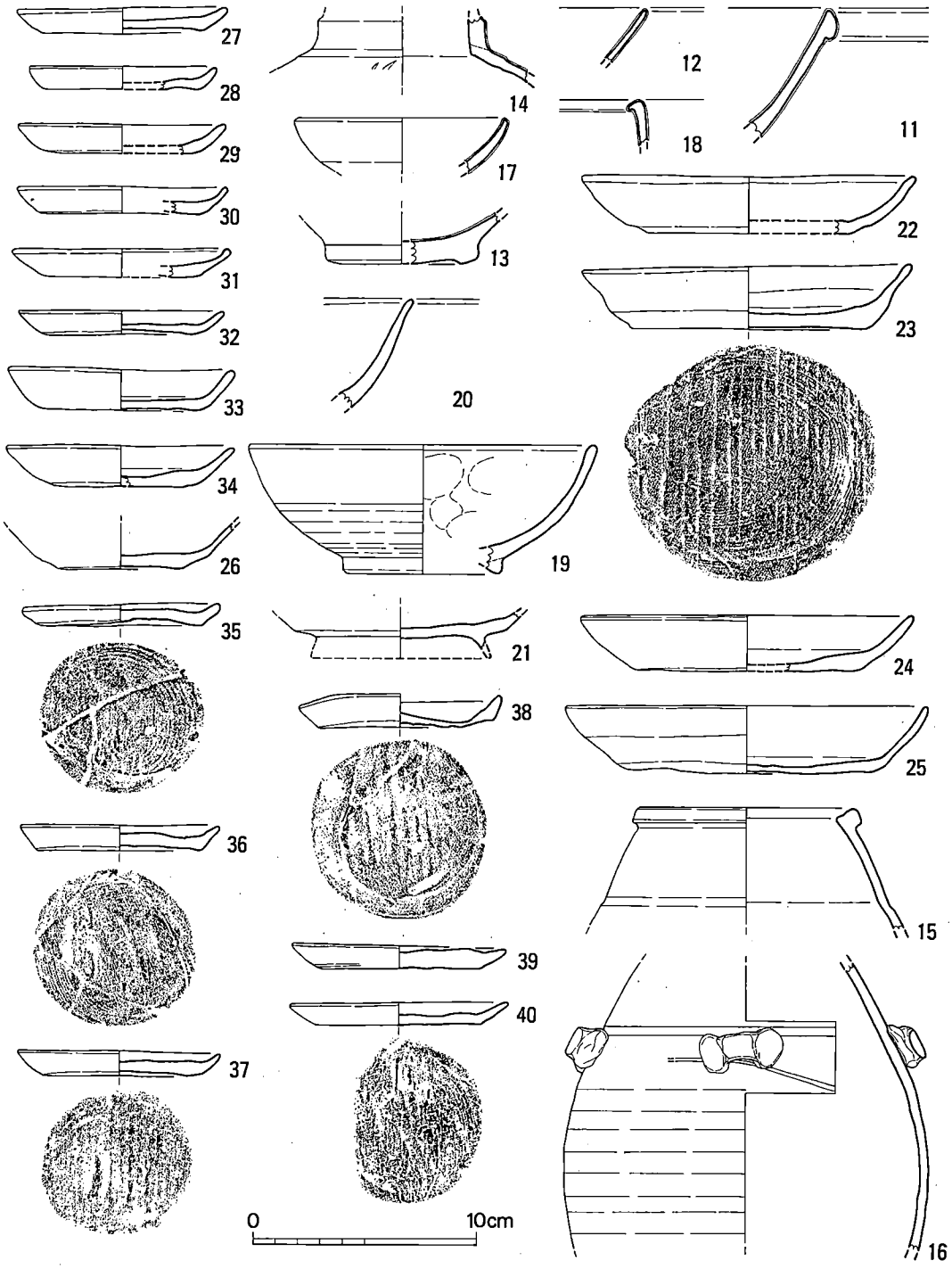
１～６号墳上層出土の中世土器類（図版64、第158図）

古墳の主体部上部や攪乱土などから出土した遺物に中世頃の遺物があり、１～６号墳での例を紹介する。

白磁碗（11～13）　11は端部が玉縁状に肥厚する白磁碗の口縁部破片で、４号墳周溝部分から出土した。12は直線的に開く口縁部破片で、内面に沈線が１条巡る。13は削り出しの浅い高台をもつ底部破片で、外面には釉がかからない。３号墳周溝部分から出土した。

青白磁壺（14）口縁部・体部を欠く頸部破片で、体部の端に口縁部が貼付られている。頸部と肩部外面に段があり、釉の厚みで色調に変化を与えている。３号墳周溝部分から出土。

陶器壺（15・16）胴部から頸部が窄まり、口縁部が短く外反する四耳壺で、口頸部などは回転ナデ調整されて、胴下半の外面は回転ヘラ削りされる。肩部に浅い沈線が巡り、16では波状沈線も巡るが、耳は沈線の間に横向きに貼り付けられる。淡茶色の胎で、黄緑色の釉がかかる。15は６号墳の左前面部分、16は６号墳石室上部の攪乱坑から出土し、同一個体の可能性もある。



第158図　包含層等出土土器実測図２（1/3）

陶器皿（17）　体部から口縁部が内彎して立ち上がる皿で、復原口径9.8cmの大きさ。黒色粒を含む白色の胎土で、黄白色の釉がかかり、外面の下半は露胎。３号墳の周溝から出土した。

陶器鉢（18）　体部が直に立ち上がり、端部が内に折れる口縁部破片。灰色の胎で、黄緑色の釉がかかる。４号墳周溝から出土した。

瓦器椀（19）　復原口径15.6cm、器高5.7cm、高台径7.1cmの大きさ。外面の下半部は回転ヘラ削りで調整され、内面には僅かながら凹凸がみられる。５号墳主体部の上部から出土した。

土師器椀（20・21）　20は内彎する体部から口縁部が外反する口縁部破片で、３号墳周溝から出土した。21は高めの高台が付くと思われる椀の底部破片である。

土師器杯（22～26）　22・23は３号墳出土の、体部が内彎あるいは直線的に開くが端部で僅かに外反する杯。23では口径14.8cm、器高2.8cmの大きさで、外底面に糸切り痕と板目圧痕がみられる。24～26は６号墳出土の杯で、24・25は体部が内彎気味に開くが、26は小さめの底部から体部が直線的に開くb類であろう。

土師器小皿（27～40）いずれも外底面に糸切り痕を有する小皿で、６号墳出土の35～40には板目圧痕が付く。27は１号墳出土で、口径9.6cm、器高1.1cmの大きさ。28～30は３号墳、31は４号墳、32～34は５号墳から出土した。

表４　包含層等出土土師器杯・小皿観察表

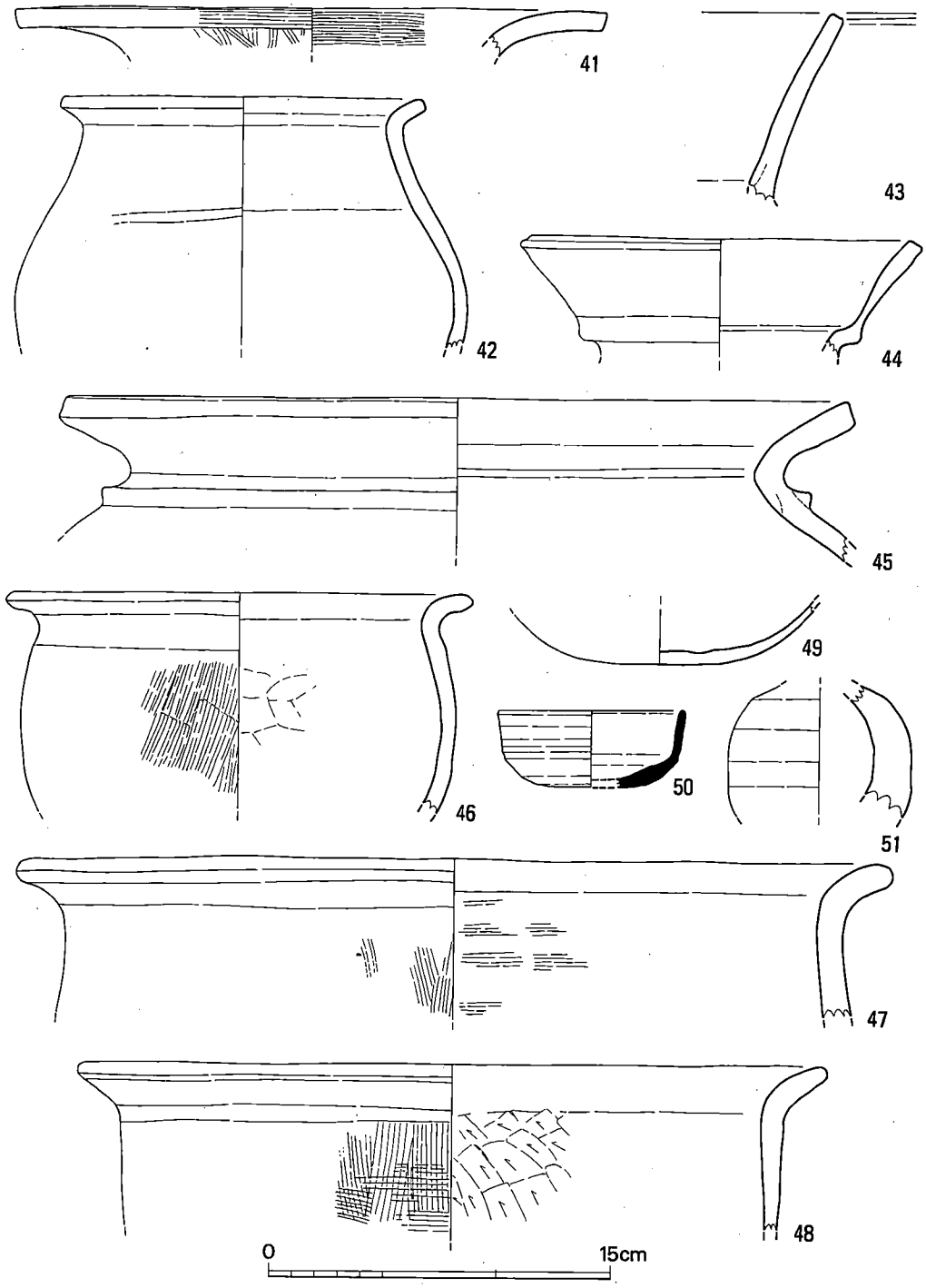
（単位cm）

No.	遺物No.	出土位置	種類	口径	器高	底径	糸切り	板目圧痕
22	358	3号墳周溝	杯	14.8	2.5	9.0	?	?
23			杯	14.6	2.8	10.5	○	○
24	306	6号墳左前面	杯	14.8	2.4	10.0		
25	292	6号墳左前面	杯	16.1	3.0	10.8		
26	305	6号墳左前面	杯b			5.6	○	
27			小皿	9.5	1.1	7.1	○	
28	352	3号墳周溝	小皿	8.4	1.0	7.0	○	
29	357	3号墳周溝	小皿	9.3	1.3	7.1		
30	353	4号墳周溝	小皿	9.4	1.2	7.0		
31	360	4号墳周溝	小皿	9.8	1.3	7.0	○	
32	1178	5号墳周溝	小皿	9.2	1.0	6.6		
33	413	5号墳周溝	小皿	10.1	1.8	7.0	○	
34	414	5号墳周溝	小皿	10.2	1.8	6.0		
35	293	6号墳左前面	小皿	8.9	1.0	7.0	○	○
36	295	6号墳左前面	小皿	9.0	1.2	7.2	○	○
37		6号墳左前面	小皿	9.1	1.1	6.5	○	○
38		6号墳左前面	小皿	9.1	1.5	7.8	○	○
39	294	6号墳左前面	小皿	9.6	1.0	7.0	○	○
40	297	6号墳左前面	小皿	9.7	1.0	7.3	○	○
52	564	No.99	小皿	7.2	1.9	4.9	○	
53	535	K4区茶褐色土	小皿	7.2	2.0	3.9	○	
54	522	L7区黒色土	小皿	7.5	1.8	5.0	○	
55	488	M20区黒色土	小皿	8.4	1.6	6.1	○	
56	487	M20区黒色土	小皿	8.3	1.5	6.6	○	
57	512	L4区黒色土	小皿	9.3	2.0	6.9		
58	563	No.71	小皿	9.0	1.1	7.6	○	○
59	1096	L7区黒色土	小皿	8.6	0.8	7.0		
60	515	L6区黒色土	小皿	9.1	1.1	7.0		
61	829	H11区	小皿	9.2	1.6	6.8		
62	516	L6区黒色土	小皿	9.5	1.1	7.4		
63	1090	L6区黒色土	小皿	9.7	1.4	7.7		
64	517	L6区黒色土	小皿	11.4	1.7	7.0		
65	525	L7区黒色土	杯			7.2		
66	524	L7区黒色土	杯			7.8		
67	1091	L6区黒色土	杯	12.0	3.2	7.0		
68	528	L7区黒色土	杯	12.3	2.2	7.8	○	○
69	527	L7区黒色土	杯	12.1	2.5	8.6	○	○
70	526	L7区黒色土	杯	12.4	2.5	7.8		
71	565	No.99	杯	12.5	3.5	7.0		
72	513	L4区黒色土	杯	12.6	3.6	7.5		
73	530	L21区黒色土	杯	14.7	3.5	7.0	○	

弥生時代以降の遺物

土　器（図版65、第159～161図）

壺（41～44）　41は強く外反する口縁部破片で、復原口径26.0cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整される。42はなで肩で括れた頸部から口縁部が短めに外反する。復原口径16.1cm、胴最大径20.0cmの大きさ。器面は内外面ともに磨滅するが、肩部外面に沈線らしい痕跡がある。43は直線的で長めに開く口縁部破片で、複合口縁になるものであろう。44は直



第159図　包含層等出土土器実測図 3 (1/3)

線的だが僅かに外反気味に開く口縁をもつ複合口縁の破片で、復原口径17.6cmの大きさ。

甕（45）　外反する口縁部破片で、括れた頸部の下に断面三角形の凸帯が巡る。復原口径35.0cmの大きさ。

土師器甕（46～48）　46は口縁部が肥厚せずに強く外反する甕で、復原口径20.6cm、胴最大径19.2cmの大きさ。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整される。47・48はやや肥厚して外反する口縁部破片で、頸部から胴部へ殆ど膨らまない甕である。胴部外面はハケ目調整され、内面は47がハケ目、48が頸部までヘラ削りされる。

土師器椀（49）口縁部を失うが、内外面をヘラミガキ調整する椀であろう。

須恵器杯（50）復原口径8.2cm、器高3.3cmの大きさの、口縁部が直立気味に立ち上がり、外面に浅い沈線が２条巡る。外底面はヘラ切り離しの後にナデられる。

土師器瓶(51)　口頸部と底部を失うが、復原胴最大径8.0cmの大きさの、器壁の厚い破片で、瓶であろう。内外面ともにヨコナデ調整される。

土師器小皿（52～64）　57はヘラ切り痕を外底面に有する小皿。他は糸切り痕を外底面に有する小皿で、板目圧痕の付く例もある。52～54は口径7.0cm前後の特小皿である。55～64では口径 8.5cm～11.2cm、器高0.8～2.0cmの大きさ。

土師器杯（65～73）　67は外底面にヘラ切りらしい痕跡のみられる杯で、底部から口縁部は内彎して立ち上がる。65・66は口縁部を欠くが、外底面に板目圧痕を有し、内彎しながら幾分長めに立ち上がる。68・69は器高の低い杯で、外底面に糸切り痕と板目圧痕を有す。71は小さめの底部から口縁部が長めで直線的に開く杯。

土師器椀（74・75）　74は復原口径14.6cm、器高4.6cm、高台径8.2cmの大きさ。内彎する体部で、口縁部は僅かに外反する。75は底部を欠くが、復原口径15.0cmの大きさ。

瓦器椀（76）　底部破片で、ハ字形に開く高台を有する。

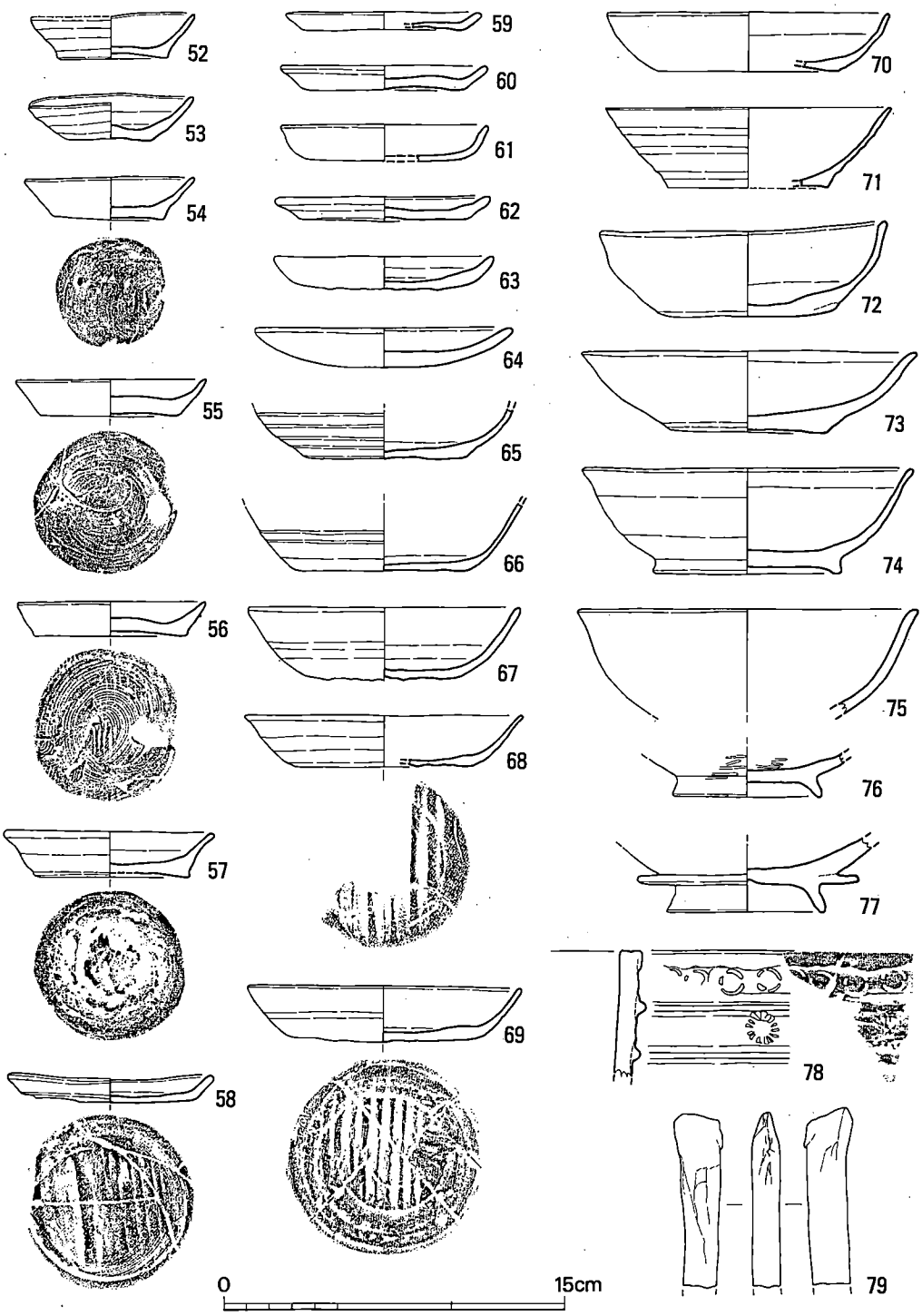
瓦器托（77）　体部を欠損する底部破片で、ハ字形に開く高台を有するが、口縁部の内外面はヘラミガキ調整される。高台径7.0cmの大きさ。

土師質火鉢（78）　直に立ち上がる口縁部破片で、口縁端部外面と口縁部下に箍状の凸帯が巡り、凸帯間に円文と菊輪文が押捺される。

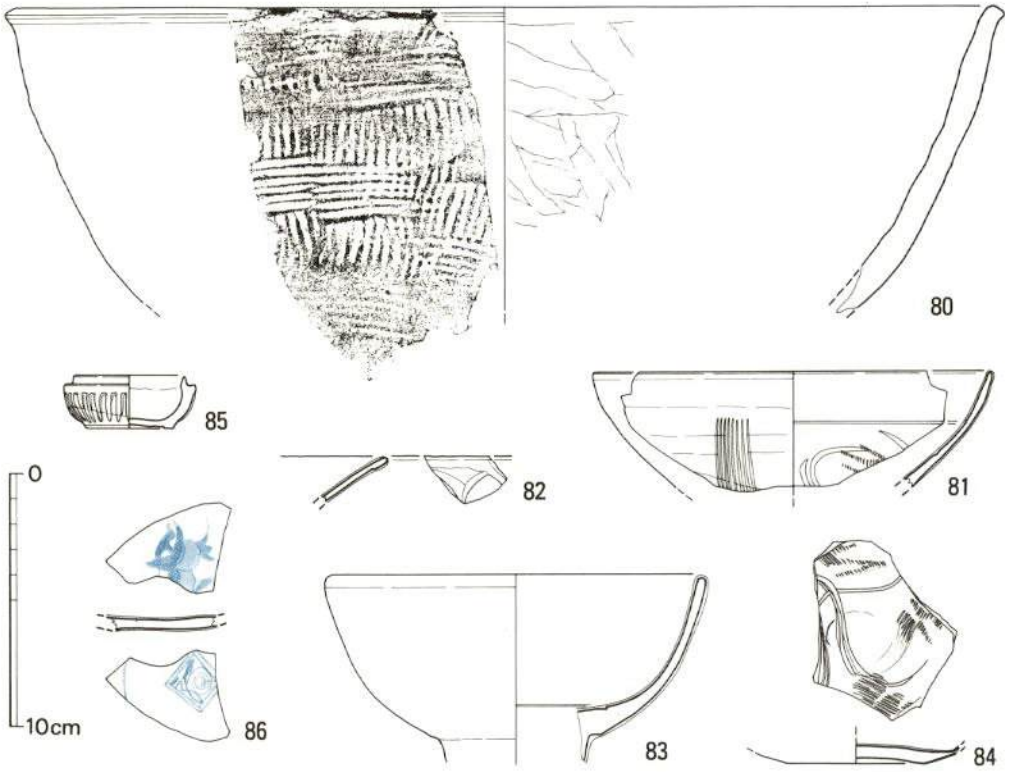
土師質鍋（79・80）　79は鼎状の足の体部との接合部分で剝落した破片である。80は復原口径40.0cmの大きさの体部が内彎し、口縁端部が僅かに外反するが、肥厚はしない。外面に平行叩き目痕が残る軽いナデ調整、内面は凹凸の多いナデで調整される。胎土に細砂粒を含み、淡茶褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

瓦（図版66、第162図）

平　瓦（87・88）　87は５号墳主体部の攪乱坑から出土した側縁部破片。88は３号建物跡の東側約 5mの黒色土層から出土した側縁の端部角破片。88の凹面には布目圧痕が残る。



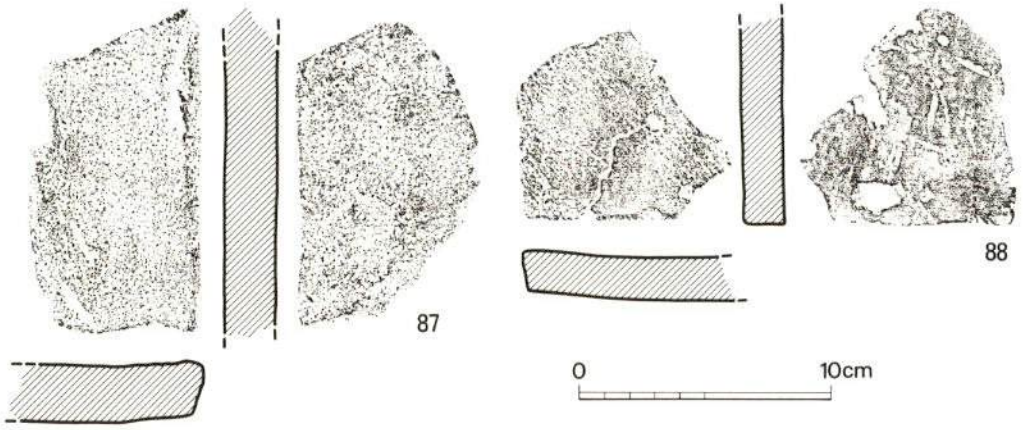
第160図　包含層等出土土器実測図 4 (1/3)



第161図　包含層等出土土器実測図５（1/3）

表採土器（図版66、第161図）

青磁碗（81～83）　81は復原口径16.0cmの大きさの同安窯系青磁碗で、体部から口縁部にか



第162図　包含層等出土瓦拓影（1/3）

けて内彎して開く。内面の口縁下に沈線が巡り、ヘラ状施文具と櫛状施文具で弧とジグザグ文を描き、外面には細い櫛目がみられる。82は外面に鎬蓮弁のみられる龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。83は復原口径14.8cm、器高7.5cm、高台径5.8cmの大きさの龍泉窯系青磁碗で、体部は内彎する。内底見込みに沈線状の段があり、口縁部内面に浅く幅広の沈線が巡る。全体にやや厚めの釉がかかる。

青磁皿（84）　見込みに櫛状施文具によるジグザグ文と花文が描かれ、外底面の釉は掻き取られている。同安窯系青磁皿Ⅰ－２類に分類される。

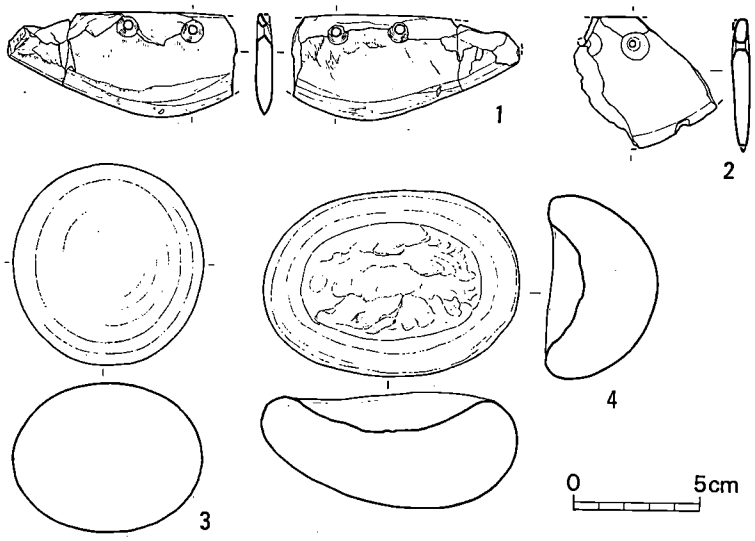
青白磁合子（85）　復原外径5.3cm、かえりの径4.5cm、器高2.1cmの大きさの合子で、蓋受けのかえりは直に立ち上がる。体部外面には短直線が刻まれている。内面と体部外面に施釉されるが、蓋受け部と底部外面は露胎。

染付皿（86）　底部破片のため、見込みの文様は何を意匠したのかよく分からないが、藍柿右衛門の皿で、高台内にみられる草書体の渦福銘款は17世紀末～18世紀に盛行するものである。

石　器（図版67、第163図）

石包丁（１・２）　１は小豆色の輝緑凝灰岩製のやや幅の狭い石包丁で、一部を欠くが、残存長9.1cm、幅4.2cm、厚さ0.7cmの大きさ。研磨調整され、双孔は両面から穿孔される。F10区の茶褐色土層から出土した。２は安山岩質の石材を用いた幅の広めな石包丁で、両端を欠く。幅5.1cm、厚さ0.7cmの大きさで、両面から穿孔される双孔の間隔は１に比して狭い。Ｋ４区の黒色土層から出土した。

すり石（３）　B14区の茶褐色土層から出土した。8.2cm×7.6cm×6.0cmの扁球形の安山岩製



第163図　包含層出土石器実測図（1/3）

すり石で、表面は滑らかに磨耗している。

凹み石（4）　ＦＧ24区の茶褐色土層から出土した。玢岩質の斑岩製の掌に握り易い大きさの川原石で、片面が凹んで椀状になっている。凹みの内側は敲打痕が顕著にみられる。

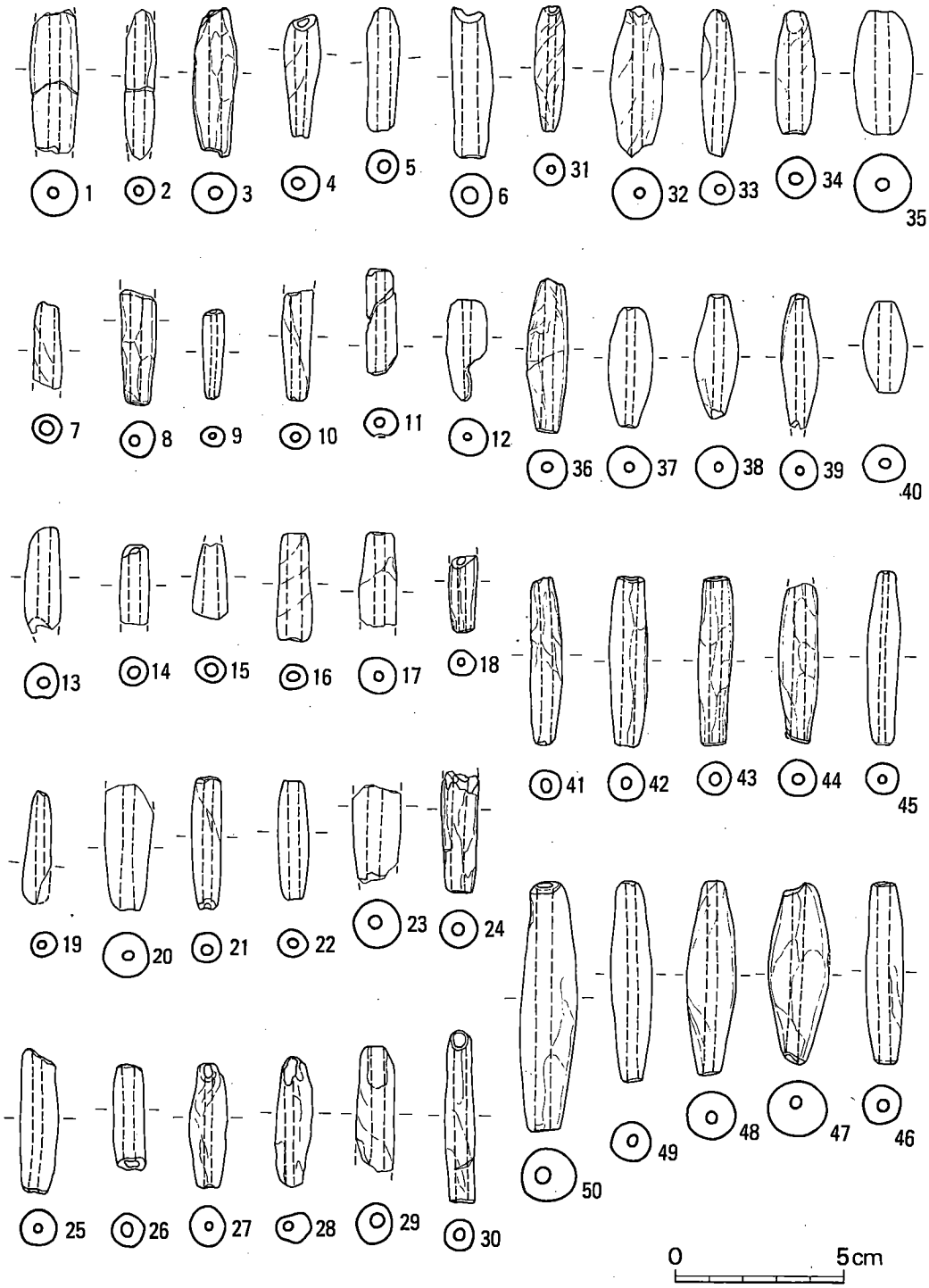
土製品（図版67、第164・165図）

管状土錘（1～50）　計測値は表6に示す。スマートな流線形に中膨らみの形、殆ど膨らまない筒形、膨らみが大きく長さの短い形などがある。40のように長さ3.0～3.5cm前後の例は棗

表5　包含層等出土石器一覧表

（単位mm・g）

No.	出土位置	種　類	材　質	残存状況	長　さ	幅	厚　さ	重　量
1	F10区茶褐色土	石包丁	輝緑凝灰岩	一部欠損	9.1	4.2	0.7	35.2
2	K4区黒色土	石包丁	安山岩質	破　片	5.7	5.1	0.7	22.7
3	茶褐色土	すり石	安山岩質	完　形	8.2	7.6	5.95	504.6
4	FG24区茶褐色土	凹　石	斑　岩	完　形	10.2	7.4	4.5	455.4
5	7号墳周溝	打製石鏃	黒色黒曜石	先端欠損	2.25	2.45	0.52	2.6
6	8号墳羨道部	打製石鏃	黒色黒曜石	一部欠損	2.3	1.65	0.61	1.7
7	M7区黒色土	打製石鏃	黒色黒曜石	1/3欠損	2.5	2.1	0.47	2.1
8	F10区茶褐色土	打製石鏃	安　山　岩	先端欠損	2.2	1.55	0.32	1.1
9	M7区黒色土	打製石鏃	安　山　岩	一部欠損	1.67	1.31	0.2	0.3
10	5号土壙	打製石鏃	姫島黒曜石	完　形	2.15	1.14	0.29	0.5
11	7号溝	打製石鏃	姫島黒曜石	先端欠損	1.5	1.55	0.43	0.8
12	南部表採	打製石鏃	姫島黒曜石	基部欠損	1.35	1.2	0.4	0.5
13	23号土壙	打製石鏃	黒色黒曜石	1/3欠損	1.68	1.25	0.27	0.5
14	L6区黒色土	打製石鏃	黒色黒曜石	基部欠損	1.3	1.1	0.16	0.2
15	J2区攪乱坑	打製石鏃	黒色黒曜石	一部欠損	2.0	1.66	0.37	0.8
16	L4区黒色土	打製石鏃	黒色黒曜石	完　形	1.93	1.7	0.44	0.9
17	5号墳石室	打製石鏃	黒色黒曜石	一部欠損	1.72	1.52	0.27	0.6
18	14号溝	打製石鏃	黒色黒曜石	一部欠損	1.82	1.7	0.37	0.9
19	3号墳周溝	つまみ形石器	黒色黒曜石	一部欠損	3.32	2.55	0.58	4.9
20	3号落込み	つまみ形石器	黒色黒曜石	完　形	2.51	1.9	0.38	1.8
21	P449	掻　器	黒色黒曜石	完　形	2.8	1.44	0.43	2.0
22	10号溝	掻　器	黒色黒曜石	完　形	2.38	1.91	0.52	2.6
23	7a号溝	削　器	黒色黒曜石	完　形	3.77	1.63	0.61	2.4
24	L5区茶褐色土	掻　器	黒色黒曜石	完　形	2.2	2.33	0.87	4.2
25	1号墳付近	掻　器	黒色黒曜石	完　形	2.4	1.45	0.6	2.2
26	5号土坑	削　器	黒色黒曜石	完　形	4.9	3.2	0.7	7.5
27	L7区黒色土	削　器	黒色黒曜石	完　形	5.21	2.7	0.95	12.1
28	2号住居跡	掻　器	黒色黒曜石	1/3欠損	3.6	3.3	0.56	7.4
29	L22区茶褐色土	削　器	黒色黒曜石	一部欠損	4.03	2.9	0.71	8.0
30	G5区黒色土	石　匕	安　山　岩	完　形	6.4	3.3	0.85	18.7
31	M7区黒色土	石　匕	安　山　岩	一部欠損	6.6	5.25	1.0	41.0
32	L7区黒色土	磨製石斧	片岩質泥岩	完　形	13.1	4.9	2.9	249.9
33	K5区黒色土	磨製石斧	粘板岩質	刃部欠損	11.1	5.1	2.6	303.4
34	7号墳周溝	磨製石斧	砂　岩	刃部欠損	11.1	5.7	3.5	179.2
35	6号墳石室	磨製石斧	粘板岩質	基部欠損	6.9	4.05	2.4	97.4
36	9号溝	磨製石斧	蛇紋岩	基部欠損	7.0	6.2	1.5	83.1
37	L6区黒色土	打製石斧	緑泥片岩	完　形	12.5	5.0	0.78	118.9
38	G9区茶褐色土	打製石斧	緑泥片岩	基部欠損	6.4	4.9	0.8	37.2

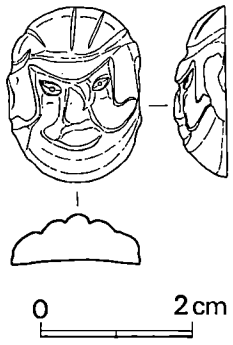


第164図　包含層等出土土製品１（1/2）

玉に近い形状で、長さ4.0～5.0cmのものは流線形が多いが、5.0cm前後の例に筒形の例がみられるといった傾向があり、長さ7.5cmの例まである。いずれも精良な胎土を用いて、棒状の芯に巻き付けて整形されるようで、多くの資料に絞ったような生地の縞模様がみられる。ただ棗玉状の例ではこのような縞模様は殆どみられない。

人面土製品（第165図）

Ｊ３区の攪乱坑から出土したが、泥質の胎土を用いて淡灰黄色に焼成される釦状の小さなもので、凸面に顎の大きめな人面が表されている。裏面は平らだが僅かに凹む。上下2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmの大きさ。泥メンコ（玩具の一種）であろうか。

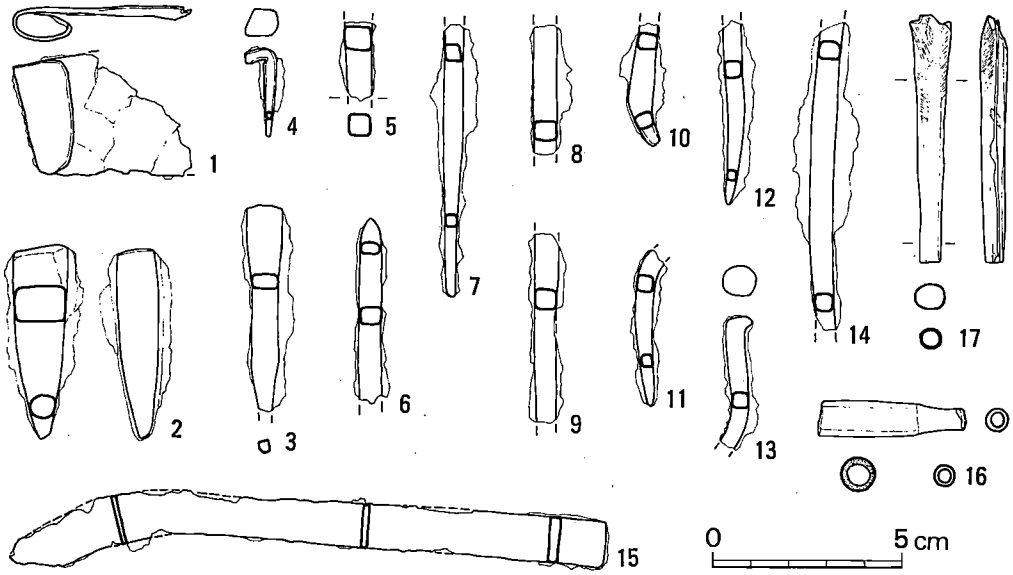


第165図
包含層等出土土製品２
(1/1)

表６　包含層等出土管状土錘計測表

(単位cm・g)

No.	遺物No.	出土位置	残存状況	長さ	外径	孔径	重量
1	68	K4区黒色土	一部欠損	4.2	1.4	0.3	8.6
2	69	K4区茶褐色	一部欠損	4.4	0.9	0.3	2.1
3	70	K5区茶褐色	一部欠損	4.4	1.3	0.4	5.8
4	72	I5区黒色土	一部欠損	3.6	1.1	0.4	3.5
5	73	I5区黒色土	一部欠損	3.6	0.9	0.4	3.2
6	74	I5区黒色土	一部欠損	4.4	1.2	0.5	6.7
7	76	L5区茶褐色	半欠？	2.5	0.8	0.4	1.7
8	78	L5区黒色土	半欠？	3.4	1.0	0.3	3.5
9	83	Ｌ６区	一部欠損	2.6	0.7	0.2	1.4
10	82	L5区黒色土	半欠？	3.3	0.9	0.3	2.9
11	84	L6区黒色土	一部欠損	3.1	1.0	0.3	3.4
12	86	L6区黒色土	一部欠損	3.0	1.1	0.2	3.8
13	92	M5区黒色土	一部欠損	3.2	1.0	0.3	3.6
14	91	L7区黒色土	半欠？	2.3	0.9	0.3	2.2
15	93	M6区黒色土	半欠？	2.2	0.9	0.4	1.8
16	94	M7区黒色土	一部欠損	3.2	1.0	0.4	2.6
17	111	遺構検出面	半欠？	2.7	1.1	0.3	3.5
18	110	遺構検出面	半欠？	2.3	0.8	0.3	1.3
19	95	B15区暗茶褐色	一部欠損	3.3	0.8	0.2	1.4
20	75	L3区黒色土	一部欠損	3.6	1.4	0.3	7.5
21	81	L5区黒色土	ほぼ完形	4.0	0.9	0.3	4.0
22	1006	B17区暗茶褐色	ほぼ完形	3.5	0.8	0.3	3.4
23	98	L40区黒色土	半欠？	2.9	1.3	0.4	5.4
24	99	L40区黒色土	一部欠損	3.5	1.1	0.4	2.8
25	90	L7区茶褐色	一部欠損	4.2	1.1	0.2	4.3
26	89	L6区黒色土	半欠？	3.1	1.0	0.4	3.6
27	102	E15区攪乱	ほぼ完形	3.7	1.2	0.2	3.5
28	103	E17区攪乱	一部欠損	3.9	1.0	0.3	3.5
29	106	p324	一部欠損	3.7	1.2	0.4	4.3
30	71	K7区黒色土	ほぼ完形	5.1	0.9	0.4	3.5
31	101	I2区攪乱	完形	3.7	1.0	0.2	3.0
32	104	F20区攪乱	ほぼ完形	4.5	1.5	0.3	8.7
33	107	p347	完形	4.3	1.0	0.3	3.6
34	105	p316	ほぼ完形	3.7	1.2	0.3	3.9
35	77	L5区黒色土	完形	3.6	1.6	0.4	10.3
36	108	遺構検出面	完形	4.6	1.1	0.3	5.5
37	114	遺構検出面	完形	3.5	1.3	0.2	4.7
38	1111	p226	完形	3.6	1.2	0.3	3.5
39	112	Ｌ６区	ほぼ完形	3.9	1.1	0.3	3.4
40	96	L20区黒色土	完形	2.7	1.2	0.3	3.7
41	88	L6区黒色土	完形	4.9	0.9	0.4	3.5
42	80	L5区黒色土	完形	5.0	1.1	0.3	5.5
43	100	L40区黒色土	完形	5.0	1.0	0.3	4.5
44	79	L5区黒色土	一部欠損	4.7	1.1	0.3	5.5
45	113	表採	完形	5.1	1.0	0.2	3.7
46	85	L6区黒色土	完形	5.4	1.1	0.3	9.3
47	97	I22区	完形	5.5	1.6	0.3	12.1
48	109	遺構検出面	完形	5.8	1.4	0.3	8.4
49	87	L6区黒色土	完形	5.9	1.2	0.3	8.5
50	67	５号土壙北外	完形	7.4	1.6	0.4	15.3



第166図　包含層等出土金属製品１（1/2）

鉄製品（図版67、第166図）

鉄　鎌（１）　６号墳南側崖下の茶褐色土層から出土した。破片資料で、身部は幅 3.2cm、厚さ0.1cm強で背はカーブするらしい。端部は袋状に折り曲げられ0.9cmの厚みになる。鎌あるいは鍬先であろう。

穿孔具（２）　１号土坑の北東側の暗茶褐色土層から出土した。長さ5.0cm、幅1.5cm、厚さ1.0cmの大きさで、頭部は鑿に似て平坦だが、先端は丸棒状に変化して尖る。

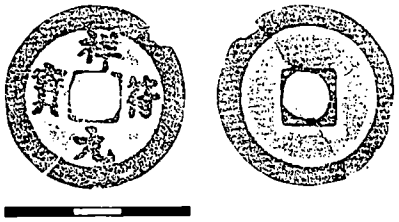
楔状製品（３）　Ｌ４区の黒色土層から出土した。先端を欠損するが、長さ5.4cm、頭部幅1.0cm、先端側の幅0.7cm、厚さ0.4cm。先端は角釘のように尖る。

鉄　釘（４・10～13）　４は長さ2.4cmで、0.3cm角の、細く短い釘で頭部は平らに曲げられる。10は頭部を欠いた0.5cm角の棒状で、先端が曲がる。11は残存長4.1cm、0.5cm角の棒状で、頭部を欠損する。12は0.4cm角で、残存長4.9cm、13は0.4cm角で、曲がった先端部を欠くが、残存長3.5cm。

用途不明鉄製品（５～９・14・15）　５・８・９・14は太さ0.5～0.6cm角の棒状の破片で、両端を欠くため、本来の用途は不明。６は角棒状で端部が鈍く尖り、７は他の例よりも細身で、残存長7.2cm、太さ0.3～0.5cm角で、先端部は尖る。Ｌ６区の黒色土層から出土した。15は２号住居跡と３号墳周溝の間の攪乱部分から出土した扁平な板状で、やや薄くなる先端部が僅かに曲がる。

銅製品（図版67、第166・167図）

煙　管（16）　調査区東南隅部の包含層上部から出土した吸い口。長さ3.9cm、外径0.6～0.9cmの大きさで、吸口側は窄まり、端部が僅かに肥厚する。銅板を丸めて接合されたらしく、継ぎ目がヒビになっている。先端側内部に竹らしい植物質が銹着し、内径は0.6cmを測る。



第167図　包含層等出土金属製品２（1/1）

用途不明銅製品（17）　一方の端部が破損して本来の形状は不明。２号住居跡南西隅部の攪乱部分から出土した。残存長6.5cm、幅0.6～1.1cm、厚さ0.5～0.7cmの大きさで、端部側に細く、欠損側に太い形の筒状だが、片側の側縁に僅かな突起になる接合部がみられる。折り曲げられながら欠損したらしく歪むが、両面ともに研磨擦痕が残る。

銅　銭（第167図）　５号墳周溝部分の上層から出土した「祥符元寶」で、外径24.2mm、厚み 1.2mmの大きさ。文字は楷書体で、初鋳年代1008年の北宋銭である。

縄文時代の遺物

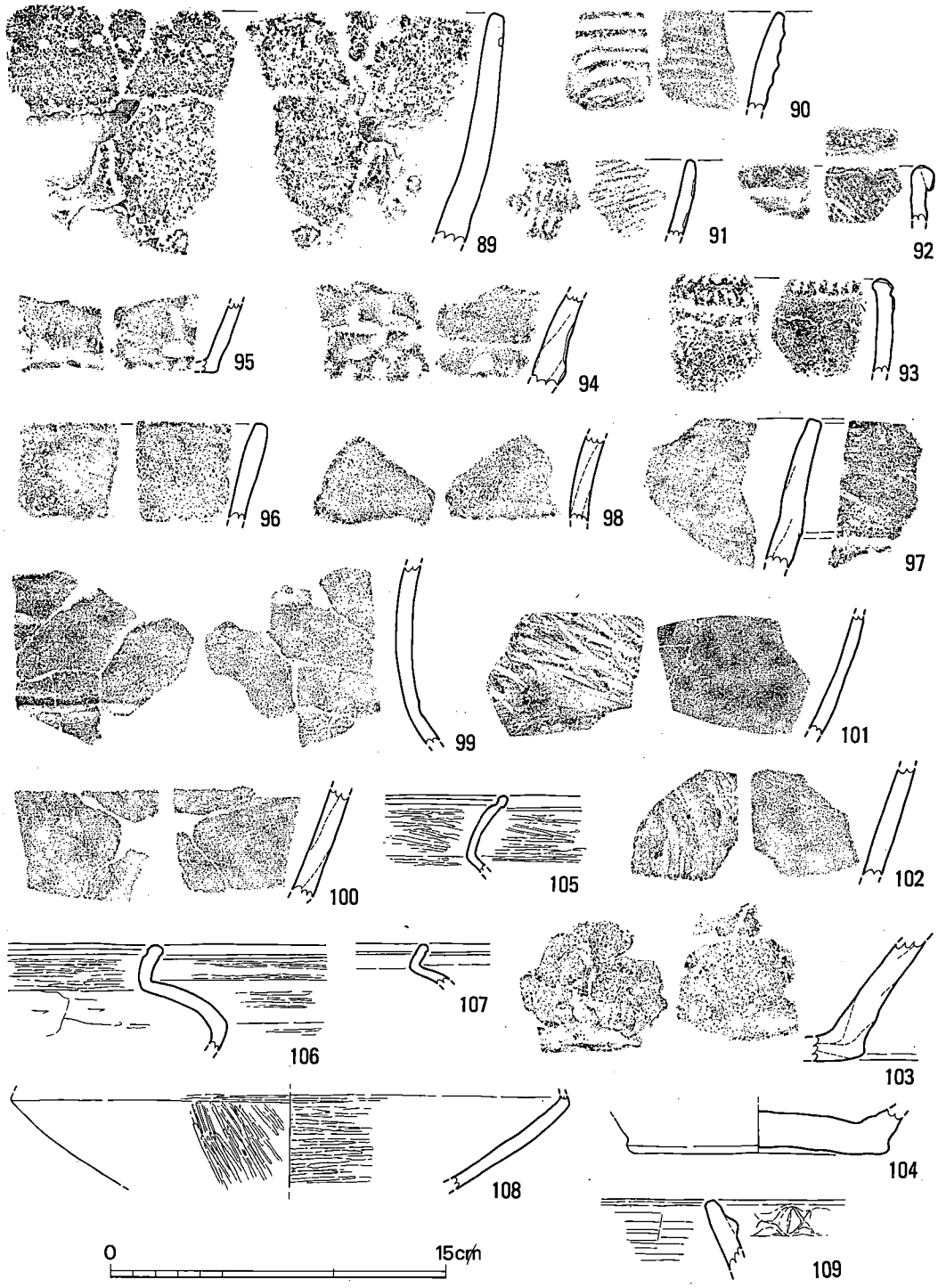
縄文土器（図版68、第168図）

第155図２は、埋甕使用？土器であるが、出土位置の記録が散逸して不明。稜をもって屈曲する胴部から頸部が括れ、口縁部が緩やかに外反して開く。口縁端部は上面が平坦に整えられ、鰭状？突起部分は幅が広く、内面側に凹みを有して内傾し、稜をもつ外面側は突帯にも似る。復原口径41.0cm、胴最大径37.0cmの大きさ。内外面は板ナデされるが、外面は凹凸のあるやや雑な調整である。胎土に砂礫・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。晩期中頃の甕である。

89は口縁部下に刺突列点のある無文深鉢で、器壁は厚い。早期の無文土器であろう。Ｂ 8区の茶褐色土層から出土した。

90は２号建物北西端の柱穴から出土した、外面にみみず腫れ状の隆線文のみられる口縁部破片。内面は貝殻条痕の後にナデ調整される。前期の轟式土器である。91は１号溝部分から出土した、外面に爪形の刺突列点のみられる口縁部破片。内面は貝殻条痕で調整される。

92はＨ10区の暗茶褐色土層から出土した、端部を折り曲げて肥厚させる口縁部破片。内面に縄文が施文される。93は内彎する口縁部破片で、３号土坑の北側で出土した。外面の端部と口唇上面が刻み目になる。92・93は中期の船元式に含まれる。94は３号住居跡部分から出土した、外面に凹線文様のみられる破片。胎土に砂粒・雲母を含むが、滑石は含まれない。95は胎土に滑石粉末を多く含む底部破片で、内外面ともにナデ調整されるが凹凸がある。２号通路状遺構部分から出土した。96は表採資料の、胎土に滑石粉末を含む口縁部破片で、文様はみられない。



第168図　縄文土器実測図（1/3）

94から96は中期阿高式土器の影響を受けた土器であろう。

97は2号建物跡の柱穴から出土した。僅かに外反する口縁部破片で、口縁部下に段をもつ。

98～ 100は内外面を板ナデ若しくはヘラ研磨する深鉢の破片である。いずれもH10区の暗茶褐色土層から出土した。緩やかに反る頸部を有し、99では肩部に段状の浅い凹線が巡る。

101～104は外面に条痕を有し、内面が丁寧なナデ若しくはヘラ研磨される鉢・深鉢の破片で、101～103はH10区の暗茶褐色土層、 104は北西部の包含層から出土した。98～ 104は後期後半から晩期に含まれる例であろう。

105～108は精製研磨される浅鉢で、南西部の包含層から出土した。105～107の口縁部は内外面に沈線が巡り、体部が膨らむ器形で 106では胴部が算盤玉の様に膨らみ、稜を有する。108では口縁部を欠くが、屈折して口縁部が外反する器形の可能性がある。105～108は晩期後半にかかる時期の資料である。

109は4号住居跡部分から出土した。口縁部外面に粗い刻み目が付され、内面は板ナデ調整される深鉢で、晩期末の夜臼式に含まれる。

石　器（図版68、第169～171図）

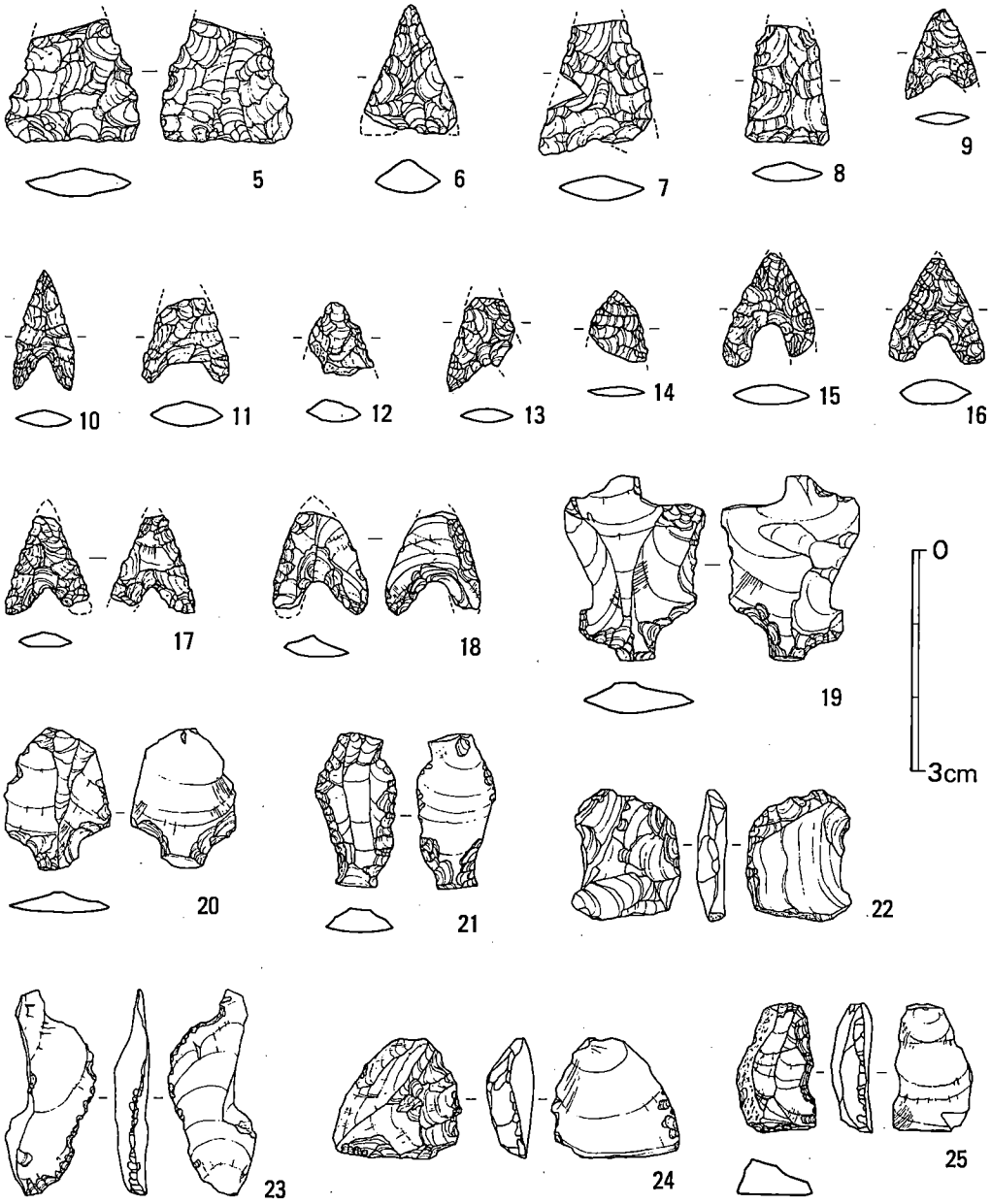
打製石鏃（5～18）　5はやや大形の石鏃で平基のタイプで、全面に調整剥離が及ぶが、先端部を欠く。6・7は基部の抉りは僅かで平基に近いが、全面に調整剥離が及ぶ石鏃。ともに黒曜石製だが、7は透明度の低い黒曜石である。8は平基の安山岩製石鏃で、全面に調整剥離が及ぶ。10～16は全面に調整剥離が及ぶ凹基の石鏃で、9は安山岩、10～12は姫島産黒曜石、13～16は伊万里湾産らしい黒曜石を用いている。17・18は片面に主要剥離面を残す凹基の石鏃で、14は剥片鏃である。ともに伊万里湾産黒曜石製の剥片を素材にする。

つまみ形石器（19・20）　伊万里湾産黒曜石製の縦長剥片の両側縁に抉りを入れて、折断したもので、剥片鏃を製作する際の残余と考えられる。15は片側縁から主要剥離面に及ぶ剥離痕は後世の打撃によるものである。

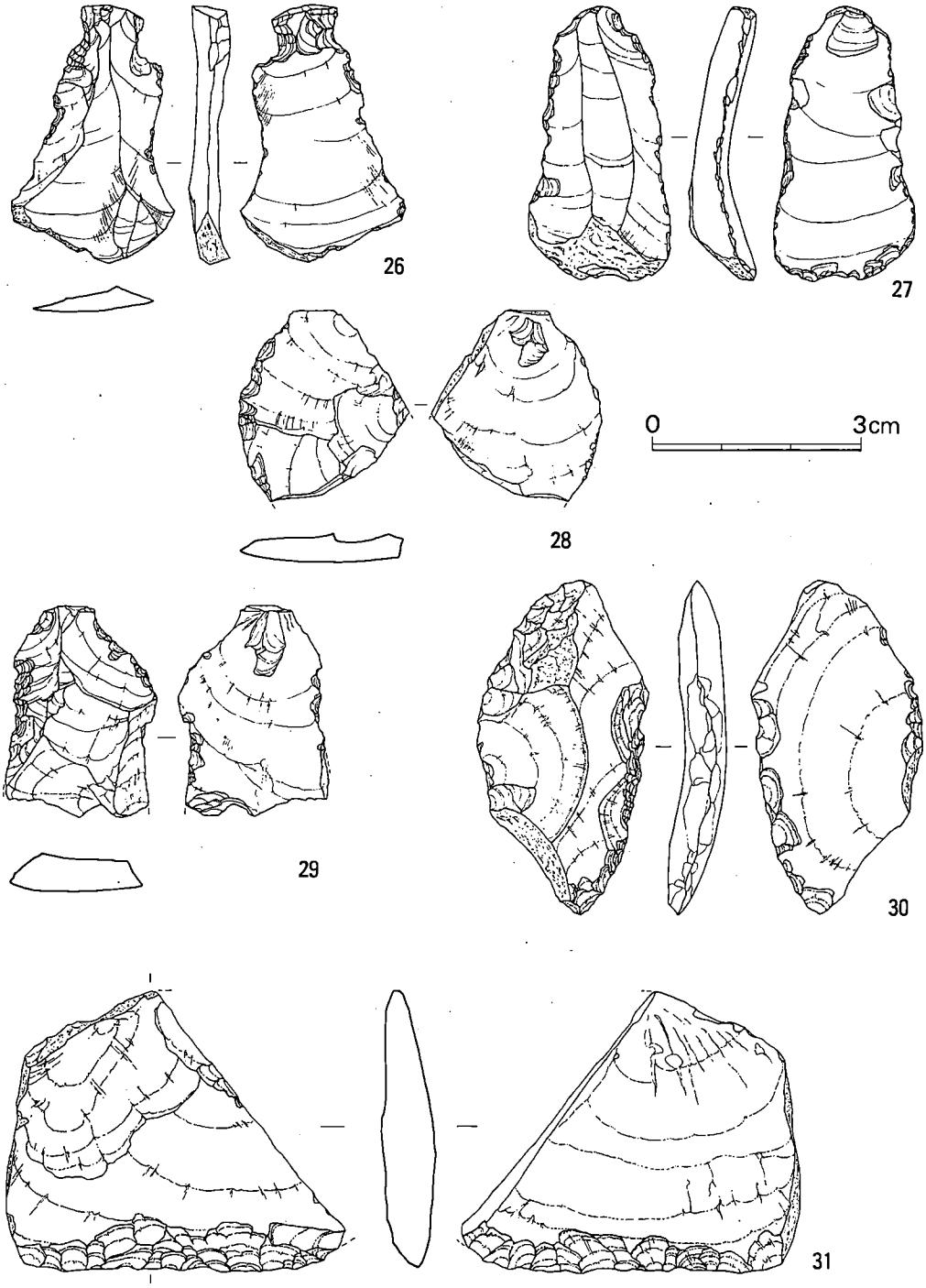
削器・掻器類（21～31）　21はつまみ形石器を利用し、主要剥離面側から側縁に押圧剥離を加えた掻器。22・24・25は不定形剥片の側縁に押圧剥離を加えた掻器で、24・25は主要剥離面側から調整している。23・28は縦長剥片に似た不定形剥片の側縁を利用する削器。26・27・29は縦長剥片の側縁を利用した削器で、26の基部には両側からの抉りが加わる。30・31は翼状剥片のような横剥ぎの剥片の先端部を調整剥離する石匕である。21～29は伊万里湾産黒曜石製で、30・31は安山岩製。

磨製石斧（32～36）　32から34は乳棒状に近い磨製石斧で、32にみるように扁刃だが両刃に近い。35は鑿状の磨製石斧で幅は狭い。両側縁を平坦にする定角式タイプに近い。36は刃部幅が広めで厚みが薄い、扁平片刃石斧に近いタイプの磨製石斧である。

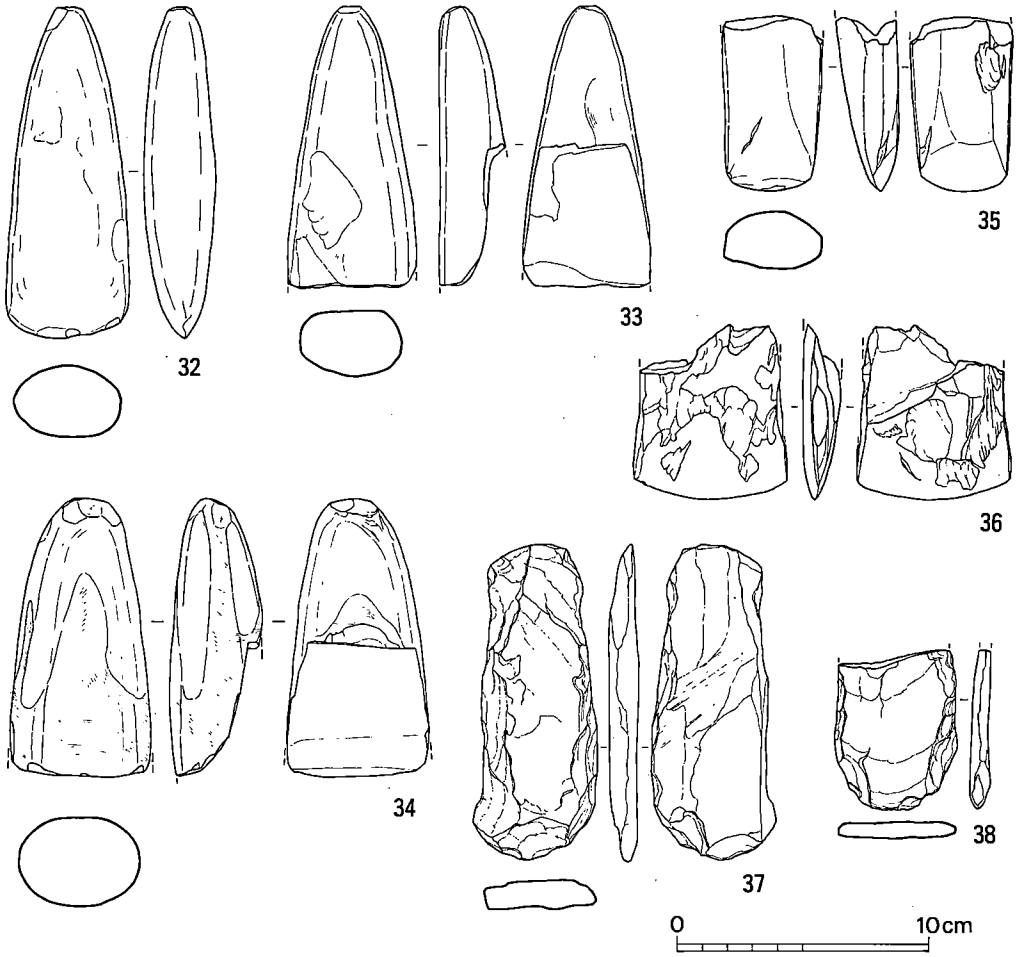
打製石斧（37・38）　短冊形の扁平打製石斧で、刃部は磨耗する。



第169図　縄文時代石器実測図１（1/1）



第170図　縄文時代石器実測図２（1/1）



第171図　縄文時代石器実測図３（1/3）

3　おわりに

志波桑ノ本遺跡では、竪穴住居跡６、掘立柱建物跡３、竪穴４、土坑10、通路状遺構４、溝などの生活遺構と、竪穴系横口式石室や横穴式石室を主体部とする円墳（不明１を含む）９、土壙墓28などの墳墓遺構が発見された。各種の遺構・遺物の性格などについて少し補足し、併せて志波桑ノ本遺跡での変遷についてまとめておきたい。

C[14]年代測定結果について

福岡県教育委員会では、横断道関係遺跡の発掘調査で出土した炭化材などをC[14]年代測定の試料として社団法人日本アイソトープ協会に測定依頼した。その際に志波桑ノ本遺跡出土の炭化材試料も測定されているので、平成元年 3月 7日付けの年測第KN—88016号の年代測定結果報告書のうち関係分を掲載する。

年代測定結果報告書

昭和63年3月30日に受け取りましたC－14試料26個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代	
N—5383	KOF 11—1 №20	180±75yB.P.	(170±70yB.P.)
N—5384	KOF 11—2 №21	1930±75yB.P.	(1870±70yB.P.)

年代は[14]Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取りの誤差から計算されたもので、[14]C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を 2倍に拡げますと確率は約95％となります。なお14C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

依頼時（1988. 3.25）に作成された福岡県教育委員会側の試料リストでは

KOF 11—1 №20 は志波桑ノ本遺跡８号墓　　中世か

KOF 11—2 №21 は志波桑ノ本遺跡６号住居跡覆土　古墳時代？

と記されていて、当該遺跡の８号墓は本報告書での８号土壙墓のことである。

この測定結果によれば、８号土壙墓の年代は西暦1770年±75年で、誤差の確率70％で1695～1845年、95％として1620～1920年ということになる。また６号住居跡は西暦20年±75年で、誤差の確率70％で紀元前55年～紀元後95年、95％として紀元前130年～紀元後170年ということになる。これらの遺構について、以下に考古学側での時期判断と対比させてみることにしよう。

６号住居跡の時期について

住居跡の形態は両側にベット状遺構を伴う長方形プランで、後期にみられるものである。出土土器では、後期前半に含めてもよいような例も含まれるが、後期中頃頃の様相が強く、底部

が僅かながらも凸レンズ状に膨らむことから後半に近いと言わざるを得ない。C^{14} 年代では西暦57年の奴国王が後漢に遣使して「漢委奴国王」印を授かった年よりも遡る年代であり、誤差確率70％でみて下限をとっても通常の北部九州編年で中期末と後期初めの境目に近い年代とされている。従って、住居跡出土の土器と対比させた場合、確率95％の方での最も下限を採用しても、出土土器の最も新しい要素と僅かな開きがあることになろう。

8号土壙墓の時期について

8号土壙墓では、節が明瞭に残る竹や藁らしい炭化物が発見されたが、測定試料は竹であろうか。副葬品はなく、土器では土師質火鉢片が出土したのみで、時期を明確にする材料に乏しい。土師質火鉢は14世紀頃からみられるが、15世紀頃に盛行する。従って15世紀以降でも不思議ではないであろう。しかし、付近の土壙墓群では、7号土壙墓でまとまった遺物出土があり、13世紀頃に比定できる。また13号土壙墓では14世紀頃の可能性がある遺物が出土している。このほかには8号土壙墓と同様に火鉢片などが出土している例などがあり、14世紀後半以降15世紀代頃に想定しえる。土壙墓出土遺物のなかで最も新しい遺物は、19号土壙墓の攪乱穴から出土した染付碗破片である。

19号土壙墓は土壙墓群のなかで少し距離を置いて最も北東方に一している。地積図によれば、19号土壙墓の約10m北側に墓地として36m²の区画があり、土壙墓の5m程北側まで改葬によるとみられる攪乱坑が広がっていることから、最近まで墓地として認識されていた部分に近く、中世土壙墓のなかで時期的に下降していたかも知れないが、墓地に近いことに起因する攪乱穴に16世紀後半以降の染付碗片が混入したのであろう。

8号土壙墓は土壙墓群のなかで西端部に位置していて、19号と同様に群のなかで時期的に下降する可能性は否定しえないが、他の墓と極端な時期の差はないものとみたい。墓としての認識が薄れて開墾された後に、地積図に示される墓の場所が墓地として使用されるようになったと考えられる。8号土壙墓付近に18世紀代の遺物がみられないことから、それほど時期的に下降せず、確率95％での最も遡る時期である1620年でも新しい年代に測定されているような印象が残る。

古墳について

9基の古墳では上部を削平されて主体部を残さない例も多いが、古墳相互に重複関係はなく、それぞれがかなりの期間に亙って、墳墓として認識されてきたことを物語っている。

主体部を失う2～4号墳では周溝出土の僅かな土器類で時期を判断せざるを得ないが、2・3号墳ではいわゆる布留式段階の土師器が出土していて、4世紀後半～4世紀末頃に古墳の時期を求められるが、周溝の高さよりも高い位置に主体部を構築していたらしいことからも時期

的に古いことが分かり、中央部に攪乱もみられないことから粘土槨や木棺を主体部にしていた可能性が高い。4号墳では5世紀後半頃の須恵器甕などが出土していることから5世紀中頃までに構築された古墳であろう。主体部は攪乱溝もあって残らないが、直径の最も大きな古墳で、最盛期といった感じを受ける。

1・5号墳は竪穴系横口式石室を主体部にする古墳で、5世紀中頃～後半の土器を伴う。また調査区東部の4号竪穴を中心に円筒・形象埴輪片が出土している。4号竪穴の北側一帯は削平の顕著な部分であることから、この辺りに埴輪を据えた古墳が存在していたことも推察される。1～5号墳や4号竪穴付近は丘陵尾根線部分に占地し、南側斜面には6世紀～7世紀の横穴式石室を主体部にする古墳が構築されていて、さらに斜面を少し下った位置に7世紀末ないし8世紀初頃の22号土壙墓が構築された後には中世までに構築された墳墓は明確でない。(小池)

埴輪について

本遺跡から出土した円筒埴輪は、川西宏幸の編年（川西1978）のIV期に該当する。そして口縁部の特徴や比較的厚手で大振りな形態から浮羽郡吉井町月ノ岡古墳・塚堂古墳出土資料（馬田編1983、児玉編1990）に類似度が高い。塚堂古墳出土資料は形態上バラエティーが多いが、その中で報告者がIIa類とするものに該当する。従って月ノ岡古墳・塚堂古墳の埴輪を製作した工人集団の一部が、この志波桑ノ本遺跡周辺に所在した古墳への埴輪供給にも関与していたとみてよかろう。また時期的にも月ノ岡古墳あるいは塚堂古墳に近いもの、すなわち5世紀前半～中頃とすることができるが、口縁部中段の屈曲部が明瞭な朝顔形埴輪の存在からやや古相の特徴を備えるものとしておきたい。しかし断片的なこれらの資料からでは、より限定された年代を示すのは困難である。　(岸本　圭)

大規模掘立柱建物跡について

志波桑ノ本遺跡で発見された、2間×6間、2間×9間あるいはそれ以上の桁行規模で、一辺 1.0m程の柱穴を有する大規模建物跡については、既にその性格について触れられたものがある。すなわち、同じく志波地区に立地する杷木宮原遺跡、志波岡本遺跡でも同様の大規模建物が発見されていて、朝倉町大迫遺跡でも8世紀中頃以降の火葬墓群の下層で規模にまとまりのある建物跡が発見された。時期については大迫遺跡の火葬墓群の整地層に7世紀後半の土器が含まれていることから建物跡群の時期を7世紀後半にみている。そして志波地区の大規模建物跡群と大迫遺跡の建物跡群を、朝倉橘廣庭宮に関連する施設であるとする意見である（小田1993)。

志波桑ノ本遺跡では、3号掘立柱建物跡の柱穴掘形から6世紀後半ないし末頃らしい須恵器杯蓋片が出土している他には、柱穴掘方内から出土する遺物は縄文土器片などで、時期を明確

にしえる材料に恵まれていない。また周辺にも７世紀後半頃の良好な資料を得ていない状況である。また付随するような遺構もみられない。１・２号建物跡は間に１号墳を挟んで平行の配置にあり、周溝の一部と重複するが墳丘部分を避けていることから、建物構築時には１号墳墳丘が残っていた可能性も高い。志波岡本遺跡では桁行でかなりの高低差があっても柱穴が同様に掘り込まれているので、地形を大きく変更するような土木工事は行っていないと推察され、むしろ建て易い場所を選びながらある程度の企画性をもたせているようにもみえる。また柱穴内の柱痕が太くはないものの殆どが直立に近い方向に残るなどからみて建て替えなどの痕跡もみられない、

大規模建物以外に特に施設がみられない、遺物も皆無に近いことは、時期的に短期間であったことを裏付ける材料でもあり、斉明天皇崩御と関連つければ、朝倉橘廣庭宮関連施設とすることにやぶさかではない。さらに、志波の地を選定した際に、狭いながらも向かって右側に高山を乗せる山地、左に麻底良山を乗せる山地が伸びた間の平坦地であり、大宰府政庁も同様な地形であるが、百済での益山弥勒寺の地形に似ていることも興味深い。前面にある筑後川の流れも防御上と交通の両面で利便であったことによるとみたい。益山弥勒寺は百済が扶餘に移った後の百済末期に、扶餘からさらに南に位置する全羅北道益山に官寺とは別に建立した寺で、百済が益山に力を注いでいたことが窺われ、北からの脅威に備えていたのかもしれない。そして百済を含めた朝鮮半島からの渡来人によって、志波や大宰府の場所選定を含めた技術的な協力があったことも想定されるのではなかろうか。また、廣庭宮はにわか造りの宮で、斉明天皇は旧暦の五月に廣庭宮へ遷り、七月下旬に崩御しているので、梅雨期に朝倉に居たことになる。朝倉社の木を伐採したために祟りを受けて殿舎が壊されたと『日本書紀』斉明紀に記される内容は、梅雨末期の豪雨による土砂崩壊などを示すのかもしれない。

通路状遺構について

通路状遺構は、夜須町砥上上林遺跡（小池編1993）、朝倉町長島遺跡（小池編1995）などでも発見されている。台地と谷を結ぶ斜面に掘り込まれた遺構で、階段を伴うことが多い。志波桑ノ本遺跡では、掘削の時期は明確でないが、埋没時の堆積土には12世紀後半～13世紀頃の土器類が多量に含まれていた。12世紀～13世紀に生活遺構が存在していた可能性が高いと言えよう。調査された遺構では竪穴や土坑などに該期の遺物をみることができ、１号落ち込み遺構出土の軒先瓦の存在などはそれを物語るが、平地住居などで削平によって残らないのであろうか。１号通路状遺構は４号墳の周溝の脇に掘削されていることから、掘削時には４号墳墳丘が残っていたのかも知れない。このことは１・２号竪穴が２号墳周溝を切ること、土壙墓群が３号墳の周溝を切って構築されること、５号墳や６号墳の攪乱坑などに13世紀頃の遺物が含まれることなどからみて、古墳の認識が薄れて開墾が進められたと推察される。そして、通路状遺構も14

世紀以降15世紀頃には埋没する。

落ち込み遺構について

落ち込み遺構の性格についてはよく分からないが、護岸状の石積みを伴い、内部の堆積土からみて一時的なり水を貯えた池のような施設であろうか。堆積土内の遺物では14世紀以降15世紀代の土器類などが含まれていて、1号通路状遺構よりは遅れて16世紀頃に埋没しているようである。石臼片には5号土坑出土の破片と接合し、埴輪片も含まれていることなどから、開墾されて不要な石や土器片などを投棄したことも考えられる。

ところで、『筑前国続風土記拾遺』によれば、「志波は昔遠市の里と言う。斯波氏の人居たりし故に村の名となれり」とある。斯波氏は14世紀後半に足利尊氏によって筑紫探題に任命された斯波氏経と思われるが、菊池武光軍などの勢力に押されて志波に蟄居状態になっていたとされる。古代末から戦国期には武力を貯える領主が現れるが、一方では食料確保のために開墾も盛んに行われていて、志波桑ノ本遺跡の墳丘を留めていた古墳群も姿を消したのであろう。

1号落ち込み遺構出土の軒平瓦は、前述したように大宰府安楽寺境内(山村編1995)、観世音寺裏（栗原他1993)、観世音寺境内、浦城跡（栗原他1970)、武蔵寺（栗原和彦氏のご教示による）などに類例がある。志波と大宰府との関連を示唆するものであろう。このほかにも特殊な遺物として、曜変のみられる天目茶碗片や李朝陶磁器なども、いわゆる農村には無縁な特殊な器であろう。あるいは斯波氏の居住や杷木荘などの観世音寺所領と関係があるのかもしれない。

3号住居跡出土の土師器器台について

類例を知らないが、ドーナツ形のパンケーキを焼く鍋や、神仙炉・火回鍋に似た器形で中央部に中空の台が付き、大きな椀の中に小さな器を据えたような器台である。火にかけた痕跡はみられない。中央の器台部分には醬のような液体を入れた椀か丸底壺を乗せ、周囲の椀部分には何を盛ったのかは分からないが、別種類の液体状のものか固体状の食物を飾ったのであろう。4世紀後半頃の土器類と共伴していて、土器類のなかには高杯に似た器台や複合口縁の高杯などもみられる。2・3号墳の構築される時期に近接した時期の住居跡で、祭祀的な性格を帯びている可能性もあろう。

特殊な青磁碗について

これも類例を知らない資料である。1号通路状遺構出土の巻頭図版2bにも掲げる龍泉窯系青磁碗96である。外面に鎬蓮弁文様を有する青磁碗は内面が無文であることが多い。この碗では内面に草花の文様が描かれていて、外面に削り出しではないが鎬蓮弁が描かれている。

また青磁碗100も特殊である。口縁部の形状は白磁碗IV類にみられるもので、内面の文様は櫛

状工具による弧が4ヶ所に配されていて櫛状工具による文様は同安窯系にみられる特徴である。高台の特徴は龍泉窯系青磁碗にみられるヘラ削りがみられ、畳付付近まで施釉されることも龍泉窯系青磁碗に近い。これらの特徴を兼ね備えていることから、傍系窯の産による青磁碗で、博多・大宰府周辺で通常みかける舶載陶磁器と別ルートで招来した可能性もあろう。（小池）

小田　和利　1993　朝倉橘広庭宮の再検討ー杷木町志波地区の大規模建物跡群とその歴史的位置づけー　九州歴史資料館研究論集18

川西　宏幸　1978　円筒埴輪総論　考古学雑誌　第64巻第2号　東京

栗原　和彦他　1970　浦城跡　福岡県文化財調査報告書　第45集

栗原　和彦他　1993　大宰府史跡　平成4年度発掘調査概報　九州歴史資料館

小池　史哲編　1993　砥上上林遺跡Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　第103集

小池　史哲編　1995　長島遺跡Ⅰ　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（34）　福岡県教育委員会

児玉　真一編　1990　若宮古墳群Ⅱ　吉井町文化財調査報告書第6集

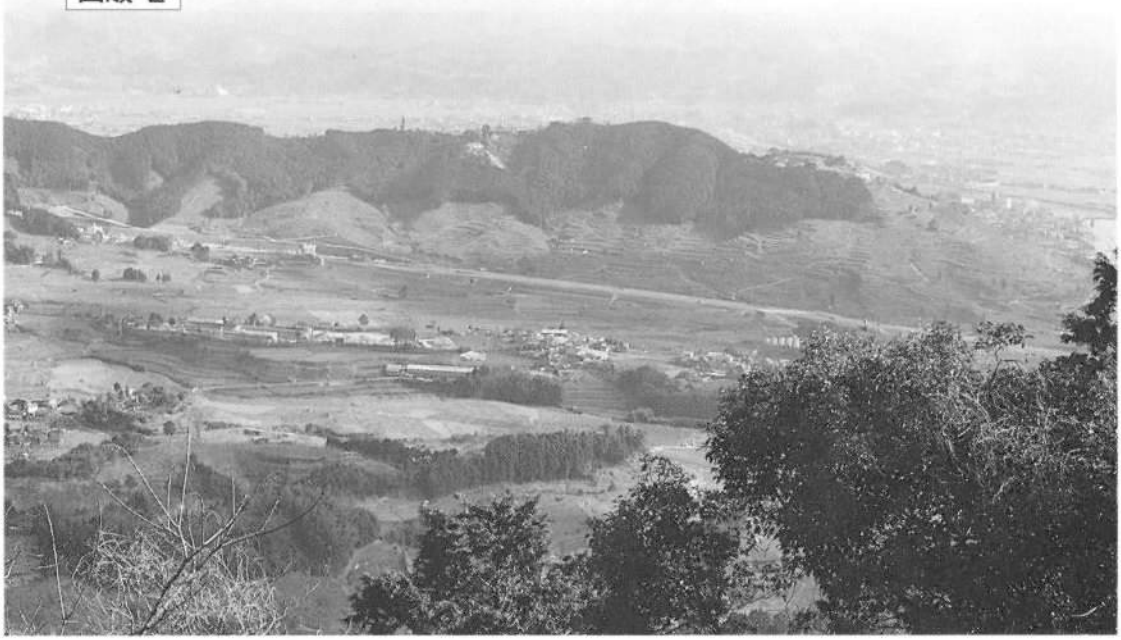
馬田　弘稔編　1983　塚堂遺跡Ⅰ　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集　福岡県教育委員会

山村　信榮編　1995　太宰府天満宮Ⅲ　太宰府市の文化財　第26集　太宰府市教育委員会

図　　版

志波桑ノ本遺跡周辺航空写真（国土地理院提供　KU-85-1X　C18-15）

図版 2



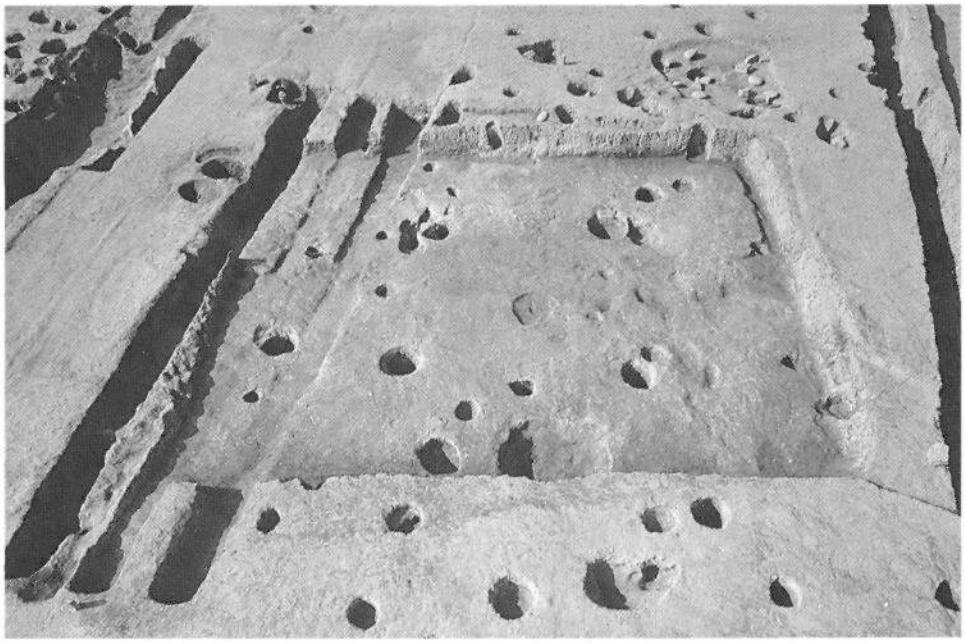
1

2

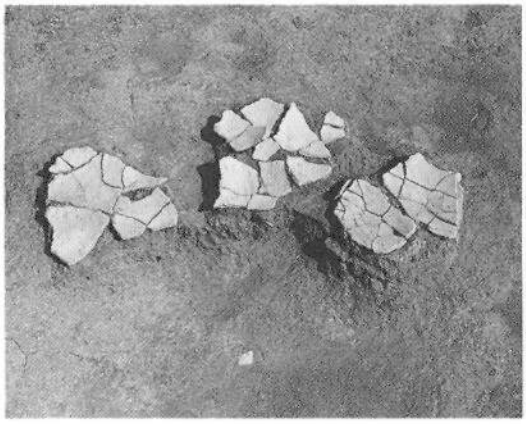
1　志波桑ノ本・岡本遺跡遠景（麻底良山側から）　2　志波桑ノ本遺跡全景空中写真

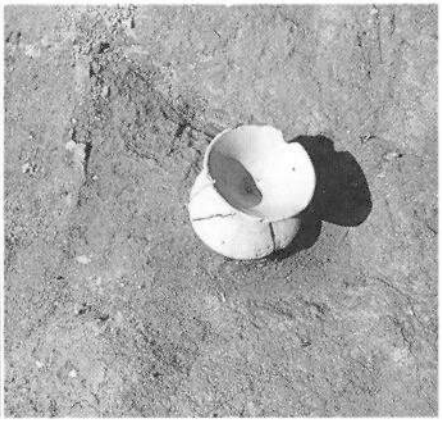
1

2



3



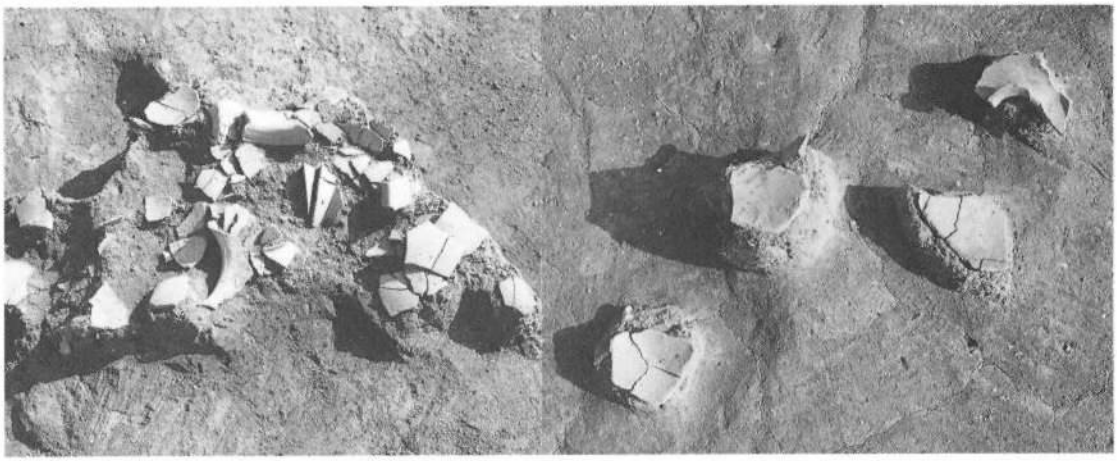


1　1号住居跡（北西から）　2　2号住居跡（南から）

3　2号住居跡遺物出土状況

図版 4

1

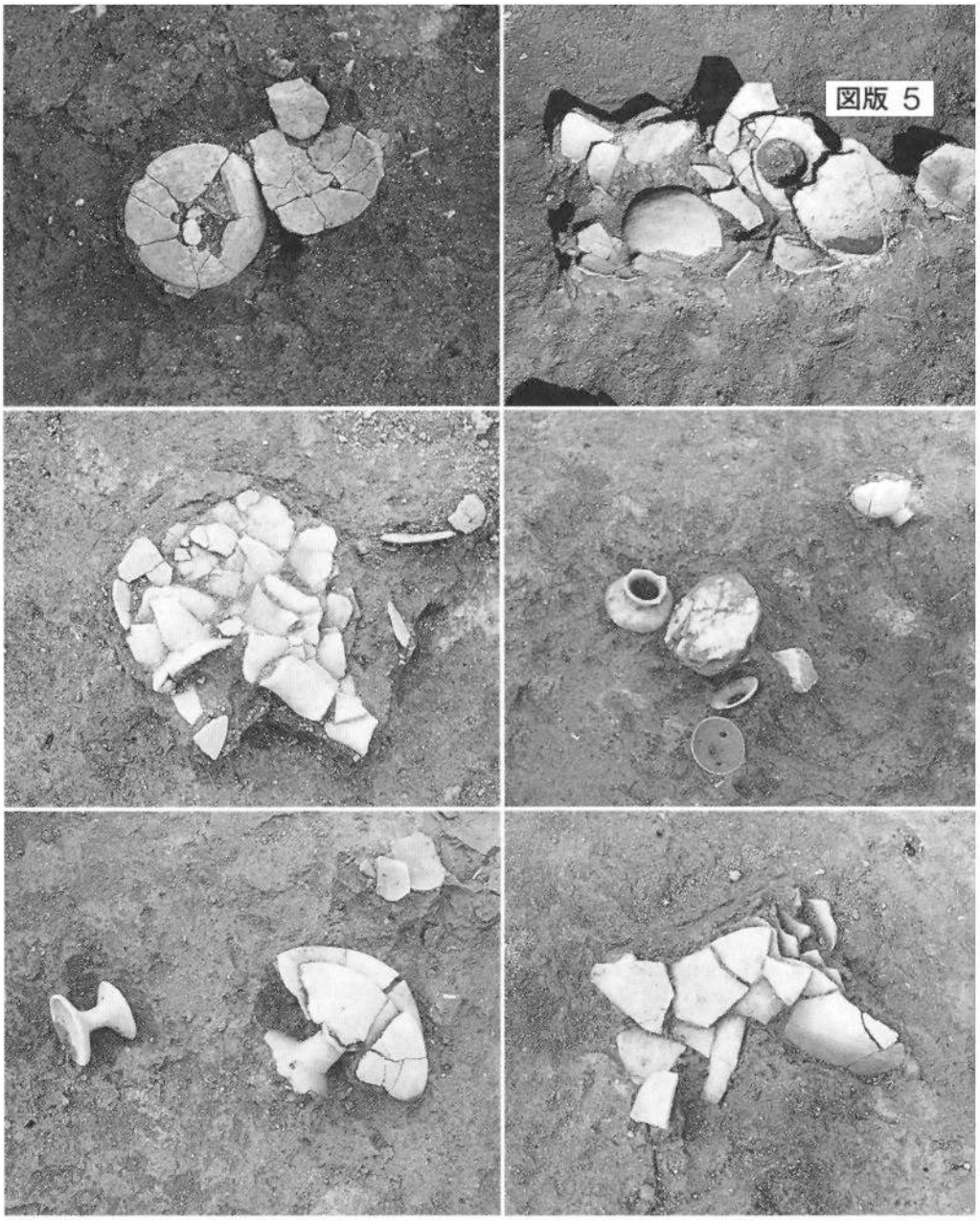


2

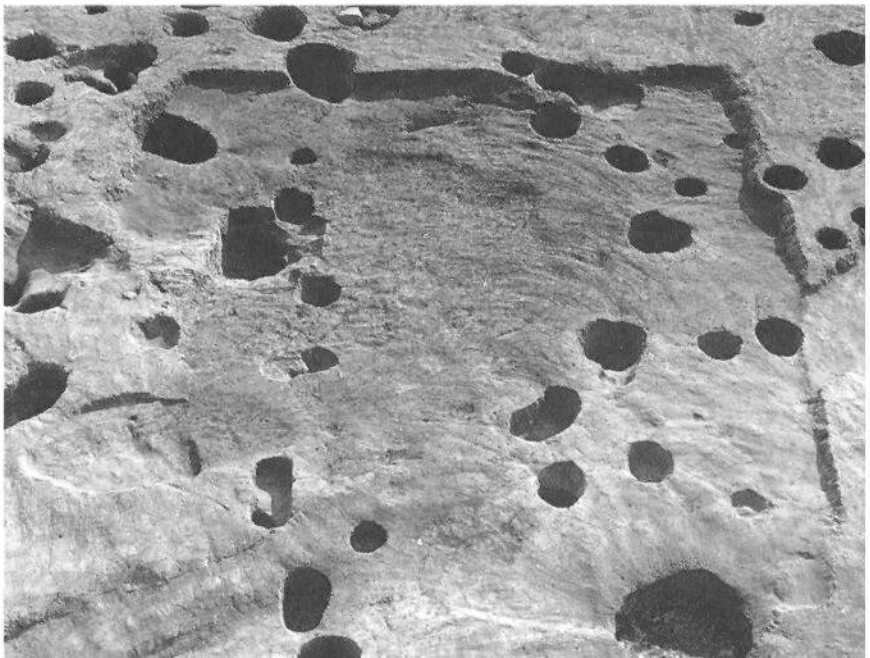
3

1　3号住居跡（南から）　2　3号住居跡遺物出土状況

3　4号住居跡遺物出土状況 1



1

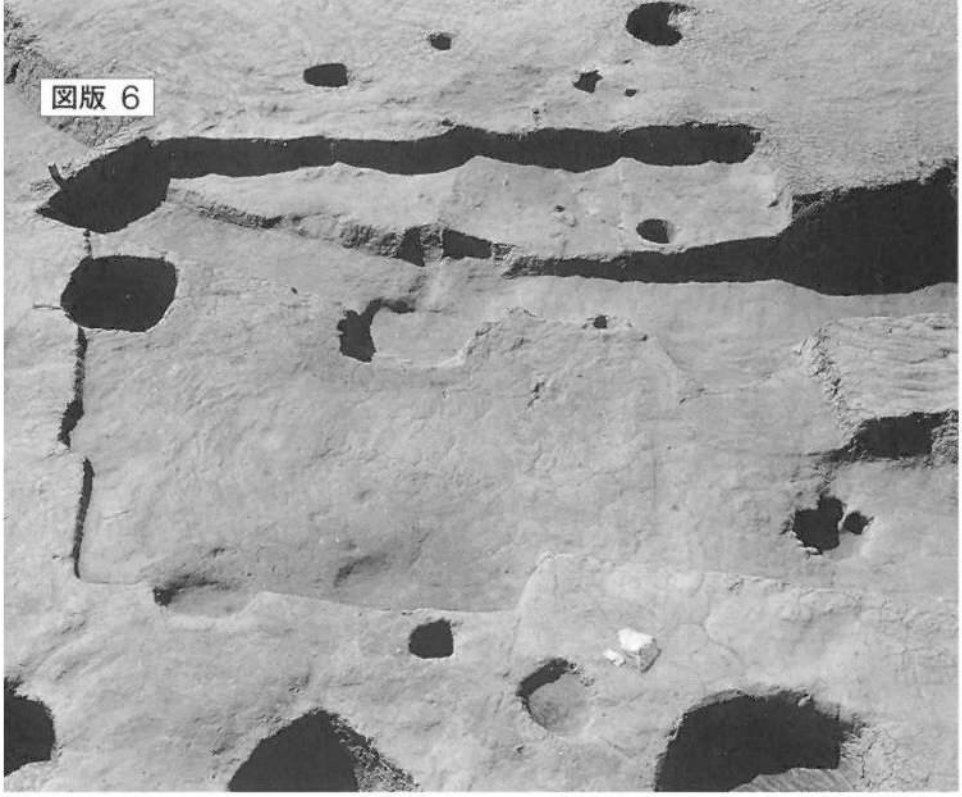


2

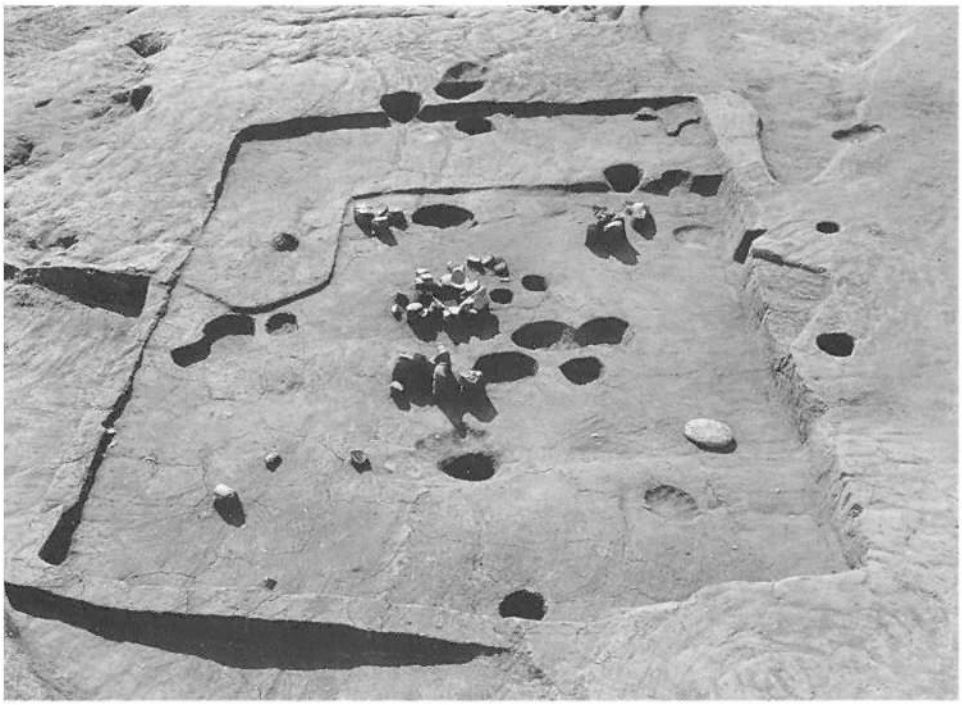
1　4号住居跡遺物出土状況 2

2　完掘後の4号住居跡
（北東から）

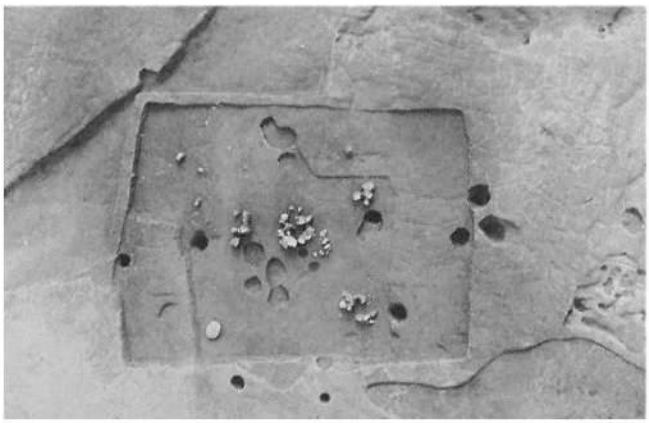
図版 6



1

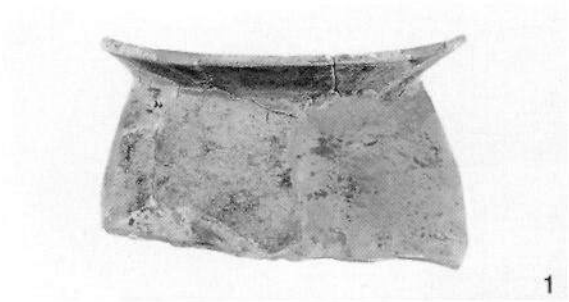


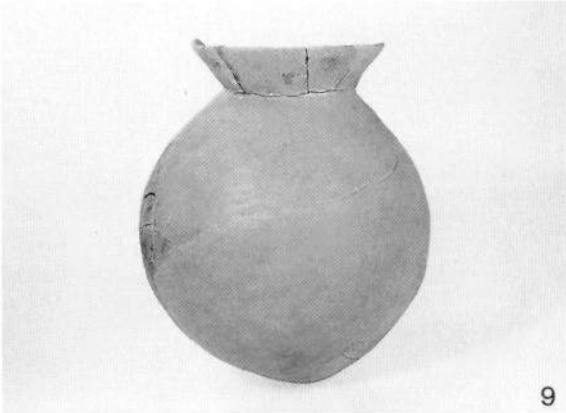
2

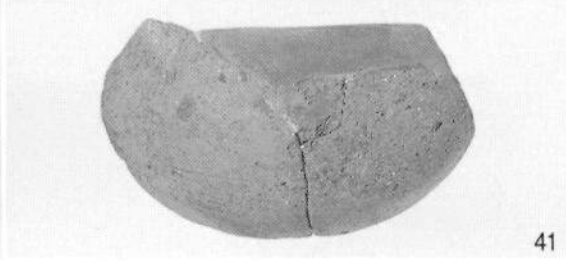


3

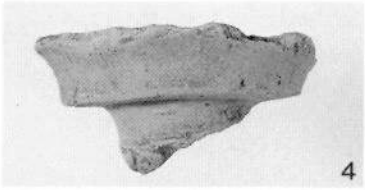
1　5号住居跡（北東から）
2　6号住居跡（北東から）
3　6号住居跡（北西上空から）

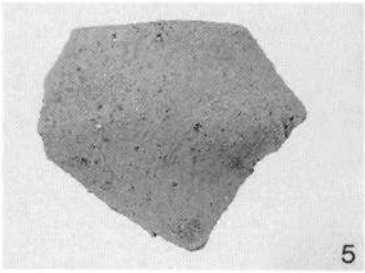


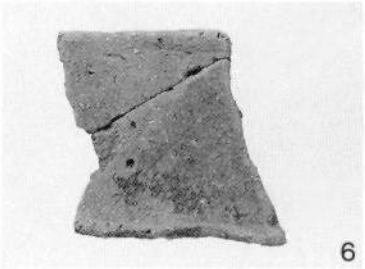


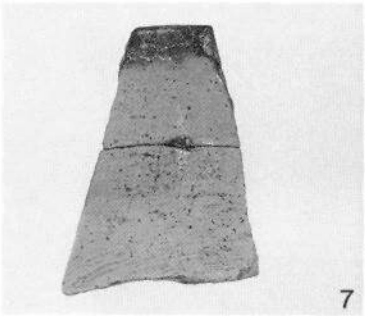


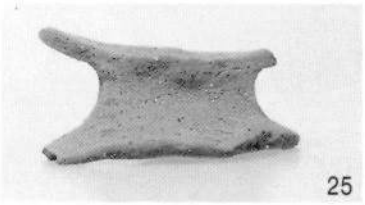
住居跡出土土器 1

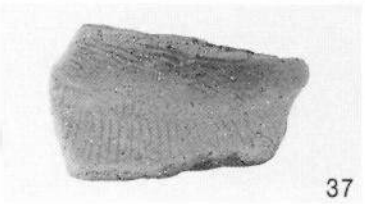


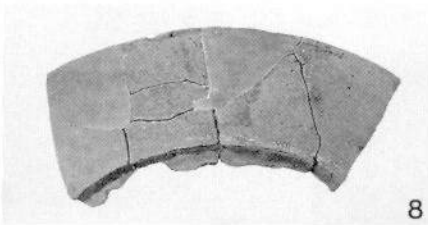


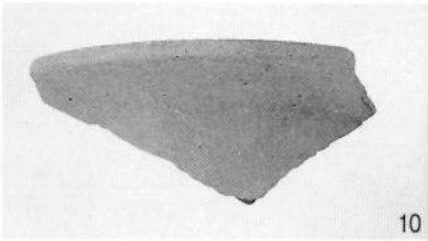


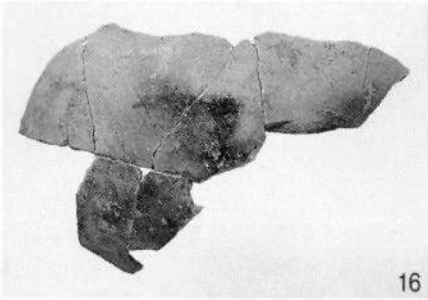


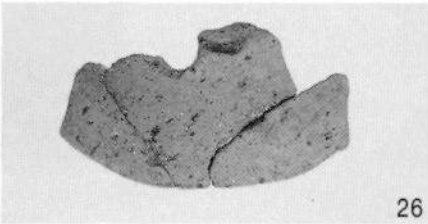


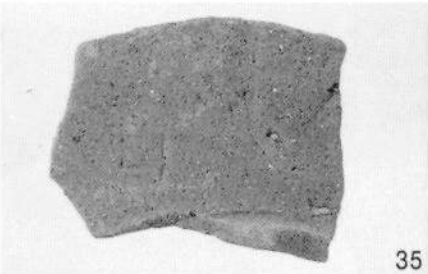


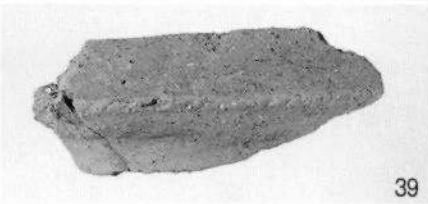


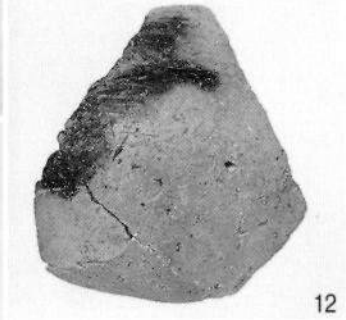


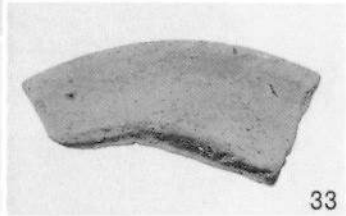


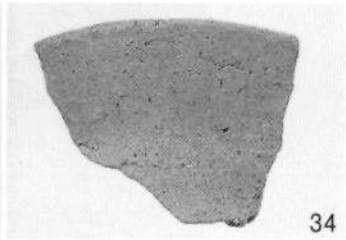








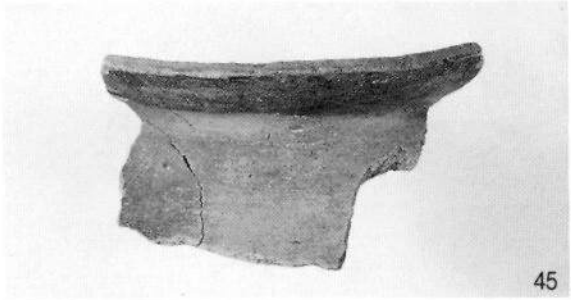




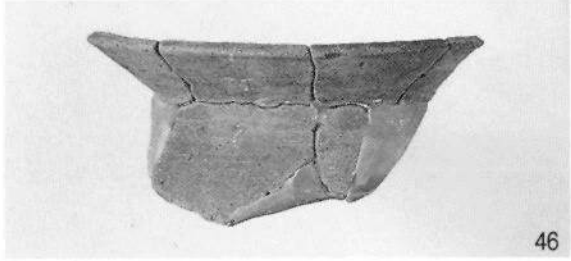
住居跡出土土器 2

40

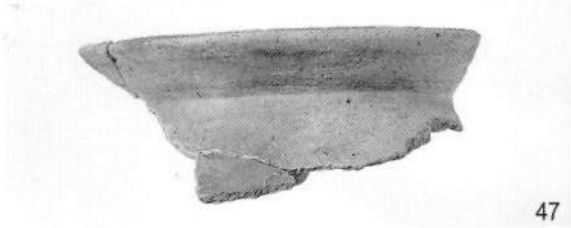
57


45

58


46

64

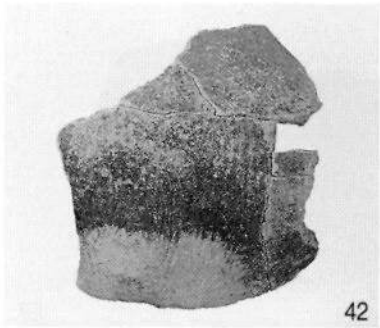

47

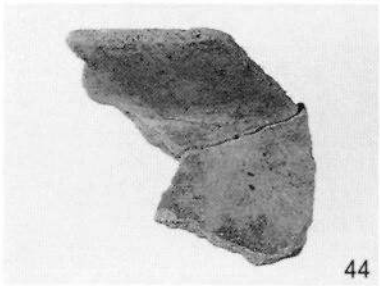
69

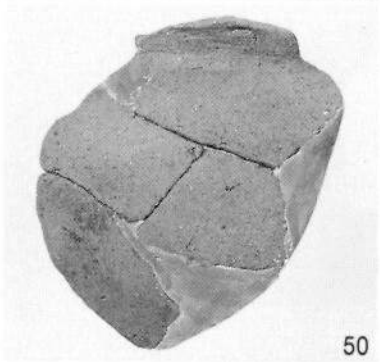
70

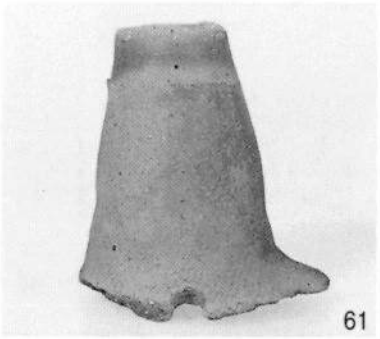
55

住居跡出土土器 3

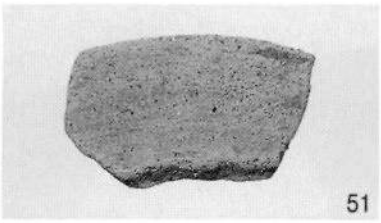

42

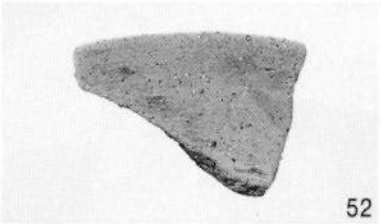

44

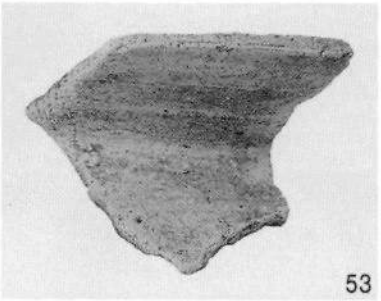

50

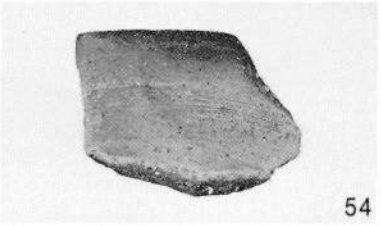

61

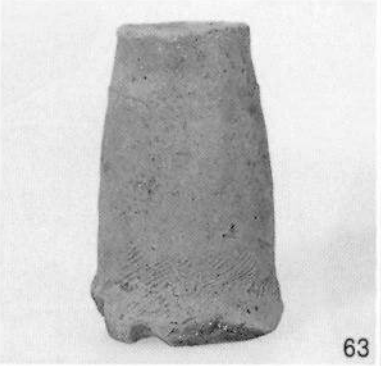
62

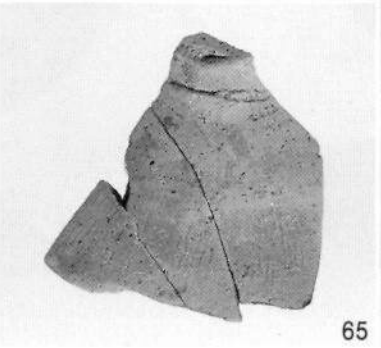

51

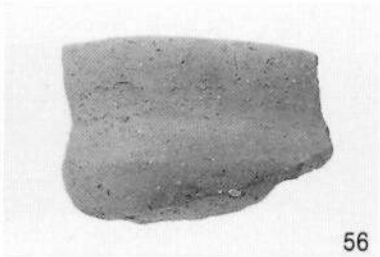

52

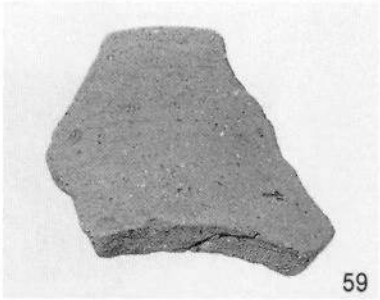

53

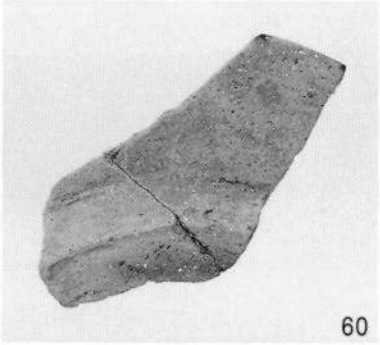

54


63

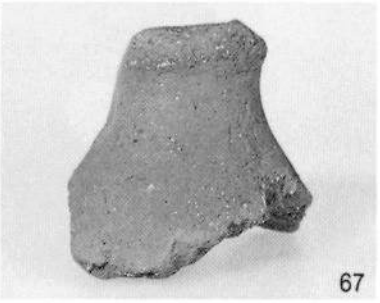

65

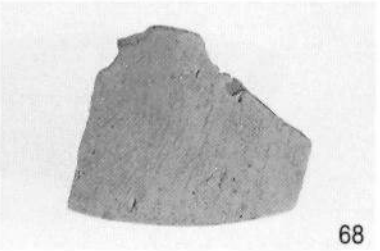

56


59


60

66


67

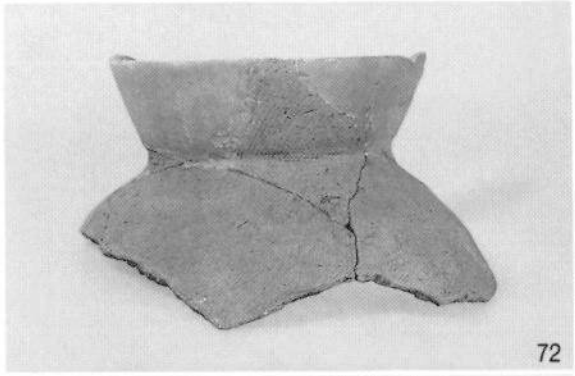

68

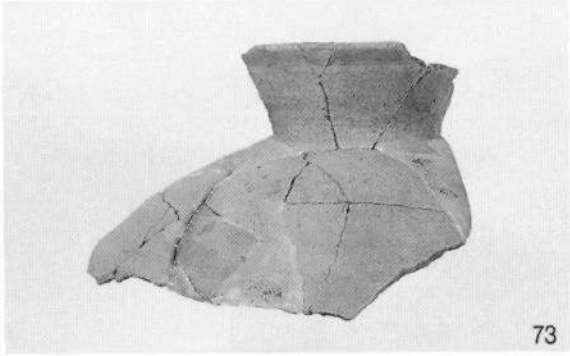
住居跡出土土器 4

71

84

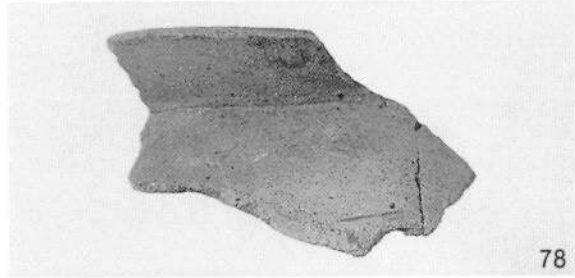
89


72


73

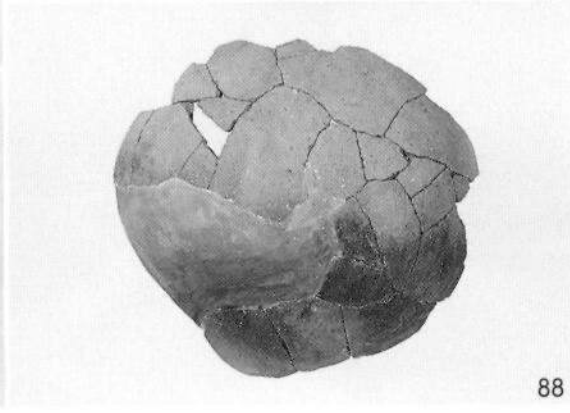
75

77

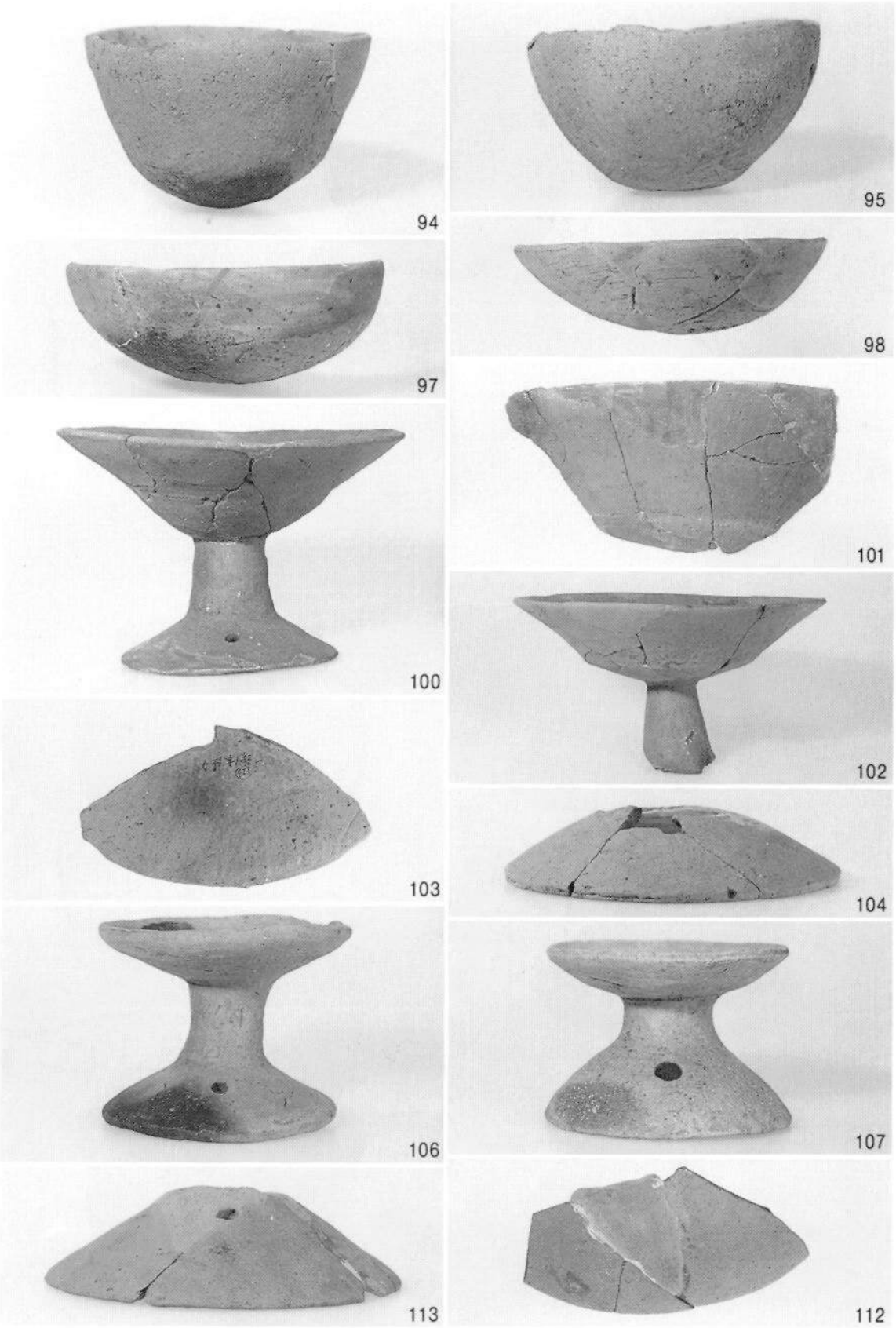

78

87

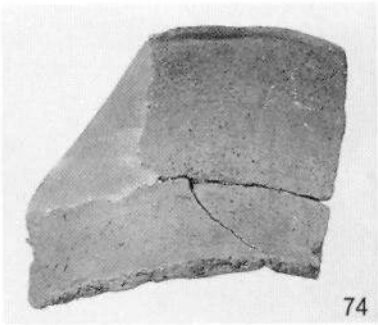
83

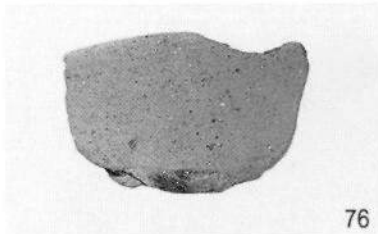

88

住居跡出土土器 5



住居跡出土土器 6

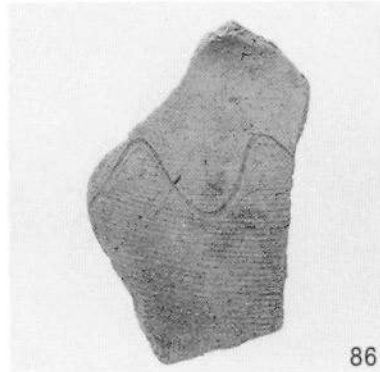

74

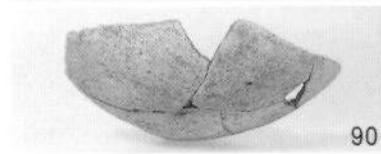

76

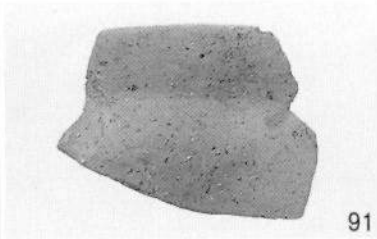
79

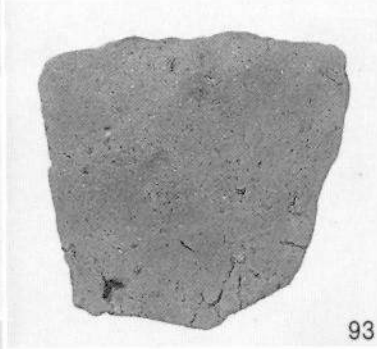
80

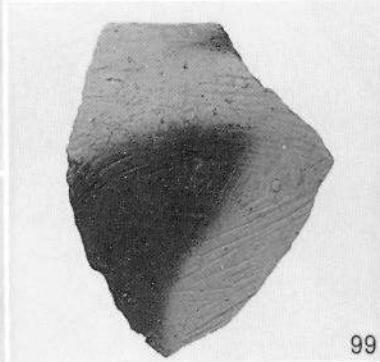
81

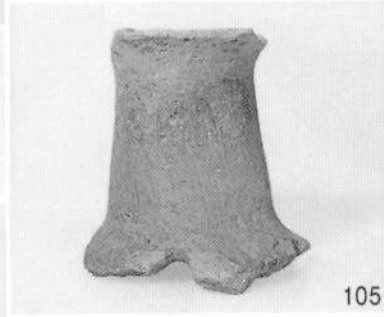

86


90

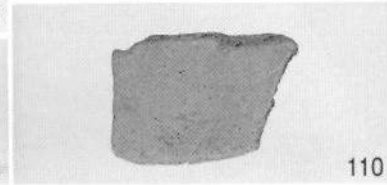

91

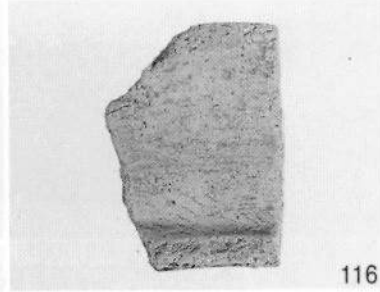

93

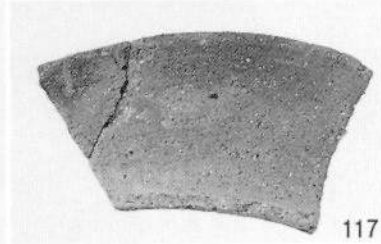

99

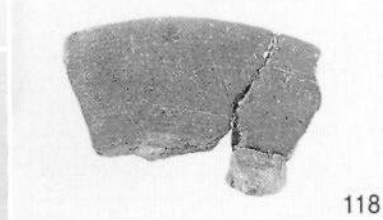

105

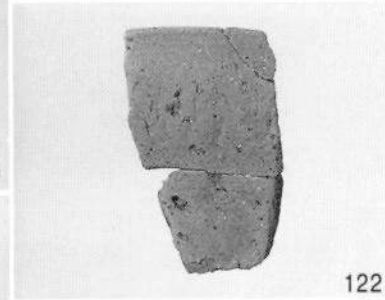
109

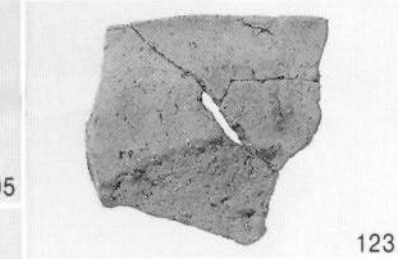

110

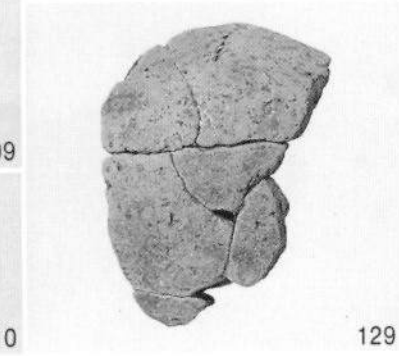

116


117

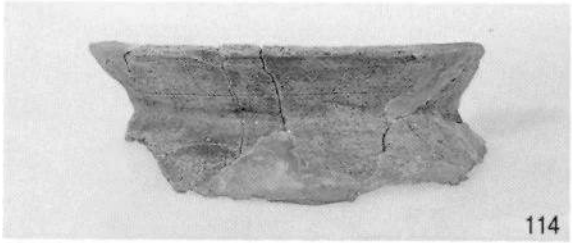

118

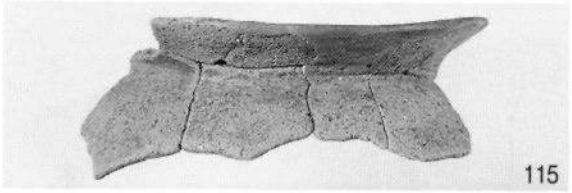

122

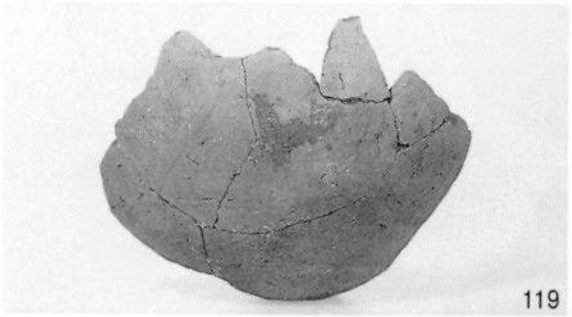

123


129

住居跡出土土器 7

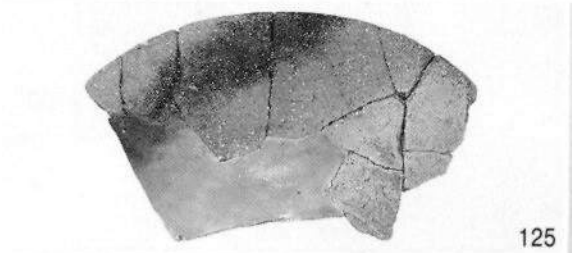

114

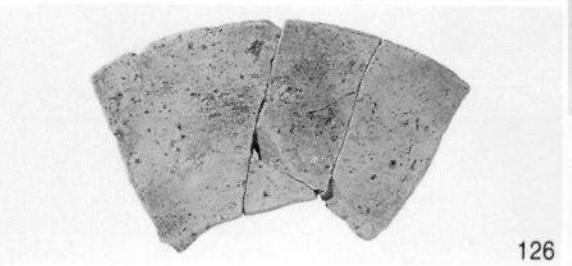

115


119

121

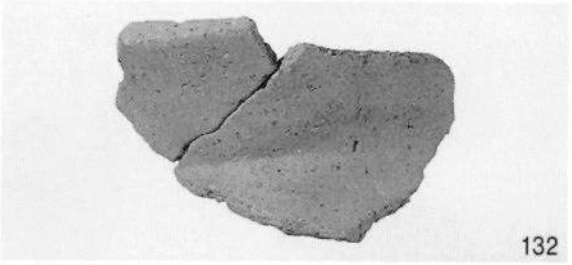
124

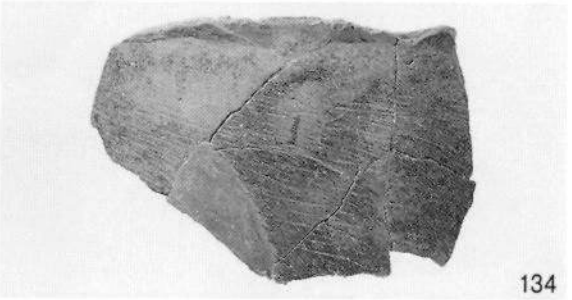

125

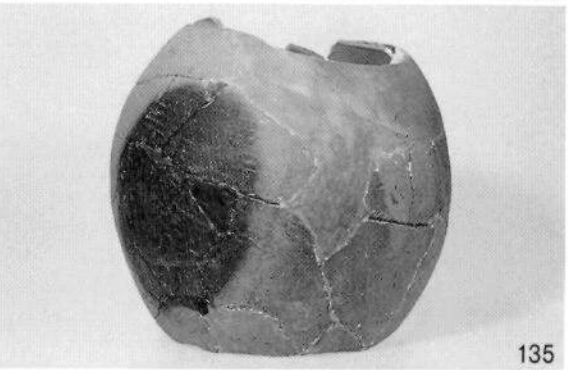

126

127

128

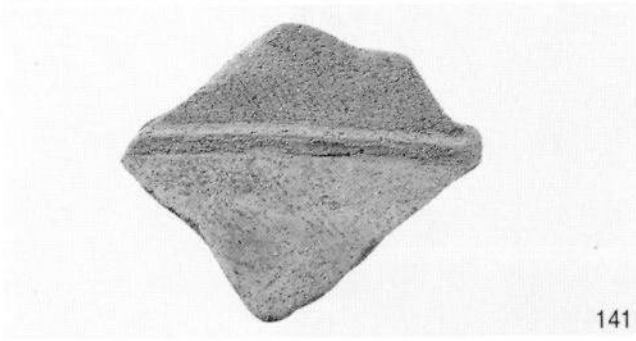

132


134

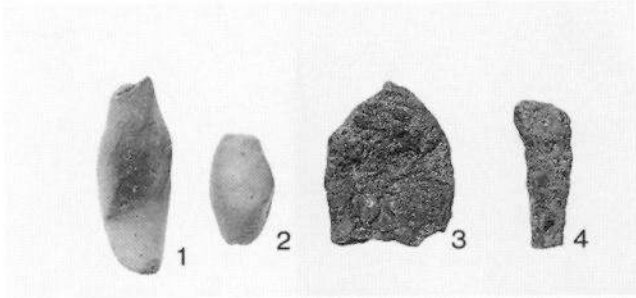

135

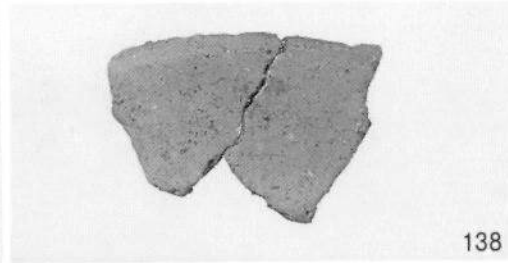
137

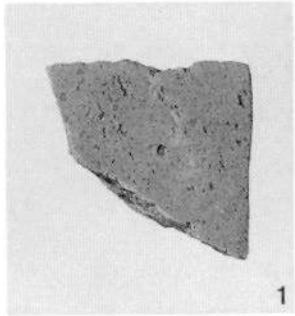
住居跡出土土器 8



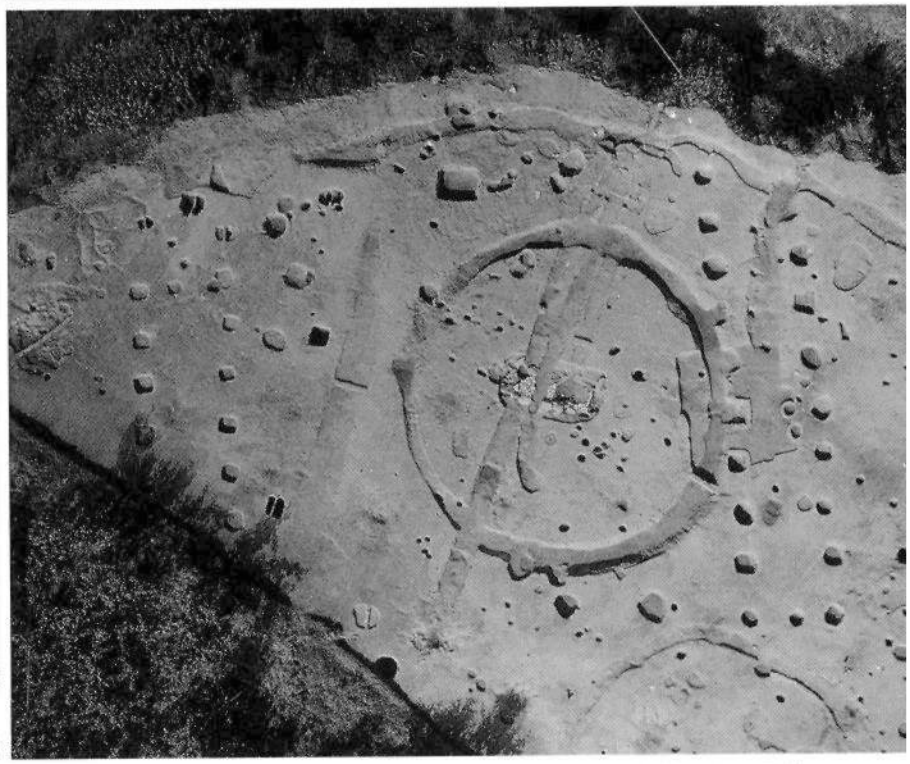
1







2



3

1　住居跡出土土器 9　　2　住居跡出土石器・土製品・鉄製品　　3　1・2 号建物跡と 1 号墳

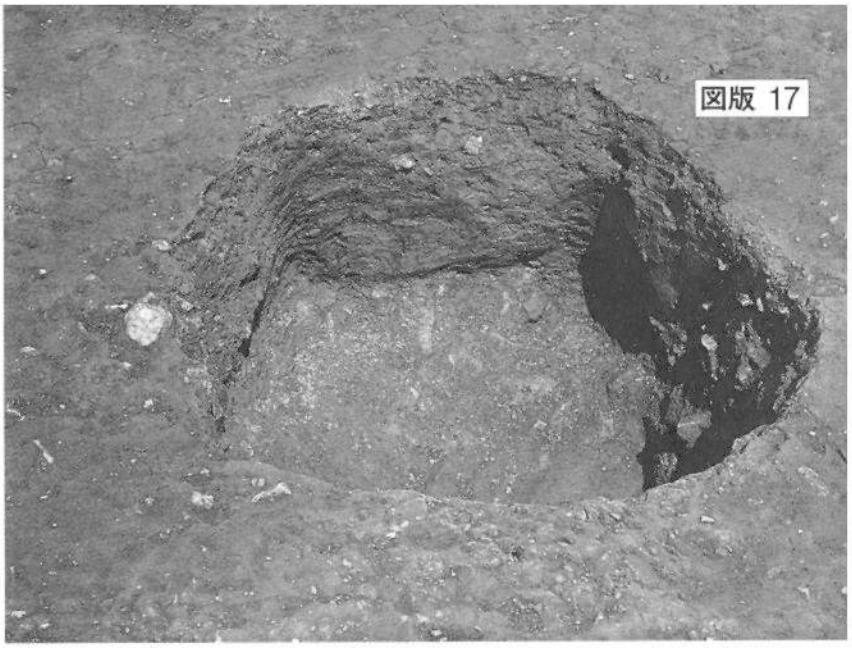
図版 16

1

2

3

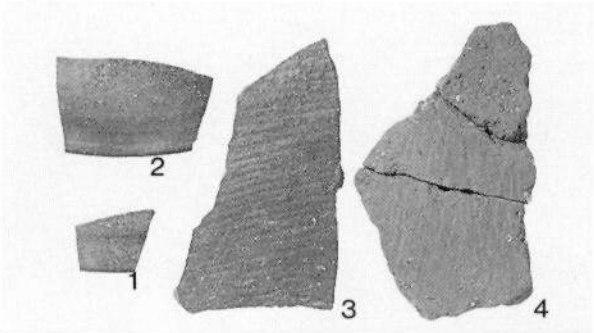
1　1号建物跡（北東上空から）　2　2号建物跡（北東上空から）　3　3号建物跡（北上空から）



1　1号井戸状遺構

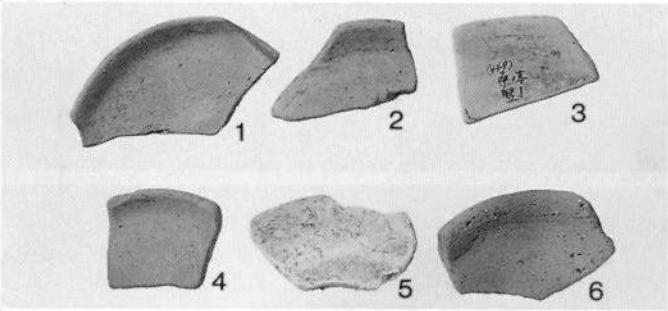
2　1号土坑

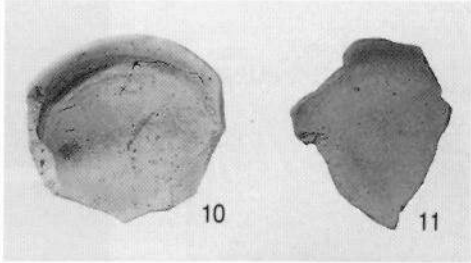
3　2号土坑

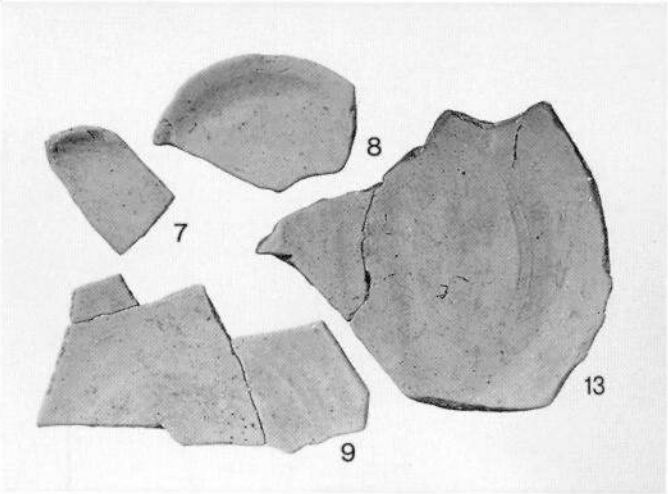


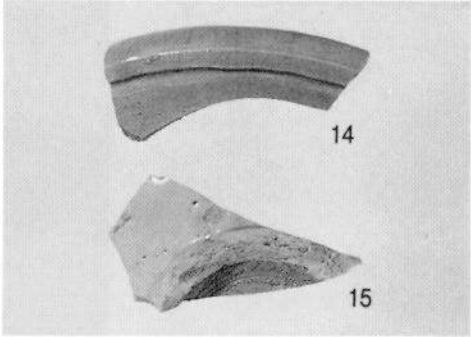
←建物跡出土土器

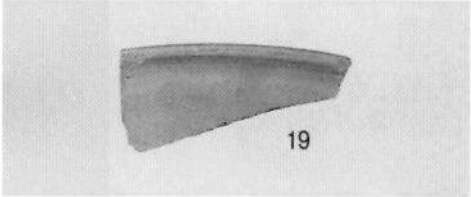
↓竪穴出土土器

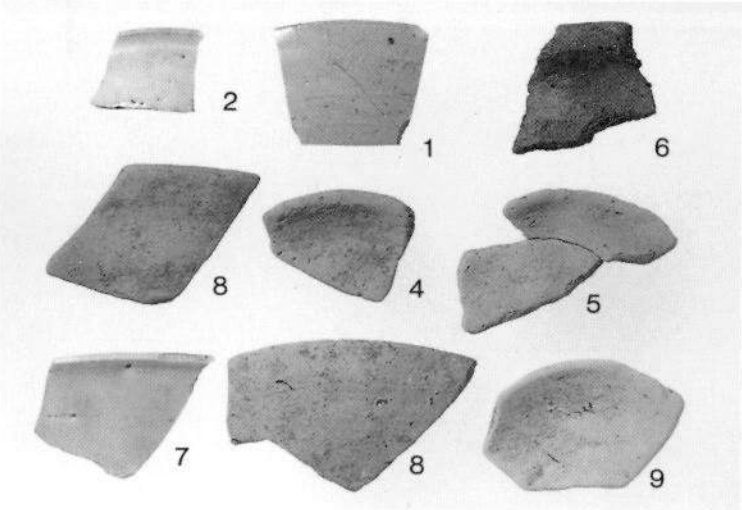


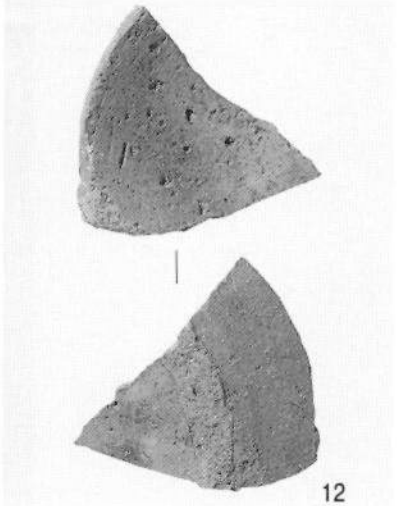












住居跡出土土器 2

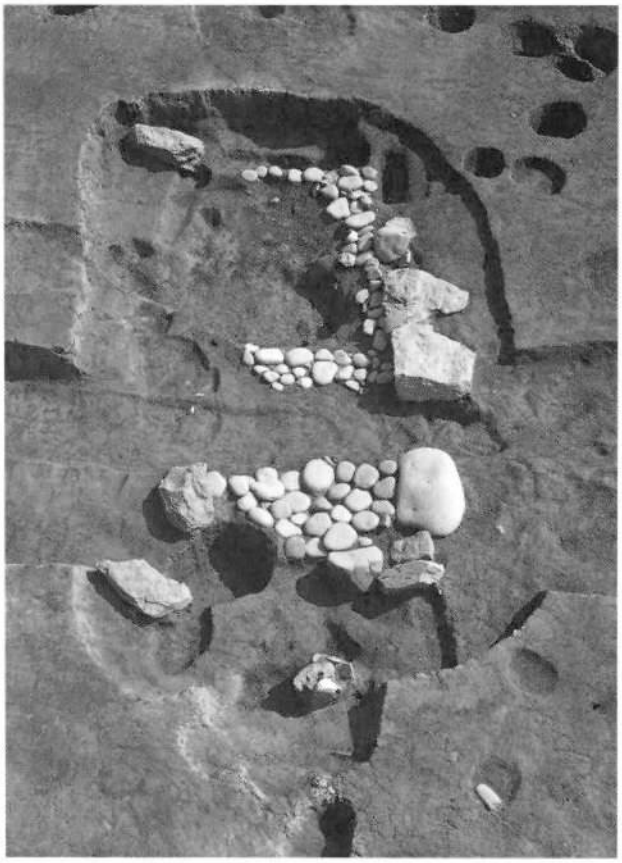
1

2

1　桑ノ本1～6号墳（南上空から）

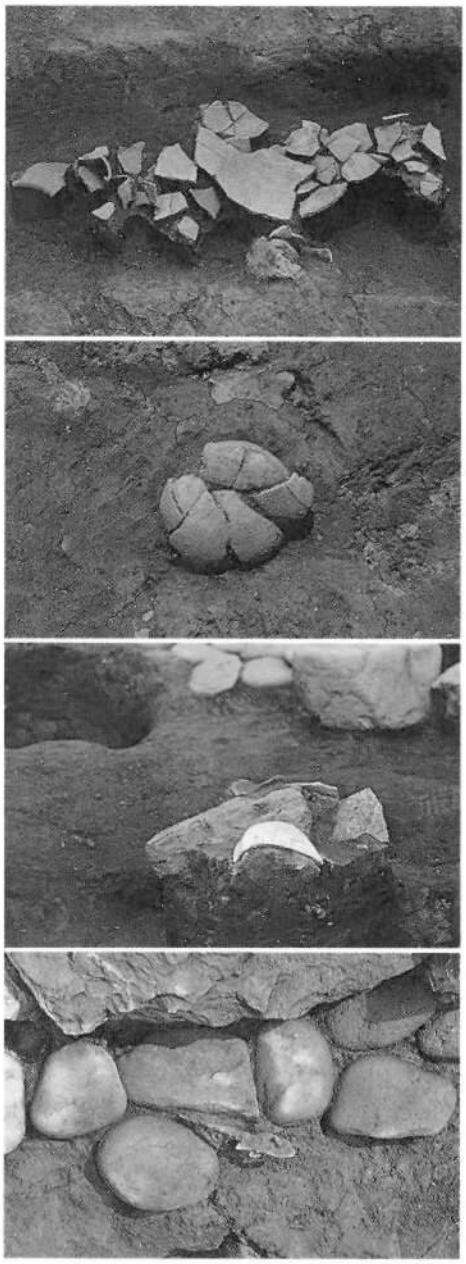
2　1号墳（西上空から）

1



2

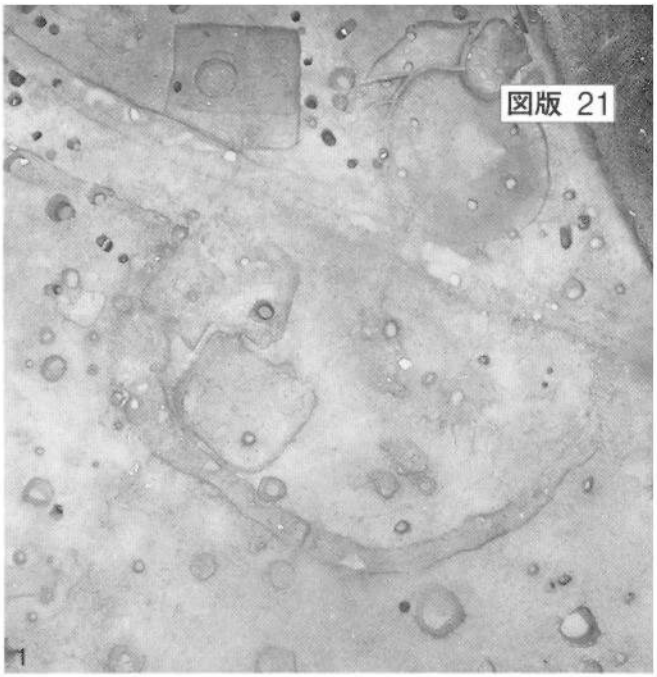
3



4

1　1号墳石室（南から）　2　1号墳石室（西から）　3　周溝内遺物出土状況　4　周溝・石室内遺物出土状況

2

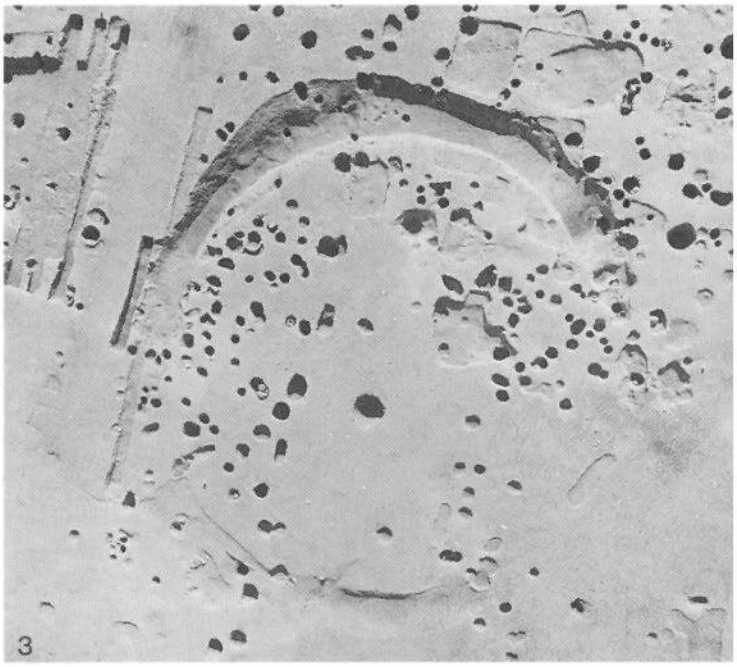


1

1　2号墳（北上空から）

2　2号墳周溝遺物出土状況

4



3

3　3号墳（北上空から）

4　3号墳周溝遺物出土状況

5　南から望む3号墳

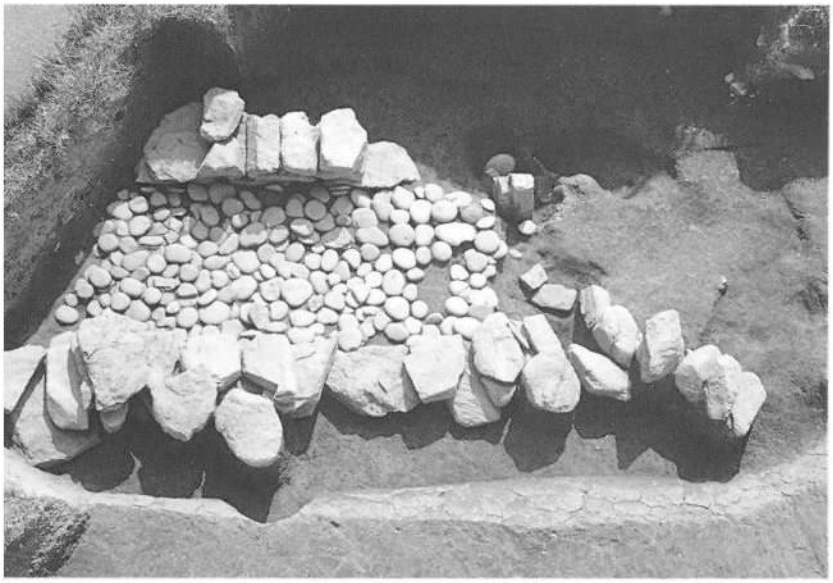
5

6

6　4号墳（東上空から）

図版 22

1



2

1　5号墳（北上空から）

2　5号墳石室（北から）

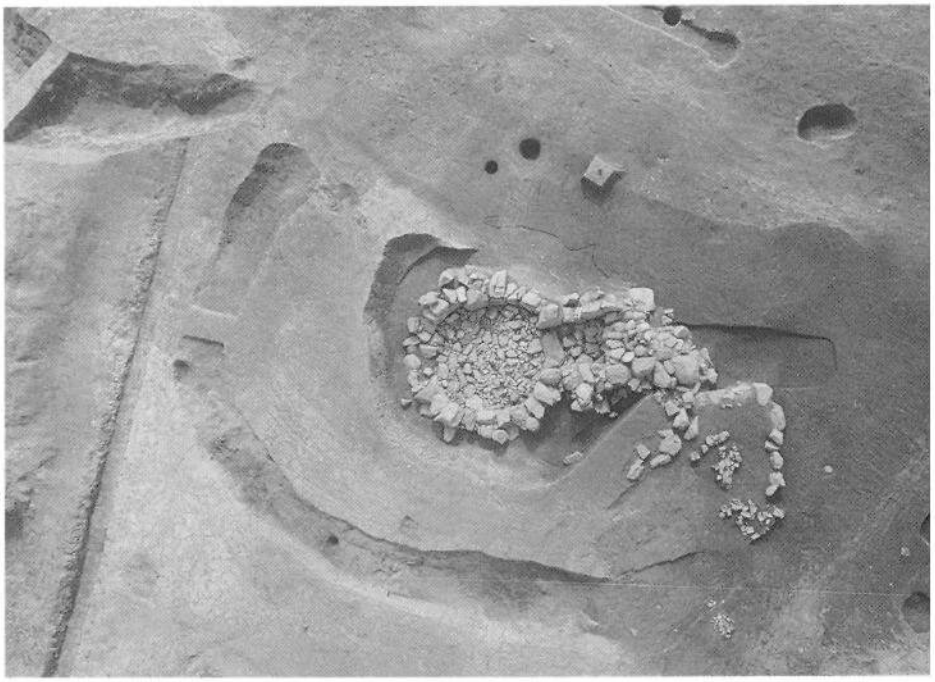
3　5号墳石室（西から）

4　5号墳周溝遺物出土状況

3

4

1



2

3

1　6～8号墳（南上空から）

2　6号墳（北上空から）

3　6号墳石室（南西から）

1

2

3

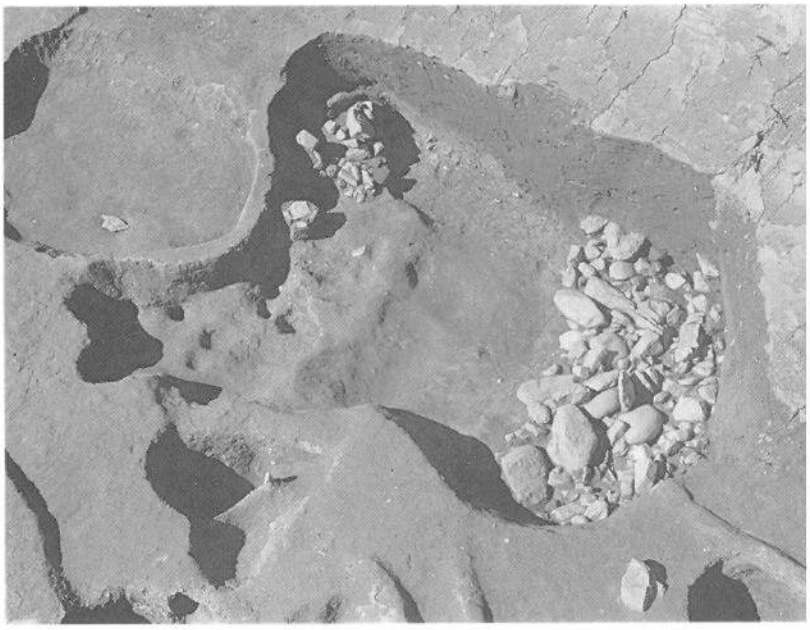
1　6号墳石室と左前面区画

2　7号墳（北上空から）

3　7号墳石室（南西から）

1

2



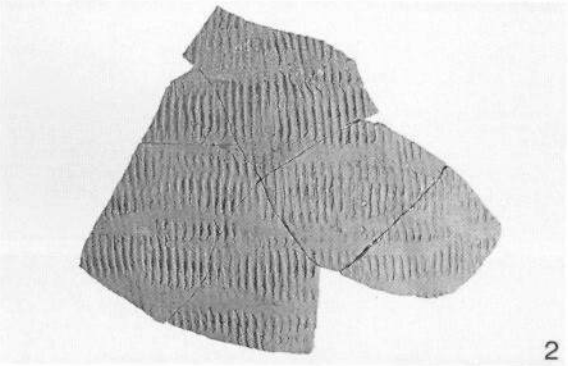
3

1　8 号墳
　　（北上空から）

2　8 号墳石室
　　（西から）

3　9 号墳?
　　（東上空から）

1


2

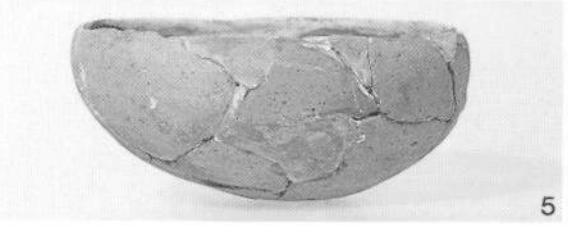
17

10

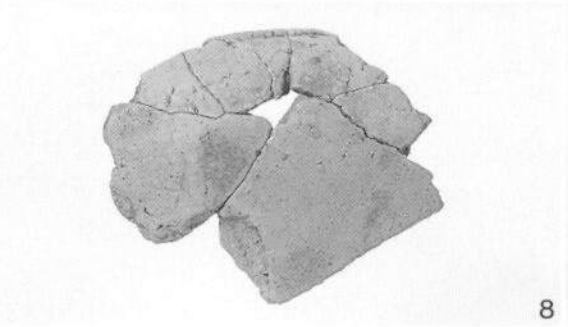
3

13

16

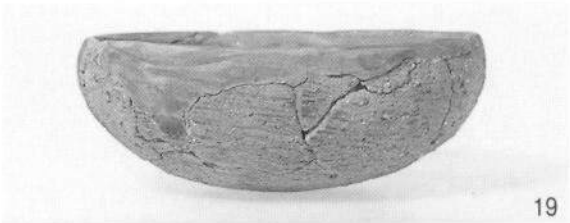

5

18

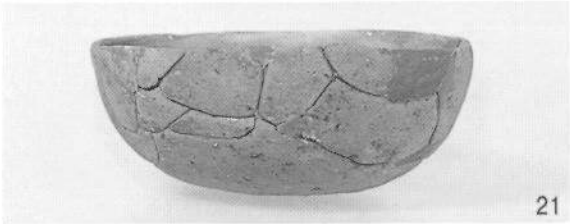

8

20

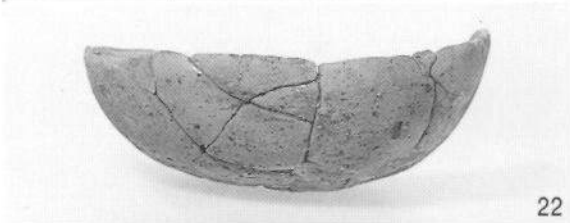
古墳出土土器 1


19

28


21

32


22

34

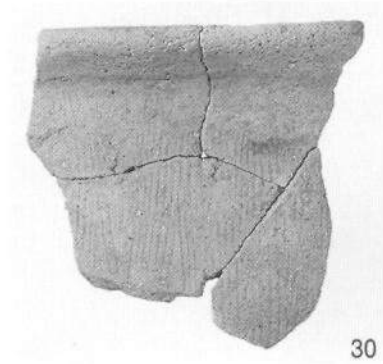
23

35

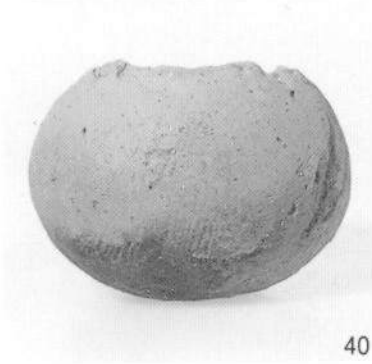
27

36

37


30

38


40

古墳出土土器 2

48

55

49

56

50

58

51

59

52

61

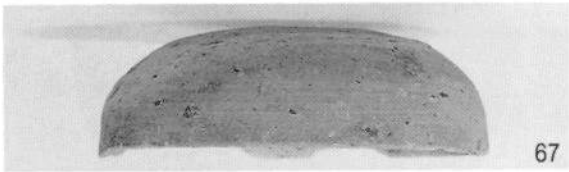
54

62

63

64

65


67

68

69

70

71

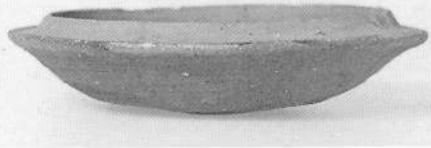
72

73

75

78

79


80

82

84

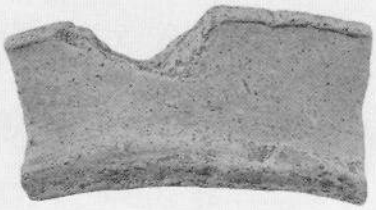
87

88

古墳出土土器 4

89

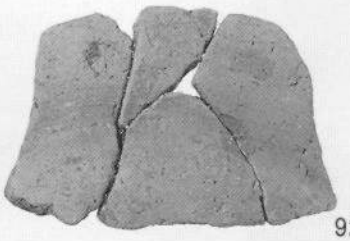
86



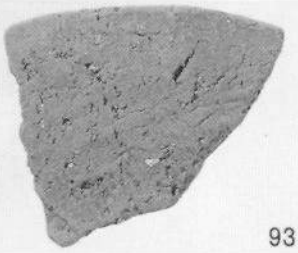
90

94

91



92



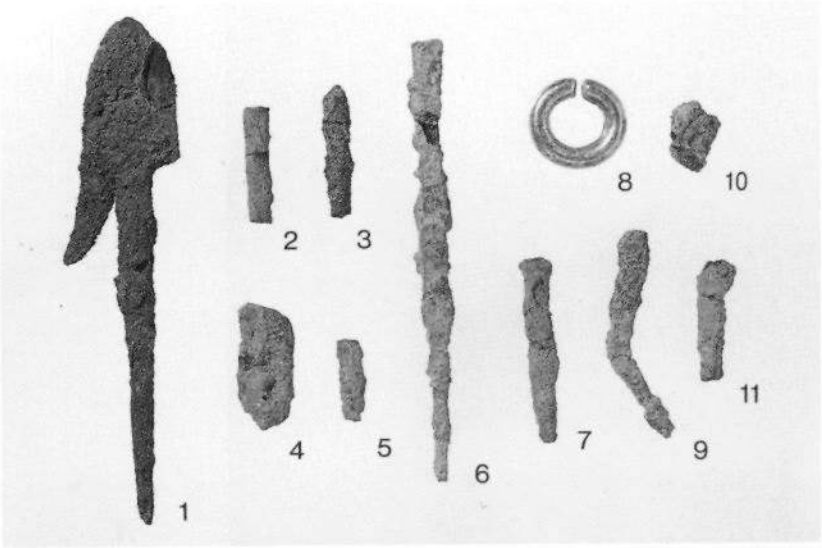
93

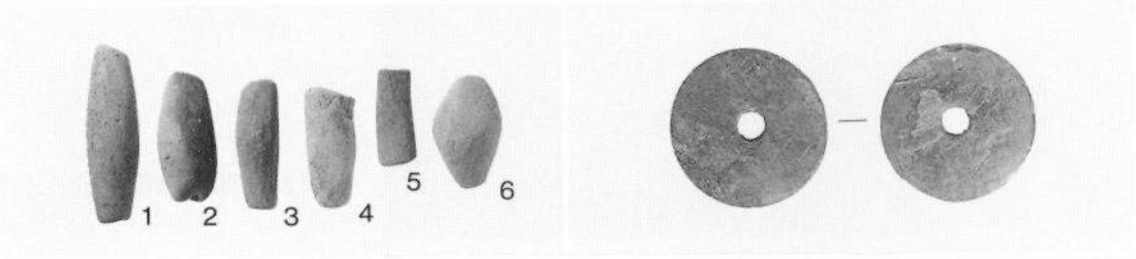
96

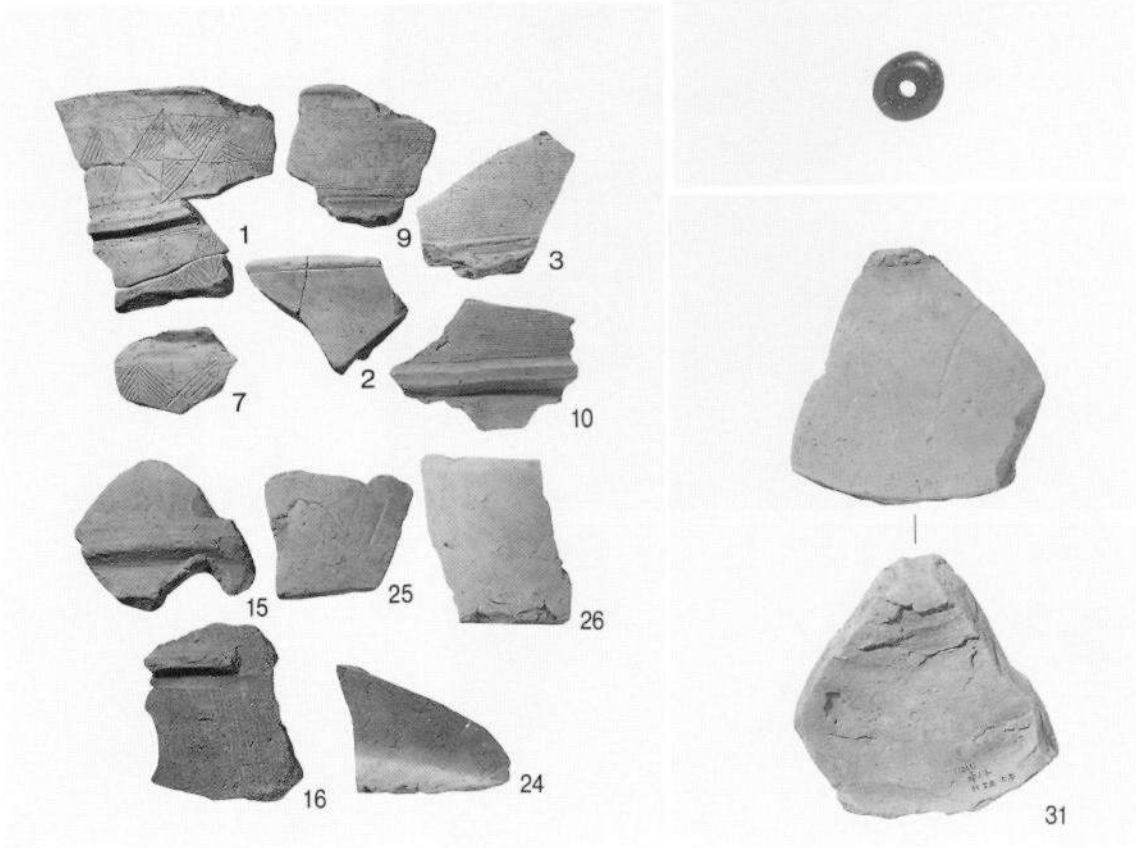
95

104

103







1

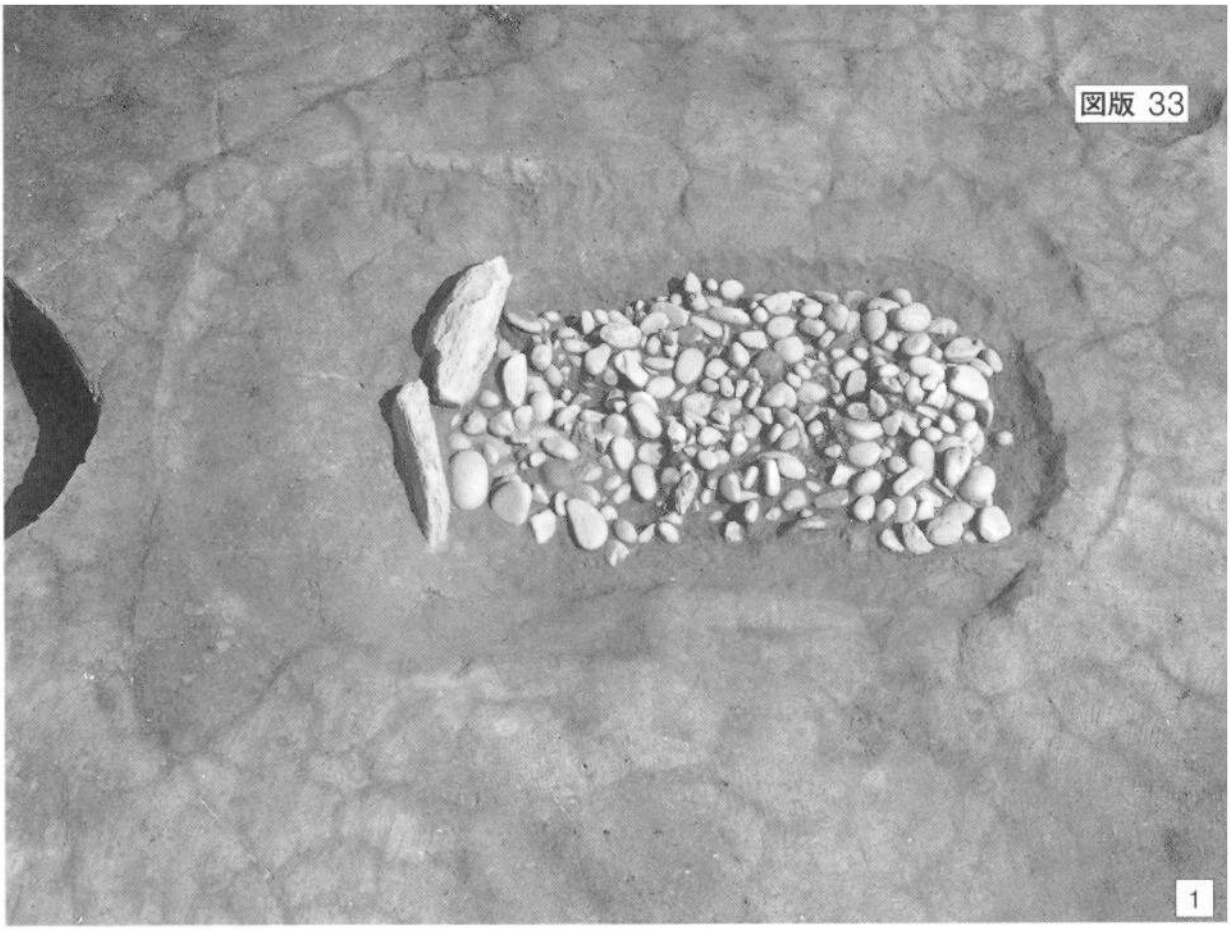
2

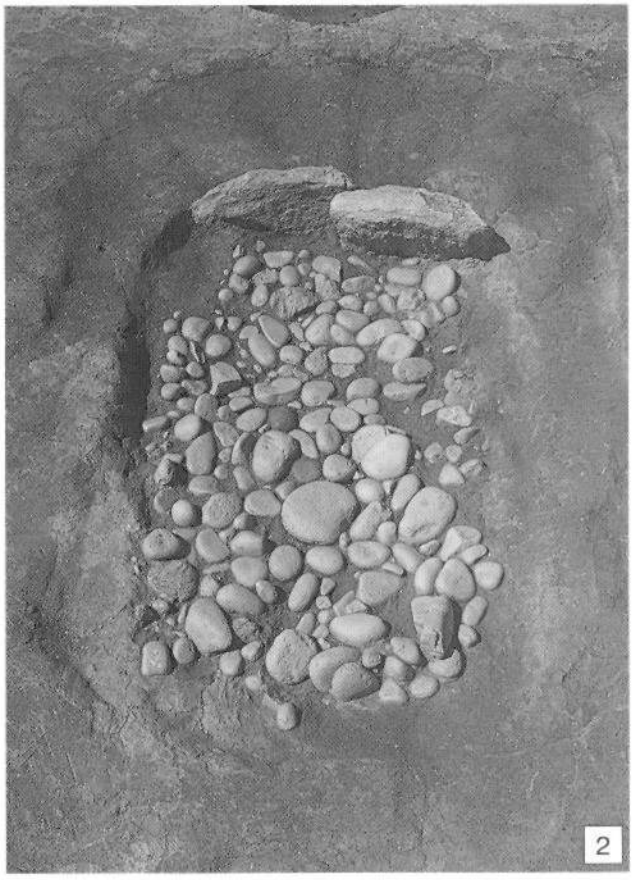
1　古墳出土石製品・鉄製品・土製品・玉類　　2　出土埴輪

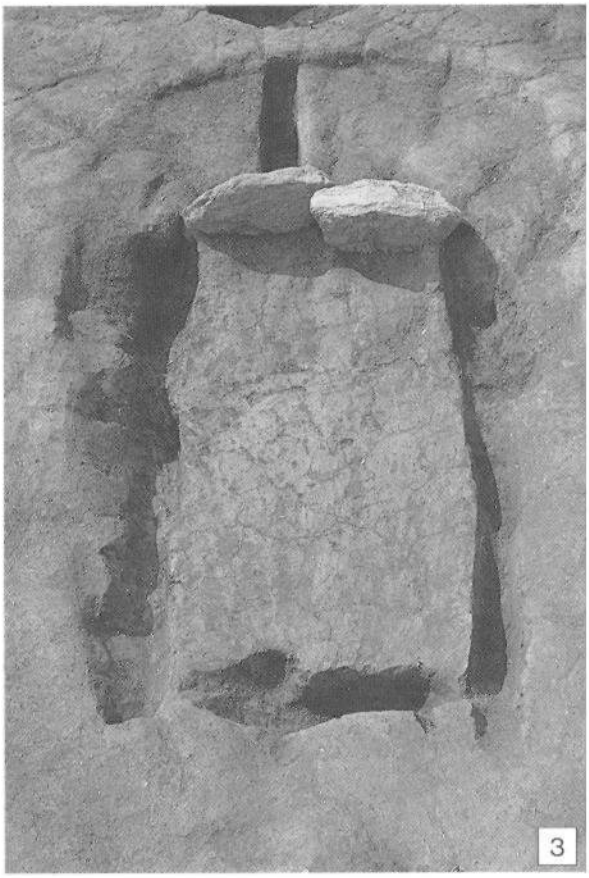
1　土壙墓群と１号落ち込み遺構
（北上空から）

2　１号土壙墓（東から）

3　２号土壙墓（東から）

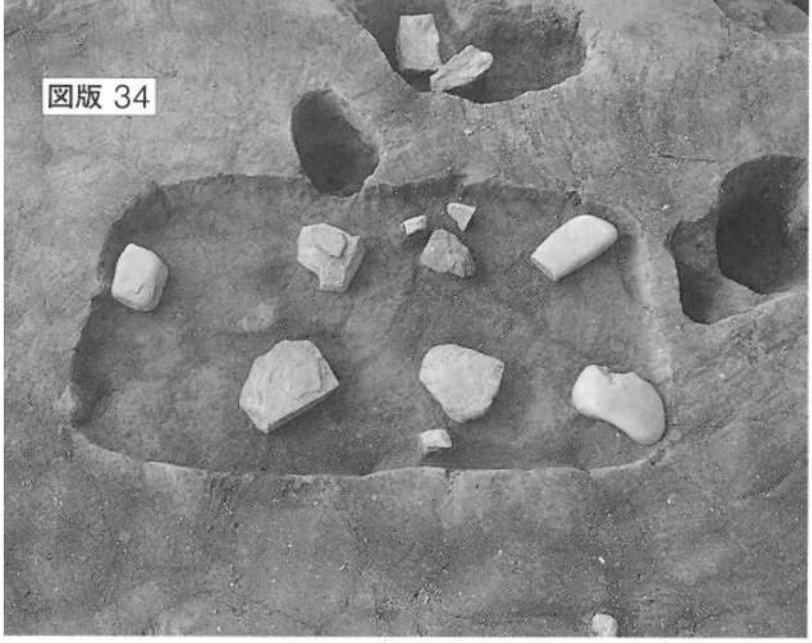






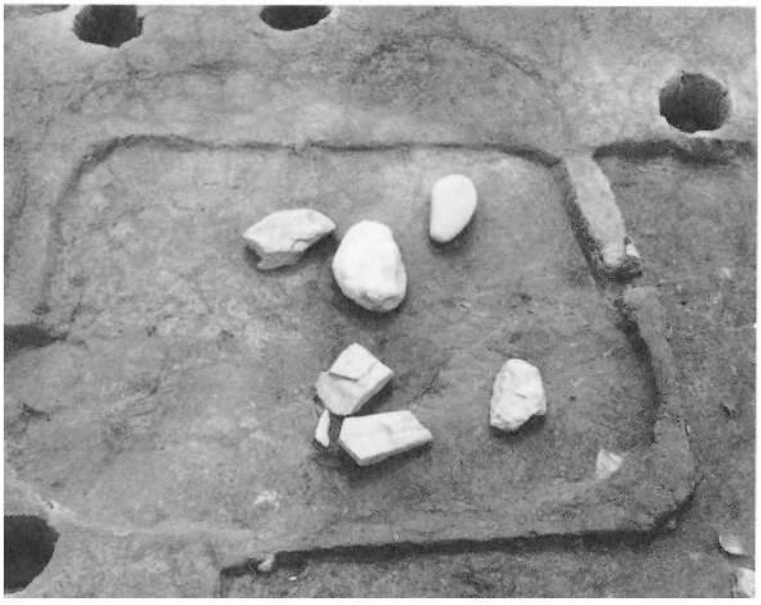
1　3号土壙墓（南から）　2　3号土壙墓敷石状況　3　敷石除去後の3号土壙墓（東から）

図版 34



1

2



3

1　4号土壙墓（南から）

2　5号土壙墓（東から）

3　5号土壙墓（北から）

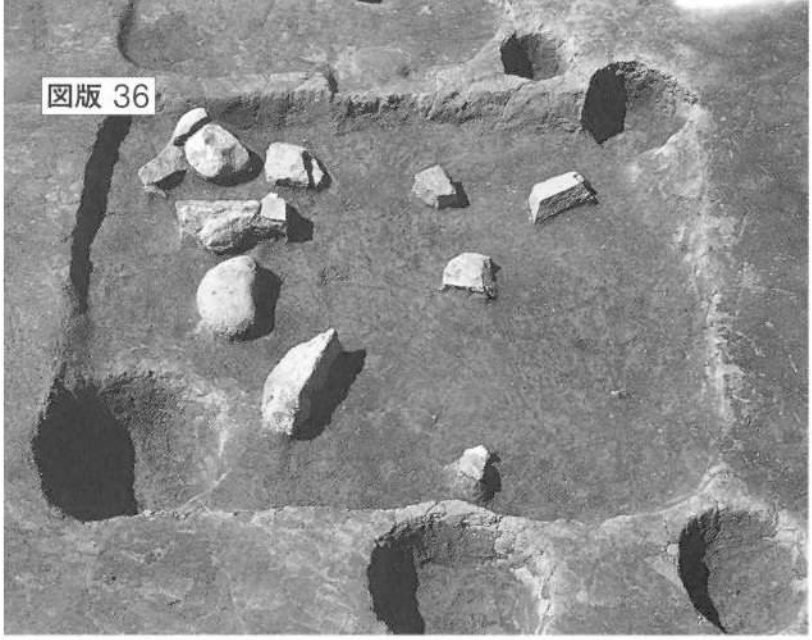
1 6・7号土壙墓遺物出土状況

2 6・7号土壙墓（南から）

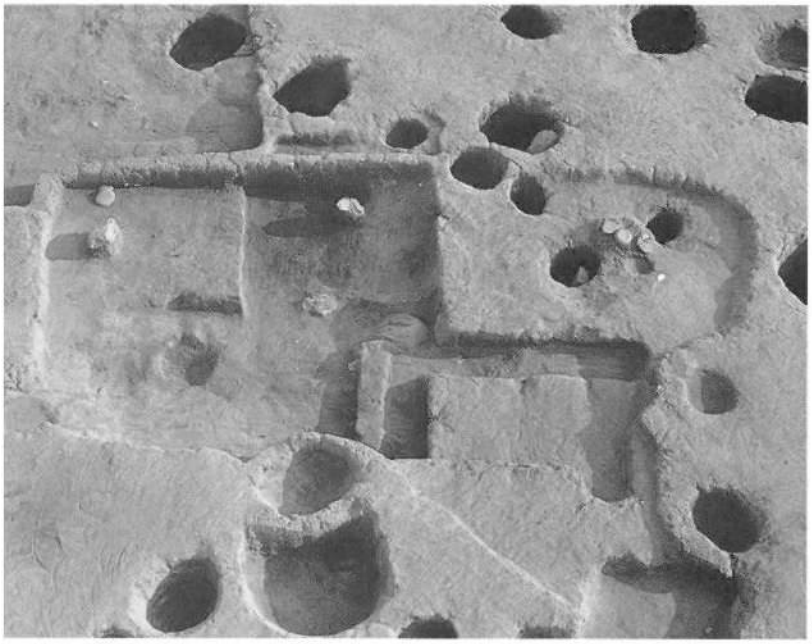
3 8号土壙墓炭化物出土状況

4 8号土壙墓（南から）

図版 36



1



2

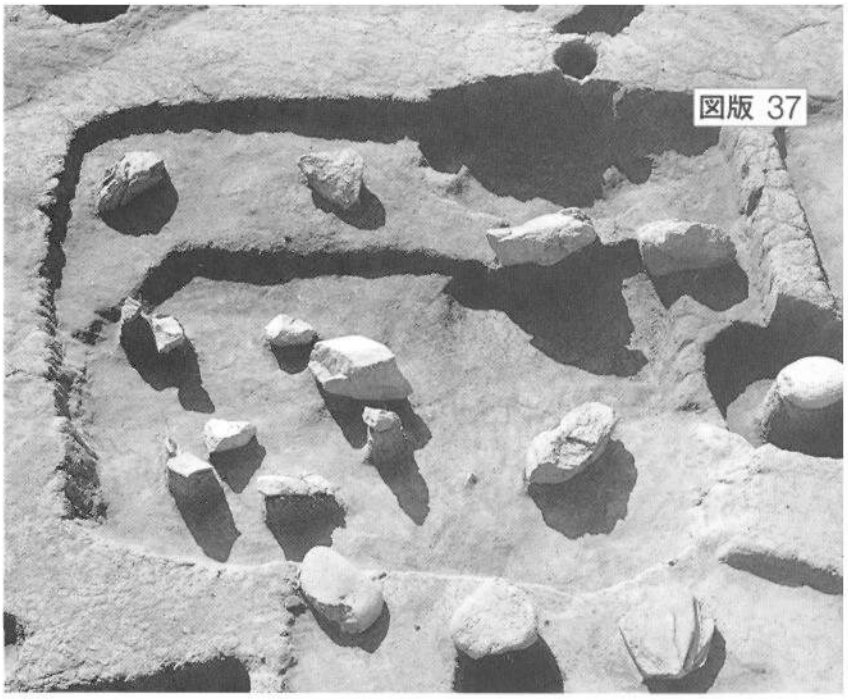
3

1　9号土壙墓（東から）

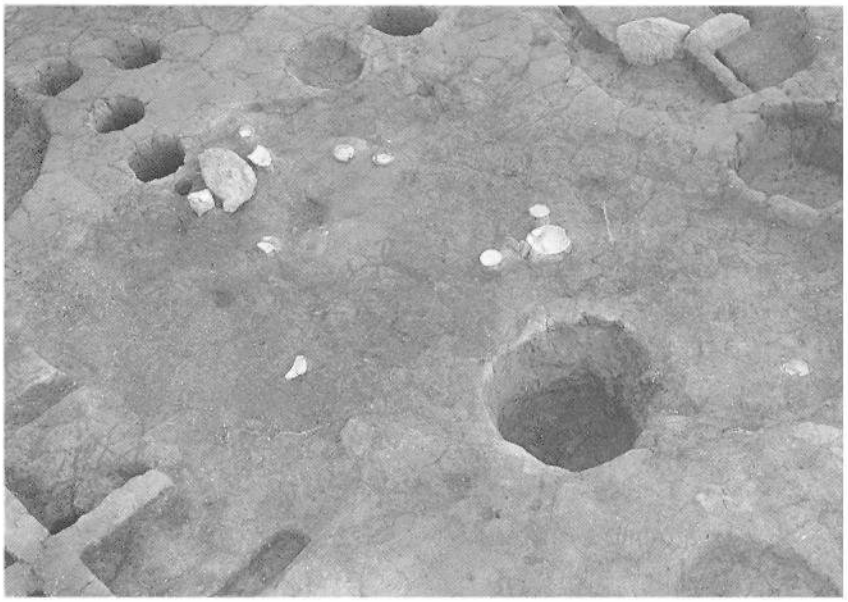
2　10・16号土壙墓
（北から）

3　11号土壙墓（西から）

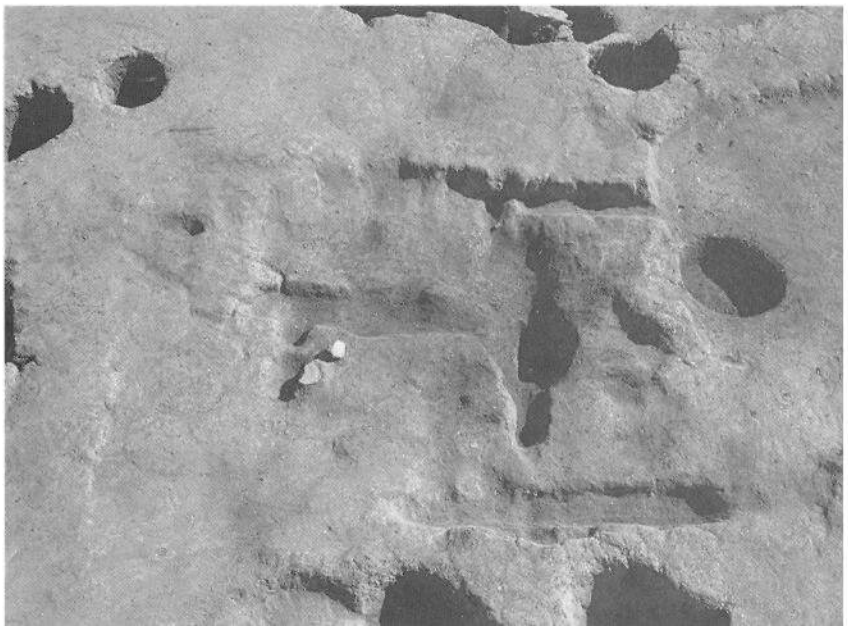
1



2



3



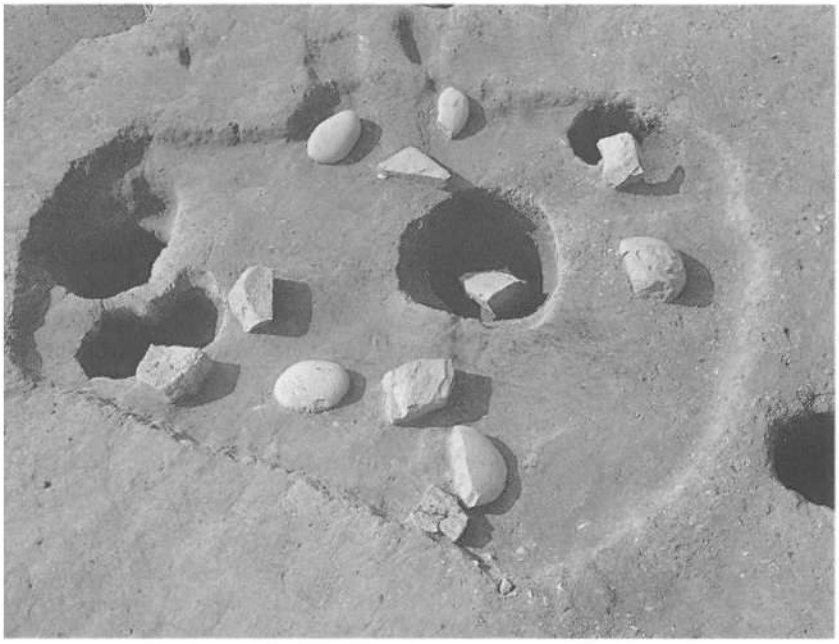
1　12・18号土壙墓（北から）

2　13・14号土壙墓（北西から）

3　15号土壙墓（西から）

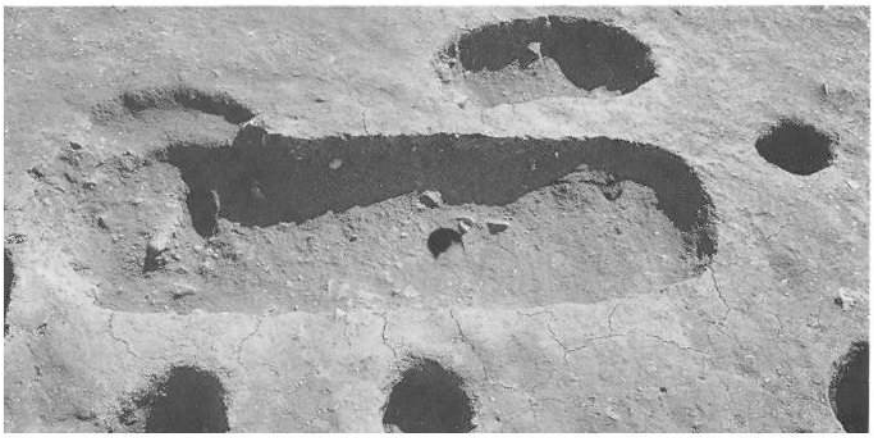
図版 38

1



2

3



4

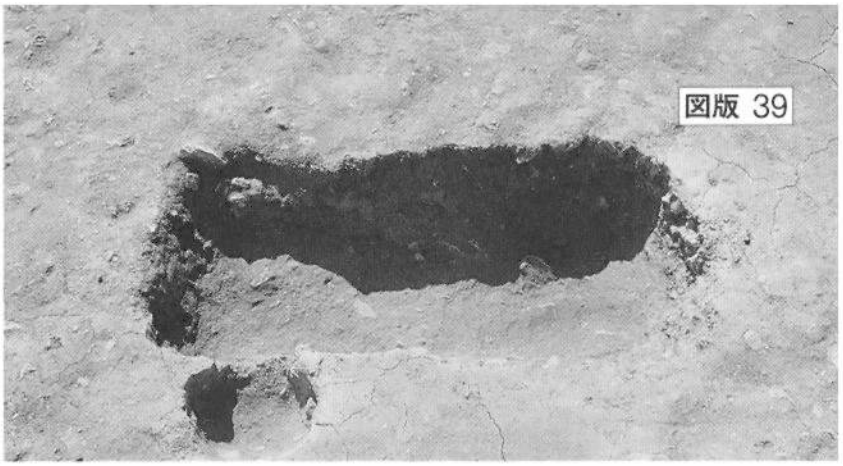
1　17号土壙墓（南から）

2　19号土壙墓（北西から）

3　22号土壙墓（西から）

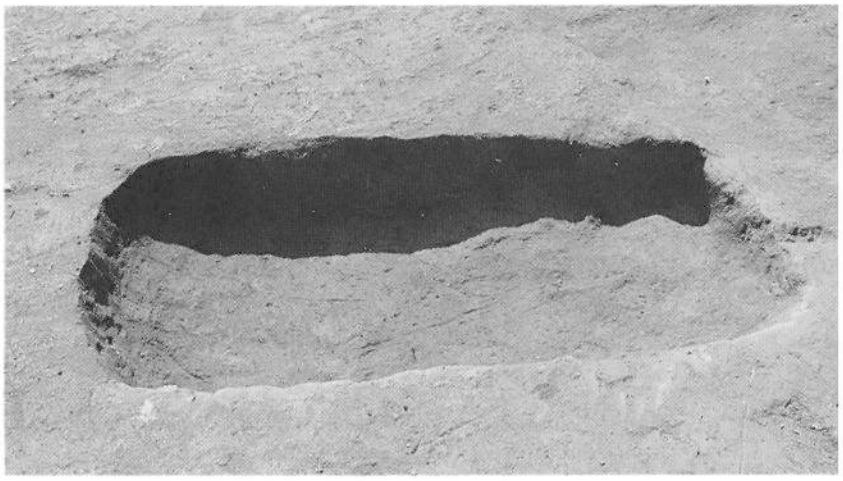
4　23号土壙墓（北西から）

1



2

3



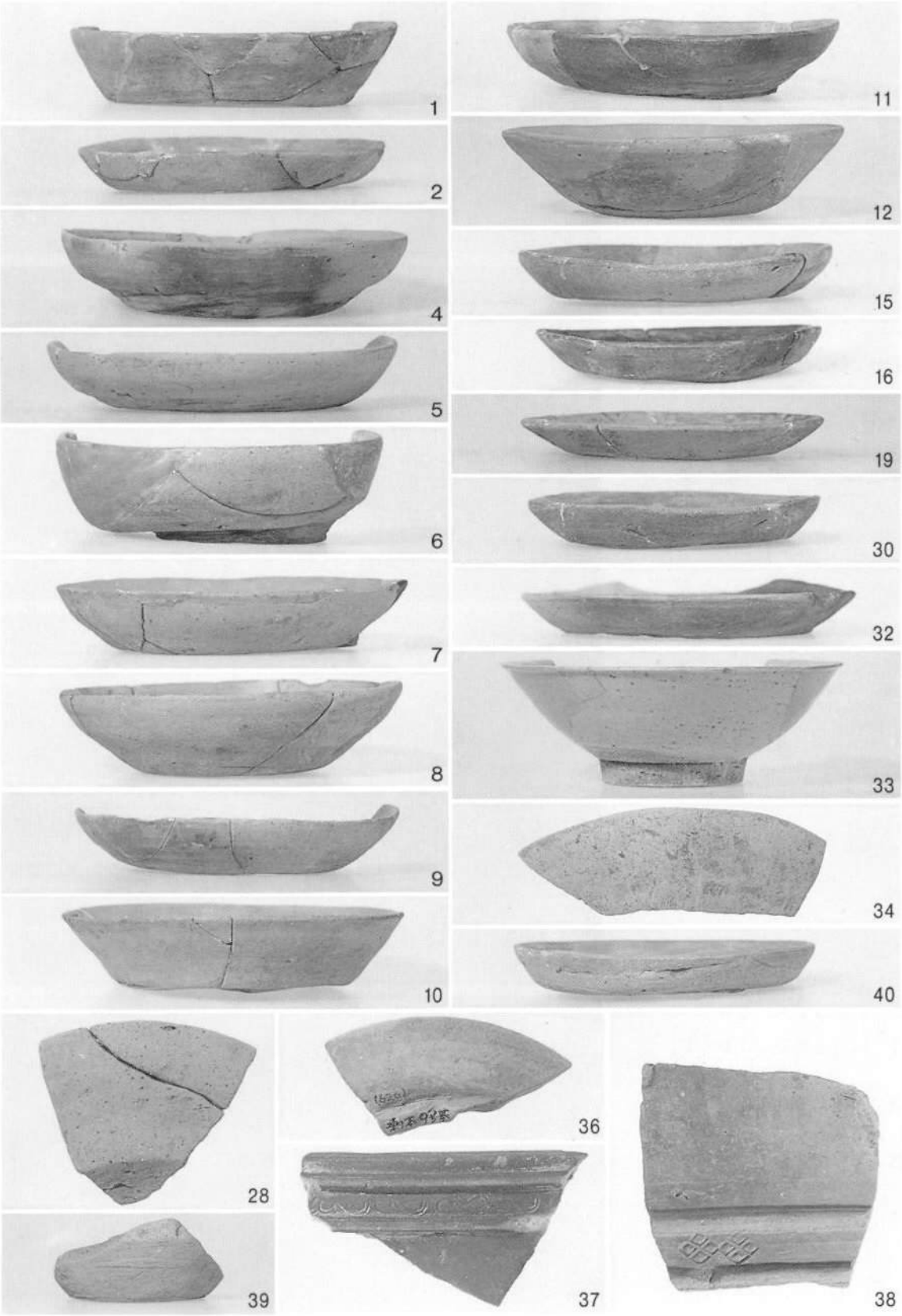
4

1　24号土壙墓（北から）

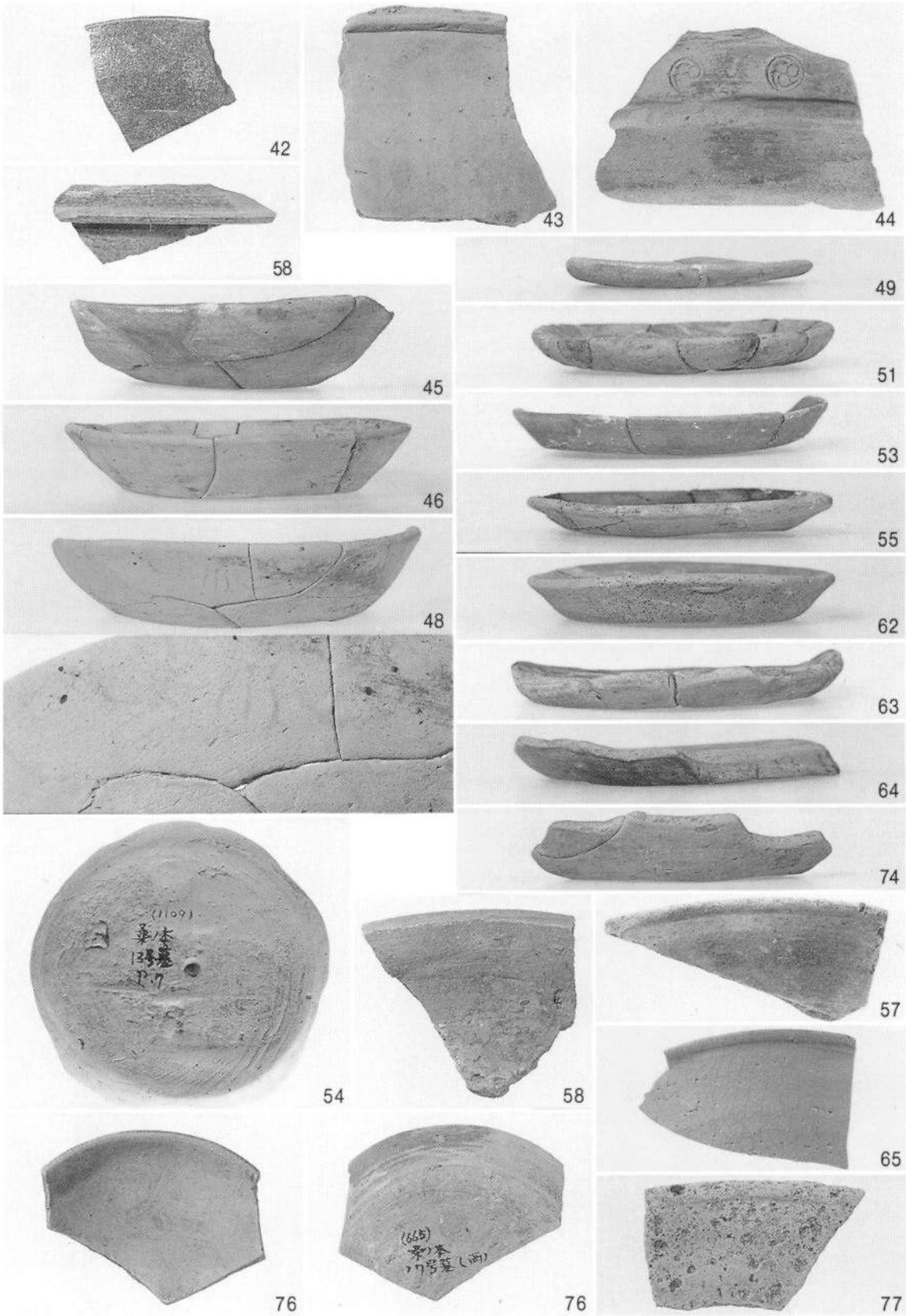
2　25号土壙墓（北から）

3　26号土壙墓（北から）

4　27号土壙墓（東から）



土壙墓出土土器 1

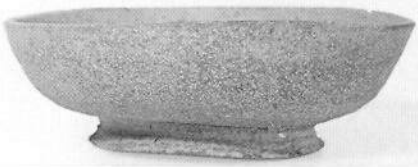


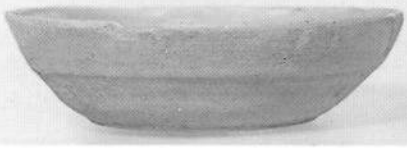
土壙墓出土土器 2

80

81

82

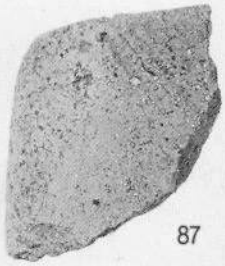

83

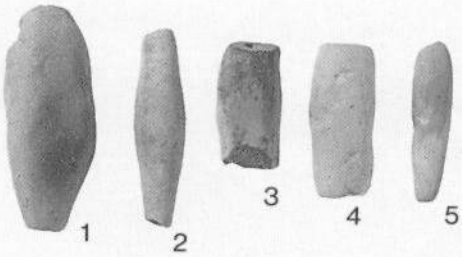

84

85

78

86

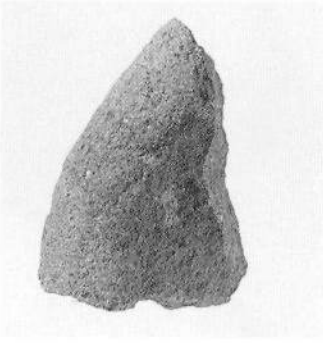

87


1 2 3 4 5

1

2

2


1

1　土壙墓出土土器 3
　　土製品・石製品・金属製品

2　上空からみた 1 号通路状遺構

1

2

1　1号通路状遺構（北から）　　2　完掘後の1号通路状遺構

図版 44

1

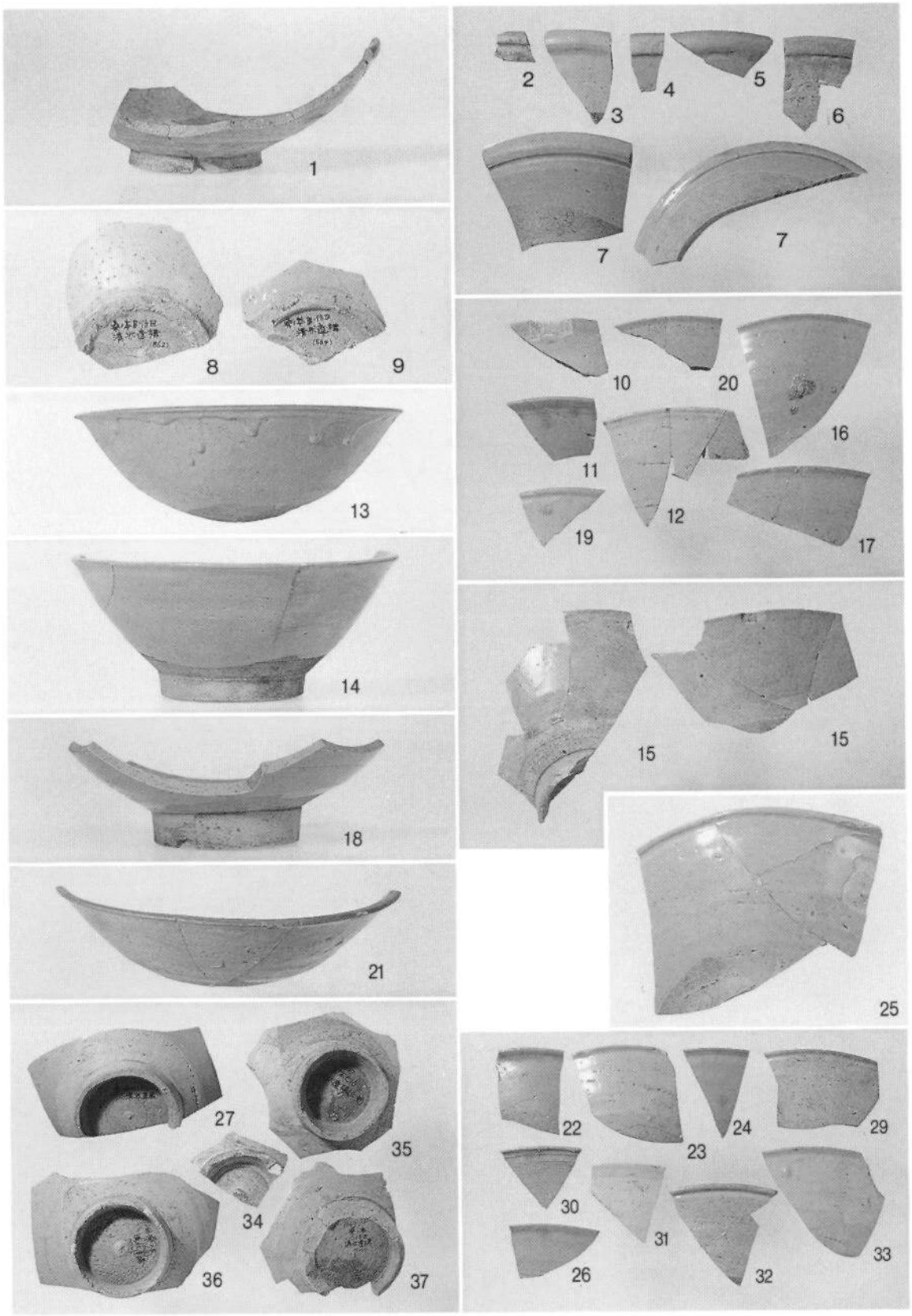
2

3

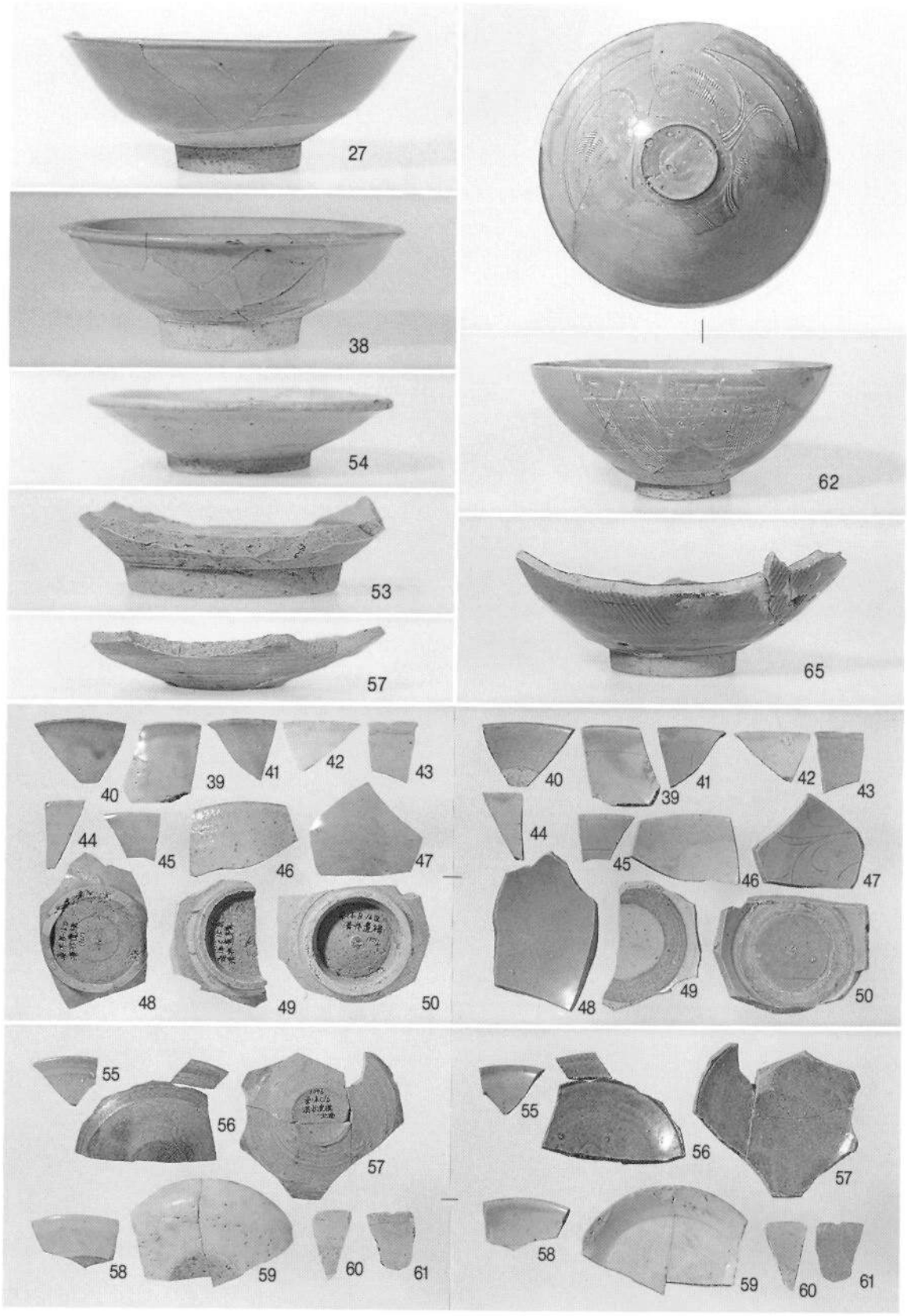
1　3号通路状遺構
（西から）

2　3号通路状遺構
（北から）

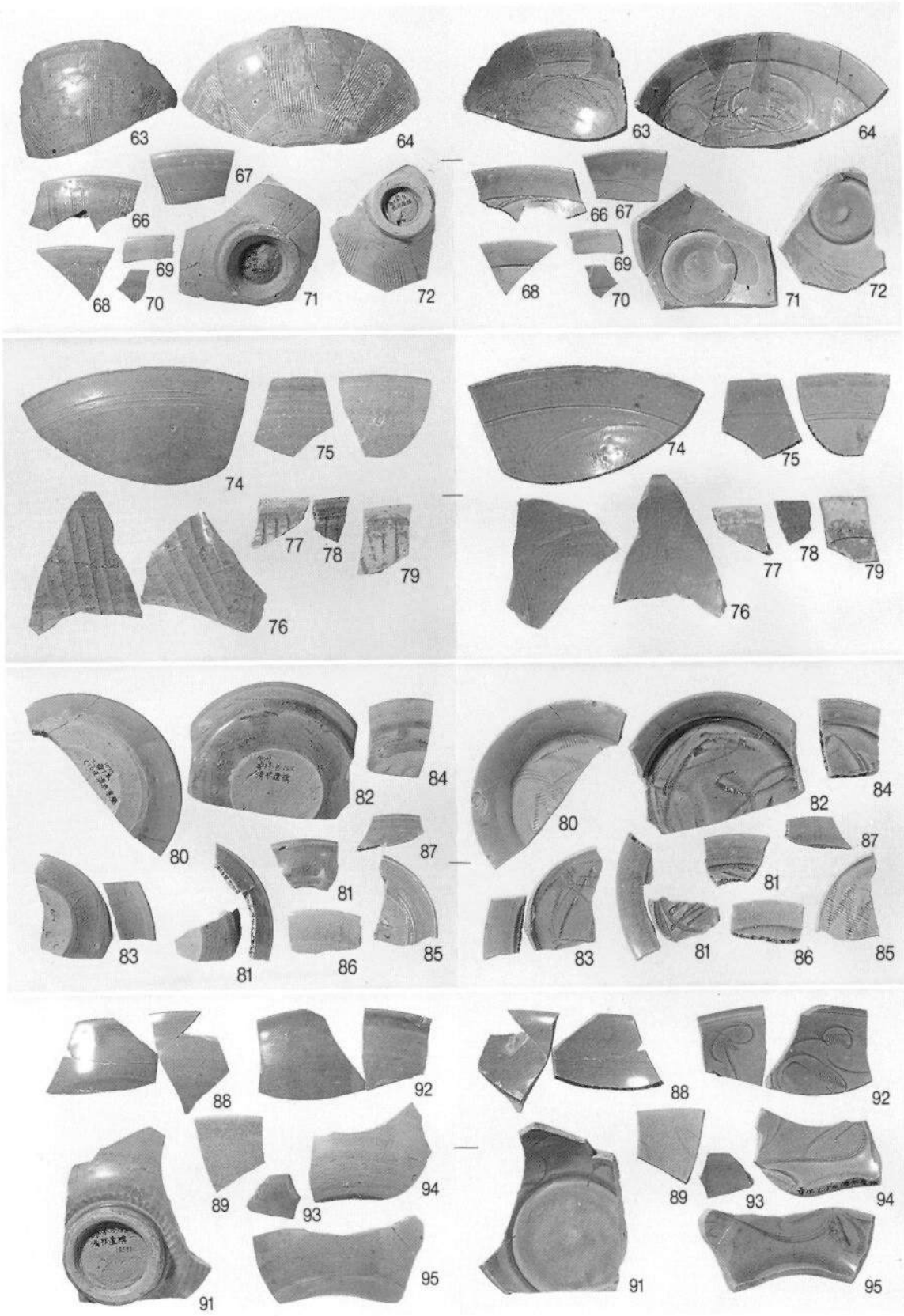
3　3号通路状遺構の
ある南部調査区
（西から）


1
2
3
4
5
6
7
7
8
9
10
20
16
11
12
19
17
13
14
15
15
18
21
25
27
35
34
36
37
22
23
24
29
30
31
26
32
33

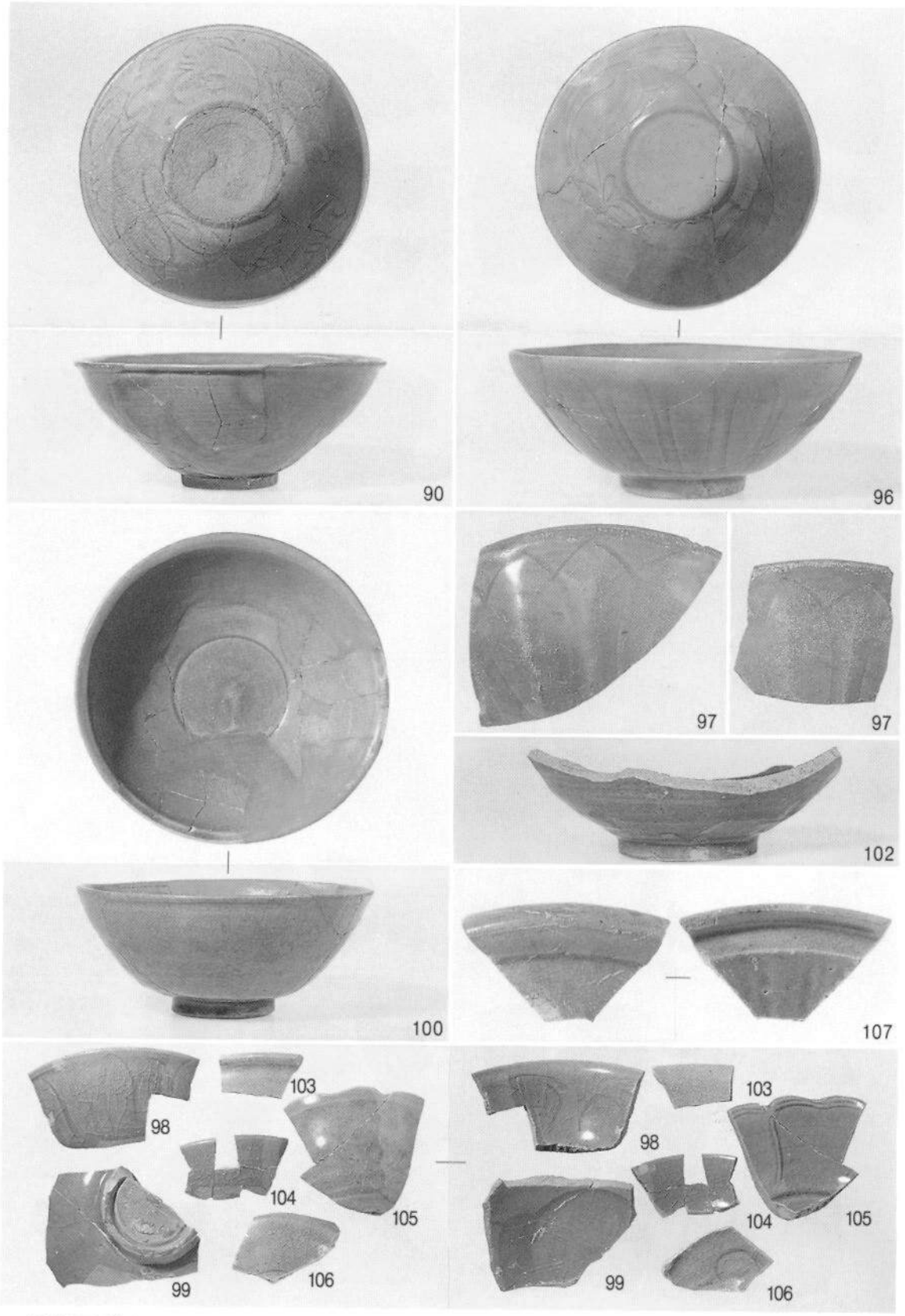
通路状遺構出土土器 1


27
38
54
53
57
62
65
40
39
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
55
56
57
58
59
60
61

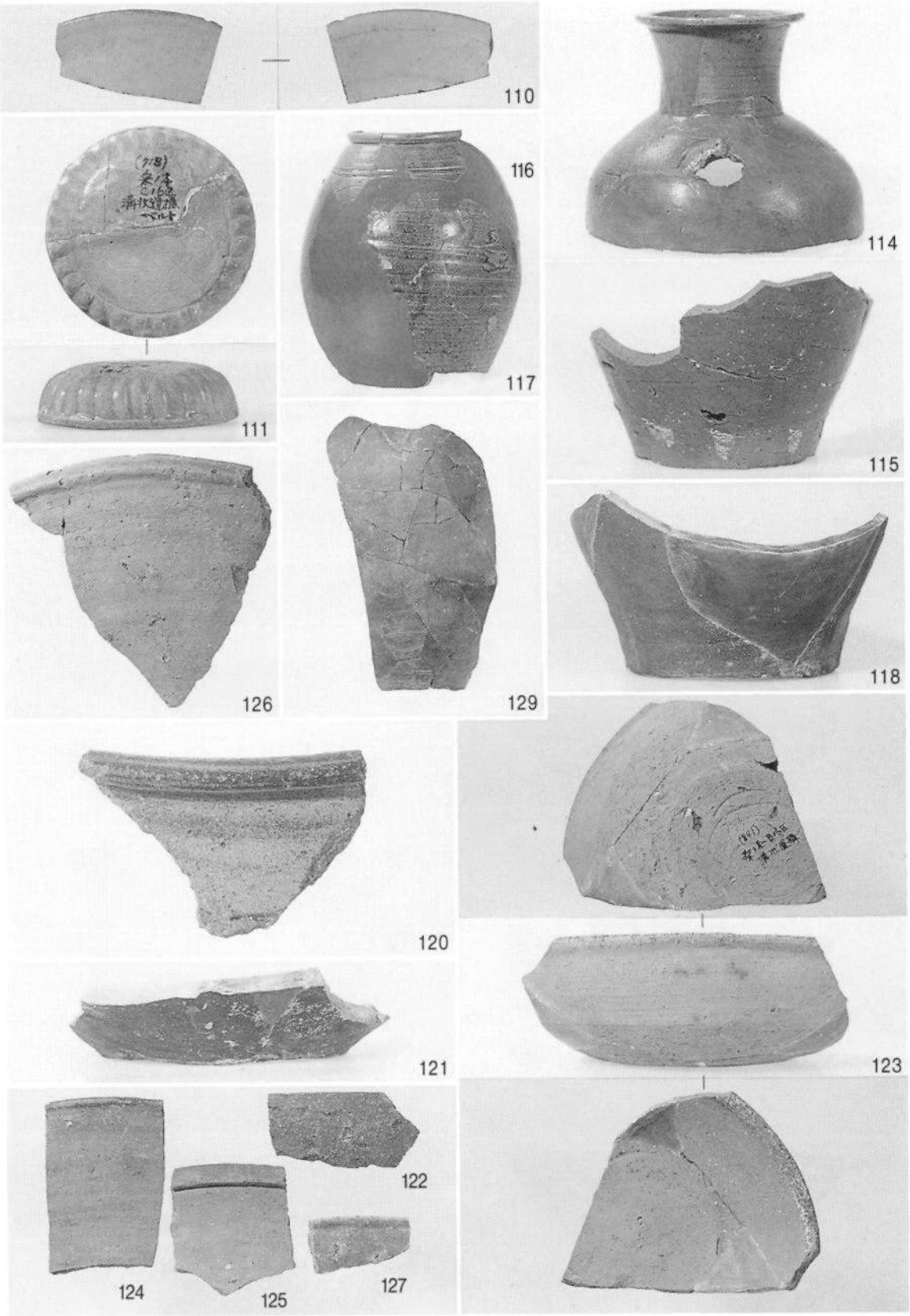
通路状遺構出土土器 2


63
64
66
67
68
69
70
71
72
63
64
66
67
68
69
70
71
72
74
75
76
77
78
79
74
75
76
77
78
79
80
82
84
81
83
86
85
87
80
82
84
87
81
83
81
86
85
88
92
89
93
94
91
95
88
92
89
93
94
91
95

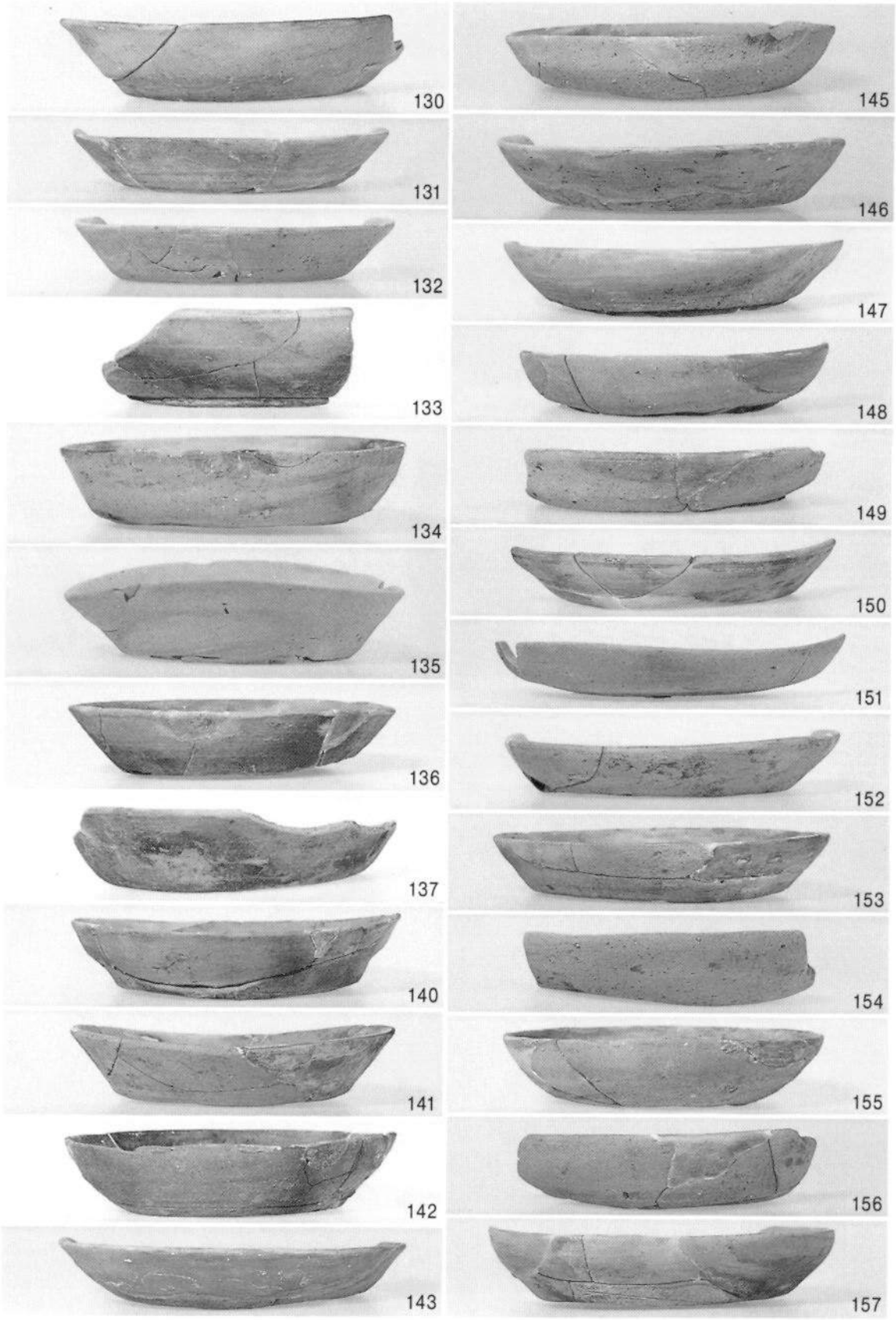
通路状遺構出土土器 3



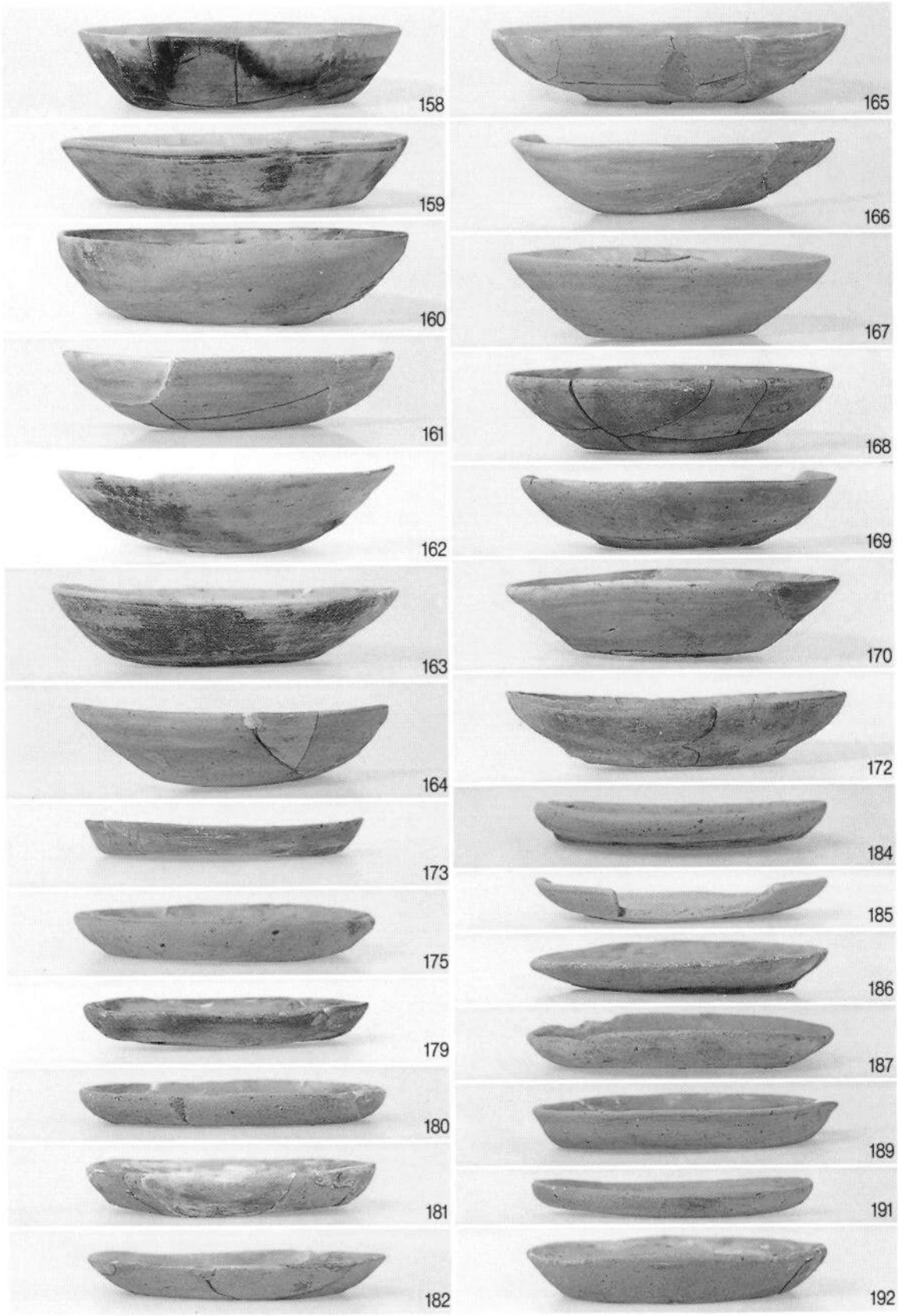
通路状遺構出土土器 4



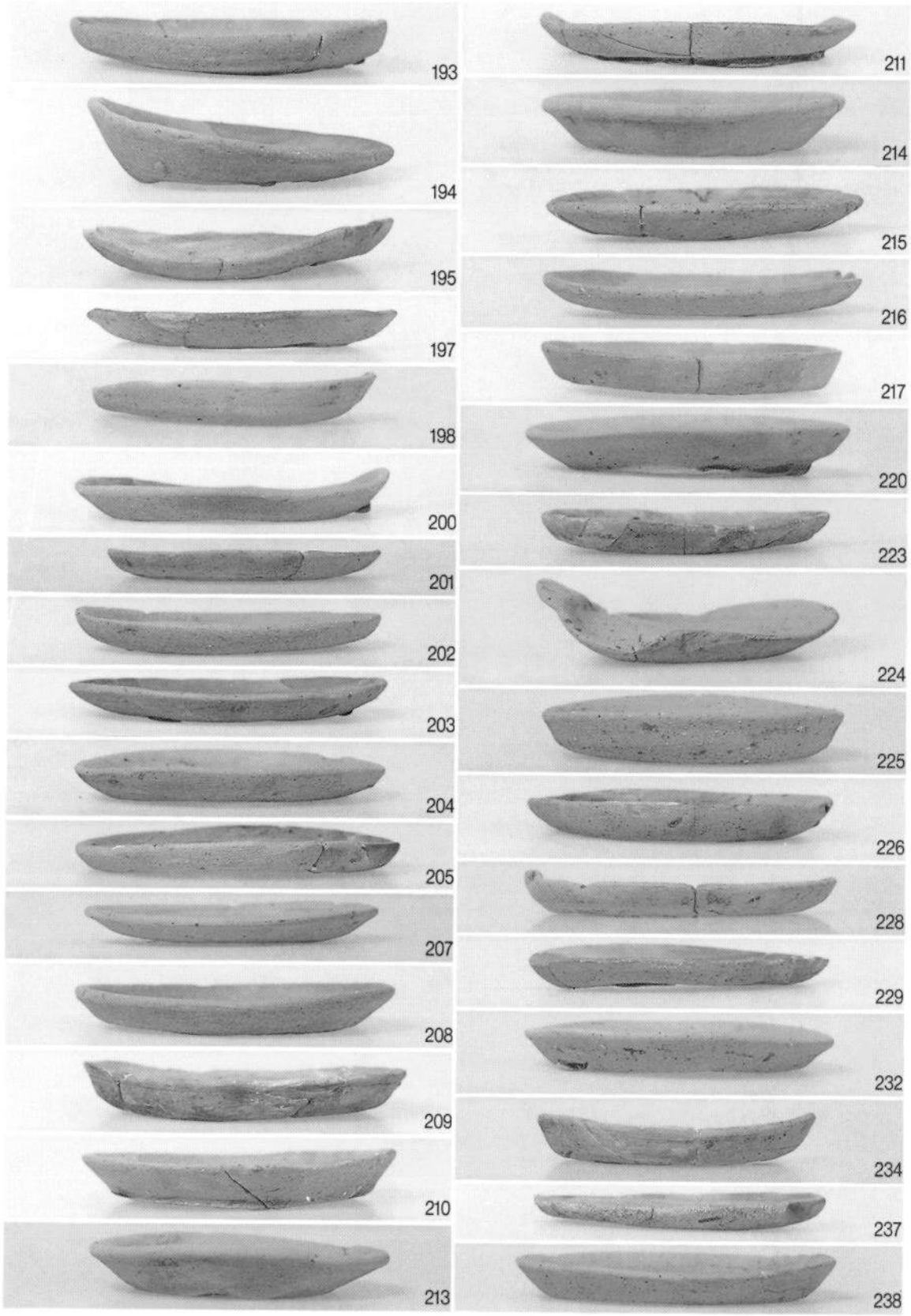
通路状遺構出土土器 5


130
131
132
133
134
135
136
137
140
141
142
143
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157

通路状遺構出土土器 6



2　通路状遺構出土土器 7

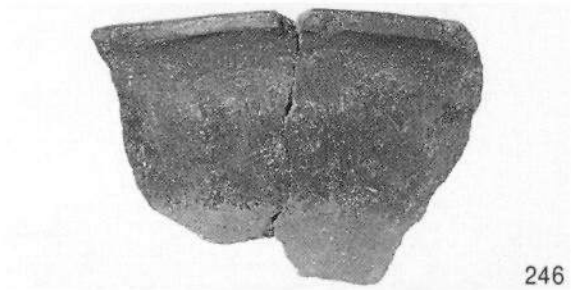

193
194
195
197
198
200
201
202
203
204
205
207
208
209
210
213
211
214
215
216
217
220
223
224
225
226
228
229
232
234
237
238

通路状遺構出土土器 8

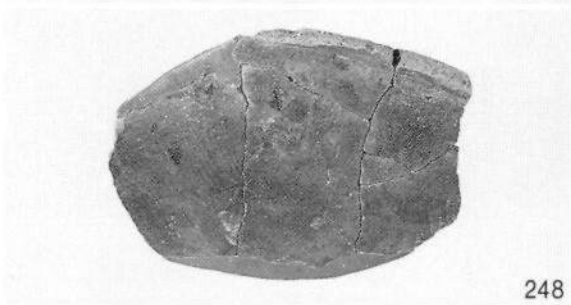
240

242

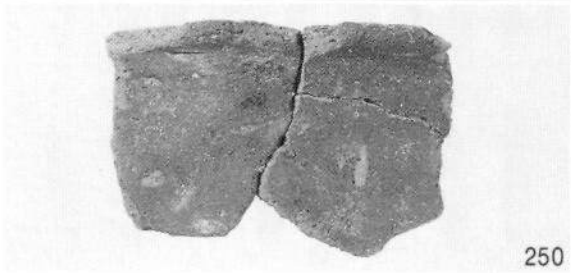
244


246

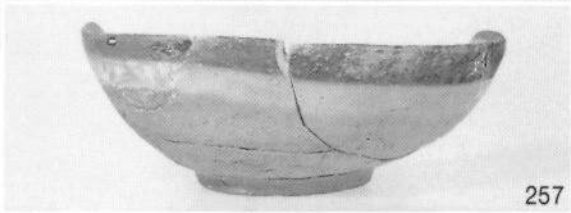
247


248

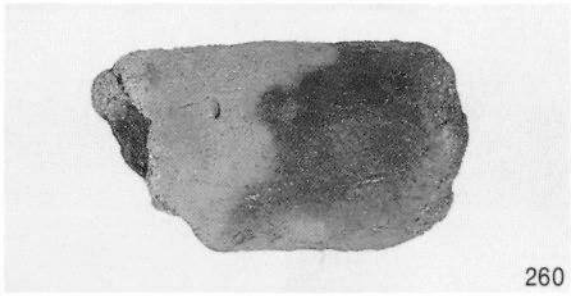
249

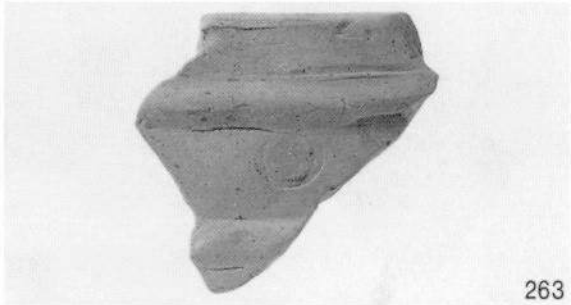

250

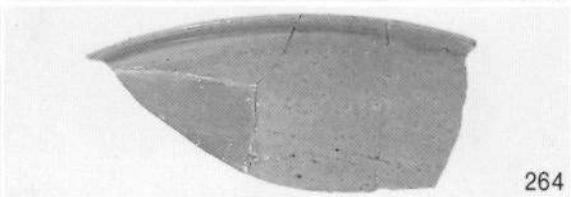
256

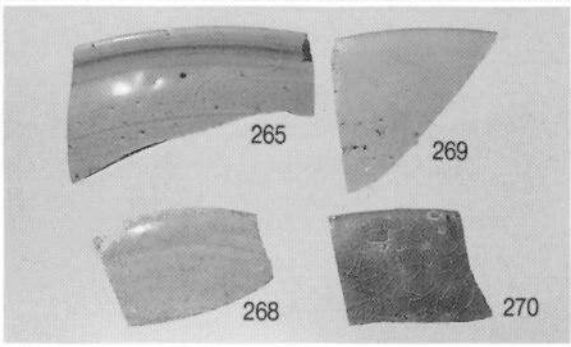

257

258

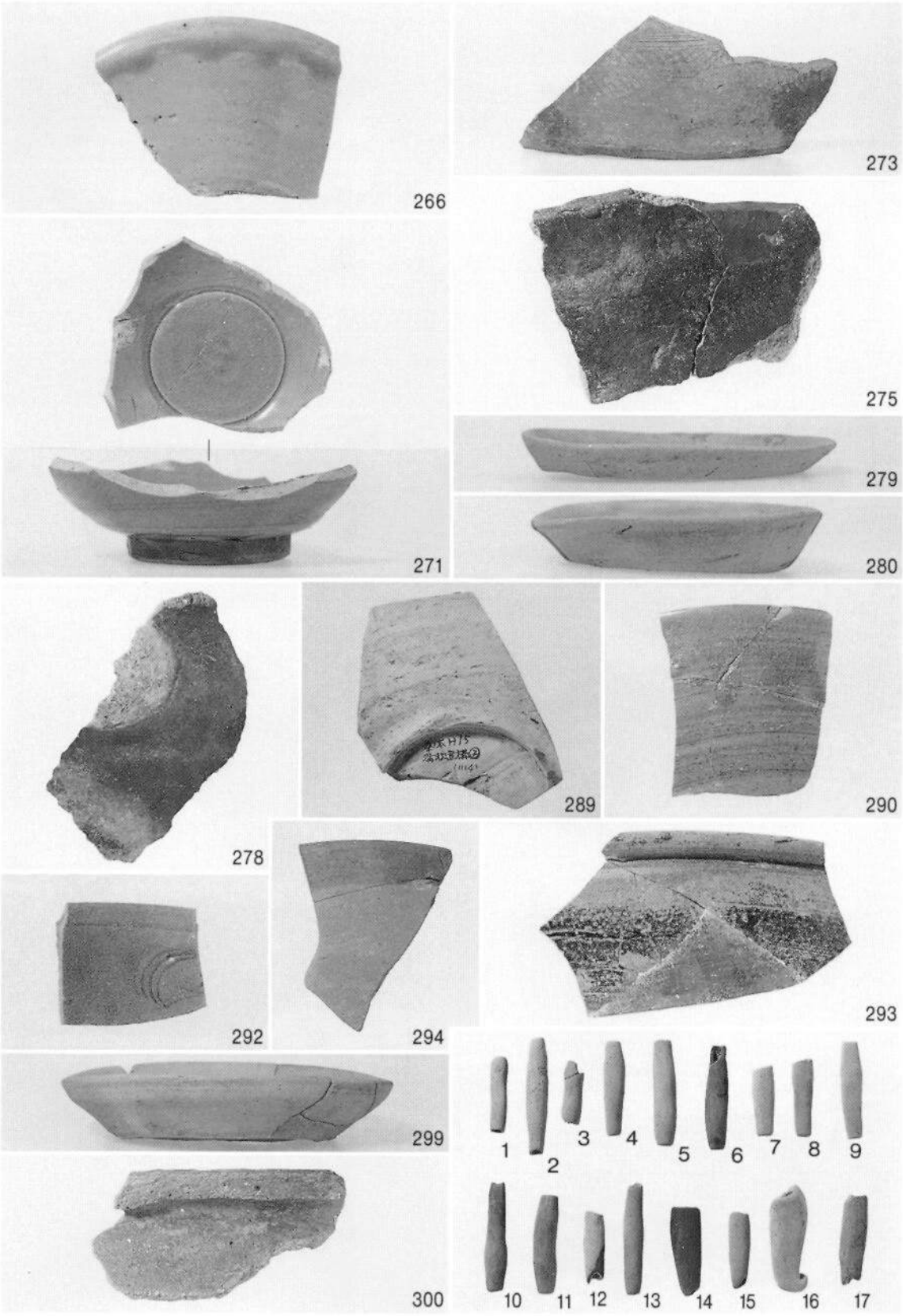

260


263

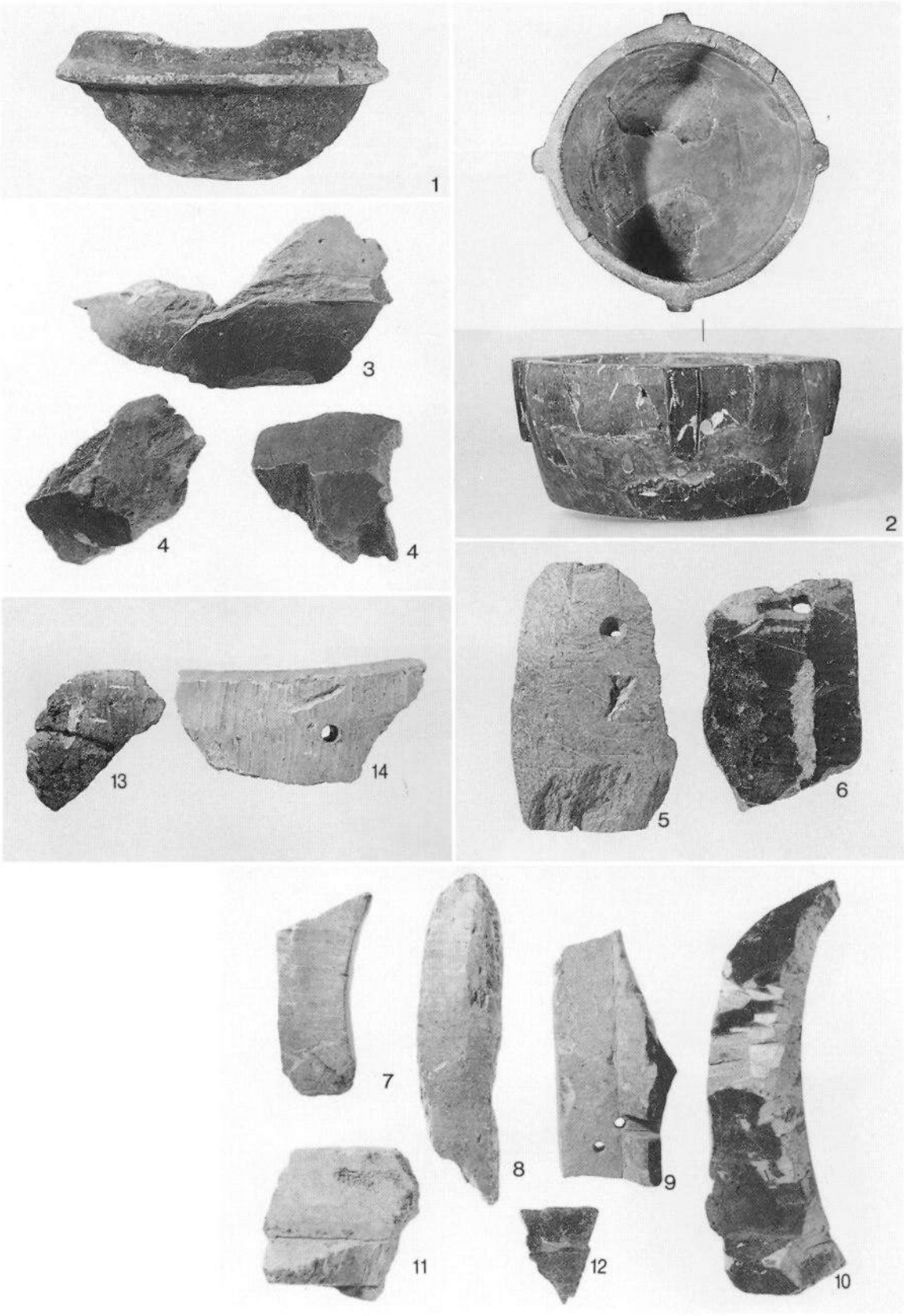

264



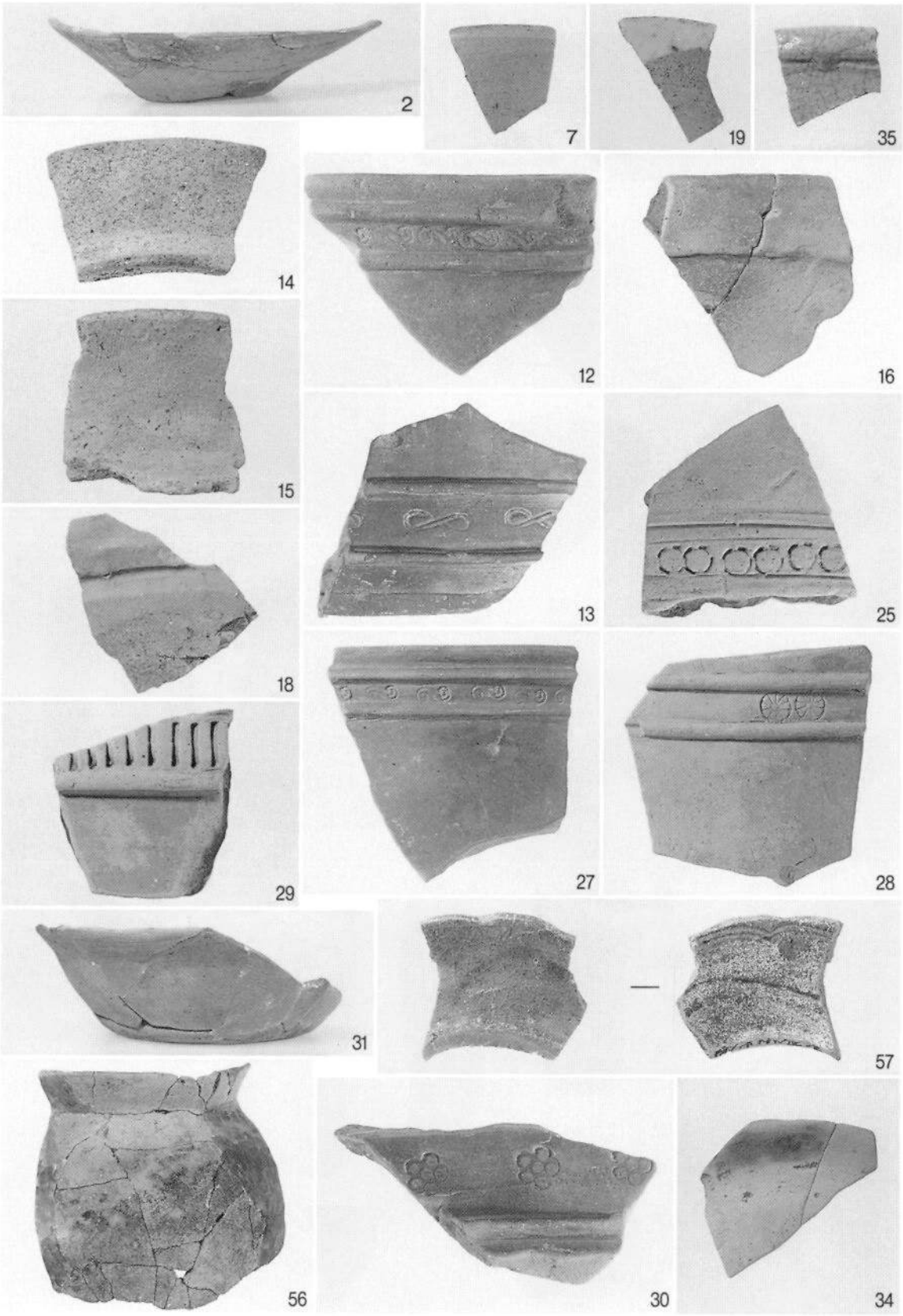
通路状遺構出土土器 9



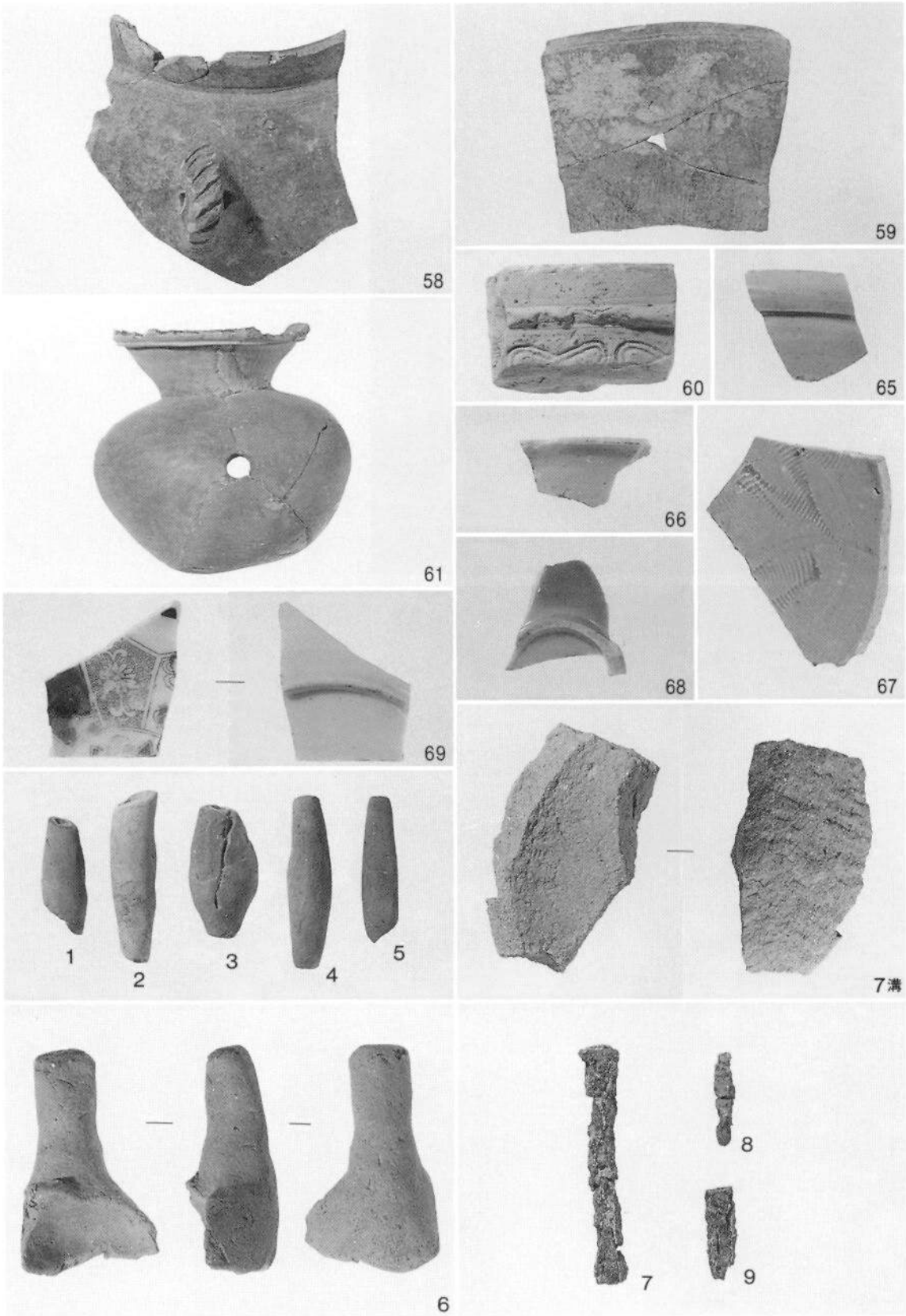
通路状遺構出土土器10・土製品



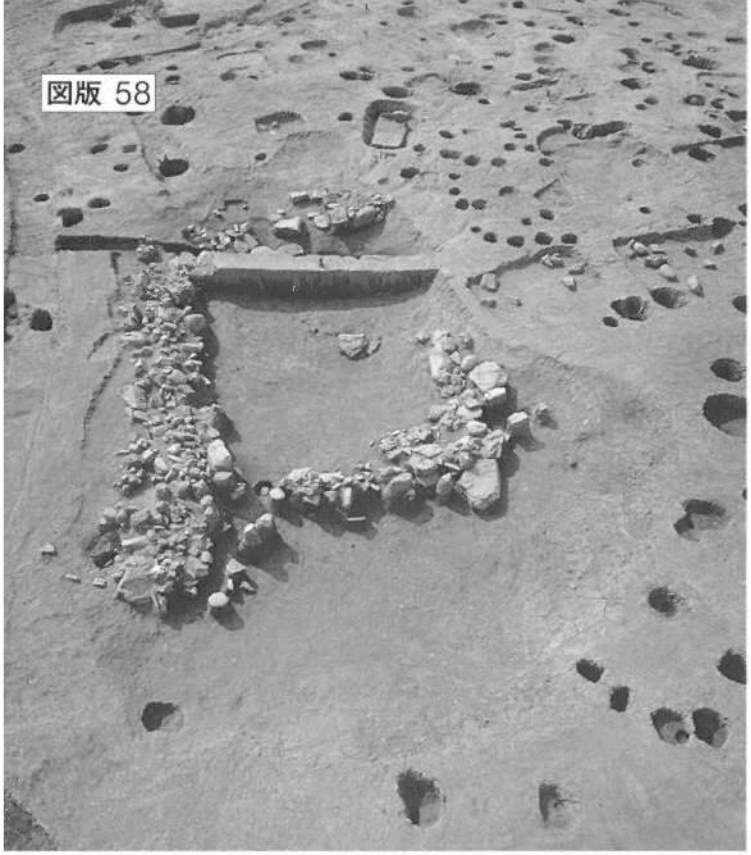
通路状遺構出土石製品



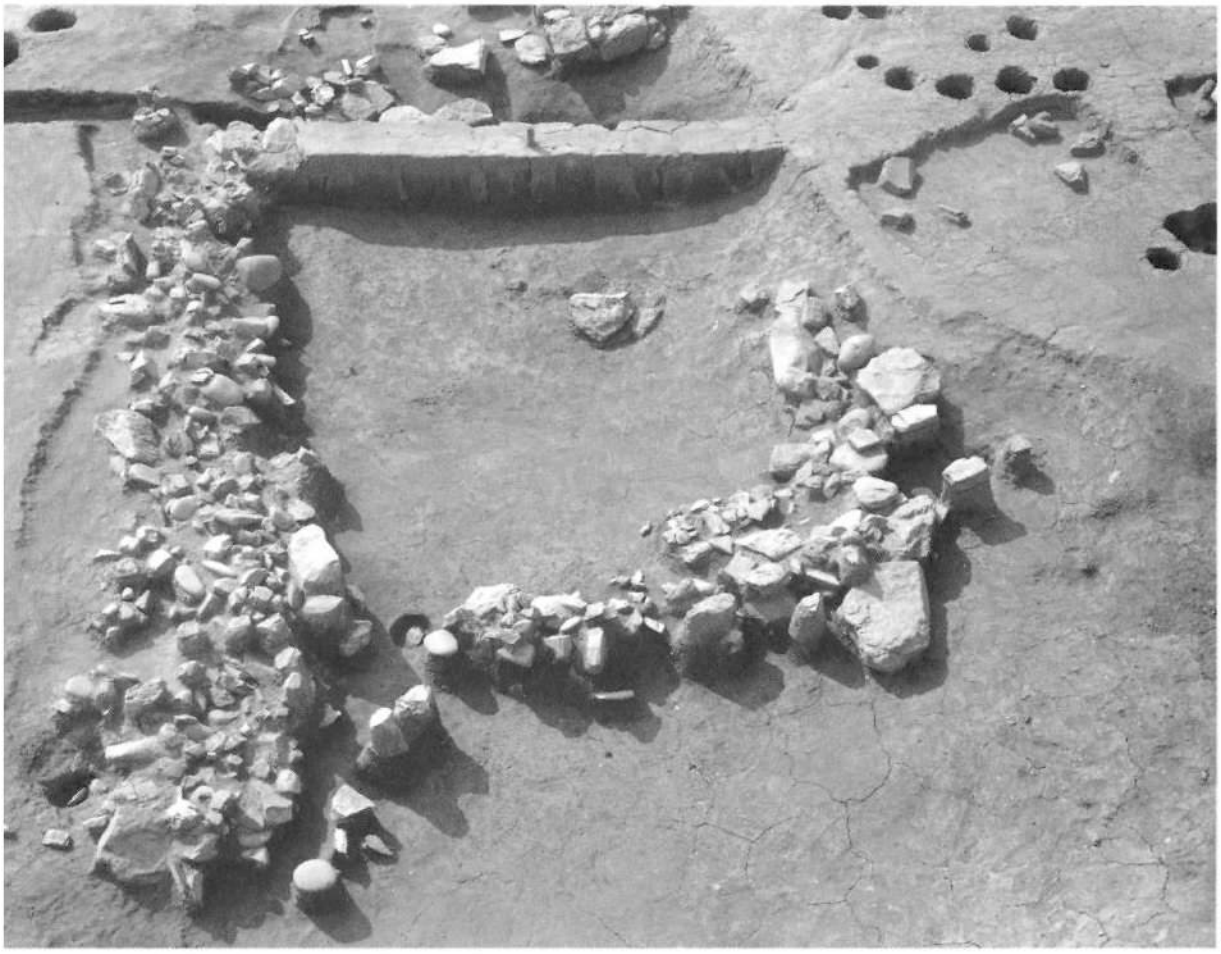
溝出土土器 1



溝出土土器 2・石製品・土製品・金属製品

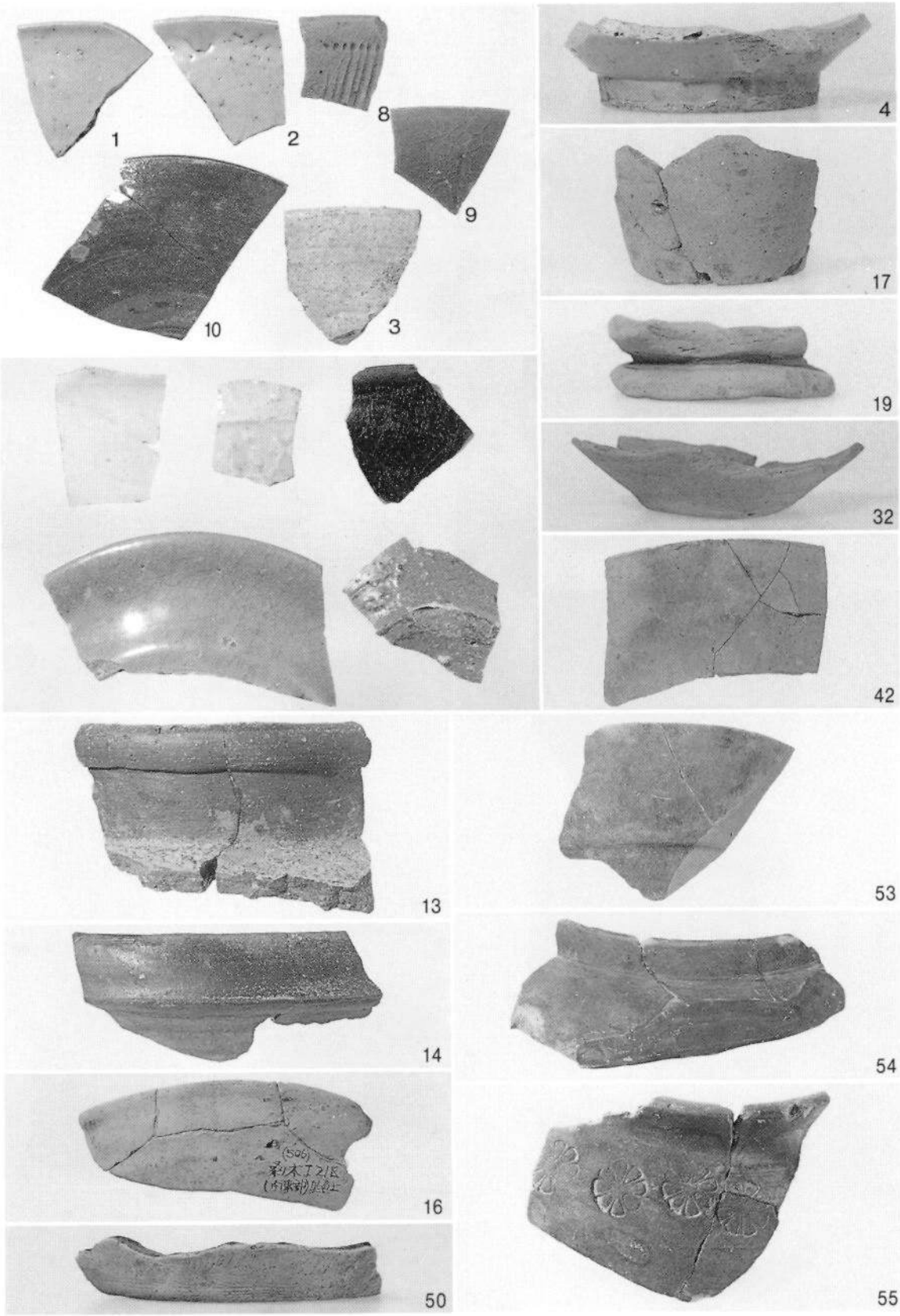


1

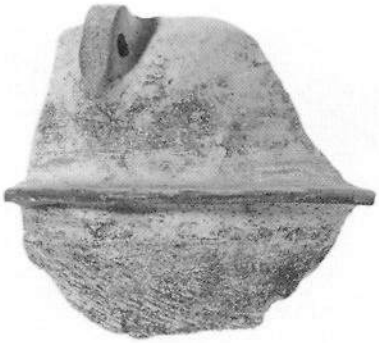


2

1　1号落ち込み遺構　　2　1号落ち込み遺構近景



落ち込み出土土器 1


58

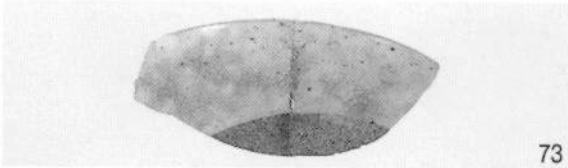
67

68

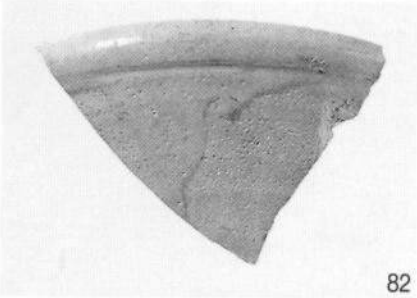
69

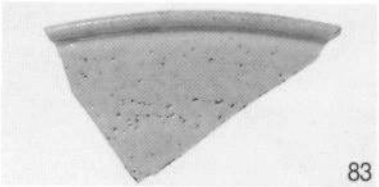
70

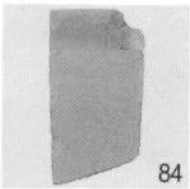
80

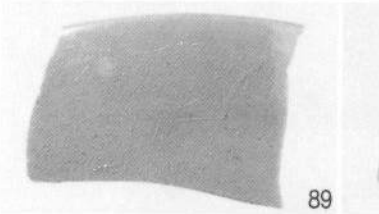

73

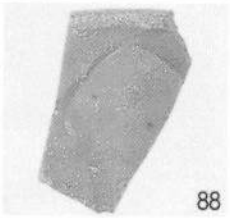
74


82

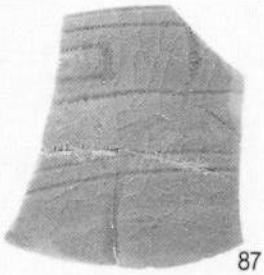

83


84


89

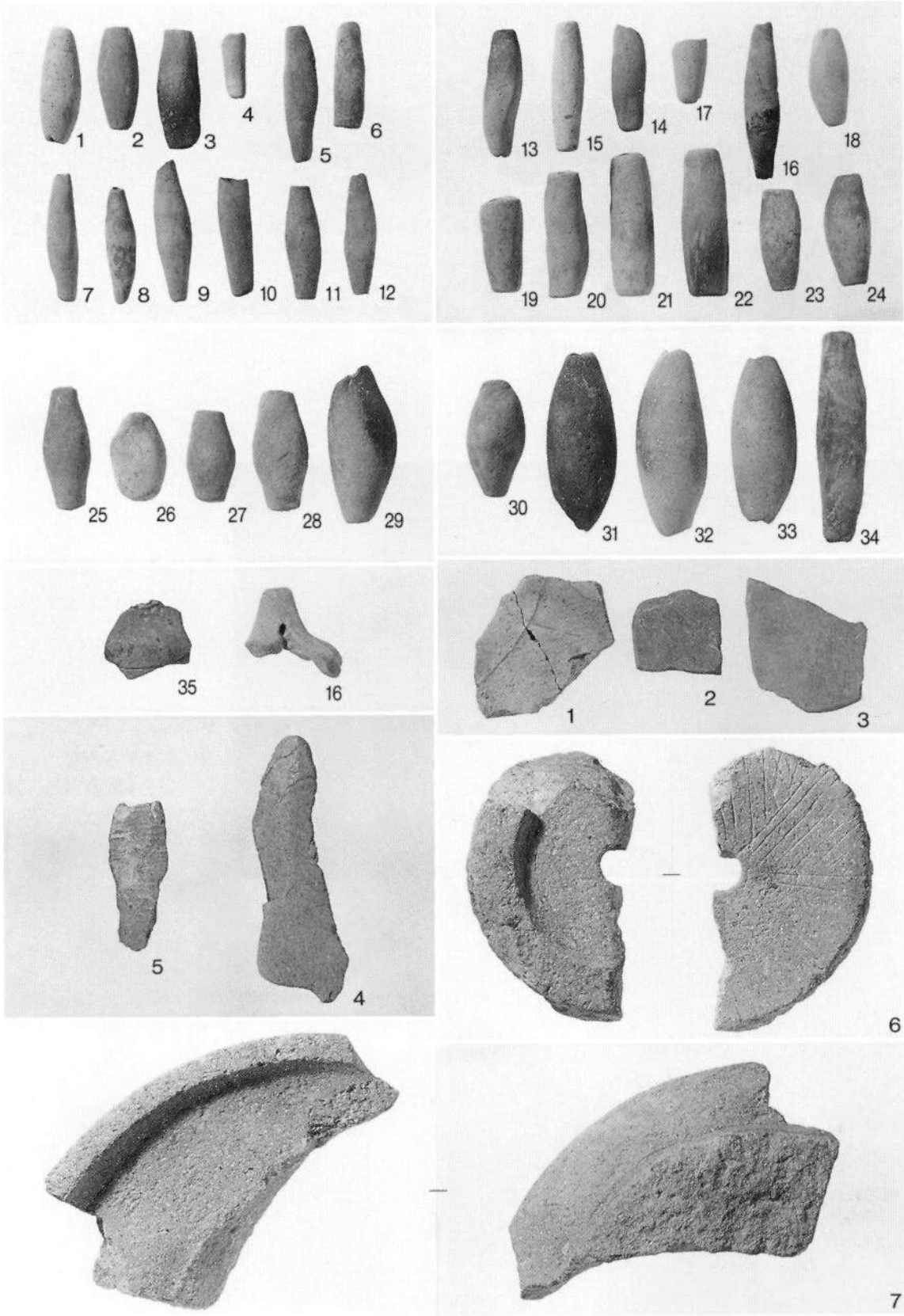

88

86

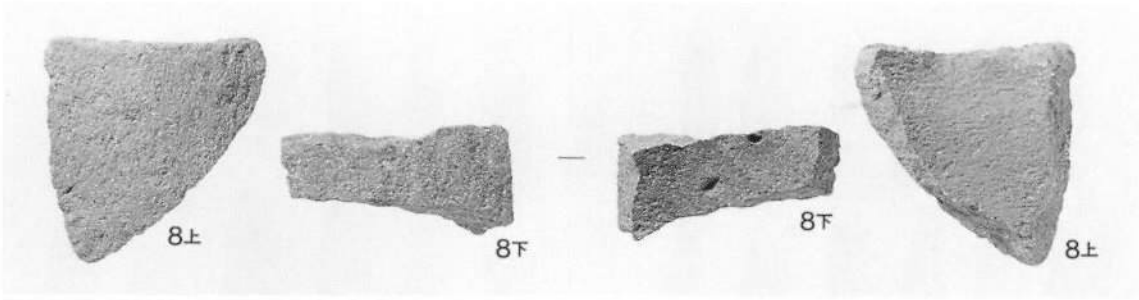

87

90

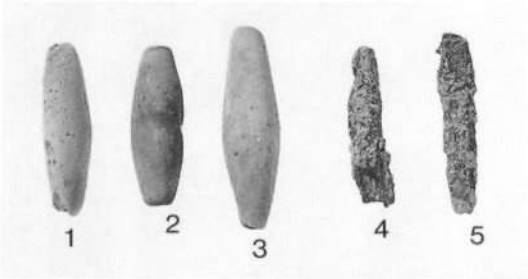
落ち込み出土土器 2



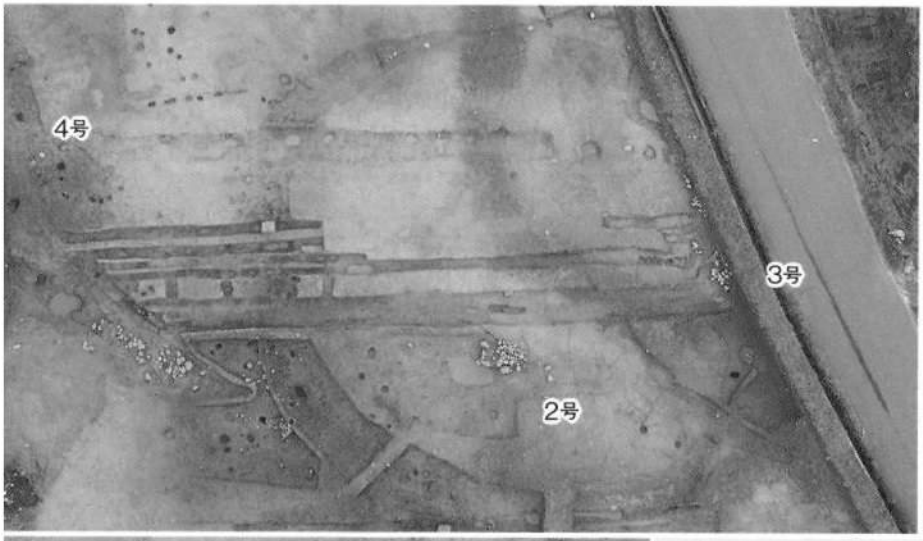
1号落ち込み出土土製品・石製品



1

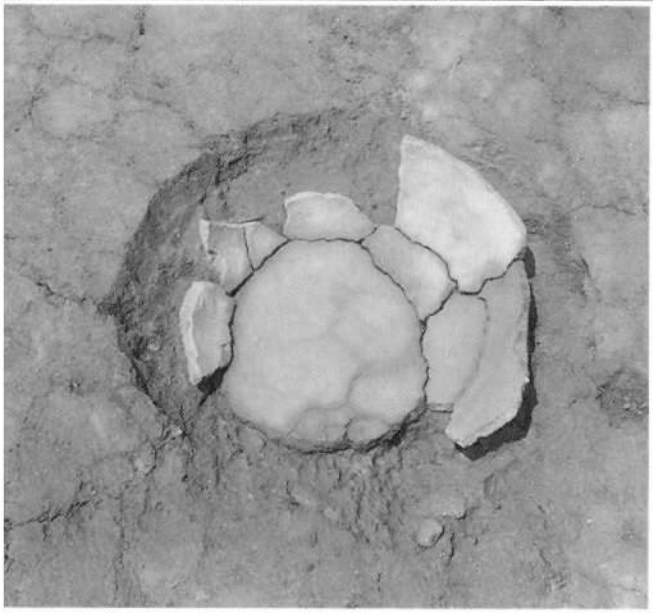


1　落ち込み遺構出土石製品・土製品・金属製品



2

2　上空からみた
2～4号落ち込み遺構



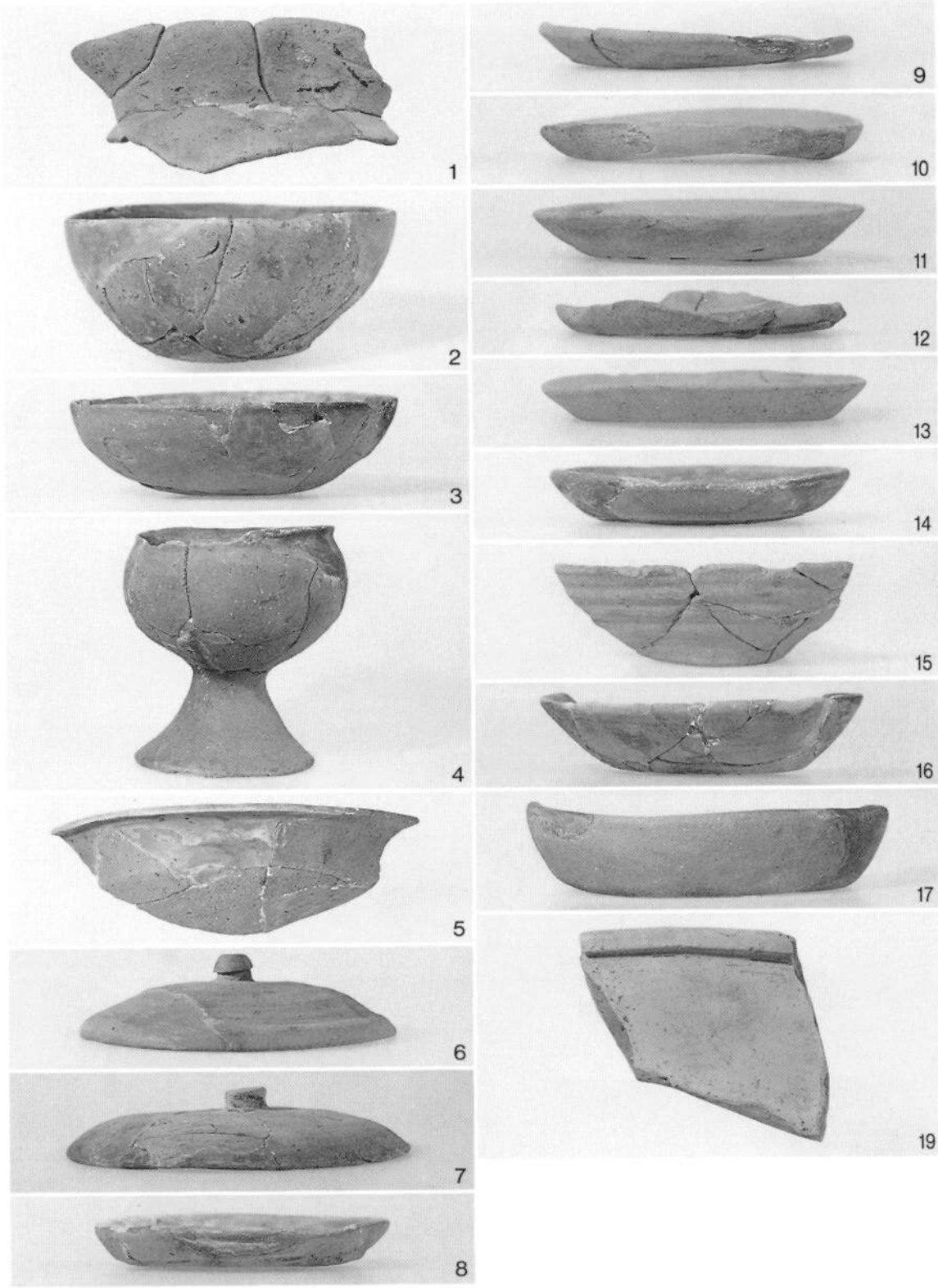
3

3　1号埋甕遺構

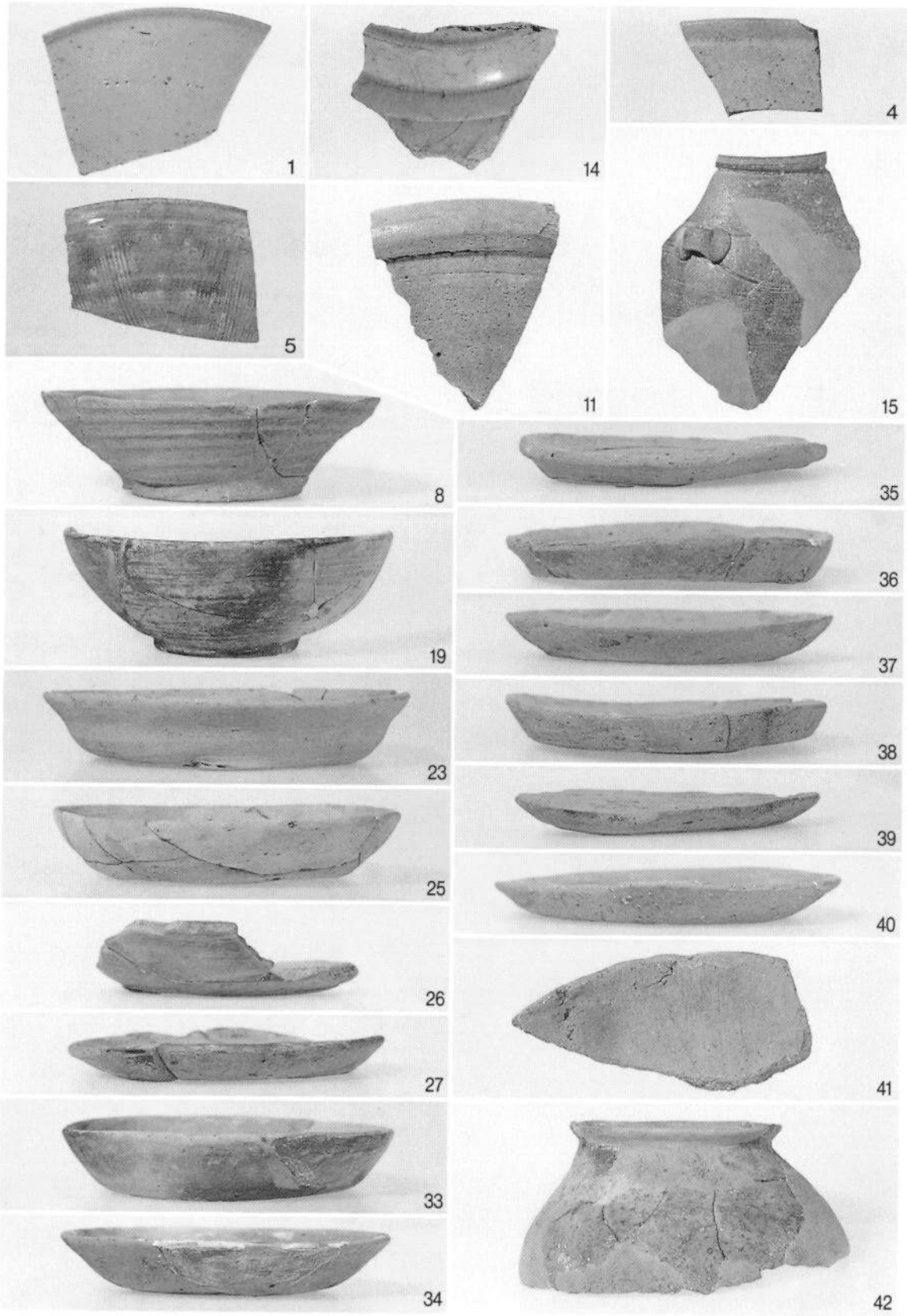
1

2 4

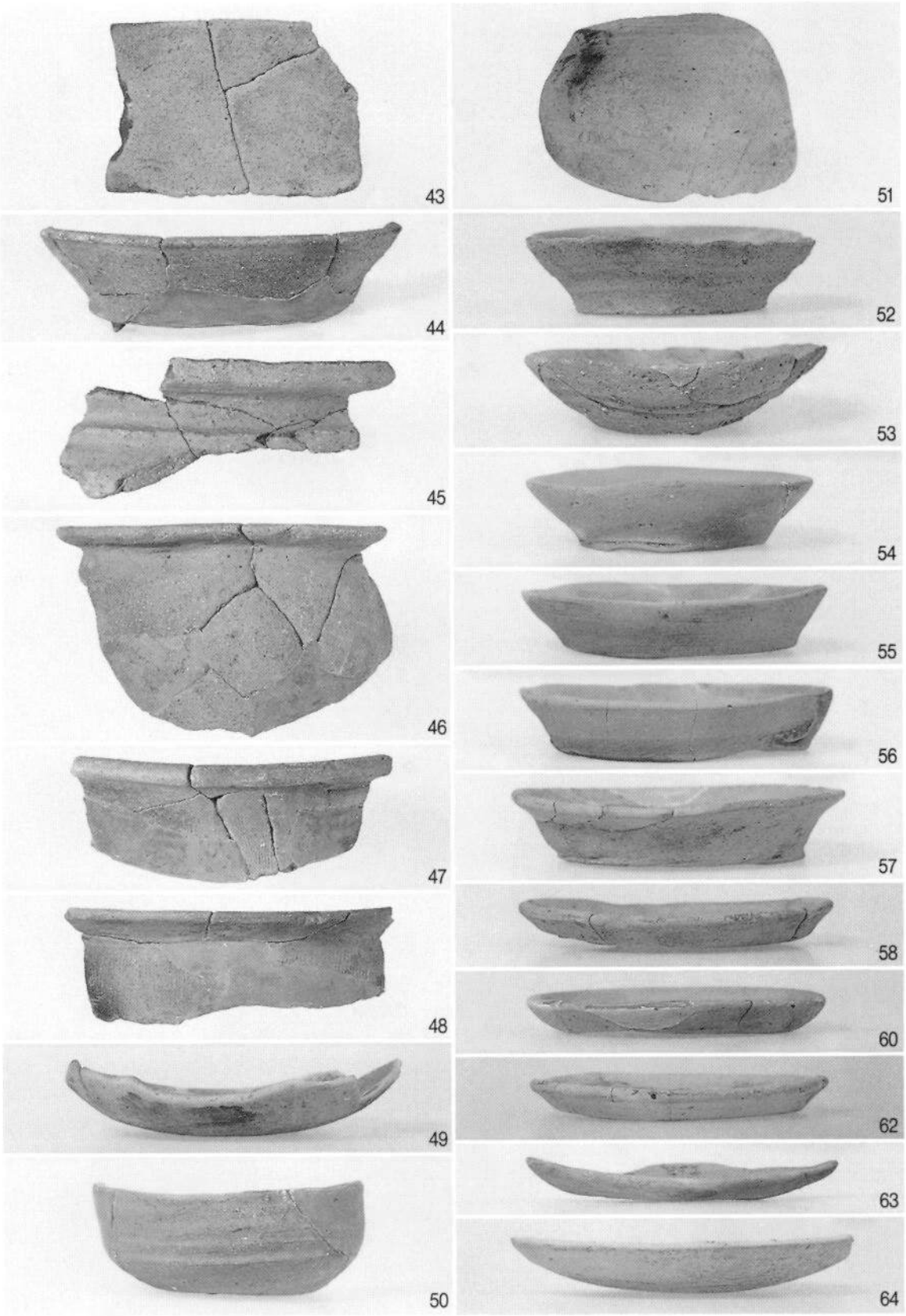
4　埋甕使用土器



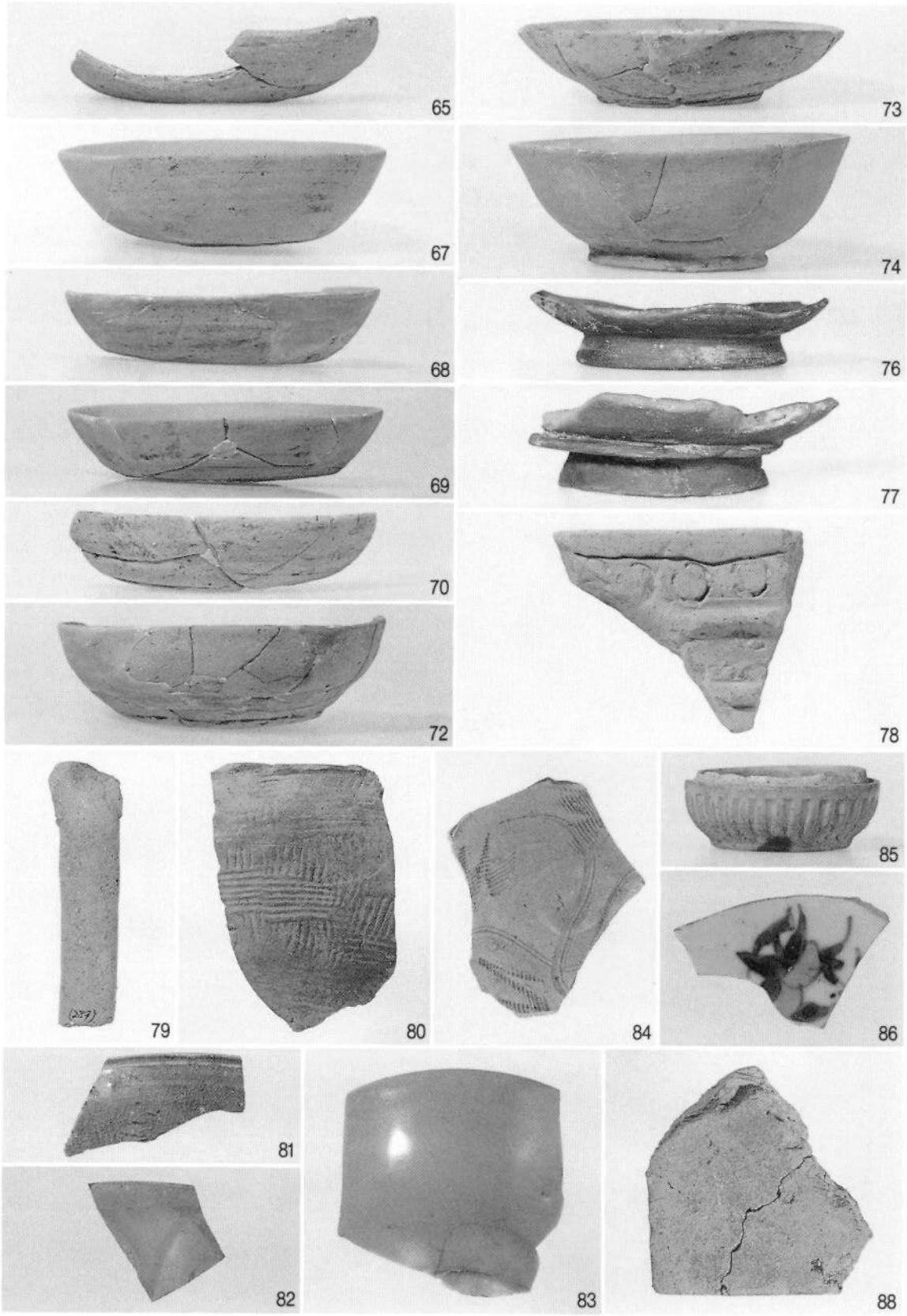
ピット出土土器



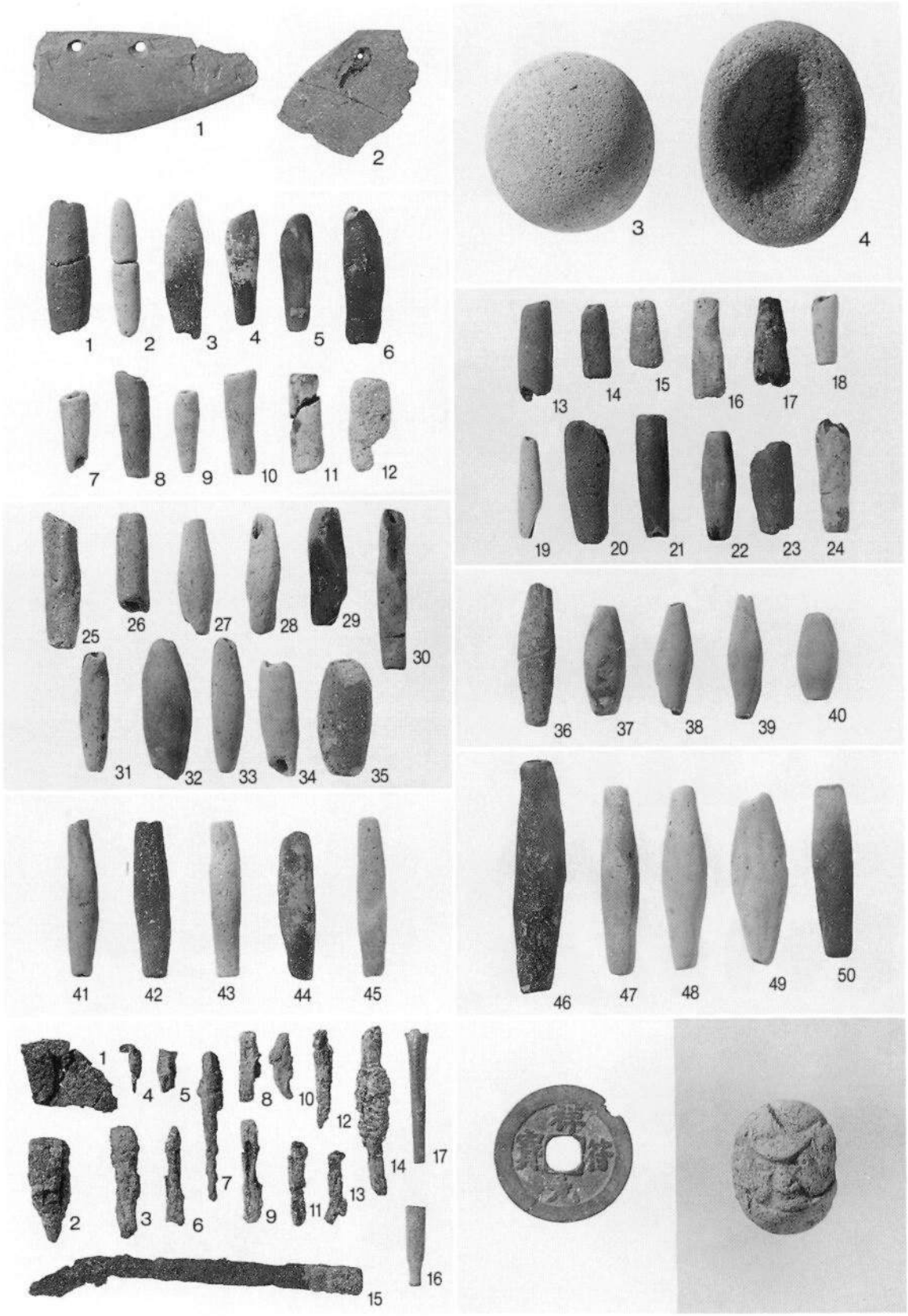
包含層等出土土器 1



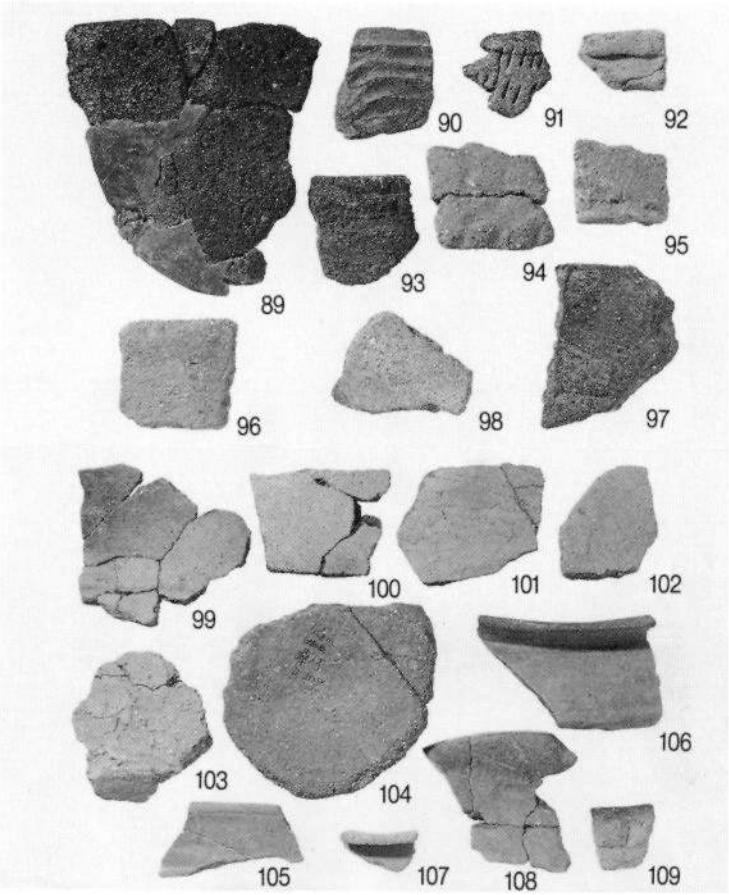
包含層等出土土器 2

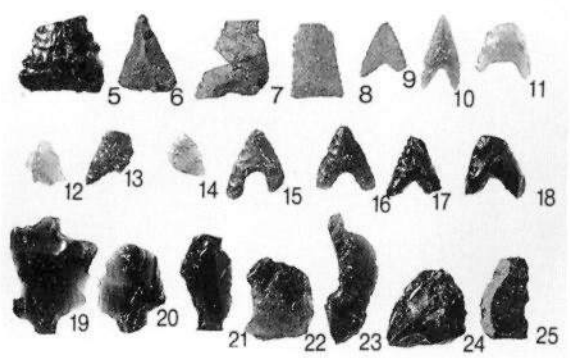


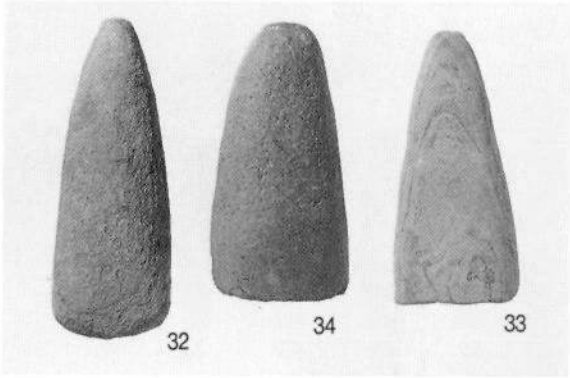
包含層等出土土器 3

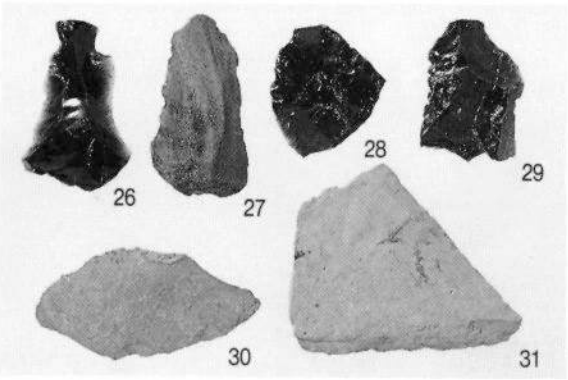


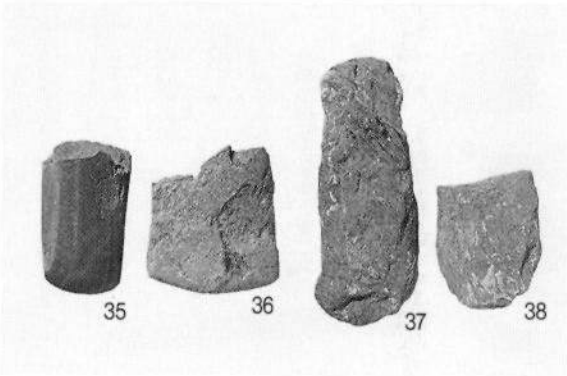
包含層等出土石器・土製品・金属製品











包含層等出土縄文土器・石器

報告書抄録

ふりがな	しわ　くわのもといせき
書名	志波桑ノ本遺跡
副書名	朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査
巻次	上巻
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	―45―
編著者名	小池史哲
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-77 福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m³	調査原因
志波桑ノ本 (しわくわのもと)	福岡県朝倉郡 (ふくおかけんあさくらぐん) 杷木町大字志 (はきまちおおあざし) 波字桑ノ本 (わあざくわのもと) 582～584 597～604	404411	580153	33°21′38″	130°46′54″	19860623 ～ 19861202	7700	九州横断自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
志波桑ノ本		弥生	竪穴住居跡	1	弥生土器、石器	
		古墳	竪穴住居跡	5	土師器	
			古墳	9	須恵器、土師器	
		古墳～中世			石製品、鉄製品、玉類	
		古代	土坑	10	土師器	
		中世	掘立柱建物跡	3	須恵器	大型建物
			井戸状遺構	2	土師器 白磁、青磁、青白磁 瓦質土器、土師質土器、瓦、石鍋、土製品、金属製品	
			竪穴	4		
			土壙墓	28		
			通路状遺構	3		
			溝状遺構	21		
			落ち込み遺構	4		
		縄文～中世	埋甕	1		
			遺物包含層		縄文土器、石器	
			柱穴状ピット	多数		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H8	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—45—

上　巻　　志波桑ノ本遺跡

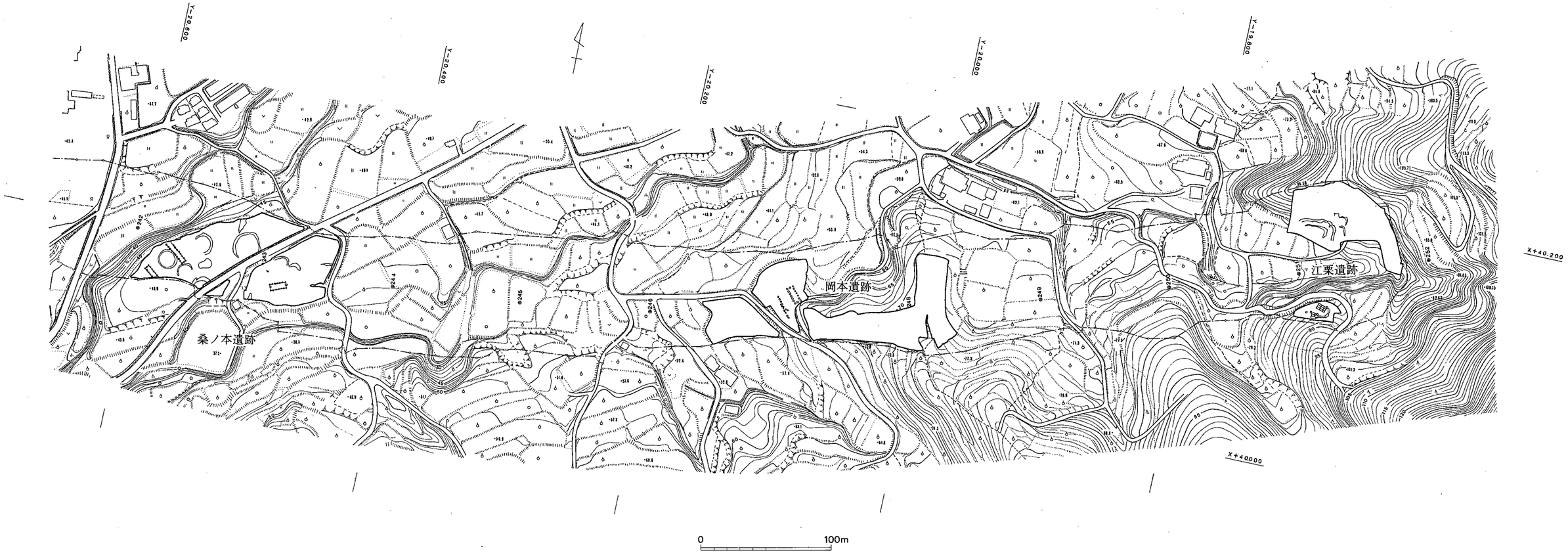
平成 9 年 3 月 31 日

発　行　　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　　株式会社西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚8丁目2番15号



付図1　40～42地点の位置と周辺地形図（1/3000）

付図2　志波桑ノ本遺跡遺配置図（1/300）